愛知教育大学
年次報告書

ANNUAL REPORT AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION

2005

はじめに

国立大学において，法人化後２年が経過し，少しは落ち着くものと考えていたが，それとは逆に，解決しなければならない課題が益々増えている。とくに財政的な大きな課題は次の三つがある。

１）総人件費５％削減

平成18年度から平成22年度の５年間に総人件費の５％を削減しなければならないこと。本学では，総人件費の１％は約５千万円であり，したがって，５年間で２億５千万円を削減しなければならない。

２）刈谷市の地域手当12％増

刈谷市では，平成17年の人事院勧告に則れば，平成18年度から２％，２％，２％，３％，そして，３％の割合で12％増を実施するのが，国家公務員に準じた場合である。

本学では，最初の２％は実施すべく手続きを進めている。そして，次の２％については，実施する方向で検討を進めている。しかし，平成20年以降については見通しは全く立っていない。

３）科研費等の外部資金の獲得

まず，科学研究費補助金（単に「科研費」という。）への申請率を50％に上げ，採択を増やすことが先決である。教員養成系大学においては，企業等との産学連携等による外部資金の導入はなかなか難しいことから，可能性の最も高い，そして教育研究分野もあらゆる分野をカバーしている科研費の獲得を目指す必要がある。

一方，本学における教育の改善・改革についての課題は次の四つである。

１）教員養成諸課程の量的充実

まず，教員養成の量的な充実について，2003年度からの愛知県・名古屋市の教員需要増大に適切に対応するため，2006・2007年度に跨って，学芸諸課程から学生定員163名を教員養成諸課程に振り替えることとしている。したがって，教員養成諸課程の学生定員は643名となる。学芸諸課程は232名となり，「現代学芸課程」として整備しているところである。教員養成諸課程と学芸諸課程の学生定員の比率が旧来の480：395＝55：45から643：232＝73：27となり，大きく教員養成にシフトすることとなる。

２）教員養成諸課程の質的充実

教員養成の質的充実に関しては，今までにも逐次検討してきたところであるが，現在教員の実践力・応用力の育成については中教審でも検討が進められており，本学でも改めてこれらの課題を検討すべく，委員会を立ち上げたところである。

３）教職大学院の創設

教職大学院については，昨年６月から鋭意検討を進め，今年３月教授会において，本学のめざす教職大学院構想を提案し，承認を得，教職大学院の設置準備委員会を立ち上げる運びとなっており，中教審の最終答申が出れば，いつでも対応できる状況になっている。

４）本学にある学芸４課程の改革

平成17年度までは学生定員395名で構成されていた学芸４課程から学生定員163名を教員養成諸課程に振り替え，残った232名を原資としてリベラルアーツ型の「現代学芸課程」に再編する。

学長　田原　賢一

目　　次

はじめに

愛知教育大学の現状

第１章　教育活動 …… 1
第１節　学部 …… 1
1　入学者選抜 …… 1
（学生選抜の方法，志願者数，合格者数，入学者数，社会人の受入）
2　在学者・休学者・退学者・留年者数，卒業者数 …… 2
3　教務関係 …… 4
（カリキュラム，成績評価，単位認定，免許状取得，他大学との単位互換など）
4　教育実地研究 …… 6
5　介護等体験 …… 9
6　インターンシップ …… 10
7　学生生活関係 …… 11
（奨学金・授業料免除，福利施設関係，入学者へのアパート紹介，
アルバイト紹介事業の一部外部委託，学生生活実態調査の実施など）
8　学生の健康管理，学生相談 …… 19
9　卒業生の進路，就職問題への取り組み …… 22
第２節　大学院 …… 25
1　入学者選抜 …… 25
2　在学者数 …… 26
3　修了者数及びその進路 …… 26
4　学位論文 …… 27
（審査方法と評価，修士学位論文一覧）
5　教務関係 …… 35
（カリキュラム，成績評価，単位認定，免許状取得，他大学との単位互換など）
第３節　ファカルティ・ディベロップメント活動 …… 37
1　新採用職員研修会 …… 37
2　語学教育シンポジウム …… 39
3　授業改善と学習支援の報告会 …… 39

第２章　研究活動 …… 41
第１節　講座の概要 …… 41
第２節　研究成果の公表と活用 …… 54
（本学における学会の開催，講座間の共同研究，学内講演会及びシンポジウム，
研究雑誌の発行など）
第３節　教員の国際学術交流 …… 65
1　研究者の派遣 …… 65
2　外国人の採用 …… 65
3　外国人研究者の受入 …… 66

第 3 章　学生の国際交流 …… 67
第 1 節　留学生の受入 …… 67
1　留学生の受入状況 …… 67
2　授業以外の指導（チューター制度等） …… 67
3　卒業・修了後，帰国後の状況 …… 68
4　教員研修留学生の学習・研究の実状 …… 68
第 2 節　在学生の海外留学・研修 …… 69
1　海外留学・研修の方針と現状 …… 69
2　大学間交流 …… 69

第 4 章　社会との連携 …… 71
第 1 節　公開講座等 …… 71
1　公開講座 …… 71
2　科目等履修生，研究生 …… 73
3　フレンドシップ事業 …… 75
4　大学祭，子どもまつり等 …… 79
第 2 節　相談事業 …… 81
1　障害児治療教育センター …… 81
2　教育実践総合センター …… 82
第 3 節　施設開放 …… 85
1　附属図書館 …… 85
2　体育施設など …… 86

第 5 章　管理運営の概要 …… 87
第 1 節　組織運営機構 …… 87
第 2 節　教育及び研究組織 …… 88
1　教育組織 …… 88
2　研究組織 …… 91
第 3 節　教員の構成 …… 92
1　学部・大学院・センター・非常勤講師 …… 92
2　リサーチアシスタント・ティーチングアシスタント …… 93
3　教員の構成 …… 94
4　採用・昇進の手続き・基準・公平性 …… 95
5　教員の兼職の状況 …… 98

第 6 章　附属施設の概要 …… 99
第 1 節　附属学校 …… 99
（入学者選抜（選抜の方法，志願者数，合格者数・入学者数，帰国子女などの受入数）／在籍数／留年生・休学者・退学者数／卒業生の進路／教務関係（カリキュラム，成績評価）／学務関係（奨学金，授業料免除，課外活動など）／健康管理／その他）
1　附属名古屋小学校 …… 99
2　附属岡崎小学校 …… 103
3　附属名古屋中学校 …… 106

4　附属岡崎中学校…… 110
5　附属高等学校…… 113
6　附属養護学校…… 117
7　附属幼稚園…… 120
第 2 節　附属図書館…… 122
第 3 節　センター…… 126
1　教育創造センター…… 126
2　教育実践総合センター…… 126
3　障害児治療教育センター…… 134
4　保健管理センター…… 136
5　情報処理センター…… 138
6　理系機器共同利用センター…… 140

第 7 章　施設整備 …… 145

第 8 章　教員の教育研究活動…… 147

法人化後の取り組み …… 355

あとがき …… 358

評価委員会委員名簿 …… 359

愛知教育大学憲章 …… 361

愛知教育大学の現状

第１章　教育活動

第１章　教育活動

第１節　学部

１　入学者選抜

平成18年度大学入学者選抜について，推薦入学試験は12月３日，４日に実施し，出願状況は202名（前年度216名）であった。個別学力検査（第２次試験）は，前期日程試験を２月25日，26日に，後期日程試験を３月12日にそれぞれ実施した。出願状況は，前期日程1,975名（前年度1,573名），後期日程1,638名（前年度1,988名）であった。

平成18年度　各試験別入学状況一覧（帰国・外国人除く）

課程	系・専攻・コース	定員	志願者				欠席者				受験者				合格者				辞退者				追加合格者				入学者			
			男	女	計	倍率	男	女	計	欠席率	男	女	計	倍率	男	女	計	倍率	男	女	計	辞退率	男	女	計		男	女	計	
初等教育	幼児教育系	18	7	46	53	2.9					7	46	53	2.9	2	18	20										2	18	20	
	教育科学系	22	17	50	67	3		1	1	0	17	49	66	3	6	18	24		1	1	0.0417					6	17	23	
	人文社会系(国語)	53	60	117	177	3.3	19	39	58	0.3	41	78	119	2.2	17	40	57		1	1	2	0.0351					16	39	55	
	人文社会系(社会)	60	163	80	243	4.1	47	32	79	0.3	116	48	164	2.7	49	19	68		5		5	0.0735					44	19	63	
教育	自然系(算数)	51	124	67	191	3.7	22	12	34	0.2	102	55	157	3.1	39	17	56		1		1	0.0179					38	17	55	
	自然系(理科)	57	109	89	198	3.5	36	25	61	0.3	73	64	137	2.4	33	29	62		4	1	5	0.0806					29	28	57	
	芸術系(音楽)	25	4	45	49	2					4	45	49	2	1	24	25										1	24	25	
	芸術系(図工)	25	18	81	99	4	4	29	33	0.3	14	52	66	2.6	6	22	28										6	22	28	
	生活・スポーツ系(体育)	36	67	50	117	3.3					67	50	117	3.3	18	21	39			1	1	0.0256					18	20	38	
	生活・スポーツ系(家庭)	29	7	173	180	6.2	3	47	50	0.3	4	126	130	4.5	2	30	32										2	30	32	
中等教育	教育科学専攻	6	24	28	52	8.7	1		1	0	23	28	51	8.5	3	5	8										3	5	8	
	国語・書道専攻	19	26	27	53	2.8	1		1	0	25	27	52	2.7	10	13	23										10	13	23	
	社会専攻	16	35	5	40	2.5					35	5	40	2.5	18	3	21		1		1	0.0476					17	3	20	
	数学専攻	30	71	20	91	3	28	8	36	0.4	43	12	55	1.8	23	10	33										23	10	33	
	理科専攻	32	79	25	104	3.3	26	8	34	0.3	53	17	70	2.2	31	6	37		1		1	0.027					30	6	36	
	音楽専攻	6	2	14	16	2.7					2	14	16	2.7	1	6	7										1	6	7	
	美術専攻	6	3	12	15	2.5					3	12	15	2.5		7	7											7	7	
	保健体育専攻	16	25	8	33	2.1	2	1	3	0.1	23	7	30	1.9	15	3	18		1		1	0.0556					14	3	17	
	技術専攻	10	54	9	63	6.3	8	3	11	0.2	46	6	52	5.2	12	3	15		3		3	.02					9	3	12	
	家庭専攻	10	1	13	14	1.4		1	1	0.1	1	12	13	1.3	1	11	12			2	2	0.1667					1	9	10	
	英語専攻	21	25	21	46	2.2	2		2	0	23	21	44	2.1	15	12	27		2		2	0.0741					13	12	25	
障害児教育		25	13	82	95	3.8	4	20	24	0.3	9	62	71	2.8	5	23	28										5	23	28	
養護教諭		40	5	166	171	4.3	3	58	61	0.4	2	108	110	2.8	2	45	47			2	2	0.0426					2	43	45	
教員養成課程 計		613	939	1228	2167	3.5	206	284	490	0.2	733	944	1677	2.7	309	385	694		19	8	27	0.0389					290	377	667	
国際理解教育	国際文化コース	72	148	413	561	7.8	33	105	138	0.2	115	308	423	5.9	19	70	89		3	6	9	0.1011					16	64	80	
	日本語教育コース	20	17	96	113	5.7	6	38	44	0.4	11	58	69	3.5	4	22	26			1	1	0.0385					4	21	25	
生涯教育	共生社会コース	15	28	84	112	7.5	8	27	35	0.3	20	57	77	5.1	2	19	21		2	2	2	0.0952					2	17	19	
	スポーツ健康コース	10	10	13	23	2.3		1	1	0	10	12	22	2.2	8	4	12		1		1	0.0833					7	4	11	
	造形文化コース	35	16	123	139	4	2	24	26	0.2	14	99	113	3.2	4	36	40		1	5	6	0.15	1	1	2		3	32	35	
情報教育	A　選択	45名程度	173	102	275	6.1	23	19	42	0.2	150	83	233	5.2	25	21	46			2	2	0.0435					25	19	44	
	B　選択	15名程度	111	42	153	10	36	13	49	0.3	75	29	104	6.9	16	4	20										16	4	20	
環境教育課程		50	145	127	272	5.4	39	32	71	0.3	106	95	201	4	36	23	59		3	7	10	0.1695	1	1	2		34	17	51	
学芸課程 4		202	648	1000	1648	8.2	147	259	406	0.2	501	741	1242	6.1	114	199	313		8	23	31	0.099	1	2	3		107	178	285	
初等教育教員養成課程		376	576	798	1374	3.7	131	185	316	0.2	445	613	1058	2.8	173	238	411		11	4	15	0.0365					162	234	396	
中等教育教員養成課程		172	345	182	527	3.1	68	21	89	0.2	277	161	438	2.5	129	79	208		8	2	10	0.0481					121	77	198	
障害児教育教員養成課程		25	13	82	95	3.8	4	20	24	0.3	9	62	71	2.8	5	23	28										5	23	28	
養護教諭養成課程		40	5	166	171	4.3	3	58	61	0.4	2	108	110	2.8	2	45	47			2	2	0.0426					2	43	45	
国際理解教育課程		92	165	509	674	7.3	39	143	182	0.3	126	366	492	5.3	23	92	115		3	7	10	0.087					20	85	105	
生涯教育課程		60	54	220	274	4.6	10	52	62	0.2	44	168	212	3.5	14	59	73		2	7	9	0.1233		1	1		12	53	65	
情報教育課程		60	284	144	428	16	59	32	91	0.5	225	112	337	12	41	25	66			2	2	0.0435					41	23	64	
環境教育課程		50	145	127	272	5.4	39	32	71	0.3	106	95	201	4	36	23	59		3	7	10	0.1695	1	1	2		34	17	51	
合計		875	1587	2228	3815	4.4	353	543	896	0.2	1234	1685	2919	3.3	423	584	1007		27	31	58	0.0576	1	2	3		397	555	952	

2　在学者・休学者・退学者・留年者数，卒業者数

在学者数（平成17年５月１日現在），休学者数（平成17年４月１日～平成18年３月31日）

課程＼学年		1　年	2　年	3　年	4　年	計	理　由
教員養成課程	在学者数				〔４〕		
	休学者数				１	１	
	比　率				25.0%		経済事情　9
総合科学課程	在学者数				〔３〕		家庭の事情　3
	休学者数				１	１	一身上の都合　36
	比　率				33.3%		私費留学　29
教員養成４課程	在学者数	〔528〕	〔515〕	〔504〕	〔537〕		傷病　10
	休学者数	４	３	15	21	43	
	比　率	0.8%	0.6%	3.0%	3.9%		計　87
学芸４課程	在学者数	〔427〕	〔406〕	〔409〕	〔474〕		
	休学者数	２	２	12	26	42	
	比　率	0.5%	0.5%	2.9%	5.5%		
計	在学者数	〔955〕	〔921〕	〔913〕	〔１,018〕	〔３,807〕	
	休学者数	６	５	27	49	87	
	比　率	0.6%	0.5%	3.0%	4.8%	2.3%	
前年度の状況	比　率	0.3%	1.0%	1.9%	4.8%	2.1%	

退学者数：（　）内は除籍者数で外数　　（平成17年４月１日～平成18年３月31日）

課程＼学年		1　年	2　年	3　年	4　年	計	理　由
教員養成課程	在学者数				〔４〕		
	休学者数				１	１	
	比　率				25.0%		方針変更　31
総合科学課程	在学者数				〔３〕		経済事情　1
	休学者数				0(1)	0(1)	一身上の都合　2
	比　率				0％		在学期間満了　3
教員養成４課程	在学者数	〔528〕	〔515〕	〔504〕	〔537〕		授業料未納　(5)
	休学者数	３	１	５	8(3)	17(3)	在学期間満了（2）
	比　率	0.6%	0.2%	1.0%	1.5%		
学芸４課程	在学者数	〔427〕	〔406〕	〔409〕	〔474〕		計　37(7)
	休学者数	１	４	３	11(3)	19(3)	
	比　率	0.2%	1.0%	0.7%	2.3%		
計	在学者数	〔955〕	〔921〕	〔913〕	〔１,018〕	〔３,807〕	
	休学者数	４	５	８	20(7)	37(7)	
	比　率	0.4%	0.5%	0.9%	2.0%	1.0%	
前年度の状況	比　率	0.3%	0.5%	0.4%	1.6%	0.7%	

留年者数　　平成17年４月１日現在

年数／課程	留年年数内訳		計	前年度
	１年	２年以上		
教員養成課程		4	4	14
総合科学課程		3	3	16
教員養成４課程	37	8	45	31
学芸４課程	60	15	75	51
計	97	30	127	112

平成18年３月卒業者数

課程	在籍者数(a)	卒業延期者						卒業者数		
		在学期間不足		単位不足		計（b）		(a)－(b)		前年度
中学校課程	1	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%	33.3%
教員養成課程　合計	1	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%	44.4%
総合理学	2	0	0.0%	1	50.0%	1	50.0%	1	50.0%	0.0%
総合造形	1	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%	66.7%
総合科学課程　合計	3	0	0.0%	1	33.3%	1	33.3%	2	66.7%	46.2%
初等教育課程	333	10	3.0%	23	6.9%	33	9.9%	300	90.1%	92.7%
中等教育課程	131	8	6.1%	14	10.7%	22	16.8%	109	83.2%	85.5%
障害児教育課程	24	1	4.2%	1	4.2%	2	8.3%	22	91.7%	100.0%
養護教諭課程	42	1	2.4%	0	0.0%	1	2.4%	41	97.6%	95.5%
教員養成各課程　合計	530	20	3.8%	38	7.2%	58	10.9%	472	89.1%	91.5%
国際理解教育	148	10	6.8%	18	12.2%	28	18.9%	120	81.1%	80.7%
生涯教育	109	4	3.7%	7	6.4%	11	10.1%	98	89.9%	90.4%
情報教育	108	2	1.9%	13	12.0%	15	13.9%	93	86.1%	73.3%
環境教育	95	6	6.3%	12	12.6%	18	18.9%	77	81.1%	84.7%
学芸４課程　合計	460	22	4.8%	50	10.9%	72	15.7%	388	84.3%	82.1%
総合計	994	42	4.2%	89	9.0%	131	13.2%	863	86.8%	86.3%

3　教務関係

1）カリキュラム

平成12年度から改編した新教育課程も定着したところであるが，更なる教育課程の見直し及び平成19年度からの学部教育組織の改組に向けて，教育課程の改訂の検討を始めたところである。

2）成績評価

成績評価は，「定期試験の結果及び受講状況等を総合して行う」こととなっており，このことは共通科目委員会が行った調査でも実証されている（詳細は愛知教育大学共通科目委員会『教養と教育（第２号)』p.178～p.204参照)。また，評価基準は従前どおりである。

3）履修登録単位数の制限（キャップ制）

各学期の履修登録単位数は，学期ごとに20単位を上限としている（なお，現在は，選択科目の及び自由科目の選択幅の拡大を考慮して22単位で運用している。)。ただし，卒業研究を履修する学年においては，各学期17単位までとし，卒業研究の単位は含まないものとする。これは，学生の主体的な学習を促し，教室における授業と学生の教室外学習を合わせた充実した授業展開を実現するために実施している。

4）教育職員免許状取得状況

平成18年３月卒業者の教育職員免許状取得状況は，下表のとおりである。

平成18年3月卒業者の教育職員免許状取得状況

課程	卒業者数	教員免許状の種類												
		小1種	小2種	計	中1種	中2種	計	高1種	幼1種	幼2種	計	聾学1種	養学1種	養教1種
初等教育教員養成課程	300	294	5	299	254	14	268	237	20	108	128			
		98.0%	1.7%	99.7%	84.7%	4.7%	89.3%	79.0%	6.7%	36.0%	42.7%			
中等教育教員養成課程	109	94	7	101	107	1	108	105						
		86.2%	6.4%	92.7%	98.2%	0.9%	99.1%	96.3%						
障害児教育教員養成課程	22	22		22		22	22			16	16	7	15	
		100.0%		100.0%		100.0%	100.0%			72.7%	72.7%	31.8%	68.2%	
養護教諭養成課程	41				37		37	44						41
					90.2%		90.2%	107.3%						100.0%
国際理解教育課程	120				47		47	44						
					39.2%		39.2%	36.7%						
生涯教育課程	98				41		41	49						
					41.8%		41.8%	50.0%						
情報教育課程	93				17		17	52						
					18.3%		18.3%	55.9%						
環境教育課程	77				38		38	38						
					49.4%		49.4%	49.4%						
中学校課程	1					1	1							
						100.0%	100.0%							
総合科学課程	2													

５）単位互換

平成17年度に行った単位互換の状況は下表のとおりである。

（　）内の数字は前年度実績を表す。

①入学前の既修得単位の認定

認定者数（人）	認定状況				
	１～４単位	５～９単位	10～14単位	15～19単位	20～単位
3　（2）	1	2	0	0	0

②大学以外の教育施設等における学修の単位認定

・修得単位別

認定者数（人）	認定状況			
	１単位	２単位	３単位	４単位
13　（9）	4	8	0	1

・学修の種類別

認定者数（人）	認定状況		
	英　検	トフル（TOEFL）	トーイック（TOEIC）
13　（9）	0	2	11

③海外留学中に修得した単位の認定

認定者数（人）	認定状況				
	１～４単位	５～９単位	10～14単位	15～19単位	20～単位
1　（1）	0	1	0	0	0

④単位互換に関する包括協定により修得した単位の認定

認定者数（人）	認定状況			
	１単位	２単位	３単位	４単位
5　（5）	0	4	0	1

4　教育実地研究実施状況

本学の教育実地研究は，教員養成 4 課程の学生が，所属する課程に応じた学校において履修が義務づけられている主免実習，選択として副免許状を取得するための副免実習，主免と異なる学校及び児童・生徒を理解するための実習である隣接校種実習，さらには，学芸 4 課程の学生のうち，免許状を希望する者のみが履修する教育実習と，大きくこの三つに分けることができる。それと基礎実習及び応用実習も選択科目として実施している。

それぞれの実施状況は以下のとおりである。なお，障害児教育教員養成課程，特殊教育特別専攻科及び臨時教員養成課程の特殊教育実習は上記区分け以外の別表記とした。

主免実習（教員養成課程）　　※（　）内の数字は養護実習生を内数で示す。

実習期間	実習校種	学校種	学校数	実習生数
9月26日(月)～ 10月21日(金)〔4週間〕	小学校	愛知県協力学校	137	206(30)
		名古屋市協力学校	15	33(2)
		附属小学校	2	118(6)
		小計	154	357(38)
	中学校	愛知県協力学校	30	33
		附属中学校	2	71
		小計	32	104
	幼稚園	愛知県内協力園	3	5
		附属幼稚園	1	12
		小計	4	17
9月26日(月)～ 10月21日(金)〔4週間〕	高等学校	附属高等学校	1	8
		小計	1	8
計			191	486(38)

隣接校種・副免実習（教員養成課程）・教育実習（学芸４課程）

実習期間	実習校種	学校種	学校数	実習生数
5月30日(月)～ 6月10日(金)〔2週間〕 又は 5月30日(月)～ 6月24日(金)〔4週間〕	小学校	附属小学校	2	100(2週間)
	中学校	愛知県協力学校	156	166(2週間) 128(4週間)
		名古屋市協力学校	7	48(2週間)
		附属中学校	2	41(2週間) 28(4週間)
		小計	165	411
	高等学校	愛知県協力学校	26	25(2週間) 6(4週間)
		附属高等学校	1	24(2週間) 30(4週間)
		小計	27	85
計			194	596

特殊教育実習（障害児教員養成課程・特殊教育特別専攻科・臨時教員養成課程）

実習期間	実習校種	学校種	学校数	実習生数
5月30日(月)～ 6月24日(金)〔4週間〕	養護学校	愛知県協力学校	6	6
		附属養護学校	1	9
		小計	7	15
	聾学校	愛知県協力学校	5	8
	計		12	23
9月26日(月)～ 10月7日(金)〔2週間〕	養護学校	愛知県協力学校	14	19
		名古屋市協力学校	3	7
		附属養護学校	1	12
		小計	18	38
計			30	61

総計	416	1145(38)

基礎実習（所属別）

課　　程	学 生 数	参加者数	参加率(%)
初等教育教員養成課程	330	320	96.9
中等教育教員養成課程	127	123	96.8
障害児教育教員養成課程	27	27	100.0
養護教諭養成課程	44	43	97.7
計	528	513	97.1

基礎実習（実習校別）

学　　校　　名	参加者数
名古屋小学校	175
岡崎小学校	170
名古屋中学校	56
岡崎中学校	54
高等学校	39
養護学校	＊27
幼稚園	19
計	513

＊岡崎小学校参加者
（障害児教育教員養成課程）の再掲

応用実習（実習校別）

学　　校　　名	参加者数
名古屋小学校	7
岡崎小学校	1
名古屋中学校	2
岡崎中学校	1
高等学校	1
養護学校	2
幼稚園	6
計	20

5　介護等体験実施状況

本学の介護等体験は，教員養成課程（障害児教育は除く）の学生は，１年次に附属養護学校において２日間の体験を実施し，２年次に県内の社会福祉施設で５日間の体験を実施している。

また，学芸課程の学生は，３年次において県内の公立特殊教育諸学校で２日間，及び県内の社会福祉施設で５日間の体験を実施している。

2005年度の実施状況は，次のとおりである。

〔附属学校〕

受入機関等	学校数	人数
附属養護学校	1	505

〔県内公立特殊教育諸学校〕

受入機関等	学校数	人数
聾学校	1	5
養護学校	3	194
合計	4	199

〔県内社会福祉施設〕

受入機関等	学校数	人数
特別養護老人ホーム	10	96
養護老人ホーム	5	49
老人デイサービスセンター	17	170
身体障害者サービスセンター	2	39
知的障害者更生施設	8	84
知的障害者授産施設	9	104
知的障害児通園施設	2	19
身体障害者療護施設	——	——
身体障害者授産施設	——	——
児童養護施設	3	36
肢体不自由児施設	3	37
児童福祉施設	1	9
老人福祉施設	1	10
生活保護授産施設	——	——
母子生活支援施設	1	10
合計	62	663

平成17年度　インターンシップ（就業体験）実施結果

学年	性別	課程・専攻・コース	体　　験　　先	期　　間	備　　考
3	女	国際文化コース	東海農政局総務部情報推進課	平成17年８月29日～９月９日（実働10日間）	東海地域推進協議会
〃	〃	〃	名古屋法務局	平成17年８月22日～９月２日（実働10日間）	〃
〃	〃	〃	日刊県民福井	平成17年９月20日～９月22日（実働３日間）	福井県経営者協会
〃	〃	〃	ヘアクリエーション　ナカオ	平成17年７月22日～８月２日（実働８日間）	愛知学生就職センター
〃	〃	〃	ヒルトン名古屋	平成17年９月15日～10月14日（実働１ケ月）	個別募集
〃	〃	〃	愛知県県民生活部国際課	平成17年８月８日～８月17日（実働８日間）	東海地域推進協議会
〃	〃	〃	NPOあっとわん	平成17年８月22日～８月26日（実働５日間）	愛知学生就職センター
〃	〃	共生社会コース	サーラグループガステックサービス	平成17年８月29日～９月９日（実働10日間）	東海地域推進協議会
〃	〃	情報教育課程	㈱ユーフィット	平成17年８月22日～９月２日（実働８日間）	〃
〃	〃	〃	㈱NECソフトウェア中部	平成17年８月22日～９月９日（実働15日間）	〃
〃	〃	〃	中部経済産業局 地域経済部エネルギー対策課	平成17年７月19日～７月24日（実働10日間） ８月22日～８月26日	〃
〃	〃	〃	㈱エヌティーセブンス	平成17年７月26日～８月２日（実働８日間）	〃
〃	〃	〃	名古屋市総務局職員部人事課	平成17年８月22日～８月31日（実働８日間）	〃
〃	〃	〃	西日本電信電話㈱名古屋支店	平成17年８月19日～９月１日（実働10日間）	〃
〃	男	〃	一宮市役所スポーツ課	平成17年８月１日～８月４日（実働７日間） ８月11日～８月13日	個別募集
〃	女	〃	愛知県教育委員会生涯学習課	平成17年８月15日～８月26日（実働10日間）	東海地域推進協議会
〃	男	〃	㈱ユーフィット	平成17年８月22日～９月２日（実働10日間）	〃
〃	女	〃	㈱ユーフィット	平成17年８月22日～９月２日（実働10日間）	〃
〃	〃	環境教育課程	愛知県環境部環境調査センター	平成17年８月29日～９月９日（実働10日間）	〃

7　学生生活関係

(1) 奨学金・授業料免除

①平成17年度日本学生支援機構奨学生採択状況　　※第二種採択者数には併用貸与者を含む

学部

学年	種　別	申　請　者　数	推薦・採択者数
１年	第一種（無利子）	在学採用　129名（内訳は次のとおり） 第一種のみ・・・・・・・・・・・・34名 第一種又は第二種・・・・・・・・・60名 第二種・・・・・・・・・・・・・・29名 併用貸与　・・・・・・・・・・・・6名	予約　53名 在学　86名
	第二種（有利子）		予約　64名 在学　46名 個別　4名
２年 ～ ４年	第一種（無利子）	在学採用　42名（内訳は次のとおり） 第一種のみ・・・・・・・・・・・・6名 第一種への移行・・・・・・・・・・2名 第一種又は第二種・・・・・・・・・10名 併用貸与・・・・・・・・・・・・・2名 第一種追加（併用貸与）・・・・・2名 第二種・・・・・・・・・・・・・・16名 第二種追加（併用貸与）・・・・・4名	在学　7名
	第二種（有利子）		在学　35名 個別　8名

大学院

学年	種　別	申　請　者　数	推薦・採択者数
１年	第一種（無利子）	在学採用　23名（内訳は次のとおり） 第一種のみ・・・・・・・・・・・・4名 第一種又は第二種・・・・・・・・・16名 第二種・・・・・・・・・・・・・・2名 併用貸与・・・・・・・・・・・・・1名	予約　18名 在学　16名
	第二種（有利子）		予約　3名 在学　8名 個別　2名
２年	第一種（無利子）	在学採用　1名（内訳は次のとおり） 第一種のみ・・・・・・・・・・・・1名	在学　1名
	第二種（有利子）		在学　35名 個別　8名

奨学金担当の目標である「学力基準及び家計基準を満たす者で，奨学金を必要とする者全員に奨学金の貸与（給付）を実現する」に対して，本年度は100%実現できた。

ここ数年は第二種の推薦枠を複数名残しているので，奨学金説明会及び掲示等により更に周知徹底し，個別面談の強化により支援の充実を図っていくことを学生の経済支援に係る検討会で確認した。

また，平成16年度から始まった大学院第一種貸与者で業績優秀者に対する返還免除制度に平成16年度１名を推薦し採用となり，平成17年度は８名を推薦した。

②平成17年度授業料免除実施状況

学種	学年	前期 申請者	前期 基準外	前期 免除許可 全免	前期 免除許可 半免	前期 免除許可 一部全	前期 免除許可 一部半	後期 申請者	後期 基準外	後期 免除許可 全免	後期 免除許可 半免	後期 免除許可 一部全	後期 免除許可 一部半
学部	1	49	10	29	10			41	6	28	7		
	2	48	4	27	17			53	7	32	14		
	3	69	5	46	18			66	1	49	16		
	4	57	6	35	16			57	4	36	17		
特	専	0						0					
大学院	1	50	8	33	9			41	3	32	6		
	2	29	1	24	4			27		22	5		
計		302	34	194	74			285	21	199	65		

H17年度は授業料改訂により免除可能額が拡大したため，基準を満たした者全員に免除を許可した。

なお，法人化後の免除制度として附属学校の生徒を優先して許可することにより，当該生徒が経済面で安心して修学できる環境を維持している。

また，学生へ積極的に審査状況を伝えることにより，学生サービスを充実した。

（主な事例は次のとおり）

ア　学力基準により免除が認められなかった者への指導

本人に不許可となった原因が修学状況であることを伝え，努力するよう指導した。

イ　審査結果が前回と大きく異なる者については，その理由を伝えることにより，今後の申請に向けて制度の理解を図った。

【参考資料】

国立大学の法人化に伴い，免除制度を改定した点は次のとおり（入学料も同様）

・学種毎の選考とし，附属学校を優先する制度としたこと

・積算された免除可能額に１名分の調整額を設け，免除可能額を超える免除を可能としたこと

・従来の全額・半額に加え一部免除を認め，免除該当者全員に支援を可能としたこと

区分＼年度	H15年度（法人化前） 前期	H15年度（法人化前） 後期	H16年度（法人化後） 前期	H16年度（法人化後） 後期	H17年度（授業料改訂） 前期	H17年度（授業料改訂） 後期
申請者	321	280	308	302	302	285
学内選考許可者	214	212	270	270	268	264
超過免除申請者	59	39				
超過免除許可者	0	0				
授業料収入に対する免除額積算%	5.3%		5.8%		5.8%	
免除可能額	55,348,186	54,874,716	60,952,322	60,579,420	63,700,039	63,020,313
免除実施額	55,335,000	54,814,200	60,969,600	60,582,400	62,644,100	62,998,400

注１）申請状況は，学部，大学院，専攻科の合計を記載

注２）H16年度以降の免除可能額・実施額は附属を含めた法人全体の計

【その他】

H18年度に向けて貸与奨学金の算定方法を所得から給与収入として扱うこととした。これは，

給付奨学金と異なる収入算定とすることにより，奨学金算定の公平性を図ったものである。
　また，H18年度前期授業料免除申請書類を一部Webを通じて提供することとした。これにより，印刷資料が半減し，業務の効率化と資源の節減が実現できた。

③平成17年度入学料免除実施状況
　法人化後の制度として審査を行い免除を許可した。
　　選考内容
　　学　部　申請者11名　全免　７名　半免　１名　不許可３名
　　大学院　申請者47名　半免　３名　一部免除33名（免除額32,000円）　不許可11名

(2) 福利施設関係

施設・設備の充実
　第二福利施設厨房の一部として設置されている大型冷蔵庫の老朽化に伴い，規格品の大型冷蔵庫へ更新した。冷蔵効率の良くない旧型を最新型に更新することにより，電気料の節約が期待できるとともに，旧冷凍・冷蔵室を改装，スペースの有効利用を検討した。
生活協同組合との連携
　福利施設運営にあたり，福利厚生協議会を開催，委託先である愛知教育大学生活協同組合と意見交換を行った。概要は次のとおり
・タイアップ事業
　　読書マラソン，学生による学内清掃
・厨房機器の現状と課題
　　生協からの寄附受入等，計画的な更新を図ることとした。
・講義用テキストの手配
　　新しい相互協力事業として学内会議等を活用して周知を図った。一方，講義室の不足から販売場所の確保が難しく次年度への課題となった。
・食堂ホール運営の業務委託
　　共有の場である食堂ホールの利用について，一定の条件の基に生協へ運営を任せることで利用者へのサービス向上と業務の簡素化を図った。
　　全体として，これまでの協力関係を維持し相互が協力体制を図ることを確認した。

(3) 入学者へのアパート紹介

　昨年同様，入学手続時に「不動産紹介コーナー」を設け，不動産業者による物件紹介を行った。
　平成18年度入学予定者から，合格発表前の予約申込を可能とし，本学第一志望の受験生は早期の物件
　検討が可能となり，入学希望者への学生サービスが向上した。
　また，昨年同様，不動産業者から企業の社会貢献として学生支援へ寄附したいとの申出があり，これを受け入れ，学生支援への貴重な資金とした。

(4) アルバイト紹介事業の一部外部委託

　学生アルバイト情報ネットワークに加盟し，一般アルバイトの受付・紹介を同システムに委託することにより業務の簡素化を図った。なお，同システムには大学からの求人入力（家庭教師等）が可能なため，学生が自宅PCや携帯電話から大学発信の求人情報も閲覧することが可能となり，学生へのサービス向上に繋がっている。

(5) 学生生活実態調査の実施

本学学生の学生生活全般について実態や意見を把握し，学生生活の改善する基礎資料を得るため本調査を実施することとした。諸事情によりH17年度は調査内容の設定，調査票の印刷とし，H18年度当初に行われる教務ガイダンス時に配布，全体への周知を図ることとした。

(6) 入学者の定期券購入方法改善

入学者の定期券購入方法について，本学への主要な交通機関である名古屋鉄道へ入学前の購入について検討を依頼，４/１以降有効の通学定期券の入学前購入がH18年度入学者から合格通知書提示により認められた。これにより，入学手続時の資料交付を充実し入学者へのサービス向上となった。

(7) 学校学生旅客運賃割引証の発行制限撤廃

従来から行われていた発行枚数の制限（一人年間10枚）について，日本学生支援機構の配布方針を参考に見直しを図り，平成18年度から制限を撤廃することとした。これにより，遠隔地からの入学者や教育研究や就職活動への経済的支援拡大の一助となった。

(8) 学生寮関係

学内に設置されている学生寮について教育寮としての性格から学生寮入居学生について生活上の各種指導を行っている。具体的には，寮生総会への担当者出席や寮代表メンバーとの意見交換，また，不定期ではあるが学生支援担当理事との意見交換の場を用意，自主的な活動を支援できる体制を整えている。

これらの学生寮支援活動により実施された施策を紹介する。

・セキュリティの向上

学生寮周辺に不審者が出没したことから，女子棟入り口にカード式ロックを設置するとともに，学生寮自治会に警備部を増設，学生寮入居学生とともに安全意識の向上を図った。

また，大学としてのセキュリティ向上策として夜間警備の充実を働きかけた結果，警備担当者を２名に増員，常に１名が正門を警備，併せて深夜の通行車両を記録する体制となった。

・寮生活の向上

浴室シャワーの改善

ライフスタイルの変化に伴い，浴槽の利用はなくなりシャワーの利用が多くなったが，給湯ボイラーの能力が低く冬季に複数の者がシャワーを利用した場合，温度が下がる等の不都合が生じていた。これらの状況を解決するためにボイラーの更新を計画，実現化した。

・ゴミ処理

学生寮自治会の保健部局が中心となり全寮生にゴミ処理の方法を周知しており，就職厚生課では，刈谷市役所からゴミ処理の広報資料を取り寄せ保健部局と共同して指導を行った。

また，ゴミ集積場がループ幹線上のため学外者の不法投棄があり困るとの意見が学生寮から報告されているが，抜本的な解決策がなく学生寮学生が自主的に不法投棄分を含めて分別整理を行っている。

・学生寮行事への支援

共同生活への連帯感と責任感を涵養するために，学生寮行事実施に担当として積極的に支援した。

特に「学生寮餅つき」には，学長及び学生支援担当理事を招いて実施したほか，入寮式，卒寮式，寮スキー等の実施に協力した。

(9) 学生の課外活動

① 課外活動団体数と加入者数

系　　別		体育系団体	文化系団体	計
団　体　数 （未公認含む）		52	31	83
加 入 者 数	男	798	327	1,125
	女	847	598	1,445
計		1,645	925	2,570

② 第54回東海地区国立大学体育大会成績一覧表（第３位まで）

（平成17年度当番大学：三重大学）

男子団体

第１位：陸上競技，バレーボール
　　ハンドボール

第２位：準硬式野球，剣道，少林寺拳法

第３位：ソフトテニス，馬術

女子団体

第１位：陸上競技，ソフトテニス
　　バスケットボール，バレーボール

第２位：水泳，剣道，弓道

③ 第50回東海地区国立大学文化祭への参加団体

（平成17年度当番大学：愛知教育大学　　会場：知立市文化会館パティオ池鯉鮒）

美術部門：書友会，美術謄写部

音楽部門：男声合唱団,混声合唱団，フォークソング部,軽音楽部,
　　アカペラサークルプルミエ

④ ボランティア活動

名古屋市トワイライトスクール参加者30名（女：22名）

名古屋市ふれあいフレンド参加者16名（女：10名）

豊川市学びとふれあい子ども教室28名（女：22名）

⑤ 第16回リーダーシップセミナー

サークル活動の一層の活性化を図るため，各サークルの抱えている諸問題を話し合い，リーダーとしての資質向上を図る。また，サークル間の親睦を深める。

日　　時：平成18年３月10日（金）

会　　場：愛知県刈谷勤労福祉会館

参加団体：18団体26名

講演会

講師：保健体育講座講師　寺本圭輔

演題：「サークル活動のコンディション管理」

討　議：・社会連携について
　　－今，私たちが地域・社会に対して貢献できること－
　　・クラブ・サークル連絡協議会のあり方について

(10) 学生相談室

学生相談室は，大学会館１階に移転して２年目になり，静かな環境の中で相談ができるようになった。移転に伴い設備品も整備され，今後は殺風景な相談室の壁に絵画を設置して，相談室に

ふさわしい雰囲気づくりを心がけたい。

学生相談は，全ての学生が対象であり，大学の教育活動の一環として，専任相談員が常駐していていつでも気楽に相談できる体制づくりが望まれる。

相談件数は下記の表のとおりである。相談内容では，「将来」，「進路」に関する相談が多く見られ，長期化する傾向にある。

年　　度	相談員数	相談件数	面接回数（含電話面接）
2001	5	23	79
2002	5	39	150
2003	5	34	143
2004	5	27	109
2005	5	15	119

(11) 指導教員制

指導教員制については，『学生生活』に主旨や目的，指導教員が行う内容を掲載し，ガイダンス時にも説明を行うなど，新入生にも理解されるよう努めた。また，昨年に引き続き『学生生活』を指導教員が活用するための簡単なマニュアルの作成を行い，全教員に『学生生活』と共に配付した。

(12) 学内交通対策

① 巡視員による構内交通巡視の実施

前年度に引き続きシルバー人材センターからの派遣巡視員による学内駐車場等の巡視を実施した。派遣巡視員に毎日の巡視結果を記録願い，違反者に対しての警告シールの貼付，更にはチェーン取り付けの罰則などの実施をすすめた。次年度も引き続き実施する予定である。

② 今後の方針

学内の駐車・駐輪に関しては，様々な問題が山積しており，財務委員会で新たに「刈谷地区構内交通規制に関する規程」が制定され，入構許可証発行手数料を徴収し，駐車場の整備等環境整備が進められる予定である。

(13) 学外交通指導

名鉄知立駅バス停付近で，混雑防止と学生の乗車マナー等の向上を図るため，４月６日から４月28日まで，役員部局長をはじめとしてバス乗車整理及び指導が行われた。

(14) オフィスアワー

本学専任教員によるオフィスアワー制度を2004年10月から導入した。

オフィスアワーは，学生の授業上の相談や研究の助言等に応ずることにより，授業等の理解を助け，勉学意欲を増進し，快適な学生生活を送れるよう支援することを目的とする。各教員が毎週２時間程度，授業のある期間中に学習相談を受ける時間帯を設定している。入学時のガイダンス，ホームページに掲載，学内掲示等で学生に案内している。

(15) 学力向上支援事業

(1) 趣旨

補充学習や学習方法・学習習慣の支援・助言など，学校全体で児童生徒へのきめ細かな学習支援・相談を一層充実させ，学習上のつまづきの解消や学習意欲の向上を図るため，教員志望者・

教員経験者等（教員志望の学生・教員免許保有者・退職教員等）の意欲・情熱を持った地域の人材を「学力向上支援員」として活用するための方策等について実践的な調査研究を行う。（文部科学省調査研究事業）

この調査研究は平成17年度で終了した。

(2) 本学協力校

小牧市立米野小学校　　東郷町立東郷小学校　　豊明市立豊明中学校
豊田市立堤小学校　　豊田市立朝日小学校　　豊田市立前林中学校

(3) 平成17年度における各学校への協力状況

① 東郷町立東郷小学校

イ　支援員予定人数　25名
ロ　勤務曜日　月，木，金曜
ハ　勤務時間　８時45分～12時25分，15時～16時，長期休業中は９時～11時
ニ　勤務期間　６月～２月及び夏季休業中
ホ　本学学生の勤務状況結果
　　支援員人数　19名　延308時間
ヘ　成果及び課題　授業中にわからない問題を聞く機会が増えたり，正解であれば○をつけてもらえる回数が飛躍的に増えたりしたことにより，児童の意欲が向上し，計算力が高まったと考えられる。
　　教師と支援員さんとの連絡については，連絡会を持ったり，授業前に打合せをしたりしたが，不十分な場合が多かった。担任は常に授業を行っているため，時間確保は非常に難しい。（学校の所見）

② 豊明市立豊明中学校

イ　支援員予定人数　18名
ロ　勤務曜日　毎曜日
ハ　勤務時間　15時～17時頃
ニ　勤務期間　５月～２月及び夏季休業中
ホ　本学学生の勤務状況結果
　　支援員人数　29名　延べ164回
ヘ　成果及び課題　多数の支援員を得ることができ，支援員が生徒一人一人にかかわる時間が増えた。また，毎回７～12名の支援員の参加があり，生徒が支援員に気軽に質問しながら，課題を持って取り組むことができた。
　　この事業では支援者の確保ができないと進めることが困難である。しかし，大学生は本来の授業の関係で，本校の学力支援日に合わせて活動することが難しい。今年度は多くの支援者の参加があり，設定した日は全て開設できたが，必要な支援員の確保は今後も課題である。今年度も学生の支援者は，大変熱心に行ってくれた。（学校の所見）

③ 豊田市立堤小学校

イ　支援員予定人数　５名
ロ　勤務曜日　毎曜日
ハ　勤務時間　可能な限り

ニ　勤務期間　９月～３月

ホ　本学学生の勤務状況結果

支援員人数　５名

ヘ　成果及び課題　児童にとって好ましい学習環境が成立している。近い将来，教職を志す学生にとっても理想的な環境であり，本事業のねらいが満たされていると言える。保護者・児童にとっても，支援員の存在は，学校に対する安心感につながっている。ただもう一つのねらいである，基礎学力の定着という面では比較検討するものが少なく，もうしばらく時間が必要である。（学校の所見）

④　豊田市立朝日小学校

イ　支援員予定人数　５名

ロ　勤務曜日　水・金曜日

ハ　勤務時間　可能な限り

ニ　勤務期間　４月～３月

ホ　本学学生の勤務状況結果

支援員人数　６名　延72回

ヘ　成果及び課題　支援事業も２年目となった。放課後の支援については希望者全員を受け入れることができず，人数を制限したが，長期休業については希望者全員参加できた。また，学生の支援員が継続して参加できない等の課題も多いが，参加した児童の多くは，支援員の熱心な指導でつまずきが解消できた。（学校の所見）

⑤　豊田市立前林中学校

イ　支援員予定人数　午前・午後各３～５名

ロ　勤務曜日　月～金曜日

ハ　勤務時間　午前３時間，午後３時間

ニ　勤務期間　長期休業中（夏季24日，冬季６日）

ホ　本学学生の勤務状況結果

支援員人数　７名　延べ336時間

ヘ　成果及び課題　学生の支援員を含めたことにより，より多くの複数指導者による指導が可能となり，個々の生徒や配慮を要する生徒によりきめ細かく対応できるようになった。教員を目指す学生にとっても貴重な体験の機会となっている。二学期制の導入とともに，長期休業中の学習活動の継続・学習意欲の持続をねらいとしているため，この学力向上支援事業が大変有効であった。支援員募集においては，大学生も多忙であり，特に授業日の確保が難しい。（学校の所見）

8　学生の健康管理，学生相談

(1) 学生の健康管理

学生の健康管理は主に１）健康教育，２）健康診断，３）健康相談，４）一般診療からなる。

１）健康教育

①健康講座：毎年，学生の健康管理に関連のあるテーマを選んで，本学の保健管理センター保健管理医による健康講座を施行している。2005年度は学生の健康管理と学内の安全衛生管理との接点が増えてきた。2005年度に全国で問題になったアスベスト問題に対する教育活動として，久永教授による講演『アスベストの危険性及び大学における対策について』（９月29日）を開催した。アスベスト問題に対する関心を学内外に広げた。②教育実習の事前指導：例年通り，教育実習を直前に控えた学生を対象に，教育実習に向けた健康管理に関する指導を行った。③救急蘇生法講座：毎年７月にクラブリーダーを中心に刈谷消防署の救命救急士を招いて行われているが，2005年度も７月に講習が行われた。これは夏期休暇に増える事故を防止する対策として行っている。④クラブリーダー会：毎年３月にクラブリーダーを中心に，部活動を行うに当たっての健康管理に関する指導を行った。⑤保健教育：看護師が中心となって，生活習慣病，生理痛，メタボリックシンドローム，ダイエット，禁煙，肥満などに関する小冊子を作成し，積極的な保健教育活動を行った。学生との対話型の健康教育を行うことができた。

２）健康診断

①学生定期健康診断：全学生を対象に毎年４月上旬に約１週間の予定で行われている。一般内科健診に加えて，「生活習慣に関する健康度テスト」と「内科健診スクリーニングアンケート」を行い，健診の事後指導に活用し，心身の健康増進に役立てた。さらに新入生（大学・大学院１年生）に対しては，心身の健康に関するアンケートを行い，心身の健康調査を行っている。健診結果に基づき学生の就職や大学院進学に必要な健康診断証明書を発行している。②放射線従事者特定検診（RI特定検）：放射性物質を用いた研究に従事している学生を対象に，毎年５月と11月に検診を行っている。③アルコールパッチテスト：これは大学生協職員と連携し，学生のアルコール被害を予防する目的で毎年４月に行っている。

３）健康相談

①健診の事後指導：学部及び大学院生を対象に行った４月の学生定期健康診断の結果を受けて，必要と判断された学生に対して，４月中に身体的問題に対する事後指導を行い，新入生の中で必要と思われた学生に対して，６月中に精神的問題に対する事後指導を行った。これらは大学保健管理医が担当した。②痩せ・肥満指導：４月の学生定期健康診断の結果を元に，全学年の中でBMI（body mass index）が29.6以上及び16.5以下の学生を対象に，毎年５月に健康相談を行っている。これらは看護師・保健師が担当した。③月経障害指導：４月の学生定期健康診断の結果を元に，全学年の中で，希望者及び必要と思われた学生に対して，毎年９月に健康相談を行っている。これらは看護師・保健師が担当した。④生活習慣指導：４月の学生定期健康診断の生活習慣に関するアンケートを元に，全学年の中で，必要と思われた学生に対して，毎年11月に健康相談を行っている。これらは看護師・保健師が担当した。⑤一般健康相談：一年を通じて学生から希望があった際に随時健康相談を行っている。医療機関の紹介，疾病についての一般的な相談，メンタルヘルスに関する相談など様々な相談に応じている。これは医師及び看護師・保健師が担当している。保健管理センターにおけるメンタルヘルスに関する健康相談は，学生支援課における学生相談とは異なる。（※学生支援課における学生相談については，学生支援課の報告を参照して頂きたい）。⑥留学生健康相談：毎年11月に留学生を対象に採血を行い，スクリーニング検査を行ってきたが，2005年度から留学生健診を廃止して，久永医師による「留学生健康相談」を

始めた。留学生からは好評であった。

4）一般診療

本学の保健管理センターは，診療所として保健所で登録されており，一年を通じて，以下の診療行為を行っている。①プライマリケア：内科系（発熱，下痢，便秘，頭痛，感冒などの症状に対する対症処療法）及び外科系（擦傷，切傷，打撲，などの小外傷に対する応急処置）の二つの分野は主に看護師が担当している。病態によって医療機関での治療が必要と判断されれば，速やかに医療機関を紹介している。プライマリケアにおける看護師の役割は大きい。精神科系は看護師によるインテーク面接の後，保健管理医による精神科診察を行っている。学生の病態水準に応じて，保健管理センターにおいて精神療法に導入になる場合や外部医療機関への紹介などを行っている。

(2) 2005年度の健康管理活動の特記事項

国立大学法人化され，新しい大学運営理念が徐々に浸透し始めて，前年度に比して，業務の合理化及び簡素化を含めた保健管理業務の見直しが進んだ年であった。例えば，4月の学生定期健康診断の際に，健診医や臨床検査技師を一部外注化したこと，留学生健診を留学生健康相談に変更してより良いサービスに努めたことがある。中でも人的資源を最大限利用して，医師及び看護師などの専門性を充分に生かした健康管理業務を目指した。愛知教育大学における保健管理業務の独創性が追求されたといえる。2005年4月に保健管理センターに着任された久永教授はアスベストに関する健康障害を専門にされており，その専門性を生かして，全学のアスベスト対策に積極的に取り組んだ。これは全国の大学においてもいち早い動きであった。精神保健相談に関しては，2004年度まで2名だった精神科医が1名になり，その活動の低下が懸念されたが，外部医療機関との連携の強化を進めることで活動の低下を補うように努めた。　2005年度は度本学の中期計画，中期目標にある「健康安全・環境保全センター（仮称）」構想を具体化すべく，2005年度にはその立ち上げのためのワーキンググループが発足した。学生の健康管理以外に，教職員を対象にした労働安全衛生，環境保全，学生支援課による学生相談などを総合的統合的に管理運営する方向性が打ち出され，2006年度より保健環境センターに名称変更されることが決まった。この報告書で触れられている，「学生の健康管理」及び「学生相談」の運営等に関しては，2006年度からは保健環境センターの保健環境委員会で論議される予定である。

保健管理センターにおける健康相談の保健統計の一部を示す。2005年度の健康相談件数は身体的健康相談は632件，精神的健康相談は556件であった（前年度は，それぞれ632件，517件）。医療機関への紹介件数は，全体で，239件であった（前年度は，311件）。さらに詳細な保健統計は，IRIS HEALTH（愛知教育大学保健環境センター紀要）を参照していただきたい。

(3) 2006年度の課題と展望

1）保健管理センターの診療業務について：保健管理センターに必ず看護師が待機しているという体制を長年に渡って維持してきた。だが現在非常勤看護師の削減の動きが進みつつあることは昨年度の年次報告で述べた。本来の診療所としての診療業務に加えて，法人化されて新たに加わった安全衛生業務を遂行するためには，看護師による学生及び教職員に対する保健活動業務を充実させる必要がある。このため保健師及び看護師の充実は避けられないことを来年度の展望として明記しておく。今後，看護師の人員削減が進めば，診療業務に休診日を設けるなど，保健管理業務の縮小的合理化もやむを得ないかも知れない。

2）健診の外注化と健康診断書証明書の自動発行について：既に多くの他大学で実施されている健康診断証明書の自動発行を実現すべく，今後，学生定期健康診断を外部の健診業者への依託

すること，つまり健診の外注化を進めることが必要である。

3）学校医制度の廃止について：2005年度に学校医として本学と契約した刈谷市内の開業医は３名いるが，その活動は４月の学生定期健康診断における内科健診が主であった。また多忙な開業医業務により健診業務を遂行できない時もあり，開業医による学校医制度を見直す必要性があった。本学全ての活動の合理化と効率化を考えて，学校医制度を廃止して健診の外注化を進めることが大切である。今後は上述の健診データの総合的管理とともに，健診の外注化により健診医の安定供給がなされることを目指す。

4）新入生に対するアンケートについて：これまで大学受験の願書を提出する際に，受験生には健康診断書を提出する義務があったが，2005年度からそれが撤廃されたので，学生の健康情報を入学前に得ることができなくなった。これを補うべく2006度からは新入生に対する健康調査表を強化することで，新入生の健康管理活動を充実させる必要がある。また学生の健康管理のために必要なアンケート調査を検討している。尚，学生へのアンケートは本学の教育創造センターとの関係も深く，適宜，協力体制をとる必要がある。

5）特定化学物質・有機溶剤の管理：独立行政法人化に伴い，特定化学物質・有機溶剤の使用する職員に対して特殊健康診断を行う義務が生じている。これらの物質を実験研究において使用する学生に対しては，労働安全衛生法では規定されていないが，学生に対する安全教育に取り組んでゆく必要がある。また2006年度からは保健環境センターとなり，学内の環境保全を積極的に行う予定であり，環境という視点からも健康管理に取り組んでゆく必要がある。

6）ホームページの利用をめぐって：これまで保健管理センターのホームページを通じて，保健管理活動を紹介し，情報提供に努めてきたが，その情報更新は必ずしも迅速とはいえなかった。その理由は保健管理センターにはホームページ管理に精通した人材いないことによる。今後，より充実した学生の健康管理を行うには，健康に関する最新情報や健診の案内などをホームページ上で迅速に更新することが求められる。そのためにはホームページ管理に精通した学内の専門家との協力体制を確立することが望ましいと思われる。

7）本年次報告の作成において，『学生の健康管理と学生相談』というタイトルで就職厚生課が執筆担当をしてきたが，来年度からは重複を避けるために保健環境センターの活動の中に組み込むのが望ましい。

9　卒業生の進路，就職問題への取り組み

平成17年度に，就職支援担当教員連絡会実施の学生就職活動の支援策は次表のとおりである。

① 教員就職支援策の一つである教員就職相談員事業において，教員採用試験に向けて小論文等の添削，個別・集団の種別の面接指導等も含め，幅広い指導・相談を第二次試験の直前まで延べ30日にわたり展開した。その結果，制度の利用が効果的であることがうかがえ，学生からもこの就職相談員事業について相談日拡大等の要望が出ているところである。

次年度は，同窓会の支援により相談日の拡大を検討しているところである。

なお，県内公立学校教員採用試験の合格率は，前年より6.5%ダウンし，49.5%（教員養成課程に限れば，1.6%ダウンの57.8%）となっている。原因は定かではないが，愛知県では平成18年度教員採用選考試験から，県内公立学校（名古屋市立学校を除く。）で常勤講師として３年

以上の勤務実績を有する者が第一次試験を免除される「特別選考」が導入され，過年度卒業生が優遇されたことも一因として考えられる。

② 学長裁量経費により，新たにキャリア・カウンセラーの資格を持つ相談員を雇用し，年間延べ24日間の企業等就職相談を実施。次年度は同窓会等の支援により年間30日間の相談日を設け

月	教員就職	公務員就職	企業就職
4	Ⅳ教員採用試験セミナー⑦ Ⅳ教員採用試験模擬テスト	Ⅳ公務員試験模擬テスト	
5	Ⅳ教員就職相談③ Ⅳ教員採用試験セミナー④ Ⅳ教員就職ガイダンス（試験説明会） Ⅳ教員就職ガイダンス（模擬面接） Ⅳ教員採用試験模擬テスト②	Ⅳ公務員試験模擬テスト②	
6	Ⅳ教員就職相談⑦ Ⅳ教員採用試験模擬テスト② Ⅲ教員就職ガイダンス（概要等）	Ⅳ公務員試験模擬テスト Ⅲ公務員就職ガイダンス （試験概要）	
7	Ⅳ教員就職相談⑧ Ⅳ愛知教採試験直前対策ゼミナール Ⅳ教員採用試験直前アドバイスセミナー	Ⅲ公務員試験模擬テスト	Ⅲ企業就職ガイダンス （就職活動の概要） Ⅲ企業就職ガイダンス （就職市場の現状，就職活動体験報告）
8	Ⅳ教員就職相談⑫		
9			
10		Ⅲ公務員就職ガイダンス （国･市町村採用人事担当者概要説明）	
	Ⅰ･Ⅱ2年生就職ガイダンス（低学年からの職業観の醸成,職業意識の確立）		
11	Ⅲ教員採用試験学習アドバイスセミナー Ⅲ教員採用試験模擬テスト		Ⅲ企業就職ガイダンス（実際等） Ⅲ企業就職ガイダンス （エントリー等）
12	Ⅲ教員就職ガイダンス（試験対策等）	Ⅲ公務員就職ガイダンス （体験報告） Ⅲ公務員試験模擬テスト	Ⅲ企業就職ガイダンス （OB説明・模擬面接等）
1		Ⅲ公務員試験模擬テスト	Ⅲ企業就職ガイダンス （女性のための就職活動等）
2	Ⅲ教員採用試験模擬テスト	Ⅲ公務員試験模擬テスト	Ⅲ企業就職ガイダンス （企業研究） Ⅲ企業研究セミナー（2日間）
3	Ⅲ教員採用試験模擬テスト Ⅲ教員採用試験学内集中講座⑩	Ⅲ公務員試験模擬テスト	Ⅲ就職試験対策特訓講座（*）

（1）事項名称の前のローマ数字は対象学年，事項名称の後の○付き数字は開催回数であり，無印は1回開催。
（2）大学院学生の進路及び就職活動への取り組みは，学部学生と一体的に実施している。

る予定である。

また，企業就職支援策の一つである企業研究セミナー事業は５年目となるが，毎年参加企業は増加しており，企業研究方法等の事前ガイダンスを行った上で，２月22日・23日の２日間にわたり開催した。参加企業86社，参加学生数延べ262名であり，参加企業担当者及び参加学生のアンケート結果では高い支持を得ているところである。

なお，例年のことではあるが，授業計画がタイトなため，当セミナーの開催日程等編成に苦慮している。

③　新たに，企業就職ガイダンスの構成を一部アレンジし，㈱豊田自動織機人事担当者による核心に迫る講演を実施した。その結果，多くの学生が参加し，好評を得た。

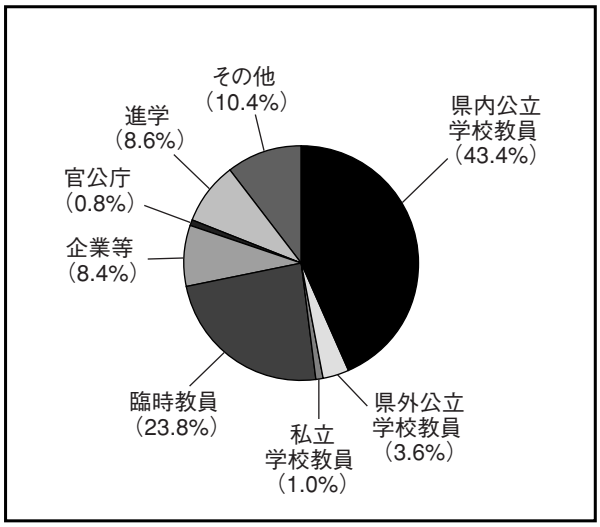
企業就職支援では，より具体的な就職試験対策特訓講座のほか，理事・監事，就職支援教員等による求人企業開拓のための企業訪問も引き続き進めている。

④　定例の２年生就職ガイダンスを１年生にも参加拡大し，元企業での人事担当の経験もある，民間から登用された現職の高等学校長からの具体的な経験をふまえた学生のキャリア形成に繋がる講演を実施した。

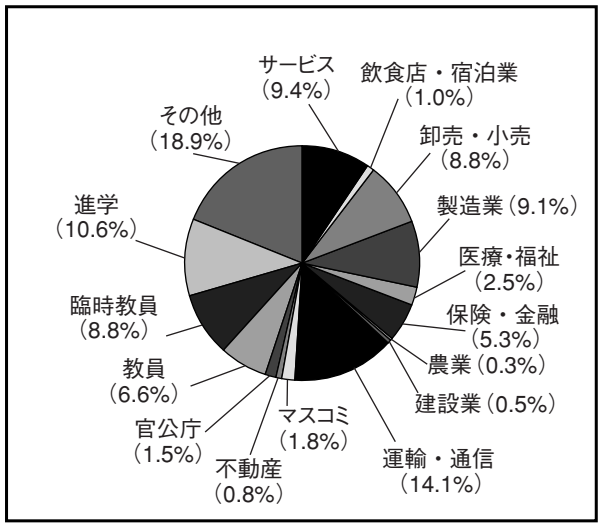
なお，次年度は，１，２年生を対象としたキャリア形成・職業観の醸成等に資する進路セミナーの開催についても検討しているところである。

平成17年度　卒業修了生進路状況

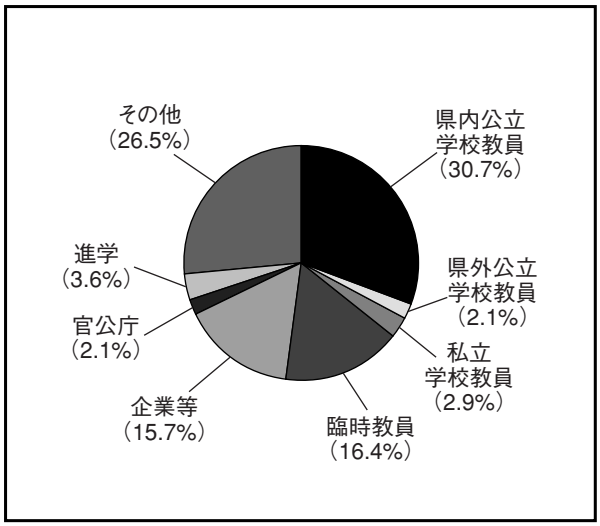
教員養成4課程　479名



学芸4課程　396名



大学院　140名



課程等	卒業者数	就職																	その他		
		教員			企業等												官公庁	計	進学者	その他	計
		教員	臨時教員	小計	建設業	製造業	卸売・小売	保険・金融	不動産業	運輸・通信	医療・福祉	飲食店・宿泊業	マスコミ	農業	サービス業	小計					
教員養成4課程	479	230	114	344	1	7	7	2	1	5	0	3	0	0	14	40	4	388	41	50	91
学芸4課程	396	26	35	61	2	36	35	21	3	56	10	4	7	1	37	212	6	279	42	75	117
学部計	875	256	149	405	3	43	42	23	4	61	10	7	7	1	51	252	10	667	83	125	208
大学院	140	50	23	73												22	3	98	5	37	42

注1：本表は，平成17年9月卒業・修了者を含む。（旧教員養成課程は教員養成4課程に，総合科学課程は学芸4課程に含む。）
注2：保育士は教員に含む。
注3：その他欄は無職（アルバイト，パート，未定を含む），大学学部・1年課程・研究生・科目等履修・専門学校等の学校入学，海外留学等になります。

第２節　大学院

１　入学者選抜

平成18年度大学院教育学研究科入学者選抜試験は，第一次募集を平成17年10月１日・２日に，第二次募集を平成18年２月４日・５日にそれぞれ実施した。出願状況は，一次募集においては，218名，二次募集においては，40名の出願があった。

また，現職教員の出願者は34名，受験者は32名あり，18名が合格し，うち18名が入学している。

平成18年度　大学院教育学研究科（修士課程）入学試験実施状況一覧

区分／専攻	定員	志願者			受験者			合格者			入学者		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
学校教育専攻	27	(1) 22	(5) 29	(6) 51	(1) 22	(5) 24	(6) 46	12	(3) 21	(3) 33	10	(3) 18	(3) 28
国語教育専攻	7	6	3	9	6	2	8	5	2	7	5	2	7
英語教育専攻	9	3	1	4	3	1	4	3	1	4	3	1	4
社会科教育専攻	14	(1) 19	(1) 3	(2) 22	(1) 18	(1) 3	(2) 21	(1) 12	3	(1) 15	(1) 11	3	(1) 14
障害児教育専攻	12	3	4	7	3	4	7	1	2	3		2	2
数学教育専攻	11	(1) 10	(1) 3	(2) 13	(1) 10	(1) 3	(2) 13	(1) 9	(1) 3	(2) 12	(1) 8	(1) 3	(2) 11
理科教育専攻	17	21	6	27	19	6	25	14	6	20	11	6	17
芸術教育専攻	19	(1) 7	24	(1) 31	(1) 6	23	(1) 29	4	19	23	3	18	21
保健体育専攻	8	13	4	17	12	4	16	12	4	16	10	4	14
家政教育専攻	9	1	1	2	1		1	1		1	1		1
技術教育専攻	5		1	1		1	1		1	1		1	1
養護教育専攻	3		2	2		1	1		1	1		1	1
学校教育臨床専攻	9	14	(1) 58	(1) 72	14	(1) 55	(1) 69	4	(1) 12	(1) 16	3	(1) 10	(1) 13
合　　計	150	(4) 119	(8) 139	(12) 258	(4) 114	(8) 127	(12) 241	(2) 77	(5) 75	(7) 152	(2) 65	(5) 69	(7) 134

（　）内数字は定員外の外国人留学生特別選抜で外数

2　在学者数

大学院教育学研究科の在学者数は平成17年５月１日現在，下記のとおりである。

専攻	学校教育					国語教育	英語教育	社会科教育	障害児教育	数学教育	理科教育	芸術教育		保健体育	家政教育	技術教育	養護教育	学校教育臨床	合計
分野	教育	心理	幼児	生活	総合							音楽	美術						
1年	5	10	5	7	11	8	5	12	5	11	18	10	12	7	8	4	6	13	157
2年	10	11	2	6	12	9	6	24	6	10	16	7	16	12	8	6	6	27	194
計	15	21	7	13	23	17	11	36	11	21	34	17	28	19	16	10	12	40	351

3　修了者数及びその進路

平成17年度の修了者数は次項の学位論文名等一覧に数えるように９月修了者６人，３月修了者134人，合計140人である。

次に，大学院学生の進路及び就職問題への取り組み等については，学部学生と一体的に取り扱っているので，進路等については前節の「９卒業生の進路，就職問題への取組」を参照されたい。

専攻名		２年在学者数	9月修了者数	3月修了者数	合計
学校教育専攻	教育学分野	10		4	4
	教育心理学分野	11		6	6
	幼児教育分野	2		2	2
	生活科教育分野	6		5	5
	総合教育開発分野	12		10	10
国語教育専攻		9		8	8
英語教育専攻		6		4	4
社会科教育専攻		24		16	16
障害児教育専攻		6		4	4
数学教育専攻		10		9	9
理科教育専攻		16		12	12
芸術教育専攻	音楽分野	7	1	5	6
	美術分野	16	2	12	14
保健体育専攻		12		9	9
家政教育専攻		8		6	6
技術教育専攻		6		5	5
養護教育専攻		6		5	5
学校教育臨床専攻		27	3	12	15
合計		194	6	134	140

4　学位論文

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏･作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
学校教育	教育学	今井　理恵	学びの共同性に関する授業論的研究	平成18年3月	修士(教育学)	子安　潤 副　折出　健二
	教育学	朴　雄一	中学生の進路（キャリア）発達に関する日・中比較	〃	〃	坂柳　恒夫
	教育学	吉岡　寛	中学校における地域学習についての考察	〃	〃	斎藤　秀平
	教育実践学	舟橋　有香	中学生における生活充実感に関する研究 −自尊感情と進路成熟との関連−	〃	〃	竹内登規夫
	教育心理学	太田　紗織	特定児童に対する教師の指導行動に関する研究 −児童と教師の視点の比較を通して−	〃	〃	中野　靖彦 副　石田　靖彦
	教育心理学	貝川　直子	教師バーンアウトに及ぼす組織特性，ソーシャルサポートの影響	〃	〃	鈴木　眞雄
	教育心理学	水谷かづみ	個人志向性と社会志向性の統合から見た青年期におけるアイデンティティ形成について	〃	〃	中野　靖彦 副　菊島　勝也
	教育心理学	余合　弘	小学生児童の対人関係における問題対処プロセスについての研究　～現在に至るまでの重要な他者との関係に着目して～	〃	〃	竹内　謙彰 副　石田　靖彦
	教育心理学	廉　香順	子どもの自己効力感について　−日中比較−	〃	〃	鈴木　眞雄
	教育心理学	渡邉たかえ	幼児期前期におけるふりの発達	〃	〃	竹内　謙彰
	幼児教育	石橋　尚子	統合保育　−発達障害児と向き合う保育とは−	〃	〃	村岡　眞澄 副　山口　雅史
	幼児教育	小杉　裕子	音・音楽とかかわり遊ぶ幼児の表現とその指導についての研究	〃	〃	梅澤由紀子 副　新井美保子
	生活科教育	加納　誠司	知の総合化を図る合科的・関連的指導についての研究	〃	〃	野田　敦敬
	生活科教育	清水　聖	『初等学校記録』を通してみたデューイ実験学校の理論と実践	〃	〃	布谷　光俊 副　中野　真志
	生活科教育	服部　正宗	「遊び」を中核概念とした幼小連携カリキュラムの開発と事例分析に関する研究	〃	〃	布谷　光俊
	生活科教育	藤原　真穂	低学年における自然とのかかわりを深めるための能力の育成に関する研究	〃	〃	野田　敦敬
	生活科教育	前畑　朱里	「自分自身への気付き」を育む生活科学習についての研究	〃	〃	野田　敦敬
	国際理解教育	鄭　海燕	中日両言語の慣用句についての対照研究 −「気」を表すものを中心に	〃	〃	田村　建一 副　時　衛国
	国際理解教育	田畑　理咲	ポートフォリオ評価を活用したプロジェクトワークの試み −学習者主体の日本語学習活動と評価活動を目指して−	〃	〃	岡田　安代 副　北野　浩章

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏・作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
学校教育	国際理解教育	傅　子純	相談場面におけるポライトネス・ストラテジー −日本と台湾における母語話者の使用実態の調査からの分析−	平成18年3月	修士(教育学)	田村　建一
	国際理解教育	藤井　涼子	外国人児童の学習支援のための日本語教育	〃	〃	岡田　安代
	国際理解教育	大峯まどか	日本語オノマトペの意味・用法に関する一考察	〃	〃	田村　建一 副　土岐留美江
	国際理解教育	松本　留美	小学校における国際理解教育のあり方 −異文化理解から多文化共生への展望−	〃	〃	岡田　安代
	情報教育	高　錦梅	幼稚園・保育園におけるコンピュータ教育の現状 −日本と中国の比較研究−	〃	〃	中津　楢男 副　野崎　浩成
	情報教育	鈴木　泰裕	授業実践における高校生の情報倫理の意識の変化	〃	〃	中津　楢男 副　野崎　浩成
	情報教育	滝藤　慎介	学校における画像管理システムの開発と評価	〃	〃	中津　楢男 副　野崎　浩成
	情報教育	陳　杰	遠隔ゼミ支援システムの開発	〃	〃	中津　楢男 副　中西　宏文
国語教育	国語科教育学	左近　妙子	コミュニケーション能力を育てる国語科授業・評価の開発	〃	〃	佐藤　洋一
	国語科教育学	藤原めぐみ	中学・高校における＜戦争・平和教材＞の授業研究論	〃	〃	佐藤　洋一
	国語科教育学	宮田　拓史	学校関係用語の研究 −学校の出入りに関する語を中心として−	〃	〃	中田　敏夫
	国語科教育学	若尾　有佳	「確かな国語学力」と表現力を育成する詩教材・評価の開発　−谷川俊太郎「朝のリレー」等を例に−	〃	〃	佐藤　洋一
	国語科内容学	小宮山寛之	吉野弘論 −「個人主義」から「個性」への系譜−	〃	〃	安藤　重和 副　西田谷　洋
	国語科内容学	橋倉　美嘉	書と人格論　−蘇軾を中心として−	〃	〃	塘　耕次 副　風岡　正明
	国語科教育学	梶谷　弥生	国語学力と学習過程を明確にした単元モデル −新見南吉幼年童話を教材として−	〃	〃	佐藤　洋一
	国語科教育学	神谷　昇	古典文学教育における西鶴作品の可能性 −現行教材を中心として−	〃	〃	有働　裕
英語教育	英語科教育学	佐々木　穂	The Role of Syntactic Processing Skills in EFL Reading -In Terms of Processing of Garden Path Sentences-	〃	〃	野呂　忠司
	英語科教育学	本多　明子	Cohesion in English writing for Japanese high school students	〃	〃	野呂　忠司
	英語科教育学	右髙　知佳	The Place of Listening in Junior High School English Classes and Ways to Enhance It	〃	〃	野呂　忠司
	英語科内容学	神津　良典	Imaginative Chastisement and Poetical Growth: The Patterns of Recollection in Wordsworth's The Prelude	〃	〃	中村　正廣 副　道木　一弘

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏･作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
社会科教育	社会科教育学	小杉　明裕	児童の空間意識を促す自県学習のあり方	平成18年3月	修士(教育学)	寺本　潔
	社会科教育学	木田　千春	歴史教育におけるアフリカ認識に関する単元開発とその諸課題	〃	〃	寺本　潔 副　土屋　武志
	社会科教育学	小林　大介	演劇的手法を導入した社会科授業の授業研究開発について	〃	〃	寺本　潔
	社会科教育学	杉本　明隆	社会形成力を育成する世界史授業構成 ～Weblogを活用した自己表現と認識の深化～	〃	〃	寺本　潔 副　土屋　武志
	社会科教育学	趙　紅淑	親子による環境地図づくりとその生涯学習の社会的意義	〃	〃	寺本　潔
	社会科教育学	塚田　一生	社会構成主義の視点に立つ社会科学習論の研究	〃	〃	寺本　潔
	社会科教育学	外山記代子	小学校社会科における「公共」の学習に関する授業実践の試み	〃	〃	寺本　潔 副　土屋　武志
	社会科教育学	餘舛　尚隆	中学校社会科における「ソーシャル・プロセス・アプローチ」に基づく評価に関する研究	〃	〃	寺本　潔
	社会科内容学	王　衛光	中国の主要都市の発展プロセスと将来予測について	〃	〃	阿部　和俊
	社会科内容学	川合　大輔	土田杏村の初期思想研究	〃	〃	渡邉　和靖
	社会科内容学	金　成日	「満州国」に対する日本の鴉片政策に関する研究 −吉林省における鴉片政策の影響を中心に−	〃	〃	目黒　克彦
	社会科内容学	橋本　宰	身近な地域における歴史地理資料の教育的活用	〃	〃	岩崎　公弥
	社会科内容学	辺　紅国	豊田市を中心とするトヨタ自動車工業地域の形成と地域展開	〃	〃	岩崎　公弥
	社会科内容学	間瀬　智広	日本古代国家の渡来人政策	〃	〃	西宮　秀紀
	社会科内容学	山田　逸記	ブレア政治に関する一考察	〃	〃	近藤　潤三
	社会科内容学	山本　朋宏	高齢者福祉に関する地理学的考察 ～愛知県岡崎市を事例として～	〃	〃	阿部　和俊
障害児教育	障害児教育学	安藤　仁史	発達障害児への校内支援体制の構築に関する一考察	〃	〃	都築　繁幸
	障害児教育学	田島　広嗣	自閉症児が通常学級で学ぶ際の学習補助の在り方に関する一考察	〃	〃	都築　繁幸
	障害児教育学	山本　憲子	特別支援教育に対する小学校教師の意識に関する一考察	〃	〃	都築　繁幸
	障害児教育学	三輪　真司	障害児学級在籍の広汎性発達障害児との交流教育実践　～通常の学級経営の視点から～	〃	〃	神野　秀雄

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏・作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
数学教育	数学科教育学	太田　裕美	我が国の数学カリキュラムにおける“Math for All”の在り方　−高等学校数学を中心として−	平成18年3月	修士(教育学)	佐々木徹郎
	数学科教育学	齋藤　貴之	図形の包摂関係の指導に関する研究 −コンピュータ利用の可能性に焦点をあてて−	〃	〃	飯島　康之
	数学科教育学	佐橋　郁美	数学教育におけるコンピュータを利用した授業に関する研究　−作図ツールを中心に−	〃	〃	飯島　康之
	数学科教育学	譚　　彬	中国における微分・積分の教材とその指導について	〃	〃	佐々木徹郎
	数学科教育学	陳　　海平	コンピュータとインターネットを活用した数学教育に関する研究　～作図ツールを利用した授業用コンテンツ開発を中心に～	〃	〃	飯島　康之
	数学科内容学	杉山　静香	環に付随した零因子グラフの考察	〃	〃	金光　三男
	数学科内容学	牧野　豊弘	双曲平面のモデルについて	〃	〃	古川　靖邦 副　竹内　義浩
	数学科内容学	吉田　宏史	相互評価システムの開発と授業での実践	〃	〃	竹田　尚彦
	数学科内容学	渡邊　剛義	代数的位相幾何学における問題について	〃	〃	古川　靖邦
理科教育	理科教育学	杉浦　貴史	学校と博物館との連携に関する研究	〃	〃	川上　昭吾
	理科教育学	隅田　幸江	環境学習におけるジェンダー分析	〃	〃	吉田　　淳
	理科教育学	MARAMAG.C.	物理学について期待される教師の認識論的信念及び理解の研究　Investigation of Prospective Physics Teachers' Epistemological Beliefs and Understanding of Physics	〃	〃	石田　博幸
	理科内容学	梅村　雄樹	地表面境界において発生した超低周波音波	〃	〃	澤　　武文 副　戸田　　茂
	理科内容学	加藤　香織	後期更新世以降の本州西部と琉球列島の哺乳動物相の比較研究	〃	〃	河村　善也
	理科内容学	鬼頭　佑至	チオフェンを含むチオアミド誘導体がシクロメタレーションした錯体の合成と構造，および置換基の導入による配位様式の相違	〃	〃	中島　清彦
	理科内容学	姜　　松林	ニワトリＮ−アセチルガラクトサミン4硫酸6−Ｏ−硫酸転移酵素のクローニングと発現	〃	〃	羽渕　脩躬
	理科内容学	厳　　花淑	ラン科植物の種子発芽段階での選抜による新育種法に関する研究	〃	〃	市橋　正一
	理科内容学	鈴木　規眞	琵琶湖西岸活断層系における精密重力探査に基づく地下密度構造の研究	〃	〃	河村　善也 副　戸田　　茂
	理科内容学	野々山芳明	ファイバートラッカーと原子核乾板を用いたニュートリノ反応の研究	〃	〃	牛田　憲行 副　児玉　康一
	理科内容学	若林　　努	大小マゼラン雲の相互作用に関するSPH法シミュレーション	〃	〃	澤　　武文

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏･作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
理科教育	理科教育学	立松　玲	中学校理科におけるデジタルコンテンツ教材の活用	平成18年3月	修士(教育学)	吉田　淳
芸術教育	音楽科内容学	越村富貴子	(演奏) ドニゼッティ作曲「Eterno amore e fe (久遠の愛と誠)」「Il barcaiolo (舟人)」歌劇『ドン・パスクァーレ』より「あの目に騎士は」歌劇『シャモニーのリンダ』より「この心の光」 (論文) 教則本を中心とした声楽教育の歴史についての一考察	平成17年9月	〃	中川　洋子 副　林　剛一
	音楽科教育学	内藤　達俊	J. ポップスにおける男性の高音発声について −独学コピーや民間ボイストレーニングにおける高音発声の方法，その分析と実践−	平成18年3月	〃	村尾　忠廣
	音楽科内容学	鷹羽　綾子	(演奏) アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ変ホ長調 Op.22 (論文) ピアノ演奏技法の習得及び指導法の研究	〃	〃	武本　京子 副　小泉　恭子
	音楽科内容学	松田　弓	(演奏) ラフマニノフ作曲絵画的練習曲　Op.39　第5番変ホ短調・第3番嬰ヘ短調，Op.33　第7番変ホ長調・第8番ト短調 (論文) 定時制高等学校・指導困難校の生徒の音楽的ニーズ及び心的ニーズからアプローチした高校生の音楽活動の在り方とその活動がもたらす可能性	〃	〃	栗原　一身 副　新山王政和
	音楽科内容学	山本　理恵	(演奏) モーツァルト作曲「フィガロの結婚」よりスザンナのアリア2曲及び夫人・伯爵との重唱3曲 (論文) Melodyne2.6 によるピッチ・イントネーションの矯正 −モーツァルト作曲「フィガロの結婚」のスザンナのアリアの歌唱を中心として−	〃	〃	中川　洋子 副　林　剛一
	音楽科内容学	久保　智里	(演奏) Bach=Busoni Chaconne (論文) Gyorgy Kurtag のピアノ教育作品「遊び」についての一考察	〃	〃	隈本　浩明 副　滝澤　達子
	美術科教育学	翁　震	中国と日本の美術教育に関する比較研究 −小学校教科書の事例を通して−	平成17年9月	〃	藤江　充 副　礒部　洋司
	美術科内容学	佐原　理	(作品) The World (ミクストメディア) (論文) 情報教育におけるデザイン教育の重要性	〃	〃	野澤　博行 副　松本　昭彦
	美術科教育学	太田　美香	戦後デザイン教育の創成期に関する一考察 −造形教育センターの取り組みを中心に−	平成18年3月	〃	礒部　洋司 副　藤江　充
	美術科内容学	安藤麻衣子	(作品) けしき (論文) 八木一生について	〃	〃	黒澤　千春 副　中島　晴美
	美術科内容学	神谷　恵美	(作品) 陽 (論文) 蝋原型制作による鋳物の魅力	〃	〃	浅野　和生 副　遠藤　透
	美術科内容学	小林　礼	(作品) The Winning Tower (論文) 平面性と立体性	〃	〃	宇納　一公 副　樋口　一成
	美術科内容学	小室　匡毅	(作品) そらみたことか (論文) 群像表現の構図の研究	〃	〃	野澤　博行 副　松本　昭彦
	美術科内容学	酒向　絵美	(作品) Object (論文) アメリカン・スタジオ・グラス・ムーブメント	〃	〃	黒澤　千春 副　アイビー･ピーター
	美術科内容学	須賀美智子	(作品) 縁結び (論文) 小袖の文様	〃	〃	浅野　和生 副　安田　篤生
	美術科内容学	溜　久美子	(作品) あなたのおなかの卵の中 (論文) 幻想絵画における人体表現の扱い	〃	〃	野澤　博行 副　松本　昭彦

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏・作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
芸術教育	美術科内容学	近本まゆみ	（作品）マキアート （論文）日本近代陶芸史について	平成18年3月	修士（教育学）	黒澤　千春 副　中島　晴美
	美術科内容学	中村　優子	（作品）ガラス器 （論文）暮らし方に関する器のあり方	〃	〃	浅野　和生 副　ｱｲﾋﾞｰ･ﾋﾟｰﾀｰ
	美術科内容学	野々山祥可	（作品）ドライブ （論文）リジッドばたの特徴と可能性	〃	〃	黒澤　千春 副　安田　篤生
	美術科内容学	藤田　絢子	（作品）leafy shade （論文）銅版画用紙としての手漉き和紙	〃	〃	野澤　博行 副　松本　昭彦
保健体育	保健体育科教育学	小坂真貴子	小・中学生における走り幅跳びの動きの指導に関する研究	〃	〃	坂田　利弘 副　上原三十三
	保健体育科教育学	鈴木　健之	体育におけるインクルージョンの意義に関する検討 −車椅子を使用するＡ児の事例を通して−	〃	〃	吉田　正 副　森　勇示
	保健体育科教育学	鈴木智香子	体育授業におけるフィードバックの機能について 〜教師の記述的フィードバック「朱書き」に着目して〜	〃	〃	村松　常司 副　森　勇示
	保健体育科教育学	坂野　仁志	教科体育における学習者の内発的動機づけに関する研究	〃	〃	坂田　利弘 副　市野　聖治
	保健体育科内容学	小山田早織	大学生女子熟練泳者及び一般学生のけのび動作と前方牽引による受動的抵抗	〃	〃	合屋十四秋
	保健体育科内容学	鈴木真由美	引退離脱者と中途離脱者の心理的ストレス比較 〜スポーツにおける有能感と志向性から〜	〃	〃	筒井清次郎
	保健体育科内容学	中村　和誉	腓腹筋の異なる部位での適応変化	〃	〃	春日　規克 副　鈴木　英樹
	保健体育科内容学	柱谷　彰則	水球ゲーム時のシュートの構造分析　〜日本学生選手権，日本選手権，世界選手権のゲーム分析から〜	〃	〃	合屋十四秋
	保健体育科内容学	渡邉　一博	通常の学校・学級における特別なニーズ教育に関する検討	〃	〃	松井　利幸 副　高橋　裕子
家政教育	家庭科内容学	金　銀姫	中国と日本の郷土料理の違いから学ぶ食の工夫	〃	〃	西村　敬子
	家庭科内容学	金　香蘭	中国の乳製品の活用について	〃	〃	西村　敬子
	家庭科内容学	蔡　於今	高齢者を含む世帯の居住水準に関する研究	〃	〃	小川　正光
	家庭科内容学	佐藤　裕子	「食」と社会階層に関する研究−高校生に対する「食生活と家族関係」についての調査から−	〃	〃	小川　正光 副　山根　真理
	家庭科内容学	遠山　雅乃	ミシンで作る浴衣教材 −立体構成の手法を取り入れて−	〃	〃	加藤　祥子
	家庭科内容学	山田　真希	中小企業の子育て支援に関する研究 −愛知県内の製造業における調査を中心に−	〃	〃	小川　正光 副　山根　真理
技術教育	技術科内容学	青山　陽介	プラズマアシストCVDによる，3C-SiC/Siヘテロエピタキシャル成長におけるプロパンの効果	〃	〃	清水　秀已

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏･作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
技術教育	技術科内容学	大井　雅夫	中学生における木材加工技能に関する研究	平成18年3月	修士(教育学)	橘田　紘洋 副　大西　研治
	技術科内容学	荻野　純一	竹材の熱分解特性に関する研究	〃	〃	橘田　紘洋
	技術科内容学	望月　　壮	フィラメントアシストCVD装置によるカーボン薄膜作製及び作製時膜厚計測に関する研究	〃	〃	清水　秀己
	技術科内容学	劉　　香子	プレス金型のプラスチック化に関する研究	〃	〃	加藤　正義
養護教育	養護教育学	江嵜　和子	不定愁訴を訴える児童を対象とした保健室来室記録に関する研究	〃	〃	古田　真司
	養護教育学	遠藤さとえ	養護実習におけるWebサイトの活用に関する研究	〃	〃	後藤ひとみ
	養護教育学	岡本　陽子	養護教諭の職務遂行に関わる自己評価能力の分析	〃	〃	後藤ひとみ
	養護教育学	水野　昌子	看護基礎教育課程におけるセクシュアリティに関する教育の検討	〃	〃	野村　和雄 副　福田　博美
	養護教育学	三輪　祐子	「遊び体験」,「コミュニケーション能力」,「友人関係」の関連の実証研究	〃	〃	野村　和雄
学校教育臨床	学校教育臨床	近藤　憲司	不登校生徒の箱庭作品に対する経験者群と初心者群の見方の差に関する研究 −注目された玩具の比較及びPAC分析を通して−	平成17年9月	〃	生島　博之
	学校教育臨床	戸田　久子	児童養護施設で育つ子どもの不適応行動に関する一考察	〃	〃	折出　健二 副　佐藤　勝利
	学校教育臨床	山本　智子	交互色彩分割法の描線特徴について −施設入所児童の対人関係を視点として−	〃	〃	岸　　良範 副　齋藤　　眞
	学校教育臨床	安藤めぐみ	遊戯療法における「対戦遊び」の意義について −前思春期男児へのセラピストの関わりを通して−	平成18年3月	〃	生島　博之
	学校教育臨床	磯村美有紀	関わりのとりにくい子どもとの遊戯療法における治療関係形成に関する一考察　−治療者の逆転移感情と象徴的な遊びの共有を手がかりとして−	〃	〃	生島　博之 副　齋藤　　眞
	学校教育臨床	大原　紀江	ネガティブな感情の受容と心理的健康との関連	〃	〃	下村　美刈
	学校教育臨床	小林　由佳	兄弟で場面緘黙を呈した一卵性双生児の弟の自己対象ニードについて	〃	〃	岸　　良範
	学校教育臨床	佐々木あつ子	青年期における対人不安の形成過程とそのアイデンティティ獲得にもたらす影響	〃	〃	佐藤　勝利
	学校教育臨床	中村　友美	遊戯療法場面における嘘の意味について −友達との関係がうまくもてない小4女児の遊戯療法過程の分析−	〃	〃	生島　博之
	学校教育臨床	中村　梨恵	母子分離不安を呈する不登校児の脱錯覚過程 −プレイセラピーを中心とした分析−	〃	〃	生島　博之 副　齋藤　　眞
	学校教育臨床	西岡　慶樹	小学校における社会的スキル訓練の臨床的研究 −セルフモニタリング・フェイズを取り入れたSSTの検討−	〃	〃	佐藤　勝利 副　坂井　　誠

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏･作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
学校教育臨床	学校教育臨床	本間　貴宣	在宅成人身体障害者の他者依存症，ソーシャルサポート認知，ストレス反応の関連性	平成18年3月	修士(教育学)	佐藤　勝利
	学校教育臨床	花井　博	デートDVに対する意識と性役割観の関連について	〃	〃	下村　美刈
	学校教育臨床	宮田　延実	親友形成度が小学生リーダーのストレスに及ぼす影響についての一考察	〃	〃	折出　健二 副　佐藤　勝利
	学校教育臨床	山田　宏	善導の夢についての臨床心理学的考察	〃	〃	岸　良範

5　教務関係

(1) 大学院教育学研究科開設科目と修了に必要な単位数

以下のとおりである。

<table>
<tr><th colspan="2">開設科目
所属専攻</th><th colspan="5">学校教育専攻科目</th><th colspan="2">教科教育専攻科目</th><th>障害児教育専攻科目</th><th>養護教育専攻科目</th><th>学校教育臨床専攻科目</th><th>特別研究科目</th><th>自由選択科目</th><th>合計</th></tr>
<tr><th></th><th></th><th>教育分野科学</th><th>教育心理学分野</th><th>幼児教育分野</th><th>生活科教育分野</th><th>総合教育開発分野</th><th>教科教育学に関する科目</th><th>教科内容学に関する科目</th><th></th><th></th><th></th><th></th><th></th><th></th></tr>
<tr><td rowspan="5">学校教育専攻</td><td>教育学分野</td><td>12
(4)
※注</td><td>2</td><td></td><td></td><td>2</td><td rowspan="5">4</td><td rowspan="5"></td><td rowspan="5"></td><td rowspan="5"></td><td rowspan="5"></td><td rowspan="5">4</td><td rowspan="5">6</td><td rowspan="5">30</td></tr>
<tr><td>教育心理学分野</td><td>2</td><td>12</td><td></td><td></td><td>2</td></tr>
<tr><td>幼児教育分野</td><td colspan="2">4
(両分野にわたり履修)</td><td>10</td><td></td><td>2</td></tr>
<tr><td>生活科教育分野</td><td colspan="2">4
(両分野にわたり履修)</td><td></td><td>10</td><td>2</td></tr>
<tr><td>総合教育開発分野</td><td colspan="2">4
(両分野にわたり履修)</td><td></td><td></td><td>12
(4)
※注</td></tr>
<tr><td rowspan="2">教科教育専攻</td><td>教科教育学領域</td><td colspan="5" rowspan="2">4
(両分野にわたり履修)</td><td>10</td><td>4</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>教科内容学領域</td><td>6</td><td>8</td></tr>
<tr><td colspan="2">障害児教育専攻</td><td colspan="5">4
(両分野にわたり履修)</td><td>2</td><td rowspan="2">4</td><td></td><td>10</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">養護教育専攻</td><td colspan="5">4
(両分野にわたり履修)</td><td>2</td><td></td><td></td><td>10</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">学校教育臨床専攻</td><td colspan="5">4
(両分野にわたり履修)</td><td>2</td><td></td><td></td><td></td><td>14</td></tr>
</table>

※注：12単位中の4単位は，所属分野の他の領域で開設する科目から履修する。

(2) 教育評価・単位認定

学位論文等の指導・助言を行う指導教員を専攻に属する教員から定めている。学期を前期，後期の２学期に区分し，各授業科目の授業は原則として15週にわたる期間を単位として行っている。昼間開講コースは学部と同じく原則として月曜日から金曜日までの各４時限（水曜日は２時限）で実施し，昼夜開講コースは火・水・金曜日の夜間各２時限と土曜日４時限とで実施している。他に集中講義の形をとるものもある。

平成17年度に予定された授業数は昼間開講で441，夜間開講で253であり，このうち名古屋市内に夜間開設しているサテライトキャンパスにおける予定授業数は16であった。このほか，土曜日開講は27，集中講義は66であった。なお，サテライトキャンパスは附属名古屋中学校（名古屋市東区）において開設している。

(3) 成績評価・単位認定，学位の授与

教育学研究科の成績評価・単位認定の在り方・基準については，教育学研究科に特に定めがなく，教育学部に準じている。大学院規程第34条によって，教育学研究科独自に定めるもののほかは学則を準用するとされている。

修士の学位は，学位規程により，「教育学研究科に２年以上在学し，所定の単位を修得し，学位論文審査及び最終試験に合格した者に授与する。」と規定されている。

本学教育学研究科としての学位授与の方針と方法は，学位論文審査手続要領に定められている。学生は，最初に指導教員の指導を得て修了予定年度の９月30日までに学位論文題目申告書を提出し，２月10日正午までに論文を提出する。なお，学生の諸事情により９月に修了することも可能であり，この場合は，５月20日までに学位論文題目申告書を提出し，７月31日正午までに論文を提出することになっている。指導教員は，学位論文審査及び最終試験委員の候補者を当該専攻内の教員から指導教員（主査）を含め３名以上選出し，運営委員会の承認を得たうえで審査に当たる。これを経て，学位論文の審査及び最終試験の結果は教授会に報告され，学位授与の可否を審議決定される。

(4) 教育職員免許状の取得

小学校，中学校，高等学校，幼稚園，養護学校又は養護教諭１種免許状の所要資格を有する者で，大学がそれぞれ当該免許状に必要と定めた科目から24単位以上を修得することにより専修免許状が取得できる。

平成17年度修了者のうち，大学から一括申請で取得した免許取得状況は次のとおりである。

○９月修了者

・申請者なし

○３月修了者

・小学校教諭専修免許状　　34件
・中学校教諭専修免許状　　61件
・高等学校教諭専修免許状　69件
・幼稚園教諭専修免許状　　３件
・養護学校教諭専修免許状　０件
・養護教諭専修免許状　　１件

第３節　ファカルティ・ディベロップメント活動

１　新採用職員研修会

新採用職員に対し，研修を行った。採用教育職員・事務職員の参加者は19人であった。なお，その内容は以下のとおりである。

(1) 実施要領

① 目　的

新採用職員に対し，研修として大学等における教育研究のあり方，本学の諸課題等について説明し，その職務の遂行に必要な基本的事項を修得させ，大学運営の理解を深めさせることを目的とする。

② 対　象

・平成16年７月２日から平成17年４月１日までの間に採用された教育職員
・平成16年７月２日から平成17年４月１日までの間に採用された事務職員等
・平成17年４月１日に採用された附属学校・園の教育職員のうち希望する者
・その他特に希望する者

③ 日　時

平成17年４月７日（木）　13：30～17：00

④ 場　所

愛知教育大学本部　第三会議室

⑤ 研修日程及び内容

13：30～13：35　開会挨拶
13：35～13：40　研修日程等説明
13：40～14：00　愛知教育大学の現状と課題（学長）
14：00～14：45　法人化で大学はどう変わるか？（理事（学術総務担当））
休　　憩
15：00～15：30　本学のカリキュラムと授業運営（理事（教務企画担当））
15：30～16：00　学生支援等（理事（学生支援担当））
16：00～16：30　国立大学法人の当面の課題（事務局長）
16：30～17：00　附属学校（附属学校部長）
17：15～18：00　懇談会（生協）

(2) 配付資料

① 国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会報告書
② 本学のめざす教員養成の在り方
③ 小学校教員免許状取得コースの受講案内
④ 学部と大学院の連携による６年一貫教員養成コースの設置
⑤ 愛知教育大学の改革の基本構想
⑥ 教員分野に係る大学等の設置又は収容定員増に関する抑制方針の取扱いについて
⑦ 愛知県における公立学校教員採用数予想数
⑧ 法人化後の本学の課題
⑨ Campus Now
⑩ 愛知教育大学概要2004
⑪ 愛知教育大学案内2005

⑫　愛知教育大学憲章制定の歩み
⑬　新採用教育職員等研修会資料（教務関係）
⑭　履修の手引（平成17年度）
⑮　教育学研究科学生便覧（平成17年度）
⑯　新採用教育職員等研修会資料（学生支援関係）
⑰　新採用教育職員等研修会資料（入試関係）
⑱　国立大学法人の仕組みの概要
⑲　本学の教育研究体制と改革の進行状況（附属学校園）

2　語学教育シンポジウム

本年度は，教育創造センターの主催によるシンポジウムを開催した。当日の参加者は30名であり，その内容は以下のとおりであった。

(1) 実施要領

①目　的

教員の教育内容及び授業方法の改善のために，本学の理念・目的に沿って学生の学習意欲を喚起するような「より質の高い教育の提供」と「自己の教授能力の向上」をめざすことを目的とする。

②対　象

本学全教員・全学生

③日　時

平成17年12月８日（木）　16時40分～18時40分

④場　所

大学　第一共通棟203講義室

⑤内　容

●パネリストからの報告

・初習外国語に関するアンケート調査結果から（南　守夫教授）

・英語教育の実践から（中川ジェーン助教授）

・小学校英語教育について（杉浦正好教授）

●パネルディスカッション

3　授業改善と学習支援の報告会

本年度は，教育創造センターの主催による授業改善のためのアンケートの実施に伴う報告会を開催した。当日の参加者は55名であり，その内容は以下のとおりであった。

(1) 実施要領

①目　的

教員の教育内容及び授業方法の改善のために，本学の理念・目的に沿って学生の学習意欲を喚起するような「より質の高い教育の提供」と「自己の教授能力の向上」をめざすことを目的とする。

②対　象

本学全教員

③日　時

平成18年２月22日（水）　13時30分～17時

④場　所

大学　第二共通棟431講義室

⑤内　容

●「授業改善のためのアンケート」から見えてくること（佐藤洋一主任研究員）

●教員による自己評価について（佐藤洋一主任研究員）

●「『生活と学びの支援』のための調査」（試行）から見えてくること（藤井啓之研究員）

●授業改善実践とITによる学習支援（竹田尚彦研究員）

第 2 章　研究活動

第 2 章　研究活動

第 1 節　講座の概要

生活科教育講座

本講座に所属する教員は 4 名（教授 2 名，助教授 2 名）で，本学においては最小講座である。本学は，生活科が全面実施された平成 4 年には，学内定員の振り替えで教授 1 名を，さらに平成 9 年からは，純増（全国初）で助教授 1 名を採用し，生活科教育の充実に努めてきた。平成12年の改組により，教員定員 4 名の生活科教育講座が，全国で初めて設置された。しかしながら，未だに学部に学生をもっていないのが大きな課題である。ぜひ，早急に学部に学生定員を付ける措置を講じてほしい。

また，大学院教育学研究科学校教育専攻生活科教育分野を平成14年度から開設した。これは全国唯一である。平成17年度は13名の院生であった。修了生（14条修士 1 名を除く） 4 名は，愛知県・名古屋市の教員採用試験に全員合格した。平成18年度入試で，新たに 5 名が入学することが決まり，平成18年度も13名となり，充実・発展に努めている。

本講座の研究は，教育現場に根ざした立場で進められている。各教員が県内外の幼稚園，小・中学校，教育センターなどと連携しながら研究を進めている。その成果を，著書，論文，口頭発表などで広めてきている。とりわけ，平成16・17年度は，愛知県総合教育センターと連携し，法制化された10年経験者研修で「生活科」を選択した教師への研修を講座で全面的に引き受け，夏休みに 4 日間大学にて実施した。また，近隣の刈谷市教育研究会生活科部会の授業研究会（ 6 月23日，刈谷市立平成小学校にて）には，事前の学習指導案検討会を含めて， 3 名の教員と10名の院生が参加した。

また，教育面では，実際の授業を見学したり，自然観察実習園などを活用して体験的に教材を理解させたりしながら，常に子どもの姿をイメージさせることを大切にした授業を行っている。これらは学生からも大変好評である。

障害児教育講座

教員組織は，教授 4 （内，学長補佐 1 名含む），助教授 3 ，講師 1 の計 8 名である。専門分野は，知的障害教育 2 名，聴覚言語障害教育 2 名，肢体不自由教育 2 名，社会福祉 2 名である。このうち，社会福祉を除く 6 名が主として障害児教育教員養成課程の学生の教育を担当し，社会福祉 2 名が生涯教育課程共生社会コース人間関係履修モデルの中で社会福祉を専攻する学生の教育をそれぞれ担当している。さらに，これらの学生の教育には，本学附属障害児治療教育センターに所属する教員 2 名の協力を得ている。なお，今年度をもち肢体不自由教育担当の教授 1 名が定年退職となり，次年度より新たに講師を補充することとなった。

障害児教育教員養成課程は，養護学校教諭免許状が取得できる知的障害教育コースと肢体不自由教育コース，聾学校教諭免許状が取得できる聴覚言語障害教育コースがあり，学生定員は 1 学年あたり25名であるが，各学年ともに25名以上が在籍している。

カリキュラムは，障害児教育の潮流を考慮して，重度障害や軽度発達障害の講義も行うように努め，臨床実地研究等を含め実践的指導力を重視した内容となるように配慮されている。本学には，学部の教員養成課程の他に， 1 年間の課程として特殊教育特別専攻科（知的障害教育専攻）と臨時教員養成課程（ 1 年課程：肢体不自由教育教員養成課程，情緒障害教育教員養成課程）の 3 つの課程が設置されている。これらの課程には，愛知県教育委員会，名古屋市教育委員会から派遣された現職教員も在籍している。

生涯教育課程共生社会人間関係履修モデルでは，社会福祉士の受験資格と高校福祉免許状が取得

できるようにカリキュラムが構成されている。学生の教育にあたっては，福祉現場との連携に努め，施設実習等を重視している。

教員は，地域社会との連携を重視した発達支援活動を積極的に行っており，週例で臨床動作法による小グループ訓練会，また言語障害・学習障害等の臨床活動も来談者のニーズに応じて相談活動を継続して行っている。加えて，比較的重度な自閉症児や脳性まひ児などを対象とした臨床動作法による訓練会，軽度発達障害児を対象とした学習支援プログラムが月例で大規模に行われている。また夏季には臨床動作法の宿泊訓練（研修）会も行われており，障害のある子どもへの発達支援だけでなく，保護者のグループ支援，学生・現職教員の実践的な研修の場でもあり，愛知県全体における発達支援活動の大きな拠点ともなっている。

また，地域の障害児相談会の相談員や各地区の就学指導委員として専門家の立場からも貢献している。本年度からは刈谷市教育委員会と連携し，刈谷市の全小中学校の特殊学級に学習支援ボランティアとして障害児教育専攻の学生を派遣し地域貢献を行っている。さらに，養護学校等の学校評議員として，それらの学校の教育等に関する助言者としての貢献も行っている。

障害を有する学生への特別支援として，主として障害児教育教員養成課程に在籍している重度の障害学生４名（聴覚障害３名と下肢障害１名）を支援するために本講座内に障害学生支援委員会を設置し，障害学生のニーズに対応するとともに関係部局への要望窓口となっている。

幼児教育講座

幼児教育講座は５名の教員，すなわち，幼児教育学１名，幼児心理学（発達心理学）１名，保育内容学２名，児童福祉・障害児保育の研究分野１名の構成になっている。

幼児教育は，その専門の性質から研究分野は広く多岐にわたる。主に幼児期の教育を研究対象としつつ，それぞれの専門において，地域の幼稚園や保育所，さまざまな保育の場，児童福祉の施設と関わりをもちつつ，実践的にまた臨床的に研究・教育をすすめている。専門が分かれることから，講座の構成員がそれぞれに研究をすすめ，その成果を学生の教育や実践の現場に生かし反映してゆくことを目指している。

幼児教育学の新井助教授は，「より良い保育実践を支えるための保育の諸条件」の研究を，保育者への意識調査を中心にすすめる一方，幼保・小学校の連携に関連して，「幼児の発達過程と保育内容の構成について」の研究を継続して行っている。発達心理学分野の山口助教授は，親になるのはどういうことかという親の発達心理学というテーマに継続的にとりくんでいる。また，友達との関係性のなかで，幼児の自己意識，自己概念がどのように成立するかといった自己形成過程の研究をすすめている。福祉・障害児保育分野を専門とする小川教授は，保育所・幼稚園の先生方と一緒に研究をすすめ，自閉症や軽度発達障害などの「気になる子ども」の事例分析や保育観察を行い，統合保育のあり方，子どもたちの指導援助のあり方を研究して，今日的な保育の課題の解決に応えようとしている。また，親支援についての考察を始めている。村岡教授は，幼児の遊びや生活習慣についての指導・援助のあり方をフィールド・ワーク的手法を用いて追究し，保育実践力の育成や向上に資するよう体系化することを試みている。梅澤教授は，「幼児の音楽的・リズム的表現の様態」を幼稚園の遊び場面での自発的な様々な表現のなかで捉え，また，いくつか実験的実践の試みのなかで，幼児教育の音楽的な表現の特徴と，その指導についての示唆を得ようとしている。

本講座では，それぞれが地域の保育の現場に入り，幼稚園教員・保育士の研修に加わり研究をすすめ，社会的な役割を果たしてきている。そのことと並び，教育面で，実習や授業の枠外に機会をつくり，学生が幼稚園・保育所・児童養護施設に赴くことをすすめサポートしてきている。地域の諸施設（刈谷市・豊田市・岡崎市）との連携は，講座の教育・研究の重要な基礎的な部分として今後も推進してゆきたい。また，学生の自主的学習や研究を兼ね，地域の幼児教育や保育のヴォランテイアとして継続して幼稚園・保育所に貢献している面もあり，一定の繋がりがつくられてきた。

今年度，愛知県下の全保育士養成校による協議会の監事校として，特に「実習連絡協議会」において，児童福祉の小川教授中心に，施設実習の実施調整の任務を果たすことができた。基盤となる不可欠な教育的社会的活動として，記しておいてよいことであろう。

近年の社会的な要請や保育・幼児教育を巡る情勢の変化も加速し，幼児教育の課題は広がってきている。大学院における教育研究にも，そのことが反映してきているが，直進の院生と並び，既に保育者養成に携わっている教員の院生や，キャリアのある現職院生の研究指導に応え，また，持続的な研究をサポートしていけるよう，講座の運営は多忙を極めているが，教育研究をすすめてきている。

他講座の教員の継続的な協力を受けつつ教育を行っており，また，生活科教育講座の先生と供に，附属幼稚園の研究協議に協力している。講座単位での研究は現在おこなっていないが，理論と実践を繋げる幼児教育の基礎的研究の積み重ねの一方，関連講座との協力連携を得，研究教育を推進していくことを今後本講座の課題としたい。

養護教育講座

養護教育講座の教員定員は10名（現在欠員１名）で，専門分野は養護教育学，看護学，学校保健，微生物学，環境保健学，精神保健，公衆衛生学，健康管理学，生理学，内科学，栄養学などであり，教員はそれぞれ独自の研究分野を持っている。

養護教育講座の研究組織としての理念であり，目標としていることは，教員それぞれの研究分野での研究成果及び講座としての共同研究の成果を，養護教諭養成課程や大学院養護教育専攻の学生の教育・研究に反映させること，あるいは，学校保健関係の学会や研究会への貢献，現場の養護教諭の研究指導，地域への貢献，教科書の執筆等に反映させることである。

教員それぞれの分野での研究例を示すと次のようになる。

養護教育学，学校保健分野では「養護教諭の研究能力に関する研究」，「通常の学級にいる障害・病気等を持った子どもへの支援」等，看護学分野では「教育学部養護教諭養成の看護学授業」，「心身に障害を持つ人を学生が理解するための看護・教育学的研究」等，微生物・環境保健学分野では「青少年の健康意識・行動と歯科保健行動」，「フッ素導入と養護教諭の執務」等，精神保健分野では「不適応障害に対する臨床心理学的観点からのストレスマネジメント」等，健康管理学分野では「女性や児童・生徒のライフスタイルと不定愁訴について」等，生理学分野では「情動とシナプスの可塑的変化に関する研究」等について研究している。

また，2004年度から重点教育研究費（学長裁量経費）で採択された，講座全教員，附属学校養護教諭及び教育委員会メンバーによる「教育委員会等との連携による養護教諭養成の充実策の検討」の研究プロジェクトの結果をまとめた。

以上のように，養護教諭や養護教育に直接かかわる研究から，基礎的研究まで幅広く研究が行われ，養護教諭養成教育に貢献している。

学校教育講座

本講座は，30名の教員定員を持つ研究組織であるが，2006年度現在で欠員が３名あり，27名の教員で運営しております。教員組織は，大きく教育学系と心理学系の２つから構成されている。教育学系では，教育哲学・教育史・教育方法学・生活指導学・教育制度学・教育社会学・社会教育学・職業指導・進路指導・学校図書館学の各分野が，また心理学系では教育心理学・発達心理学・臨床心理学の各分野があり，学校教育を含めて，教育に関する幅広い研究分野をカバーしている。

いま急速に時代が変化する中，社会状況が大きく変わってきている。とりわけ教育をとりまく環境はますます複雑化し，解決されなければならない課題が山積している。本講座では，学校教育を中心にすえつつも，社会教育・家庭教育・生涯教育をも視野に入れた広汎な教育事象や，児童・生

徒から青年・成人期までの人間の発達・学習を巡る諸問題について，多面的かつ総合的に追求することによって，学校やその他の教育現場，地域の期待と要請に応えるべく，教育・研究を展開している。

所属教員の専門領域は多岐にわたっており，講座全体としての特定のテーマによる研究は行っていないが，それぞれの教員が積極的に研究・研究活動を行い，学校での現職教育や認定講習などを通して，専門性を生かしながら教育界や地域社会に貢献している。2005年度の研究費の交付状況は，代表者となっている件数のみを挙げると，科学研究費補助金は３件（基盤研究（c）１件，若手研究（B）２件），教育改善推進費（学長裁量経費）のプロジェクトは１件の採択を受けている。

本講座は，学部教育においては教育科学専攻学生及び共生社会コース学生の専門教育のほかに教員養成課程の「教職に関する科目」を担当するほか，「社会教育主事」基礎資格関連科目及び「得意分野を持つ個性豊かな教員」の養成の一環として「学校図書館司書教諭」の資格取得にも責任を負っている。また，最近では国の施策である食育と関連しての「栄養教諭免許法認定講習」に関わっている。さらに，関連の諸講座と連携して「学芸員」資格の取得にかかわる授業を担当している。

大学院教育については，学校教育専攻，学校教育臨床専攻及び学校教育専攻総合教育開発分野国際理解教育領域の専任あるいは兼担として，専攻の授業運営や，充実に寄与している。さらに，現職教員の要求に応じた実践的で臨床的な教育研究を推進できるよう，関連講座や教育実践総合センターとの協力態勢を整え，積極的にサポートしている。

教育臨床学講座

本講座は大学院学校教育臨床専攻（臨床心理学コース）の主幹講座であり，現職教員のリカレント教育ならびにスクールカウンセラーを中心とする臨床心理士養成を任務としている。そのために，その活動・運営は学校教育臨床専攻と一体であり，学校教育臨床専攻の沿革及び活動内容を述べることで，教育臨床学講座の概要としたい。

その沿革については，従来，本学では，臨床心理士の養成は，大学院教育学研究科の学校教育専攻（発達・臨床心理学専修）及び障害児教育専攻（人間関係専修）の二つのコースが負ってきた。すでに平成12年度までに，学部・専攻科等の卒業者を含めて87名の臨床心理士を世に送り出してきた。　しかしながら，指定大学院制の発足に伴って，臨床心理士養成コースをひとつに絞り込む必要が生じた。折しも，不登校や「いじめ」の問題，退学，怠学やアパシーの問題，さらにはいわゆる「学級崩壊」等々の学校教育を巡る子どもたちの問題が深刻化する中で，教員養成系大学には，これらの問題の実践的な研究とそれに適切に対応できる人材の養成が求められていた。

そこで本学では，平成９年度に教育実践総合センターを立ち上げ，同年９月には同センター内に心理教育相談室を開設し，相談活動を開始した。以来，この心理教育相談室の活動は，本学の臨床研究と臨床実践の中心となり，学内の臨床系教員を臨床心理士の養成に向けて結集させる契機となった。学校教育臨床専攻発足後は，学生の実習，教員の実践研究の場となっている。

本学における大学院学校教育臨床専攻（臨床心理学コース）は，このような背景のもとに，スクールカウンセラーをはじめとする教育臨床の専門家（臨床心理士）の養成を目途に，平成12年度に新設され，同時に教育臨床学講座は発足した。そして平成14年度に学校教育臨床専攻は日本臨床心理士資格認定協会の第１種指定を受け，現職教員等が（在職のままで）臨床心理士受験資格を取得し得る数少ない大学院の１つとなった。本専攻は学部に基礎をもたない独立専攻大学院であり，当初は夜間専攻大学院として出発した。しかし，学内外のニーズに鑑み，平成14年度からは昼夜開講の大学院として充実を図ることになり，現在に至っている。なお，本専攻発足以前とその後のにおける臨床心理士の合格者数は平成17年度まで150名を超えている。

国語教育講座

本講座は，国語科教育学・国文学・国語学・中国哲学・中国文学・書写書道・国際理解教育等の多様な教育研究分野の教員19名によって構成されている。講座としての目標は，基本的にはこれら各分野における学問研究を修めるとともに，これらを基盤とした理論的，歴史的，実践的な国語教育・国際理解教育に関わる研究と教育とを深めることである。国語教育は，思考と認識，想像力と創造力等の根幹を成す言語能力の育成に関わるという意味で，小・中・高校における全教科の基礎・基本ともいうべき学問・教育領域である。また今日，学校教育に求められている「生きる力」を培うための必須領域として，「総合的な学習の時間」「発展学習」等を支え，生かしていくための中核的役割を担っているということができる。講座の所属教員は，教員養成課程と国際理解教育課程の二課程にまたがっているが，それぞれの課程に所属する学生への教育には，講座全体としてできる限り協力体制をとることを原則として対処している。当然のことながら，研究・教育におけるそれぞれの課程の特色を生かしていくことを前提としてはいるが，卒業研究の内容によっては課程を超えての指導が受けられるようにするなど，学生の希望を最大限に受け入れるべく，講座全体で努力を重ねている。

日本語教育講座

国際化が進む現代社会にあって，日本及び海外で日本語教育の必要性がますます高まっている。本講座は，主に以下の五つの分野を柱として，広く国際理解教育も視野に入れた教育・研究をめざしている。

(1) 言語一般：言語の類型と普遍性，日本語と他の言語との対照研究，日本語の音声・音韻，語彙・意味，文法，表記など，日本語の構造に関する体系的な研究。
(2) 言語と教育：外国語として日本語を教えるための教授法の研究。
(3) 言語と文化：世界と日本の文化，異文化間接触（留学生教育，児童生徒の文化間移動等）の研究。
(4) 言語と社会：地域・世代・性などによる言語変異や言語政策など，社会との関わりにおける言語の研究。
(5) 言語と心理：言語発達やバイリンガリズムなどの研究。

現在の本講座の具体的な目標及び課題は以下のとおりである。

1．日本語教育において，上記五つの分野の知識が有機的に活用できるような人材の育成及びその方法論を研究する。
2．現在，日本語教育コースの卒業生は広く国内外で日本語を教える職に就いて活躍しているが，今後もさらにこれを発展させ世界の日本語教育に貢献できるようにする。そのために海外の日本語教育機関との交流，連携を推進する。
3．日本語の教育実習の場を拡大する。現在，日本語の教育実習は正規の授業としては学内の留学生を対象としたものが中心だが，一部の学生は夏休み，春休み等を利用して，タイ，中国，アメリカ等の学術交流協定校や日本語教育機関に自主的に実習に出かけている。今後はこれをさらに多くの国で実施できるように交渉する。海外での実習は2005年度から単位認定がなされることになった。
4．地域との連携を深める。日本語教育コースの多くの学生が，この地域に住む外国人やその子弟に対する日本語教育にボランティアとして関わっている。この活動についても2005年度から単位認定がなされることになった。今後，特に小中学校における外国籍児童生徒の日本語教育について，地域との連携の上で緊急の課題として取り組む必要があると考える。

5．日本，世界に向けての情報発信。日本語教育コースの特色，目的を広く世界に紹介し，この分野への理解を深めるとともに，優秀な人材の確保に努める。方法としては，ホームページの充実などが考えられる。

社会科教育講座

本講座は，社会科教育学，国際理解教育学，哲学，倫理学，歴史学，思想史学，比較文学など，多様な教育研究分野によって構成されている。教育組織としては，初等・中等教員養成課程の社会専攻の四専修（哲学・史学・地理学・法経社）と，国際理解教育課程の国際文化コースにまたがっている。

入試，卒業，予算，人事など，講座単位で行われる活動以外は，おおむね専修単位で教育研究活動が行われている。

（哲学専修の活動）

教育活動としては教員養成課程の渡辺（日本近代思想），渋谷（ヨーロッパ中世哲学），舩尾（社会科教育，ドイツ教育思想），中野（生活科教育，アメリカ教育思想），吉田（ヨーロッパ近代哲学），国際文化コースの大澤（英米哲学），前田（日本思想史）が協力して学生指導にあたっている。近年は卒論研究のみならず，教員採用に向けての指導にも力を入れている。

研究活動としては各自が自立した研究者として自身の専門領域を深めるのは当然であるが，院生の修士論文指導にもまた，本学の研究水準を高めるという視点において尽力している。年１回の愛知教育大学哲学会を開催し（８月に開催することが通例），『哲学と教育』という機関誌を発行することで，卒業生も含めた教育研究の充実にもまた目を向けている。

専修内のさまざまな管理運営上の役割についてはローテーションと適性を鑑みて，分担するようにしている。

（史学専修の活動）

教育活動としては，教員養成課程の目黒（中国近代史），西宮（日本古代史），黒川（ロシア史），土屋（社会科教育）と国際文化コースの見崎（フランス近代史），松島（日本中世史）が協力して，学生の指導にあたっている。

研究活動としては，各自が論文を執筆し，それぞれ専門の研究を深化させることが第一である。教育活動とも関わるが，年一回の愛知教育大学歴史学会を開催し，歴史研究や社会科教育実践の報告などと，講演の二本立てで行っている。また，『歴史研究』を年一回発行し，卒業生を中心とする会員とともに関係機関に配布し，研究及び教育の研鑽に努めている。

専修内での役割については，それぞれローテーションで分担を決め，加重負担にならないようにし，職務を遂行している。

地域社会システム講座

１　理念・目標

本講座は，急激に変動する21世紀の現代社会・国際社会と地理的環境を，体系的に有機的に「地域社会システム」として捉え，社会科学的・地理学的・民俗学的視点から，今後益々必要とされる社会調査，フィールドワーク，計量的解析の実験的手法を用いて，教育研究を行うことを目標とする大講座である。

この教育分野は，(a) 現代社会の政治，法律，経済，人間社会，(b) 国際理解教育としての国際政治，国際人権法・比較法，国際経済，比較社会・コミュニケーション，(c) 地理学・国内外の地誌，環境教育，民俗学である。教育の運営面においては，全学的共通科目，教員養成課程の社会科の専門科目と国際理解教育課程（国際文化コース）の専門科目等を担当し，その学生指導に当たる。

本講座の研究の目標は，社会諸科学，地理学，民俗学の隣接科学が学際的に大講座を形成することによって，その研究対象を体系的・多角的に研究すること，更にまた，実験的実証的研究手法を駆使することによって，激動する21世紀の現代社会・国際社会と地理的環境の事象を動態的実証的に分析研究することである。

2　定員と現員（平成17年度）

当該講座の定員は15名（教授 8 名，助教授 7 名）であり，平成17年度の専門分野別の現員は，地理学（教授 2 名，助教授 1 名），法律学（教授 2 名），政治学（教授 2 名），経済学（教授 2 名，講師 1 名），社会学（助教授 3 名），民俗学（教授 1 名）の計14名（教授 9 名，助教授 4 名，講師 1 名）であった。

3　人事

当該講座定員は，平成15年 4 月 1 日より15名（教授 8 名，助教授 7 名）となっている。現員は以下の通り。

〔地域社会システム講座の定員と現員〕　（平成 18 年3月）

定員		現員			
教　授	助教授	専門分野	教　授	助教授	講　師
8　名	7　名	地　理　学	2	1	
		法　律　学	2		
		政　治　学	2		
		経　済　学	2		1
		社　会　学		3	
		民　俗　学	1		
15　名		14　名	9	4	1

4　講座教員の専門分野

〔教員の専門分野〕　（平成 18 年3月現在）

阿部　和俊	教　授	人文地理学，都市地理学	梅下　隆芳	教　授	経済学，経済政策，経済投資論
岩崎　公弥	教　授	人文地理学，歴史地理学	松岡　和人	教　授	経済学，国際金融論
伊藤　貴啓	助教授	人文地理学，農業地理学	水野　英雄	講　師	経済学，国際経済学
青嶋　　敏	教　授	民法，法社会学	石丸　　博	助教授	社会学，政治社会学
清田　雄治	教　授	公法学，憲法	足立　重和	助教授	社会学，環境社会学，社会調査論
近藤　潤三	教　授	政治学，ドイツ近代政治思想	中筋由紀子	助教授	社会学，比較社会，比較文化
渡辺　雅弘	教　授	政治学，ギリシャ政治思想	野地　恒有	教　授	民俗学，博物館学

外国語教育講座

本講座は，旧第一部外国語教室及び旧総合科学課程国際文化コースの英米文化選修とヨーロッパ文化選修の一部を統合して平成12年度から大講座として発足した。

本講座は研究面では，言語の理論的・実践的研究，文学研究，諸外国・地域の文化に関する多角的研究，及びこれらの研究を踏まえた上での外国語教育の研究を行なっている。教育面においては，中等教育教員養成課程英語専攻の学生（入学定員14名）及び国際理解教育課程国際文化コース欧米文化履修モデルの学生（受け入れ学生数50名）の専門科目を担当し，実践的で高い語学力と指導力を持ち，現代社会が直面している諸課題に対応できる複眼的で柔軟な思考力を持った，質の高い英

語教員及び国際理解教育を推進しうる人材の育成をめざしている。また，全学的には，共通科目の教育において，外国語科目及び英語コミュニケーションの担当講座として，外国語運用能力，異文化理解，学問の基礎能力の育成を図っている。さらに，大学院英語教育専攻（入学定員９名）の責任講座として，高度な実践的能力を備えた英語教員及び研究者の育成に努めている。

本講座の教員定員は24名（教授12名，助教授12名）であるが，平成17年度末の現員は22名（教授９名，助教授11名，講師２名）で２名の欠員がある。

数学教育講座

数学教育講座は，平成12年４月の組織改編時に計20名の陣容でスタートした。組織改編時の学内教員定員は21名とされているので，欠員１名を抱えていることになるが，これは今に至るまで解消されていない。平成17年４月に専任講師（確率論）１名が着任，同年６月に教授が死去，翌年３月に助手１名が他大学へ転出した。平成18年度４月に助手１名（数学教育学）が着任したので，平成18年度から現員16名，欠員５名の講座運営になっている。専門分野の内訳は，数学教育学５名，代数学２名，幾何学３名，解析学３名，確率論３名である。

本講座の担当学生数は，初等教育教員養成課程算数専攻37名，中等教育教員養成課程数学専攻14名，情報教育課程情報数学履修モデル30名の計81名と規定されていたが，平成18年度入学生からは初等教育教員養成課程算数専攻51名，中等教育教員養成課程数学専攻30名の計81名に変更された。学生現員は学年によって多少ばらつきがある。今年度学生数は以下の通りである。

	算数専攻	数学専攻	情報数学	計
平成14年度入学生	42	15	19	76
平成15年度入学生	38	15	33	86
平成16年度入学生	43	14	36	93
平成17年度入学生	42	16	37	95
平成18年度入学生	55	33	—	88

本講座は，論文発表や学会参加以外にも多岐にわたる研究活動や啓蒙活動を展開している。列挙すると，特色GPへの取り組み，各種教育実践研究会への参加と助言，公開講座の開講，合宿形式の授業研究会の開催，附属学校との連携，数学教育改善のための国際協力等である。これらのうちいくつかについて以下に述べる。

1　2005年度特色ある大学教育支援プログラムへの取り組み。

文部科学省が公募していた特色ある大学教育支援プログラムに数学・理科で共同申請した「科学教育出前授業等による学生自立支援」が採択された。この事業には「新城合宿」をテーマに数学教育講座の志水教授が主体的に関わっている。

2　公開講座の開催

平成17年度の公開講座

・小学校教員向け：「確かな学力を育てる，算数授業の創造」，（６月に２回）志水教授

・高校生，教員及び一般向け：「ケプラーからニュートンへ」，（８，９月に５回）渡邊教授

・高校生向け：「数学の問題はこうして作られる」（９，10月に５回）佐々木教授他４名

3　合宿形式での授業研究会の開催

本講座では過去20年以上継続して，新城市の小中学校における合宿形式の授業研究会を行ってきた。平成17年度も数学教育講座教員の指導のもと，大学院生・学部生が多数参加し授業研究を行った。

4　附属学校と連携した活動

教育実践総合センターと附属学校園との共同研究会に本講座教員数名が参加した。附属小中高等学校で行われる研究発表会に多数の教員が参加し，指導・助言を行った。

５　学校数学研究会

数学教育関係の教員は，毎月１回，三河地区の学校等を巡回して，２時間程度，現職教員の実践研究の指導と講演を行っている。

６　数学教育改善のための国際協力

国際協力機構（JICA）のプロジェクト「カンボジア理数科教科書策定支援計画」に複数の講座教員が参画し，カンボジアから来日した教育関係者と共同で，同国高等学校数学の新カリキュラム案を策定した。引き続き３年計画で，教科書執筆作業を支援している。

７　３年生向け卒業研究受講のためのガイダンス

３年生後期からゼミ配属されて卒業研究に取り組むが，このため各教員ごとの研究テーマやゼミ方針の紹介を行った。その後，お互いのコミュニケーションを図るため懇親会を催した（平成17年５月）。

情報教育講座

本講座は，2005年４月において，教授４名，助教授７名，講師２名，助手２名で構成されている。講座スタッフの研究領域は，教育工学，情報教育，情報処理，情報基礎，メディア開発，認知科学，計算機・ネットワークと多岐にわたっている。個人研究が中心であるが，教育現場と連携して，実践的な研究を行うケースも増えつつある。

教育においては，本講座は，情報教育課程に携わっている。数学教育講座と連携し，情報と数学の教師や，社会において情報科学の分野で活躍できる人材を育成している。

また本学では，入学者全員に対して情報リテラシ教育を行っている。2006年度からは高校で教科情報を受講した学生が入学してくるため，これまでの教育内容の刷新が求められている。本講座はこの教育の企画・運営等に関して，中心的な役割を果たしている。

さらに，本講座のスタッフは，各附属学校に導入されているコンピュータネットワークやシステムの保全や改良に大きく貢献している。

大学院に関しては，学校教育専攻総合教育分野情報教育領域と数学教育専攻教育内容学領域を担当し，それぞれ，情報教育，情報科学の分野の研究を行い，毎年，数名の修了生を送り出している。

理科教育講座

2005年度（平成17年度）の理科教育講座は，物理学領域８名，化学領域８名，生物学領域９名，地学領域８名，及び理科教育領域４名の５領域からなる教員数37名で構成された大講座である。講座の定員は41名であるが，2003年度定年を迎えた３名の教員補充が１名に，2004年度定年を迎えた２名の教員補充も１名にとどまったため，教員数の減少傾向が続いており，各専門領域での学生指導に支障をきたしつつある。このような状況ではあるが，各領域における教員の研究レベルは高く，科学研究費や各種団体からの研究交付金の受給者も多く，国際的に活躍している研究者が多数在籍している。また教育大学特有の研究費に恵まれない状況の下でも特許申請もなされている。高度な専門的知識を評価されて，教育関係のみならず各種公共団体等の専門委員として社会的活動にも貢献している。本講座は，初等教育教員養成課程の自然系理科専攻と中等教員養成課程の理科専攻，及び環境教育課程の学生数140名の教育を担当しており，それぞれの課程に沿ったカリキュラムの充実を図っている。また，卒業研究では高度な研究指導により，教育界，産業界はもとより，本学大学院のみならず他大学大学院の進学も含めた優秀な人材育成を実現している。本理科講座のもとにある大学院は，夜間大学院等，現職教員をも視野に入れた理科教育学領域と理科内容学領域，及び学校教育学専攻総合教育開発分野環境教育領域を併せ持つ充実した教育・研究体制が敷かれている。各教員の研究テーマ及び研究業績については，「教員の研究活動」の欄を参照されたい。

理科教育講座では，このような学生の教育及び教員の研究活動の他，以下のような取組を行って

いる。

理科教育講座では，これまで，①主として化学領域の教員が中心となって行う「訪問科学実験教室」，②主として地学領域の教員が中心となって行う「天文教育講座（天文台一般公開）」，③主として生物領域の教員が中心となって行う「ブックレット普及事業」，④主として物理領域の教員が中心となって行う「理科離れ実相調査」，⑤主として物理領域の教員が中心となって行う「教材開発工房」を，学生自立支援事業として行ってきた。2005年度には，これらの活動を統合し，また，数学教育講座の教員が中心になって行う「算数・数学合宿授業研究」，技術教育講座の教員が中心になって行う「ものづくり教室」とも融合した「科学教育出前授業等による学生自立支援事業」が，文部科学省の「2005年度特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択された。特色GPは2005年度～2008年度の４年間継続して行われるため，これまで個別の教員が行っていたそれぞれの活動を，理科教育講座全体でバックアップし，発展させるシステムを構築中である。この特色GPの一環として，学生が自由に使え，教材などの製作ができる工作室「教材開発工房」も，2006年４月から稼働する予定である。

理科教育講座では，2004年度から，県内の小・中・高校の教員を対象にしたSPP教員研修を行っている。2005年度は，化学領域，生物領域，地学領域の３領域で，夏休み期間中に研修を行った。参加者は必ずしも多いとは言えなかったが，今後もこのような研修活動を続けていく予定である。

理科教育講座内の理科教育領域では，JICA受託事業として，カンボジア高等学校理数科教育支援プロジェクトを推進した。2005年度分は，同国の理科カリキュラム作成への支援として，以下の取組を行った。

①同国を訪問し，現状分析，基本方針の検討，ワーキンググループの組織づくりなどに当たった。

②１月～３月にかけ，ワーキンググループとして各科目３名を同国より受け入れ，カリキュラム開発に関する基本概念，具体的カリキュラムの作成支援を行った。

策定したカリキュラムには，目標，内容，到達成果が含まれている。今後，平成2006～2007年度にわたり，同国内の承認作業を経て，教科書及び教師用指導書の作成に当たる予定である。

音楽教育講座

平成17年度は以下の専任教員10名によって講座の教育･研究･運営が行われた。

音楽科教育学・弦楽器：	教　授	村尾　忠廣
管楽器：	助教授	新山王政和
応用音楽学：	助教授	小泉　恭子
ピアノ：	教　授	栗原　一身
	教　授	隈本　浩明
	教　授	武本　京子
声楽：	教　授	中川　洋子
	助教授	林　　剛一
音楽学・音楽科教育学：	教　授	滝澤　達子
作曲・音楽理論	講　師	橋本　　剛

［教育活動］

教員養成を原則とする本学の教育活動を音楽の分野より，将来教員を目指す学生に，音楽実技及び講義を通じて幅広い音楽観が育まれることを目し，各教員の専門分野からの適切な指導はもとより教員相互の連携をつねとして，各学生の大学生活が実りあるものとなるよう努めた。

［教員の研究及び活動の概要］

（各教員の論文・演奏等の詳細は別章を参照）

各教員の研究は個別に記述してあり，ここには本講座全体としての教育活動・研究活動を報告

する。2005年度は前年度にも増して活発な状況にあった。音楽科教育分野の村尾は国内外の音楽教育学会の要職にあり，自身の研究の発表のほか学会運営に寄与すると共にその活動でも特記すべきは新山王と小泉と共に全日本音楽教育研究会愛知大会の実行委員長として采配を取ったこと，またその際に新山王がその総合事務局長，小泉が会計事務局の任に当った。更に「これからのわが国の音楽教育についての展望」を語るシンポジウム企画及び司会を務め文科省からのパネリストと共に全国から集まった小・中・高・大学の音楽教育者へむけて意義ある提言をした。更にこの大会の大学部会で韓国・マレーシア・アメリカからの提言者を迎えて「大学におけるFD改革のラウンドテーブルー外国との情報交換」の司会を滝澤が務めた。新山王はまた愛知万国博覧会「愛地球博」の刈谷市デーに音楽科の学部生と院生及び教員の中川（合唱の指導と司会）と橋本（伴奏　指揮指導）と共に総勢約160名をつれ刈谷市依頼の万博参画に寄与，自身が主宰する木管アンサンブルでファゴットをピアノの隈本の伴奏により演奏，更にヤマハ音楽振興会の助成を得て音楽教育の研究分野の成果を発表，加えて日本教育大学東海地区例会でFD改革について発表した。この例会には橋本が「作曲と教育」を発表，また村尾が「F・ディスカウが名手といわれる理由」を発表した。武本はイメージ奏法研究の分野及びウイーンフィル首席クラリネット奏者とデュオコンサートに出演しそのCD製作の活動にあった。一方，年次によっては実技教員のジョイントコンサートをする事があるがこの年度には公開講座として現職教員及び一般の方を対象に，武本が「ピアノ生演奏を聞いてお話を考えようー楽曲イメージ奏法」　橋本が「ピアノから鼻歌をー即興のすすめ」　中川が「日本歌曲の歌い方ー内容の伝わる日本語の歌をうたう」林が「自然体による自然な発声ー良い声を出す為に」の演題でそれぞれ実演と講義を行った。

［社会的活動］

・付属学校及び各地域教育研究会における助言者
・本大学連携事業の一環としての学校支援で小・中学校からの依頼による合唱指導
・授業と関らせて近隣の介護施設などへの学生による訪問で歌唱・器楽演奏を行いかつ院生の有志が学校への出前コンサートを行った。
・合唱コンクールの審査委員やブラスバンド組織の理事　ショパンコンクールアジア地区理事ピアノ教育連盟PTINA理事　国際音楽教育協議会（ISME）の委員等の任に当たると共に法人化に伴う情報開示により，岡崎における合唱に関するプレスのインタビューに応じる（新山王）など対外活動を行った（各教員の報告参照）。

［その他の行事］

・新入生合宿研修を洲原池近くの勤労福祉会館で行った。
・本学の姉妹校ニューヨーク州立大学フレドニア校の訪問を受けて音楽交流を教員の村尾が采配し声楽の林が特別演奏した。ボランティア協力として学生宅でのホームステイがなされた。
・文部科学省短期再来日研究者助成制度により 7 月ー 9 月の 3 ヶ月ロシア国立人文大学助教授のガリヤ・グウオズスカヤ女史（1998年度本大学院修了生）がその専門研究の尺八及び日本文化・日本語再研修の為に来日し自身の研究並びに院と学部の授業（滝澤担当授業）においてロシアの音楽教育の現状説明や尺八演奏によって学生と交流する一方，「愛地球博」で尺八の演奏家グループの上演に参加した。
・恒例の12月に講座主催の学内演奏会及び年度末行事である卒業・修了演奏会が 3 月15日に滞りなく挙行された。

美術教育講座

美術教育講座は，初等教員養成課程（芸術系）／図画工作専攻と中等教育教員養成課程／美術専攻ならびに生涯教育課程／造形文化コースがある。教員は，16名で，教員養成課程は，美術教育，美学美術史の理論系と実技系の絵画，彫刻，デザイン，工芸。造形文化コースは，実技指導として

陶芸，漆芸，ガラス，染織，金工，プロダクトデザイン，また理論領域として西洋美術史と東洋美術史を設けています。

保健体育講座

当講座の教育組織及び学生定員は以下の３つである。①初等教員養成課程（体育専攻）26名（→36名），②中等教員養成課程（保健体育専攻） 6 名（→16名），③生涯教育課程（スポーツ・健康コース）30名（→10名）である。（　）内定員の増減は教員需要にともなう学内改革の結果であり，2006年度入学生から実施される。（さらに2007年度は，スポーツ・健康コース10名分を中等教員に振替えることになっている。これにより，総合科学課程から学芸四課程と約20年続いた講座関連新コースはひとまず幕を閉じ，教員養成に一本化することとなった）

教員については，数年来滞っていた採用人事がやっと実を結び，10月に福ヶ迫（助手）氏を迎えた。法人化２年目の厳しい中，過去からの教室（講座）始まって以来，最多（21名）のスタッフを得ることになった。とはいえ，高齢化が著しく定年退職者が目白押しの今，さらに今後の採用人事の不透明さを考えると，若い教員を得たことは講座にとって大変意義深いものである。なお，当講座の教員は，すべて教員養成，学芸両課程の教育に一貫して携わってきている。

また，当講座が主体となっている教育学研究科保健体育専攻も，定員８名を超える入学者となっている。卒業後の進路は，学部生，院生とも教育界への就職が持ち直しており，今後なお期待できる。

外に対しては，本学と近隣市町村との社会連携覚書が交わされたことにより，まず，刈谷市教育委員会との「総合型地域スポーツクラブ」を視野に入れた協議が始められ，その設立準備委員会へ参画した。具体的には，刈谷市富士松地区における連携・支援であり，2006年10月正式発足の計画である。その他でも，講座教員個々及び学生が県下を中心に様々な支援活動を実施している。

技術教育講座

技術教育講座は，学部における技術専攻及び大学院教育学研究科における技術教育専攻の教育担当教員で構成されている。

技術教育は，木材加工，金属加工，電気，機械，栽培，情報及び技術科教育法と広範囲にわたるものづくりに関連する領域から構成されている。各領域は，それぞれに対応する専門的学問分野を基礎にしており，それぞれの立場から教育研究を担当する教員の配置が不可欠であり，本年度においてはそのように配置されており，幅広く実践的な教育・研究を遂行する体制ができている。（ただし，2000年度からの教科教育担当定員の不補充分が補填されないことが明らかになったことから，2005年度より大学院教育に対応する教科教育担当者２名のうち１名は金属加工領域との兼任により，一部教員の努力により維持されている。）

本専攻で行われる技術教育の目標は，技術科教員として不可欠な専門的教育研究能力の修得と共に，技術的課題解決力（合理的な手法によってものを作り上げる力）などの実践的能力や技能を育成すること，それらにもとづく，教育的指導力量の形成，及び，そうした活動にもとづいた社会的に有為な人間形成を図るところにある。したがって，学生の進路は，教育界はもちろんであるが，それ以外に，広く産業界にも進出している。

所属教員の研究も，技術教育に関わった内容が中心となっているが，産業界をふくめたものづくりに対応する広範囲な分野の基礎から応用まで含めて行われている。具体的な専門領域の研究内容は多岐にわたり，ますます進歩・発展しつつあるコンピュータ・情報通信技術（IT）から自然環境を考慮した農作物の生産にかかわる分野を含めて，エネルギー変換・制御・利用技術や各種の材料の加工技術など生産活動の基盤となる様々な技術を対象としている。また，技術と地球環境との関わりに関する分野，成長期にある子どもの知・情・意にわたる全面的な発達を促す上で有効な学習

課題と考えられるさまざまな技術的活動・条件なども含めた広範な分野も含めて研究の発展をめざしている。さらに，それらを統括する立場から，技術教育の授業分析を進め，技術科教員として必要不可欠な実践的指導力を育成するための教育活動を行っている。

以上の他に，本講座の持つ技術に関する専門的造詣を国際的にも活かすべく，国際協力機構（JICA）に協力し，開発途上国の技術教育指導者の研修を毎年複数実施し，教育研究活動の対象ともしている。

家政教育講座

本講座の教育研究領域は，食物，被服，住居，家族，家庭経営，保育，生活環境，家庭科教育という，生活に関わる広範囲の分野を扱っている。各領域ごとに，独立した教育研究の体系を形成しているが，それらを「生活」という視点から総合化した構成を行い，教員相互が領域を越えた協力を行っている。今日の生活に見られる問題を積極的に取り上げ，発生する要因，メカニズムを明らかにし，解決する道筋を構想するという，実践的で科学的な分野であるため，社会からの期待も大きい。

研究成果は，自治体の生活関連施策やまちづくり，地域の生活改善，教育現場の授業改善などに生かされている。また，社会の現場と連携した場に院生・学生も参加することを通して，実践的な教育内容としている。「生活」を科学的にとらえて，その学びのあり方を考え，実践できる力の育成を目指している。

平成17年 4 月の構成は，教授 6 名，助教授 6 名，助手 1 名，計13名となった。しかし，少子高齢化の状況の中で重要さを増している保育領域の担当者は，不補充のままである。

本講座に所属する教員が行った研究成果の一部と，修士論文の梗概，卒業研究の題目は，平成18年 3 月に発行した「家政教育講座研究紀要　第37号」にまとめられている。

第２節　研究成果の公表と活用

（本学における学会の開催／講座間の共同研究／学内講演会及びシンポジウム／研究雑誌の発行など）

生活科教育講座

1　本学における学会の開催

(1) 日本生活科・総合的学習教育学会愛知県支部の例会を２回開催し，県内会員の生活科及び総合的学習の研究に寄与した。

○第１回（５月28日）は，嶋野道弘先生（文教大学教授・日本生活科・総合的学習教育学会会長）を招き，「生活科・総合的学習の未来を語る」というテーマで講演いただいた。県内教員，学内教員，院生合わせて約70名が参加した。

○第２回（２月18日）は，「生活科・総合的学習で育てる力，育った力」というテーマで，二つのグループに分かれて，本講座の教員の提案をもとに議論した。その後，修士論文発表会（５名）を行った。合わせて約40名が参加した。

(2) 平成13年４月より，日本生活科・総合的学習教育学会の事務局を本講座が担当し，平成17年度も年次大会（広島大会）の開催に尽力した。

2　講座間の共同研究

(1) 大学・附属学校共同研究会における研究

幼児教育及び小学校低学年教育分科会において，久野弘幸教員を中心にして，幼児教育講座教員及び附属幼稚園教員などと共に数回研究会を開催し，幼小連携の在り方について研究を深めた。

(2) 他講座学生の卒業研究指導への協力

野田敦敬：自然系理科教育領域の学生５名の指導

中野真志：人文社会系哲学専修の学生６名の指導

久野弘幸：人文社会系法経社専修の学生２名の指導

3　学内講演会及びシンポジウム

公開講座「聞いて学ぶ，うごいて学ぶ総合学習」での講演及びワークショップ

2005年６～７月　布谷光俊，野田敦敬，中野真志，久野弘幸が各１回ずつ担当

4　研究雑誌の発行

他大学教員，本講座教員，大学院生，県内小学校教師など14本の論文を掲載した本講座研究紀要『生活科・総合的学習研究』第４号を発行し，全国及び県内の研究者及び小学校教師に配布した。

障害児教育講座

1　本学における学会の開催

講座が主催した学会はない。聴覚障害教育関係では，聴覚言語障害系の教員が日本聴覚障害教育実践学会及び日本国際聾教育学会の事務局を行なっており，年２回の研究大会の開催と研究大会論文集の発行等の実務を担当し，国内外に情報を発信している。

2　講座間の共同研究

本講座の教員が治療教育センターと情報処理センターに，それぞれ１名兼任している。治療教育センター発行の「治療教育学研究」には，兼任教員の他に講座教員も論文を投稿し，成果を公表している。

3　学内講演会及びシンポジウム

本講座の教員が「愛知教育大学LD研究会」，「愛知・特別支援教育フォーラム」を開催している。また，「聴覚言語障害研究会」の事務局を担当しており，年４回，研究会を開催し，学外関係者との連携を取りながら地域貢献している。また，臨床動作法の研究組織である「東海･北陸

心理リハビリテイション研究会」の事務局も本講座にあり，年 1 回の研究大会，セミナーの開催，研究会報の発行を行っており，東海･北陸地区における臨床動作法の活動拠点となっている。

4　研究雑誌の発行

講座教員の個人研究，共同研究を 8 編掲載した「障害者教育・福祉学研究第 2 巻」を発行した。

幼児教育講座

1　本学における学会の開催

平成17年度は開催していない。

2　講座間の共同研究

個人やグループでの研究はすすめているが，講座間研究の発表はない。生活科教育，学校教育の教官　との共同による，「幼幼稚園・小学校の連携を考える」をテーマとした公開講座（村岡代表）を開いた。

養護教育講座

1　本学における学会の開催

平成17年度は開催していない。

2　講座間の共同研究

講座間では個人レベルでの共同研究は継続しているが，講座全体での共同研究で2005年度に発表したものはない。

3　学内講演会及びシンポジウム

講座が主催したものはない。

4　研究雑誌等の発行

1996年度より「卒業研究論文集」を発行しており，2006年 3 月に第10巻を発行した。また，愛知教育大学養護教育講座研究紀要第 7 巻第 1 号を発行したが，本号で廃刊することとなった。

5　教育研究活動

重点教育研究費（学長裁量経費）として採択された，講座全教員，附属学校養護教諭及び教育委員会メンバーによる「教育委員会等との連携による養護教諭養成の充実策の検討」の研究プロジェクトをまとめた。

また，養護教育学・看護学教員による「養護教諭実践研究会」が始動し，2004年度を持って閉会した「あいの会」の研究活動をさらに発展させて，現職の養護教諭との共同研究や現職の養護教諭の研究指導に貢献している。

教育臨床学講座

1　本学における学会の開健

平成17年度は開催していない。

2　講座間の共同研究

本講座は，学校教育臨床専攻の主幹講座であり，同専攻の運営は本講座を中心としながら，学校教育講座，教育実践総合センター等，講座間の協力のもとでなされている。そのために同専改の活動，特に教育臨床基礎実習Ⅰ・Ⅱ及び教育臨床実習Ⅰ・Ⅱにおいて行われる事例研究は，実習という形態をとりながらそれぞれの講座の教員の出席のもとに共同研究という形になっている。その成果は毎年発行される「愛知教育大学教育実践総合センター心理教育相談室紀要」として結実している。

3　学内講演会及びシンポジウム

本学を卒業，終了した臨床心理士ならびに，本講座が中心となる学校教育臨床専攻の修了生，在

校生を対象とした，「愛知教育大学心理臨床家の集い」の閑健及び運営に本講座，専攻の陶係する教員がその任にあたった。参加者は120名を超えた。

4　研究雑誌の発行

本講座を中心とした学校教育臨床専攻と，教育実践総合センターとの共同編集として，「愛知教育大学教育実践総合センター心理教育相談室紀要」を毎年発行しており，平成17年度は第７号を発行した。

国語教育講座

1　本学における学会の開催

平成17年度は開催していない。

2　講座間の共同研究

国語教育講座・社会科教育講座，地域社会システム講座に所属する　教員有志によって日本文化研究の研究誌を発行している。

3　学内講演会及びシンポジウム

開催日　平成17年12月９日
演　題　語り合う文学教育
講　師　三重大学教授　藤原　和好 氏
要　旨　小学校国語教科書における文学教材について，児童の視点に立つ読みの提言を行った。

4　研究雑誌の発行

(1)『国語国文学報』64号，愛知教育大学国語国文学研究室発行。(毎年１回発行)
(2)『日本文化論叢』14号，愛知教育大学日本文化研究室発行。(毎年１回発行)
(3)『愛知教育大学大学院国語研究』14号，愛知教育大学大学院国語教育専攻発行。(毎年１回発行)

5　社会連携

国語教育講座は，平成17年度から，日本郵政公社東海支社郵便事業部と協力して「手紙作文コンクール」(主催　日本郵政公社）の審査業務を行うこととした。

日本語教育講座

1　本学における学会の開催

平成18年２月11日（土）に愛知教育大学国際教育学会第５回研究大会を本学において開催した。本学会は，日本語教育コース，大学院国際理解教育領域の卒業生・在学生等を中心に結成され，事務局を本講座内においている。学術講演会との合同開催とし，大学院生４名が研究発表を行い，学内外から73名の参加者があった。

2　講座間の共同研究

外国語教育講座との研究協力の下，学長裁量経費（プロジェクト経費）による「グリーバル・リテラシー（国際対話能力）向上に関する研究」を行い，海外からの研究者を招いての講演会，留学生や海外からの訪問者を囲む懇談会，学生の海外研修の支援，インターネットを利用した海外とのコミュニケーションの活発化推進などの研究活動を行った。

3　学内講演会及びシンポジウム

平成18年２月11日（土）に愛知教育大学国際教育学会と共催で次の学術講演会を開催した。
講師：名古屋大学大学院教授　滝沢　直宏 先生
演題：「コーパスが暴く言葉の実態」

4　研究雑誌の発行

『日本語教育と異文化理解』第５号（愛知教育大学国際教育学会）を発行した。日本語教育コー

スの卒業生及び大学院国際理解教育領域の大学院生から 6 本の論文が寄せられた。

社会科教育講座

学会

「愛知教育大学社会科教育学会」

（情報未確認）

「愛知教育大学哲学会」

愛知教育大学哲学会（会長：渡辺和靖）は，毎年一回研究大会を開催し，研究雑紙『哲学と教育』（ISSN0288-2558）を発行している。

平成17年度（2005）は，8 月27日（土）に本学第一人文棟哲学法経社合同演習室において，研究大会を開催した。以下の報告があった。

「教養教育模型（刈谷モデル2005）について」　加藤　政弘氏（知立高校教諭）

「土田杏村の初期思想――釈迦根本の哲学思想――について」

川合　大輔氏（愛知教育大学大学院）

「愛知教育大学歴史学会」（会長：目黒克彦）

愛知教育大学歴史学会（会長：目黒克彦）の活動としては，年一回の研究大会開催と研究雑紙『歴史研究』の発行がある。研究大会については，今年度は2005年11月21日（土）に愛知教育大学において開催し，以下の研究報告と講演を行った。

研究報告

①「律令国家の対外認識と渡来人政策」　間瀬　　智氏（愛知教育大学大学院）

②「『愛知県史資料編中世 2 』を紹介する」　松島　周一氏（愛知教育大学助教授）

講演

「日露戦争と中国」鈴木智夫氏（元愛知学院大学教授）

「愛知教育大学社会科教育学会」

愛知教育大学社会科教育学会は，2006年度 2 月18日に研究大会を実施した。前半には院生による修士論文発表会，後半には豊田ひさき氏（名古屋大学大学院教授）による「授業実践から学ぶもの――授業研究と教師の力量形成」という題目の講演会が行われた。現職の教員を含む40名ほどの参加者で盛会であった。

機関誌

『哲学と教育』（ISSN　0288 - 2558）第53号（平成18年 3 月31日）

①「学級崩壊についての一考察」　西谷　　寿（春日井市立神領小学校教諭）

②「戦争と平和をどう語ってきたか（ 2 ）」　野田　隆稔（愛知教育大学1965年卒）

③「文化財教育――文化財保護思想を育むために――」　山田　佳秋（愛知教育大学2006年卒）

④「西田書簡に見る日本の精神史――昭和10年・嵐の中の思想と学問――」

荒井　正雄（愛知学芸大学1953年卒）

⑤「萩原朔太郎研究・補遺（そのⅢ）」　渡辺　和靖（愛知教育大学教授）

『歴史研究』（ISSN　0287-9948）第50号（2004年 3 月）

論説

①「世界史教育への問い」原田智仁

②「歴史教育からみた『公民的資質』概念の分析と今後の役割」松永博司

③「近代日本における『郷土』の発見」　加藤　謙司

④「『地域』から戦争をながめる：神谷　寛之

⑤「在村の調査研究活動をめざして」中嶋　春雄

社会科教育の広場

①「教員養成大学における社会科教育の一つの試み」山田　　孝
②「基礎・基本を重視した社会科学習のあり方」大野　佑樹
③「100Milestone Documentsについて」神田　竜也

地域社会システム講座

（地理学専修）

1　本学における学会の開催

2005年 6 月に，愛知教育大学地理学会を本学において開催した。本学会は地理学専修に事務局を置き，学会員（330名ほど）の会費により運営されている。毎年この時期に，学会総会及び学術発表会を開催し，今年度は次の 2 つの学術発表が行われた。

水越健太（愛知教育大大学院）：日本デンマーク農業の成立・崩壊の過程とその要因

橋本　宰（知立市立八ッ田小学校）：歴史地理学アプローチをふまえ池鮒鯉宿宿並図の教育的活用

2　学内講演会

2005年 6 月に，愛知教育大学地理学会大会と連動させて学内講演会を開催した。講師は，本学外国語講座のオリバーマイヤー氏で，演題は，「ドイツ，ルール工業地帯の再生－IBAエルムシャーパークと産業遺産」であった。

3　研究雑誌の発行

地理学専修に事務局を置く愛知教育大学地理学会は，毎年 2 冊の学術雑誌「地理学報告」を刊行している。2005年度は 6 月に第100号（総頁53ページ〉，12月に101号（総頁48ページ）をそれぞれ刊行した。それぞれの内容は次の通りである。

「地理学報告」第100号

論　説

礒野朝雄：長野県南部，伊奈谷の河岸段丘地形

大和田道雄・石川由紀：東アジアにおける猛暑と冷夏の大気大循環場変動と気圧場解析

教育活動

水野雅夫：中学校社会科の現状と問題点－新学習指導要領を基に地理的分野を中心に

短　報

辺　紅国：工業の近代化に伴う天津工業地域の変貌と課題

「地理学報告」第101号

論　説

阿部和俊：経済的中枢管理機能からみた韓国の都市体系の変遷（1985-2002）

神谷修司：愛知県東浦町における直売形式によるブドウ産地の発展

教育活動

橋本　宰：歴史理学的アプローチを踏まえた池鯉鮒宿宿並図の教育的活用

佐藤貴裕：中学校地理的分野における外国学習－激動する欧州を事例にした社会科教育における基礎基本の一考察－

なお，「地理学報告」は，会員のみならず学内80余の研究機関・図書館などに寄贈しており，交換としてこれら機関より各種の地理学関係の研究誌や報告の寄贈を受けており，研究・教育に役立てている。

（法経社専修）

1　本学における学会の開催

平成17年度は開催していない。

2　講座間の共同研究

特になし。

3　学内講演会及びシンポジウム

特になし。

4　研究雑誌の発行

『社会科学論集』第44号を発行（2006年 3 月）。

（国際社会）

1　本学における学会の開催

平成17年度は開催していない。

2　講座間の共同研究

特になし。

3　学内講演会及びシンポジウム

特になし。

4　研究雑誌の発行

『社会科学論集』第44号を発行（2006年 3 月）。

（日本文化）

研究雑誌の発行

『日本文化論叢』第14号，2006年 3 月刊。（この研究雑誌は，国語教育講座・社会科教育講座・地域社会システム講座にまたがる教員により発行されている。）

外国語教育講座

1　本学における学会の開催

愛知教育大学英語英文学会第11回研究発表会が2005年 9 月17日に本学講堂会議室において開催された。出席者30名。修士論文中間報告会に続いて 4 件の研究発表が行なわれた。

2　講座間の共同研究

特になし

3　学内講演会及びシンポジウム

(1)　日時：2005年11月18日（金）
　　場所：第二共通棟421教室
　　講師：丹羽　隆昭（京都大学教授）
　　演題：「二十世紀古典アメリカ小説と自動車」

4　研究雑誌の発行

(1)　愛知教育大学英語研究室より『外国語研究』第39号が発行された。執筆者 4 名。

数学教育講座

1　本学における学会の開催

・第36回愛知教育大学数学教育学会研究大会
　期日：平成17年12月10日（土）
　会場：愛知教育大学　自然科学棟
　主催：愛知教育大学数学教育学会
　後援：愛知県教育委員会
　愛知県内を中心とする小学校，中学校，高等学校の教員が集まって授業実践研究を発表・討論しあい，本講座教員が講演の他指導・助言を行った。特別講演として静岡大学教育学部教授 国宗　進 先生の「算数・数学の授業改善の方向を考える」があった。
・第16回高校数学発展研究会　研究発表会及び特別講演会

日時：平成18年２月12日（日）

場所：愛知教育大学演習室棟数学演習室Ｂ１

愛知教育大学卒業生を中心とする高等学校教員で組織された研究会。高校教員による研究発表４題ののち，亀井　喜久男 氏（岐阜県立岐阜東高等学校）が，「エジプト紐などの新作教材」と題して特別講演を行った。

・火曜会

昭和56年11月２日に「数学教育の談話会」として始まっている。火曜日に，数学教育学関係の教員と院生が一堂に会して，大学院生は修士論文の作成に向けた発表をしていく。教員は，関係する資料提供や研究指導を行っている。

・数学内容研究会

平成17年度は，毎月第二，第四金曜日の夜７時から８時30分まで大学教員，高校教員，大学院生などが自分が興味を持つ数学について研究発表を行っている。

（http://auemath.aichi-edu.ac.jp/naiyo/index.html）

2　講座間の共同研究

特になし

3　学内講演会及びシンポジウム

・数学講演会

Peter Wong教授（USA Bates College）が学部３，４年生，大学院生及び教員を対象に「不動点についての概説」というタイトルで講演した（平成17年６月３日（金））。

・数学教育講演会

愛知教育大学附属養護学校副校長 野々山　里美 先生による「望ましい算数・数学の教師像について」と題する講演があった。算数・数学及び情報数学専攻の学部生，大学院生等多数聴講した（平成17年７月１日（金）大学会館２階大集会室）。

・Heinz Steinbring 教授（ドイツDuisburg-Essen大学数学教育学）講演会

「学習指導の日常的反省による教師の専門性の向上」と題する講演が行われた。内容は，「数学は教えられるのか」といった数学の認識に対する根本的な考察に始まり，具体的な事例によって「数学的な相互作用」について論じられた。そして，子どもたちの数学的な学習過程を中心にして，それを教師が共同で分析し，反省する中で，教師の指導を見直し，専門性を高めるという主旨である。わが国の単純な授業研究に反省を迫られるものであった（平成17年９月15日（木）共同研究室）。

4　研究雑誌の発行

愛知教育大学数学教育学会誌イプシロン第47巻（2005年），ISSN 0289-145X

発行者：愛知教育大学　数学教育講座。

情報教育講座

1　本学における学会の開催

平成17年度は開催していない。

2　講座間の共同研究

学校教育講座の教員とともに，小学校における算数文章題の解決支援を行うためのコンピュータプログラムの研究開発を継続している。

本講座の竹田研究室は，社会科教育講座の寺本研究室と連携して「あいちエコ環境プロジェクト」に参加し，名古屋，春日井，小牧周辺の小学校の総合的な学習の時間における授業支援や教材作成，情報提供等を行った。

本講座の竹田は附属高等学校の野田教諭と協力し，普通教科「情報」の授業カリキュラムの開発

と授業実践を平成15年度から続けている。平成17年度は 3 年目を迎えTT・TA体制が定着し，Wiki等による担当者間のコミュニケーションが活性化した。また，竹田・高橋が開発した相互評価システムは発表・作品の評価の際に 3 度用いられ，学習意欲や効果を高めるために役立った。この成果は，情報処理学会・CE研究会において「高大連携による高等学校情報Aのカリキュラム開発」として，野田教諭と竹田の共著で発表した。また，竹田は附属名古屋中学校の甚目教諭と協力し，「情報モラル」の授業をテレビ会議システムを用いて行った。

3　学内講演会及びシンポジウム

本講座の佐々木は，平成17年12月，愛知教育大学附属高校との連携協力の一事業である「アカデミック・クエスト講座」において講師を務めた。

JICA国別特設サウジアラビア「学校教育改善」コースに，本講座の江島，梅田，野崎が携わった。江島は，コースリーダー及び講師を務め，「Computer-Assisted Instruction and Computer-Assisted Instruction Systems in Japan 」という題目で講演を行った。梅田，野崎は講師を務め，それぞれ

「Information Education at Senior High Schools in Japan about the general subject “Information”」，「Distance Education and Network Technology」 という題目で講演を行った。

本講座の安本は，JICA集団研修産業技術教育IIの講師を務め，「Spread of the Internet throughout Japan and the Internet Technology」 という題目で講演をした。

本講座の，安本，野崎，江島，梅田の共同研究として，「アジア諸国等におけるITを利用した遠隔教育プロジェクト」が，2004年度プロジェクト経費（学長裁量経費）のG.P.等先行投資型プロジェクト経費に採用され，2005年度も引き続き研究が行われた。

4　研究雑誌の発行

なし

音楽教育講座

1　本学における学会開催

① 日本教育大学協会音楽部門東海地区例会（本学ホスト企画）
三重大学・岐阜大学・静岡大学の参加をえて下記の研究発表及び情報交換を行った。
発表者は新山王政和　　橋本　剛　　村尾　忠広
日時：平成17年 9 月20日

② 全日本音楽教育研究会愛知大会　総合事務局（愛知教育大学音楽教育講座）
実行委員長　村尾　忠広　　総合事務局長　新山王政和
日時：平成17年10月12，13日
場所：岡崎市民会館（総合大会）　岡崎太陽の城（大学部会）ほか，小学校研究部会　中学校研究部会　高校研究部会　大学研究部会の各部門別会場
延べ総勢1000名以上全国の音楽教育関係者の参集があった。

2　講座間の共同研究

愛知万博において　刈谷市デーの演奏企画で美術教育講座とのコラボレーション及び技術教育講座企画による「ものづくり教育」の講座シリーズの一部として演奏協力賭して参画した。
（共同研究ではないが，創造科学系の音楽活動として，他講座と共同企画であるので報告す）

3　学内講演会及びシンポジウム

なし

4　研究雑誌の発行

なし

美術教育講座

1　本学における学会の開催

平成17年度は開催していない。

2　講座間の共同研究

〈愛知教育大学美術教育講座フレンドシップ事業2005について〉

美術教育講座フレンドシップ事業2005の活動は，２年生対象の「工芸実技Ⅱ」（非常勤講師の河村瑞江先生ご担当）の授業の中で実施した。学生たちは大学の授業の中で，ファプリック領域のものづくり（染める・織る・編むなど）を学び，その後，学んだ内容を中学生に指導させていただく形で，一連の活動を進めることができた。今回，協力していただいたのは，東郷町立東郷中学校（森本直樹校長）。

この一連の活動の最終日となる１月23日（月）に東郷中学校にて，大学２年生（計33名）が中学１年生（計126名）に，12のグループに分かれて授業をさせていただいた。本事業の詳細については，本書のフレンドシップ事業に関するページを参照ください。

3　学内講演会及びシンポジウム

ちりゅう芸術創造協会と愛知教育大学美術教育講座による知立市文化会館（パティオ池鯉鮒）開館５周年特別企画事業として，展覧会「フィフスエレメント」と関連企画１シンポジウム，関連企画２ワークショップを行った。なお，この企画事業は，専門家の指導の元，美術教育講座初等・中等教育教員養成課程の学生と大学院生が中心となって企画から運営，展示，シンポジウムの開催まで行った点に特色がある。

シンポジウム

日　時：平成17年12月18日17時30分～20時30分
会　場：知立リリオ・コンサートホール
プログラムⅠ：基調講演：「ポストグローバリゼーションのアート」
　　キーノートスピーカー：森美術館シニアキュレーターの片岡　真実氏
プログラムⅡ：パネルディスカッション「地域の芸術文化を支える人，場，そして必要なもの」
　　パネリスト：伊豫田静弘（演出家，ちりゅう芸術創造協会芸術総監督）
　　加藤　万也　（アーティスト）
　　片岡　真実　（森美術館シニアキュレーター）
　　藤江　　充　（愛知教育大学教授）

4　研究雑誌の発行

「大学生がやってきた」愛知教育大学美術教育講座フレンドシップ実践報告資料集の発刊

保健体育講座

1　本学における学会の開催

平成17年度は開催していない。

2　講座間の共同研究

本年度は該当する活動はなかった。

3　学内講演会及びシンポジウム

①愛知教育大学体育学会主催シンポジウム

以下のシンポジウムを開催した。

日時：平成17年11月13日（日）
テーマ：　　「これからの体育教師への期待」
シンポジスト：松永　裕和（愛知県教育委員会義務教育課主幹）
　　川口　　啓（名古屋市立藤が丘小学校長）

吉田　　正（当講座教授）
コーデイネーター：森　　勇示（当講座助教授）

4　研究雑誌の発行

①「愛知教育大学保健体育講座研究紀要」(30) 2005.
研究論文 4 編，修士論文要旨 9 編，教員研究業績一覧である。

②「体育・スポーツ・健康卒業論文集」(19) 2006
初等学生27編，中等学生 7 編，スポ・健学生28編が掲載され，他の教員養成系大学にも配布された。

（なお，例年発行していた「愛知教育大学体育学会研究報告」は，学会の大規模な改革にともなう諸事情により，発行に至らなかった）

技術教育講座

1　本学における学会の開催

本講座主催による国際協力機構（JICA）集団研修を開催し，大学としての英知を結集して開発途上国への学術教育研究的立場からの支援を鋭意行っている。1999年度より行ってきた国際協力機構（JICA）集団研修「産業技術教育」コースは，新たに2004年度より「産業技術教育II」として行っている。また，2003年度より，サウジアラビア「教育カリキュラム開発」研修コースも開催している（2006.1.12-2.9）。

大学・附属学校共同研究会（技術部会）を開催した（2005.8.19）。

2　講座間の共同研究

本講座の研究領域は多岐にわたるため，講座全体が他の講座と共同研究をすることは非常に難しい。しかしながら，学際的な研究では研究テーマに応じて幅広く研究グループを構成し，研究活動をしている。

2004－2005年度に，家政学講座の小川正光教授を代表として美術教育講座・技術教育講座の教員が共同で，「環境共生型教育研究施設の計画に関する提案的研究」（大学教育研究重点配分経費）を行った。本講座からは，清水秀己教授による「自然エネルギー活用方法の提案（太陽光発電による給水システム）」及び太田弘一助教授による「壁面・屋上緑化の方法と効果について」として，研究成果を報告している。

また，本講座の大西研治教授を代表として情報教育講座・技術教育講座の教員が共同で，「世界約30カ国に向けた教育協力のためのテキスト作成とネットワークの構築」（学長裁量経費）も行った。

3　学内講演会及びシンポジウム

講座内講演会は，新しい産業技術や教育界の状況をテーマとして毎年行われている。

本講演会は主として学生の社会参加のための啓発的な内容となっている。

2005年度は，台湾国立彰化師範大学・趙志揚教授による「台湾における技術教育」である。(2006.2.3)

公開講座として，専修免許修得のための免許法認定公開講座を技術科教員対象に，夏期・冬期休業中に行った。「木材加工教育特論」「電気教育特論」「機械教育特論」「栽培教育特論」「技術科教育特論」の 5 講座を開講した。

2002年度からフレンドシップ事業・大学等地域開放事業に関わって「ものづくり教室」を開催してきた。本年度は文部科学省の2005年度特色GP「大学教育支援プログラム：学生の学習活動及び課外活動への支援の工夫改善に関するテーマ」が採択され，その中で「ものづくり教室」を実施した。具体的には，「たのしいものづくり」（大学版）10月 8 日～11月26日毎土曜日 7 講座実施，参加

者77名，参加指導学生30名，「愛教大生によるものづくり教室」（出前版）を11月６日に三好町，11月20日に知立市，12月10日に名古屋市で実施した。

愛知万博「愛・地球博」における大学主催イベント「ものづくりと教育」をコーディネートし，瀬戸会場/海上会場・市民パビリオンの各会場で，７月25日「間伐材によるものづくり，26日「現代技術におけるものづくり」，27日゛中学生によるものづくりの発言」，28日「CADソフトウェアにおけるものづくりコンテスト」，29日「間伐材によるものづくりコンテスト」，30日「JICA研修員とのインターナショナル・フォーラム」，31日「CPSC研修員とのインターナショナル・フォーラム」を開催した。

豊田市主催「豊田産業フェスタ2005」（2005.9.11）に参加し，「間伐材ワークショップ」を実施した。

4　研究雑誌の発行

特になし

家政教育講座

1　本学における学会の開催

平成17年８月24日，25日の２日間，日本教育大学協会全国家庭科部門大会を，KKRホテル名古屋において本講座を大会実行委員会事務局として開催した。全国から国立の教員養成系大学・学部の教員約100名が参加した。

当日，総会では「日本教育大学協会全国家庭科部門のあり方と制度設計」「家庭科と栄養教諭の連携を考える」，シンポジウムでは「家庭科教員養成における日本教育大学協会全国家庭科部門の意義と役割」について熱心に討議が行われた。

2　講座間の共同研究

学長裁量経費・重点教育研究費により，以下の３課題を実施した。

① 環境共生型教育研究施設の計画に関する提案的研究：　美術，技術，家政の教員５名で実施した。美術技術家政棟を対象に，人間が相互に自然環境と共生することを目指した校舎のあり方を検討し，実験により検証するとともに，実際に施設の改善を実施した。改善実施の費用は，家政教育講座の教育研究費から負担した。

② 食品成分による脳機能の変動に関する栄養学的研究：　食品成分であり精神的ストレスを軽減することが期待されているGABAと脳機能の関係について明らかにすることにより，学校教育が直面している諸問題の解決に寄与することを目指している。最近脳におけるタンパク質合成と学習・記憶活動との間に，生理的条件下で相関性が報告されているが，GABA経口摂取により脳タンパク質合成が促進されることが明らかとなった。

③ 男女共同参画実現のための高等教育のカリキュラム開発及び学習・研究環境の整備プランの検討：　男女共同参画実現のためのカリキュラムの検討，カリキュラムの提案，学習・研究環境を保障する具体策の立案を行う。

3　学内講演会及びシンポジウム

本年度で停年退職される野田満智子教授の最終講義を，２月17日に実施した。講義題目は，「子どもの眼でみた戦争・占領下日本の実相」である。最終講義には家政教育講座の学生，教員のみならず卒業生も多く出席し，成功裏に終わった。

4　研究雑誌の発行

本講座では，講座教員の研究活動発表の場として「研究紀要」（愛知教育大学家政教育講座）を発行してきている。本年度は37号を発行し，多くの投稿があった。

第３節　教員の国際学術交流

１　研究者の派遣

平成16年度に従来の「在外研究員」制度が廃止され，新たに「海外先進教育研究実践支援プログラム」として，大学改革推進等補助金制度が発足した。

今まで，「在外研究員」制度は，個人の教授・研究能力の向上を目的としていたものに対して，新たに制度化された「海外先進教育研究実践支援プログラム」は，大学のビジョンの基に学長を中心とするマネジメント体制の下で，教職員を海外の教育研究機関等に派遣し，先進的な研究や優れた教育実践に参画させることにより，教職員の教育研究能力の向上を図り，大学等の教育の改善に資することを目的としている。

対象機関は，従来の「在外研究員」 が，国立大学等（国立短期大学，国立高専，大学共同利用機関等）であったものが，公・私立大学等も含めた幅広い機関を対象としたものと変化した。

しかし，平成17年度については，この制度による募集は無く，平成16年度に採択された２名の教員が引き続き，派遣された。

また，平成17年度には，新たにJICA技術協力プロジェクトを受託するため，JICAコンサルタント登録を平成17年５月に行い，９月国際コンサルタント会社とJV（共同企業体）を締結し，JICA技術協力プロジェクト（カンボジア国高校理数科教科書策定支援プロジェクト）に応札し，同プロジェクトを平成17年11月受託した。このプロジェクトは，平成17年11月から３ヵ年に渡り，実施される。これに関連し，平成17年12月には，本学の教員３名を15日～30日間の日程でカンボジア国にj派遣し，平成18年１月中旬から研修員を受入れるための事前準備のため，現地において「カリキュラム開発セミナー」等に参加した。

なお，海外で行われる共同研究・学会出席・研究のための資料収集・研修など，研究活動を目的として海外に渡航した者は，延べ112名に上る。

２　外国人の採用

◇外国人教員◇

職名／国籍	教授	助教授	講師	計	当初採用年月日	任　期	分　野
フランス共和国		1		1	H６．４．１	任期なし	フランス語・フランス現代社会
連　合　王　国	1			1	H12．４．１	〃	英語・言語学
中華人民共和国		1		1	H13．４．１	〃	中国語
オーストラリア		1		1	H14．４．１	〃	英語科教育
アメリカ合衆国			1	1	H14．10．１	〃	造形（ガラス美術）
アメリカ合衆国		1（1）		1（1）	H15．４．１	〃	英語科教育
ドイツ連邦共和国			1	1	H16．４．１	〃	ドイツ語・ヨーロッパ事情
計	1	4（1）	2	7（1）			

（　）は，女性の人数で内数

◇外国人教師◇

国　　籍	人　数	期　　間	分　　野
フィンランド共和国	1（1）	平成２年10月～	造形（染織）
計	1（1）		

（　）は，女性の人数で内数

◇非常勤講師◇

国　　籍	人　数	採用専攻名
連　合　王　国	1	国際文化
大　韓　民　国	1（1）	国際文化
中華人民共和国	3（2）	国際文化
フランス共和国	1	美　術
アメリカ合衆国	1	英　語
計	7（3）	

（　）は，女性の人数で内数

3　外国人研究者の受入

平成17年度は９名の外国人研究者（韓国２名，中国３名，台湾１名，タイ１名，ロシア１名，スウェーデン１名）を受け入れて共同研究等を実施した。

また，ODA（政府開発援助）の一環として，独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施する集団研修と国別研修を平成17年度においては，年３回実施した。集団研修については，「産業技術教育」研修コースとして，平成11年度から実施しており，平成15年度で５年間の研修期間は終了したが，各国からの強い要望もあり，平成16年度からは，「産業技術教育Ⅱ」として，再スタートした。本研修は，本学が中部地区に立地し，中部地区が日本の産業の中心地であることを活用し，講義に加えて企業見学等を組み入れたプログラムである。例年，募集定員を大幅に上回る諸外国からの申込みがあるものであり，「産業技術教育」という自国の産業育成という意味からも友好な国際貢献と考え，今後とも継続させていく方針である。なお，平成17年度は，10か国から10名の外国人研修員を受入れている。

国別研修については，「教育カリキュラム開発」と「学校教育改善」の２研修コースを実施した。「教育カリキュラム開発」研修コースについては，平成15年度から実施されており，今年で３年目であり，「学校教育改善」研修コースについては，平成16年度から実施したものである。共に，サウジアラビア王国の１国を対象にした研修である。サウジアラビア王国は，資源を持たない日本を世界第２位の経済大国に押し上げた日本の教育制度を高く評価しており，この研修を通じて，国の教育カリキュラム編成と学校教育改善に活かすことを目的としている。２研修コースとも，本学が教員養成大学ということもあり，その研修のカリキュラムには充実した内容を誇っており，研修生からの評価も高い。平成17年度は，「教育カリキュラム開発」研修コースが９名，「学校教育改善」研修コースが８名の研修員を受入れている。

また，平成17年度から新たにJICA技術協力プロジェクト（カンボジア国高校理数科教科書策定支援プロジェクト）受託に伴い，平成18年１月カンボジア国から12名の研修員を受入れ，約60日間の日程で，各教科のカリキュラム案の作成作業が本学を中心に行われた。

第 3 章　学生の国際交流

第 3 章　学生の国際交流

第 1 節　留学生の受入れ

1　留学生の受入状況

本学での留学生は現在69名である。平成16年度から留学生の質を向上させるため学部研究生に日本語能力試験 1 級又は日本留学試験（日本語）の受験を課す等の改正を行い，研究生の質の充実を図った。

その結果として学部研究生が減少するという現象が生じ，留学生の全体数が昨年よりも減少することとなった。

平成 16・17 年度国費留学生内訳

年度	総数	男	女	教員研修留学生	研究留学生			学部留学生
					院2年	院1年	研究生	学部4年
16	9	3	6	4	2	2	1	
17	8	3	5	3	3	2		

平成 16・17 年度私費留学生内訳

年度	総数	男	女	院2年	院1年	学部1年	学部2年	学部3年	学部4年	院研究生	学部研究生	特別聴講学生	科目等履修生
16	92	40	52	26	22	2	3		2	2	30	4	1
17	61	25	36	22	21	3	2	3		2	3	4	1

平成 16・17 年度国別留学生数

年度	総数	中国	韓国	台湾	バングラデシュ	ミャンマー	フィリピン	タイ	ラオス	カンボジア	アルゼンチン	エルサルバドル	パラグアイ	アメリカ	ロシア
16	101	81	3	4	2	5	1	1	1		1			1	1
17	69	52	4	1		4	1	1		2		1	1	1	1

2　授業以外の指導（チューター制度等）

留学生が渡日後最初の 1 年間（学部学生 2 年間）は日本語又は専攻の専門分野のチューターが配置される制度があり，各々の指導教員の研究室の大学院生又は学部 4 年生が担当している。彼らの活躍は，国際交流委員会にも報告され確認している。毎月，チューター報告書が留学生係に提出され，それには，彼らの十分すぎる活動が報告されており，彼らの活動は，専門指導教員の指導の下で，専門分野における研究の助言や，その翻訳の援助，そして，日常生活面での援助，すなわち，買物や銀行，市役所での公的手続きの援助，また，休日のピクニックや学会等の旅行での世話，時としては病院の通院の手助けなどに及んでいる。

また，本学には，上記のチューターのほか，留学生の勉学に対するサポートとして，日本語の学習を援助する学生のボランティアがいる。すなわち，主として日本語教育コースの学生が自分達の

研修を兼ねて，各留学生に日本語のボランティアとしてついている。彼らは，日常生活や事務手続き上の日本語ばかりでなく，留学生の専門教育における勉学についても，用語の解説や翻訳に重要な役割を果たしている。平成17年度は，１年生から４年生までの92名が留学生の求めに応じて活動を行った（表１）。特に，来日間もなく，まだ日本語能力が十分でない留学生は，日本語についての知識と関心が高く，彼ら留学生の日本語の学習に根気よく付き合う日本語教育コースの学生の活動が高く評価されている。一方，これは日本人学生にとっても異文化理解と専門への勉学意欲を高める貴重なチャンスにもなっている。

表１　平成17年度日本語ボランティア数

日本語教育コース１年	25名
日本語教育コース２年	22名
日本語教育コース３年	23名
日本語教育コース４年	22名
計	92名

3　卒業・修了後，帰国後の状況

現在，文部科学省では，留学生の卒業・修了後の状況について関心を抱いているが，本学国際交流委員会としては，特に留学生全体の卒業・修了後について組織的には把握していない。しかし，教員研修留学生や国費留学生，短期交換留学生等，公的機関からサポートされている留学生については，帰国している事実を把握している。帰国後の状況については，各指導教員が研究上の連絡をとっているものも多い。タイ王国からの留学生及び研究者については，私的にではあるが，タイ国愛知教育大学帰国留学生同窓会が組織されており，名簿が整備されている。また，ミャンマー及び韓国においても愛知教育大学帰国留学生同窓会が設立されており，委員会のプロジェクトとして，各国での帰国留学生（いわゆる同窓生）を把握し，組織的な名簿作りを行い，かつ，同窓会パンフレットを発行している。今後，可能な国々では同窓会を開催し，組織としての同窓会を発足させることが期待される。

また，独立行政法人日本学生支援機構の帰国外国人研究者短期招聘プログラム（いわゆる５年後研修）では，本学は，ほぼ毎年，その受入れを認めてもらって研究者を招聘しており，定員から推定して，本学は熱心に招聘している大学であると推定される。また，このことは，帰国した留学生たちが母国で研究・教育者として活躍していることを示しており，本学の留学生教育の成果を裏付けるものであるといえる。

4　教員研修留学生の学習・研究の実状

教員研修留学生の専門分野における専門教育は各指導教員に任されており，各指導教員による研究室での指導・研究であるので，委員会の責任で言及することはできない。しかし，最後に提出される指導教員の指導報告書や紀要のアブストラクト，紀要等の論文発表，学会等での発表から，日本人学生と同レベル以上の研究成果を上げている者が多いことがわかり，本学の専門教育は充実していると言える。

第２節　在学生の海外留学・研修

１　海外留学・研修の方針と現状

学生の海外留学は，かなり多いと思われるが，公的なものを除き，把握されていない。それは，海外留学の場合，授業料や就学年限の関係で，休学をして留学する場合が多いからで，その場合，実質的に留学であっても，公的には留学といえるのか，はっきりしないことが多いからである。休学届の理由欄に私費留学のためとあっても，その事実を把握する手段がないこともある。

以下に短期交換留学生等，公的な派遣留学の数を示す。

表１　平成17年度日本語ボランティア数

年　度	総　数	アメリカ	韓　国	タ　イ	イギリス
16	6	2	2	2	
17	4		2	1	1

２　大学間交流

(1) 国際交流協定の新規締結等について

ドイツ：フライブルク教育大学

学術交流に関する協定及び留学生交換に関する実施計画を締結し，平成18年３月29日にドイツ・フライブルク教育大学において調印式を行った。

国際交流協定については，平成18年４月１日現在，上記のドイツ・フライブルク教育大学の締結を含め12カ国22大学（タイについては，９大学でコンソーシアムを形成）と協定を締結している。

また，平成17年度の国際交流委員会において，国際交流基本指針を検討，平成18年度の国際交流委員会においても継続して審議をしており，年度内には制定する方向で進めている。

なお，平成17年度の国際交流委員会において，協定校の見直しも検討し，過去実績の無いカナダのウォータールー大学については，協定の廃止の方向で進めている。

協定大学：アメリカ・ミラーズビル大学，カナダ・ウォータールー大学，アメリカ・ボールステイト大学，アメリカ・ニューヨーク州立大学フレドニア校，中国・南京師範大学，ニュージーランド・オークランド大学，ロシア・モスクワ教育大学，韓国・晋州教育大学校，イギリス・ニューマン高等教育コレッジ，ベトナム・ハノイ教育大学，台湾・国立彰化師範大学，タイ・AUE・ラジャバットコンソーシアム（９大学），インドネシア・国立スラバヤ大学，ドイツ・フライブルク教育大学

(2) 関連行事

・2005年韓国・晋州教育大学校「大学祭学生交流」

日　時　平成17年５月18日～５月24日

場　所　本学，刈谷市立富士松北小学校，社会見学（愛知万博会場）

参加者　10名（学生８名，教職員２名）

主な企画

・本学の大学祭に「ちぢみ」を出店，日本の大学生と共同作業を行なうことにより，相互理解を深める。

・日本の小学校の授業見学を通して，初等教育の理解をすると共に，日本の児童に「韓国伝統打楽器（サムルノリ）」を実演し，交流を深める。

・大学祭において，「韓国伝統打楽器（サムルノリ）」を公演し，日本の学生に文化を紹介すると共に交流を深める。
・愛知万博を見学し，世界の国々の文化を理解する。

・Mission to KOREA 2005「KOREA教育文化交流」

日　時　平成17年９月５日～９月12日
開催地　大韓民国（釜山市，晋州市，大邱市，ソウル市）
参加者　22名（学生20名，教員２名）
主な企画
・韓国の大学祭に「玉せん・文字せん」を出店，韓国の大学生と共同作業を行なうことにより，相互理解を深める。
・晋州教育大学校付設初等学校における大学院生による交流授業と，山清初等学校において学部学生による授業参加を実施し，外国での授業を実体験する。
・日本が朝鮮半島を侵略した地である晋州市内等を見学，平和認識を高める。
・韓国の「教員養成制度」について講演を聴き，日本と韓国の制度ついて理解を深める。

・「日・韓教育文化通信使」シンポジウム

（上記，KOREA教育文化交流事業のフォローアップ事業として開催）
日　時　平成17年10月22日（土）13：30～16：00
場　所　本学第二共通棟411教室
内　容
・参加学生（大学院生及び学部学生）からの研修報告。
・特別講演－姉妹校交流の継続と発展－
　大韓民国　晋州教育大学校　学生部長　李　　榮　晩　教授
・特別講演－韓国の英才教育政策－
　大韓民国　晋州教育大学校　　孔　　泳　泰　教授

・ニューヨーク州立大学フレドニア校「日本語・日本文化」短期研修プログラム

日　時　平成17年５月17日～６月１日
場　所　本学，附属名古屋小・中学校，社会見学（愛知万博会場）等
参加者　４名（学生４名）
主な企画
・「日本語・日本文化」の集中講義参加。
・愛知万博を見学し，世界の国々の文化を体験する。
・工場見学を実施し，日本の「ものづくり」について理解を深める。
・附属名古屋小・中学校を見学し，日本の教育事情を理解する。

・ニューヨーク州立大学フレドニア校特別演奏会「ミュージカルとオペラ」

日　時　平成17年５月23日～５月27日（演奏会は５月23日）
場　所　本学講堂，社会見学（愛知万博会場）等
参加者　20名（学生17名，教員３名）
主な企画
・講堂において，「ミュージカルとオペラ」を公演，アメリカ文化・芸術について理解を深める。
（学生，教職員，一般市民が多数訪れ，好評を博した。）
・愛知万博を見学し，世界の国々の文化を理解する。
・ホームステイを通して，日本文化・習慣を体験する。

第 4 章　社会との連携

第 4 章　社会との連携

第 1 節　公開講座等

1　公開講座

平成 17 年度公開講座開設一覧表

No.	講　座　名	日　時	受講対象	定員	受講者数	場　所	総時間
1	聞いて学ぶ，動いて学ぶ，総合的学習の理論と実践	6月4・18日，7月2日（各土曜）13:00～16:00	小中学校教員	30	10	愛知教育大学	9
2	学校教育臨床 －事例研究Ａ－	6月4（土）～2006年3月4日（土）14:00～17:00	教員・保育士等	30	9	豊川市勤労福祉会館	27
3	箱庭づくり体験	6月5日（日）10:00～16:00 6月25日（土）13:00～17:00	一般	30	29	愛知教育大学	9
4	確かな学力を育てる算数授業の創造	6月18日（土）9:45～17:00 6月19日（日）9:00～15:30	小学校教員等	150	135	愛知教育大学	11
5	学校教育臨床 －事例研究Ｂ－	6月18（土）～2006年3月18日（土）14:00～17:00	教員・保育士等	30	13	碧南市東部市民プラザ	27
6	子どもを活かす授業 －社会科コミュニケーション入門－	7月2日（土）13:30～16:00	教育に関心のある方	20	7	愛知教育大学	2.5
7	心理学を教育実践に活かす	7月2・9・16・23・30日（毎週土曜）10:00～12:00	教育関係者	30	6	愛知教育大学	10
8	※コンピュータネットワークの基礎と実験	7月16・23・30日，8月6日（毎週土曜）13:00～16:00	一般	6	－	愛知教育大学	12
9	子どもの新しい心理学	7月2・9・16・23日（各土曜）14:00～16:00	一般	40	13	愛知教育大学	8
10	キャリア教育とカウンセリング	7月30日，8月6・27日，9月3日（各土曜）13:30～15:30	小中高校教員	30	7	愛知教育大学	8
11	書道入門	8月4・11・18・25日（毎週木曜）13:30～15:30	一般	18	6	愛知教育大学	8
12	音楽・いろいろ	8月6日（土）・7日（日）10:00～16:00	一般の方	50	6	愛知教育大学	10
13	誰でも楽しく絵が描けるキミ子方式 －ペン画と水彩画－	8月8日（月）・9日（火）・10日（水）・11日（木）10:00～16:00	一般	40	30	愛知教育大学	20
14	平成 17 年度教育臨床セミナー	8月22日（月）9:30～16:30 8月23日（火），24日（水）10:00～16:30	幼～高校等の教員	60	24	愛知教育大学	17
15	外国人児童生徒に対する日本語教育	8月26日（金）10:30～16:30	小中学校教員	30	10	愛知教育大学	5
16	ケプラーからニュートンへ	8月27日，9月3・10・17・24日（毎週土曜）10:00～12:00	高校生・教員・一般	20	4	愛知教育大学	10
17	美術愛好家のための銅版画入門 －初歩の初歩－	8月27日，9月3・10・17日，10月1日（各土曜）14:00～17:00	一般	20	12	愛知教育大学	15

No.	講　座　名	日　時	受講対象	定員	受講者数	場　所	総時間
18	子どもの成長と家族の役割を考える	9月6日（火），9月14日（水） 10:00～11:30 9月22日（木）10:00～12:00	一般	30	29	豊田産業文化センター	5
19	数学の問題はこうして作られる	9月17･24日,10月1・8・15日 （毎週土曜）10:00～12:00	高校生	20	7	愛知教育大学	10
20	※学校におけるホームページ製作演習 −デジタルビデオによる情報発信を中心に−	10月1日（土）,10月2日（日） 10:00～15:00	教員	8	−	愛知教育大学	8
21	対人援助職のための関わりの技法 基礎講習	10月1・22日,11月5・19日,12月3日 （各土曜）14:00～17:00	一般（社会福祉・医療従事者等）	15	19	愛知教育大学	15
22	第七回　障害児治療教育セミナー	10月1・15日,11月5・19日,12月3・ 17日（各土曜）14:00～16:30	教員・保育士・関連施設職員等	15	9	愛知教育大学	15
23	学校保健運営組織演習Ⅱ （養護免許法）	7月25日（月）・26日（火）・ 27日（水）9:10～16:30 7月28日（木）9:10～15:45	養護教諭	30	30	愛知教育大学	30
24	保健医科学特論Ⅲ （養護免許法）	7月29日（金）・30日（土）・ 31日（日）9:10～16:30 8月1日（月）9:10～15:45	養護教諭	30	27	愛知教育大学	30
25	※木材加工教育特論 （技術・工業免許法）	8月5日（金）・6日（土）・7日（日） 9:10～16:30 8月8日（月）9:10～15:45	技術科教員	20	−	愛知教育大学	30
26	※機械教育特論 （技術・工業免許法）	8月9日（火）・10日（水）・ 11日（木）9:10～16:30 8月12日（金）9:10～15:45	技術科教員	20	−	愛知教育大学	30
27	電気教育特論 （技術・工業免許法）	8月16日（火）・17日（水）・ 18日（木）9:10～16:30 8月19日（金）9:10～15:45	技術科教員	20	3	愛知教育大学	30
28	栽培教育特論 （技術免許法）	8月22日（月）・23日（火）・ 24日（水）9:10～16:30 8月25日（木）9:10～15:45	技術科教員	20	1	愛知教育大学	30
29	※技術科教育特論Ⅰ （技術免許法）	12月25日（日）・26日（月）・ 27日（火）9:10～16:30 12月28日（水）9:10～15:45	技術科教員	20	−	愛知教育大学	30
30	英語活動から英語教育への転換を目指して−韓国の小学校英語教育と日本における国際理解教育一環としての英語活動の比較−	7月24日（日） 10:20～16:40	小中学校教員・一般	40	9	名古屋市生涯学習推進センター	4.5
31	ことばの世界・世界のことば	7月30日（土） 10:30～16:30	一般	30	24	名古屋市生涯学習推進センター	5
32	グリムの森・ドイツの森（Ⅰ） −『子供と家庭のためのメルヒェン集』における森についての一考察−	10月15･22･29日,11月5・12日 （毎週土曜日）14:00～16:30	一般	50	9	名古屋市生涯学習推進センター	10
33	障害児教育特論 （養護学校教諭免許法）	1月5日（木）・6日（金） 10:20～16:40	養護学校教諭二種免許状を取得希望される方	30	46	愛知教育大学	15

※都合により中止した

2　科目等履修生，研究生

(1) 科目等履修生受入状況

〔学　部〕

（受入状況）

	前期のみ	後期のみ	通　　年	計
一　般	7	11	24	42
外国人	0	0	1	1

（入学目的）

一般科目等履修生の場合，入学目的をみると半数以上の26名が免許状取得（上級免許状取得を含む。）を目的としており，その内訳は以下のとおりである。

免　　許　　状　　取　　得					勉学のため	計
小学校	中学校	高等学校	幼稚園	養護教諭		
1	11	7	1	6	16	42

（単位の修得状況）

一般科目等履修生の場合，総履修科目数188に対し178科目，単位修得率は94.7%である。

外国人科目等履修生の場合は，総履修科目数10に対し 9 科目，単位修得率は90.0%である。

〔大学院〕

（受入状況）

	前期のみ	後期のみ	通　　年	計
一　般	1	0	2	3

（入学目的）

入学目的は，2 名が勉学を目的とし，残り 1 名が専修免許状取得を目的としている。

（単位の修得状況）

総履修科目数 6 に対し 8 科目，単位修得率は100%である。

(2) 平成17年度研究生等受入状況

（受入状況）

種別 / 年度	日本人研究生	外国人研究生	計
平成 17 年度	9	9	18

種別 年度	特殊教育 内地留学生	教職員派遣研修 （理科教育）	教職員派遣研修 （産業教育）	現職教育派遣 内地留学生	計
平成17年度	0	0	1	5	6

（入学目的）

研究生については，大学で学んできた研究題目にいて，さらに高度な知識，技術を修得する目的をもって入学する。

特殊教育内地留学生については，特殊教育諸学校の教員が特殊教育に関する専門的な知識及び技術を習得し，資質の向上と指導力の充実を図る目的をもって入学する。

教職員派遣研修（理科教育）については，諸学校において理科教育を担当する教員が理科教育に関する基礎的研究を行い，資質の向上とその指導力の強化を図る目的をもって入学する。

教職員派遣研修（産業教育）については，諸学校において産業教育を担当する教員が産業教育に関し必要な知識及び技術を習得し，資質の向上とその指導力のかん養を図る目的をもって入学する。

現職教育派遣内地留学生については，諸学校の教員が学校教育に関する知識及び技術を習得し，資質の向上と指導力の充実を図る目的をもって入学する。

3　フレンドシップ事業

（1）美術教育講座フレンドシップ事業（実験授業）（樋口　一成）

1999年度から始まった美術教育講座のフレンドシップ事業も今年度で７年目を迎えた。これまで地域の小中学校・地方公共団体・企業と連携しながら実施してきたが，本年度も大学から車で約15分の距離にある東郷町立東郷中学校と連携して実施することができた。

今年度は，東郷中学校にて2006年１月23日（月）に，大学２年生33名が中学１年生126名にファブリック領域のものづくり（繊維素材を使ったものづくりで，「染める」「紡ぐ」「織る」「編む」「組む」「挟む」「絡める」「漉く」といった内容）を指導させていただくこととし，そのための準備を大学にて行うかたちで一連の活動を進めていった。これらの活動は，「工芸実技Ⅱ」（本学非常勤講師の河村瑞江先生が担当）の授業の中で進めることとなったが，学生たちは授業時間外にも綿密に準備を重ねていった。

本活動の目的は，学生たちの実践的な教育力の育成であるが，同時に中学生と会話を重ねながら，中学生の真の姿を知ることも目的の一つであると考えながら，活動を進めていった。

本事業は，2005年度プロジェクト経費（学長裁量経費）の予算によって実施することができたが，この予算申請の際に，ものづくり教育の活動だけでなく，活動後に一連の活動を出版物としてまとめることとしていたため，１月23日以降は，出版物の作成に取り組んだ。結果，『ファブリック！in life　～繊維素材を使ってつくるものづくり～教材集　＆　国立大学法人愛知教育大学美術教育講座フレンドシップ事業2005活動報告集』を発刊することができた。この出版物は，美術教育講座フレンドシップ事業2005の活動報告の部分と，活動の中で大学生が学び中学生とともに行ったものづくりの内容をわかり易くまとめた教材集の部分の２部構成になっている。この出版物は，現在，大学の生協を通じて購入していただけるようになっている。

■美術教育講座フレンドシップ事業の実施日

●愛知教育大学での準備－ファブリック領域のものづくりを学んだ後，試作や実験を重ねていった。

○第１回目－2005年11月５日（土）14：00～19：00
○第２回目－2005年11月12日（土）10：00～19：00
○第３回目－2005年11月26日（土）10：00～19：00
○第４回目－2005年12月11日（土）10：00～18：00
○第５回目－2005年12月18日（土）11：00～18：00
○第６回目－2006年１月15日（日）10：00～18：00

●東郷町立東郷中学校での活動－12のグループに分かれ，大学生が中学生に指導させていただいた。

○第７回目－2006年１月23日（月）８：30～17：00
（中学校で大学生が指導させていただいた時間は，９：55～14：30。
活動後の14：45～16：20には協議会を開催し，講師の先生方から指導や助言をいただいた。）

■美術教育講座フレンドシップ事業の参加者＆協力者

●東郷町立東郷中学校（森本直樹校長）

○中学１年生
１月23日の中学校での活動に参加していただいた中学１年生〈126名〉

○先生方
１月23日の中学校での活動に準備段階からご協力いただいた先生方〈34名〉

●愛知教育大学美術教育講座

○大学２年生
本フレンドシップ事業で中心となって活動した大学２年生〈33名〉
初等教育教員養成課程図画工作専攻－25名

中等教育教員養成課程美術専攻－６名
初等教育教員養成課程教育科学専攻－１名
障害児教育教員養成課程聴覚言語障害教育コース－１名
○１月23日の中学校での活動の補助をしていただいた学生〈６名〉
大学３年生５名
大学院研究生１名
○フレンドシップ事業の講師の先生方〈東郷中学校の藤田雅也教諭を含めて21名〉
石川　博章　（愛知学泉短期大学助教授）
江村　和彦　（愛知教育大学非常勤講師）
扇　　千花　（名古屋芸術大学助教授）
大西　　久　（兵庫教育大学助教授）
加藤可奈衛　（大阪教育大学助教授）
河村　瑞江　（名古屋女子大学短期大学部教授・愛知教育大学非常勤講師）
小林　尚美　（名古屋芸術大学客員教授）
渋谷　　寿　（名古屋女子大学教授）
田嶋　茂典　（愛知こどもの国育成環境課課長）
辻　　泰秀　（岐阜大学教育学部助教授・愛知教育大学非常勤講師）
富田　　廣　（元愛知教育大学非常勤講師）
永倉　隆敏　（愛知教育大学非常勤講師）
西村　志磨　（一宮女子短期大学講師）
野々山香織　（愛知学泉短期大学研究補助員）
日野　陽子　（香川大学教育学部助教授）
水上　喜行　（大阪教育大学教授）
三輪　義信　（名古屋市立滝川小学校教諭）
山本　麻美　（名古屋女子大学短期大学部非常勤講師）
若尾　真由　（名古屋女子大学短期大学部技術職員）
渡辺　正夫　（元愛知教育大学非常勤講師）
○研究組織〈本学美術教育講座教員８名〉
藤江　　充，宇納　一公，野澤　博行，礒部　洋司，
富山　邦夫，松本　昭彦，○樋口　一成，鷹巣　　純　（○印は主たる担当者）

(2) 保健体育講座フレンドシップ事業（合屋十四秋）

１．事業の目的

１）学生が将来の教員の資質としての「実践的指導能力の開発」を堆進するために夏休みのプール解放授業を利用して，子供たちと学生との直接体験によるふれあいから「教えること」の楽しさや喜びに触れさせることである。
２）子供たちにとって「体を動かすこと」のおもしろさや楽しさを学生と共に学び共感できる態度の育成もねらいとしている。

２．対象とする学年

受講する学生は，愛知教育大学保健体育専攻及びスポーツ健康コース２年，体育の副免としてとる者である。

３．学生の現状と将来展望

実際にこの経験を教育実習（主免，隣接校ともに）で直接教える機会が全くないのが現状である。特に，体育を専門とする本講座の専攻学生さえも，卒業するまでに「こども」と実際にふれ合いながら教材研究を行うチャンスがない。体育の教科の中でも，水泳は，できたときの達成感が明確に表れる。しかし，ただ単に，水泳の技術の伝達のみ，に終わって欲しくない。なぜ，水泳という教材が学校教育の中で必要なのか？その中身は現状のままでよいのか？スイミングスクールで教えている内容とどこが違うのか？我々の生活の中で水泳はどのように位置づけられるのか？など，「背景となる水泳の授業理念」を参考にしてこれからの水泳教材研究を工夫，改善，挑戦してもらえるような一助になればと考えている。

４．担当教員　保健体育講座教員（合屋十四秋，高橋　裕子，森　勇示，寺本圭輔）

５．実施概要

１）導入：大学での事前トレーニング

７月25．26日（本学教員による実技と指導法の事前講習，模擬授業の計画，実践，評価，反省までの一連の流れとミニ教材研究と教案づくり）

２）展開Ⅰ：７月27．29日，附属岡崎小学校に出向いて水泳指導。特に，水泳があまり得意でない，又は運動が苦手な子供たち約60名を対象として，担当教諭と連携をとって実施した。

３）展開Ⅱ：８月３．５日，富士松北小学校にて上記と同様の児童約60名を対象に。担当教諭と連携をとって実施した。

４）展開Ⅲ：８月22．24日，東山小学校にて上記と同様の児童約60名を対象に。担当教諭と連携をとって実施した。

５）実施内容：指導対象は，３年生を中心とした初心者（10m以下の泳力）であり，学生１人当たり3.5名の児童を指導する体制をとった。指導目標は，（１）児童が水泳を好きになる，（２）25m程度まで泳げるようになる，こととし，それに合わせた指導プログラム（指導案）を作成する。

６）指導展開例：導入として，全体，班別に鬼ごっこや輪くそりなどの水慣れから潜る，浮くなどの水中動作を習得する，以下，伏し浮き，背浮き，けのび，泳法，25m距離泳に挑戦，とした。

６．今後の課題と展望

アンケート実施結果から，普段，学生が子ども達と直に接する機会がほとんどないことがわかった。従って，このような事業を実施する意義が再確認でき，今後も継続的に行う必要を感じた。また，学生の自主性及び主体性を育みながら，将来，教職を目指す一助となるよう十分なサポートをしていきたい。

7．本年度実施の様子

4　大学祭，子どもまつり等

大学祭は，学生組織による大学祭実行委員会が中心となって，クラブ・サークルの発表，ステージ，出店企画，スポーツ祭典，大学紹介など多くの催し物を企画し実施している。

また，例年，大学祭の前週の日曜日に子どもまつりを実施している。近隣の小学生を対象として，ゲームをしたり，物づくりなどをして，一日中，学生と子どもが遊びまわる催し物で，保護者からも好評を博している。秋にはミニミニ子どもまつりも実施している。

いずれの企画も，地域社会との交流の意味から，より活発に継続的に実施することが望まれる。

平成17年度のそれらの内容は次のとおりである。

◎第36回大学祭　　テーマ「more festival more life!!」

日　　時：平成17年 5 月18日（水）～ 5 月22日（日）
参加学生：約2,000名
企　　画：スポーツ祭典　　5 /18（水）～ 5 /20（金）
運動会　　5 /20（金）
ミニゲーム・レク祭　　5 /21（土）～ 5 /22（日）
お笑い企画　　5 /22（日）
ステージ　　5 /20（金）～ 5 /22（日）
大学紹介　　5 /21（土）～ 5 /22（日）
フリーマーケット･出店企画　　5 /21（土）～ 5 /22（日）
献血　　5 /21（土）

◎第36回子どもまつり

日　　時：平成17年 5 月15日（日）
参加学生：約250名
子ども参加人数：約1,300名
企　　画：人形劇「五箇山の雪人形」「ほんとうのたからもの」
人形劇「むぎばたけ」と紙芝居「とりかえっこ」
ミュージカル「星空の紙ヒコーキ」
かがくであそぼう　　算数のおもちゃ箱
世界コマツン滞在記　ピノコ，ギャングルへ行く！
ここほれワンワン＊ジャングルへん＊
キーホルだぁ～　　ばるーんあーと
おめんづくり　　らんらんシーシューティング
作って遊ぼう　　ドノミでトライ
とばせ　まわせ　ふくらませ

◎第29回ミニミニ子どもまつり

日　　時：平成17年12月11日（日）
参加学生：約40名
子ども参加人数：約170名
企　　画：人形劇「しっぺい太郎」　　紙芝居「マフィンおばさん」
ぬりえのひろば　　ジョンソンとおうちであそぼう！
算数のおもちゃ箱　　ガイアの伝説

かがくであそぼ！
ピノコがりに行こうよ!!
かえるぴょっこりすごっっロク
ハッピークリスマス!!
ミニミニ縁日
せかいすごろく

第２節　相談事業

１　障害児治療教育センター

本センターの目的は，障害児治療教育の実践を通して，障害のある子どもの教育原理や教育方法を明らかにしようとするものである。本センターでは，定期的・継続的に教員，教務職員，セラピスト，学生，院生が障害児との治療教育的かかわりを実践している。この臨床活動を通して障害児の治療教育の原理を探求し，学生・院生に臨床実習の場を提供し，さらに両親をはじめとして学校や地域社会に貢献しつつ連携を深めようとするものである。以下平成17年１月より12月までの１年間の相談活動（治療教育の実践）を報告したい。

表１　平成17年１月より12月までの相談総ケース（140件）の経過

平成16年以前より			終結７件・中断２件		
継続ケース	104件	→	継続	95件	→ 平成17年１月現在継続ケース
平成17年度			継続	10件	105件
新規ケース	36件	→	終結	18件	
（総計　140件）			中断	8件	

表２　平成17年１月～12月までの相談総ケースの年齢別内訳

	０～３歳	４～６歳	小学生	中学生	（高校生）	19歳以上	合計
男	2	21	34	18	10	16	101
女	0	8	11	6	2	12	39
計	2	29	45	24	12	28	140

表３　平成17年相談総ケースの診断別内訳

広汎性発達障害（自閉症）	93
知的障害	17
注意欠陥/多動性障害（ADHD）	4
学習障害（LD）	3
不登校	3
緘黙症	5
情緒障害	2
その他（神経症，うつ，人格障害等）	13
計	140

表１に示したように，平成16年の１年間に新規に来談したケースは36件であり，平成15年以前より継続して来談し治療教育を行なっているケースは104件であった。障害児の親の訴える子どもの問題行動などは，短期間に容易に改善することは難しく，継続して来所することを希望する場合が多く，平成17年１月現在105件のクライエントが来所している。発達障害児の治療教育に対する需要は増え続けるばかりである一方，学生，院生も含めたセンターのスタッフは限られているため，治療申し込みに対し，引き受けて相談にまで至るケースよりも，お断りしたり，他機関を紹介したりするケースのほうが多いのが現状である。

表２には，来談ケースの年齢別内訳を示した。小学校年齢段階の子どもが多いが，幼児期から成人にいたるまで幅広く来所していることがわかる。幼児期にインテーク（初回面接）して，長期間フォロウしているケースも多い。なお，来談ケースの多くは，特殊学級や養護学校に在籍しており，（高校生）には，養護学校高等部や専門学校の生徒も含まれている。また，小学校，中学校の通常学級や保育園，幼稚園に通う軽度発達障害児など，今後の特別支援教育の対象となる子どもも多い。

表３には，診断別内訳を示した。自閉症，アスペルガー障害等を含む広汎性発達障害の子どもが多く，いわゆる発達障害の範疇に入る子どもたちが約84%を占めており，このような子どもたちへ

の治療教育の実践が本センターの特色とも言えよう。新規の相談依頼の場合，「なんとか（もっと）ことばをしゃべるようになってほしい」という親の訴えを頻繁に聞く。親には定期的あるいは随時相談に乗り（親面接），子どもにはプレイセラピー（通常週１回50分）を継続的に実施しながら，治療教育を進めている。本センターに来所するケースは，このように発達全般に深く関わった問題を背景にもっており，長期にわたって継続して来所されることが多くなる。

表４は，平成17年１月より12月までの１年間の本センターの相談活動の実際を示したものである。臨床活動の中心は，プレイセラピーの実践と親面接（カウンセリング）であり，両者を合わせて延べ件数は2,440件となった。また，教員の指導の下，音楽療法士資格をもった大学院生が数名の幼児に対して音楽療法を行い，延べ55セッションもたれた。比較的長期にわたって継続して相談に乗っている場合やクライエントの事情によっては，手紙（59件）による相談方法もとられている。電話による相談は延べ32件であったが，これは連絡等短時間で済むものは除いており，純粋に相談としての数である。なお心理検査（11件）は，田中ビネー知能検査，WISC－Ⅲ知能検査や新版K式発達検査等を実施している。また，県内教員へのスーパービジョン，コンサルテーション等も行っている。

以上のように，来談児（者）に対するプレイセラピーや親面接，手紙相談，電話相談等全て含めると延べ件数２,571件となった。

表４　臨床活動（平成17年：月別統計）

	記入注意事項	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
プレイセラピー	1回　50～60分	157	163	155	109	169	184	170	31	141	155	178	145	1757
カウンセリング（親面接を含む）	1回　50～60分	70	60	64	52	77	77	59	11	46	61	57	49	683
音楽療法	セラピスト1人 1回　50～60分	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
アセスメント面接	ガイダンス・インテイク 1回　60～90分	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	4
心理検査	検査1 フィードバック1	0	0	0	2	0	2	0	4	0	0	0	3	11
手紙相談	回	3	5	7	6	6	5	8	4	4	4	5	2	59
電話相談	回	4	4	2	6	5	3	2	0	0	0	3	3	32
コンサルテーション	回	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	1	1	6
スーパービジョン	1回　50～60分	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	2	1	12
計		242	234	229	176	258	274	241	51	194	221	247	204	2571

2　教育実践総合センター

本年度に，教育実践総合センターでは，以下の相談活動を行った。

(1) 電子メール，FAXによるいじめ相談

「SOBA」（Symposium of Bullying in Aichi：学生を主体としたボランティア活動）による電子メール・FAXを利用した相談活動（４月から10月までに75件の受信内容に対する返信）

事　　項	対　象	件　数	時　間	担　当　者　等
電子メール，FAXによるいじめ相談 “SOBA”	一般	75	随　時	折出健二，川北　稔，いじめについて語る会メンバー

(2) 面接教育相談

センター教育臨床分野が中心となり，愛知教育大学教育実践総合センター心理教育相談室を運営してきた。ここでは，いじめ・不登校をはじめとする面接教育相談に応じてきており，毎週 1 回1時間の親子併行面接を基本として，カウンセリング，箱庭療法，プレーセラピー，等の技法を用いたインテンシィヴな心理療法を行ってきた。

同時に，この面接教育相談は学校教育臨床専攻臨床心理学コースの大学院生の臨床教育の場にもなっており，臨床心理士資格をもつ教員（センター教員並びにセンター研究員）が個人スーパーヴィジョンをしながら，大学院生にも担当させてきた。また，ほぼ月 3 回の割合でケースカンファレンスを持ち，ケース検討を行う中で，大学院生の臨床教育の一環としてのグループ・スーパーヴィジョンに充ててきた。

本年度（平成16年12月 1 日～17年11月30日）の面接教育相談の概要は以下の通りである。

事　　項	対　象	人　数	時　間	担当者等
①外来面接相談	一　般	175	2,764	生島博之，他学内臨
②対教師等相談	教員等	79	133.5	床心理士教員

内訳：

①外来面接相談

受付ケース数	112（175 人）	総面接回数	2,764 回
前年度からの引継ぎ	77（129 人）	総面接時間	2,764 時間
新規受付	35（ 46 人）	面接回数範囲	1～51 回

＜問　題　別＞

不登校・不登校傾向	45	家庭内暴力	2
対人関係の問題	16	いじめられ	2
場面緘黙	2	自己臭	1
遺尿・吃音・チック	4	強迫傾向	1
発達障害	6	リストカット	2
感情のコントロール	2	対人恐怖症	2
非行・怠学	5	摂食障害	1
落ち着きがない・易怒性	2	過呼吸	1
生活の乱れ	1	家族関係の問題	2
自分（の性格）について	4	その他	11

＜面接形態別＞			
単独面接（本人）	29	父母子併行面接	4
親（母）面接	11	母子併行面接	68
＜年齢区分別＞			
幼　児	2	高校生，16～20歳	17
小学生	41	成　人	6
中学生	26	親による子の相談	83
＜帰　結　別＞			
終　結	28	中　断	14
継続中	132	経過観察	1
②対教師等相談			
受付ケース数	79	総面接回数	79回
前年度からの引継ぎ	4	総面接時間	133.5時間
新規受付	75		

＜問　題　別＞		＜帰　結　別＞	
幼稚園・保育園学級運営	0（　0人）	終　結	74
学級運営	37（ 38人）	継続中	5
スクールカウンセラーへのスーパービジョン	6（　6人）		
こころの教室相談員などへのスーパービジョン	7（　6人）		
電話相談員へのスーパービジョン	18（ 18人）		
適応指導教室指導員へのスーパービジョン	6（　5人）		
その他	6（　6人）		

第 3 節　施設開放

1　附属図書館

本学附属図書館において，1996年 8 月 1 日から地域開放の一環として，調査・研究を目的とした初等中等教育教員を含む学外者に対して，所蔵する資料を大学の教育研究に支障のない範囲内での館内閲覧，館外貸出等の利用提供を開始した。2000年度より夜間大学院及び昼夜コースが発足したのにあわせ，授業開講日の週 3 日（火・水・金曜日）は22時，月・木曜日は20時まで，また，土曜日は休業期間中を除いて10時から16時まで開館し，2002年度には試行的に日・祝日の開館を実施し，さらに，2003年度より利用者の便を考慮して，授業開講日の月～金は22時まで，また，土・日・祝日は休業期間中を除いて11時から17時まで開館している。

以上のように，附属図書館として学外利用者に利用し易い環境づくりに努めている。

因みに，2005年度の学外者の本館利用状況を次表に示した。

学外者利用状況

貸出人数（人）	貸出冊数（冊）
475	1,101

また，2005年度は地域貢献支援事業として，刈谷市中央図書館と初の共同催事を11月 2 日から11月15日まで刈谷市中央図書館展示コーナーにて「環境についての教科書と絵本展―ドイツを中心に―」を開催した。学内外より669名の閲覧者があった。因みに，アンケートをとったので次表に示した。

学外者利用状況

展示会を見ての感想は？（回答者総数　305名）			
よかった	よくなかった	どちらともいえない	無回答
252名（83%）	3 名（1 %）	42名　（14%）	8 名

2　体育施設など

平成17年度　体育施設開放状況

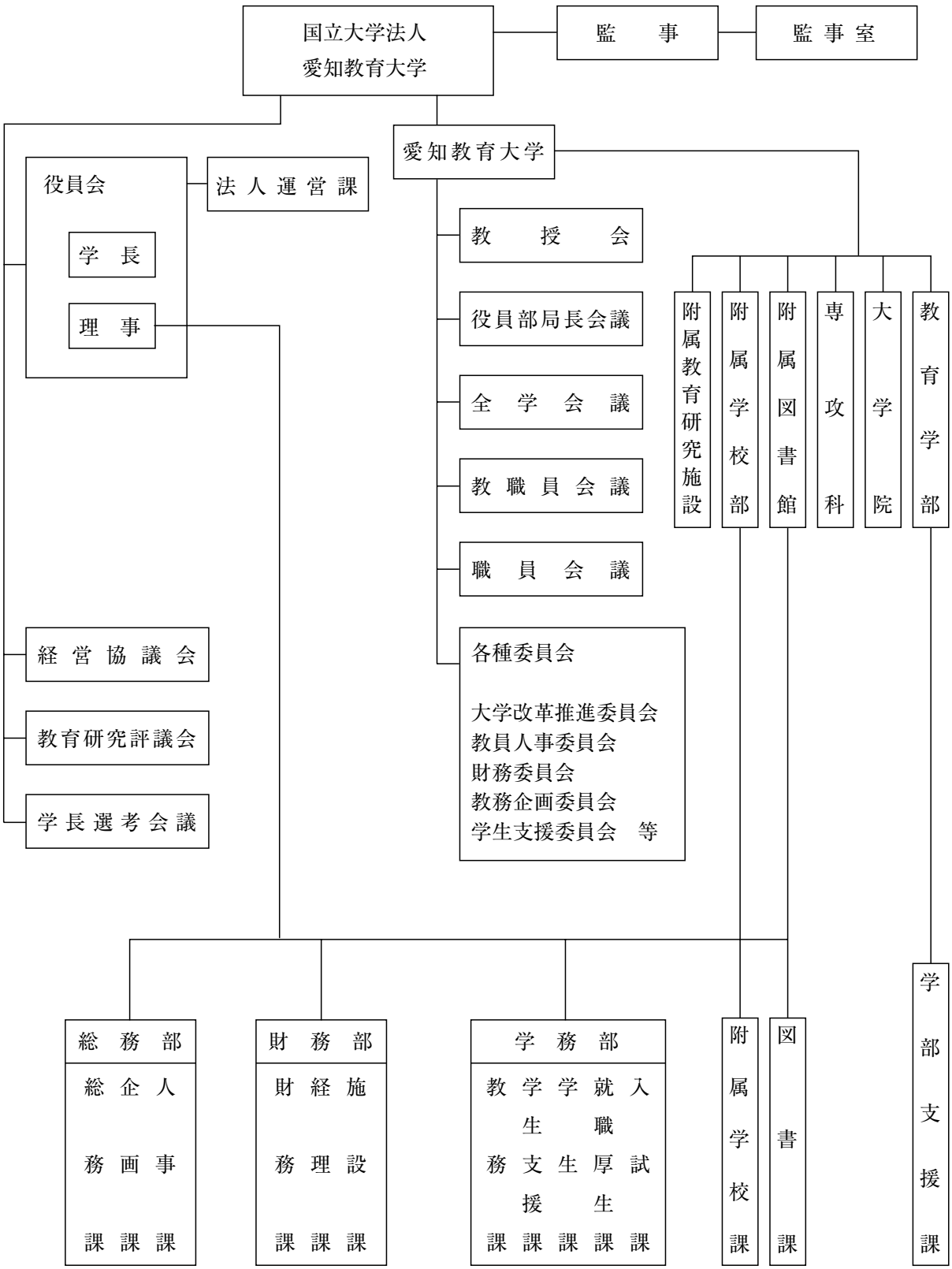
使用場所	件数	延日数	相手先	目的	使用料
野球場	1	1	個人	野球練習	有料
野球場	1	1	個人	野球練習	有料
野球場	1	1	個人	野球練習	有料
野球場	3	3	刈谷セントラルボーイズ（少年野球）	野球練習	有料
運動場土面	1	1	個人	ラクロス試合	有料
運動場土面	2	2	個人	ラクロス練習	有料
運動場土面	1	1	名古屋ラクロスクラブ	ラクロス練習	有料
運動場芝面	1	2	愛知県サッカー協会	公認Ｃ級コーチ養成講習会	有料
陸上競技場	1	1	愛知県サッカー協会	1級候補審判員体力テスト	有料
陸上競技場	1	1	名古屋ラクロスクラブ	ラクロス練習	有料
陸上競技場	1	1	個人	ラクロス試合	有料
陸上競技場	1	2	個人	陸上競技練習	有料

第５章　管理運営の概要

第５章　管理運営の概要

第１節　組織運営機構

平成17年度からは，以下のような組織運営機構で構成している。



第２節　教育及び研究組織

１　教育組織

本学の教育組織は，平成12年度からの改革に基づいて以下のように改編した。その基本的な考え方は，教員養成４課程と学芸４課程の相互補完による教育の充実である。

なお，教員免許状の他に，希望する学生には，次の資格が取れるようになっている。

①社会教育主事　②社会福祉主事　③学校図書館司書教諭　④学芸員
⑤保育士　⑥社会福祉士　⑦甲種危険物取扱者

ただし，①②③は全学生が，④は社会専攻，理科専攻，図画工作専攻，美術専攻，国際文化コース，造形文化コース，環境教育課程の学生が，⑤は幼児教育系の学生が対象である。なお，⑥は共生社会コースの学生が，⑦は環境教育課程の学生が対象で，受験資格の取得ができる。

(1) 教育学部

教員養成４課程

●初等教育教員養成課程

・幼児教育系＝幼児教育専攻（主免：幼稚園教諭１種免許状）（副免：小学校教諭１種免許状）
・教育科学系＝教育科学専攻
・人文社会系＝国語専攻，社会専攻
・自然系＝算数専攻，理科専攻
・芸術系＝音楽専攻，図画工作専攻
・生活・スポーツ系＝体育専攻，家庭専攻

（主免：小学校教諭１種免許状）
（副免：中学校教諭１種免許状；専攻教科
高等学校教諭１種免許状；専攻教科
幼稚園教諭２種免許状）

●中等教育教員養成課程

・教育科学専攻：（主免の教科は希望免許教科による）
・国語・書道専攻
・社会専攻
・数学専攻
・理科専攻
・音楽専攻
・美術専攻
・保健体育専攻
・技術専攻
・家庭専攻
・英語専攻

（主免：中学校数諭１種免許状；専攻教科）
（副免：小学校教諭１種免許状
高等学校教諭１種免許状；専攻教科）

●障害児教育教員養成課程

（主免：養護学校又は聾学校の教諭１種免許状，小学校教諭１種免許状）
（副免：中学校教諭２種；希望免許教科，幼稚園教諭２種免許状）

●養護教諭養成課程

（主免：養護教諭１種免許状）
（副免：中学校及び高等学校教諭１種免許状：保健，高等学校教諭１種免許状；看護）

学芸４課程

●国際理解教育課程

・国際文化コース　（中学校教諭１種免許状；国語又は社会又は英語，及び，高等学校教諭１種免許状；国語又は地理歴史又は公民又は英語）

・日本語教育コース　　（中学校教諭及び高等学校教諭１種免許状；国語又は英語）

●生涯教育課程

・共生社会コース　　（中学校教諭及び高等学校教諭１種免許状；家庭又は福祉）

・スポーツ・健康コース（中学校教諭及び高等学校教諭１種免許状；保健体育）

・造形文化コース　　（中学校教諭１種免許状；高等学校数諭１種免許状；美術・工芸）

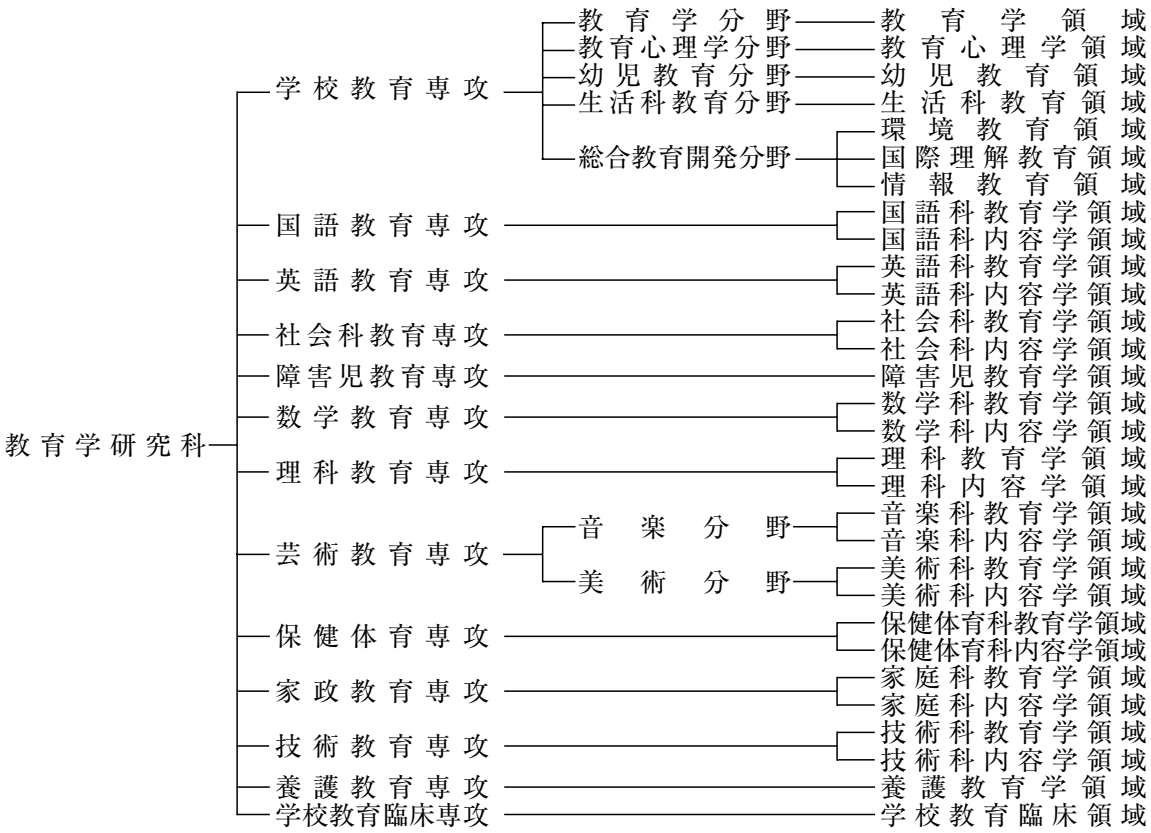
●情報教育課程（中学校教諭及び高等学校教諭１種免許状；数学，高等学校教諭１種免許状；情報）

●環境教育課程（中学校教諭及び高等学校教諭１種免許状；理科）

(2) 大学院

本学の大学院に置かれている研究科は教育学研究科（修士課程）である。平成12（2000）年度には，入学定員がそれまでの110名から150名に増員され，新たに学校教育臨床専攻が設置された。同じく平成12（2000）年度からは，昼間開講コースに加え昼夜開講コースを設け，現職教員等の入学に便宜を図っている。

研究科を構成する専攻（分野）及び領域は次のとおりである。



なお，平成13（2001）年度には，学校教育臨床専攻に，臨床心理士の受験資格を取得できる臨床心理学コースが設置された。

(3) 専攻科（修業年限１年，入学資格は，小・中・高校又は幼稚園の教諭の普通免許状を有する者など）

●特殊教育特別専攻科知的障害教育専攻（養護学校教諭１種又は２種免許状）

(4) 臨時教員養成課程（１年課程）（入学資格は，小・中・高校及び幼稚園のうち，いずれかの普

通免許状を有する者）

●肢体不自由教育教員養成課程（養護学校教諭１種又は２種免許状）

●情緒障害教育教員養成課程（養護学校教諭１種又は２種免許状）

２　研究組織

本学の研究組織は，平成12年度から，教室等の制度から大講座制へと変革をした。

21世紀の教育を担う教員の養成のあり方を踏まえ，実践的指導力等を持った質の高い教員の養成，教育の現代的課題や社会のニーズへの対応をめざして，19の大講座に再編した。そして，教育研究の進展や社会的需要に応えて，教育研究活動を柔軟且つ弾力的に進められるようにした。

その大講座及び各附属センターと主な教育研究分野は，以下に示すとおりである。

講　　座	教 育 研 究 分 野 の 概 要
国 語 教 育	国語学，国文学，漢文学，書道，国語科教育，中国文学，中国哲学，東洋学，国際理解教育
日本語教育	言語学，日本語学，日本語教育学，日本文化，国際理解教育
社会科教育	歴史学，哲学，倫理学，宗教学，思想学，比較文化，社会科教育，環境教育，国際理解教育
地 域 社 会 シ ス テ ム	地理学，地誌，法律学，政治学，社会学，経済学，社会科学，民俗学，環境教育，国際理解教育
数 学 教 育	代数学，幾何学，解析学，位相数学，応用数学，確率論，統計学，コンピュータ，情報数学，数学科教育，情報教育
情 報 教 育	情報教育，情報工学，情報科学，情報社会学，認知科学，情報数学
理 科 教 育	基礎物理学，応用物理学，無機物理化学，有機化学，分類形態学，生理生態学，天文・地球物理学，地質鉱物学，理科教育，環境教育，地球環境論
生活科教育	生活科教育
音 楽 教 育	声楽，器楽，作曲・指揮法，音楽理論，音楽史，音楽科教育
美 術 教 育	美術科教育，絵画，彫刻，デザイン，美術理論・美術史，総合造形
保 健 体 育	体育実技，体育学，運動学，衛生学・公衆衛生学，学校保健学，保健体育科教育
技術科教育	木材加工，金属加工，機械，電気，工学，栽培，情報基礎，工業科教育，技術科教育
家 政 教 育	生活経営，被服学，食物学，住居学，保育学，生活環境情報，家庭科教育，生涯教育
外国語教育	英語学，英米文学，英語コミュニケーション，比較文化，言語学，社会学，ドイツ文学，フランス文学，英語科教育，国際理解教育
障害児教育	障害児教育学，障害児心理学，障害児病理，障害児保健，肢体不自由児教育，聴覚言語障害児教育，精神医学，発達・臨床心理学，社会福祉学，生涯教育
幼 児 教 育	幼児教育，幼児心理，保育内容の研究
養 護 教 育	養護学，衛生学，公衆衛生学，学校保健学，栄養学，解剖生理学，微生物学，免疫学，精神保健学，看護学
学 校 教 育	教育方法学，教育課程，教育実践学，集団教育学，道徳教育，生活指導学，教育哲学，教育史，教育社会学，教育制度学，教育経営学，学校図書館学，社会教育学，職業指導，進路指導，キャリアガイダンス，教育心理学，学習心理学，社会心理学，発達心理学，臨床心理学，人間関係，生涯教育
教育臨床学	教育臨床実践学，学校社会臨床学，学校心理学
教育実践総合センター	教育心理学，臨床心理学，教育工学，教育実践学
障害児治療教育センター	障害児治療教育学，障害児臨床心理学，障害児臨床教育学
保健管理センター	精神医学

以上のように，19講座・３センターである。なお，教育臨床学講座は，大学院教育学研究科に置かれている。

第3節　教員の構成

1　学部・大学院・センター・非常勤講師

◇教員（常勤）◇　　平成18年3月31日現在

	講座等名	教授	助教授	講師	助手	計
教育科学系	生活科教育	2	2			4
	障害児教育	4	3（1）	1		8（1）
	幼児教育	2（2）	3（1）			5（3）
	養護教育	5（1）	3（2）			8（3）
	学校教育	13（2）	7（1）	2（1）	2（1）	24（5）
	教育臨床学	1	1（1）	1（1）		3（2）
	教育実践総合センター	1	1	1		3
	障害児治療教育センター	1	1			2
人文社会科学系	国語教育	12	7（1）			19（1）
	日本語教育	3（2）	3（2）	1（1）		7（5）
	社会科教育	12（1）	3			15（1）
	地域社会システム	9	4（1）	1		14（1）
	外国語教育	9（1）	11（2）	2（1）		22（4）
自然科学系	数学教育	9	5	1	1（1）	16（1）
	情報教育	4	7	2（1）	2（1）	15（2）
	理科教育	23	12		2	37
創造科学系	音楽教育	6（3）	3（1）	1		10（4）
	美術教育	8	6	2		16
	保健体育	12（1）	6（1）	1	2	21（2）
	技術教育	5	2			7
	家政教育	7（4）	5（3）		1（1）	13（8）
	保健管理センター	1	1			2
合計		149（17）	96（17）	16（5）	10（4）	271（43）

（　）は女性の人数で内数

◇非常勤講師◇　　（平成17年度のべ任用数）

	男	女	計
教育科学系	45	40	85
人文社会科学系	53	33	86
自然科学系	64	10	74
創造科学系	48	24	72
大学院関係	23	9	32
センター	2	0	2
合計	235	116	351

2　リサーチアシスタント（RA）・ティーチングアシスタント（TA）

	男	女
ティーチングアシスタント	15	23

	男	女
リサーチアシスタント	0	0

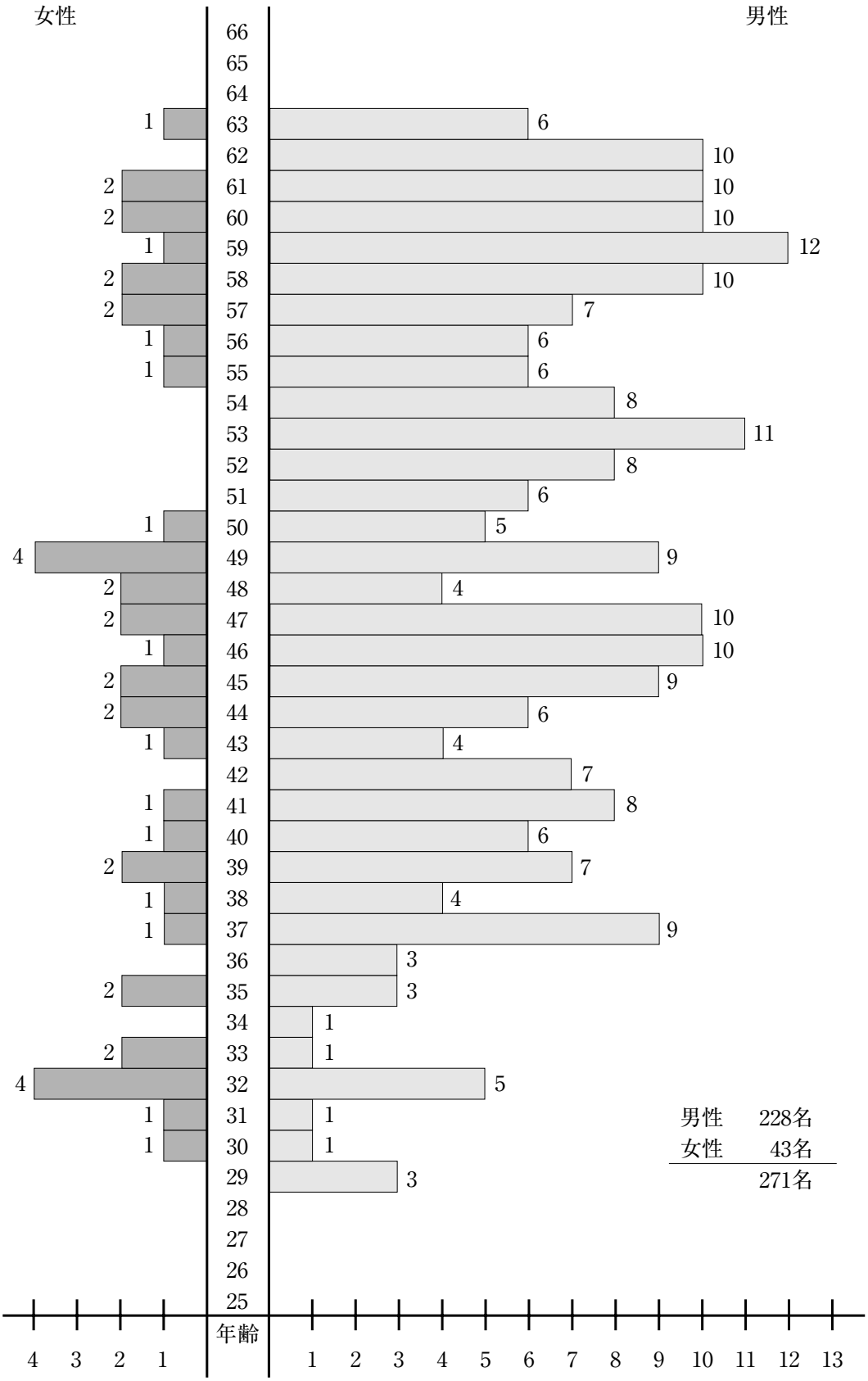
専攻名	入学定員	17年度 TA数	16年度 TA数
学校教育	27	5（3）	6（4）
国語教育	7		
英語教育	9		
社会科教育	14	3（1）	3（2）
障害児教育	12		
数学教育	11	1（1）	
理科教育	17	8（3）	11（5）
芸術教育	19	9（8）	9（7）
保健体育	8	6（4）	
家政教育	9	1（1）	1（1）
技術教育	5	4（1）	4
養護教育	3	1（1）	2（1）
学校教育臨床	9		
計	150	38（23）	36（20）

（　）は女性の人数で内数

専攻名	入学定員	17年度 RA数	16年度 RA数
理科(物理)	17	0	3（1）

（　）は女性の人数で内数

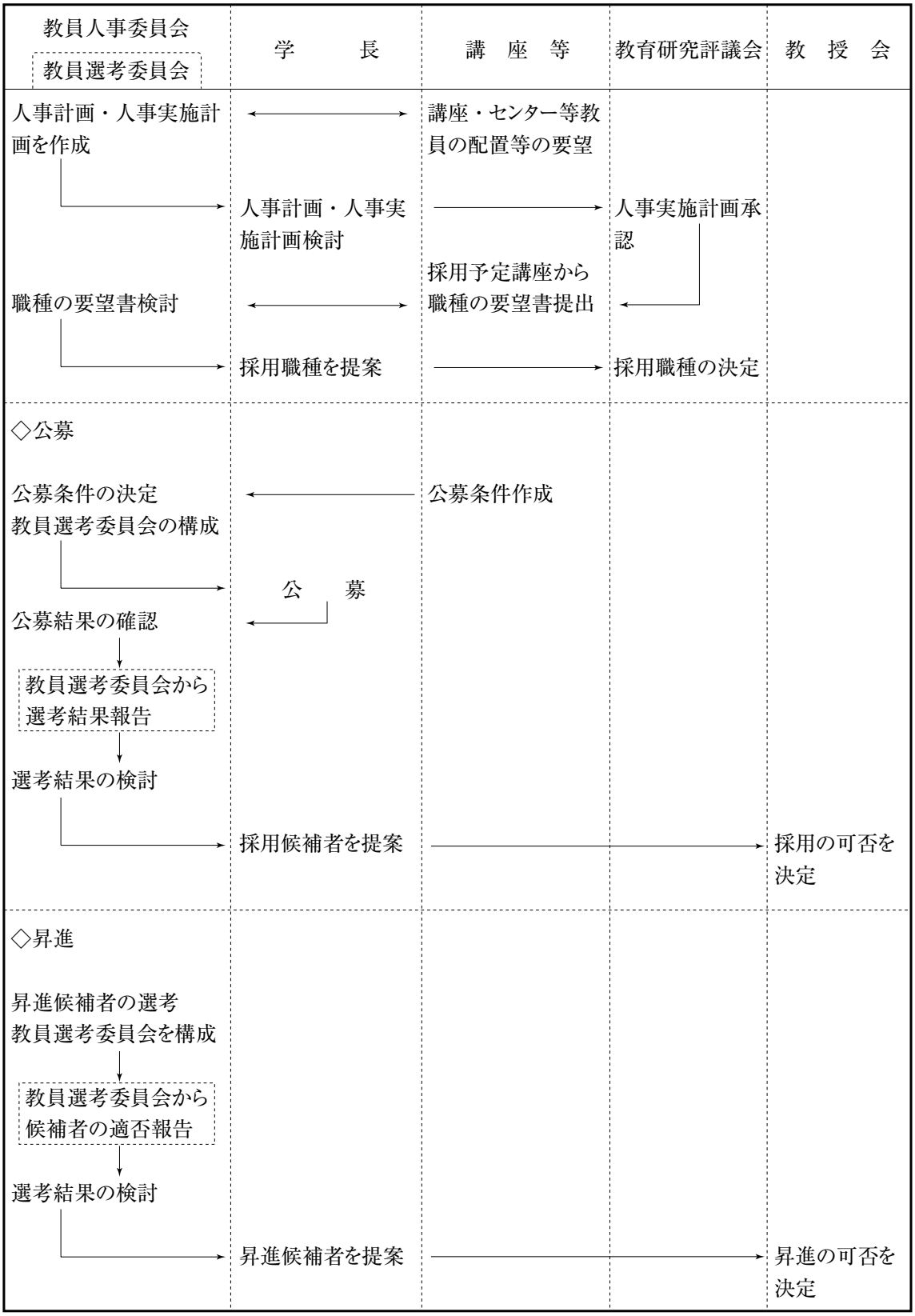
3　教員の構成（平成18年 3 月31日現在）



4　採用・昇進の手続き・基準・公平性

◎　採用・昇進の手続き

教員の採用及び昇進人事に関する各種委員会等の役割は下記のとおり。



◎　本学の教員選考基準

大学設置基準（昭和31年文部省令第28号）で規定している，教授，助教授及び講師の資格に関し，教育上の能力の重視，外国の大学における教育歴の評価等を行っている。

愛知教育大学教員選考基準

（2004年５月12日制定）

（趣旨）

第１条　大学の教員職員の採用及び昇進は，以下の基準に基づき，選考により行うものとする。

（教授）

第２条　教授の選考は，次の各号のいずれかに該当し，かつ，本学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力を有すると認められる者について行う。

一　博士の学位（外国において授与されたこれに相当する学位を含む。）を有し，研究上の業績を有する者

二　研究上の業績が前号の者に準ずると認められる者

三　大学において教授，助教授又は専任の講師の経歴（外国におけるこれらに相当する教員としての経歴を含む。）のある者

四　芸術，体育等については，特殊な技能に秀でていると認められる者

五　専攻分野について，特に優れた知識及び経験を有すると認められる者

（助教授）

第３条　助教授の選考は，次の各号のいずれかに該当し，かつ，本学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力を有すると認められる者について行う。

一　前条各号のいずれかに該当する者

二　大学において助手又はこれに準ずる職員としての経歴（外国におけるこれらに相当する職員としての経歴を含む。）のある者

三　修士の学位（外国において授与されたこれに相当する学位を含む。）を有する者

四　研究所，試験所，調査所等に在職し，研究上の業績を有する者

五　専攻分野について，優れた知識及び経験を有すると認められる者

（講師）

第４条　講師の選考は，次の各号のいずれかに該当する者について行う。

一　第２条又は前条に規定する教授又は助教授となることのできる者

二　その他特殊な専攻分野について，本学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力を有すると認められる者

（助手）

第５条　助手の選考は，次の各号のいずれかに該当する者について行う。

一　第２条から前条までに規定する教授，助教授，又は講師となることのできる者

二　学士の学位（外国において授与されたこれに相当する学位を含む。）を有し，２年以上の教育又は研究の職務に従事し，かつ，専攻分野について修士課程修了以上の能力を有する者

附　記

１　この基準は，2004年５月12日から実施し，2004年４月１日から適用する。

◎　採用手続等について

本学教員の採用及び昇進に関しては，愛知教育大学教員選考基準に基づき，教員選考委員会，教員人事委員会の議を経て，教授会において候補者を選考している。

採用については，公募により広く人材を募っており，又，公平性を確保するため，教授会への附議資料として順位第 2 位の者（氏名は伏せて）の業績等についても公表している。

昇進候補者の選考にあっては，本人が提出した「研究，教育，管理運営及び社規的活動等に係る業績一覧」等に基づいて，教育実績及び研究実績等の総合的な評価を行っている。

また，これらの業績評価のための「研究，教育，管理運営及び社会的活動等に係る業績一覧」の評価資料については，研究業績の点数化及び教育評価の方法等について，評価の公平性，客観性確保の観点から，教員人事委員会で不断の検討を行っている。

5　教員の兼職の状況

兼業にあたっては，就業規則及び職員兼業規程で定められている。件数及び時間数については，教授会のおいて週2件4時間とすることが了承されている。

職員兼業規程で定められている兼業の種類及び内容は次のとおりである。

1．営利企業の役員等を兼ねる場合

2．営利企業の役員等以外の兼業

主に，①国立大学法人，国立高等専門学校法人，公私立学校，専修学校，各種学校等の非常勤講師に従事する場合　②公私立病院，診療所等の非常勤医師に従事する場合　③国，地方公共団体の審議会委員等に従事する場合などがある。

3．自ら営利を目的とした事業を行う場合

主に，①大規模な農業等営む場合　②アパート等の賃貸の場合　③駐車場や土地の賃貸の場合などがある。

職員は，上記の兼業を行おうとする場合は，事前に兼業承認申請書を提出し，学長の承認を得てから実施しなければならない。ただし，1の営利企業の役員等を兼ねる場合については，教育研究評議会の議を経ることとなっている。

なお，平成17年度における本学教員の学外での兼業は下表のとおりである。

兼業先又は内容等	件　数
国立大学法人	45
公私立大学（短大含む。）	141
専修学校・専門学校	17
審議会委員等（教育委員会）	34
〃　（地方公共団体）	19
〃　（その他）	12
国の機関	15
講習会・研修会講師	26
病院・診療所等	6
その他	14
計	329

第 6 章　附属施設の概要

第 6 章　附属施設の概要

第 1 節　附属学校

1　附属名古屋小学校

(1) 入学者選抜

○　公　示

平成18年度第 1 学年入学児童募集について

1　応募資格
(1) 平成11年 4 月 2 日から平成12年 4 月 1 日までの間に生まれた者
(2) 本校指定の地域内に居住する者（小学校区を単位とする）
2　募集人員
男児　45名程度　　女児　45名程度
3　募集要項・願書渡し期間
平成17年11月28日（月）～平成17年11月30日（水）本校事務室
午前 9 時から午後 4 時まで
4　願書受付期間
平成17年12月14日（水）～平成17年12月16日（金）本校帰国校舎
12月14日（水）･15日（木）は，午前 9 時から正午までと，午後 1 時から午後 2 時まで
12月16日（金）は，午前 9 時から正午まで
5　学校説明会
平成17年11月28日（月）本校体育館
午後 1 時30分から午後 2 時30分まで（受付：午後 1 時から）
6　選考についての説明会及び健康相談
平成18年 1 月13日（金）
7　選考
第一次選考日平成18年 1 月17日（火），18日（水）
第二次選考日平成18年 1 月20日（金）
8　その他
(1) 出願手続き並びに選考の詳細については，11月28日（月）から配付の募集要項を参照のこと
(2) 本校指定の地域は本校正門に掲示してある小学校区一覧表を見て判断のこと

平成17年11月 1 日　　愛知教育大学附属名古屋小学校

○　募集予定人員，応募者数，倍率

区　　分	男　児	女　児	合　計
平成18年度第 1 学年児童数	80名	80名	160名
附幼からの推薦入学合格者数	31名	33名	64名
募集予定人員	49名	47名	96名
応募者数	125名	133名	258名
倍率	2.55倍	2.83倍	2.69倍

○　合格者
男　児　80名　　女児　80名　　合計160名

(2) 在籍数

平成18年４月１日現在

学年	組	男	女	計	学年	組	男	女	計	学年	組	男	女	計
１年	1	20	20	40	２年	1	19	20	39	３年	1	19	19	38
	2	20	20	40		2	21	19	40		2	18	19	37
	3	20	20	40		3	21	19	40		3	18	19	37
	4	20	20	40		4	19	20	39					
	計	80	80	160		計	80	78	158		計	55	57	112

学年	組	男	女	計	学年	組	男	女	計	学年	組	男	女	計
４年	1	21	19	40	５年	1	20	20	40	６年	1	19	18	37
	2	19	20	39		2	20	20	40		2	20	18	38
	3	21	18	39		3	19	20	39		3	19	18	37
	4	1	4	5		4	3	2	5		4	20	16	36
											5	5	5	10
	計	62	61	123		計	62	62	124		計	83	75	158

４－4，５－４，６－５は，帰国学級

合　計	422	413	835

(3) 留年生・休学者・退学者数

いずれもなし

(4) 卒業生の進路

平成17年度卒業生　合計168名			私立	名古屋国際中学校	4名
国立	附属名古屋中学校	88名		名古屋女子大学附属中学校	2名
96名	附属名古屋中学校（帰国）	8名		海陽中等教育学校	2名
公立	名古屋市立川名中学校	3名		春日丘中学校	2名
７名	名古屋市立守山中学校	1名		南山国際中学校	2名
	名古屋市立東星中学校	1名		愛工大附属中学校	1名
	名古屋市立駒方中学校	1名		椙山中学校	1名
	名古屋市立城山中学校	1名		南山中学校男子部	1名
私立	東海中学校	12名		ラ・サール中学校（鹿児島県）	1名
65名	南山中学校女子部	10名		ラ・サール中学校（函館）	1名
	滝中学校	5名		聖霊中学校	1名
	愛知淑徳中学校	4名		愛光中学校（愛媛県）	1名
	金城学院中学校	4名		桜蔭中学校	1名
	名古屋中学校	4名		白陵中学校	1名
	愛知中学校	4名		不二聖心中学校	1名

(5) 教務関係

○　各学年の授業日数

	1　学　期					2　学　期						3　学　期				総合計
	4	5	6	7	合計	8	9	10	11	12	合計	1	2	3	合計	
1 年	15	20	22	12	69	1	21	20	20	10	72	17	19	16	52	193
2 年	15	20	22	12	69	1	21	20	20	10	72	17	19	16	52	193
3 年	15	20	22	12	69	1	21	20	20	10	72	17	19	16	52	193
4 年	15	20	22	12	69	1	21	20	20	10	72	17	19	16	52	193
5 年	15	20	22	12	69	1	21	20	20	10	72	17	19	16	52	193
6 年	15	20	22	12	69	1	21	20	20	10	72	17	19	13	49	190

○　各学年の月別授業時数

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10月	11月	12月	1 月	2 月	3 月	総合計	家庭学習
1 年	48	86	105	52	2	99	96	91	52	79	91	60	861	24
2 年	68	89	110	53	2	101	100	95	53	81	95	62	909	22
3 年	75	93	121	55	2	108	111	105	57	84	106	67	984	24
4 年	77	98	125	55	2	112	114	108	59	86	108	68	1012	24
5 年	78	100	127	62	2	114	116	109	60	88	109	69	1034	25
6 年	80	100	127	56	2	114	116	115	60	89	109	69	1037	23

○　各学年の各教科・領域における時間割編成について

年	国語	書写	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	学活	総合	英語	コン
1	7	1		3.4		3	2	2		2.7	1	1	0.8	0.7	0.6
2	7	1		4.4		3	2	2		2.6	1	1	0.8	0.7	0.6
3	5.7	1	2	4.3	2		1.7	1.7		2.6	1	1	3	0.9	0.8
4	5.7	1	2.4	4.3	2.6		1.7	1.7		2.6	1	1	3	0.9	0.8
5	4.1	1	2.6	4.3	2.7		1.4	1.4	1.7	2.6	1	1	3.1	0.8	0.8
6	4	1	2.9	4.3	2.7		1.4	1.4	1.6	2.6	1	1	3.1	0.7	0.8

※　書写は国語の時間数のうちであるが，時間割編成上，専科担任となる場合も多いので，別記してある。

(6) 学務関係

○　奨学金，授業料免除　なし

(7) 健康管理

○　発育測定

		男子			女子		
	学年	附属小平均	愛知県平均	全国平均	附属小平均	愛知県平均	全国平均
身長	1	116.4	116.6	116.6	115.9	115.5	115.8
	2	122.7	122.5	122.5	121.1	121.2	121.7
	3	126.8	127.5	128.2	127.8	127.1	127.5
	4	134.0	132.8	133.6	132.7	132.9	133.5
	5	139.8	138.7	139.0	140.7	139.8	140.1
	6	144.3	144.9	145.1	147.6	146.4	146.9
体重	1	21.1	21.4	21.6	21.5	20.8	21.1
	2	24.1	24.0	24.3	22.9	23.2	23.6
	3	26.3	26.9	27.4	26.2	26.1	26.8
	4	30.5	30.3	30.9	29.8	29.4	30.2
	5	35.2	34.1	34.7	33.2	33.5	34.4
	6	37.4	38.6	39.1	40.1	38.5	39.5
座高	1	64.8	65.0	64.9	64.9	64.6	64.5
	2	67.8	67.8	67.7	67.4	67.2	67.3
	3	70.0	70.1	70.3	70.4	70.0	70.0
	4	73.1	72.4	72.7	72.1	72.5	72.8
	5	75.5	75.0	75.1	76.0	75.9	75.9
	6	77.0	77.8	77.7	79.7	79.0	79.3

※　下線は全国平均を上回るもの

○　歯科検診

学年	検査人数	う歯なし者数	う歯所有者数	その他の歯疾患
1年	159	96	19	1
2年	112	57	17	0
3年	116	49	14	0
4年	118	35	28	2
5年	153	79	17	1
6年	166	98	11	4
合計	824	414	106	8

2　附属岡崎小学校

(1) 入学者選抜

○　選抜の方法

・第一次選考　　面接・教育テストにより，総合判定し，入学適格者を決定する。 その際，入学適格者が募集人員を超えない場合は，そのまま合格者とする。 ・第二次選考　　第一次選考の結果，入学適格者が募集人員を超える場合には，第二次選考（抽選）により合格者を決定する。

○　募集人員・志願者数・合格者数・入学者数等

	男子	女子	備　　考
募集人員	60	60	
志願者数	76	76	
合格者数	60	60	
入学者数	60	60	

○　帰国子女受け入れ数

学年：人数	学年：人数
1 年　0 名	4 年　0 名
2 年　1 名 女子	5 年　2 名 男子
3 年　2 名 男子	6 年　0 名

(2) 在籍数

男子　355　　女子　352　　合計　707　　H18.3.13現在

学年	学級	男子	女子	計	学年	学級	男子	女子	計
1 年	1	20	20	40	4 年	1	20	19	39
	2	20	19	39		2	20	19	39
	3	19	19	38		3	21	19	40
2 年	1	19	20	39	5 年	1	19	20	39
	2	20	20	40		2	20	20	40
	3	19	21	40		3	20	19	39
3 年	1	20	19	39	6 年	1	19	20	39
	2	20	20	40		2	19	19	38
	3	20	20	40		3	20	19	39

(3) 留学生・休学者・退学者数

いずれも　なし

(4) 卒業生の進路　　平成17年度　卒業生　116名

国　立	学校名	公　立	学校名	私　立	学校名
	愛知教育大学		〈岡崎市内〉		〈岡崎市内〉
96名	附属岡崎中学校	7 名	六ツ美北中学校 2 名	13名	岡崎学園中学校 3 名
	96名		甲山中学校　1 名		三河中学校　5 名
			竜海中学校　1 名		〈愛知県内〉
			河合中学校　1 名		名古屋中学校　2 名
			額田中学校　1 名		南山国際中学校 1 名
			〈岡崎市外〉		名古屋国際中学校 1名
			東栄中学校　1 名		聖霊中学校　1 名

(5) 教務関係

○各学年の年間授業日数

	1 学期	2 学期	3 学期	授業日数		1 学期	2 学期	3 学期	授業日数
1 年生	66日	70日	48日	184日	4 年生	68日	70日	48日	186日
2 年生	68日	70日	48日	186日	5 年生	68日	70日	48日	186日
3 年生	68日	70日	48日	186日	6 年生	68日	70日	44日	182日

○時間数配当【授業時間数】

区分	教　科　領　域									生活領域				総計
	国	社	算	理	音	図	家	体	F	道	特	く	英	
1 年	8	/	3	/	2	2	/	2	1	1	1	3	/	23
2 年	8	/	4	/	2	2	/	2	1	1	1	3	/	24
3 年	6	2	4	2	2	1	/	2	2	1	1	3	/	26
4 年	6	2	4	2	2	1	/	2	3	1	2	3	1	29
5 年	5	2	4	2	1	1	2	2	4	1	2	3	1	30
6 年	5	2	4	2	1	1	2	2	3	1	2	3	1	30

Fについて
1 年＝算，体
2 年＝算，体
3 年＝国，算，図，体
4 年＝国，社，算，理，図，体
5 年＝社，算，理，音，図，体
6 年＝算，理，音，図，体
※有効な学習が展開できるように柔軟に対応する

(6) 学務関係

○　奨学金，授業料免除　　なし

○　課外活動（部活動）

部活動名	活　動　期　間	活　動　時　間
ソフトボール部	年間を通して	月～金
水泳部	6 月～ 8 月　市内大会まで	月～金
陸上部	8 月～ 9 月　市内大会まで	※体育部の計画による
合唱部	年間を通して	※音楽部の計画による
器楽部	年間を通して	※音楽部の計画による

（7）健康管理

○　発育測定

		男子			女子		
	学年	附属小平均	愛知県平均	全国平均	附属小平均	愛知県平均	全国平均
身長	1	116.2	116.1	116.6	116.7	115.7	115.8
	2	123.0	122.3	122.5	121.7	121.4	121.7
	3	128.5	127.5	128.2	126.7	127.6	127.5
	4	132.3	133.4	133.6	133.3	133.4	133.5
	5	139.0	138.4	139.0	138.8	139.4	140.1
	6	145.1	144.3	145.1	146.0	145.9	146.9
体重	1	20.6	21.3	21.6	21.1	20.9	21.1
	2	24.6	23.9	24.3	23.5	23.4	23.6
	3	26.6	26.9	27.4	25.5	26.6	26.8
	4	29.1	30.4	30.9	28.7	29.9	30.2
	5	35.0	33.7	34.7	32.1	33.5	34.4
	6	38.3	38.0	39.1	36.1	38.8	39.5
座高	1	64.8	64.8	64.9	64.9	64.6	64.5
	2	67.9	67.5	67.7	67.3	67.2	67.3
	3	70.3	69.9	70.3	69.8	70.1	70.0
	4	72.0	72.7	72.7	72.3	72.8	72.8
	5	75.1	74.8	75.1	74.8	75.4	75.9
	6	77.6	77.4	77.7	78.2	79.1	79.3

○歯科検診

学年	人　　数	う歯なし	処置完了者	未処置あり	%
1 年	117	31	19	10	8.5
2 年	119	34	12	11	9.2
3 年	119	12	27	21	17.6
4 年	118	16	24	21	17.8
5 年	118	32	19	6	5.1
6 年	116	31	18	6	5.2
合計	707	156	119	75	10.6

3　附属名古屋中学校

(1) 入学者選抜

ア　応募資格

・平成18年３月小学校卒業見込みの者
・本校の特性（教育研究校・教育実習校）に応えうる心身ともに健康な者
・平成18年４月１日以降，愛知県内に保護者とともに居住し，通学に要する時間に無理のない者
・本校を第一志望とする者

イ　選抜の方法

・第一次選抜：調査書の審査及び基礎的学力（国語・算数）の検査
・第二次選抜：抽選

ウ　志願者数その他

	募集人数	志願者数	推薦入学者数	一般合格者数
男子	160	103	40	41
女子		84	48	31
合計	160	187	88	72

エ　帰国生徒の受け入れについて

a　応募資格

平成18年３月末までに，わが国の小学校課程，あるいは，これと同程度の課程を修了する者で，次の資格をすべて有する者

・保護者の海外勤務に伴う在外生活経験年数が３か年以上，帰国後１か年以内を原則とし，日本国籍を有する者
・在留国での通学校が現地校及び国際学校であった者
・平成５年４月２日から平成６年４月１日までに生まれた者
・保護者とともに居住し，本校への通学に要する時間に無理のない者

ただし，在外生活経験年数，帰国後の年数，在留地での通学校については，本人の実態によって考慮する場合がある。

b　選抜の方法

書類・基礎的学力（国語，算数）の検査・面接（本人及び保護者）を総合して判断する。

c　志願者数その他

	募集人数	志願者数	推薦入学者数	一般合格者数
男子	15	7	4	3
女子		8	4	4
合計	15	15	8	7

オ　編入学

一般学級，帰国学級ともに定員に空きがあれば上記①に準じた検査により受け入れる。ただし，受け入れの期限は，ともに３年生の８月末日までとする。

(2) 在学生数（内帰国生徒数）　平成18年 3 月 1 日現在

	1　年	2　年	3　年	合　計
男子	80（ 7）	82（ 8）	79（ 9）	241（24）
女子	89（ 2）	89（ 7）	94（ 6）	272（15）
合計	169（ 9）	171（15）	173（15）	513（39）

(3) 転出入生徒数（内帰国生徒数）

	1　年	2　年	3　年
転出生徒	0	1（0）	0
転入生徒	2（2）	5（5）	3（2）

(4) 卒業生の進路

国　立	公　立	私　立	県　外	海　外
14	86	60	10	1

(5) 教務関係

a　教科等時間数及び日課表・週予定表

必修教科，選択教科，総合的な学習の時間，学校行事などをより効果的に行うため，1 年間を下記のとおりに 3 期に分け，それぞれ違った時間割を組んでいる。

第 1 期（ 4 月 6 日：第 1 週～ 7 月15日：第15週）

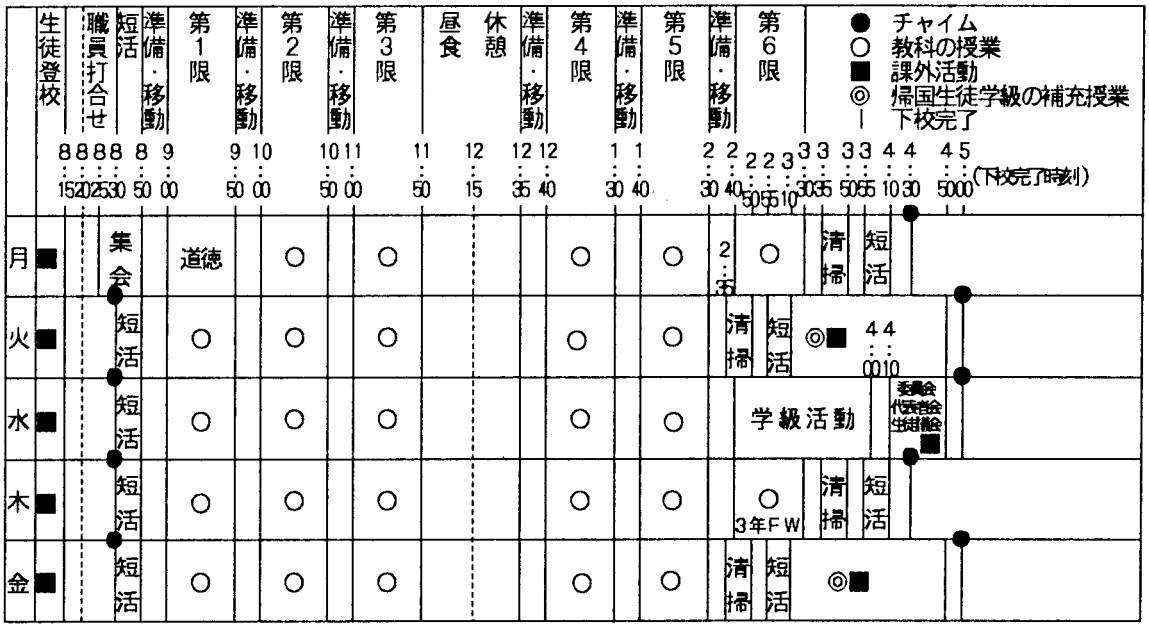
第 2 期（ 9 月 1 日：第17週～11月26日：第29週）

第 3 期（11月29日：第30週～

＜ 3 年生＞ 3 月3日：第41週

＜ 1 ・ 2 年生＞ 3 月17日：第43週

		国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技家	英語	合計
1 年生	第 1 期	4	3	3	3	2	2	3	2	3	25
	第 2 期	4	3	3	3	2	2	2	2	3	23
	第 3 期	4	3	3	3	2	2	3	2	3	24
2 年生	第 1 期	3	3	3	3	2	2	3	2	3	23
	第 2 期	3	3	3	3	1	1	2	2	3	21
	第 3 期	3	3	3	3	1	1	3	2	3	22
3 年生	第 1 期	3	3	3	3	1	1	2	2	3	21
	第 2 期	3	2	3	2	1	1	3	1	3	19
	第 3 期	3	3	3	2	2	2	3	1	3	21



b　マイタイム

第2期から第3期にかけて，週2時間，20週にわたり，子どもたち一人一人が，興味・関心のある事柄から課題を設定し実施している。平成17年度の講座と活動人数は，表のとおりである。

NO	講　座　名	活動人数	NO	講　座　名	活動人数
1	国際理解	15	12	卓球	25
2	将棋	30	13	楽器	21
3	連弾ピアノ	17	14	アコースティックギター	18
4	朗読・アナウス	32	15	ザ・サイエンス	10
5	ロボットコンテスト	27	16	ディベート	21
6	ジオラマづくり	20	17	バードウォッチィング	15
7	食文化	19	18	百人一首の世界	12
8	手芸	25	19	とことん歴史追究	25
9	イラスト	31	20	夢（机上）旅行	13
10	バトミントン	42	21	大道芸	22
11	硬式テニス	37	22	オセロ	36
				合　計	513

c　各種行事

・避難訓練（5，11月）
・学校祭（10月），合唱祭（2月）
・宿泊行事　1年：車山の生活（6月）　2年：小豆島の生活（6月）　3年：長崎の生活（5月）
・教育講演会　年2回実施（環境・国際理解・情報・性の中から二つ）

・クラスマッチ　1・2 年：5 月，3 年：6 月

(6) 学務関係

a　部活動

部　　名	人数	部　　名	人数	部　　名	人数
バスケットボール	58	ソフトテニス	62	バレーボール	35
サッカー	37	野　　球	34	剣　　道	30
吹奏楽	25	卓　　球	22	陸　　上	29
合　　唱	25	美　　術	25		
合　　計　　382					

b　生徒会活動

・生徒総会（6，1 月）

・委員会

文化委員会・放送委員会・運動委員会・美化委員会・図書委員会・新聞委員会・保健委員会

(7) 健康管理

a　発育測定（4 月）

b　健康診断（4 月：尿検査・心電図・結核検診・耳鼻科検診）

（5 月：内科・検診・歯科検診・眼科検診）

c　学校保健委員会（7，2 月）

d　教育相談（5，10，1 月）

4　附属岡崎中学校

(1) 入学者選抜

平成17年度入学者選抜は，240名を越える応募者があり，第一次選抜として国語，理科，社会，算数の学力試験と集団面接を行った。小学校から届けられた書類の審査，学力検査，面接検査の結果を総合的に判断し，全職員参加の判定会議にて入学適格者を選出した。さらに第二次選抜として抽選を行い，本校入学予定者166名を決定した。

(2) 在学生数

・1年生　男子82名　女子84名　合計166名
・2年生　男子82名　女子79名　合計161名
・3年生　男子81名　女子80名　合計161名

(3) 留年生・休学者・退学者数　　※一切なし

(4) 卒業生の主な進路

【国立】愛教大附属高校　　豊田工業高等専門学校
【公立】岡崎高校　岡崎北高校　岡崎西高校　岡崎東高校　豊田西高校　豊田南高校
西尾高校　刈谷高校　刈谷北高校　安城東高校　安城高校　知立東高校
知立高校　幸田高校　碧南高校　時習館高校　豊橋南高校　旭丘高校
千種高校　向陽高校　明和高校　菊里高校　岡崎工業高校
【私立】岡崎城西高校　光ヶ丘女子高校　人間環境大学岡崎学園高校　愛産大三河高校
滝高校　星城高校　安城学園高校　愛知淑徳高校　中京大中京高校
名城大附属高校　東海高校　瑞穂高校　東邦高校　名古屋経済大学高蔵高校
日本福祉大附属高校　愛知高校　愛知啓成高校　椙山女学園高校　名古屋高校
浜松学芸高校　川崎医科大学附属高校　創価高校

(5) 教務関係（カリキュラム・成績評価）

教科の学習や総合的な学習の時間を活用した学習では，問題解決的学習過程をカリキュラムの根底においている。その中で，学ぶ意欲をもち，学び方を身につけ，本気で学ぶ子どもの姿をめざしてきた。9教科と総合的な学習の時間を利用した活動において，教師の手だてや個への支援，適切な評価を行うことで，子どもが自ら学びを築いていく姿が築かれつつある。

(6) 学務関係（奨学金・授業料免除・課外活動）

奨学金，授業料免除を受けている生徒はいないが，就学援助「準要保護家庭」を受けている家庭が10家庭ある。課外活動としては13種類の部活動が生徒の自主的な運営で行われている。本年度の主な部活動結果は，水泳部の全国大会出場のほか，文化的部活動でも，さまざまな分野で活躍している。また，愛知万博において合唱団出演，総合学習の成果発表，授業の成果発表など顕著な活躍が見られた。

(7) 健康管理

本年度の定期健康診断の実施計画は以下の通り。

●目　的
・自分の健康状態を知り，健康に関心をもち，常に健康の保持に心掛ける生徒を育てる。

・自分の疾病，異常の早期発見，治療，矯正に進んで努力できる生徒を育てる。

●実施内容と該当学年

	１　年	２　年	３　年	職　員	月　　日
身体測定	○	○	○	○	１，２年
視力測定	○	○	○	○	４月11日
聴力測定	○		○	○	３年　４月20日
内科検診 結核健康診断	○	○	○		１年：４月19日 ２年：５月11日 ３年：４月11日
歯科検診	○	○	○		４月28日
眼科検診	○	○	○		４月22日・５月10日
耳鼻科検診	○				５月17日
心電図検査	○			●	４月18日
尿検査	○	○	○	○	４月21，22日
X線撮影				○	内科検診日
オリ合宿事前健康相談	☆				４月19日
２年宿泊活動事前健康相談		☆			５月11日
３年宿泊活動事前健康相談			☆		４月11日
体育大会事前健康相談	☆　●	☆　●	☆　●		９月６日

○・・全員　　●・・抽出　　☆・・希望

＊プール水質検査７月８日　　＊保健委員会（入試）　１月19日

(8) その他

・研究活動

平成17年10月４日（火）に，「学びたい！　－子どもが「本気で学ぶ」授業の実現から－」を研究主題とし，第38回生活教育研究協議会を開催した。多くの方々の参加を得て，全体発表，公開授業，さらに研究協議会を行い，４年計画の３年次にあたる本研究に対するご意見をうかがった。この会にあわせて，本研究の総論，教科論を一冊にまとめた208頁におよぶ「研究のあゆみ３」が発刊された。

・研究における地域への貢献

平成17年度の附属岡崎中学校に定期的に訪問し指導を受けた研究員は３名。

また，本校職員が平成17年度に各地域の研究会へ出向いて指導したのは50件を数え，さらに，本校への研究視察における来校者は24名。平成17年度科学研究費補助金（奨励研究B）について，本校から１名が採択され，研修活動に励んだ。

・教育実習

●前期実習

5月30日（月）～6月24日（金）

●後期実習

9月26日（月）～10月21日（金）

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	家庭	技術	英語	計
前　期	5	6	5	5	2	1	5	2		7	38
後　期	4	5	5	4	2	2	3	2	2	5	34

※内容：指導講話　授業観察　授業参加　授業実習　指導授業事前指導会
指導授業観察　指導授業事後指導会　研究授業　学級別指導会　教科別指導会
清掃指導　給食指導　部活動参加　特別研究授業（後期）

●基礎実習

9月5日（月）～9月9日（金）

Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	計
11	11	12	12	8	54

※内容：施設見学　授業観察　グループ間討議　環境整備

5　附属高等学校

(1) 平成18年度入学者選抜（選抜方法，志願者数・合格者数・入学者数，帰国生徒の受入数）

① 選抜方法

ア 連絡入学の選抜方法

調査書，作文，面接をもとに総合的に判定する。

イ 推薦選抜の選抜方法

推薦書，調査書，作文，面接により総合的に選抜する。

ウ 一般選抜の選抜方法

学力検査（国語，数学，英語），調査書，面接，その他の資料により総合的に選抜する。

エ 海外帰国生徒選抜の選抜方法

学力検査（国語，数学，英語），面接，書類審査を総合して行う。

② 志願者数

連絡入試　24名，公募制推薦選抜　32名，指定校制推薦選抜　10名，一般選抜　203名，海外帰国生徒選抜　1 名

③ 合格者数

連絡入試　24名，公募制推薦選抜　26名，指定校制推薦選抜　10名，一般選抜　142名，海外帰国生徒選抜　0 名

④ 入学者数

連絡入試　24名，公募制推薦選抜　26名，指定校制推薦選抜　10名，一般選抜　141名，海外帰国生徒選抜　0 名

(2) 在学生数（平成18年 3 月 1 日現在）

1 学年　195名（男　76名　女　119名）
2 学年　149名（男　48名　女　101名）
3 学年　193名（男　77名　女　116名）
全学年　537名（男　201名　女　336名）

(3) 卒業生の進路（卒業者数　191名＜男76名　女115名＞）

国公立大学	5 名（男 5 名　女 0 名）	私立大学	69名（男23名　女46名）
公立短期大学	0 名（男 0 名　女 0 名）	私立短期大学	28名（男 0 名　女28名）
公立専門学校	0 名（男 0 名　女 0 名）	私立専門学校	51名（男26名　女25名）
就　職	8 名（男 3 名　女 5 名）	無業（浪人含む）	30名（男19名　女11名）

(4) 学務関係　（奨学金，授業料免除，課外活動）

① 奨学金受領者数

ア 日本育英会

1 学年　0 名（男 0 名　女 0 名）
2 学年　0 名（男 0 名　女 0 名）
3 学年　0 名（男 0 名　女 0 名）
全学年　0 名（男 0 名　女 0 名）

② 授業料免除延べ数

ア 全額免除

1 学年　13名，2 学年　5 名，3 学年　14名，全学年　32名

イ　半額免除

1学年　3名，2学年　2名，3学年　0名，全学年　5名

③　課外活動

・第52回NHK杯全国高校放送コンテスト愛知県大会　朗読部門入選　3年　釋　英吏佳

・課題研究　名古屋地学会第56回総会　優秀賞　3件

名古屋地学会例会　優秀な研究発表　7件

・水泳部，西三支部予選　男子50m自由形2位　県大会出場　2年　鳥居　駿登

愛知県高等学校新人体育大会　男子50m自由形4位　2年　鳥居　駿登

・書道部，毎日新聞社主催第14回国際高校生選抜書展　入選　3年　石川　麻衣

3年　中根　舞子

3年　平井　彩夏

3年　宮本　恵梨華

3年　田中　宏佳

・合唱部，愛知県合唱祭15回連続出場表彰

第72回NHK全国学校音楽コンクール県地区予選銀賞

第12回愛知県ボーカルアンサンブルコンテスト銅賞

・写真部，愛知県高等学校文化連盟西三河支部主催「春～夏の写真展」

奨励賞　3年　小島　唯

第18回愛知県高等学校文化連盟西三河支部展　奨励賞　3年　小島　唯

・ラグビー部，第3回関西高校小人数交流大会出場　3年　塚田　献志

第1回全国高校合同チームラグビー大会出場　3年　塚田　献志

・陸上競技部，西三高校陸上競技1年生大会　女子100m4位　1年　中村　礼美

女子200m5位　1年　内藤　由貴

男子砲丸投げ6位　1年　竹内　聖徳

西三河選手権　女子400mR8位

女子1600mR7位

・バレーボール部，西三高校1年生大会　3位

・第3回全国子供作品コンクール俳句の部　奨励賞　3年　柘植　由美恵

④　その他

・アカデミック・クエスト講座

専門講座（7月14日～8月3日）大学教員10名，受講生39名

総合講座（8月2日，12月13日～12月28日）大学教員13名，受講生135名

・サタデー・ボランティア

平成17年度刈谷市総合式典にて感謝状表彰

実施回数51回，延参加者数334名

(5) 教務関係　(カリキュラム)

平成17年度入学生教育課程表

教科	科目	標準単位	1年	2年 文系	2年 人間探究コース	2年 理系	2年 自然探究コース	3年 文系	3年 文理系	3年 人間探究コース	3年 理系	3年 自然探究コース	合計単位数 文	文理	人間	理	自然
国語	国語表現Ⅰ	②						○2					○2				
	国語表現Ⅱ	2															
	国語総合	④	5										5	5	5	5	5
	現代文	4		2	2	2	2	2	2	2	2	2	4	4	4	4	4
	古典	4		4	3	2	2	2	3	3	2,○3	2	6	7	6	4･○7	4
	古典講読	2						2					2				
地理歴史	世界史A	②	3										3	3	3	3	3
	日本史A	②		2	2								○2	○2	○2	○2	○2
	地理A	②											○2	○2	○2	○2	○2
	世界史B	④						5	5	4			○5	○5	○4		
	日本史B	④				2	2				2	2	○5	○5	○4	○4	○4
	地理B	④											○5	○5	○4	○4	○4
公民	現代社会	②						2			2	2	2			2	2
	倫理	②		2	2								2	2	2		
	政治経済	②						2	2	2			2	2	2		
数学	数学基礎	②															
	数学Ⅰ	③	3										3	3	3	3	3
	数学Ⅱ	4		2	2	4	3	3	4	3			5	6	5	4	3
	数学Ⅲ	3									4	4				4	4
	数学A	2	2										2	2	2	2	2
	数学B	2		2	2	2	2		2	2			2	4	4	2	2
	数学C	2									3	2				3	2
理科	理科基礎	②															
	理科総合A	②	3										3	3	3	3	3
	理科総合B	②															
	物理Ⅰ	③				3	3									○3	○3
	物理Ⅱ	3									4	4				○4	○4
	化学Ⅰ	③				4	3									4	3
	化学Ⅱ	3									○3	3				3･○0	3
	生物Ⅰ	③		3	3								○3	○3	○3	○3	○3
	生物Ⅱ	3							3	3				○3	○3	○4	○4
	地学Ⅰ	③											○3	○3	○3	○3	○3
	地学Ⅱ	3												○3	○3	○4	○4
保健体育	体育	⑦⑧	2	3	3	3	3	2	2	2	2	2	7	7	7	7	7
	保健	②	1	1	1	1	1						2	2	2	2	2
芸術	音楽Ⅰ	②	2										○2	○2	○2	○2	○2
	美術Ⅰ	②											○2	○2	○2	○2	○2
	書道Ⅰ	②											○2	○2	○2	○2	○2
	音楽Ⅱ	2		1									○1	○1			
	美術Ⅱ	2											○1	○1			
	書道Ⅱ	2											○1	○1			
	音楽Ⅲ	2						○2					○2				
	美術Ⅲ	2											○2				
	書道Ⅲ	2											○2				
外国語	オーラル・コミⅠ	②	3										3	3	3	3	3
	オーラル・コミⅡ	4															
	英語Ⅰ	③	3										3	3	3	3	3
	英語Ⅱ	4		3	3	3	3	3	2	2			6	5	5	3	3
	リーディング	4		3	3	2	2	2	2	2	3	2	5	5	5	5	4
	ライティング	4						3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
家庭	家庭基礎	②		2	2	2	2						2	2	2	2	2
	家庭総合	④															
	生活技術	④															
情報	情報A	②	2										2	2	2	2	2
	情報B	②															
	情報C	②						○2					○2				
総合的な学習の時間		③～6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
学校設定教科「探究」	探究基礎		1										1	1	1	1	1
	人間探究基礎				2										2		
	人間探究応用									2					2		
	自然探究基礎						2										2
	自然探究応用											2					2
その他(希望者履修)	アカデミック・クエスト	4	4										0～4				
	サタデー・ボランティア	3	3										0～3				
	SPP	3	3										0～3				
ホームルーム			1	1				1					3	3	3	3	3
合計			32	32				32					96～106	96～106	96～106	96～106	96～106

(6) 健康管理

① 平成17年度定期健康診断　全校生徒対象，平成17年 4 月15日（金）～ 6 月17日（金）実施

② 平成17年度日本体育学校健康センター利用状況（平成18年 3 月31日現在）
医療支払い請求件数　延べ79件（男子44件，女子35件）

③ 平成17年度学校保健委員会（平成17年 6 月30日実施）
生徒の生活実態や健康問題についての情報交換

6　附属養護学校

(1) 教育目標

子どもの発達に応じ，基礎的生活能力及び態度を養い，情操を高め，一人ひとりが可能性を十分に発揮して，社会で自立できる力を育てる。

(2) 教育方針

家庭との共通理解に立って，

① 子どもの身辺自立の能力と基本的生活習慣を確立する。
② 子どもの日常生活に必要な知識，技能，態度を培う。
③ 子どもの社会に適応する能力，社会的態度，豊かな情操を培う。
④ 子どもに集団の秩序やきまりの大切さをとらえさせ，連帯と協調の精神を培う。
⑤ 家庭・地域と学校の相互の信頼と協調をもとに，連携して子どもの支援に努める。

(3) 運営の重点

① 一人ひとりを大切にする指導
ア 一人ひとりの発達を踏まえ，将来につながる価値ある成長を見据えた指導内容を個々に設定して，指導にあたる。
イ 長期・短期的な目標をそれぞれ明確にし，一貫した指導を進め，その評価をする。
ウ 障害，能力，特性を踏まえた活動を用意し，個に即した学習過程，指導の手だてを工夫する。
エ 具体的な操作活動を繰り返すことを大切にし，体得するまで根気強く指導にあたる。
オ 常に子どもの姿を見つめて指導にあたり，新たな動きや小さな伸びをきめ細かく記録し，支援計画，指導計画に生かす。

② 子どもを育てる環境づくり
ア 楽しく，喜んで活動したくなるような教具や遊具，施設を用意する。
イ 遊具，実習地（農園），日常生活訓練施設（くすのきホーム）等を積極的に活用する。
ウ 明るく豊かな壁面構成の工夫や，整理整頓に心がけ，子どもが気持ちよく生活できる環境づくりをする。
エ 地域の教育的資源を活用し，学校間交流や居住地交流など地域とのふれあいや交流・共同の場を工夫する。

③ うるおいのある学校づくり
ア 生活にリズムと規律を与える日課，週の予定を取り入れる。
イ 一人ひとりが生かされる学校行事，学部行事を実施するよう努める。
ウ 全校児童生徒がふれあう「ふようタイム」など，全校で活動する場を大切にする。

④ 学校と家庭，その他関係諸機関との積極的な連携
ア 学校や家庭との連絡を密にし，子どもの指導に関して，共通理解を図り，同一歩調で指導にあたる。
イ 常に保護者や地域からの情報の収集に努めるとともに，地域社会に進んではたらきかけ，学校と家庭・地域相互の信頼関係をつくる。
ウ 学校，家庭，関係諸機関とのネットワークづくりに努め，連携を生かして子どもの支援にあたる。
エ 学校評議員会の開催をはじめとする，開かれた学校づくりに努める。
オ 本校の教育的成果を活用して，岡崎市内の園児を対象にした巡回相談の実施や地域に向けた研修会等を企画し，地域のセンター的な役割を果たすように努める。

(4) 学部運営の概要

① 小　学　部

学　級	さくら学級		すみれ学級		あおい学級		合　計
学　年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	
人　数	2人	2人	3人	2人	2人	4人	15人

小学部では，子どもたちの姿をしっかりと見つめ，将来の望ましい姿をおさえた上で，日々の指導にあたっている。一人ひとりの発達段階は異なっているが，「日常生活でできることを増やし，それを生かす場面を多くする」ことをねらいとしている。

○心と体の動きを育てる
・動きたくなる場を設定して
・生活にリズムをもたせて
・多くの生活経験をさせて

○身辺自立の力を育てる
・優しさと厳しさをもって
・自分のことは自分でさせて
・体得するまで根気よく行わせて

○集団に参加する力を育てる
・わくわくタイムを通して
・友達とのかかわりの場を用意して
・集団の中で活動する場を増やして

・タイム学習

小学部全員で行う「遊び」を通して個々のさまざまなねらいに迫れるように実施している。毎日の学習を楽しい遊びから始めることで，情緒の安定も図ることができる。また，1・2年生においては，ことばや数に関わる指導を進められるよう柔軟に取り組んでいる。

・日常生活の指導

各学級とも，月曜日から金曜日の第4限に日常生活の指導を位置付けている。食事の指導を中心にして，衣服の着脱，手洗い，排せつなどの身辺自立ができるようになることをめざしている。

② 中　学　部

学　年	1　年	2　年	3　年	合　計
人　数	6人	6人	6人	18人

中学部では，社会自立の基礎づくりとして，「友だちと活動する中で，人とのかかわりをもち，自分のことは自分でできる子どもを育てる」ことをねらいとしている。また，生活の中に生かすことのできる基礎的な学力を習得できるようにするとともに，体験を通して，働くことの尊さを培うようにしている。

○基礎学力をつける
・一人ひとりの子どもに合った教材・教具を工夫して
・多様な学習集団を編制して

○できることを増やす
・一人一役の活動の場を設定して
・生徒会，委員会活動を通して
・作業学習を通して

○人やものとのかかわりを広げる
・きらきらタイムを通して
・学部集会を通して
・学校や学部の行事を通して

・タイム学習

学年の枠をはずした集団の中で，子どもの興味・関心に基づいた学習活動を組みながら，人や

もの・こととのかかわりをひろげていけるように実施している。

・習熟度別グループ編制

国語，数学，職業・家庭の3教科については，3段階の習熟度別にグループ編制し，集団での学習の中で，個々の学習がより深まるようにしている。

＊平成17年度進路状況

中学部3年卒業の6名・・・・附属養護学校高等部へ，全員，進学

③高　等　部

学　年	1　年	2　年	3　年	合　計
人　数	10人	9人	10人	29人

高等部では，卒業後，社会的にも職業的にも自立できるように，「社会の中で生きる力を身につけるとともに，生活経験をひろげ，基礎的な知識を得て，働く意欲や体力を高める」ことをねらいとしている。

○社会に生きる力を伸ばす
・日常生活にかかわる内容を学習対象にして
・学校や学部の行事，ドリームタイムを通して

○働く意欲を高める
・現場実習，校内実習，職場体験を通して
・作業学習を通して

○社会や人とのかかわりをひろげる
・校外学習を通して
・他校との交流を通して

・タイム学習

買い物学習，外食学習，交歓ソフトボール試合など独自性のある活動や，楽しい学習活動を通して，個々が社会自立をめざし，生きて働く力を培うことをねらいとして実施している。

・作業学習・校内実習・現場実習

農園芸・窯業・縫製・木工・織物の各班に分かれて作業学習を行う。校内実習では，勤務時間帯を想定して，作業内容・上司との対応・休憩の過ごし方などの指導を行う。1・2年生は，後期に1週間の現場実習を行い，3年生は，各事業所で前・後期，各2週間の現場実習を行っている。

＊平成17年度進路状況

高等部3年卒業の10名・・・・就職者：3名
作業所従事者：6名
家事従事者：1名

7　附属幼稚園

(1) 入園者選抜

① 応募資格

・3歳児：平成14年4月2日から平成15年4月1日までに生まれた幼児

・4歳児：平成13年4月2日から平成14年4月1日までに生まれた幼児

・本園指定の地域内に居住する幼児（小学校区を単位とする）

・保護者又はそれにかわる者が必ず付き添って，徒歩又は公共交通機関で登降園できる幼児

② 選抜の方法

・第一次選考：グループ遊びを通しての行動観察及び親子面接

・第二次選考：抽選（募集人数を超えた場合）

③ 志願者数その他

【3歳児】　募集人数：20名
　　志願者数：男児56名　女児65名　計121名
　　入園者数：男児10名　女児10名　計20名

【4歳児】　募集人数：50名程度
　　志願者数：男児48名　女児38名　計86名
　　入園者数：男児25名　女児26名　計51名

(2) 在園者数（平成17年3月1日現在）

【3歳児】　男児10名　女児9名　計19名

【4歳児】　男児36名　女児34名　計70名

【5歳児】　男児33名　女児33名　計66名

(3) 退園者数

【3歳児】　1名　　【4歳児】　2名　　【5歳児】　1名

(4) 進学状況

平成17年度修了児：計66名　〔進学先〕　附属名古屋小学校　64名
　　名古屋市内公立小学校　1名
　　東京都内公立小学校　1名

(5)　教務関係

① 年間教育日数

・第1学期（4月9日～7月16日）　計15週

・第2学期（9月1日～12月13日）　計16週

・第3学期（1月11日～3月18日）　計11週　　総計42週

② 日・週の保育計画

○月・火・木・金：一日保育（弁当あり）　　水：半日保育（弁当なし）

○8：45～9：00　登園
　　指導計画による保育
　11：30～　昼食　　※半日保育の場合は降園
　13：30～14：00　降園　　※時期，年齢によって変更あり

③　各種行事

・誕生会（毎月：保護者参加）　　・避難訓練（年 6 回）
・運動会（10月），生活発表会（ 2 月）
・園外保育：じゃがいも，さつまいも遠足《大学自然観察実習園》
　　水族館，科学館見学，矢田学区老人会誕生会参加《東ふれあい広場》
　　虫取り，親子遠足《小幡緑地公園》
　　散歩《附属小・中キャンパス内，矢田川緑地，大幸・矢田・宮の腰公園》
　　おやつやカレー会食の買い物《近隣スーパーなど》
・PTAとの共催行事：夏祭り（ 7 月），クリスマスのお楽しみ会（12月）
　　もちつき（ 1 月）
・保育参観・参加，休日保育参加，個人・学級懇談会，保護者会

(6) 学務関係

○　奨学金，授業料免除　　なし
○　課外活動（預かり保育・未就園児関係）　　なし

(7) 健康管理

・　発育測定（年 4 回）
・　尿検査（ 4 月）　　・寄生虫，ギョウ虫検査（ 5 月）
・　視力検査（ 5 ， 6 月）　　・内科，歯科，眼科検診（ 6 月）

(8) その他

○　研究活動
・研究紀要第34集発行
・研究協議会開催（11月11日・金）
「幼児の充実感を探る　～充実感ってなんだろう～」
○　執筆者等の派遣，研修
・愛知県幼稚園教育研究会研究集録作成執筆者として派遣　年間12回
・平成17年度幼稚園教育課程研究協議会（文部科学省）に愛知県の代表として派遣
・平成17年度幼稚園教育課程理解推進事業（愛知県）保育技術専門講座に派遣
○　学生・院生の卒業，修士論文研究及び参観
・愛知教育大学幼児教育講座　67名（通算）
○　参観者
・愛知県私立幼稚園教諭　　1 名
○　教育実習受け入れ

・基礎実習	幼児教育講座	9 月 5 ， 6 ， 7 ， 9 日	19名
	養護教育講座	9 月 7 日	9 名
・主免実習事前指導	幼児教育講座	9 月13日　12名　・　21日	12名
・主免実習	幼児教育講座	9 月26日～10月21日	12名
・応用実習	幼児教育講座	12月 5 日～12月 9 日	5 名
	養護教育講座	12月 5 日～12月 9 日	1 名

第２節　附属図書館

本学附属図書館は，本学の理念に基づいた教育・研究活動を支援するために多様な資料・情報を収集整理し提供している。また，他大学等の研究者や初等中等教育教員を含む一般市民に対しても所蔵する資料・情報を迅速かつ確実に提供していく。なお，従来の紙媒体以外の資料・情報の収集も積極的に行い，本学の教育・研究活動のために提供していくとともに，他大学図書館との情報交換における協力を一層推進し，本学における教育・研究活動に関する情報を社会に対して発信していく考えである。このような附属図書館の考え方を遂行していくために，学術情報を収集・整理・提供するシステムを整備し，利用者にとって学術情報の検索・利用が容易にできることが不可欠であり，最も重要である。

１　事業

(1) 時間外開館延長の実施

2000年度より夜間大学院及び昼夜間コースが発足したのにあわせ，大学院授業開講日の開館時間を２時間延長した。そのため，授業開講日の開館時間を月・木曜日は９時より20時，火・水・金曜日は９時より22時，授業が行われない日は９時より17時，土曜日は10時より16時とした。また，2002年10月より日曜日・祝日の開館を試行的に実施し，さらには，2003年４月より開館時間をさらに延長して，授業開講日の月・木曜日の開館時間を22時までとした。これにより，授業開講日の月～金曜日のすべて22時まで開館とし，利用へのサービス時間の拡大を行った。また，土・日・祝日の開館時間も利用者からの声を反映させて11時より17時までの開館とした。このように，開館日の増加並びに開館時間の延長を図り，夜間大学院生ばかりでなく，学部学生からも図書館の利用が便利になったとの声が多く聞こえ，図書館利用者の増大に役立っている。

(2) 図書館利用説明会の実施

最近の図書館利用者の減少傾向の折り，本学図書館の理解と学生の読書意欲を高め利用の拡大を図るため，年３回の図書館利用説明会を実施した。第１回目は１，２年生を対象に「図書館ツアー，ホームページの紹介，蔵書検索方法」を４月に，第２回目，第３回目は全学生を対象に「論文作成のための文献収集法」を７月及び11月に実施した。

参加した学生からは，知らないことがわかり参加してよかったと，アンケートに寄せられていた。

(3) 電子ジャーナルの提供

近年，急速に発達した学術雑誌の電子化に対応して，本学でも，附属図書館のホームページからリンクを張り，学内のどこからでもアクセスできるようになっている。現在，利用可能な電子ジャーナルは，外国出版社のものとしてはエルゼビア・サイエンス社を始め４社と，国内では科学技術振興事業団（J-STAGE）と国立情報学研究所（NACSIS-ELS）が利用できるようになっている。

(4) 情報アクセス環境の整備

学内LANの整備及び情報コンセントの設置により，学生が保有しているノート型パソコンから接続できるように，88ポートの情報コンセントが閲覧室に設置されている。学生には好評で，図書館での利用者も多くなっている。さらに，CD/DVD-ROMサーバの導入により，ネットワーク対応のデータベースとして，雑誌記事索引が利用でき，また，学外の図書館等の蔵書検索を各研究室からも利用できるようになっている。

(5) 携帯OPACサービスの提供

蔵書検索については現在パソコンで広く利用されているところであるが，近年情報通信技術の進展が著しく，特に携帯電話は急速に一般社会に普及している状況にあり，本学としても利用者の一層の便を図るため2005年度から携帯OPACサービスを導入し，何時何処からでも携帯電話があれば蔵書検索ができるようになっている。

また，当該サービスには蔵書検索のほかに，お知らせ情報が表示でき，臨時休館，特別行事など本学図書館からの各種情報を利用者へ発信ができるようになっている。

(6) 共通科目図書コーナーと児童資料コーナーの併設

カリキュラム改革に対応して充実が図られた共通科目に対して，その担当教員が科目の目標と参考となる図書を選定のうえ，充実した「共通科目図書コーナー」を図書館 3 階閲覧室に設置している。また，子どもの成長・発達を支援する児童図書を整備し，学生あるいは多くの市民も利用できる資料として，「児童資料コーナー」を併設している。

(7) 愛教大資料コーナーの設置

本学の教育・研究に関する活動状況等を学内外の方に広く知らせ，利用できるように本学が発行した報告書等を蔵書目録に登録し，2002年度より「愛教大資料コーナー」を図書館 2 階カウンター前に設置している。

2　利用

(1) 年間開館状況

開館総日数（日）	平日時間外開館日数（日）	土曜開館日数（日）	日祝日開館日数（日）	平日時間外開館時間数（時間）	土曜開館時間数（時間）	日祝日開館時間数（時間）
304	154	38	44	770	262	264

(2) 年間入館者数

（単位：人）

学内者	学外者	合計
231,854	2,241	234,095

(3) 年間貸出冊数

（単位：人）

	平日	土曜	日祝日	合計
教職員	3,522	163	121	3,806
学生	42,738	3,465	1,665	47,868
学外者	796	180	125	1,101
合計	47,056	3,808	1,911	52,775

(4) 相互利用件数　　(単位：件)

	相互貸借		文献複写		
	受付	依頼	受付	依頼	合計
教職員		147		636	783
学生		74		844	918
学外	586		2,432		3,018
合計	586	221	2,432	1,480	4,719

(5) レファレンス件数　　(単位：件)

	所在調査	事項調査	利用指導	合計
教職員	61	5	43	109
学生	249	10	233	492
学外	131	30	54	215
合計	441	45	330	816

3　資料

(1) 蔵書冊数　　(単位：冊)

和書	洋書	合計
545,213（363,670）	138,399（86,978）	683,612（450,648）

(注)(　)内は目録データベース入力冊数

年間図書受入冊数，年間雑誌受入種類数が，予算の減少に伴って減少していく中，資料の選定において出版状況を把握し，利用者のニーズに反映すべき資料を選定することが必要であるが，特に外国雑誌については，教育・研究活動を支援するために電子ジャーナルの提供をはじめとして他大学との連携を図り，利用に供するための環境設定が早急に求められている。

(2) 年間図書受入冊数　　(単位：冊)

和書	洋書	合計
7,414	1,880	9,294

(3) 雑誌種類数　　(単位：種類)

和雑誌	洋雑誌	合計
8,442	1,812	10,254

(4) 年間雑誌受入種類数　　(単位：種類)

和雑誌	洋雑誌	合計
2,579	393	2,972

4　刊行物

愛知教育大学附属図書館概要
図書館利用案内
共通科目のための読書案内
児童図書のための読書案内

第３節　センター

1　教育創造センター

(1) センター設立の趣旨

本センターは本学における教育の充実・改善を図るため，学内共同教育研究施設として設置するものである。なお，従来の名称から「21世紀」を削除して，「教育創造センター」とした。

(2) センターの目的

本学の学部・大学院の教育課程・授業科目・教育内容等本学の行う教育全般について，専門的に調査研究を行い，それらの改善や本学の教育研究を通じた社会との協力・共同について提起し，実行に移すためのヘッドクォーターとしての役割を果たす。

特に，教育研究に関わる中期目標・中期計画の年度計画や立案実行を行う中核的役割を担う。

(3) センターの構成

当センターは大学教育開発部門，評価対応部門，社会連携部門の３部門からなる教員組織からなっている。

(4) センターの活動

①学生による授業評価「授業改善のためのアンケート」を作成し，本年度は，専門教育入門科目（Is），共通専攻科目（Ts），教科研究科目（S２），教科教育科目（M），教育科目（教育実地研究以外のE），総合演習（教育科目より分離），課程内共通科目（BS），教育関連科目（ES）を対象にアンケートを実施した。また，その結果を受けて，各授業担当者に「自己評価書」を提出して頂き，論点を整理して学内FDで報告した。

②「生活と学びの支援」アンケートを作成し，１年生全員を対象にアンケートを実施した。その結果を整理し，教授会及び学内FDで報告した。

③共通科目・教養教育の授業改善の一環として語学教育シンポジウムを開催した。

④ITによる学習支援について，OCW（Open CourceWare）と学習用CMS（Contents Management System）の調査研究・開発を行っている。

⑤活動報告も兼ねて，「授業改善アンケート」「教員の自己評価書」「生活と学びの支援アンケート」「授業改善とIT学習支援」について学内FDで報告を行った。

⑥当センターの日常的な研究活動・業務報告を公表するために教育創造センターblogを作成するとともに，研究成果等について公表するための教育創造センターホームページを作成した。上記の様々なアンケートやFDの内容は，下記のアドレスから見ることができる。

教育創造センターブログのURL: http://blog.cue.aichi-edu.ac.jp/

教育創造センターホームページのURL: http://www.cue.aichi-edu.ac.jp/

2　教育実践総合センター

(1) センター設立の趣旨

21世紀を迎え，国際化・情報化の進展，科学技術の発達，少子化・高齢化の進行，環境問題等，現代社会は複雑化・深刻化してきており，未来を生きる子どもたちの教育についても混迷を深めてきている。学校教育も大改革の時代を迎え，新しい教育課程の創造，総合的学習，学力問題，特別支援教育など新しい課題に直面している。子どもを取り巻く状況もいじめや不登校の益々の

深刻化，低学年での学級崩壊や教師に対する暴力，アスプレーション・クライシス等々の早急に対応しなければならない課題を突きつけてきている。

本学教育実践総合センターは，こうした学校教育を取り巻く諸問題に現実的に対処すべく，旧教育工学センターと旧教科教育センター（学内措置による）とを発展的に改組して，平成 9 年度に設立された。

(2) センターの目的

センターは，“教育実践及び教育臨床にかかわる理論的，実践的並びに実際的研究を行うとともに，学校教育諸問題に適切に対処することのできる教員並びに教育実践の指導者の養成に寄与すること（愛知教育大学教育実践総合センター規程第 2 条)”を目的としている。

(3) センターの構成

このセンターは 2 部門 3 分野（教育実践基礎研究部門－教科教育研究分野，教育臨床研究部門－発達支援基礎研究分野・教育臨床分野）からなり，教授 1，助教授 1，講師 1，客員助教授 2（愛知県教育委員会並びに名古屋市教育委員会から各 1）の教員組織と事務職員 1，事務補佐員 1 の事務組織及び学内外の研究員及び研究協力員とによって運営されている。

平成17年度の各分野の研究員，研究協力員の実数は下表の通りである。

部　門	分　野	研　究　員			研究協力員
		学　内	附属学校園	合　計	
教育実践基礎研究部門	教科教育研究分野	61	14	75	54
教育臨床研究部門	発達支援基礎研究分野	12	0	12	8
	教育臨床分野	11	0	11	39

(4) 研究活動

センターでは先に述べた，3 名の専任教員と 2 名の客員助教授及び多数の研究員・研究協力員が教育研究に従事している。今年度は，主に次のような活動を行った。

◎教育実践基礎研究部門

＜教科教育研究分野＞

a）センター主催研究会・研修会

＜教科教育研究分野＞

シンポジウム

第 4 回研究会（70名参加）／10月22日（土）　13：30～

愛知教育大学教育実践総合センター教科教育研究分野シンポジウム

「教育の今日的課題と教科教育のあり方」

主旨説明　川上　昭吾（本学理科教育講座）

提　　案　大槻　和夫（安田女子大学）　「国語科教育からの提言」

谷川　彰英（筑波大学）　「社会科教育からの提言」

橋本　健夫（長崎大学）　「理科教育からの提言」

総　　括　佐々木徹郎（本学数学教育講座）

司　　会　平賀　伸夫（本学教育実践総合センター）

分野研究会
第１回研究会（23名参加）／７月４日（月）　16：40～
　平成16年度活動報告及び会計報告
　平成17年度活動計画

第３回研究会（10名参加）／９月15日（木）　10：00～
　数学教育講演会
　　講演題目　How teachers could improve their professional activity by common, systematic reflections of their teaching activity.
　　「指導の恒常的反省による教師の専門性の向上」
　　講演者：Heinz Steinbring（ドイツ Duisburg Essenn 大学）
第６回研究会（24名参加）／12月７日（水）　15：00～
　教科教育研究会「習熟度をどのようにとらえるか」
　　提　　案　志水　　廣（本学数学教育講座）　「数学教育からの提言」
　　佐藤　洋一（本学国語教育講座）　「国語教育からの提言」

附属学校園との共同研究会，研修会
第２回研究会（15名参加）／７月８日（金）　13：30～
　附属高等学校との連携研究会
　　研究授業　情報A「インターネットによる情報の検索」（第１学年）
　　授業者：野田　正幸（附属高等学校）

第５回研究会（21名参加）／10月27日（木）　14：30～
　附属高等学校との連携研究会
　　研究授業１　総合的な学習の時間「新聞を読もう」（第２学年）
　　授業者　２年１組　野田　正幸・安形　和之
　　２年２組　今井　英夫・石川　理雄
　　２年３組　武田　邦生・原　　宏史
　　２年４組　黒岡　孝信・服部　悦子
　　２年５組　中尾　　幸・加藤眞太朗
　　研究授業２　総合的な学習の時間「韓国理解教育」（第１学年）
　　授業者　１年１組　杉本　明隆「韓国の歴史」
　　１年２組　伊奈福久代・伊藤　文子「韓国の音楽」
　　１年３組　近藤　康代・安藤　友人「韓国の食文化」
　　１年４組　布施　昭仁・稲垣　安彦「韓国の文化」
　　１年５組　倉地　雅克・林原　健二「ハングル講座」

◎教育臨床研究部門
＜発達支援基礎研究分野＞
分野研究会
第１回研究会（４名参加）／７月13日（水）　16：00～
　１）平成15年度活動報告及び会計報告
　２）平成16年度活動計画

第 2 回研究会（12名参加）／12月 7 日（水）　16：00～
論題：「学生ボランティアによるメール相談の成果と課題」（報告：愛知教育大学SOBA）
SOBA（いじめ相談ボランティア）研究会（毎週火曜）
寄せられた相談に対する返信の作成と，子どもの発達（いじめ･不登校･虐待･障害）に関する学習会

＜教育臨床分野＞

分野研究会
第 1 回研究会（ 4 名参加）／ 8 月22日（月）17：30～
議題：平成17年度活動計画及び予算について
心理教育相談室の統計などについて

教師等との共同研究会
愛知学校教育相談事例研究会（毎月第 2 金曜夜間，夏期・冬期合宿各 1 ）
愛知学校カウンセリング研修会（毎月第 1 ・ 3 金曜夜間）関連文献の精読及び事例検討
愛知教育大学心理療法研究会（毎月第 3 木曜夜間）
安城市子ども理解のための事例研究会（毎月第 1 火曜夜間）

附属学校園との共同研究会（いじめ・不登校・学級崩壊等プロジェクト）
第 1 回研究会（15名参加）／ 6 月15日（水）　14：00～16：30
［事例発表］乱暴・授業エスケープを主訴とする小 6 男児の箱庭療法過程
第 2 回研究会（15名参加）／ 7 月20日（水）　14：00～16：30
［事例発表］「人との接し方がうまくなりたい」と言う不登校女子の初期の面接過程
第 3 回研究会（16名参加）／ 9 月21日（水）　14：00～16：30
［事例発表］対人恐怖症の高 2 女子とのアニメを媒介にした面接
第 4 回研究会（14名参加）／10月19日（水）　14：00～16：30
［事例発表］友達との関係が上手にもてない小 4 女児との遊戯療法過程
第 5 回研究会（12名参加）／11月30日（水）　14：00～16：30
［事例発表］高 2 の不登校女子の事例
第 6 回研究会（16名参加）／12月21日（水）　14：00～16：30
［事例発表］アスペルガー症候群と診断された不登校男子の面接
第 7 回研究会（14名参加）／ 1 月25日（水）　14：00～16：30
［事例発表］学校不適応を主訴とする小 4 女児のインテーク面接

（5）センター教員の学部・大学院教育への参与状況

教員名	担当教科	必・選	単位	学年	人数	備　考
生島　博之	生活の指導と相談（B）	必	2	4	50	学部（教員養成課程）
	こころとからだセミナー	選	2	3	20	学部（ 3 人で分担）
	臨床心理実習Ⅰ	必	1	M	16	学校教育臨床専攻
	臨床心理実習Ⅱ	必	1	M	16	学校教育臨床専攻
	臨床心理面接Ⅰ（昼）	必	2	M	8	学校教育臨床専攻
	臨床心理面接Ⅰ（夜）	必	2	M	2	学校教育臨床専攻
	臨床心理面接Ⅰ（夜）サテライト	必	2	M	2	学校教育臨床専攻
	遊戯療法特論	選	2	M	12	学校教育臨床専攻
	修論指導（特別研究Ⅰ）	必	2	M1	3	学校教育臨床専攻
	修論指導（特別研究Ⅱ）	必	2	M2	7	学校教育臨床専攻

なお，学校教育臨床専攻では，当センター心理教育相談室での臨床実践（教員が院生とペアで相談ケースを担当すること）を，授業（講義，演習，実習）と同程度に必修としており，１年間（平成16年11月～平成17年12月）に629時間の心理教育相談（カウンセリング）を実施した。そして，これらのケースに関する指導院生などへの個人スーパービジョンを52時間実施した。それ故，計681時間をコマ数（1.5時間×15回）に換算すると30.3コマを担当したことになり，学部及び大学院の授業をプラスすると39.6コマ担当したことになる。

教員名	担当教科	必・選	単位	学年	人数	備　考
平賀　伸夫	理科研究BⅠ（前期）	必	1	2	10	学部教育科目
	環境と人間セミナー（前期）	必	2	3	50	学部教育科目
	総合演習Ⅱ（前期）	必	1	4	2	学部教育科目
	環境教育概論（前期）	選	2	1	50	学部教育科目
	環境教育方法論Ⅰ（前期，昼）	選	2	M	40	環境教育専攻
	保育内容研究・環境A（後期）	必	1	2	20	学部教育科目
	総合演習Ⅰ（後期）	必	1	3	20	学部教育科目
	環境教育方法論Ⅱ（後期，夜）	選	2	M	10	環境教育専攻
	卒研指導				3	幼児教育，理科教育
	修論指導				1	環境教育

教員名	担当教科	必・選	単位	学年	人数	備　考
川北　　稔	平和と人権入門	選	2	1	5	学部教育科目
	アドバイザー（後期）					

（6）教育事業

センターでは，本年度に次の教育事業を行った。

①学生のボランティア活動による「訪問科学実験」の実績

訪問日		訪問先実施実験数（イベント形式）	参加大学生（延べ）	引率教員（延べ）	実験体験者学年･数
5/25	刈谷市立平成小	14	62	4（戸谷，平賀，澤，児玉）	5，6年・133
7/30	愛知万博「科学と遊ぶ体験ひろば」＊	1（講座形式）	8	3（戸谷，平賀，川上）	約340（来場者693）
7/31	愛知万博「科学と遊ぶ体験ひろば」	1（講座形式）	9	3（戸谷，平賀，川上）	約310（来場者6259）
10/15	豊橋「第20回子どものための科学展」＊	4	12	1（戸谷）	スライム受講者・299（来場者3086）
10/16	豊橋「第20回子どものための科学展」＊	6	5	1（長沼）	約280（来場者2965）

10/26	幸田町立豊坂小PTA家庭学級	11	41	1 （戸谷）	3 年，保護者・110
10/29	一色町立一色中部小PTA	7	28 （含OB 1 ）	1 （戸谷）	児童，保護者・98
11/16	刈谷市立住吉小	10	37	2 （戸谷，平賀）	5 年・87
11/19	知立「第 5 回生涯学習フェスティバル」＊	4 （講座形式）	9	1 （戸谷）	児童，保護者・54
11/30	日進市立香久山小	10 （講座形式）	57 （含試参加 3 ）	1 （戸谷）	5 ，6 年・390
12/07	岡崎市立岩津小	14	48 （含試参加 1 ）	1 （戸谷）	4 ～ 6 年・223
12/14	三好町立北部小	12	48 （含試参加 2 ）	2 （戸谷，平賀）	5 ，6 年・137
総計	12回	－	364名	21名	2461名以上

ボランティア証明書発行者　114名，＊＝地域貢献型で他は全て学校行事型

②教師等のための公開講座の実施

『学校教育臨床－事例研究Ａ－』（17.6.4.～18.3.4.全 9 回27時間，主任講師：生島博之，参加者10名）

『箱庭づくり体験』（17.6.5.～17.6.25.全 2 回 9 時間，主任講師：生島博之，参加者30名）

『学校教育臨床－事例研究Ｂ－』（17.6.18.～18.3.18.全 9 回27時間，主任講師：生島博之，参加者14名）

『教育臨床セミナー』（17.8.22.～17.8.24.3日集中17時間，主任講師：佐藤勝利，参加者24名）

『聞いて学ぶ，動いて学ぶ，総合的学習の理論と実践』（全 3 回 9 時間，参加者10名）

③附属岡崎中学校及び附属名古屋中学校でのスクールカウンセリングの実施（17.4.8.～18.3.10.全39回207時間）

④教育臨床分野による教育事業

実践力の優れた臨床心理士を養成するために，学校教育臨床専攻の臨床心理士教員及び客員教員との合同で，臨床心理学コースの大学院生の臨床実習として，ケースカンファレンスを実施してきている。さらに，修了生へのアフターケアーとして心理療法研究会を行い，グループ・スーパービジョンもおこなっている。

一方，学部生に対しては，将来に教員をめざすもの等を対象として，不登校児童・生徒へのボランティア（訪問支援・適応指導教室など）に関心があり，学外活動支援実習室に登録した学生に対して，学習会を開いて研修を行い，時期をみて実習希望先に派遣している。

なお，下記の表は，平成17年度に参加した学生の数を示している。

	修了生	M２	M１	４年	３年	２年	1年	合計
ケースカンファレンス①	1	16	11					28
ケースカンファレンス②	2		8					10
心理療法研究会	15							15
学外活動支援実習室				2	5	1	2	10

1）ケースカンファレンス①（センター協力員・院生スタッフ対象，28名）15回　教員３名～８名
2）ケースカンファレンス②（いじめ・不登校・学級崩壊プロジェクトを兼ねる）７回　教員３名院生10名内地留学生４名附属中学校・高校教員３名
3）愛知教育大学心理療法研究会毎月１回臨床心理士（愛知教育大学大学院学校教育臨床専攻臨床心理学コース修了生ほか）10名
4）学外活動支援実習室学習会隔週金曜（４限）将来に教員をめざす学生ほか10名
5）愛知学校教育相談事例研究会毎月１回（含合宿研修＝夏期・冬期）小中高教員等30名
6）愛知学校カウンセリング研修会毎月２回小中高教員等10名

(7) 地域・教育委員会等と連携した活動

センターでは，本年度に地域・教育委員会等と連携して，次の活動を行った。

①愛知県教育委員会派遣教員内地留学生４名の臨床教育（大学院レベルの受け入れ）

伊　藤　政　治　「線描画投影法を活用した教育相談的アプローチの有効性」
－バウムテスト・星と波テストの統計的調査を中心に－

清　水　貴　子　「ITを利用した教育相談活動に関する展望」
－電子メールを活用したカウンセリングの可能性を探る－

野　田　悦　朗　「学校の場で生徒の意識を課題目標へと誘導するために」
－自我目標の強い生徒を課題目標へと促す指導についての一考察－

古　道　由　美　「学校の実情に即した教育相談の在り方についての一考察」
－心の安全地帯を目指して－

②県・各市教育委員会との連携

1）蒲郡市教育委員会・カウンセリング講座（講師：生島博之，参加者60名）　5月20日
2）大口町生涯学習講演　（講師：菊島勝也，参加者20名）　5月21日
3）安城市教育委員会・家庭教育講演会（講師：生島博之，参加者210名）　5月30日
4）西三東地区高等学校教育相談部会（講師：生島博之，参加者45名）　6月17日
5）豊橋市立八町小学校・両親学級講演（講師：中川美保子，参加者150名）　6月18日
6）名古屋市立御田中学校・現職研修（講師：中川美保子，参加者25名）　6月30日
7）三重県立上野高等学校・生徒対象講座（講師：中川美保子，参加者250名）　7月７日
8）愛知県総合教育センター・学校教育相談中級講座　7月13日
（講師：廣澤愛子，参加者20名）
9）豊明市初任者研修・箱庭療法の理論と実習（講師：生島博之，参加者８名）　8月１日
10）江南市立古知野東小学校・教育相談事例検討会　8月３日
（講師：菊島勝也，参加者30名）
11）師勝町SSN事業研修会（講師：中川美保子，参加者40名）　8月３日
12）豊田市小渡小学校・現職研修（講師：生島博之，参加者15名）　8月４日

13）知立市教育委員会・校長研修（講師：生島博之，参加者10名）　8 月19日
14）新城市千郷中学校・現職研修（講師：生島博之，参加者15名）　8 月26日
15）尾張教育事務所社会教育委員研修会（講師：菊島勝也，参加者40名）　9 月 7 日
16）幸田小学校・現職研修（講師：中川美保子，参加者20名）　9 月14日
17）稲沢市立牧川小学校・小中総合学習発表会　10月17日
（主任講師：菊島勝也，参加者40名）
18）愛工大名電高校・総合学習（主任講師：菊島勝也，参加者40名）　10月20日
19）名古屋市立八社小学校・現職研修（講師：中川美保子，参加者25名）　10月27日
20）名古屋市立江西小学校・現職研修（講師：生島博之，参加者15名）　11月11日
21）愛知県総合教育センター・学校教育相談上級講座事例研究　11月18日
（講師：生島博之，参加者20名）
22）三重県志摩・教育相談担当者支援地域研修会　11月25日
（講師：中川美保子，参加者25名）
23）西三北地区生徒指導研究会教育相談部会（講師：生島博之，参加者15名）　12月 6 日
24）名古屋市教育センター・特別教育相談員研修　12月13日
（講師：生島博之，参加者20名）
25）豊明市教育委員会・不登校対策学習会（講師：生島博之，参加者20名）　1 月24日

③県・各市教育委員会のいじめ・不登校・問題行動対策委員会への協力（愛知県，同尾張教育事務所，名古屋市，豊田市，刈谷市，知立市，安城市，西尾市ほか）
④「学校教育支援データベース」による愛知県内小・中学校を主とする校内研修会講師，保護者会講師，児童・生徒向けの講師等の紹介（17年 1 ～12月の依頼件数51件）
⑤不登校児童・生徒への学生ボランティアの派遣（愛知県：ホームフレンド，岩倉市・江南市：メンタルフレンド，西尾市：チア・フレンド，豊田市青少年相談センター：ユースワーカーほか）
⑥SOBAメンバーによる，フリースクール「クツナ池の原センター」（田原市）でのボランティア活動

(8) 教育実践総合センター刊行物

センターでは，本年度に次の刊行物を刊行した。

1）『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第 9 号（平成18年 3 月）
2）『SCOPEⅡ』第 9 号　（平成18年 3 月）
3）『学校教育支援データベース－Ver.5－』（平成18年 2 月）
4）『教育臨床事例研究』第14号（平成17年 9 月）
5）『教育臨床事例研究』第15号（平成18年 3 月）
6）『教育臨床学研究』（愛知教育大学教育実践総合センター心理教育相談室紀要）第 7 号（平成18年 3 月）
7）『SOBA活動報告書』第 3 号（平成18年 3 月）

(9) その他の活動

その他，センターでは，本年度に次の活動を行った。

1）「学校教育支援データベース」の作成とその活用（愛知県内小・中学校の教師，保護者，児童・生徒向けの支援の紹介）
2）教科書データベースの管理
3）教材作成環境の整備

4）「SOBA」による学習会（いじめ・不登校などについて）

（10）事業日誌

4月8日	愛知学校カウンセリング研修会（以降毎月2回開催，対象：教員等）
4月15日	愛知学校教育相談事例研究会（以降毎月1回開催，対象：教員等）
4月21日	愛教大心理療法研究会（以降毎月1回開催，対象：OB臨床心理士ほか）
4月24日	ケースカンファレンス（以降毎月2回の頻度で開催）
4月27日	第1回教育実践総合センター委員会
6月4日～7月2日	公開講座「聞いて学ぶ，動いて学ぶ，総合的学習の理論と実践」（全3回，対象：教員）
6月4日～3月4日	公開講座「学校教育臨床－事例研究A－」（全9回，対象：教員・保育士等
6月5日～25日	公開講座「箱庭づくり体験」（全2回，対象：一般）
6月15日	第2回教育実践総合センター委員会
6月18日～3月18日	公開講座「学校教育臨床－事例研究B－」（全9回，対象：教員・保育士等）
7月4日	第1回教科教育研究分野研究員会議・研究会
7月8日	第2回教科教育研究分野研究員会議・研究会
7月13日	第1回発達支援基礎研究分野研究会
8月	フリースクール「クツナ池の原センター」でのボランティア活動
8月22日	第1回教育臨床分野研究会
8月22日～24日	公開講座「教育臨床セミナー」（対象：教員等）
9月	「教育臨床事例研究」第14号発行
9月15日	第3回教科教育研究分野研究員会議・研究会
10月22日	第4回教科教育研究分野研究員会議・シンポジウム「教育の今日的課題と教科教育のあり方」
10月27日	第5回教科教育研究分野研究員会議・研究会
11月7日	センター紀要編集委員会
12月7日	第6回教科教育研究分野研究員会議・研究会
12月7日	第2回発達支援基礎研究分野研究会
1月13日～14日	愛知学校教育相談事例研究会宿泊研修（井ヶ谷荘）
2月	第3回教育実践総合センター委員会
2月下旬	「愛知教育大学教育実践総合センター紀要」第9号発行
3月	平成17年度教育実践総合センター運営協議会
	「SCOPEⅡ」（教科教育研究分野ニュースレター）No.9発行
	「学校教育支援データベース－Ver.5－」発行
	「教育臨床事例研究」第15号発行
	「教育臨床学研究」（センター心理教育相談室紀要）第7号発行
	「SOBA活動報告書」第3号発行

3　障害児治療教育センター

本センターは，①優れた資質をもつ障害児教育教員の養成，②障害児の治療教育に関する研究の推進，③地域社会との連携，以上の三本柱を中心にして運営されてきている。

（1）臨床活動（地域との連携）

相談事業の項で述べたように，平成17年には，新規に36件の相談依頼があり，また平成16年度より継続して治療教育を行なっているケースは104件であった。また，同じクライエントが週 1 回ペースで通っている場合が多く，相談の総件数としては延べ2571件を数えた。

表 1 には，平成17年 1 月より12月までの 1 年間に相談に来所された総計140名の居住地域別内訳を示した。大学のある刈谷市が最も多く26名（19%），次いで知立市20名，名古屋市17名など大学の近辺が多いが，近隣地域を中心としながらも，愛知県全域から相談に来ている。

地域との連携は，本センターにとって極めて重要であり，いわば地域に貢献することが同時に教育・研究につながるのである。本センター設置以来，精力的に臨床活動を行なってきており，次第に地域社会より障害児の治療教育の機関として認められ，信頼されるようになってきた。最近では，新規の相談が年30〜60件，継続的に治療教育を行なっている件数は100件ほどであり，専任教員 2 名，教務職員 1 名では，このあたりが相談受け入れのキャパシティの限界と言えよう。

表 1　平成17年　来談ケースの居住地域

刈谷市	26	名古屋市	17
豊田市	12	豊明市	6
知立市	20	日進市	1
西加茂郡	7	愛知郡	2
岡崎市	13	小牧市	1
安城市	6	春日井市	2
高浜市	2	海部郡	1
西尾市	1	丹羽郡	1
蒲郡市	3	東海市	4
幡豆郡	1	大府市	4
豊橋市	3	半田市	2
豊川市	2	知多市	2
		知多郡	1
		他府県	0
総計	140		

（2）教育活動

優れた障害児教育教員を養成するためには，臨床実習は欠かせないであろう。学部生や大学院生のなかで希望する者は，センタースタッフとして参加し，教員の指導のもとで子どものプレイセラピーを担当する。そして週 1 回，1 年間継続して実践しながら障害児の発達援助の原理や方法を学習していくのである。表 2 には，平成17年度に参加した学生，院生の数を示した。参加した学生の内訳は，一年課程（3 課程）も含めた障害児教育教員養成課程の学生が大半を占めている。

表 2　平成17年度　臨床教育実習生の内訳（人数）

学部生				院生		特専一年課程	研修生	合計
1 年	2 年	3 年	4 年	M 1	M 2			
1	5	14	8	1	2	12	2	45

なお，障害児教育教員養成課程の 4 年生 4 名はセンターでの臨床実習の実践をまとめ，卒業論文として結実させている。

本センターの専任教員 2 名（神野・吉岡）は，障害児教育教員養成課程の学生や障害児教育専攻の院生及び特殊教育特別専攻科の学生に対していくつか講義を担当しており，本センターにおける臨床実践活動で得た知見を学生・院生に教授している。

（3）研究活動

本センターでは，障害児教育講座の支援を受けながら研究誌「治療教育学研究」を発行しており，本センターの臨床活動を通して得られる研究成果の一部を発表している。平成18年 2 月には「治療教育学研究第26輯」を刊行することができた。

（4）社会的活動

本センターでは，障害児通園施設，障害児学級，特殊教育諸学校等の教職員などを対象として平

成11年度より継続して公開講座を開催している。本年度も10月から12月まで合計 6 回開催され，参加者は 9 名であった。講師として，神野，吉岡，森崎，田中が参加した。

4　保健管理センター

(1) はじめに

本学が2004年 4 月に国立大学法人に移行したことにより，保健管理センターの主な業務は，学生の健康管理と大学の労働安全衛生管理を学内の関連部門と協力して担当することの二本柱となった。前者は，学校保健法等にもとづき従来から担当してきた業務である。後者の業務は，国立大学時代には人事院規則等に基づいて実施されてきたが，法人化後は，民間企業と同じく労働安全衛生法等の法規の遵守ならびに自主活動の展開を求められるようになった。さらに，後述するように2005年度には保健管理センターの業務に，学生相談，環境保全等の業務も加えて，新しいセンターを発足させることが決定された。

(2) 2005年度の活動の概要

学生の健康管理については，本年次報告の「学生の健康管理，学生相談」の章に述べたのでそちらを参照いただきたい。ここでは，労働安全衛生に関する主な活動につき述べる。

1）労働安全衛生管理体制

安全衛生委員会に保健管理センター（以下，センター）から医師 2 名が産業医及び過半数代表から指名された者として参加し，大学の安全衛生管理に積極的に関与した。

産業医による職場巡視は，2005年度については，学内全体の巡視と労働衛生上の問題がある個所の巡視のいずれかの形で，毎月，実施した。アスベスト関連ならびに労働災害発生個所の巡視が主となり，全体の巡視が十分でなかったことは反省点である。

衛生管理者が職場巡視により指摘した事項については，施設課，人事課等と協力して解決を図った。衛生管理者交流会において，センター医師が，巡視のポイントにつき講義を行った。

大学の中期計画に基づいて「健康安全・環境保全センター」（仮称）の設置を検討するワーキンググループに，保健管理センター医師が座長ならびに委員として参加した。ワーキンググループは，約半年の検討を経て，「保健環境センター」を設置して健康安全と環境保全に関する本学のヘッドクォーターとする案をとりまとめた。最終的には，2006年 4 月 1 日をもって同センターを発足させることが決定された

2）作業環境管理

①作業環境測定：　前年度に引き続き，有機溶剤，特定化学物質，粉じんに関する作業環境測定を実施した。2005年度に管理濃度が改定されたことにより，作業環境改善が必要となった研究室も現れたため，関係の教育職員等と協議して気中濃度低減措置を講じた。また，産業医及び衛生管理者による職場巡視により存在が判明した鉛を扱う作業場について，新たに作業環境測定を実施したところ，比較的高濃度の鉛が検出され，局所排気装置の設置，保護具着用等の対策を検討した。

②アスベスト対策：　センター，施設課，人事課の職員が共同で，大学ならびに附属学校園の建物すべての室内外を巡視し，石綿含有及びその疑いのある建材，物品等の存在を調査した。一部の物品については，分析電子顕微鏡により石綿の同定を実施した。その結果，石綿を含む吹付け材，塩ビ樹脂床タイル，板材，保温材等の存在が確認された。石綿の種類は，同定した範囲では，クリソタイル（白石綿）であった。調査結果は，安全衛生委員会で審議され，撤去，遮蔽，廃棄，集中保管等の措置が講じられた。アスベスト問題への大学構成員の適切な対処のための講演会でセンター医師が講演をした。同講演の要旨や学内調査結果は大学の

ホームページ上に公開した。

③喫煙対策に関しては，限定された喫煙場所の指定を行ったが，より根本的な対策が必要である。

④作業環境測定機器の整備：　騒音計，照度計，微風速計が購入された。

3）作業管理

VDT作業による健康障害を予防するためにセンター医師による講演会を開き，人間工学的な対策等に関する情報を提供した。またVDTを使う教育職員，事務職員を対象に，作業時間，作業姿勢等の問題の有無を把握するための質問紙調査を，本学では初めて実施した。VDT作業時間が長いと眼の自覚症が増加するなどの結果が得られた。調査結果は，安全衛生委員会の審議の後，公表された。

4）健康管理

①一般健康診断

前年と同じく教職員の一般健康診断を実施した。健康診断結果の判定・事後措置区分を労働衛生管理により適合したものに変えた。

②特殊健康診断

前年と同じく教職員を対象に放射線，有機溶剤，特定化学物質，粉じんに関する特殊健診を実施した。今年度は新たにVDT作業ならびに鉛作業の特殊健康診断を実施した。VDT作業による重症の健康影響は認められなかったが，一部に軽度の健康影響がみられた。その他の特殊健診では作業に関係のある異常はみられなかった。健康診断結果は，安全衛生委員会の審議の後，公表された。

③応急処置と健康相談

前年と同じく実施した。健康相談では，メンタルヘルスならびに生活習慣病に係る相談が主を占めた。精査・治療が必要な場合には医療機関に紹介し，診療結果回答をえて爾後の健康管理に役立てるようにした。

急性心停止時の救命のために自動体外式除細動器（AED）をセンターに備えた。

5）労働安全衛生教育

VDT作業，アスベスト，メンタルヘルスに関する教育を，本章ならびに「学生の健康管理，学生相談」の章に記述したとおり実施した。

（3）2006年度の課題と展望

保健環境センター（以下，センター）の設置に際しては，①大学ならびに附属学校園における健康安全，環境保全に係る業務の分掌関係，責任が明確になり，効果的，効率的な業務処理が可能となること，②業務の合理化に留まらず，健康安全，環境保全に関連したマンパワーの連携により，教育・研究上の新しい価値を生み出すことが可能となること，③健康安全，環境保全に関し，個々には委員会が設置されて管理されているものも含めて，大学全体の状況が把握され，諸課題に関して適切な対応がなされるようになることが期待される効果として挙げられた。部門横断的業務の円滑な処理のために，学内の関連部門に兼任者を委嘱することも決められた。2006年度は，センターとしての初年度であり，健康安全と環境保全の両面での任務を果たせるように体制を整え，活動を軌道に載せることが最大の課題である。

1）労働安全衛生

①労働安全衛生管理体制

安全衛生に関しても，センター専任者と兼任者が協力して，懸案の解決に当たることが必要である。

附属学校の産業医もセンター医師に委嘱し，労働安全衛生活動の充実を図ることとなった。

産業医・衛生管理者の職場巡視を適切に実施し，巡視結果を確実に現場の改善につなげる仕組みを強化することが重要である。

②作業環境管理

(a) 作業環境測定：2005年度の作業環境測定で改善が必要と判断された作業場に関しては早急に具体的措置を講ずる。有害物取扱い実態に応じて2006年度も作業環境測定を実施し，必要な措置を講ずる。

(b) アスベスト対策：石綿を含有する塩ビ樹脂床タイルの劣化・破損箇所の撤去・張替えを，粉じん飛散を抑制しつつ実施する。アスベスト含有及びその疑いのある機器類は，適切な廃棄体制が整うまで集中保管する。

(c) 喫煙対策：禁煙指導と受動喫煙防止対策の一層の強化を図る。

(d) VDT作業環境：2005年度の調査結果に基づき，実際の作業環境をチェックし，必要ならば改善措置を講ずる。

③作業管理

VDT作業に関し重点的な職場巡視を実施し，人間工学的対策などによって，より快適な職場にするように努める。

④健康管理

(a) 一般健康診断：従来，一般健康診断を数ヶ月の間隔をあけて 2 分割して実施していたが，不合理であるため，2006年度より 1 回にまとめて外部の健診機関に委託実施する。健診データの管理をセンターに移す。

(b) 特殊健康診断：前年と同じく実施する。健診データの管理をセンターに移す。

(c) 応急処置：前年と同じく実施する。

(d) 健康相談：健診における有所見者を対象とした健康相談を実施する。

⑤労働衛生教育

必要な教育を，必要な人が受けられることを考慮して教育を実施する。

2）環境保全

①2005年度環境報告書

センターと関係部門との協力のもとに作成し，報告書の外部評価を実施する。

②2006年度の環境目標・計画

センターと関係部門との協力のもとに作成し，それに基づく全学的組織的活動を関係部門と協力して進める。

③有害化学物質管理

学内の有害化学物質ならびにそれを含む製品の使用状況を，法規制がないものも含めて調査し，適切に管理できるようにする。

5　情報処理センター

(1) 情報処理センターの目的

情報処理センターは学内共同利用施設として位置付けられ，本学の教育研究並びに学術情報処理に資することを目的としている。また，附属学校園を含めた学内の情報処理の推進を図ることも重要な目的である。

(2) 活動状況

今年度の活動は以下の 6 点の業務・研究にまとめられる。

①学術情報のための情報処理や学術情報の利用と提供に関すること

これらの業務は情報処理センターの中心業務であり，情報処理センターの運営に関する事項を審議する情報システム委員会（委員長は学術総務担当理事）と連携を図りながら実施してきた。具体的には，

(i)　各種システムやネットワークの運用・保守を行った。

(ii)　会議用文書の閲覧用サーバの運用を行なった。

(iii)　全教員へのメイリングリストの運用を行った。このメイリングリストと情報処理センターホームページを利用することで，センター，ネットワーク利用に関する情報や運用スケジュールなどを速やかに流している。また，チームウェアのフォーラムタイトル通知などに利用もされている。

(iv)　昨年度に引き続き，SUN Microsystems 社とStarSuiteのサイトライセンス契約を結び，StarSuiteを学内に公開した。

②次期学内ネットワーク構想に関すること

(i)　ネットワーク機器の老朽化してきたため，次期ネットワークの構成について議論した。また，次期ネットワークに必要と考えられるL３スイッチの購入し，購入したL３スイッチを使った小規模なネットワークを構築し，テスト運用を行なった。

(ii)　プライベートネットワークを構築するためのVPN対応ルータを購入し，購入したVPN対応ルータを使った小規模なネットワークを構築し，テスト運用を行なった。

③セキュリティに関すること

(i)　セキュリティポリシーの策定

セキュリティポリシーの基本ポリシーをもとに，情報システム委員会システム管理専門委員会を中心にガイドラインの一部を策定した。

(ii)　セキュリティ向上のための方策

大学外からの安全なアクセスのため，VPN装置の運用を行なった。また，継続的に不正侵入検知システムを運用し，このシステムから検出される攻撃から学内システムを守るため，ファイアウォールのフィルタの見直しを随時行っている。

④情報処理教育に関すること

学生に対して，コンピュータの利用やネットワークに関する操作や設定，さらにはプログラミングに関する質問などに迅速かつ適切に対応できるように，情報処理センターに「情報処理センター相談室」を置き，月曜日から金曜日の午後の４時間程度の間，８名ほどの学生によって交代で相談業務を行った。相談業務にあたる学生は情報処理センター教官とメイリングリスト等によって連絡を取りつつ，業務を遂行した。

平成13年度から，１年生で「情報教育入門Ⅰ・Ⅱ」という必修科目が新設され，全学生にノート型パソコンを持たせる形の教育が実施されてきている。情報処理センターは，この授業実施に対応した，情報コンセントを備えた教室の整備などハードウェア面の支援を行うとともに，「情報処理センター相談室」として，パソコン利用上の様々なトラブルに迅速に対応できるサポート体制の整備などソフトウェア面における学生のサポートに重要な役割を果たしてきている。

また，情報処理センターは学生に対して「情報処理センター相談室」の活用を働きかけ，また様々な種類の講習会（教育実習対策のワープロ講習会，情報処理センターの利用の仕方に関する講習会等）を開催したほか，コンピュータ・ウィルスに関する情報発信を積極的に行った。これらは，学生だけでなく教職員にも好評であった。但し，課題も残されている。その最も大きな点は，「情報処理センター相談室」の業務を担当する学生への謝金の問題である。現在，すべての学部学生がノート型パソコンを携帯しており，年々増加してきている

相談件数や時間，トラブルの多様化に対応するために必要な「情報処理センター相談室」の運営に必要となる，情報処理センターへ配分される謝金は少なく，対応に苦慮している。

一方，情報処理センターとして，ノートPC利用者のためのホームページの運用も行い，ノートPC利用者に特化した情報を流す体制を強化した。

⑤附属学校園のネットワーク運用・情報活用支援について

(i) ネットワーク機器の故障などによりネットワークが利用できない状態になった際に，ネットワーク診断や運用再開ための支援等を行なった。

(ii) 附属学校園用BLOGサーバを開設した。また，附属学校園によるBLOGの運用支援を行った。

(iii) 附属岡崎小学校にて，父兄への緊急連絡システム（携帯電話へメールで情報を配信するシステム）を構築し，運用を行なった。

⑥その他情報処理センターに関係すること

(i) 情報処理センター専任教員，兼任教員が情報処理センターコンピュータシステムの維持・管理業務を日常的に行った。その業務内容はセキュリティ維持，プログラムのバージョンアップ，ネットワークシステムの調整，Webサーバレンタルやメイリングリストの設置・維持・管理，学術ネットワークへのATM接続の不良調整など多岐にわたる。

(ii) 情報処理センターのコンピュータシステムのスムーズな実施，及び授業実施のための部屋割りや使用計画の作成等を行った。

(iii) 8月に大学見学説明会を実施し，高校生をはじめとする学外見学者に情報処理センターの施設見学を含めた活動状況を説明した。ここでは，兼任教官だけでなく，上述の「情報処理センター相談室」の業務を担当している学生も，情報処理センターのPRとコンピュータの実習を担当した。

(iv) 6月に「国立大学法人情報処理センター協議会」が一橋大学で開催された。そこでの議論を参考にして，大学の情報セキュリティの問題や情報処理センターの概算要求案を教員会議で議論した。

6　理系機器共同利用センター

(1) 目的・理念

理系機器共同利用センターは昭和61年に学内の強い必要性に迫られ学内措置センターして設置され19年が経過した。センター設置目的は「本学教員，学生の研究，教育に資するための理系機器を充実整備し，有効な共同利用の便を図ること」であり，現在もセンターの重要性が認められるとともに組織の更なる充実と強化が望まれている。

(2) 活動状況・成果・現在の問題点

理系機器共同利用センターに所属する大型機器の活発な利用と成果が現れている。学内共同利用だけにとどまらず，学外利用を広く社会に対して広めるために，理系機器共同利用センターのホームページを刷新した。以下はセンター所属の大型機器に関して，①研究活動，②教育活動，及び③現在の問題点と今後の改善，について報告する。なお各機器の業績論文等具体的な成果の詳細については各機器の責任教員の業績を参照されたい。

1）分析電子顕微鏡（責任者：理科教育講座　太田忠之）

① CB処理卵の多精受精に伴う精子侵入の微細構造的観察やSiC/Siヘテロエピタキシャル薄膜表面，ZnO/Si表面の電子線反射回折像を明らかにするために本機器を使用した。

② 卒業研究（3名）学部生の実験実習，見学説明会などで本機を使用し，教育・社会的貢

献で有効利用した。

③　設置後18年を経過し，大型機器の中では最も古い装置となった。器機の全般的な老朽化が進み中には入手困難な部品も生じている。形態的な観察のみであれば使用可能の状態である。

2）超伝導核磁気共鳴装置（管理責任者：理科教育講座　中野博文）

①　硫酸転移酵素の生物学的意義解明を目的とした糖鎖の合成，金属錯体の配位子置換反応のダイナミックス，金属錯体のクロモトロピー，金属錯体のキラル識別と不斉触媒反応，食品の加工・保蔵工程における過酸化脂質とタンパク質との相互作用について等の研究において，化合物の構造決定に本機器を使用した。

②　20名の学生の卒業研究，2 名の修士論文に利用した。また，教員研修，大学説明会，学部授業（分子機能化学，分子機能化学実験，機器分析演習）で活用した。

③　最近，超伝導磁石の真空度低下のため，液体窒素及び液体ヘリウムの消費量が 3 割程度増加している。根本的な解決のためには磁場を一旦落とし，オーバーホールし，再度超伝導にする必要がある。もし，このオーバーホールを行わないと，超伝導磁石のクエンチによる爆発事故も考えられ，非常に危険である。しかし，修理費が調達不可能であるため改善の余地がない。この状況は，研究及び教育に大きな影響を及ぼす。今後，早急な核磁気共鳴装置の更新が不可欠である。

3）ICP発光分析計（管理責任者：理科教育講座　長沼　健）

①　環境調査として水，大気の成分の微量成分分析として利用した。学内で複数の教員の研究を支えている。

②　数名の学生の修士論文や卒業研究に利用した。また，聞き分析の授業での見学や学内の不明廃液の確認にも利用できた。

③　装置の老朽化が挙げられる。さらにアルゴンガスの消費などランニングコストの点で維持が苦しいと考えられる。

4）多目的光分析計測装置：レーザー流速計（管理責任者：理科教育講座　矢崎太一）

①　エンジンや内部の大振幅振動流に伴う音響流を直接観測するため本機器を利用した。本機器は他大学や地域企業からの利用もあり地域連携にも役立った。

②　3 名の学生の卒業研究に利用した。地元の高校生の大学見学（総合的学習）・大学公開を通して最近の科学の現状を伝えることができた。

③　装置の老朽化や予算の欠如によって装置の性能が維持できない問題が生じている。またデータ処理においてもWindowsに対応できないなどの問題がある。

5）多目的光分析装置：ストップトフロー分光光度計（管理責任者：理科教育講座　稲毛正彦）

①　金属イオンの関与する化学反応の機構を明らかにするために，本装置を用いて反応速度の測定を行った。他大学との共同研究にも活用し，顕著な研究成果をあげた。

②　4 年生の卒業研究に本装置を利用するとともに，学部の講義でこの装置を使った研究例を紹介した。大学見学説明会などの事業でも本装置を公開し，学術研究の現状を社会に伝えることに貢献した。

③　本装置を導入してから14年以上が経過しており，いろいろな部分で老朽化が著しくなってきた。本装置に対する需要は高く，更新又はオーバーホールのための予算を必要としている。

6）多目的光分析装置：レーザーラマン分光光度計（管理責任者：理科教育講座　岩山　勉）

①　ナノ構造半導体の微細構造評価，光学特性評価に本装置を使用した。また，本装置の一部（レーザー装置）をレーザーアニール用光源として有効に活用した。

②　学生の卒業研究等に利用した。地元高校生の大学見学（総合的学習の一環として）・大

学見学説明会において，機器の説明を通して最近の科学技術の現状を具体的に伝えることができた。

③　装置の老朽化，陳腐化は著しい。また予算の欠如により装置の性能が維持できない問題点が生じている。レーザー管は極めて高価な消耗品であるため，現在使用中の管の寿命とともに使用が不可能となることが想定される。

7）多目的光分析装置：エリプソメーター（管理責任者：技術教育講座　清水秀己）

①　研究活動：SiC/Siヘテロエピタキシャル薄膜，ZnO薄膜，SiO 2 薄膜，アモルファスカーボン薄膜，タングステンカーバイド薄膜等の光学定数（屈折率，膜厚）の測定に本機器を使用した。

②　4 名の学生の卒業研究並びに 2 名の修士研究に利用した。

③　予算が十分でないため，新しいバージョンアップされたソフトも購入することができず，データ処理に多大な時間を要している。光学系に故障等が生じた場合を考えると，将来的には不安である。

8）多目的磁場装置（管理責任者：理科教育講座　岩山　勉）

①金属合金のホール係数，磁気抵抗係数の測定，並びに，鉱物の残留磁化測定等に本装置を使用した。

②学部学生，大学院生の研究に利用した。地元高校生の大学見学（総合的学習の一環として）・大学見学説明会の折，機器の説明を通して最近の科学技術の現状を具体的に伝えることができた。

③現在のところは特に問題点は見あたらない。この装置のための維持費が一切ないため将来的には不安は残る。しかしながら装置の老朽化，陳腐化は著しい。

9）電子スピン共鳴装置（管理責任者：理科教育講座　石田博幸）

①　タイ王国のラチャパット大学チェンライとの環境測定共同研究の一部として使用している。タイ国内各地の水道水の成分を分析し，地域差を見ようというものである，ESRは生物レベルの情報は与えないため，水道水の可飲の適否についての判断は得られないが源流の山地の構成や都市からの排泄物などの情報が得られている。また，タイの水道水と日本の水道水の分析結果の比較も行っている。食品化学の一端として，日常食物に含まれるESR対象物体である鉄分やラジカルの定量に使用している。

②　上記の研究はタイからの留学生も一部を担当したりして，留学生教育として役立っている。タイからの留学生にとって物理学や科学の内容にふれるばかりでなく，日本と日本の大学の大学教育・研究の実情を学ぶ良い機会となった。

③　導入されて10年以上経過しており，維持経費がわずかなため十分な消耗品を入手できない。本機器は購入当時からデジタル化（すなわち，コンピュータ化）されているが，オフライン使用に限られているため解析はアナログ的手法に頼らざるを得ない。得られたデータがワンタイムユースに限られ，現代求められている多岐にわたるデータの利用ができない。今後，新しい機能と性能をもつ機器の更新が必要である。

10）遺伝子解析システム（管理責任者：理科教育講座　羽渕脩躬）

①　硫酸転移酵素の精製，遺伝子クローニング，遺伝子から発現したリコンビナント蛋白の性質解明，動物組織からRNAの調製，細胞内膜画分の分離に本システムを使用した。

②　4 年生の卒業研究，院生の修士論文，共同研究をしている博士課程院生の博士論文の研究，3 年生の学生実験などに利用した。大学見学説明会では設備の公開と説明を行った。

③　本システムは，超高感度画像解析装置が老朽化のため使用不能となっている以外は当初の機能を維持している。PCR装置は新機能をもつ装置を追加導入したことにより，最新の実験法にも対応できる。維持費の削減により，必要な保守管理ができなくなり装置の性能

維持が困難になっているという問題点が生じている。

11）液体窒素貯槽（管理責任者：理科教育講座　榊原洋子）

① 液体窒素により，簡便かつ低廉に『超低温』の実験環境を創出できるため，様々な分野で活用されている。たとえば，生体組織の瞬間凍結固定や実験装置機材等の冷却材として使用することで，最先端科学研究にも寄与している。

② 養護教育講座，理科教育講座，技術教育講座，家政教育講座，保健体育講座，附属学校において，学生実験や卒業研究実験等に利用された。また，公開講座や地域貢献事業での科学実験講座の素材としても活用されている。2004年度は55名の学生が使用者登録した。

③ 学生使用者の多くが，液体窒素使用の初心者であることから，安全講習会の実施等保安教育に努めている。また，日常点検や年 2 回の外部機関による保安点検を実施し，現在たいへん良好な状態であるが，施設の老朽化が懸念されている。さらに，東南海・南海地震対策特別措置法への応答として，地震情報に即した防災対策計画を策定した。

12）核酸解析システム（管理責任者：理科教育講座　渡邊幹男）

① DNAの塩基配列を決定し，遺伝的多様性の有無等がわかる。得られた結果をもとに，絶滅危惧植物等の保全方法の確立を目指している。

② 卒業研究はもとより，地域貢献活動として豊明市からの委託研究（絶滅危惧植物ナガバノイシモチソウ集団の復元）にも利用された。さらに，岡崎高等学校のスーパーサイエンス部もその活動のために利用し，学生科学賞において入賞を受賞した。

③ 維持管理費の減額により，機器の維持管理が困難になってきている。

13）FT-IR（管理責任者：技術教育講座　清水秀己）

① Al蒸着表面上の微量アモルファスカーボン薄膜，並びにタングステンカーバイド薄膜のRAS（Reflection Absorption 測定Spectroscopy，高感度反射測定法），SR（Specular Reflection 正反射測定法）測定による微細構造の評価に利用した。

② 4 名の学生の卒業研究と 2 名の修士研究に利用した。

③ 設置されてまだ間がないため，現在のところ問題点は見あたらない。この装置のための維持費が一切ないため将来的には不安は残る。

14）表面界面観測システム：ナノマニピュレーター（管理責任者：理科教育講座　三浦浩治）

① 本学で新規に作成されたフラーレングラファイト層間化合物（フラーレンGIC）の超潤滑機構の研究に本装置を用いた。本研究成果は，新聞紙上をはじめ，いろんな科学雑誌に取り上げられ世界的に注目されている。

② 地元高校生の大学見学の一環として利用された。研究者，会社の技術者への技術指導にも利用された。

③ 装置のすべての機能が利用可能になったことで，今後の研究におおいに役立てたい。

15）　40cm天体望遠鏡（管理責任者：理科教育講座　澤　武文）

① 本機器は教育用に設置されたものであり，現在，研究活動には用いていない。

② 卒業研究（ 3 名がそれぞれ食連星の観測．観測時間： 3 時間×15回× 3 名），宇宙科学実験B（観測時間： 2 時間× 5 回）：一般公開（ 6 回：観望会の延べ参加者数約200名），大学紹介（ 2 回）などに利用した。

③ 昨年末，卒業研究などで頻繁に使用しているとき，スリットの開閉がスムーズに行えなくなり，その結果開閉用のモーターが故障し，手動での開閉にせざるを得なかった．3 月に修理したが，望遠鏡も駆動時に異音がするなど，老朽化が進んでいる．今後オーバーホールなど，何らかの対策が必要である．

(3) 理系機器センターの今後の課題と対応

上記で指摘されているように多くの機器が老朽化し，時代の要求に対応できる性能を維持できなくなっている現状がある。このことは本学の教育・研究にとって重大な問題であり，理系分野の研究継続にとって障害となりつつある。本学の目標である教育をはじめとする種々の分野で優れた人材を送り出すためには，早急にこの問題を解決しなくてはならない。大学が独法化され，今後開かれた大学として地域と密接に連携していくためにも今後計画的に維持費の獲得及び大型機器の充実更新を図る必要がある。

第７章　施設整備

第７章　施設整備

1　施設の現状

本学の施設は，昭和45年より井ヶ谷団地に統合整備されたが，大半の建物は建築後30年以上を経過し，老朽化が進行している。学部改組及び大学院の充実整備により，狭隘化が進み，十分な教育・研究スペースの確保が難しくなってきている。今後は教育・研究内容の変化に伴う施設整備の充実が望まれている。また，各附属学校（園）においては，さらに老朽化が著しく，教育・研究内容の変化への対応も十分とはいえない状況にある。本学は，東海地震の強化対策地域に指定されたため，主要な建物の耐震診断は完了している。今後は耐震補強対策を含めた建物大型改修が必要である。なお，耐震補強，改修工事は17年度に第一共通棟校舎改修工事（学生サービス等を考慮したリフレッシュルーム等設置）が済み，18年度に附属図書館耐震改修を実施予定である。また，アスベスト対策として，17年度に附属図書館ロッカー室，附属名古屋中学校機械室の除去工事をし，18年度に排水処理施設の除去工事を予定している。

2　中期的視点における施設整備計画

本学の理念・目標に沿った教育・研究内容にふさわしい機能を備えるとともに，ゆとりと潤いのあるアメニティキャンパスの創造再生，施設維持保全等を実施するため，学内予算による環境整備特別経費として「環境の改善」「建物の改善」「バリヤフリー」の３本の柱を立て重点的に工事を実施している。また，学生の要望の多かったバス停の改修は17年度に寄付金を含めて実施した。安全性確保のため耐震補強・改修工事及び施設の有効活用を図るべく施設マネジメントを含めた施設整備はこれからも必要である。

3　施設点検・評価等

施設の実状を的確に把握し，安全性・省エネ・環境・快適性・インフラストラクチャーの機能の確保及び既存施設の効率的利用を促進し有効活用に努めるほか，改修計画，維持管理計画等の改善計画，施設設備の点検を定期的に実施するために設定した毎月１回の「キャンパスレンジャーの日」に各施設担当者が点検を行っている。その結果に基づいて各所屋上防水水漏れ修理，排水管の詰まり，外灯修理他を含め工事を実施した。

4　工事の実施

大学等の教育・研究の快適な環境及び施設等の機能を維持するため，下記の工事を実施した。

(1) 耐震補強・大型改修工事

○　第一共通棟校舎耐震改修工事　　RC３－5,507m^2

(2) 安全性に対する配慮のための工事

○　排水溝蓋敷設工事　　附属名古屋中学校通路

(3) 教育・研究を支える様々な活動に対する配慮のための工事

○　量水器　　大学構内，岡崎地区

○　電力監視設備　　岡崎地区，名古屋地区

(4) 学生へのサービスの観点からの工事

○　第一共通棟　　リフレッシュルーム・自習室・事務室新営

○　バス停改修　　知立行き

○　駐輪場の設置　　附属図書館西側（130台）

○　便所改修　　第一福利施設

○　シャワー用ボイラー更新　　附属屋シャワー室（男子）

○　課外活動施設改修　　野球場内野，洋弓場塀
○　スロープ設置　　附属名古屋中学校

(5) 健康的かつ快適な環境の確保のための工事

○　樹木剪定，刈込み　　構内幹線道路沿い他，附属岡崎小学校，附属養護学校
○　空調機更新・設置　　附属図書館新館，附属幼稚園南舎
○　照明設備改修　　自然科学棟，学生寮，附属幼稚園

(6) 施設の老朽化等への対応のための工事

○　屋上防水改修工事　　第一福利施設，美術第二実習棟，文化系サークル棟，附属岡崎小学校特別教室，附属養護学校中等部
○　屋外排水管改修　　第一福利施設周辺，陸上競技場周辺
○　床改修　　第一人文棟，自然科学棟
○　ボイラー煙突改修　　附属名古屋小学校

(7) その他小工事　　約280件

5　保守点検等の実施

○　給水・排水設備　　生活排水処理施設保全業務，給水設備等保全業務
○　電力・電話設備　　電話保全業務，受配電設備保全業務，電気工作物保安業務
○　冷暖房設備　　ボイラー点検整備，空調機（個別空調）保全業務
○　その他設備　　昇降機保全業務

なお，ボイラー点検整備以外は全て複数年保守契約（２～３年）とし，経費を節約した。

第８章　教員の教育研究活動

第８章　教員の教育研究活動

生活科教育

布谷　光俊　Nunoya, Mitsutoshi　　教授　　生活科教育講座　　教育学士

❶ 専門分野：生活科教育，総合的な学習の時間の教育，幼児・児童・生徒の体験教育。
関連分野：幼児教育，幼保小・家庭・地域の連携による子どもの教育，教師の現職研修，他。

❸ 日本生活科・総合的学習教育学会（常任理事・副会長），日本教科教育学会，中部教育学会，LES愛知研究会（日本生活科・総合的学習教育学会愛知県支部），他。

❹ 学　部：生活科教育Ａ１，生活科研究Ａ１，生活科研究Ｂ１
大学院：生活科教育方法特論，生活科内容学特論Ⅰ，幼・小連携教育特論，生活科授業研究Ⅰ，特別研究Ⅰ，Ⅱ

❺ 現在の研究テーマ：
「生活科・総合的な学習の時間の指導法」「幼・保，小，家庭，地域等との連携による子どもの教育」「教師の現職研修と学校の管理・運営のあり方」
業績リスト：
・「教師の力量を高める現職教育」，平成17年度『教師の力量を高める現職研修の取り組み』巻頭論文，pp.1-６，三河教育研究会，2005年。
・「人間の生活と自立への基礎育成についての教材開発」，『「ライフコース」のカリキュラムと教材開発』，pp. ９-12，愛知教育大学・平成17年度共通科目プロジェクト研究報告書，2006年
・「子どもの心を豊かに育む幼・小連携の在り方を考える」，名古屋市立幼稚園長会誌『なでしこ』第10号，2006年，他
学術・研究交流等：
・日本生活科・総合的学習教育学会の副会長として，全国大会（広島大学）や東京シンポジウム（立教大学）を始めとした学会諸行事等での学術・研究交流に努めた。

❻ 愛知教育大学附属名古屋小学校校長，附属学校運営委員会委員

❼ 審議会等の委員：名古屋市教育委員会「学力向上パイロット事業校選定協議会」委員（副会長），同「教科用図書選定協議会」委員（副会長），同『幼稚園の子どもたち』編集委員，他。
公開講座，講演会等の担当：青森県総合教育センター，福井県教育研究所，長野県生涯学習推進センター，東海北陸私立幼稚園教育研究大会（長野大会），長野県教委・幼小教育課程研究会（千曲市），西尾市教委・幼小連携教育研究会，高知県教委・幼小連携教育研究会（芸西村），愛知教育大学公開講座，その他での講座・講演。
学校現場等における指導助言：広島大学附属東雲小学校（日本生活科・総合的学習教育学会全国大会公開授業校），岡崎市立三島小学校（現職研修），大町市立大町西小学校（北安曇教育会生活科・総合学習研究会），信州大学附属松本小学校（学校評議員会），その他での指導助言。

野田　敦敬　Noda, Atsunori　　教授　　生活科教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：生活科教育
関連分野：総合的学習，理科教育

❷ 日本生活科・総合的学習教育学会　第１回研究奨励賞（2003年６月）

❸ 日本生活科・総合的学習教育学会（常任理事，事務局長）
日本理科教育学会，日本教科教育学会

❹ 生活科研究AⅠ（２年），生活科研究BⅠ（２・３年），人間と生活「入門」（１年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），生活科教材論特論（大学院），生活科教材開発演習（大学院），生活科授業研究Ⅱ（大学院）

・総合演習Ⅱ及び生活科授業研究Ⅱでは，附属学校及び県内公立学校の協力得て，実際に授業参観及び事後検討会に参加する機会をできるだけ多くとり，実践的な指導力向上に努めている。

・市民参画型教員養成コーディネータ会議の試みの一つとして，総合演習Ⅰで，中部電力と連携した授業を実施し，新聞やTVでも取り上げられた。

・大学院２年生３名の修論指導（現職派遣１名を含む）及び学部自然系理科教育領域４年生５名の卒論指導をした。

❺ 生活科教育の普及，改善及び生活科で育った学力についての研究

・論文

「次期学習指導要領改訂に向けての１提案～自分自身への気付きを生活科で養う学力の中核に～」日本生活科・総合的学習教育学会誌第13号，2006年３月

「生活科・総合的学習の果たすべき役割～中教審教育課程部会『審議経過報告』を受けて～」生活科教育講座紀要第４号　2006年３月

「生活科における自然に関する内容の優位性と理科学習での生かし方」日本理科教育学会　理科の教育2005年12月号

「生活科の重点方策とPDCAをどう進めるか」教育開発研究所　教員研修　2005年５月号増刊

・日本生活科・総合的学習教育学会第４回シンポジウムにて基調講演（2005年11月23日，立教大学にて）

❻ 大学運営：教育研究評議会評議員，学生支援委員会委員，生活科教育講座代表

❼ 社会的活動

・国立教育政策研究所教育課程研究センター　全国的かつ総合的な学力調査の実施に係る研究指定校（小学校生活）企画委員会委員

・なごやっ子学びの在り方懇談会委員（副座長）

・名古屋市立学校園教育研究推進事業審査委員（副委員長）

・名古屋市立橘小学校，老松小学校学校評議委員

・三河教育研究会生活科部会常任講師

・教育センター及び教育研究所研修講師（仙台，福井，鳥取など）

・愛知県田原市立若戸小学校研究発表会（東三河地方事務協議会委嘱）にて講演

中野　真志　Nakano, Shinji　　助教授　生活科教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：生活科教育
関連分野：総合的学習，社会科教育，カリキュラム論

❸ 日本生活科・総合的学習教育学会（常任理事，事務局，学会誌編集委員）
日本教育学会，日本教育方法学会，日本カリキュラム学会，アメリカ教育学会，日本デューイ学会，International Society for Cultural and Activity Research

❹ 生活科研究ＡⅠ（３年），生活科教育Ａ（２年，３年），社会科教育Ａ（２年），社会科教育Ｂ（２年），英米思想演習Ⅰ（４年），英米思想演習Ⅱ（４年），国際社会と日本「入門」（１年），生活科内容学特論Ⅲ（大学院），生活科カリキュラム演習（大学院），生活科授業研究Ⅲ（大学院）

教科教育に関する授業では，基礎的な理論について解説しながら，その教科の授業を計画し，指導し，評価する基本的諸能力の習得を目指している。受講生が能動的に授業参加できるように，調査活動や体験活動を採り入れたり，優れた実践事例を紹介したり，視聴覚教材を利用しながら，理論と実践を結びつける授業を心がけている。

演習は主に英語の学術論文・著書の読解と考察であるが，テーマの選択に関しては，できる限り受講生の希望を採り入れ，また受講生同士が自由にディスカッションできるよう配慮している。学問に対する知的好奇心と知的興味を育てたいと考えている。

❺ (1) 生活科教育及び総合的な学習に関する研究　(2) デューイ実験学校のカリキュラムに関する研究　(3) 合衆国におけるサービス・ラーニングに関する研究

・論文：

「ジョン・デューイとヘルバルト主義（Ⅱ）－アメリカ・ヘルバルト主義の『相関』概念について－」愛知教育大学研究報告　第55輯（教育科学編）2006年３月。

「サービス・ラーニングの理論モデルに関する研究」（共著）愛知教育大学附属教育実践総合センター紀要 第９号2006年３月。

「生活科における気付きの広がりと深まり」（共著）愛知教育大学附属教育実践総合センター紀要 第９号2006年３月。

・招聘講演：

中国第二回総合学習シンポジウム（昆山市玉峰実験学校）分科会講演2005年５月

・学会発表：

ISCAR第１回国際会議スペイン・セビリア大会　自由研究発表（共同）2005年９月

❻ 大学院入試委員会委員，情報システム委員会委員，共通教養科目「国際社会と日本」のコーディネーター

❼・愛知教育大学附属岡崎小学校　第56回生活教育研究協議会　生活科・助言
・岡崎市教育研究大会　生活科・助言
・愛知県教育研究集会　生活科分科会・助言
・愛知県総合教育センター　「小学校10年目経験者（生活科）」講師
・尾張旭市「総合的な学習」部会　講演会　講師
・碧南市教育研修会生活科部会授業研究会　講師
・阪神地区小学校生活科教育実践交流会・講演会　講演
・加古川市生活科担当者　授業研究会　講師
・国立教育政策研究所　「教科等の構成と開発に関する調査研究」　研究協力者

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

久野　弘幸　Kuno, Hiroyuki　　助教授　生活科教育講座　博士(教育学)

❶ 生活科教育，社会科教育

❸ 日本生活科・総合的学習教育学会（常任理事），日本社会科教育学会，日本カリキュラム学会，日本グローバル教育学会（理事）

❹ 生活科教育・生活科研究（２～４年），共通科目「平和と人権」の内入門講座及びセミナー講座（１・３年），総合演習Ⅰ（３年），生活科内容学特論Ⅳ・生活科比較授業論特論（大学院）

教育活動の問題点：

フリースペースを持った教室があれば，ワークショップなどの多様な教育活動が行えるが，現在講義棟内にそれに適した教室環境がない。

教育に対する抱負：

学生にとってなじみのない生活科に親しむとともに，生活科授業実践に対する関心を高められるよう工夫と努力を続ける。共通科目においては，学生の教養を一層深められるよう，新しくまた学生の関心のあるテーマの題材を取り上げたい。

❺ 現在の研究テーマ：

学術研究としては，ヨーロッパ教育においてヨーロッパ連合（EU）が果たす役割の実態を解明しつつ批判的に検討することをテーマとしている。また実践研究としては，幼小連携の中核として生活科を位置づけることにより生活科の新境地を開拓することを課題としている。

業績リスト：

共編著『地域カリキュラムで総合的な学習を創る』，明治図書，2005年。「国民の知る権利と政府情報へのアクセス権」の教材化，『“情報化”をめぐる論点・争点と授業づくり』，明治図書，2005年。「政治のグローバル化をどう考えるか―グローバル・ガバナンスによる政治の構築―」，『“グローバル化をめぐる論点・争点と授業づくり』，明治図書，2006年。「生活と系統により深まる『学び』」，『初等教育資料』，802号，2005年。他

科学研究費補助金など研究助成の受領状況：

平成17年度科学研究費補助金「基盤研究（B)」(研究分担者)

学術・研究交流等：

ドイツ・ハンブルク大学政治教育講座並びにフライブルク教育大学事実教授講座と継続的に実践研究の交流を続けている。

❻ 時間割編成委員会委員

❼・公開講座「総合学習カリキュラムのデザインとその改訂」(全５回の内，第１回担当)

・岡崎市現職教育委員会　総合的な学習部「基礎研修会」講師

・高浜市立翼小学校学校評議員

・兵庫県三木市立口吉川小学校，岡崎市立広幡小学校，高浜市立翼小学校，額田町立夏山小学校，幸田町立豊坂小学校，山口県周南市立沼城小学校他　実践指導講師

障害児教育

佐野　竹彦　Sano, Takehiko　　教授　障害児教育講座　教育学博士

❶ 認知心理学，視覚障害

❸ 日本心理学会，日本教育心理学会，日本発達心理学会，視覚障害リハビリテーション協

会，東海視覚障害研究会

❹ 知的障害児心理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ（２年），障害児データ解析法（２年），障害児臨床心理診断法（２年），こころの発達と障害B（２年），知的障害児研究法Ⅱ（３年），知的障害児臨床実地研究（３年），知的障害児教育演習Ⅰ・Ⅱ（４年），障害児認知心理学特論一（大学院），障害児認知心理学演習一（大学院），障害児データ解析法（特専）

主に障害児教育教員養成課程（学部），障害児教育専攻（大学院）の授業を担当している。学部では，障害児を理解するための方法としての心理学実験を担当している。心理学実験についての基本的理解は十分に学生に伝えることができていると考えるが，障害児を対象に実際に実験をする時間がない点が問題である。この問題点は心理検査の実施方法の修得をめざす授業においても生じている。また，研究費の不足から実習に必要な心理検査用具を十分用意できていない点も問題である。データの整理方法についての授業に関しては，授業回数の制限から講義できない領域がある。この点は，卒業論文の指導時に個々の学生に対応している。３年生に対しては卒業論文作成の準備として，研究の進め方の習得をめざす授業を担当している。各々の学生の興味・関心を尊重して，卒業論文のテーマが決まるように努力しているが，学生が研究テーマを明確にするまでに時間がかかり，予備調査や予備実験等の時間を十分とれない点が問題である。４年生に対しては，演習を担当しており，各学生が関心を示す学術論文について，ディスカッションする形式をとっている。論文を読む上での留意点を会得させることと，卒業論文の書き方を習得させることを目的としている。大学院においては，心理検査及びデータ処理に関してより高度な授業を行っている。また，研究論文の講読を通して，適切なデータ処理方法の選択方法を習得させることをめざしている。学部からの直進学生と現職教員の学生がいるために，レディネスが多様であり，授業の水準をどこにおくかが難しい。

❺ 視覚障害者が単独歩行をより安全にしかもストレスが少なく行えるようにするための人的環境について関心をもっている。まず，大学生を対象に実施したアンケート調査により，視覚障害者の単独歩行を援助する側の心理について報告した。次いで，援助を受ける側の視覚障害者に実施したアンケート調査のデータの分析結果を報告した。これらの調査結果に基づいて，より適切な援助－被援助関係についての考察を深めたいと考えている。

知能検査で何がわかるのか　そだちの科学　第３号　2004

❻ 大学院専攻代表，大学院入試部会委員，時間割編成専門委員会委員

都築　繁幸　Tsuzuki, Shigeyuki　　教授　　障害児教育講座　　教育学博士

❶ 聴覚障害教育学，比較障害児教育学，軽度発達障害学

❸ 日本特殊教育学会（学会誌編集委員，免許問題等研究会委員），日本聴覚障害教育実践学会（事務局長），日本国際聾教育学会（事務局長），愛知教育大学LD研究会（代表幹事），愛知教育大学障害児教育方法学研究会（代表幹事），米国高等教育学会

❹ 障害児教育概論（１年），聴覚言語障害児教育特論（２年），聴覚障害児指導法（３年），聴覚障害児指導法特論（大学院），聴覚障害児指導法演習（大学院）

障害学生支援：障害児教育講座障害学生支援委員会委員として活動を行う。

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

フレンドシップ事業：碧南市，刈谷市教育委員会等と連携し，障害児教育の実践に関する活動を継続している。

❺ ①聴覚障害児のコミュニケーション行動に関する発達研究，②軽度発達障害児の地域支援プログラムの開発研究，③障害児教育の比較教育学研究

業績リスト：

・都築繁幸・片桐ユリ子　2005　聾学校と知的障害養護学校のセンター的役割に関する一考察　障害児教育方法学　研究，第3巻，第2号，7－12.
・安藤仁史・都築繁幸　2005　通常学校の校内委員会設置・運営に対する教師の考え　障害児教育方法学研究，3巻，第2号，1－6.
・都築繁幸・畑中里依子　2005　P－Fスタディにみる児童の社会的スキルに関する一考察　障害児教育方法学研究，第3巻，第2号，13－23.
・田島広嗣・都築繁幸　2005　自閉症児が通常学級で学ぶ際の特殊学級担任の支援－特殊学級担任による国語科学習補助の実践から－障害児教育方法学研究，第3巻，第3号，39－46.
・田中貞子・都築繁幸　2005　我が国の高等教育機関における軽度発達障害学生への支援の現状について　軽度発達障害学研究，第2巻，第2号，20－31.
・都築繁幸・柴田沙弥佳　2005　軽度発達障害児の教育支援に関する教師及び保護者の意識　軽度発達障害学研究，第2巻，第3号，12－27.
・都築繁幸・田中貞子　2005　軽度発達障害が疑われる高校生の実態把握の試み　軽度発達障害学研究，第2巻，第3号，28－33.
・安藤仁史・都築繁幸　2005　軽度発達障害児の校内支援体制構築に関する一考察　軽度発達障害学研究　第2巻，第4号，7－12.
・都築繁幸・柴田沙弥佳・橋本奈津子・植村美香　2005　広汎性発達障害児の治療教育に関する一考察（1）　軽度発達障害学研究，第2巻，第4号，29－40.
・都築繁幸・森　智美・長坂直美・伊藤友美　2005　広汎性発達障害児の治療教育に関する一考察（2）　軽度発達障害学研究，第2巻，第4号，41－54.
・都築繁幸・新美奈緒子・藤井安規・前田綾子・福井衡子　2005　広汎性発達障害児の治療教育に関する一考察（3）　軽度発達障害学研究，第2巻，第5号，26－36.
・野本裕子・都築繁幸　2006　聴覚障害幼児の日本語対応手話の習得に及ぼす手話ビデオ教材の効果　治療療教育学研究，26，67－74.
・都築繁幸　2006　アメリカ聴覚障害児教育におけるトータル・コミュニケーションの発展過程に関する考察（4）　－バイリンガル・バイカルチャー教育の動向から－愛知教育大学研究報告，55（教育科学編），19－27.
・本多理絵・都築繁幸　2006　聾学校小学部における「総合的な学習の時間」の取り組み　愛知教育大学教育実践総合センター紀要，9，107－114.
・田島広詞・都築繁幸　2006　自閉症児の交流学習に対する学習補助の試み　－特殊学級に在籍する自閉症児が通常学級で学ぶ際の特殊学級担任の支援－　治療教育学研究，26，57－65.
・都築繁幸・高垣徹也　2006　盲・聾・養護学校の巡回相談の取り組みと今後の課題－サービス提供者としての巡回相談員とサービス受給者としての小・中学校の考え方を中心に－　軽度発達障害学研究，第3巻，第1号，14－25.
・都築繁幸・今尾貴美子・菅沼賀奈子・一木裕子　2006　広汎性発達障害児の治療教育に関する一考察（5）　軽度発達障害学研究，第3巻，第1号，26－34.
・都築繁幸・永野智子・石川愛子　2006　広汎性発達障害児の治療教育に関する一考察

(4)　障害児教育方法学研究，第４巻，第１号，30－39.
・都築繁幸・野呂尚子・原田知代　2006　ADHDの疑いのある児童に対する心理劇の試み　障害児教育方法学研究，第４巻，第１号，40－50.
・今尾貴美子・都築繁幸　2006　聴覚障害児の作動記憶に関する一考察　障害者教育・福祉学研究，第２巻，１－11.
・小坂大介・都築繁幸　2006　健聴児の音韻認識の発達　障害者教育・福祉学研究，第２巻，19－27.
・大島光代・都築繁幸　2006　聾学校幼稚部における保護者支援の事例的考察　障害者教育・福祉学研究，第２巻，43－54.

❻ 特別専攻科運営委員，障害児教育講座障害学生支援委員

❼ 西三河地区・豊田加茂地区・碧南市･刈谷市･岡崎市就学指導委員会委員，日本語能力検定委員会，名古屋市･碧南市巡回教育相談員

恒次　欽也　Tsunetsugu, Kinya　　教授　　障害児教育講座　　文学修士

❶ 心理学，専門分野：発達臨床心理学　関連分野：小児（母子）保健学

❷ 沖縄県県知事感謝状（1999年）

❸ 日本小児保健学会（発育評価委員会同小委員会），日本心理臨床学会，日本発達心理学会

❹ 専門科目入門Ｂ（１年），肢体不自由児心理学基礎実験Ⅰ，Ⅱ（２年），障害児臨床心理診断法（２年），知的障害児研究法Ⅰ，Ⅱ（３年），乳幼児発達心理学特論（大学院），障害乳幼児心理学演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）

・教育活動の問題点，FD活動，教育に対する抱負

従来通り，学部の授業ではなるべく機会があれば施設等の見学・参加や地域のバリアーフリー調査などを学生が地域に出て個人研究としてまとめる機会を設けている。担当科目が実験や研究法が多いので，その分それに必要な基本的な知識の習得を目指している。大学院では演習形式や学生の発表や討議をできるだけ重んじているが，最近の研究の紹介等も行うようにしている。いずれもまだ十分な成果をあげるに至っていないのが実状だと思う。

❺・現在の研究テーマ（内容及び今後の研究計画）

(1) 育児不安に関する研究

(2) 男性・父親に関する研究

父親・男性研究　Ⅳ　日本子ども家庭総合研究所紀要第40集，2005.（共著）

(3) その他

自然気胸患者における心的特性，日本歯科大学紀要，2005.（共著）

日本子ども家庭総合研究所（愛育相談所）の共同研究がここ10数年の研究の柱となっている。今後も学外の研究者との共同研究を中心に進めていきたいと考えている。いずれの課題も今日的な重要なものであると自認している。パーティション分析などのデータマイニングの方法を用いたアンケート調査の分析を行ったが，さらに，今後も，進めていきたい。なお，平成22年度の母子健康手帳改訂のための乳幼児健康度調査（厚生労働省）に今回も関わることになり，その準備作業に入っている。

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❻ 大学改革推進委員会第２部会（大学院ワーキング），６年一貫専門委員会　評議員　財務委員会　図書委員会，他

❼ 刈谷市虐待防止ネットワーク協議会　事例検討会など
名古屋市立南養護学校　学校評議員（2004年）

❽ 大学が提供している「学校教育支援データベース」を通して，依頼があった。日程調整などの問題があり，期待に応えられないことがあった。

増田　樹郎　Masuda, Tatsuro　　助教授　障害児教育講座　　文学修士

❶ 社会福祉学，ケアマネジメント，社会学

❸ 日本社会福祉学会，日本地域福祉学会，日本介護福祉学会，日本介護学会，福祉社会学会，日本ソーシャルワーカー協会，現代思想研究会21（事務局員）

❹ 社会福祉学原論（２年），社会福祉学演習（３年），地域福祉論（１年），社会科学入門（１年），福祉科教育c１（３年），障害者福祉演習（３年），社会福祉学研究Ⅲ（４年），社会福祉学研究Ⅳ（４年），障害児教育・福祉制度論（２年），共生社会生活教育論（１年），障害福祉特論（大学院）

・主に社会福祉士（国家試験受験資格）及び高等学校教諭１種免許状（福祉）の養成に関わり，前者については任意に受験講座等を開講している。法人化後の非常勤講師削減等により，取得上の開講科目に対する専門性が次第に確保しにくくなっており，限界にきている。近々に予定されている「専門性の質の向上」「職域の拡大」を軸とする社会福祉士養成教育等の大幅な制度改正に鑑みれば，これに対応するための整備充実を早急に図る必要があると思量する。

❺ 現在，ICFを踏まえた「ケアマネジメント論」及び自立支援法をめぐる「障害者支援論」の著作の編集執筆を進めており，これによってケア思想の研究の一端を詳らかにする予定である。継続している身体論や臨床哲学を軸とした研究も，こうしたケア思想の構築のためにますます重要なテーマとなっている。

・『施設ケアマネジメントへの道しるべ』（編著），静岡県介護保険室，2006年３月
・「ICFにおける介護の諸概念」，『障害者教育・福祉学研究』第２巻，愛知教育大学障害児教育講座，2006年３月
「上すべりしない声かけとコミュニケーション」，『高齢者ケア』vol.10, No.1，日総研出版，2006年１月
・『小規模授産所等あり方検討委員会報告書』（編著），静岡県小規模授産所等あり方検討委員会，2006年３月
・『スマイルプラン21（掛川市地域福祉計画等）』（編著），掛川市，2006年３月
・『ICFと身体性―介護福祉士の実践知とは何か―』，第３回日本介護学会基調報告，2005年12月

❼ 静岡県社会福祉審議会（委員）
静岡県高齢者保健福祉計画作成・推進委員会（委員）
静岡県小規模作業所あり方検討委員会（委員）
富士市介護保険事業運営協議会（委員）
小牧市第三次高齢者福祉計画策定委員会（委員長）
掛川市地域福祉計画等策定委員会（アドバイザー）
掛川市地域福祉セミナー（講師）2005年７月
浜松市ケアマネジャー研修（講師）2005年９月

小規模作業所静岡フォーラム（講師）2005年12月
磐田市地域福祉フォーラム（講師）2005年12月
愛知教育大学附属養護学校職員研修（講師）2006年 2 月　ほか

森﨑　博志　Morisaki, Hiroshi　　助教授　障害児教育講座　　教育学修士

❶ 発達臨床心理学（臨床心理学，発達臨床学，発達心理学）
❷ 日本リハビリテイション心理学会　研究奨励賞受賞（2004.11.8）
❸ 日本心理学会（会員），日本特殊教育学会（会員），日本心理臨床学会（会員）
東海・北陸心理リハビリテイション研究会（代表幹事，事務局）
❹・障害児心理概論，教育リハビリテイション，肢体不自由児指導法，肢体不自由児研究法，臨床実地研究（学部）
・障害児心理臨床学特論，障害児心理臨床学演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）
・養護学校における中心的な指導技法である動作法や遊びを通した発達支援など発達臨床の場を設け，自らが臨床実践に携わると共に，そういった実践場面を通し学生の指導にも当たっている。特に養護学校の教師など障害児教育に携わる上で発達支援等の実践的な力を持った有能な人材の育成を意識している。
❺・発達障害児への発達支援に関する研究（自閉症児や脳性まひ児など様々な障害児を対象とし，動作法や遊びを通した実践を通し，乳幼児のコミュニケーション発達など最新の発達研究の視点なども取り入れながら，発達支援の在り方について幅広く検討していく）
・2005年度の研究業績（論文）
「自閉的な子どもへの身体を介した関わりの意義－発達的視点からの理論的考察－」リハビリテイション心理学研究.
「重度の肢体不自由児・者の自立支援に関する我が国の近年の動向－肢体不自由養護学校における「個別移行支援計画」を中心に－」特殊教育学研究.
「自閉的な子どもへの早期の発達支援に関する研究－通園施設ひかりの家での取り組み－」障害者教育・福祉学研究.
「遊びを含む身体的相互交渉を通した自閉症児の発達的変化」障害者教育・福祉学研究.
「動作法における自閉的な子どもへの身体を介した関わりの意義」東海・北陸心理リハビリテイション研究会会報.
「自閉的な子どもへの早期の発達支援に関する研究」東海・北陸心理リハビリテイション研究会会報.
「自立活動の視点からみた通常学級等での障害児の発達支援」学術図書出版社「ぼくもみんなといっしょに」第 3 部.
❻・障害児教育講座代表，入試委員，特別専攻科運営委員，治療教育センター運営委員
❼・公開講座，講演等
南知多町保育士研修会（6.8，8.31），愛知県教育委員会　認定講習　（8.4～ 5 ），滋賀県動作法研修会　（7.23～29），第33回愛知心理療育キャンプ（愛知心理療育親の会主催）（8.16～22），愛知教育大学障害児治療教育センター　公開講座　（10.15），日進市保育士研修会（2.24），九州大学主催動作法研修会（3.12～19）

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

・学校現場，研究会等での助言指導，愛知県立岡崎養護学校評議員，愛知県立一宮養護学校評議員，社会福祉法人ひかりの家評議員，第38回，第39回どんぐり訓練会（刈谷市ひかりの家）（6.25～26，11.12～13）実技指導・相談，東海・北陸心理リハビリティション研究会第23回大会（6.18～19）司会・助言等，日進市すくすく園相談会（7.12）相談，福井県立嶺南東養護学校研修会（8.25）講義・実技指導・相談，愛知県立岡崎養護学校動作法校内研修会（8.27）講師，中部地区肢体不自由養護学校研究大会（豊橋）（10.7）助言，日進市保健センター相談事業（11.17）相談，日本心理リハビリティションの会2005年全国大会（沖縄）（11.25～27）司会・助言等，愛知心理療育親の会主催　月例訓練会（年11回実施）講義・実技指導・相談，がんばろう会（刈谷市ひかりの家）月例訓練会（年10回実施）講義・実技指導・相談，ひかりの家動作法週例訓練会（週１回実施），愛知教育大学障害児教育講座森﨑研究室主催　動作法訓練会（週１回実施）

佐野　真紀　Sano, Maki　　助教授　障害児教育　　修士(社会福祉学)

❶ 社会福祉学，ソーシャルワーク実践理論，ソーシャルワーク実践教育，神経言語プログラミング

❸ 日本社会福祉学会，日本社会福祉実践理論学会，日本子ども家庭福祉学会

❹ 社会科学入門（１年）ソーシャルワークⅠ（２年），ソーシャルワークⅡ（２年），社会福祉援助技術演習Ⅰ（３年），社会福祉援助技術演習Ⅱ（３年），グループワーク（３年），児童福祉演習（３年），社会福祉学研究Ⅰ（３年），社会福祉学研究Ⅱ（３年），総合演習Ⅱ（４年），福祉科教育CⅡ（４年），ソーシャルワーク演習Ⅰ（大学院），ソーシャルワーク演習Ⅱ（大学院）

❺・現在の研究テーマ

NLP（神経言語プログラミング）に基づいた関わりの技法を習得することを中心に，社会福祉援助技術演習並びに社会福祉援助技術現場実習指導の指導法を構築することをテーマとしている。現在は特に，NLPのニューロロジカルレベルのモデルを用いながら，ソーシャルワーカーの専門的価値と職業倫理，個人の価値・信念体系と自己覚知について再検討し，専門職として「自己を用いること」をどのように伝えるかについて研究を進めている。

・業績リスト

「対人援助のコミュニケーションをどのように伝えるか－公開講座『対人援助職のための関わりの技法基礎講座』実践を通して－」障害児教育・福祉学研究第２巻2006

❻ セクシャル・ハラスメント相談員
特殊教育特別専攻科入試委員

❼ 愛知教育大学公開講座「対人援助職のための関わりの技法基礎講座」実施
沼津市介護支援専門員研修
富士市介護支援専門員研修
磐田市社会福祉協議会「ともに支え合う地域づくりキーパーソン養成講座」
特別養護老人ホーム職員研修

岩田　吉生　Iwata, Yoshinari　　講師　障害児教育講座　教育学修士

❶ 専門分野：聴覚言語障害児教育
関連分野：発達心理学（言語発達）.

❸ 所属学会・研究会等：
日本特殊教育学会，日本コミュニケーション障害学会（査読委員），ろう教育科学会，日本聴覚言語障害学会，聴覚言語障害研究会（事務局），日本国際聾教育学会，日本聴覚障害教育実践学会.

❹ 障害児心理概論（１年），障害児心理診断法（２年），聴覚言語障害児基礎実験Ⅰ（２年），聴覚言語障害児基礎実験Ⅱ（２年），聴覚言語障害児臨床実地研究（３年），聴覚言語障害児教育演習Ⅰ（４年），聴覚言語障害児教育演習Ⅱ（４年），障害児の発達と学習（特殊教育特別専攻科・情緒障害児教育教員養成一年課程・肢体不自由児教育教員養成一年課程）

障害児心理，特に聴覚言語障害児心理に関する講義を中心に担当している。学部１，２年生時では，健常児の言語発達と聴覚言語障害児のコミュニケーション発達に関する基礎を，教科書，学術論文などの文献資料を活用しながら講義している。学部３，４年生時では，聴覚言語障害児教育について学生各自が関心のあるテーマを選択し，演習形式で発表していくような講義を進めている．また，担当する講義では，聴覚障害学生が履修する場合が殆どで，音声言語と手話を併用しながら講義を進めている。聴覚障害学生とは普段から話し合いを重ね，講義でハンディキャップが生じないように配慮をしている。しかし，まだまだ課題は山積しており，FD活動の一環として，学内の教員・事務官に理解を広める他，具体的な支援方法の検討を進めていきたい。

❺ (1) 聴覚障害児者のコミュニケーション

日本の聴覚障害児教育においては，各聾学校で手話の導入に関する議論が行われる一方で，徐々に聴覚口話法から手話を活用した指導方法が実践されるようになったが，現在はその基礎的な情報収集を行っている。

(2) 聴覚障害児者の障害認識及びアイデンティティ形成

青年期から成人初期における聴覚障害児者の障害認識や，アイデンティティ形成の過程に関する調査研究も実施しており，今後も継続していきたい。

(3) 言語発達遅滞児の臨床指導

ことばの遅れや読み書きに問題のある子どもの臨床指導や教育相談を，学校，家庭と連携を組みながら行っており，それらを事例研究の論文としてまとめている。

１．コミュニケーション障害入門，第12章「成人の聴覚障害」，大修館書店，2005.

２．手話の心理学入門，第４章「手話とアイデンティティ」，東峰書房，2005.　その他・論文著書14本

＜科学研究費＞

・2004年４月～（2007年３月）　文部科学省科学研究費　若手研究（B)「青年期の聴覚障害児者のアイデンティティ形成過程に関する研究」(研究代表・岩田吉生，３年総額・180万円）　その他・共同研究１件

❻ 教育実地研究委員会委員（2004年４月－現在），障害児教育講座障害学生支援委員会委員（2002年４月－現在）.

❼ 日本コミュニケーション障害学会・編集協力委員（論文の査読審査），愛知県蒲郡市教育委員会・専門相談員（1999年４月～現在），愛知県教育委員会教員免許認定講習会講師，聴覚障害児教育・聴覚障害者福祉に関する講演会講師，学会・研究会話題提供者・助言者など.

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❽ 障害児教育講座障害学生支援委員会委員（2002年４月－現在）

幼児教育

村岡　眞澄　Muraoka, Masumi	教授	幼児教育講座	文学修士

❶ 専門分野：幼児体育，保育内容学
関連分野：発育発達，体育科教育学，小児保健

❸ 日本保育学会（常任理事），日本体育学会，体育科教育学会，発育発達学会，小児保健学会，保育園保健学会，OMEP（世界幼児教育会議）会員，愛知幼児教育研究会

❹ 基礎技能ＩＡ（１年），小児保健Ｉ（１年），保育内容：健康Ａ（２年），保育内容：健康Ｂ（３年），保育内容演習Ｉ（３年），総合演習Ｉ（３年），小児保健実習（３年），共通科目（主題科目）“こころとからだセミナー”（３年），総合演習Ⅱ（４年），小児保健Ⅱ（４年），保育内容研究特論（大学院），保育内容研究演習Ｉ（大学院），保育内容研究演習Ⅱ（大学院），保育内容実践研究特論（大学院）

幼稚園の教員養成と保育士資格取得のための授業，しかも専門的に実技，実習，演習，講義と他形態の授業をカバーせざるを得ない状況が続いていることは昨年すでに報告した通りである。今年度はさらに小児保健実習，小児保健Ⅱの指導力向上のため，夏休みを利用して小児救急の講習を受けると共に，研修として小児科医松岡氏の大学での授業を半年間聴講した。乳幼児の病気についての知識や治療法，応急手当などについて，最新の科学的知識を得ることができ，授業力向上にいくらか役立ったのではないかと考える。実習指導や教育研究評議会委員としての仕事が多忙で，教材作成等の授業準備が十分できないという問題点は依然解消できないままである。また，担当しているいくつかの授業を今後さらに有機的に連関させるようにしたいという課題解決も不十分なままであるが，とりあえず近くの幼稚園や保育園の助力を得て，保育観察や子どもと実際に触れ合うような機会を出来るだけ多くつくって，学生のニーズに応えることができるように努力している。大学院の授業についても昼夜開講は現職の学生が多いので，できるだけ実践力の向上に役立つような授業になるにようにしている。エネルギーが必要でたいへんであっても，授業に関する研究や情報の収集・講読はいうまでもなく，基礎的な知識。技能を伝える場合でも一方向的なものにならず，できるだけ学生が興味をもって参加できるよう，視聴覚機器を利用したり，グループ研究を取り入れるなどの授業方法の工夫についても，これまでと同様に研鑽に努めたい。

❺ 現在の主たる研究課題は，前年度と同様，幼児の運動遊びや生活習慣行動場面での指導・援助のあり方をフィールドワーク的な手法を用いて追究し，保育実践力の育成や向上に資するよう体系化することであるが，まだ研究としてまとめるところにまで到っていない。運動的な遊びに関する研究では，刈谷市の幼稚園との共同研究を進めてきたが，今年度はまだ研究が途中であり，これも研究としてまとめることができなかった。大いに反省しているところである。

❻・教育研究評議会委員・人事委員会委員・大学院入学試験部会委員・評価委員会委員

❼ 刈谷市情報公開・個人情報保護審査委員会委員，三好町教育基本計画推進委員会委員，三好町幼年期健全育成推進協議会委員，桑名市就学前教育検討委員会委員
三好町主任保育士研修会講師３回，刈谷市小高原幼稚園現職指導，
全国私立保育園研究大会助言者，豊橋市家庭教育講演会で遊びと生活習慣の指導について講演，

瀬戸市八幡幼稚園保護者への講演会
刈谷市小高原幼稚園で親子遊びの指導

梅澤由紀子　Umezawa, Yukiko　　教授　　幼児教育講座　　芸術学修士

❶ 音楽教育学（幼児音楽），保育内容学，表現
❸ 保育学会，音楽教育学会
❹・専門教育入門（１年），基礎技能IB（１年），保育内容・表現A（２年），基礎技能ⅡB（２年）保育内容・表現B（３年），保育内容演習B（３年），総合演習Ⅰ（３年）総合演習Ⅱ（４年）日本の社会と表現文化―日本の子どものうた―（２年）保育内容・表現（他専攻４年），保育内容演習Ⅱ（大学院），保育内容実践研究特論（大学院）
・今年度も近くの園の協力を得て，「幼稚園訪問の音楽会」を基礎技能と，保育内容・表現の授業の課題として実施した。（２年後期）教員・学生ともに時間とエネルギーを必要とすることであるが，幼児と交流するとはどういうことか，表現において大切なモメントは何であるか等，試行錯誤しつつすすめ実践的に学ぶ機会として，毎年，発見があり興味深い。また，学生たちが，協力して問題解決していく場としての意味もある。表現や提起したことがらが，協力園から，保育内容や指導について考える手がかりになるという評価を得ている。目標を定め，より手順よくプランし進められるよう，指導の組み立でを今後模索してゆきたい。
・総合演習Ⅰにおいて，「音を触ろう，音を感じよう」というテーマで実験的実践を試み，幼児の活動展開の可能性の手応えを確認できた。ゼミでは，このような実験的授業は，時間の関係もあり１回の実践にとどまった。継続し深めたい。（協力園から，テーマの活動に限らず様々な情報，助言などいただけることが学生の視野拡大の収穫である。）今後，学生に可能なテーマと方法を選び，研究意欲を引き出す実践的な教材研究の機会にできたらと考える。それには，総合演習以外の授業で，徐々に準備可能な授業の体制づくり―フィールドとなる園の教員との情報交換などもも必要であるだろう。
・音楽教育・幼児教育を専門とする者のFDをテーマとした研究発表・シンポジウムに参加。学生アンケートなどでは質的異なり，授業者・研究者側の情報交換と議論は意味があった。
❺・「遊びとしての幼児の音楽・リズム的表現一年長幼児の観察から」全日本音楽教育研究大学部会論集
・研究テーマ「幼児のリズム・音楽的表現の様態」について，昨年は幼児の自発的な劇遊びや保育者の援助でパーフォマンスが求められる劇的表現において，イメージを喚起できる「場面」の成立やその表現内容が具体的に焦点化することの重要さを明らかにした。引き続き，基本的に上記のテーマで観察による研究を行い，その一部をまとめ発表した。年長幼児が“遊ぶ”ということと，そこで自発的に生じて展開する音楽的・リズム的表現の様態を，一定の持続の中での表現の変化を中心に分析考察を行った。
　保育内容「表現」の基礎的研究として，資料，事例の分析は幼児の表現の様態の見方・観点をもつ手がかりになればと考えている。
❻ 入試選抜方法研究委員会委員　高大連携特別選抜入試部会委員　幼児教育講座代表　大学院　幼児教育専攻代表

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

❼・現職研修―研究テーマ「イメージにもとづく幼児の音・リズムによる表現遊び，表現活動の指導援助について」　刈谷市立富士松北幼稚園，瀬戸市八幡幼稚園
・平成17年全日本音楽教育研究会　大会実行委員　大学部会（編集委員）
・アカデミック・クエスト「幼児ノ遊びと表現」

小川　英彦　Ogawa, Hidehiko　　助教授　幼児教育講座　　教育学修士

❶ 障害児保育，児童福祉

❷ 日本福祉大学学術奨励賞（1996年７月）

❸ 日本特殊教育学会，精神薄弱問題史研究会，中部教育学会，日本発達障害学会，社会事業史学会，日本社会福祉学会，日本教育学会，日本教育方法学会，日本特別ニーズ教育，日本保育学会

❹ 専門教育入門（１年），社会福祉学原論（２年），児童福祉論（２年），ソーシャルワークⅠ（２年），ソーシャルワークⅡ（２年），障害児保育（３年），養護原理（３年），養護内容（３年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），障害児教育福祉制度論（１年課程），保育実践研究演習（大学院），保育臨床研究特論（大学院）

わかりやすい講義を目標にしていることから，ビデオや身近に感じる資料を併用して授業を進めている。また，保育士の資格取得に必要な施設実習につながりをもたせて授業を組み立てている。この１年においては，児童福祉施設の見学を行ったり，夏季に岡崎で実施されている障害児のサマースクールに参加させたりして，学生が児童と実際にかかわることから学べる点を重視して取り組んでみた。

❺ 現在の研究テーマ：

「障害のある子どもの保育研究」（障害児保育や児童福祉に関する歴史研究をはじめ，保育所や幼稚園，通園施設にいる知的障害幼児の保育方法と内容研究，「気になる子ども」と表現される軽度発達障害幼児や親支援に関する研究を計画している）

著書：

障害のある子どもの理解と親支援（編著），明治図書，2005年

保育士をめざす人の福祉施設実習（編集代表），みらい，2006年

論文：

発達障害のある幼児の支援をめぐって―親の支援を中心に―，愛知教育大学附属幼稚園研究紀要，第34集，2005年

幼児期の気になる子ども・軽度発達障害児の指導を考える，全国児童養護問題研究会・全国児童相談研究会，日本の児童福祉，20号，2005年

子どもを取り巻く社会と教育福祉，愛知県児童福祉施設長会，絆，第17号，2005年

個別の指導計画と障害児教育，日本特殊教育学会発表論文集，2005年

生江孝之の保育事業の変遷に関する研究，日本保育学会発表論文集，2005年

❼・名古屋市教育委員会障害児教育相談専門研修会の講師，愛知県現任保育士研修の講師，岡崎女子短期大学オープンカレッジの講師，名古屋市立第二幼稚園の指導助言，刈谷市立かりがね幼稚園の指導助言，刈谷市立富士松南幼稚園の指導助言，安城市立サルビア学園保護者会研修講師，愛知教育大学附属幼稚園研究協議会の分科会助言者
・豊田市教育委員会社会福祉読本編集委員会監修者

❽・愛知県保育実習連絡協議会役員校（会長・施設実習担当）

新井美保子　Arai, Mihoko　　助教授　幼児教育講座　　文学修士

❶ 幼児教育学・保育学（保育内容論，保育方法論）

❸ 日本保育学会，日本音楽教育学会，関西教育学会，OMEP委員会（世界幼児教育会議）

❹ 専門科目入門，幼児教育学，幼児の理解と指導，社会科学入門（現代教育論）（１年），幼児教育学演習，保育内容総論，保育実習A，保育内容研究・言葉A（２年），幼児教育課程論，家族援助論，総合演習Ⅰ，保育実習C（３年），総合演習Ⅱ（４年），幼児教育学特論（大学院），保育方法研究演習Ⅰ（大学院）

幼児教育系に学ぶ学生にとって，他の保育者養成大学と異なる点の一つに，小学校教育についても学べる点がある。これは，学生にとって０歳の乳児から12歳の児童まで長期的展望を持って教育・保育を担えることにつながり，現在，問題として取り上げられることの多い「１年生問題」や幼稚園・保育所・小学校の連携のあり方についても，改善していく原動力になり得ると思われる。しかし，幼児教育系の学生が小学校教員免許を取得する際には小学校実習が必修ではなく，ここ数年，数人の希望者にとどまっていた。そこで，今年度は実際に小学校の様子や児童の様子について学ぶために，できるだけ多くの学生を小学校実習に参加させるとともに，附属小学校を訪問して学生の研究授業を参観し，実習後様々に討論ができた。また，短期の保育所や幼稚園での実習では学べない，子どもの様子や園の行事，活動，子どもへの援助方法等を学ぶために，４年生に年間を通じて週１回程度，保育現場に出かけることを支援した。学生は４月の新学期の子どもの様子と援助方法や，様々な行事の準備，子どもの成長の様子などについて学ぶと共に，子どもへの指導・援助方法を工夫する力量を身につけられた。

このように，学内での講義と共に保育・教育現場に参加することで，問題点を具体的に検討したり，多くの学生と意見を出し合うことで多面的な見方を身につけることができるなど，より実践力も理論も学べると考える。今後とも有効な教育カリキュラムや授業方法のあり方を検討していきたい。

❺ 現在の研究テーマは，昨年度からの継続で「より良い保育実践を支えるための保育の諸条件」である。これは，一クラスあたりの適正人数や保育者の負担感等についての意識調査を昨年度末に実施したので，今年度はその集計・分析を進めた。その結果，保育者の考える適正人数には各年齢ごとにおよそ共通の人数が見られるものの，現状はそれを大幅に超えて，保育実践している様子が明らかになった。また，疲労度も高く，保育準備にかける時間が十分にとれないなどの意識も多く見られた。今後は，問題点を明確にし，その背景を探ると共に解決に向けての提言を行っていきたい。また，継続した研究テーマである「幼児の発達過程と保育内容の構成について」は，幼・保と小の連携に関連して，小学校１年生での問題点を探る中で，生活リズムや基本的生活習慣の会得に問題があることがわかり，幼児期及び学童期に求められる指導・援助方法について小学校・幼稚園・保育所の先生方と検討を行った。今後も家庭との連携など検討を行うと共に，小学校の学習の基盤となる幼児期にふさわしい学びについても，検討していきたい。

❻・次世代育成支援ワーキング

❼・東海市幼児教育研究協議会専門委員会研修講師「生活習慣の会得について」「幼・保・小連携のためのカリキュラムについて」

・安城市立東栄幼稚園講演会「３・４・５歳児の育ちをふまえた子どもとのかかわりかた

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

について」
・三好町まこと第二幼稚園講演会「幼児期の遊びと学び」
・愛知教育大学附属幼稚園教育研究発表会分科会助言者

養護教育

野村　和雄　Nomura, Kazuo	教授	養護教育講座	教育学修士

❶ 教育学
専門分野：学校保健
関連分野：健康教育学

❸・日本学校保健学会（評議員），日本特殊教育学会（会員），日本公衆衛生学会（会員），東海学校保健学会（理事），日本教育保健学会（監査）

❹・主題科目「こころとからだ」入門（１年），学校保健実習（２年），障害児の保健管理（２年），保健科教育CⅡ（３年），学校保健演習（３年），保健科教育CⅢ（３年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），保健科教育CⅣ（４年），学校保健組織運営特論（大学院），学校保健組織運営演習Ⅱ（大学院）
・教育活動の問題点として，学年による出来不出来，まとまりのある学年とそうでない学年，といったことが何故このように現れるのだろう，と考えている。長年やってきて，その不思議さを改めて思う。
・FD活動については，大学全体としてのFD活動に参加をしなかったが，❺との絡みで他大学における養成の状況・授業の様子等についての情報を得た。個人的にはこれらがFDに生きると考えている。
・教育に対する抱負として，「教育は待ち」という言葉を噛みしめている。積極的に，押していっても，必ずしも受け止められるわけではない。適度に，が難しいが，学生のやる気のでるのを待つ姿勢でいきたい。

❺・（１）学校保健活動の評価（２）保健の授業研究
・［通常の学級で学ぶ病気や障害のある子どもの支援に関する研究　中間報告―予備調査の結果］日本教育保健学会年報　第13号　2006
［通常の学級で学ぶ病気や障害のある子どもの支援に関する研究　中間報告］第３回日本教育保健学会徳島大学　2006
［現場で必要な学校保健の知識―養護教諭と一般教諭への言説を用いた調査から―］愛知教育大学養護教育講座研究紀要　第７巻第１号　2006
・［教育委員会等との連携による養護教諭養成の充実策の検討，80万円　／愛知教育大学重点教育研究費］
・なし

❻・大学改革推進委員会委員

❼・安城市「健康日本21安城計画」策定委員会助言者
・５年目養護教諭研修講師　愛知県総合教育センター（2006.7.13）
・愛知教育大学公開講座（2006.7.25. ～28.）
・三河教育研究会養護教諭部会夏期研修会（2006.8.2）
・豊田市立根川小学校　指導助言

渡邊　貢次　Watanabe, Koji　　教授　　養護教育講座　　博士（歯学）

❶ 環境微生物学，環境保健学，歯科保健学

❸ 日本学校保健学会，東海学校保健学会，日本口腔衛生学会，日本教育保健研究会，日本公衆衛生学会，日本健康教育学会，日本科学史学会

❹ 情報教育入門Ⅱ（1 年），微生物学（2 年），微生物学実習（3 年），栄養食品学生実験（3 年），総合演習Ⅰ（3 年），環境衛生学（4 年），総合演習Ⅱ（4 年）
保健医科学演習Ⅲ，保健医科学演習Ⅳ（大学院）

・授業でプロジェクターを活用し写真，図，表を提示したり，ビデオ教材などのビジュアル的な資料を用いることで，学生が授業内容を平易理解できるようにこころがけている。また，教科書だけでは不十分なものについては，独自の冊子や資料集を作成し，授業時に活用している。

❺ 論文（共著）：

1．女子大学生の健康観（MOS SF-20）と歯の健康観（OHiS）に関する研究―養護専攻学生，看護専攻学生及び他専攻学生との比較―，東海学校保健研究 29: 43-53

2．Oral Health Attitude and Perceptions for Dental Treatments Between Japanese and Mongolian Adolescents, Aichi-Gakuin Dental Science 18: 21-26

3．男女大学生にみる医療10科に対する「痛み」,「大切さ」及び「身近さ」イメージについての一考察，愛知教育大学研究報告55: 35-39

4．University Students' Responses to Oral Health Questionnaire in 10 Countries, Dentistry in Japan 42: 90-92

発表（共同）：

1．Streptococcus.mutansの歯垢内分布に及ぼすキシリトール洗口の影響，第 6 回日本齲蝕学研究会議ワークショップ抄録集 6 : 3

2．Oral Health on University Students in Taiwan and Japan, JADR（A Division of the International Association for Dental Research）

❻ 委員会活動：

・教育研究評議会委員（学生支援委員会委員，大学院入試部会委員長）
・入学者選抜方法等専門委員会委員，高大連携選抜検討プロジェクト委員
・養護教育講座代表，養護教育専攻代表
・動物実験委員会

❼ 公開講座：

・現職養護教諭を対象とした公開講座「保健医科学特論Ⅲ」を開講した。

学外活動：

・教育大学協会全国養護部門連絡協議会副理事
・教育大学協会全国養護部門研究委員会委員
・生協役員（理事長）

坂井　　誠　Sakai, Makoto　　教授　　養護教育講座　　博士（医学）

❶ 専門分野：臨床心理学

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

関連分野：精神保健学

❷ 佐賀県精神保健事業功労者表彰（1990年11月）

❸ 日本自律訓練学会（評議員，編集委員，教育研修委員），日本行動療法学会，日本心理臨床学会，日本心理学会，東海学校保健学会（評議員），日本臨床心理士会，中部行動療法・行動変容研究会（副会長），名古屋心身医学研究会（幹事），養護教諭研究会秋桜の会（主宰）

❹・精神保健（２年），健康相談（３年），心の臨床（３年），総合演習Ⅰ（３年），健康相談活動（３年），学校精神保健（４年），総合演習Ⅱ（４年），学校精神保健演習Ⅱ（大学院），臨床心理実習Ⅰ（大学院），臨床心理実習Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ（大学院），特別研究Ⅱ（大学院）

・養護教諭として，あるいは教員として，これからの学校現場で要請される相談活動に関する実践能力の習得を目指した授業を模索している。近年，いじめ，不登校，軽度発達障害などさまざまな心の問題を抱えた子どもに対する，学校での効果的な支援が求められている。このような子どもたちへの，有効性のある相談活動能力の教授に腐心している。

❺・現在の研究テーマ：

神経症，心身症の行動療法：不安を中核に持ついわゆる神経症や心身症，とりわけパニック障害，強迫性障害などの不安障害に関する臨床研究。

うつ病の認知行動療法：認知の歪みの修正を中心とした認知再構成法によるうつ病の治療に関する研究。

軽度発達障害の応用行動分析：注意欠陥/多動性障害やアスペルガー障害の応用行動分析による教室内での問題行動の修正。

ストレスマネジメント教育：児童・生徒に対する，自律訓練法，筋弛緩法，社会的スキル訓練の有効性に関する教育臨床学的研究。

・論文：

中学生における自己制御機能とストレス反応との関連。愛知教育大学研究報告（教育科学編），第55輯，2006年。（共著）

交通事故による外傷後ストレス障害への認知行動療法。愛知教育大学教育実践総合センター紀要，第９号，2006年。

中学生における自己制御機能とセルフエフィカシーとの関連。愛知教育大学養護教育講座研究紀要，第７巻，2006年。（共著）

内科的な身体不調を訴える保健室来室生徒のストレス反応と自尊感情に関する一考察。愛知教育大学養護教育講座研究紀要，第７巻，2006年。（共著）

❻ 就職支援担当教員

❼・愛知県教育委員会保健室相談活動研修会講師，愛知県総合教育センター新規採用養護教諭研修講師，名古屋市教育センター養護教員研修講座講師，名古屋市教育センター教育相談初級講座講師，小牧市教育委員会こまきみらい塾講師，名古屋市立吹上小学校学校評議員，愛知県臨床心理士会学校臨床部会学校臨床心理士会運営委員，ほか。

・愛知教育大学公開講座教育臨床セミナー講師，日本産業カウンセラー協会中部支部向上訓練講師，名古屋市桜台高校講演会講師，ほか。

・名古屋市公立中学校スクールカウンセラー，名古屋市原中学校保健委員会講師，名古屋市立吹上小学校現職教育講師，名古屋市立本城中学校現職教育講師，ほか。

後藤ひとみ　Goto, Hitomi　　教授　　養護教育講座　　教育学修士

❶ 教育学（養護教育学），学校保健

❸ 日本養護教諭教育学会（理事），日本学校保健学会（理事），日本健康相談活動学会（理事），東海学校保健学会（評議員），日本学校健康相談学会，日本小児保健学会，日本思春期学会，日本衛生学会，日本養護教諭教育学会「養護教諭の専門領域に関する用語の検討プロジェクト」，日本教育大学協会全国養護部門研究委員会，日本養護教諭養成大学協議会，東海養護教諭教育研究会，養護教諭実践研究会

❹ 養護教諭論（１年），養護概説（２年），養護活動実習Ⅰ（２年），養護活動実習Ⅱ（３年），養護活動演習（４年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），保健科教育ＣⅠ（２年），養護教諭論特論（大学院），養護教諭論演習Ⅱ（大学院），養護実践研究Ⅰ（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

・教職科目である「養護教諭論」では，附属高等学校の保健室見学及び現職養護教諭（小学校・中学校・高等学校・養護学校）の講話を導入し，養護教諭の役割に関する具体的なイメージを持って４年間の学習が始められるような動機づけを行っている。また，養護教諭のための専門教育を充実させることをねらいとして，２年前期の「養護概説」を基礎として，２年後期の「養護活動実習Ⅰ」，３年前期の「養護活動実習Ⅱ」，さらには４年前期の「養護活動演習」という系統的な授業を展開している。特に「養護活動実習Ⅰ・Ⅱ」では，仮想学校づくりを行い，学生たちが想定した小学校における養護教諭の活動を具体的に学ばせている。

❺ 現在の研究テーマ：養護教諭が行う実践研究の分析と養護教育学の検討

・養護教諭の職制は60数年を経たところであり，固有の学問領域を明らかにする研究は十分に進められていない。したがって，養成カリキュラムの体系化，養護教諭に必要な専門的資質や能力の尺度化といった研究課題が残されている。そこで，これまで行ってきた養成カリキュラムの現状分析，専門的能力の構造，養護教諭の実践を深めていく研究能力の育成などの検討を深めながら，現職養護教諭との関わりを通して「理論と実践」「実践と研究」の結びつきに注目し，実践的研究と研究的実践という双方向の取り組みにおける養護教諭独自の方法論を明らかにしたい。また，このような方法論の確立とともに，養護学及び養護教育学の体系についても検証していきたい。

1．「健康相談活動の理論及び方法」の開講に関する現状と課題－養護教諭一種免許状取得の課程認定を受けている四年制大学の実態から－，日本健康相談活動学会誌，Vol.1(1)，33-45，2006

2．健康相談活動の研修経験が養護教諭の実践に及ぼす影響，日本健康相談活動学会誌，Vol.1（1），46-52，2006

3．養護教諭教育の考え方と養護教諭教育プログラムの進め方，日本養護教諭教育学会誌，Vol.9（１），６-11，2006

4．養護教諭養成教育における「臨床実習」のあり方－東海養護教諭教育研究会での検討内容の分析から－，日本養護教諭教育学会誌，Vol.9（１），99-106，2006

5．高等学校の再編事業から捉えた養護教諭の役割，養護教諭教育学会誌，Vol.9（１），107-114，2006

❻ 教職大学院検討委員会委員，時間割編成専門委員会委員

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❼・三重県養護教諭経験10年研修会講師，岡山県養護教諭部会講師，平成17年度愛知県立高等学校学校保健会西三河支部養護教諭研究会講師，山形県養護教諭連絡協議会平成17年度夏季研修会講師，平成17年度島根県養護教諭研究連絡協議会夏期研修会講師，平成17年度中部ブロック養護教諭部会代表者会講師，福岡県体育研究所（短期研修）講師，愛知養護教育研究会保健指導・執務勉強会講師，日本教育大学協会全国養護部門公開シンポジウム「養護実践学」提言者，平成17年度稲沢市養護教諭研修会講師，第55回全国学校保健研究大会第３課題講師，名古屋市立高等学校養護教諭研修講座講師，愛知県養護教育研究会調査研究部会の研究指導，蒲郡市養護教諭研究会の研究指導，岡崎市教育研究大会の指導助言，「健康な子ども」論文審査員

古田　真司　Furuta, Masashi　　教授　　養護教育講座　　博士（医学）

❶ 専門分野：公衆衛生学
関連分野：学校保健学，健康管理学

❸ 日本公衆衛生学会，日本小児保健学会，日本学校保健学会，
東海学校保健学会（評議員及び機関誌編集委員）

❹ こころとからだ入門（１年），情報教育入門Ⅱ（１年），衛生学実習（２年），薬理学概論（３年），公衆衛生学Ⅰ（３年），診断学Ⅱ（３年），総合演習Ⅰ（３年），臨床実習Ⅰ及びⅡ（３年），公衆衛生学Ⅱ（４年），総合演習Ⅱ（４年），保健統計（４年），学校疾病学特論，演習Ⅰ及びⅡ（大学院：養護教育専攻），特別研究Ⅰ及びⅡ（大学院：養護教育専攻），健康管理学特論（大学院：保健体育専攻）

・情報教育入門Ⅱでは，自専攻（養護教諭養成課程）の学生を対象としているため，授業中にインターネットを利用して，健康に関連する情報を検索させるなどの工夫している。養護教諭養成課程の必修科目である「公衆衛生学Ⅰ」では，今後，健康関連分野で活躍が期待される学生にとって必須の内容を吟味しているが，講義範囲が広いため，どうしても一方的な講義になりがちである。しかし，プロをめざす学生には最低限必要な内容であると考えているので，期末試験を課して，不合格の者には再履修させている。一方，選択科目である「衛生学実習」「薬理概論」「診断学Ⅱ」「公衆衛生学Ⅱ」「保健統計学」では，すべてを網羅して講義することは避け，内容を厳選して，１～２コマで１つの内容（テーマ）を完結させる方式で授業を行っている。たとえば「薬理概論」では，純粋な薬理学の講義ではなく，日本における医学や医療の現状を「くすり」を題材に考える授業とし，大衆薬・医療用医薬品・薬価・治験・薬害などについて，新聞記事なども用いて講義している。また大学院では，現職教員を含む大学院生に対して，研究室内にインターネットが利用できるパソコンを数台用意し，授業の中でさまざまな文献や情報や検索して検討する授業を行っている。最近の健康管理学の分野では，巷にあふれたさまざまな健康にする情報から正しい役に立つ情報を選択して利用する能力が求められており，その実践的な力を身につける機会を提供したい。

❺・現在の主たる研究テーマ：

『児童・生徒の不定愁訴とその対応に関する研究』である。1996～97年には科学研究費の助成を受け「女子生徒の周期的身体不調の要因に関する教育保健学的検討」を行い，引き続き1998～2000年には，科学研究費を得て「ライフスタイルと健康意識から見た生徒の不定愁訴の要因に関する検討」により小中学生の不定愁訴の要因を検討した。これらの研究から，児童・生徒の身体不調を検討する上で不可欠となる視点は「縦断的観察」であると考えた。この点を中心テーマとした「縦断的観察による生徒

の身体不調の変化要因に関する検討」は，引き続き2001年～2004年にも科学研究費を得られ，2004年度にこれらをまとめて報告書を作成した。この中では，学校現場で利用可能な，子どもたちの愁訴に連動する客観的指標に関する知見を得ており，今後もこのテーマの研究を発展させていく予定である。

・2005年度の主要業績は次の通りである。

１．胎児異常の告知を受けた母親の妊娠中から出産後１年までの悲嘆過程，母性衛生，46（1），77-86, 2005

２．高校生における心身愁訴と加速度脈波による自律神経機能評価値の関連，愛知教育大学研究報告，55輯（教育科学編）。47-51, 2006

❻ 教員選考委員会委員（主査１件）

❼ 愛知県教育職員免許法認定講習講座講師（2005. 8／2 ～ 3，薬理概論）

桜木　惣吉　Sakuragi, Sokichi　　助教授　養護教育講座　　医学博士

❶ 生理学，神経生理学，心理生理学

❷ 第４回日本宇宙航空環境医学会研究奨励賞（1997年11月）

❸ 日本生理学会，日本生理人類学会

❹ 解剖学（１年），生理学（１年），生理学演習（２年），診断学Ⅰ（３年），生理学実習（３年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），こころとからだ―こころとからだ入門編（１年），生体機能学演習Ⅰ（大学院）

・教育活動の問題点，FD活動，教育に関する抱負‥‥具体例を提示することにより，出来る限りわかりやすい授業を提供できるよう心がけたい。

❺・現在の研究テーマ：

情動・ストレスと自律神経機能との関連

・業績リスト：

［著書：PSYCHOLOGY OF MOODS（分担執筆；chapter 3 担当），Nova Science Publishers, Inc（New York, USA），2005年］

・学術・研究交流等：

シナプスの可塑的変化に関する基礎的実験を，名古屋大学環境医学研究所でラットの脳のスライス標本を用いて行っている。

❻ 学部入学試験部会委員，大学院入学試験部会委員，衛生管理者

福田　博美　Fukuda, Hiromi　　助教授　養護教育講座　　修士（人間科学）

❶ 看護学

❸ 日本看護研究学会，日本学校保健学会，日本養護教諭教育学会，日本疫学会，東海学校保健学会，東海養護教諭教育研究会，東海学校保健学習会，養護教諭実践研究会

❹ 人間と生活（２年），看護実習Ⅰ（２年），看護実習Ⅱ（３年），成人看護学（３年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），看護科教育CⅡ（４年）

❺ （1）養護教諭の看護学

養護教諭養成教育における「臨床実習」のあり方―東海養護教諭教育研究会での検討

内容の分析から―，日本養護教諭教育学会誌 9 （1），99-106，2006

（2）高齢者介助（家族）の援助

性・年齢・疾患別にみた寿命延長への寄与に関する地域格差―高齢者を中心に―，愛知教育大学研究報告，55（教育科学編），53-60，2006

（3）心身に障害を持つ人を学生が理解するための研究

科学研究費（B）「医療ニーズの高い子どもに対する共通支援のための研究」

科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）「情報と社会」研究開発領域　公募型研究開発　研究開発テーマ「ユビキタス社会のガバナンス」課題「バリアフリーのための応答・支援スポットの構築」（研究代表者　宮尾克）の「障害者教育と外国人児童生徒の情報バリア」の研究分担

❻ 教育実地研究委員会，学内市民参画型教員養成コーディネータ，

❼ 附属幼稚園研究協議会（養護分科会）助言，日本二分脊椎症協会東海支部会参加

学校教育

佐藤　勝利　Sato, Katsutoshi　　教授　　学校教育講座　　教育学修士

❶ 心理学，専門分野：臨床心理学

❸ 日本心理臨床学会，日本心理学会，日本教育心理学会

❹ 学校カウンセリング講義（4 年），教育相談の実際（3，4 年），児童生徒の生活の指導と相談Ｂ（4 年），教育の心理学（1 年），こころとからだ（1 年），グループアプローチ特論Ⅰ（大学院），臨床心理基礎実習Ⅰ・Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

学部の臨床系の講義にあっては，学校を巡る子どもたち問題行動について，自験例を引きながら論じ，将来，教員として効果的にそれらの子どもたちの理解と指導が行えるような力量の養成，すなわち，単なるhow to的な理解に終わることなく，個々の児童生徒の自我発達を把握し，柔軟に対処できる力の涵養を目指している。

大学院にあっては，スクールカウンセラーを初めとする教育臨床の専門家（臨床心理士）の養成に努めている。すなわち，臨床心理基礎実習Ⅰでは，少人数によるロールプレー形式の面接実習（対象のＭ1 院生を 2 分し，1 つのグループは毎週 2 時間，他の 1 つのグループは隔週 4 時間を当てて実施している）を行い，心理臨床の基礎としての“聴く”ことの意味を伝えようとしている。また同Ⅱでは，教育実践総合センター心理教育相談室に来所するケースの受理面接に院生を陪席させたり，併行面接の形で担当させた上で，そのスーパーバイズを行っている。さらに，学内の臨床系教官と協同して行うケースカンファレンス方式の事例検討会に参加させることによって，院生に臨床技法・臨床マナーの修得を徹底させようとしている。

さらに，グループアプローチ特論では，2 泊 3 日の合宿による集中講義とし，グループプロセスの実際やファシリテーションの実際を体験学習により修得させようとした。

これらの院生に対する臨床教育は，その性質上，個別指導が中心であり，昼夜間，夜間，サテライトのいずれを選択してもほぼ等質な教育を保証しようしているので，その負担はかなり過重なものになっており，授業運営上の最も大きな問題点となっている。

❺（1）児童～青年期の心理療法の実践的研究，（2）エンカウンターグループに関する研究

現在，教育実践総合センター心理教育相談室に来所するクライエントに対してカウンセリングや心理療法を実施してきているが，今後もこれらの活動をより発展・充実させるとともに，児童～青年期の心理療法過程の把握と治療機序の解明に関わる臨床的・実

践的研究を進めたい。

また，エンカウンターグループについては，現在，青年期グループ，成人グループ双方のグループプロセスについて関心を有しているが，今後もグループ実践を続ける中で，それらの特徴を明らかにしていきたい。

１．聴くということ，話すこと　教育臨床学研究（愛知教育大学教育実践総合センター心理教育相談室紀要）６　2006

❻ 大学院教育臨床専攻代表，治療教育センター運営委員会委員，入試部会委員

❼ 教育臨床セミナー（愛知教育大学公開講座）主任講師

❽ 教育実践総合センター心理教育相談室長

竹内登規夫　Takeuchi, Tokio　　教授　　学校教育講座　　社会学修士

❶ 職業指導，進路指導，キャリア・カウンセリング

❷ ①昭和62年11月５日　財団法人日本進路指導協会会長（表彰）「進路指導の研究と実践」
②平成２年11月30日　財団法人日本教育研究連合会理事長（表彰）　「進路指導の理論的研究」
③平成８年11月23日　労働大臣（表彰）　「労働相談員として労働行政の推進協力」
④平成10年11月28日　愛知県知事（感謝状）　「職業能力開発促進事業推進協力」
⑤平成14年４月20日　東海郵政研修所所長（感謝状）　「郵政事業発展への貢献」

❸ 日本キャリア教育学会（会長2005年11月任期満了により退任，以後，理事就任），日本キャリア教育学会中部地区研究会，財団法人日本進路指導協会（理事2005年11月退任），日本産業カウンセリング学会，日本カウンセリング学会

❹ 職業指導概論（２年），教育の社会的研究（２年），産業・職業情報分析（３年），職業指導実験（３年），ライフコースセミナー（３年），生活の指導と相談Ａ（３年），現代の職業生活と職業指導（３・４年），キャリア・カウンセリング実習（４年），職業指導特論Ⅱ（大学院），職業指導演習Ⅱ（大学院）
教育活動の問題点，FD活動，教育に対する抱負
「職業指導概論」や「教育の社会的研究」といった講義主体の授業は別として，その他の授業では昨年に引き続き可能な限り実習や演習を取り入れ，実践力を養うことを目指すとともに学生が授業外学習を積極的にするよう配慮している。

❺ ①現在の研究テーマ（内容及び今後の研究計画）
研究テーマ―「新規学卒者の職場適応」（青少年の早期離転職や目的意識を持たないフリーターの急激な増加更には，NEET（無業者）の問題が社会問題化している。このような青少年の職場・職業適応の問題（メンタルヘルス問題も含む）に焦点を当てそのメカニズムを少しでも明らかにするとともに，青少年のキャリア形成支援の方策を究明していきたい。また，キャリア教育のあり方についても研究をすすめていきたい。
②業績リスト
・論文―「看護職の感情についての研究―多面的感情尺度を用いた日頃の感情の分析―」（共著）愛知きわみ短期大学紀要　第２巻　2006年３月
・口頭発表―・「キャリア探索行動及びキャリア成熟に就職先選択要因の及ぼす影響―

就職先選択要因の類型化に基づく検討―」　共同発表　日本キャリア教育学会第27回研究大会　2005年11月　愛知学泉大学豊田学舎

・「看護職の職業認知に関する研究（2）―看護職自身がとらえた職業認識と看護職以外からみた職業認識の比較―」　共同発表　日本キャリア教育学会第27回研究大会　2005年11月　愛知学泉大学豊田学舎

❻ 大学院学校教育専攻試験委員

❼①各種審議会委員，自治体等の教育組織における活動

教員の評価に関する調査研究会議委員（名古屋市教育委員会），愛知県青年の家運営委員会会長（愛知県青年の家），本郷小学校学校評議会評議委員（名古屋市立本郷小学校）

②学校外の公開講座，講演会

独立行政法人教員研修センター中央研修　「キャリア教育の工夫改善」　など

中野　靖彦　Nakano, Yasuhiko　　教授　　学校教育講座　　教育学博士

❶ 専門分野：発達心理学，教育心理学　関連分野：国際理解教育

❸ 日本心理学会，日本教育心理学会

❹ 道徳教育の研究（２年），教育の方法と技術（３年），教師論（１年），子どもの心理（３年），教育心理学講義（４年），発達心理学特論Ⅰ（大学院），発達心理学演習Ⅰ（大学院）

❺ ・現在の研究テーマ：学校教育のあり方についての総合的な研究，子どもの心理，発達に関する研究，家庭教育のあり方など，食育と子どもの心理的な健康について

・啓蒙書等：『鏡は先に笑わない』風媒社　2006.3,『思う心，思われる心を大切にふれあう』（ゆう＆ゆう　2006.1）

いま学力低下やいじめ，不登校等の学校問題が生じている中で，これからの学校教育，教師はどうあるべきか，教育，心理学の立場から広い視点に立った研究活動が必要であり，それが実践の場で生かせるものでなければならないと考える。また，子どもの心の健康は食育にもあり，心と体のバランスのある教育を進めている。

❼ 社会的活動・各種審議会等の委員

・愛知県：教育委員会義務教育問題研究協議会（会長），教育委員会公立高等学校入学者選抜方法協議会（副会長），教育委員会初任者研修実施協議会（副議長），教育委員会道徳教育推進会議（議長），愛知の教育を考える懇談会（副部会長），愛知県社会教育委員連絡協議会（副会長）・名古屋市社会教育委員協議会（会長），公立学校教員採用検討委員会・豊田市二学期制推進委員会・武豊町いのちの教育推進委員会・瀬戸市学力向上委員会

・公開講座，講演等

全国小学校校長会大会（助言者），愛知万博（食育シンポ　コーディネーター），愛知県初任者研修開講式講演（愛知県教育総合センター），愛知教育大学公開講座，公開講座（大学と豊田市共催），附属高校アカデミック クエスト，メンタルヘルス協会講演，教育研究愛知県集会（助言者），教育研究岡崎集会（助言者），名古屋市：西区青少年育成区民大会講演，西区PTA指導者研究集会シンポ（コーディネーター），守山区青少年区民大会シンポ（コーディネーター），東区女性会研究協議会講演，守山区女性協議会講演，トワイライトスクール地域協力員研修会講演

・現職研修：名古屋市：常安小，東志賀小，安城市現職教員研究生受け入れ（１名）

・家庭教育セミナー：名古屋市：常安小，山田中，内山小，愛知小，戸田小，西築地小，

岩崎中（小牧市），正則小（海部郡），双葉幼（刈谷市），名古屋市（北，瑞穂区）生涯学習センター講師，安城市：桜公民館，中部公民館講師

寺西　和子　Teranishi, Kazuko　　教授　　学校教育講座　　文学修士

❶ カリキュラム研究，教育評価研究，総合的学習，授業研究

❸ 日本教育学会，日本教育方法学会，日本カリキュラム学会（理事），日本教師学学会

❹ 学部―教育の方法と技術，総合演習Ⅰ，指導と評価演習
大学院―総合学習特論，教育方法学演習

❺ 授業研究，総合的学習，教育評価研究

・業績リスト
①MSU教職大学院の専門職ポートフォリオの分析
―MACT　コースのケーススタディー―
愛知教育大学研究報告　第55輯　（教育科学編）　2006年 3 月
②平成15年度―17年度　　科学研究費補助金　　基盤研究（C）報告書
寺西和子代表　「ポートフォリオ評価の実証的研究　その 2 」

・学会口頭発表
①日本カリキュラム学会　第16回大会　　課題研究Ⅲ　　提案発表
単独「目標に準拠した評価―スタンダードを巡る問題―」

・啓蒙雑誌
①「総合的な学習の時間推進上の問題点はなにか」　『教職研修』2005年 6 月　教育開発研究所　　pp. 32-35.
②「教育評価としてのカリキュラム評価の視点」『教職研修』　12月増刊　教育開発研究所　　pp. 20-23.

・日本学術振興会　　科学研究費　基盤研究（C）平成17年度
研究代表者（寺西和子）「ポートフォリオ評価の実証的研究　その 2 」（60万円）

❻ 大学入試委員会　　副委員長

❼・文科省　　初等教育教育課程　専門部会委員
・松下教育研究財団　理事，研究助成審査委員
・豊田市教育研究所　運営委員会副委員長

❽・学内　　公開講座講師　　「総合的学習の実践的課題はなにか」
公開講座講師　　「キャリア教育」
・学外　愛知県認定講習講師　「総合演習」
平成17年度　　サウジアラビア教育開発研究　講師　（JICA）
愛知県内の小学校・中学校の　指導・助言

原口　芳明　Haraguchi, Yoshiaki　　教授　　学校教育講座　　教育学修士

❶ 臨床心理学，障害児心理学

❸ 日本心理臨床学会，日本人間性心理学会，日本心理劇学会，日本ブリーフサイコセラピー学会，東海心理学会

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

❹ 生涯教育概論Ⅰ（1年），こころとからだの展開2（こころの臨床），心理療法論Ⅰ，生涯発達心理学（2年），臨床心理学演習，共生社会と心理教育，心理療法論Ⅱ，臨床心理学研究Ⅰ，臨床心理学研究Ⅱ，生活の指導と相談（3年），臨床心理学研究Ⅲ，臨床心理Ⅰ学研究Ⅳ（4年），教育心理臨床学特論I，教育心理臨床学演習（大学院）

・実践的教育活動としては,授業の中にできるだけ体験学習を取り入れるようにしている。心理教育的なエクササイズ，心理臨床的アプローチなどをとおして,受講生は課題に能動的に関わり相互に体験を語り合うことで自己体験を深めている。それに関わることで教えられることは多い。

❺ （1）心理臨床におけるからだ体験の意味，からだからのアプローチの検討
（2）障害の重い子どもへの発達援助，親援助に関する実践・研究
（3）教育相談，スクールカウンセリング活動に関わる実践・研究

・業績

＜なる＞体験と心理臨床, 愛教大学研究報告，55，2006年

障害児教育教員養成におけるからだを基礎とした体験学習，治療教育学研究，26，2006年

表現アートセラピー（Expressive Arts Therapy）について考える，日本人間性心理学会，第24回大会自主企画，話題提供

❻ 学生相談室相談員

❼ 教育臨床セミナー（愛知教育大学公開講座）講師，名古屋いのちの電話研修講師，刈谷市富士松中学校スクールカウンセラー，愛知県静的弛緩誘導法研究会代表，社会福祉法人清流会白竹の里評議員

神谷　孝男　Kamiya, Takao　　教授　　学校教育講座　　教育学修士

❶ 学夜進路指導，キャリア教育

❸ 所属学会，協会，県機誘拐など

日本キャリア教育学会，日本進路指導ぬ会

❹ 教師論（1年），進路指導原論（2年），生活の指導と相談A（3年），学校教育と進路指導（3・4年，E選），進路指導の評価（4年），学校進路指導特論Ⅱ（大学院），学校進路指導演習Ⅱ（大学院）

❺・現在の研究テーマ

○青少年の生き方と職業選択に関する調査研究

○小学校におけるキャリア教育の在り方について

・業績リスト

○小学校段階からのキャリア教育　－「生きる力」と「夢」をはぐくむ教育一　愛知教育大学教育総合センター紀要第9号　2006年2月

❻ 附属岡崎小学校長

❼ ○愛知県公立高等学校入学者選抜方法研究協議会委員・同専門員会議長

○愛知県キャリア・スタート・ウイーク支援会議委員

○愛知県小中学校社会体験型教員研修連絡会議委員

その他

折出　健二　Oride, Kenji　　教授　　学校教育講座　　教育学修士

❶ 生活指導論，学校社会臨床

❷ ポプラ社ポプラ文庫読書感想文コンクール（おとなの部）佳作入選
2006年１月

❸ 日本教育方法学会　理事
日本生活指導学会　理事
あいち県民教育研究所　所長
全国生活指導研究協議会　常任委員会代表

❹ 現代教育論（１年），生活の指導と相談（３年），生活指導論演習（３年），生活指導特演（大学院），学校社会臨床特論（大学院）

＊１年生の授業で，学習テーマ別グループ発表方式を継続している。学生たちは意欲的で鋭く問題を捉えたり，自発的に調査に行ってまとめるなど，「学びのエネルギー」には大変触発されている。

＊FD活動の参考にするため，京都外語大学で行われたFDフォーラム（06年３月）に参加した。
教養と専門の関係性をこれまでのように「教養をやってその上に専門性」という単純積み上げ式ではもはや時代の情勢に合わない。より徹底した教養性が学部教育では求められることを学んだ。専門性は大学院で，という時代なのだ。
本学には「教養教育」の軸はあるが，「専門性をよびこむ教養教育」になり得ているかどうか。そこが問われていると感じた。

❺ 「子ども集団づくりがめざす公共性と自治～子どもの生きづらさと向き合う～」（共同）『生活指導』620号，2005年。
「集団づくりなくして道徳は育たない」『現代教育科学』594号，2006年。
『子ども集団づくり入門～学級・学校が変わる～』（共著）明治図書，2006年。

❻ 05年度は，教育研究評議員二年目として学内運営に当たった。また，労働基準法の法定業務である過半数代表者（大学事業場）二年目を努めた。法人化から二年目をむかえて，就業規則及び関連諸規程の変更等で事前協議や会議に追われた。
衛生管理者二種の資格取得者として，人文棟の上階部分の定期点検を担当した。

❼ 民間の会員制研究所である「あいち県民教育研究所」所長として，教員評価，学力問題，発達障害児への支援などについて学習会や県民集会を開き，課題の共有化と深化に努めた。全生研の常任委員会代表としても，新しい集団づくりの提唱など，積極性を発揮した。

多鹿　秀継　Tajika, Hidetsugu　　教授　　学校教育講座　　教育学博士

❶ 教育心理学，学習心理学，認知心理学

❸ 日本教育心理学会，日本心理学会，日本認知心理学会，日本認知科学会，日本教育工学会，関西心理学会，東海心理学会，European Association for Research on Learning and Instruction，American Psychological Association，American Educational Research Association，Psychonomic Society，

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

❹ 発達と学習の心理学（１年），心理教育アセスメント講義（２年），学習心理学演習（３年），認知心理学（３年，４年），教育心理学特論（大学院），教育心理学演習Ⅰ（大学院）

・教育活動：授業は後期のみ担当。２つの授業目標を達成することに腐心しています。１つは認知面で，各授業の内容をわかりやすく伝えること。他の１つは情意面で，授業内容を意味あるものとして伝え，興味・関心を植えつけることです。

❺・研究テーマ：

知識の構成過程

・著書・論文：

・Tajika, H., & Nakatsu, N. (2006). The effect of self-explanation on solving mathematical word problems. 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 9 , 9 -16.

・中津楢男・多鹿秀継（2006）。自己説明を利用した算数の割合文章題の解決支援プログラム　愛知教育大学研究報告, 55,

・多鹿秀継・中津楢男（代表）（2006）。子どもの算数問題解決と転移を促す知識の構成の分析と支援に関する研究　平成15－17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書

・シンポジウム・口頭発表等：

European Association for Research on Learning and Instruction学会（８月, Cyprus），日本心理学会大会（９月，慶應義塾大学），日本教育心理学会総会（９月，浅井学園大学）で発表

・科研費：

「子どもの算数問題解決と転移を促す知識の構成の分析と支援に関する研究」（330万円，代表者：中津楢男）

・学術・研究交流：

科研費を利用し，University of California, Santa Barbara の associate professor を11月に招聘し，算数問題解決の意見交換をした。

❻ 教務企画担当理事（副学長）（2004年４月から2005年６月），学校教育講座代表の教育実地研究専門委員（2005年７月から2006年３月）

坂柳　恒夫　Sakayanagi, Tsuneo　　教授　　学校教育講座　　教育学修士

❶ 進路指導，専門分野：キャリアガイダンス・カウンセリング，関連分野：カウンセリング

❸ 日本キャリア教育学会（紀要編集委員），日本産業カウンセリング学会（理事），日本教育カウンセラー協会（評議員），日本カウンセリング学会，日本交流分析学会，日本応用心理学会，日本教育心理学会，日本教育社会学会，日本青年心理学会，日本高等教育学会，愛知教育カウンセリング研究会（会長）

❹ 教師論（１年），キャリア発達基礎研究（２年），道徳教育の研究（２年），職業と人生（２年），職業選択と適性（３年），キャリア・カウンセリング演習（３年），生活の指導と相談Ａ（４年），キャリア設計とカウンセリング（３年），進路指導の組織運営（４年），キャリア・カウンセリング特論（大学院），キャリア発達教育演習Ⅱ（大学院）

授業にあたっては，一方的な講義形式にならないように，受講生とのコミュニケーションを重視した。また，キャリアガイダンス・カウンセリングに関する検査，教育ゲームなども取り入れながら，できる限り主体的・体験的な学習となるように配慮した。この

授業に対する受講生の感想をみると，教育ゲームや心理テストを活用したグループワークは興味を持って参加できたなど，概して好評であった。今後も講義形式だけでなく，主体的・体験的な学習の機会を導入していきたい。

❺［現在の研究テーマ］

(1) 青年期・成人期におけるキャリア発達に関する研究

(2) キャリア成熟尺度の開発とキャリア・カウンセリングへの適用に関する研究

主な研究テーマは，キャリアガイダンス・カウンセリングの基礎をなす「キャリア発達」に関する理論的検討と，「キャリア成熟」を測定評価するための尺度の開発及びキャリア成熟に関する実証的研究である。

［業績リスト（平成17年度分)］

『総合的学習を創る』「キャリア教育型で提案する総合のテーマ」明治図書　2005年11月

❻・大学改革推進委員会委員

・６年一貫教員養成コース会議委員

・学校教育講座・進路指導履修コース主任

❼・愛知教育大学公開講座「キャリア教育とカウンセリング」（キャリア・カウンセリングの基礎）講師

・文部科学省研究開発学校（名古屋大学附属中・高等学校）運営指導委員会委員

・愛知県勤労会館運営推進委員会（会長）

・福井県教育研究所「進路指導講座」講師

子安　　潤　Koyasu, Jun　　教授　　学校教育講座　　教育学修士

❶ 教育学

❸ 日本教育学会，日本教育方法学会（理事)，日本生活指導学会（理事)，日本カリキュラム学会，日本教師教育学会，中部教育学会

❹ 担当授業科目：

教育課程特論，教育課程論演習，カリキュラム開発演習，（以上大学院）教育の方法と技術，教育課程演習，特別研究１・Ⅱ（以上学部）

❺・研究テーマ：

教育課程論，単元開発論

・業績リスト：

共著『授業づくりで変える高校の教室１社会』明石書店2005年

論文：「教育の困難を越える社会科教育へ」『じっきょう地歴・公民科資料62』2006年２月，実教出版

論文：河村智美・子安潤「情報活用能力に関するNIEの実践と課題」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第９号，2006年２月

論文：「対話への道」『高校生活指導』167号，青木書店2005年12月

論文：「生と死の教育内容論」『生活指導』2005年11月号，明治図書

論文：「学力調査と学びのアンラーン」,『生活指導』2005年５月号，明治図書

❻ ハラスメント委員会WG

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動

❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

❼ 愛知県教育研究集会講師，静岡市教育研究集会講演，我孫子市教育研究集会講演，東海市立太田小学校講師，愛知県生活指導研究協議会講師

竹内　謙彰　Takeuchi, Yoshiaki　　教授　　学校教育講座　　博士（教育学）

❶ 専門分野：発達心理学
関連分野：教育心理学

❸ 日本心理学会，日本発達心理学会，日本教育心理学会，日本国際地図学会，日本神経心理学会，心理科学研究会

❹ 教育の心理学（１年），教師論（１年），発達心理学講義（２年），心理学特殊実験Ⅰ，Ⅱ（３年），子どもの思考（３，４年），こころとからだセミナー（３年），教育の方法と技術（３年），認知発達過程特論Ⅰ（大学院），認知発達過程演習Ⅰ（大学院），特別研究Ⅰ，Ⅱ（大学院）

・教育活動の問題点，FD活動，教育に対する抱負：昨年度は，欠員が不補充だったこともあり，今まで経験の乏しいE科目（教育の方法と技術）を担当したことは負担であった。また，評議員であったこともあり，大学運営に関わる仕事が忙しく，教育活動に十分な時間とエネルギーを注ぐことが難しかった。そうした悪条件があったとは言え，必要な教育活動は一定以上の水準で維持すべく努力してきた。とはいえ，以下に学生の学習動機づけを高め維持するかは，常に難しい課題である。

❺・現在の研究テーマ：
認知の発達と個人差

［今後の計画］第１に，空間認知の発達と個人差・性差の研究を発展させたい。特に近年，空間認知能力の性差に影響を与える要因の解明を，一つの研究目標としている。その成果によって，性やジェンダーにまつわるステレオタイプな観点を是正することに示唆をもたらすものと考えている。第２に，CGやVRを空間学習や空間的スキルの測定に用いる応用的な方向での研究の発展を企図している。第３に，基本的な認知能力（知能）の発達を捉える基礎的研究を行いたいと考えている。知能検査に関する文献展望を２年前に行ったが，古典的な知能観にとらわれない，様々な知的側面，特に近年研究が盛んになってきた，心の理解に関する研究に焦点を当て，そうした能力発達に関わる要因を明らかにしていきたいと考えている。

・業績リスト：
［口頭発表］児童期における方向推測と性差。日本心理学会第69回大会ポスター発表。(2005年)
方向感覚質問紙簡易版（SDQ-S）の因子構造の検討。日本教育心理学会第47回総会ポスター発表.（2005年）。
［論文］児童期における方向推測の正確さに関する探索的研究。愛知教育大学研究報告（教育科学），55，(2006年)。

・科学研究費補助金など研究助成の受領状況：
［研究分担者］「子どもの算数問題解決と転移を促す知識の構成の分析と支援に関する研究」基盤研究（B）（２）。研究代表者：中津楢男

・学術・研究交流等：
同上科研費による研究活動の一部として，英国ミドルセックス大学（ロンドン）に調査に赴いた。

❻・各種委員会委員活動：教育研究評議員，大学改革委員会，教員人事委員会，国際交流委

員会。

下村　美刈　Shimomura, Mikari　　教授　　学校教育講座　　文学修士

❶ 臨床心理学

❸ 日本心理臨床学会，日本トラウマティック・ストレス学会，国際ロールシャッハ学会，日本描画テスト・描画療法学会（評議員），愛知県臨床心理士会（理事）

❹ 家族心理学（１年），共生社会生活教育論（１年），パーソナリティ論（２年），臨床心理学研究Ⅰ・Ⅱ（３年），臨床心理査定法演習（３年），総合演習Ⅰ（３年），生活の指導と相談（３，４年）児童発達支援実習（３年），臨床心理学研究Ⅲ・Ⅳ（４年），臨床心理査定演習Ⅰ（大学院），投影法特論Ⅰ（大学院），臨床心理実習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

学部では，臨床心理学及び，その関連分野における基礎的な知識を１,２年で習得し，３,４年次に子どもの臨床現場での実習体験授業により，援助職の実際を学び知識と実践との統合を図ることを目標にしている。おおむね授業目標に学生は到達できるが，各学生が実習体験を深めるために教員が提供している時間や労力は正規の授業時間におさまらないことが問題である。

❺ 児童及び思春期・青年期の適応障害におけるトラウマのアセスメント及び心理治療に関する研究

心理療法の実践　北樹出版

家族再生のための地域型家族支援マニュアル　愛知県健康福祉部児童家庭課

特別支援教育を核に，実践的教育力育成を目指す教員養成改革事業に参画

❻ 学生相談室運営委員及び相談員

❼ 愛知県児童相談所児童家庭専門員，愛知県被虐待児家庭復帰援助事業調査研究委員会委員，名古屋市危機児童家庭サポート会議委員

大村　　恵　Omura, Megumi　　助教授　学校教育講座　　教育学修士

❶ 社会教育学，青年期教育学

❸ 日本教育学会，日本社会教育学会，日本教育法学会，中部教育学会，社会教育職員養成問題研究会

❹ 教科外活動の研究（３年），教育学特別研究Ⅰ（２年），教育学特別研究Ⅱ（３年），社会教育演習Ⅱ（３・４年），生涯教育論演習（３・４年），生涯教育概論Ⅱ（１年），社会教育の基礎Ⅱ（３・４年），青年期教育学特論（大学院），青年期教育学演習Ⅰ（大学院）

学生の参加型の教育形態，特に学外での体験活動・調査活動を組込んだ授業形態を目指している。

❺・研究計画としては，以下の２本の軸を中心に進めている。

(1) 青年教育研究：働く青年の学習活動とその援助である青年教育についての今日的実践的研究。

(2) 高等学校定時制課程・通信制課程研究：高等学校定時制課程・通信制課程の歴史的研究。

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

・2005年度の主な研究は次のとおりである。
「共同学習」『公民館コミュニティ施設ハンドブック』日本公民館学会編，2006年３月。
「教養教育における生活史学習の試み　その２～『現代日本の社会と文化』展開・セミナーの授業から～」『教養と教育　第５号』2005年４月。
「生き方の選択を支援する大学教育」『大学と教育』N0.42，2006年３月，東海高等教育研究所。
・学会発表「青年の進路選択と生涯学習」，2005年７月，日本社会教育学会東海６月集会。

❻ 学校教育講座教育学教室　教務担当
学校教育講座教育社会学補充人事教員選考委員主査

❼・社会教育活動として
日本青年団体協議会全国青年問題研究会助言者（1994－1999，2001－2005年度），全国教育研究集会共同研究者（1992－2005年度），愛知県教育研究集会助言者（1996－2001，2003－5年度），桑名市社会教育委員（委員長）（2003－5年度）など
・研究活動として
社会教育研究全国集会第２分科会（若者の学びと文化）世話人
・その他の社会的活動として
愛知県男女共同参画審議会（2002－5年度），愛知県ユースワーカー地域活動推進委員会アドバイザー（2005年度）（2001年度より学識経験者として愛知県ユースワーカー事業に継続的に関わっている），豊田市次世代育成支援推進協議会副会長及び同子ども条例検討部会部会長（2005年度），名古屋市瑞穂区社会福祉協議会地域福祉活動計画推進委員（2004－5年度），愛知子どもNPOセンター理事（2003－5年度），独立行政法人福祉医療機構子育て支援基金助成事業子育てネットワークによる小・中学生交流事業運営委員（2005年度）など

添田久美子　Soeda, Kumiko　　助教授　学校教育講座　　博士（学術）

❶ 教育行政，教育法，教育政策

❸ 日本教育学会，日本教育法学会，日本教育行政学会，日本教師教育学会，日本教育社会学会

❹ 教育の社会的研究（２年），教育原論（１年），教育制度学演習（３年），社会的教育学講義（２，３年），教育学特別研究（２，３年），学校経営と教師の力量形成（３，４年）
教育制度論学演習１（大学院），教育制度学特論１（大学院）
２年生を対象とする講義では，毎回講義のなかで，講義の内容に関する小レポートを課している。レポートの目的は，基礎知識がしっかり身につくことと，基礎知識をもとに自身の考えを整理することにある。E選の講義では，教師や学校を取り巻く身近な出来事をトピックスというかたちで毎回１つずつ取り上げ，教育行政や教育法といった観点から理解を深め，そこにある課題に気づき，自ら教師としてどのように取り組むかを考えることを目的としている。専攻の学生，及び，大学院を対象とした講義・演習では，学生が自らの興味関心をもとに調べ，発表するだけではなく，発表の場で出てきた他の学生の疑問・質問に対して学生自身が応答する形式を取っている。これによって自らの発言・意見に責任を持ち，自身の興味関心から社会的関心のあり方へと深めることを目指している。

❺ 長期　教育と福祉の相互関連と独自性
短期　教育行政職の専門性と資質向上－教育行政職におけるリーダーシップとは何か

就学前教育における公共性の再構成

2005・2006年主業績：

（単著）『「ヘッド･スタート計画」研究　教育と福祉』学文社2005
日本学術振興会平成16年度科学研究費補助金助成（ISBN 4 -7620-1383）

（編著）土屋基規，PKスミス，添田久美子，折出健二『いじめと取り組んだ国々』ミネルヴァ書房，2005

（共著）土屋基規『現代教職論』学文社，2006

（編集協力）植原邦子『保育実践ポートフォリオ』ミネルヴァ書房，2005

（紀要）添田久美子他「加古川市就学前児童施設保育に関するアンケート調査結果・分析」『兵庫大学附属総合科学研究所研究所報』10』2005

（地域計画）稲美町次世代育成支援対策行動計画策定委員会委員長『輝く未来へ幸せ家族』2005

齋藤　　眞　Saito, Makoto　　助教授　学校教育講座　教育学博士(H18.5.授与)

❶ 臨床心理学，心理療法論，分析心理学

❸ 日本心理臨床学会，日本箱庭療法学会，日本ユング心理学研究所，ヘルメス心理療法研究会，愛知教育大学心理臨床の集い（事務局）

❹ 生活の指導と相談B（３年），臨床心理学講義（３年），臨床心理査定法演習（３年），教育臨床基礎実習Ⅰ・Ⅱ（大学院），教育臨床基礎実習Ⅰ・Ⅱ（大学院），教育臨床基礎実習Ⅰ・Ⅱ（大学院），臨床心理面接Ⅱ（大学院），臨床心理面接Ⅱ（大学院），箱庭療法特論（大学院），箱庭療法特論（大学院），青年期臨床心理学特論Ⅱ（大学院）

大学院の「教育臨床基礎実習Ⅰ・Ⅱ」は，教育実践総合センター心理教育相談室を実習施設として使わせていただいている。この相談室は，下記❼の「社会的活動」にもあたり，学外から相談に来られる人（来談者）に専門的な援助をしている。学校教育臨床専攻の大学院生は，この施設の院生スタッフとして登録され，指導教員である臨床心理士から随時助言を受けながら，実際の相談を担当することによって，臨床心理学の実践的な訓練と教育を受けている。また，院生は，厳密な守秘義務のもとで自分が担当している相談事例を上記教員の前で発表し，相談を進めていく上での留意点や見立てなどを学んでいく。複数の教員から様々な視点からの助言を受けることで，相談に携わっている自分と来談者との間で生起していることを客観的に理解できるよう，授業が工夫されている。さらに，発表する院生や発言する院生が，長所も短所も含めた自分の「個性」に気づき，それを生かしていけるよう，支持的な雰囲気も堅持されている。

このために，一つの実習事例を丁寧に検討していく授業に費やされる時間とエネルギーはたいへん大きい。それに加えて，院生と共に実際に事例を担当する負担や，複数の教員が同時に授業を担当する負担や個別に事例に則して助言する負担など，「実習」担当の教員の負担は計り知れない。しかし，臨床心理士資格受験が可能な本専攻における専門的な訓練としては，たとえ非効率ではあっても，このような授業形態が必要不可欠である。

なお，来談者に対する専門的な援助という意味での責任は，心理教育相談室長と上記指導教員とが負っている。このような専門的な援助に関わる責任や守秘義務という意味

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

で，この「実習」の受講登録は専攻生のみに限定されている。

❺ 分析心理学，箱庭療法

「箱庭の背景思想をめぐって－『見えない微細な身体』を手がかりとして－」日本ユングクラブ編『プシケー24号――特集　身体』（新曜社，2005）所収

❻ 特別専攻科運営委員会，教育実地研究委員会（６月中まで），介護体験部会（６月中まで），就職支援委員会（10月から），学校教育講座心理学履修モデル３年生担任，大学院学校教育臨床専攻書記

❼ 名古屋市教育センター嘱託臨床心理士，名古屋市子ども適応相談センタースーパーヴァイザー，三重県総合教育センター教育相談専門研修講座講師，名古屋市大高北小学校学校評議員，愛知県認定講習講師，名古屋市教育センター教育相談中級講座講師

❽ 日本ユング心理学研究所の資格候補生

藤井　啓之　Fujii, Hiroyuki　　助教授　学校教育講座　　修士（教育学）

❶ 教育方法学

❸ 日本教育方法学会，日本生活指導学会，日本生活指導学会紀要編集委員会事務局長（2004～2005年度），中部教育学会

❹ 教育創造センター研究員として，授業改善のための研究・調査を行っている。

個人としては，すべての授業でWebサイトを開設し，Web上で学生による授業前の事前感想や事後感想の提出を行わせて，他の受講生の感想を読めるようにしたり，学生によるQ&Aを作成させるなどして，「学びの共同体」づくりにおけるITの活用の実験的試みを行っている。また，単位制度の実質化のために，授業外にかならず予習・復習で一定時間を割かなければならないように工夫を行っている。

❺○学内重点研究

―「教員養成大学におけるジェンダー・カリキュラム」フライブルク教育大学のジェンダーカリキュラムの調査に出かけ，調査・研究結果を報告書にまとめている。

―「平和・人権・障害者」　学内重点研究で，ほとんど参加できていないが，このプロジェクトに関わって，アンケート結果の整理などを行っている。

○現在，他大学の教員とともにドイツにおける暴力克服プログラムに関する研究を行っており，ドイツのバーデン・ヴュルテンベルク州の学校や警察を訪問調査したりしている。

❻○教育創造センター研究員として，

―各種調査に関与し，FDなどで司会を行ったり，報告をおこなったりしている。

―IT関連の研究会や大学教育に関する研究会などに参加し，学内で報告を行っている。

―評価委員会に参加している。

○大学院　教育学研究科　学校教育専攻　教育学分野専攻代表

❼ 愛知県教育職員免許法認定講習講師

山口　　匡　Yamaguchi, Tadasu　　助教授　学校教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：教育哲学

関連分野：教育思想史

❸ 教育哲学会，日本教育学会，日本カント協会，中部教育学会（理事），東北教育哲学教育史学会

❹ 教師論（１，２年），教育入門（１年），道徳教育の研究（２年），教育の哲学（３年），

教育哲学歴史学講義（３年），教育哲学演習（３年），教育学特別研究ⅠⅡ（２，３年），平和と人権セミナー（３年），教育思想特論（大学院），教育思想論演習ⅠⅡ（大学院）

教育科目では，教師論，教育原論，教育入門，道徳教育の研究を担当することが多い。いずれも大学入学後の早い時期に開設される科目であるため，わかりやすいテキストの指定と補助プリントの配布によって，できるだけ今日的問題との連関を意識した授業を心がけている。

学部の専攻科目や大学院の授業では教育哲学・教育思想関連の科目を担当し，邦訳文献の講読・演習を中心に，教育学における基礎的概念の分析を一貫したテーマとしている。授業に臨むにあたっては，テキストを原典と読み合わせることによってできるだけ不明な箇所を残さないこと，最低限おさえるべき要点を簡潔に提示することを心がけている。しかし，授業の内容をどのように現実的な教育問題の分析へと適用させるのかという点で困難さを表明する受講者も少なくない。また，大学院では現職教員の受講も多く，学校現場における問題状況への目配りがさらに要求されると感じている。

❺・現在の研究テーマ：

（１）カントの判断力理論に関する教育学的研究

（２）教育学の基礎概念に関する概念史的研究

（３）教職についての存在論的分析

❻ 大学・附属学校共同研究会（授業実践力の向上プロジェクト代表）

大学改革推進委員会第２部会

市民参画型教員養成コーディネータ会議

高大連携入試実施プロジェクト

高大連携入試コーディネータ会議

❼ 愛知県栄養教諭免許法認定講習講師

第25回高校教育シンポジウム（附属高校）総合司会・コメンテーター

菊島　勝也　Kikushima, Katsuya　　助教授　学校教育講座　　博士（心理学）

❶ 心理学，専門分野：臨床心理学，関連分野：健康心理学

❸ 日本心理臨床学会，日本健康心理学会，日本性格心理学会，日本臨床心理士会，愛知県臨床心理士会

❹ 共生社会生活教育論（１年）分担，カウンセリング演習（２年），臨床心理学（２年），コミュニティ援助論（３年），コミュニティ心理学演習（３年），臨床心理学研究１・２（３年），児童発達支援実習（３年）分担，臨床心理学研究３・４（4年），卒論指導（４名），児童臨床心理学特論（大学院），児童臨床心理学演習Ⅱ（大学院）

臨床心理学を中心に，心理学関連の授業を担当している。３年生時の研究（３名）及び４年生の卒業研究の指導（３名）を行った。児童発達支援実習では，学外の児童福祉施設において，３年生による臨床心理学的な実習指導を２名の教員で行った。また本学の学生相談員を担当した。

今後の抱負としては，受講生とのコミュニケーションを活発に行いつつ，受講生自身が，自分で考えながら研究や学習をすすめていけるように促していきたい。

❺ （1）青年期における不適応行動にストレス等が与える影響について

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

(2) 身体に関わる意識と心理的健康との関係について

現在の研究テーマは，まず一つ目として，青年期における不適応行動に対して，ストレス等が与える影響を明らかにしたいと考えている。特に，青年期における食行動の面から不適応問題を取り上げている。二つ目としては，自らの身体に対する意識が心理的健康に及ぼす影響がどのようなものか探求していきたいと考えている。

菊島勝也（2006.3）中学生のストレス緩和に関わる生活環境について．愛知教育大学教育実践総合センター紀要，9，243-248.

菊島勝也（2006.3）むちゃ食い障害傾向におけるストレッサー，ソーシャルサポートの研究．愛知教育大学研究報告（教育科学），55，95-102.

❻ 共生社会コース人間関係履修モデル代表，第三部会教育課程編成ワーキング委員

❼ 愛知教育大学公開講座教育臨床セミナー講師

石田　靖彦　Ishida, Yasuhiko　　助教授　学校教育講座　修士(教育心理学)

❶ 心理学

専門分野：社会心理学

関連分野：教育心理学

❸ 日本心理学会，日本教育心理学会，日本社会心理学会，日本カウンセリング学会
日本グループ･ダイナミックス学会，日本パーソナリティ心理学会，東海心理学会

❹ 情報教育入門Ⅱ（1年），こころとからだ入門（1年），発達と学習の心理学（1年），個人と集団の心理学（3･4年），心理学特殊実験Ⅰ（3年），心理学特殊実験Ⅱ（3年），社会心理学講義（3年），集団過程評価特論（大学院），集団過程評価演習Ⅱ（大学院）

❺ 研究テーマ：

学級内の仲間集団の形成過程とその機能に関する研究

論文：

・中学校新入生の交友関係の形成過程に関する縦断的研究－動機づけ志向性における類似性の観点から－　東海心理学研究，1，39-44.

・中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響－部活動集団の特徴と部活動への意欲に着目して－（共著）　愛知教育大学教育実践総合センター紀要，9，219-225.

・学校への適応を媒介する要因としての児童・生徒間関係　愛知教育大学研究報告（教育科学編），55，103-109.

・自己定義の類似性と自他の相対的遂行度が友人選択と親密性に及ぼす影響 対人社会心理学研究，6，65-70.

報告書：

・確かな学力を支える学習意欲　確かな学力育成のための実践研究事業研究報告書（第一年次），Pp 6 -10.　2006年 3 月

科学研究費補助金：

・「子どもの算数問題解決と転移を促す知識の構成の分析と支援に関する研究（分担)」（基盤（B）　代表：中津楢男）／平成17年度科学研究費補助金

・「不本意な社会的アイデンティティと差別的態度の関係に関する研究－日米を比較して－（分担)」（基盤（C）　代表：池上知子）／平成17年度科学研究費補助金

❻・大学院学校教育専攻（教育心理学分野）代表（2005年 4 月～2006年 3 月）

・「こころとからだ」コーディネータ（2005年 4 月～2006年 3 月）

❼・愛知県学力向上推進協議会委員（2005.4～）

・日本学校心理士会愛知支部役員（2005.4～）
・愛知教育大学附属高等学校「アカデミック・クエスト（実験心理学）」講師（2005. 7）
・愛知教育大学公開講座　「教師のための心理学」講師（2005.7）
・「確かな学力育成のための実践研究事業」に伴う研修会及び学校訪問（2005.4～）

小嶋　佳子　Kojima, Yoshiko　　講師　　学校教育講座　　博士（心理学）

❶ 発達心理学，教育心理学
❸ 日本心理学会，日本教育心理学会，日本発達心理学会，日本感情心理学会
❹ 教師論（１年），発達と学習の心理学（１年），心理学基礎実験（２年），心理学基礎演習（２年），こころとからだ展開Ⅰ（２年），人格発達過程演習Ⅰ（大学院），人格発達過程特論（大学院）

このほか，基礎実習の引率・指導も行った。

実験・演習以外の授業でも，単なる知識の伝達で終わらないように，小レポートや要約レポートといった中間課題を課した。また，疑問・意見の共有や見直しのために，提出されたレポートの内容を資料にまとめて配布するようにした。

❺ 現在の研究テーマ：他者の嫌悪感の推測と向社会的行動の発達，社会的感情の発達と自己の発達の関連

業績

研究発表：

感情間の相互抑制のタイプが感情評定に与える影響（日本心理学会第69回大会）

実習前の学習と実習に対する学生の意識・評価，および就職意欲の関連（日本教育心理学会第47回総会）

❼ 愛知教育大学附属高等学校　アカデミック・クエスト　講師，愛知県義務教育問題研究協議会委員

瀬田　祐輔　Seta, Yusuke　　講師　　学校教育講座　修士(図書館情報学)

❶ 教育学

専門分野：学校図書館学

❸ 日本学校図書館学会，日本図書館情報学会，図書館資料組織化研究会，コンピュータ利用教育協議会，情報科学技術協会
❹ 「学校図書館メディアの構成」（３年），「読書と豊かな人間性」（４年），「情報メディアの活用」（４年），「情報メディアの活用」（３年），「子どもと図書館」（３・４年），「社会科学入門（現代教育論）」（１年），「教育実践学講義」分担（２年）
・その他：「学校図書館司書教諭資格取得のための科目」履修ガイダンス講師
❺・研究テーマ：

メディア・センター論，件名目録論，図書館利用教育

・業績：
・瀬田祐輔。“13 学校図書館におけるオンライン資料とその利用”。カナダ・アメリカに見る学校図書館を中核とする教育の展開。全国学校図書館協議会カナダ・アメリカ

学校図書館視察団編。東京，全国学校図書館協議会，2006，p.74-79。　ほか

・研究助成の受領：

「教員養成大学における図書館利用教育の検討」（代表：斉藤秀平）2004年度学長裁量経費（継続）

❻・委員会活動：愛知教育大学出版会編集委員会 委員（2005.6から）

・その他：学校図書館司書教諭資格取得（学内）にかかわる教務事務全般担当，学校図書館司書教諭講習（文部科学省委託）にかかわる教務事務担当

❼・愛知県教育委員会平成17年度地域教育力・体験活動推進協議会専門部会 部会長

・平成17年度学校図書館司書教諭講習（文部科学省委託）開設科目「学習指導と学校図書館」 講師（2005.8）

・安城市教育委員会平成17年度司書教諭研修会「司書教諭としての役割と学校図書館運営：児童・生徒の利用を考えた学校図書館スペースづくり」 講師（2005.8）

・豊橋市教育委員会平成17年度司書教諭研修会「司書教諭の役割：学習指導にどうかかわるか」 講師（2006.1）

三上　敦史　Mikami, Atsushi　　助手　　学校教育講座　　博士（教育学）

❶ 教育学

専門分野：日本教育史

❸ 教育史学会，日本教育学会，全国地方教育史学会，中等教育史研究会

❹ 専門教育入門（１年），教師論（１・２年），教育哲学歴史学講義（２年），平和と人権（２年），日本教育史演習（３・４年），「もう一つの学校」論（３・４年），総合演習（４年）

教育に対する抱負：教育原理に属する科目が主だが，単に理論の解説にとどまらず，高等学校教諭としての現場経験に裏打ちされた授業となるよう努めている。

❺・研究テーマ：

近代日本の夜間中学・鉄道教習所に関する歴史的研究

・業績：

論文「鉄道省勤務の若年労働者の学びと教育情報『鉄道青年』の分析を手がかりに」『愛知教育大学研究報告』第55輯（教育科学編）

・研究助成：

平成17年度科学研究費補助金（若手研究（B））「近代日本における「無学歴学校」の歴史的研究－鉄道教習所を中心に－」（研究代表者）

平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「近代日本における教育情報の歴史的研究」（研究分担者）

❻・学校教育講座代表

・幼稚園教員資格認定試験実施委員会委員

・就職委員会委員

藤井　恭子　Fujii, Kyoko　　助手　　学校教育講座　　博士（心理学）

❶ 生涯発達心理学（青年心理学）

❸ 日本教育心理学会，日本発達心理学会，日本社会心理学会，日本青年心理学会，日本医学教育学会

❹ 心理学調査法演習（2 年），道徳教育の研究（2 年），教育の心理学（1 年），こころとからだセミナー（3 年）

学生が自ら問題意識を持って学べるよう，毎回の授業ごとに学生からの質問・感想シートを集め，次回の授業冒頭で回答・紹介している。これは，教員との相互的コミュニケーションにも役立っている。また，概念を構成したり，いつでも授業内容を振り返ることのできるよう，レジュメの作成に力を入れている。そのほか，視聴覚教材を活用したり，学生同士の討論学習にも力を注いでいる。

❺・現在の研究テーマ

（個人）青年期の対人関係におけるヤマアラシ・ジレンマ

本年度から，科学研究費（若手B）を取得し，個の確立が関係性の模索に及ぼす影響をみている。大規模な質問紙調査を行っている最中である。

（共同）親の心性で捉える養育態度の構造

外部企業からの協力依頼・資金を得て，次年度以降も調査の計画を具体化していく。

（共同）医療系大学への進路決定プロセスと入学後の職業的アイデンティティとの関連

他大学の教員との共同研究。論文として発表予定。

（共同）　愛知教育大学重点研究　ジェンダー・カリキュラム

・科学研究費補助金

若手研究（B）

青年期の対人関係におけるヤマアラシ・ジレンマの発達的変化，初年度120万円。

❻・時間割編成委員

❼・愛知教育大学公開講座講師

・豊田市猿投台交流館・家庭教育講座講師

・アカデミック・クエスト講師

・高校での出張講義講師（半田東高校）

・吉良町における道徳教育の授業指導

教育臨床学

岸　　良範　Kishi, Yoshinori	教授	教育臨床学講座	文学修士

❶ 臨床心理学，精神分析的心理療法

❸ 日本心理臨床学会，日本箱庭療法学会（理事），日本精神分析学会，日本児童青年精神医学会，日本学生相談学会

❹ （大学院）臨床心理学研究法，臨床心理学特論Ⅰ，教育臨床実習，特別研究Ⅰ・Ⅱ

（学部）こころからだセミナー

❺・現在の研究テーマ：心理療法におけるパラダイムについての研究

・論文

ファンタジーグループにおける体験の内容とリピーターに現れる変化の縦断的研究（共著），箱庭療法学研究，16巻 1 号，2005

高校教師による高校生のバウムテストの全体印象評定と高校生のパーソナリティ特性との関連（共著），教育実践総合センター紀要第 9 号，2006

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❻・教育臨床学講座代表，教育研究評議会評議員，教務企画委員会委員

❼・学会における活動：
日本箱庭療法学会全国研修会講師
日本箱庭療法学会中部地区研修会講師
日本学校教育相談学会中部地区研修会講師　等

・教育組織における活動：
最高裁家庭裁判所総合研修所講師
三重県教育委員会新任教頭研修会講師
全国連合小学校校長会研究大会研究協力者
東京都，神奈川県における教員研修会講師　等

・公開講座，講演会等：
教育実践総合センター主催教育臨床セミナー講師
愛知県教育センター教員研修会講師　等
日本交流分析協会全国大会基調講演

・学校現場などにおける指導助言（校内事例研究会講師等）：
名古屋市，瀬戸市，三好町，師勝町，西春町，稲沢市等各小中学校における活動
神奈川県平塚市，厚木市，東京都板橋区，杉並区，荒川区，東大和市，東村山市における活動

中川美保子　Nakagawa, Mihoko　　助教授　教育臨床学講座　　教育学修士

❶ 臨床心理学，学校臨床心理学

❷ 第十五回暁烏敏賞（青少年育成部門）受賞（1999．11）
受賞論文「現代子ども事情一新たな援助の視点を探る」

❸ 日本心理臨床学会，日本教育心理学会，日本カウンセリング学会，日本学校教育相談学会（学会誌編集委員），ヘルメス心理療法研究会，コラソン研究会

❹ 生活の指導と相談Ｂ（４年），こころとからだセミナー（３年），臨床心理査定演習Ⅱ（大学院），臨床心理学特論Ⅱ（大学院），臨床心理実習Ⅰ（大学院），臨床心理実習Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

❺・現在の研究テーマ
スクールカウンセリングの専門性について　－関係性の視点から－

スクールカウンセリング活動は，これまでの個人臨床分野の専門性のみで対応できるような簡便なものではなく，学校という場で行われる独自の取り組みであるので，スクールカウンセラーならではの専門性を論じ，構築していかなければならないと考える。私はこれまでの実践や事例研究などから，その専門性へのアプローチの視点として，相談者である子どもたちや保護者のみならず，管理職や教育相談係，担任などその事例に直接的あるいは間接的に関わっている人たちが織りなす「関係性」に注目してきた。つまりSCの専門性とは，固定的で一般的な確立された構造ではなく，さまざまな「関係性」の配置や動きをたえず意識しながら，おこなわれている行為の意味と影響を読み解き，再構成する機能であると考えている。したがって今後ともこの視点からスクールカウンセラー活動について，実践をとおして成果と問題点を探り，スクールカウンセリングの専門性について自らの考えを発表し，研究としてまとめていく方針である。

・業績リスト
［論文：子どもたちの学校不適応問題を考える，教育臨床事例研究14，愛知教育大学教

育実践センター，2005〕
〔論文：海外文献抄録；The use of the ‘corrective emotional experlence’ and the search for the bad object in psychotherapy，精神療法，第32巻第１号，2006〕
〔著書：『私はなぜカウンセラーになったのか』一丸藤太郎著の解説；氏原寛・下山晴彦・東山紘久・山中康裕編『新・カウンセラーのための104冊』，創元社，2005〕
〔著書：「芸術療法・表現療法」「統合失調症・解離性障害・HIV」「創造的退行」の各項目；乾吉佑・氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕編『心理療法ハンドブック』創元社，2006〕
〔口頭発表：スクールカウンセリングの専門性とは－危機介入という視点から－，日本心理臨床学会第24回大会，国立京都国際会館，2005〕

❻　共通科目委員会委員

❼・学内外の企開講座，講演会など
＊日本学校教育相談学会第17回研究大会学会主健シンポジュウムシンポジスト
＊平成17年度愛知教育大学公開講座「教育臨床セミナー」小講演講師
＊豊橋市立八町小学校両親学級講演会講師
＊師勝町スクールサポートネットワーク事業研修会講師
＊三重県教育委員会教育相談担当者支援地域研修会講師
＊幸田町立荻谷小学校生徒指導研修会講師

廣澤　愛子　Hirosawa, Aiko　　講師　　教育臨床学講座　　修士

❶　臨床心理学

❸　日本臨床心理学会，日本箱庭療法学会，日本子ども虐待防止学会

❹　生活の指導と相談Ｂ（４年），こころとからだ（３年）
学校教育臨床専攻に所属する大学院生が担当するケースのスーパービジョン。
（教育についての抱負）
体験実習を適宜授業に取り入れる方針を今後も続けていく予定である。これまでは，臨床心理学的観点から，心理検査や性格検査を主として取り入れてきたが，今回からは，将来教員になる学生も多いので，「発達障害についての理論と実際」，「いじめの現状と対策」「不登校への理解・対応」などを盛り込むことにした。今後もこの方針で進めていきたいと考えている。

❺（研究テーマ）
スケープゴートコンプレックスに関する研究。主として，ユング心理学における「影」について，虐待を受けた人の心理療法をはじめとして，実際の臨床事例に基づいて考察している。
（研究発表）
「トゥレット症候群の思春期女子の面接過程－コラージュを用いて－」箱庭療法学会第19回大会（ワークショップ於），2005年10月。

❻・学生相談員担当
・愛知教育大学教育実践総合センター「心理教育相談室」における臨床活動（ケース担当）

❼　教育臨床セミナー（愛知教育大学教育実践総合センター於），講師

❶　専門分野，関連分野　　❷　受賞歴　　❸　所属学会，協会，研究会など　　❹　教育活動
❺　研究活動　　❻　大学運営　　❼　社会的活動　　❽　その他特記事項

愛知県総合教育センター（学校教育相談中級講座），講師
三吉町立三好小学校校内研修会　講師
岡崎市立竜南中学校校内研修会　講師

教育実践総合センター

生島　博之　Ikushima, Hiroyuki　　教授　　教育実践総合センター　　教育学修士

❶ 臨床心理学
専門分野：心理療法（カウンセリング，箱庭療法，遊戯療法），ユング心理学
関連分野：学校教育臨床，非行臨床，児童福祉臨床（情緒障害児短期治療施設）

❸ 日本心理臨床学会，日本箱庭療法学会（理事）

❹ 生活の指導と相談B（4年），こころとからだセミナー（3年），臨床心理面接Ⅰ（大学院），臨床心理実習Ⅰ（大学院），臨床心理実習Ⅱ（大学院），遊戯療法特論（大学院），特別研究Ⅰ（大学院），特別研究Ⅱ（大学院）

当教育実践総合センターの教育臨床分野の教員の主な仕事は，最近の学校教育現場で多発している様々な問題（いじめ，不登校，非行など）についての研究であり，そのために当センターでは，心理教育相談室を開設し，来談者（児童・生徒及びその保護者）に心理療法を定期的に（毎週1回，各50分）実施してきている。また，当心理教育相談室は，学校教育臨床専攻臨床心理学コースの院生（平成17年度は28名）たちの臨床実習の場にもなっており，教員は院生とペアを組みながら治療活動にあたると同時に個人スーパービィジョンを定期的におこなっている。そして，その経験を深めるために『教育臨床学研究』（心理教育相談室紀要）を年1回発行し，事例研究などの研究論文の作成の指導も行っている。

一方，当心理教育相談室では現場の教師たちの個別相談も行っており，気になる生徒をめぐる学級運営についてのアドバイスも行っている。また，現場の教師たちのために公開講座を通年にわたって行ったり，自主的な研究会（愛知学校教育相談事例研究会，愛知学校カウンセリング研修会，愛知教育大学心理療法研究会など）を夜間に定期的に（月1回）実施し，不定期（年2～3回）の合宿研修も行っている。そして，これらの成果にコメントをつけたものを『教育臨床事例研究』として15号まで発行ずみであり，現場の教師たちに配布し，「現場の実践報告が載っているので参考になる」と喜ばれている。

なお，平成17年度も，愛知県教育委員会から4名の内地留学生（高校教員）を受け入れ，学校教育臨床専攻等の協力を得て，教育相談などに関する大学院レベルの教育を実施した。

❺ 研究活動としては，最近の教育現場で問題となっているテーマを取り上げ，『学級崩壊』と『キレる子ども』や『ADHDの子ども』，不登校の児童・生徒たちを対象とする『適応指導教室』の効果的な在り方，『学校での子どもの虐待の発見と対応』，『学校における危機対応』等を分析し，その実践事例にコメントをつけたものを中心として，『教育臨床事例研究』14号，15号を発行した。（以下はその一部）

コメント：

『ふしぎなかぎばあさん』からの贈り物とメッセージ（林せつ子論文：母子で保健室登校した小学4年生女児への支援）教育臨床事例研究14号2005年9月50-53

『ハタキ』おとす娘と『新築』を希望する母親へのかかわり（市川　緑論文：「阿修羅」

のような母親に育てられた中 2 女子事例）教育臨床事例研究14号2005年 9 月79-80
『登校させるのを拒否します』と言う母親への対応（河辺順子論文：かかわりが困難な母親との 6 年間の記録）教育臨床事例研究15号2006年 3 月36-39
『アリ地獄』『水地獄』からはい上がる『ワラジムシ』（山岡美和論文：落ち着きがない A男への公立相談室からの支援）教育臨床事例研究15号2006年 3 月93-95
論文：
最近の少年犯罪に関する教育臨床的研究　教育実践総合センター紀要 9 号2006年 3 月 259-267
教育という場における＜裏切り＞の考察　－担任として関わった事例を通して－（田畑恵と共著）　教育実践総合センター紀要 9 号2006年 3 月269-278

❻ 心理教育相談室教員スタッフ（1998～2005年度），教育実践総合センター委員会委員（1998～2005年度），セクシャルハラスメント防止対策委員会委員（2002～2005年度），大学・附属学校共同研究会いじめ・不登校・学級崩壊分科会代表（2003～2005年度），教育研究評議会委員（2005年度），教務企画委員会委員（2005年度），教育科学系評議員（2005年度），合気道部顧問・師範代（1998～2005年度）

❼ 愛知県教育委員会（総合教育センター）教育臨床研修講師（1998～2005年度）
名古屋市教育委員会（教育センター）教育臨床研修講師（1998～2005年度）
安城市・子ども理解のための事例研究会スーパーバイザー（1998～2005年度）
名古屋「いのちの電話」訓練委員（1998～2005年度）
西尾市いじめ・不登校・問題行動対策協議会委員（2003～2005年度）
豊田市・相談ネットワーク会議スーパーバイザー（2004～2005年度）
西三東地区高等学校教育相談部会講師（2004～2005年度）
豊明市教育委員会・初任者研修講師・箱庭療法の理論と実習（2004～2005年度）
蒲郡市教育委員会・カウンセリング講座講師（2005年度）
知立市教育委員会・校長研修講師（2005年度）
安城市教育委員会・家庭教育講演会講師（2005年度）

＜公開講座＞
学校教育臨床－事例研究A－（ 9 回27時間，参加者10名：豊川市勤労会館）
学校教育臨床－事例研究B－（ 9 回27時間，参加者14名：碧南市立中央公民館）
教育臨床セミナー（ 3 日間集中17時間，参加者24名）
箱庭づくり体験（ 2 回 9 時間，参加者30名）

＜学校現場などにおける指導助言＞
豊明市不登校対策学習会講師，豊田市小渡小学校現職研修講師，新城市千郷中学校現職研修講師，名古屋市立江西小学校現職研修講師，西三北地区高等学校教育相談部会講師，ほか

❽ 附属岡崎中学校及び名古屋中学校でのスクールカウンセリング
平成14年度より附属岡崎中学校からの要請で，スクールカウンセリングを実施してきている。（この内容については，正村理代子：スクールカウンセラーを生かした健康相談活動をめざして　教育実践総合センター紀要 8 号287-294を参照のこと）そして，平成17年度からは附属名古屋中学校でも実施することになった。平成17年度の実施回数は両中学校を合計すると39回で207時間である。それ故，先述した一般相談，教師の教育

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

相談，院生への個人スーパービィジョンに要した時間数474時間をプラスすると総時間数は681時間になり，コマ数（1.5時間×15回）に換算すると30.3コマになる。そのため，学部および大学院の授業をプラスすると39.6コマ担当したことになる。

川北　稔　Kawakita, Minoru　講師　教育実践総合センター　社会学修士

❶ 専門分野

教育社会学（発達支援），社会問題の社会学

❸ 所属学会

日本社会学会，日本教育社会学会，日本社会病理学会，日本犯罪社会学会，関東社会学会，社会学研究会（『ソシオロジ』同人会）

❹ 平和と人権　入門（１年）

❺ 現在の研究テーマ

不登校・引きこもりなどの教育問題に，社会学の立場からアプローチする調査研究を行っている。研究内容は，以下のように分かれる。(1) マクロな視点からみた社会問題の定義や専門家言説に関する研究，(2) NPOや自助グループを通じた当事者のサポートに関する研究，(3) 個人や家族の回復過程に関する医療社会学的研究。

また，不登校・引きこもりに関する地域でのフィールドワークを，当事者のサポートに資する形で還元する活動を継続している（地域支援ガイドマップの製作，NPO法人におけるセミナーの司会など)。

論文

「家族会への参加と引きこもりの改善――民間支援機関における質問紙調査から」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第９号，pp.227-236。

「水俣病認定申請者調査①　なぜ今，大量の水俣病認定申請者なのか？」『公衆衛生』第70巻第２号，pp.124-127。（共著）

「水俣病認定申請者調査②　水俣病認定申請者の居住歴と健康状態」『公衆衛生』第70巻第３号，pp.211-214。（共著）

報告書論文　「不登校を演じることへの葛藤と共感――刈谷東高校による演劇『Making of 「赤い日々の記憶」』について」『SOBA活動報告書　第３号』愛知教育大学教育実践総合センター。

科学研究費補助金などの受領状況

(1) 平成17年度科学研究費補助金　若手研究（B）　「引きこもり・ニートに対する家族会を主体とした社会参加支援策の研究」（研究代表者）

(2) 平成17年度科学研究費補助金　基盤研究（A）　「メチル水銀汚染による生活障害とその回復・支援策に関する総合的研究」（研究分担者）

❻ 教育実践総合センター委員会委員

❼ 愛知教育大学SOBA（いじめ・不登校に関する通信相談と学習会）

日本福祉大学心理臨床研究センター・NPO法人なでしこの会　「第１回ひきこもり問題研究会」での報告とコーディネート（2005年８月27日）

愛知県立大学　公開シンポジウム「『社会的ひきこもり』を問い直すⅢ」シンポジスト（2005年10月16日）

障害児治療教育センター

神野　秀雄　Jinno, Hideo　　教授　障害児治療教育センター　教育学博士

❶ 心理学
専門分野：障害児心理学
関連分野：臨床心理学

❸ 日本特殊教育学会，日本心理臨床学会

❹ 知的障害児研究法Ⅱ（３年），障害児治療教育学特論Ⅰ（大学院），障害児治療教育学演習Ⅰ（大学院），治療教育学　演習Ⅰ・Ⅱ（殊教育特別専攻科，肢体，情緒），情緒障害児教育概論（情緒）

実践的教育力を身につけるためには，臨床実習が欠かせない。本学には障害児治療教育センターが設置されており，知的障害，自閉症，学習障害等の子ども達が継続的に多数来所している。臨床教育実習を希望する学生や院生は，教員の指導のもと障害児の治療教育を長期にわたって担当し，子どもたちの変化・発達をvividに体験することができる。このような経験をふまえ，学生達は障害のある子どもの何を育て，何を教えることが重要かを体験的に学習するのである。このように本センターは学生，院生の臨床実習の場として有効に機能しており，精力的に学生の指導にあたってきている。

❺ （１）自閉症スペクトラム障害の再整理の試み
（２）軽度発達障害児（LD，ADHD，HFA／Asp）の治療教育

近年，自閉症を中核とした広汎性発達障害を自閉症スペクトラム障害（ASD）と呼ぶようになった。ASDには，知的に重度な自閉症から大学を卒業したアスペルガー障害まで，実に多様な自閉性障害を含んでおり，ASDを整理することの必要性を感じ，サブグループ化の研究をすすめてきている。

１．『クイズサークル』を主宰した成人高機能自閉症の事例―妄想，強迫，悩むこと―
治療教育学研究，第26輯，2006.

２．５歳吃音男児の遊戯療法過程　―「偽りの自分」から「本当の自分」へ―
治療教育学研究，第26輯，2006.（伊藤由美と共著）

（３）平成17年度より筆者は附属幼稚園長に就任した。附属幼稚園では，「幼児の充実感」について研究しており，筆者も研究に参加している。

❻ 附属幼稚園長。

❼ 国立大学障害児教育関連施設・センター連絡協議会会長，名古屋市障害児保育指導委員会委員，名古屋市就学指導委員会委員，愛知県特別支援教育連携協議会委員，尾張地区特別支援教育連携協議会委員。
障害児治療教育センター公開講座講師，盲・聾・養護学校10年経験者研修講師（愛知県総合教育センター），師勝町教育相談研修会（師勝町民総合体育館），尾張旭市就学相談研修会講師（尾張旭市市民会館），一宮市特別支援教育巡回指導員。

吉岡　恒生　Yoshioka, Tsuneo　　助教授　障害児治療教育センター　教育学修士

❶ 心理学

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

専門分野：臨床心理学

関連分野：障害児心理学，障害児臨床教育学，発達心理学

❸ 日本心理臨床学会，日本臨床心理士会，日本教育心理学会，日本精神分析学会，日本箱庭療法学会，愛知県臨床心理士会，愛知教育大学心理臨床の集い

❹ 障害児心理概論（１年），知的障害児指導法（３年），知的障害児研究法Ⅱ（３年），障害児臨床教育学演習Ⅰ（大学院），Ⅱ（大学院）

１年生の概論では，障害児に接する際の基本的な心構えを，論文の購読，ビデオ視聴も交えて講義した。ほぼ毎回，論文，ビデオの感想レポートを提出させ，教室外の学習による単位の実質化に努めた。学生のレポートを教材にしたり，障害児・者福祉に携わるNPO法人代表を講師として招くなど，対話的・実践的授業の構築を目指した。「指導法」では，知的障害をめぐる様々なトピックを含む教科書を使い，毎回の学生レポートをもとにディスカッションをするなど，学生の主体的参加を促した。大学院の授業では，昼間では，演習Ⅰ，Ⅱともに特別支援教育に関連する書籍を教科書に，ディスカッションを交えて学んだ。夜間はは養護学校教員との一対一のセッションであったので，学校をめぐる話題等について議論しつつ授業を進めた。

❺ 自閉症児を始めとする障害児の治療教育。とりわけ最早期の発達障害児の母子援助と障害児とその家族への長期的視野にたった援助をテーマとする。

論文：言葉の遅れを主訴とする広汎性発達障害児への母子発達支援　－子どもの発達と母親の気持ちの変化を追って－，治療教育学研究第26輯（愛知教育大学障害児治療教育センター）2006，早期療育としての自閉症児への音楽療法　－対人関係性の発達論的視点から－（樋口玲子と共著），治療教育学研究第26輯（愛知教育大学障害児治療教育センター）2006

論文コメント：遊戯的からかいについて　教育臨床事例研究15（愛知教育大学教育実践総合センター）2006

❻ 障害児治療教育センター長，高大連携特別選抜入試コーディネーター

❼ 岡崎市就学指導委員会委員，蒲郡市就学指導委員会委員，豊田市就学相談会相談員，西三河地区特別支援教育連携協議会委員，西三河地区特別支援教育体制推進事業専門家チーム（日高小，二本木小，東刈谷小，知立東小，小豆坂小，吉浜小，岡崎南中に巡回訪問指導），岡崎市特別支援教育連携協議会委員長，愛知県総合教育センター就学相談心理判定員，刈谷市「しげはら園」療育相談員

2005年７月　西三河地区特別支援教育体制推進事業専門家チーム研修会講師

2005年８月　平成17年度　盲・聾・養護学校10年経験者研修講師（愛知県総合教育センター）

2005年８月　愛知県教育委員会　認定講習

2005年11月　愛知教育大学附属養護学校　第38回特殊教育研究協議会　分科会助言者

2006年１月　愛知県総合教育センター　就学相談講座　助言者

2006年１月　愛知教育大学附属養護学校　講演「軽度発達障害について」

2006年２月　刈谷市立富士松北小学校　講演「軽度発達障害児への理解と対応」

2006年２月　三好町立天王小学校　講演「軽度発達障害児への指導のあり方」

国語教育

横山　信幸　Yokoyama, Nobuyuki　　教授　　国語教育講座　　文学修士

❶ 国語科教育学，専門分野：文学教育，関連分野：日本近現代文学，児童文学

❸ 全国大学国語教育学会，日本教科教育学会，日本近代文学会，日本文学協会，日本社会文学会など

❹ 国文学演習ＧⅠ（３年生），日本文学講義Ｂ（３年生），国語科教育ＣⅢ（３年生），国語科教育ＣⅠ（２年生），国文学演習ＡⅠ（１年生），国語科教育特論Ⅰ，Ⅱ（大学院）

ア．学部の教育活動：国文学演習では，先行研究の調査と作品解読とのバランスを図り，学生が自己の力で新たな作品解釈ができるように配慮した。

　日本文学講義は，抽象的な理論や知識の伝達に終わらないように，毎回新たな作品を取り上げ，分析の方法を提示しながら具体的な解釈を示していった。

　国語科教育については，実践面・理論面と歴史的な観点から国語科教育の課題を取り上げ講じてきた。

イ．大学院の教育活動：国語及び国語科の成立と国語科教育の目的について論じた。

　学生が現在の国語科教育全体を対象化して考えることができるように計らった。

ウ．教育活動の問題点：学生の理解力を図りながら行う丁寧な授業と，受講学生の数とは関連する。50名を大きく越える講義では，学生一人一人に対して注意を行き届かせることは難しくなる。

エ．授業改善の試み：最近の学生は，授業の内容に刺激されて自らの思考を深めることよりも，授業で得た情報を知識として覚えようとする態度が強い。深く考えることの面白さを分からせるためには，具体的なものから出発して論理を踏み，新しい見解に到達する，という授業がよい。

オ．抱負：すべての学生が，自分自身の言語観と教育観を確立できるような教育を行うこと。

❺ 現在の研究テーマは，近代小説の読み方と物語の読み方及び学校教育における文学教育の目的とその方法との関係について明らかにすることである。

１．「読解力の定価は「希望」の低下である」『明日の国語』７号，明日の国語を考える会，2006年１月

２．「了解不能の《他者》とは何か－子どもたちの現在と近代小説を読むということ－」『国語国文学報』第64集，愛知教育大学国語国文学研究室，2006年３月

ア．研究活動の問題点：PISAの調査結果と戦後の国語科教育における「読解力」の扱い方の問題点について考察した。そこには，本質的な対応を行わないまま，時流に迎合していく教育活動の問題点がある。また，研究者の研究活動と現場における実践との間に，大きな隔たりがある場合がある。教科教育の研究は，理論的なものと実践的なものとが結合しなければ，有効な研究とはならないが，教育現場を貫くものは別の論理であることが多い。

イ．今後の研究計画：国語科教育が今後この社会で果たすべき役割を，国家のあり方，社会の変化，学校のあり方，児童生徒の抱える問題，言語の働き等の観点から，総合的に考え直す必要がある。

❻ 国立大学法人愛知教育大学理事（学生支援担当）・副学長（2004年４月～2005年４月）
❼ 講演「南吉のかかえこんだもの－近代児童文学とはなにか－」企画展記念講演会　安城歴史民俗資料館2005年７月
講演「ほのか小学校の教育研究と子どもたちに必要な「ことばの力」について」教員研修，名古屋市立ほのか小学校，2006年１月
他に教育研究集会の助言者，共同研究者をつとめた。

塘　　耕次　Tsutsumi, Koji　　教授　　国語教育講座　　修士（文学）

❶ 中国哲学，中国書画論
❸ 日本中国学会，書論研究会，阪神中哲談話会
❹ 漢字文化論Ⅰ（２年），漢字文化論Ⅱ（２年），中国生活文化論（３年）
書論・書道史特論（大学院）
❺ 中国古代の哲学，文人の生活
『中国学問芸術史』改訂版（三恵社。2005年９月９日）発行
『易講義初級の初』改訂版（崑崙書房。2005年９月７日）発行
❻ 時間割編成委員

安藤　重和　Ando, Shigekazu　　教授　　国語教育講座　　文学修士

❶ 専門分野：平安朝文学
関連分野：古代暦学
❸ 中古文学会　名古屋平安文学研究会
❹ 共通科目（１年），日本書誌学演習１（２年），国語科教育Ａ（３年），日本文学史概説（３年），日本言語文化演習２（３年），日本文学研究（３年），日本文化論演習１（４年），日本文化論演習２（４年），国文学演習Ｅ（４年），中古文学演習１（大学院），中古文学演習２（大学院）
「論」とは，必ず「根拠」を先に示してその後にその「根拠」に相即した「結論」を確定するものである，と思う。「結論」を最初に示す物言いは，「論」とは異質であろう。そのことを体得させることを目指して，授業を展開するように心がけている。具体的手法としては，「云々だから」という言い方を推奨し，「何故ならば」という言い方を禁じるなどの工夫をしている。
❺ 古今集が延喜五年（905）に奏覧されたという学説が現在学会を風靡して居り，2005年を古今集完成1100年として種々の記念出版まで実施されたが，古今集の真名序・仮名序に出てくる「延喜五年」という年をどう見るかという十二世紀以来継続している論争に決着が付いたと考えるのは尚早と思う。難問であり，壁に突き当たりながら考察を続けている。
❻ 学長選考会議，学長選考等管理委員会，教育研究評議会，教員人事委員会

風岡　正明　Kazaoka, Masaaki　　教授　　国語教育講座　　教育学士

❶ 書道，国語教育（書写）
❷ 内閣総理大臣賞　　作品「陳子昂詩」　第一回東京書作展（1979，12）
〃　　作品「陸游詩」　第二回東京書作展（1980，12）

❸ 全国大学書道学会　書写書道教育学会（監査），教大協全国書道部門会（地方幹事）

❹ 共通科目（２年），書道演習Ａ（１年），書道演習Ｂ（２年），書道演習Ｄ（３年），書道演習Ｇ（３年），書道演習Ｊ（４年），書道史（３年），国語科研究ＢⅠ（２年），総合演習Ⅰ（３年），作品研究Ａ（３年），作品研究Ｂ（４年），書道教育特論Ⅰ（大学院），書道教育演習Ⅰ（大学院），特別研究Ⅰ（大学院）

卒業論文，卒業制作の指導に関しては特に時間を設定して行っているが，卒業制作については十分な時間と場所が確保できないことが課題となっている。

・課外活動の書道クラブの顧問として，主に展覧会（年３回）作品の指導に当たっている。書道専攻の学生と合同で行う「卒展」でその成果を示した。

❺ 北魏時代の楷書法を一層極めると共に，それに木簡の書法を加味して独自な書法の開発に努めている。

作品：「蟷螂搏蝉」第52回東海書道芸術院　2005.4
「老蚕作繭」第22回産経国際書展　2005.7
「面壁九年」第20回産経国際書会代表展　2006.1　他９点

❻ 入試委員

❼・愛知県伝統文化を尊重する教育推進協議会講師
・稲沢市教育研究会書写部会指導助言
・名古屋書写研究会　講演会講師
・三好町書写実技講習会講師

❽・小牧市美術展　書道の部　審査員
・第57回赤い羽根協賛児童生徒作品コンクール（書写の部）　審査員

今井正之助　Imai, Shonosuke　　教授　　国語教育講座　　博士（文学）

❶ 文学
専門分野：日本古典文学
関連分野：日本古典書誌学

❸ 日本文学協会，中世文学会，軍記・語り物研究会

❹ 日本書誌学概説（２年），日本言語文化演習演習Ⅰ（３年），日本文学演習Ⅱ（３年），国語科研究ＡⅠ（３年），国文学講義C（３年），国文学演習ＧⅠ・Ⅱ（３年），日本書誌学研究（４年），日本文化論演習Ⅰ・Ⅱ（４年），中世文学演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

授業の目的と受講学生の関心を勘案し，必須の知識と調査・研究能力が身に付くように努めている。国語教室以外の学生を対象とする国語科研究では，最初に大野晋『日本語練習帳』等を用い，言語感覚の問題から始め，言語表現としての文学作品読解の要点に及び，自力で教材研究できる基礎力の習得を意図している。また，書誌学という，学生にとってなじみの薄い分野の授業の場合，次の点を心がけている。１．テキストの他に，必要に応じて項目ごとに内容をまとめたプリントを用意する。２．日本の近世以前を対象とするが，東洋（中国・朝鮮），西洋の動向との関連に注意する。３．「物としての図書」を基本的な対象とする学問であることから，できるかぎり実物若しくは図版などを提示する。４．講義科目であるが，前項との関係からも，実習的要素を取り入れる。

❺ (1) 軍記物語の表現と構成：軍記物語の特性を日付構成及び合戦叙述の両面から把握す

る。
(2) 太平記評判書の生成と展開：『太平記秘伝理尽鈔』を中心とする太平記評判書の生成及び特質の解明。

論文：

「『塵塚物語』考―『吉野拾遺』との関係―」［愛教大研究報告55，2006.3］

「『天文雑説』『塵塚物語』と『理尽鈔』」［日本文化論叢14，2006.3］

❻ 高大連携入試コーディネーター（国語教育講座）

高瀬　正一　Takase, Shoichi　　教授　　国語教育講座　　文学修士

❶ 国語学，国語学史・国語史

❸ 日本語学会，鈴屋学会，訓点語学会，全国大学国語国文学会

❹ 国語学概説Ⅰ（2年），国語学概説Ⅱ（2年），国語学演習ＡⅠ（2年），国語学演習ＡⅡ（3年），国語学演習ＣⅠ（3年），国語学演習ＤⅠ（3年），国語学講義ＢⅡ（3年），国語学演習ＣⅡ（4年），共通科目（3年），国語学演習ＤⅡ（4年），総合演習Ⅱ（4年），国語学演習Ⅰ（大学院），国語学演習Ⅱ（大学院）

専門に対する興味が希薄な学生もみうけられ，レベルが低下している。教員採用試験でも，以前に比べれば合格率が下がっている。初等における国語・社会の振り分けで，不本意な選択を強いられたことが原因の一つと思われる。系を廃止し当初から国語を専攻するという旧来の制度に戻すべきであると思っていたが，06年より，国語専攻として入学できるようになった。良い改革であり，レベルも併せて向上することを期待したい。

❺ 擬古文における語法研究

『玉勝間』における「つ」と「ぬ」について―上接動詞との関連―

（国語国文学報　第64集　2006年）

❻ 国語教育講座代表，財務委員会委員，附属図書館委員会委員，教職大学院設置構想検討専門委員会委員

❼ 愛知県立名古屋西高校において，愛知教育大学の紹介並びに模擬授業を行う。

中田　敏夫　Nakada, Toshio　　教授　　国語教育講座　　文学修士

❶ 国語学　国語教育学

❸ 日本語学会，日本台湾学会ほか

❹ 総合演習Ⅰ（3年），日本言語文化概説（3年），国語学演習ＤⅠ・Ⅱ（3年・4年），日本文化論演習Ⅰ・Ⅱ（4年），国語学基礎演習（3年），国語学演習Ｂ（3年），国語学演習Ⅰ・Ⅱ（2年・3年），国語科教育特論Ⅲ・Ⅳ（大学院）

・教育活動の問題点：総合演習Ⅰ・Ⅱのように，現場の小学校に学生を派遣しての実践的な授業をおこなっているが，いろんな意味で負担が大きい。

❺・現在の研究テーマ：戦前植民地における国語教科書の研究（国語学・国語教育史学的な観点より）

・業績リスト：「国定読本第1期語彙一覧（名詞を除く自立語）」（『愛知教育大学国語研究』14号2006.3），「故折井英治氏蔵台湾統治初期言語資料『軍隊憲兵用台湾語』『台湾語』」（『愛知教育大学国語国文学報』64集2006.3）

・科学研究費補助金：基盤研究（C）「台湾総督府学務部及び警務関係者編纂初期日本語資料の基礎的研究」（代表），基盤研究A（海外）「台湾人の口述歴史の採集資料に基づく

日本統治から戦後への台湾社会の転換に関する研究」（分担者），基盤研究（C）「静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究」（分担者），基盤研究（C）「植民地および内地編纂国語読本の国語学的研究」（分担者），基盤研究（B）「地域の国際化による日系南米人増加の実態を踏まえた教員養成システム導入のための研究」（分担者）

❻ 大学改革推進委員会委員

❼ 岡崎市教育研究大会助言者

山本　敏雄　Yamamoto, Toshio　　教授　　国語教育講座　　文学修士

❶ 中国古典文学，唐代文化史

❸ 日本中国学会，東方学会，日本道教学会，全国漢文教育学会

❹ 国際社会と日本（２年），中国言語文化概説（２年），中国言語文化演習（２年），中国文化史A（２年），中国文化史B（３年），中国文学史A（３年），中国文学演習A（３年），中国文学研究B（４年），アジア文化論演習Ⅰ（４年），アジア文化論演習Ⅱ（４年），漢文学特論Ⅲ（大学院）

現代漢語と文言文の理解力を高め，基本的な知識を習得した上で，多くの文献を通して幅広く中国文化に触れることを目標としている。今年度は，中国の喫茶の歴史に関する授業（中国文化史A）で，実際に茶を淹れて受講学生に飲んでもらったり，「国際社会と日本」では中国の民族楽器をいくつか実際に見せて説明するなど，文献資料のみに偏らないよう配慮しつつ講義を行った。

教育課程の改編後五年経ったが，以前に比較して現代漢語・文言文の理解力の低下がみられ，今後は専門の授業の講義方法をより工夫する必要があると考えている。

❺・現在の研究テーマ：

「唐詩と音楽文化」：唐代に隆盛をみた「琵琶」という楽器が唐詩の中でどのように詠われているかを，白居易を中心に分析し，詩とその背景にある音楽文化との関連を中心に研究を進めている。

❻ 大学院入試部会委員

佐藤　　豊　Satou, Yutaka　　教授　　国語教育講座　　文学修士

❶ 専門分野：中国近代思想史
関連分野：中国哲学

❸ 中国学会，中国社会文化学会，東方学会

❹ 共通科目（国際社会と日本）（２年），中国事情（２年），中国政治社会思想概説（２年）中国政治社会思想特論（３年）アジア関係史概説（３年）中国政治社会思想演習（３年）アジア関係史演習（３年）総合演習Ⅰ（３年）

私の専門は中国近代思想史であるが，授業は「国際理解教育課程」所属の学生が持つべき教養という観点で行っている。私の教育上の役割は日本東アジア履修モデルにおいて，日本と東アジア関係での国際理解上の問題点の所在を自覚し，国際理解に寄与しうる人材の育成にあると考える。従って，「アジア関係史概説」においては，日本の植民地に関する歴史を講述し，「アジア関係史演習」においては，日本人と接触した中国人

の日本観を中国語の原文を通じて理解する授業を行い，日本を相対化できる視点の涵養に努めた。また中国問題はとかく大陸との関係のみで論じられる嫌いがあるが，台湾人の目から見るとき日本と中国がどのように見えるのかという視点を導入することは是非必要な問題である。従って，台湾人の視点に立って近現代史を見るという授業を「中国事情」で展開した。「総合演習Ⅰ」では国際理解教育課程を卒業して，学校教育に従事しようとする学生に，国際理解に関する授業を展開するとき，必ず問題となる民族概念を把握することに力を注いだ。そして日本の民族問題である「在日」の問題を考えながら，世界の民族問題への視点を涵養する授業を行った。

❺ 現在の研究テーマは，近代中国における西洋功利主義の受容における諸問題の研究である。05年度は，科学研究費で認められた基盤研究Ｃの「梁啓超の功利主義思想と章炳麟の反功利主義思想における日本的契機の比較考察」（代表：小林武，佐藤は分担者）の１年目に当たり，梁啓超が明治日本において参照したであろう図書を読解することに終始した。近代中国の西洋思想の受容には日本経由による日本的契機を無視することは出来ない。日本から西洋的な価値を移入して思想史的なインパクトを与えた代表的人物が梁啓超である。彼が参照した人物としては，福沢諭吉，加藤弘之がいることはよく知られたことであるが，梁啓超は人物に影響を受けたと言うより時代思潮に影響を受けたという言い方が正確である。その思潮がどのように梁啓超に影響を与えたのかはまだ研究途上であるといえる。

❻ 履修モデル代表として，学芸課程の新コースカリキュラム作成ワーキングのメンバーとして，取りまとめ作成に関わった。

佐藤　洋一　Sato, Yoichi　　教授　　国語教育講座　　教育学士

❶ 国語科教育学，日本近現代文学論

国語科授業研究論・評価方法論，言語技術教育論，国語科から展開するメディア・リテラシー教育論。近現代詩の文体論，戦後小説の描写論，現代文学批評理論など。

❸ 日本言語技術教育学会（常任理事，事務局長），同学会・名古屋支部代表。日本国語教育学会（理事），日本教育技術学会（幹事），愛知県三河教育研究会（国語部常任講師），全国大学国語教育学会，日本近代文学会，国文学・言語と文芸の会など

❹ア．担当授業科目

学部：国語科教育ＣⅠ・ＣⅢ・ＣⅣ，日本文学講義Ｃ，国文学演習ＧⅡ，総合演習Ⅱ，国文学演習ＡⅠ・Ⅱ，国語科研究ＢⅡ，共通科目入門など。

大学院：国語科教育特論・演習，国語科授業研究，格別研究（修士論文指導）。

イ．実践的な授業，評価研究の重視。学生・院生による国語科学習指導案づくりと検討や模擬授業と討論等の活動を，本学着任以来18年間実施している。

ウ．国語科到達目標（評価基準）論と21世紀型の授業力育成。「教科専門」を生かし学校教育の基盤となる国語科学力としてのメディア・リテラシー教育，情報リテラシー教育，コミュニケーション能力の育成に配慮した授業構成。

エ．卒業論文作成（毎年８～９名），修士論文作成（大学院生，毎年３～６名）のための講義や演習，定期的な研究発表会と討議等を実施。段階的に，現代の教育課題に対応する専門的な力量と表現技術，リテラシーやコミュニケーション能力を育成。

❺ア．現在の研究テーマ－21世紀型の国語科「授業力」「評価」論の解明－

「到達目標（評価基準）」を明確にした実践的授業方法論・評価論。基礎学力から発展学習までを明確にした系統的なカリキュラム論（学習過程論）。学習モデル／教材開

発論（小学校から高校モデル）。近現代詩，小説の言語技術教育論など。

イ．主な研究業績（2005. 3～2006. 3）

著書『中学校国語　選択教科としての扱いのヒント』（光村図書　2006，２）

論文「現代小説における『国語科学習・評価システムの開発ー村上春樹『七番目の男（高３）の授業モデルを例に－」『愛知教育大学研究報告（紀要）第55輯』（2006，３　常原拓氏と共著）。

論文「ファンタジー（物語）の「読み方」の基礎・基本から発信へ－到達目標（評価基準）を明確にした授業・評価開発－」（『愛知教育大学実践総合センター紀要　第９号』（2006，３　松木尚美氏と共著）。

論文「中学校国語科における学力保障と『人間佐・社会性の育成』（『愛知教育大学実践総合センター紀要　第９号』（2006，３　兵藤伸彦氏と共著），その他。

論文「国語科における習熟度・少人数学習の開発」『愛知教育大学実践総合センター「スコープ　No. 9 」』（2006，３）。その他。

ウ．全国的規模学会の運営・企画など

日本言語技術教育学会の事務局長として全国大会の企画・運営・学会誌の発行，「事務局通信」の作成と発送や名簿管理，理事会の企画や召集等。日本国語教育学会の愛知県理事として毎年発表者を推薦・指導し，大会では助言者をつとめる。

❻　大学院専攻代表，大学・附属連携運営「国語教育」分科会代表など。

❼ア．文部科学省一愛知県教育委員会関連一

文科省「国語力向上」「授業名人」モデル事業などの指定校の指導・助言。

イ．各県市の教育センター講師，文部科学省指定研究校などへの助言・指導。

広島県，福井県，岡山県，三重県，新潟市，石川県小松市などの各小中高校。

ウ．愛知県内の授業研究会，講演講師など。

愛知国語研究会・岡崎市国語科主任研修会・岡崎市さわらびの会（国語科）・渥美国語研究会・海部国語研究会・小牧市国語研究会・東海市・瀬戸市・尾張旭市・豊田市などでの講演や実践的な提言。岡崎市竜美丘小・北野小・井田小学校，刈谷市住吉小・東刈谷小学校，宝飯郡御津南部小，三好町南部小，小牧市光ヶ丘小・小牧原小，豊田市東山小，尾張旭市瑞鳳小学校などの授業・評価研究に関わる。

エ．本学附属学校の国語科研究への助言・指導（名古屋小，岡崎小，岡崎中，高校）。

有働　裕　Udou, Yutaka　　教授　国語教育講座　教育学修士

❶　国語科教育学，日本近世文学

❸　日本文学協会，全国大学国語教育学会，日本近世文学会

❹　専門教育入門A（１年），専門教育入門B（１年），国語科教育A（１年），共通科目平和と人権入門（１年），国文学講義BⅡ（２年），国文学演習BⅠ（２年），国文学演習BⅡ（２年），国文学史概説（２年），共通科目平和と人権セミナー（２年），国文学演習BⅢ（３年），国文学演習GⅠ（３年），課題研究B（４年），国語科教育演習Ⅶ・Ⅷ（大学院）

学生の国語国文学に関する基本的知識の欠如，各種の言語能力とりわけ表現力の不足にどのように対応するかが，教育活動上の大きな問題点である。教育に関する抱負としては，専門領域の内容を重視しつつ演習や論文作成を通しての言語技術育成をめざして

いる。

❺・現在の研究テーマ：

「戦後教育出発期における古典教育」資料収集とその整理とを中心に行う。

「『本朝二十不孝』の研究」研究史の整理を行いつつ，作品論を執筆する。

・業績リスト　論文：

「『本朝二十不孝』研究史ノート（3）」『国語国文学報』63集2006年

❻ 国語教育講座副代表

❼ 岡崎市教育研究大会助言者（2005年9月）

高橋みつる　Takahashi, Mitsuru　　助教授　国語教育講座　　文学修士

❶ 中国近現代文学

❸ 日本中国学会，日本中国語学会，中国文芸研究会

❹ 中国語学演習Ⅰ・Ⅱ（2年），国語科研究B（2年），中国文学特論（3年），中国文学史B（3年），中国映像文化論Ⅰ・Ⅱ（3年），アジア文化論Ⅰ・Ⅱ（4年），中国文化特論（大学院）

主に，現代中国文学と中国語・中国映画に関する授業を担当している。「中国文学特論」「中国文学史B」では，学生たちが抱いている中国社会の現状や風俗・文化に対する漠然とした知識や関心を，より深く確実なものとするために，教材として，現代中国の社会事情と課題を反映した最新の小説を扱っている。短編でも半年の授業期間では読み終えることができないため，文学作品として深く読み味わう段階までいかないのが問題である。「中国映像文化論」は，中国を専門の研究対象としない学生が多く履修しているので，映画の背景となる歴史や社会をわかりやすく説明することに努めている。授業を通して，中国映画に初めて触れた学生には新鮮な感動と基礎的知識を，中国映画に関心のある学生には，テーマを定めて系統的に作品を取り上げることによって，作品分析や中国社会理解の方法を提示できていると思っている。

上記の授業は，学生たちの中国に対する関心を高めることが一つの目的であるが，動機づけと同時に重要なのは，やはり，中国語の学力である。語学力は，中国文化研究の基礎を為すものであり，卒業研究に不可欠である中国語文献の読解力は，現代中国語の文章を精読・多読する，という地道な努力の積み重ねによって習得する以外に方法はない。そこで，2年では発音と文法の定着を，3年では難易度の高い現代小説に取り組むことによって，語彙の増加と文脈の中で文意を読み取る力を養うよう，授業展開を図っている。

❺・現在の研究テーマは，郁達夫の伝記論的研究である。とりわけ，正妻と第二夫人王映霞との関係を通して，近代への過渡期に生きた知識人や女性の苦悩や葛藤を考えていきたいと思っている。

・論文

「郁達夫と孫荃・王映霞―家・家族・愛の視点から―（上）」（『愛知教育大学研究報告』第55輯，2006年）

❻ セクシュアル・ハラスメント防止等対策委員会委員

就職支援委員

木村　博昭　Kimura, Hiroaki　　助教授　国語教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：書道
関連分野：書論，書道史，書写書道教育

❸ 全国大学書写書道教育学会，日本教育大学協会書道教育部門会

❹ 書道演習Ａ（１年），書道演習Ｃ（２年），国語科研究ＡⅠ（２年），共通科目〈日本の社会と表現文化〉展開２（2年），書道演習Ｄ（３年），書道演習Ｅ（３年），書道演習Ｆ（３年），篆刻研究（３年），書式研究Ａ（３年），書式研究Ｂ（４年），総合演習Ⅱ（４年），書道教育演習Ⅲ（大学院），書道教育演習Ⅳ（大学院）

学生の実技力が落ちている。過去書道科があった頃に比べるとかなりの差を感じる。優秀な学生を入学段階で少しでも採りたい。そのための実技入試の復活に期待したい。最近，課題の量が増えて，学生に負担を強いている気がする。学生の自主性を期待するが，なかなかうまくいかない。

❺ 現在の研究テーマ：

（1）木簡の書風に基づいた作品制作，（2）中国宋代の書論における用筆論に関する研究，（3）書写書道教育の理論的研究，である。

・作品：

顧圖河詩	第52回東海書道芸術院展	愛知県美術館	2005, 4
余京詩	第22回産経国際書展	池袋サンシャイン文化会館	2005, 7
善淵	2005「今日の書」代表作家展	丸栄画廊	2005, 7
査慎行詩	第31回宏道書展	電気文化会館	2005, 8
絶塵	第41回新春東書芸代表作家展	丸栄画廊	2006, 1
呉光詩	第20回産経国際書会代表展	上野の森美術館	2006, 1

・論文：

『続書譜』の用筆論　書芸中道〈財団法人晴嵐館発行〉総p, 24

作品に関しては最近，木簡隷に興味関心が移りつつある。古朴な造形性が魅力であるが，今後，臨書を通してその書法を追究していきたい。本年度中には創作作品につなげたい。理論に関しては，引き続いて宋代の書論を精査に読んでいきたい。用筆論の解釈を実際の書作に活かすことが理想である。

書道教育に関しては，鑑賞教育について資料収集。

❻ 就職支援委員

❼・『東書芸会報』〈東海書道芸術院発行〉95号（2005, 4），96号（2005, 8），97号（2006, 1）執筆。

・産経国際書会（評議員），東海書道芸術院（常任理事），宏道書会（副理事長），日本書道教育学会（総務）として書道に関する諸活動をしている。

・公開講座「書道入門」開講（2005, 8）

・尾張教育研究会丹葉支部書研究部研修会　講演「篆刻に親しむ（発展）」すいとぴあ江南（2005, 8）

❽ 全国大学書道三学会（2006, 10開催・愛知大会・愛教大開催校）に向けて準備中

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

矢島　正浩　Yajima, Masahiro　　助教授　国語教育講座　　文学修士

❶ 国語学（日本語学），近世～近代日本語

❸ 日本語学会，日本文芸研究会，日本語文法学会

❹ 国語科研究ＡⅡ（１年），専門教育入門A･B（１年），現代日本の社会と文化･セミナー（３年），国語学概説Ⅰ･Ⅱ（２年），国語学講義A（２年），国語学演習ＡⅠ（２年），国語学演習ＡⅡ（３年），国語学基礎演習Ⅰ（３年），国語学演習ＤⅠ（３年），総合演習Ⅰ（３年），国語学演習ＤⅡ（４年），国語学特論Ⅲ（大学院）

・授業においては，「ことば」の運用を多角的に観察し，そのありようが意味するところを考察しながら，人間にとって「ことば」とは何なのかといった根源的な問いに対する自分なりの見解を得させることを目標としている。

・講義単位の授業であっても，基礎的な問いを絶えず投げかけながら，それらに解答することを通じて，学生が自ら発見し，気付くという手順を重視している。また，演習単位の授業では，特に授業の事前に行なう個別指導を入念に行う方針を取った。各学生が，どこに履修上の困難を抱えているのかを把握することとともに，独力では気付きにくい方法や観点についてきめ細かな指導を行うことを意図してのものである。

❺・現在の研究テーマ：

条件表現の推移の実態把握及びその推移を生じさせる原理の解明

・論文：

「条件表現の史的研究における「恒常性」―検証方法に関する一試案―」『日本近代語研究』４　2005年６月

「落語録音資料と速記本―五代目笑福亭松鶴の仮定表現の用法から―」『国語国文学報』64　2006年３月

・口頭発表：

「近代関西語の順接仮定表現－ナラからタラへの交代をめぐって」第224回近代語研究会　2005年５月

・科学研究費：

「近代関西言語における条件表現の変遷原理に関する研究」（基盤研究（C）代表），１,100,000円

❻ 共通科目専門委員会委員（日本の社会と表現文化）

田口　尚之　Taguchi, Hisayuki　　助教授　国語教育講座　　文学修士

❶ 上代文学，中古文学

❸ 日本文学協会，萬葉学会，美夫君志会

❹・「国語科研究ＡⅡ」「人文科学入門」「国文学講義ＡⅠ」「国文学演習ＡⅠ」（１年），「国文学演習ＡⅡ，ＢⅠ，ＢⅡ」（２年），「国文学史概説」「国文学演習ＧⅠ」「総合演習Ⅰ」（３年），「国文学演習ＧⅡ」（４年），「中古文学特論Ⅲ」（大学院）

・教育活動の問題点は特になく，ほぼうまくいっている。教科教育の授業はより実践的に，専門教育は特に卒論指導に力を入れている。

❺・現在の研究テーマ：

万葉赤人歌の表現方法論及び伊勢物語可変論の研究，箏曲・地歌の注釈

・連載：

「箏曲・地歌を解読しよう」（月刊「邦楽ジャーナル」平17・４-18・３／計12号）

・論文：
「赤人九四二―九四五番歌の構成美―辛荷島歌に見る〈三連転換〉〈中央特立〉とその〈相似反復〉―」
（「愛知教育大学大学院国語研究」14号平18・３）
・論文：
「赤人三七八番歌追考―故太政大臣藤原家の山池を詠む歌は讃美の歌か―」
（「国語国文学報」64集平18・３）

❻・国語書道専攻代表

❼・古典サークル「源氏物語講読会」講師（月２回／知立市中央公民館）

西田谷　洋　Nishitaya, Hiroshi　　助教授　国語教育講座　　文学博士

❶ 日本近代文学・日本現代メディア

❸ 日本近代文学会，日本文学協会，昭和文学会，日本社会文学会，全国大学国語国文学会，物語研究会，筑波大学比較・理論文学会，日本語用論学会，日本認知言語学会，文化史研究会
（役職：日本近代文学会東海支部幹事）

❹ 国語科研究BⅡ（１年），日本の社会と表現文化展開２（2年），国文学講義AⅡ（２年），国文学演習BⅠ（２年），国文学演習BⅡ（２年），国文学講義BⅡ（３年），日本文学講義A（３年），国文学演習C１（３年），国文学演習D（３年），国文学演習GⅠ（３年），国文学演習GⅡ（４年），近代文学演習Ⅰ（大学院），近代文学演習Ⅱ（大学院）

❺ 現在の研究テーマ：現代文学研究，文学理論研究
論文：
「北村透谷『楚囚之詩』における概念隠喩の構造」（『国語国文学報』64愛知教育大学国語国文学研究室2006・３）
その他：
「文学能力とサブカルチャー」（『日本近代文学』73日本近代文学会2005・10）
「民権期の文学研究（2004－2005）」（『自由民権』19町田市立自由民権資料館2006・３）

❻ 時間割編成委員

衣川　彰人　Kinukawa, Akihito　　助教授　国語教育講座　　修士（教育）

❶ 書道，書道史，書写書道教育

❷ 日本書芸院大賞（2000年・第54回日本書芸院展，1999年・第53回日本書芸院展），文部科学大臣奨励賞（2001年・第53回全国書道展覧会〈道風展〉），読売新聞社賞（2002年・第19回読売書法展，2001年・第18回読売書法展），記念賞（2005年・第55回中日書道展）

❸ 全国大学書道学会，全国大学国語教育学会，読売書法会（理事），社団法人日本書芸院（一科審査会員），社団法人中部日本書道会（二科審査会員）

❹ 書道演習Ａ（１年），書道演習Ｂ（２年），書道演習Ｃ（２年），国語科研究Ａ《書写》（２・３年），書道科教育ＣⅠ（３年），共通科目〈セミナー〉（３年），書道演習Ｄ（３

年），書道演習Ｈ（３年），書人研究Ａ（３年），書人研究Ｂ（４年），書道演習Ⅰ（４年）
公開講座担当…書道（2005．８．11～18，２回）
FD講習会参加…FD「授業改善と学習支援」～本学における学びと生活を考える～（2006．２．22）
○書道演習Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄでは，小中学校における書写指導のあり方について講義と実技指導を行うが，学生一人ひとりの用筆法の改善点について指導できるよう，個々の実技指導の時間を増やしている。
○書道演習Ｈ・Ⅰでは，かなの基礎である「いろは」から「ちらし書き」へと段階的に発展させることができるように教材を精選し，かな古筆の研究とともに進めることにより，さまざまな用筆法が学習できるよう配慮している。
○書人研究Ａ・Ｂでは，受講者が興味関心をもった日本の書人に関して資料収集を行いながらレポート作成へと進めるが，受講生それぞれが個別に選択した研究内容を扱いながら，研究内容について探究している。

❺ 日本書道の中でも，「かな書道」に関する考察を中心として，国文学や日本美術との関連などについて研究を進めている。主な研究テーマは下記のとおりである。
・かな書道と書式の関係に関する研究
・国文学とかな書道の関係に関する研究
・料紙と下絵の関係に関する研究
・古筆と大字かな書法の関連と発展性の研究
・年中行事と書式の関係に関する研究
そして，書写書道教育における主な研究テーマは，
・運筆と用筆－始筆と終筆の関係
また，古筆にみるかな美を現代の書美に生かした作品制作への発展を目指している。平成17年度の主な作品発表は下記のとおりである。
・第59回日本書芸院展（2005．４）
・第55回中日書道展（2005．６）
・第22回読売書法展（2005．８）

❻ 教育実地研究委員

❼ 平成17年度書写実技講習会講師（蒲郡，2005.8）

日本語教育

岡田　安代　Okada, Yasuyo　　教授　　日本語教育講座　　文学修士

❶ 専門分野：日本語教育学
関連分野：日本語学，日本文学

❸ 日本語教育学会（評議員），異文化間教育学会，大学日本語教員養成課程研究協議会，国立大学日本語教育研究協議会，愛知教育大学国際教育学会（会長）

❹ 主題科目「国際社会と日本」入門「異文化間の諸問題」（１年），日本語教育学概説Ⅰ（１年），日本語教育実習Ⅰ，Ⅱ（３年），日本語教授法（３年），児童と日本語教育（３年），日本語教育演習Ⅰ，Ⅱ（４年），日本語教育研究Ⅲ（４年），異文化間教育特論Ⅰ，Ⅱ（大学院），異文化間教育方法研究（大学院），日本語教育実践研究（大学院）
学部では，日本語教育学分野の授業を主に担当するが，特に実践的な活動を通しての教育を意識して行っている。３年生の「日本語教育実習」では日本語教育施設の見学，

模擬実習，教壇実習（日本語中級レベル）を授業の中心とし，４年生の「日本語教育演習」では，留学生のための「日本語（初級レベル)」のコース（週３コマ）を学生達と共に開講・運営し，その実践を通して問題提起されるさまざまな課題について研究を行っている。また，授業以外にも，地域におけるボランティア日本語教室，小中学校における外国人児童・生徒の日本語学習支援，留学生に対する日本語チューター活動への参加等を学生に呼びかけ，その活動の支援を行っている。本年度は，これらの活動のうち「外国人児童生徒のための教材開発と学習支援」プロジェクトが文部科学省現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム（現代GP）に採択されたため，３年間の計画で活動を開始した。

❺　現在興味を持っている研究テーマは，言語運用におけるポライトネス・ストラテジーの問題を異文化間コミュニケーションの視点から分析することである。日本語運用の問題を中心に，異文化間の比較に進めたいと思っている。また，小中学校における外国人児童・生徒に対する日本語教育の問題も，緊急の課題として取り組まなければならないテーマであると考えている。本年度は，現代GPプログラム経費を得て，外国人児童・生徒教育のための教材『外国人児童のためのさんすう文章題（４～６年生)』を出版した。

学術・研究交流の面では，ブラジル国サンパウロ市及びモジダスクルゼス市において，初等・中等教育事情の調査を行った（訪問学校数11校)。

❼・財団法人日本語教育振興協会専門委員（1996年４月－現在）
・公開講座「外国人児童生徒のための日本語教育」講師（2005．8．26　於愛知教育大学）
・愛知教育大学名古屋附属中学校研究授業指導助言

安武　知子　Yasutake, Tomoko　　教授　　日本語教育講座　　文学修士

❶　言語学
専門分野：理論言語学
関連分野：英語学

❸　日本英語学会，日本言語学会，日本英文学会，日本語用論学会，Linguistic Society of America

❹　対照言語学Ⅱ（２年)，心理言語学概論（３年)，言葉と人間（３年)，日本語教育研究Ⅱ（４年)，言語理論Ⅰ（大学院)，言語理論Ⅱ（大学院)，異言語間コミュニケーション教育特論（大学院）

学部では，理論言語学，人類言語学，心理言語学の基礎からゼミ形式の演習まで一連の授業の流れの中で，言語研究に対する学生の興味を喚起し，基本的知識を伝授し，そこから学生個人が独自の興味を発展させ卒業研究に結び付けうるよう指導を心がけている。教育活動上の一番の悩みは，学生の抽象的思考力の低下及び一般教養の不足であり，消化不良にならないよう，しかも個人レベルでの知的渇望を満たすような授業運営を心がけている。教育目標は，幅広い知識を身に付け，国際感覚に優れた言語の専門家の育成，及び発信型の実践的言語能力の養成である。

大学院での教育活動の問題点は，院生の出身学科がさまざまであり，学部段階で言語学の基礎を全く勉強してきていないことから，大学院レベルの授業展開に困難が生じる

ことである。

学部・大学院を通じて留学生が受講しており，部分的にバイリンガルで説明，質疑応答をするなど，指導上特別な手当を講じている。日本人学生にとっても用語や内容の確認，また異文化理解の機会にもなるなど効果がみられる。将来的にこの傾向が続くことが見込まれるため，授業内容・方法の国際化に向けての取り組みをさらに充実させていく。

管理職に就いているため，授業数が軽減され，学生との接触時間も通常より少なかった。

❺ （1）文構造と談話のインターフェイス：文法形式と意味の相関関係の機能主義的アプローチによる研究

（2）言語表現と個体認定のパラダイム：指示対象の個体認定表示の言語類型論的研究

（3）異言語間コミュニケーションと語用論：会話スタイルとメタメッセージの研究

現在の主たる研究領域は，文レベルの文法研究の枠組みを超えた言語形式と意味との相関関係であり，談話研究・語用論との接点に注目した研究を行っている。また，国際化の流れの中で，研究分野を少々広げる形で，異言語間コミュニケーションに伴う諸問題に対して，言語学からのアプローチを試みている。

下記の二つの学長経費によるプロジェクトの研究代表者を務め，報告書を作成した。

「グローバル・リテラシー（国際対話能力）向上に関する研究」

「国際化時代に即応した幼・小・中を連携した教育の在り方に関する研究」

❻ 附属名古屋中学校校長

❼ 公開講座：「ことばの世界・世界のことば」(2005.7.30 名古屋市生涯学習推進センター)
出前講座：「対照言語学」(2005.7.29 岡崎東高等学校)
豊橋市11年目（中堅）教員研修会「国際理解教育」講師（2005.8.8）

田村　建一　Tamura, Kenichi　　教授　　日本語教育講座　　文学修士

❶ 言語学，ドイツ語学

❸ 日本独文学会，日本言語学会，社会言語科学会，日本言語政策学会

❹ 言語学と日本語教育（1年)，対照言語学1（2年)，歴史言語学A（2年)，歴史言語学B（3年)，言語学史（3年)，日本語教育研究2（4年)，外国語教育研究2（大学院)，異言語接触問題教育特論1（大学院）

教育活動の問題点：学生に対して成績評価の基準を明示することが今後の課題とされているが，なかなか難しい問題である。いくつかの科目でレポートの採点基準を公表するよう心がけているが，まだすべての科目にまで及んでいない。

教育に対する抱負：授業のことはさておき，授業以外で見られる学生の非常識な行動に対する教育の必要性を最近痛感している。授業時間帯に校舎の脇でキャッチボールを始める学生，進入禁止区域に大きな音とともにバイクで入ってくる学生，通路に平気で自転車を並べる学生。自分の都合だけのために人に迷惑をかけるような行為を黙って見過ごすわけにはいかない。それにしても寛容な教職員が多いのが気がかりである。

❺ 現在の研究テーマ：

1．ルクセンブルクの言語政策：三言語を公用語とするルクセンブルクの言語政策について，特に国民語であるルクセンブルク語の標準化に焦点をあてて探っている。

2．ツングース諸語の格体系の比較。

科学研究費補助金：

基盤研究C「ルクセンブルク語の標準化をめぐる問題」（代表者，60万円）

❻ 講座代表，大学院専攻代表（国際理解教育領域），教務企画委員，教育実地研究専門委員会委員，教育実習ワーキング委員，大学改革推進委員会第三部会教育編成部会委員

❼ 本学連携講座「ことばの世界・世界のことば」（名古屋市生涯学習推進センター，2005.7.30）

稲葉みどり　Inaba, Midori　　助教授　日本語教育講座　　学術修士

❶ 心理言語学，専門分野：言語習得

❸ 日本言語学会，日本語教育学会，大学英語教育学会，日本英語学会，全国語学教育学会，日本認知科学会，日本語教育学会，大学英語教育学会，日本言語学会，日本プラグマティックス学会，Teachers of English to Speakers of Other Languages，全国英語教育学会（中部会員），中部地区英語教育学会，愛知教育大学国際教育学会，愛知教育大学英語英文学会，国立大学留学生指導研究協議会他

❹ 日本語Ⅰ，Ⅱ，Ⅴ（1年），日本語Ⅲ，Ⅳ，Ⅵ（2年），日本語教育評価法（3年），日本語補講 中級，上級（全学留学生），英語科教育特論Ⅰ，Ⅱ（大学院）

❺ 科学研究費補助金助成研究：「中間言語発達における形式と機能のマッピングに関する研究」平成15年度～平成17年度文部省科学研究費補助金／基盤研究（C）(2)

研究論文：

1）日本語・日本文化短期研修プログラムの開発と実践，愛知教育大学教育実践センター紀要第 9 号」2006

2）自己発信型の日本語力の養成―体験密着型のオリジナル教材を活用して，「愛知教育大学共通科目研究交流誌教養と教育　第 6 号」　2005

研究発表：

1）作文の誤用とコミュニカビリティ，日本認知科学会第22回大会，2004.8
於京都大学

❻ 国際交流委員会（委員），教育実地研究委員会（委員）

❼ 大学英語教育学会紀要査読委員

北野　浩章　Kitano, Hiroaki　　助教授　日本語教育講座　　文学修士

❶ 言語学（フィリピン言語学，日本語学，談話研究，言語類型論）

❸ 日本言語学会，Linguistic Society of America，Association for Linguistic Typology，International Pragmatics Association，日本認知言語学会

❹ 異文化コミュニケーション論（1年），総合演習Ⅱ（4年），国際社会と日本：世界の諸言語（2年），情報教育入門Ⅱ（1年），音声学（2年），日本語教育研究（4年），言語文化教育方法研究Ⅰ，Ⅱ（大学院）

概論的な授業においても新しい研究を参照し，学生の興味を喚起するような内容にまとめて取り入れている。

❺ (1) カパンパンガン語の記述研究
(2) 日本語の談話（特に話し言葉）をもとにした文法研究

論文：

「自然談話に見られる逸脱的な文の構築：試行的提示のための形式『…と言うか』『…ですか』など」串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』，91-121. 東京：ひつじ書房（2005年10月19日）

Ergativity and equational structure in Kapampangan. Current issues in Philippine linguistics and anthropology: Parangal kay Lawrence A. Reid, edited by Hsiu-chuan Liao and Carl R. Galvez Rubino, 338-345. Manila: Linguistic Society of the Philippines and SIL Philippines.（2005年）

口頭発表：

Clitics in Kapampangan. Taiwan-Japan Joint Workshop on Austronesian Languages（南島語言國際研討會），台北：福華國際文教會館（2005年 6 月24日）

Transitivity and pronominal clitic order in Kapampangan. The 10th International Conference on Austronesian Linguistics. Puerto Princesa, the Philippines: The Legend Hotel（2006年 1 月18日）

On the aptative and distributive modes in Kapampangan, a Philippine language. The 7 th International Forum on Language, Brain, and Cognition, “Incorporating Culture into Studies of Cognition and Language”. Tokyo: Japan Women’s University.（2006年 3 月15日）

科学研究費補助金：

基盤研究（C）「東南アジア・豪州・アフリカの少数民族言語の文法記述と言語変容の研究：言語調査と理論言語学・社会言語学の統合を目指して」研究代表者（2005年交付額：170万円）

❻ 国際交流委員会委員（常任）

❼ 2005年度名古屋市民大学・大学連携講座『ことばの世界・世界のことば』の「ことばのいろいろ」を担当（名古屋市教育委員会・名古屋市生涯学習推進センター）（2005年 7 月30日）

土岐留美江　Toki, Rumie　　助教授　日本語教育講座　　文学博士

❶ 専門分野：日本語学（日本語史）
関連分野：言語学

❸ 日本語学会，日本語文法学会，社会言語科学会，全国大学国語国文学会，計量国語学会，名古屋言語研究会，東京都立大学国語国文学会，関東日本語談話会

❹ 日本語学と日本語教育（１年），日本語学概説（２年），日本語学演習Ⅰ（２年），日本語学演習Ⅱ（２年），日本語学演習Ⅲ（３年），日本語学研究Ⅲ（３年），日本語史（３年），日本語教育研究Ⅳ（４年），言語文化史特論（大学院）

授業については，知識の伝授だけにとどまらず，学生の自主的思考力や分析力を高めることができるような，真の大学教育にふさわしい教育を目指したいと考えている。授業中，及び休み時間やオフィス・アワーを通して，学生から伝えられる声を踏まえ，より充実した教育内容となるよう，毎年，いろいろな面で修正を加え，今後も努力を重ねたい。

また，ゼミ指導や学生の生活相談については，学生が相談しやすい雰囲気作りに努め，学生の現状を的確に把握して，きめこまやかなニーズに対応出来ることを心がけたいと考えている。

❺ 現在の研究テーマ（内容及び今後の研究計画）：
日本語モダリティの通時的研究。中でも，述語の活用形などの文末諸形式の考察。
今後は中古日本語の連体形の昨日に関して，係り結びとの関連を視野に，分析を進めたい。
業績リスト（2005年 4 月～2006年 3 月に発表したものに限る）
論文：「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1 巻 4 号（『国語学』通巻223 号,）日本語学会，2005，10
書評論文：山内洋一郎著『活用と活用形の通時的研究』『日本語文法』6 巻 1 号，日本語文法学会，2006， 3

❻ 就職支援担当委員

社会科教育

佐藤　　彰　Satoh, Akira　　教授　　社会科教育講座　　工学博士

❶ 建築学　専門分野：建築史学，関連分野：歴史学，美術史学，技術史等

❷ 建築史学会賞（1997年）

❸ 日本建築学会（論文査読委員，東海支部歴史意匠部会委員），建築史学会（常議員，学会賞ノミネイト委員）

❹ イギリス社会史特論（3 年），欧米生活文化購読Ⅰ（2 年），欧米生活文化購読Ⅱ（3 年），欧米生活文化購読Ⅲ（3 年），英米文化演習Ⅰ（4 年），英米文化演習Ⅱ（4 年），国際社会と文化　展開 2〈英米の社会と文化〉（2 年），英米文化史特論Ⅰ（大学院），英米文化史特論Ⅱ（大学院）
主要には，英米文化史を中心に授業を行っている。適切なテキストの選択，視覚資料の提示に常々つとめている。学生全員から積極的な受講態度を引き出すのは，容易ならぬことである。たゆまず努力を重ねたい。

❺ 主たる研究テーマは，
（1）19世紀建築史，都市史，建築と意識の関わり
（2）建築と意識の関わり
発表論文は，「初期工業化のもとでのイギリス建築――もたらされた「虚偽」をめぐって」（鈴木博之他編『材料・生産の近代』シリーズ都市・建築・歴史 9，東京大学出版会，2005）

目黒　克彦　Meguro, Katsuhiko　　教授　　社会科教育講座　　文学修士

❶ 東洋史
専門分野：中国近代史
関連分野：中国近世史

❸ 東洋史研究会，中国文史哲研究会，愛知教育大学歴史学会（会長）

❹ 主題科目「平和と人権」（1 年），外国史概説Ⅱ（3 年），東洋史特論Ⅱ（3 年），中国近代史演習Ⅰ・Ⅱ（大学院），中国近代史特論Ⅰ（大学院）

・主題科目は学生グループの話し合いの結果定めた追究課題である，「NEET―若者たちの働くキモチ―」というテーマに関して，その追究する視角や方法に関する話し合いに参加し，取材対象として「ヤング・ジョブ・あいち」を紹介し，取材・追究活動を進めさせ，プレゼンテーションに向けての準備の議論にも参加し，いくつかのアドバイスを行った。事後の学生たちの感想文には，難しい問題であり，様々に考えさせられ，たいへん勉強になった旨が記されていた。

❺ 近代中国におけるアヘン・麻薬問題についての研究を継続した。改革・開放政策の展開以後の中国における経済の発展と対外交流の拡大に伴い，中国社会に再びアヘン・麻薬の蔓延する現象が起こっており，中国当局も1990年頃よりこの事態を重視し，「現代中国アヘン戦争」と位置づけ，その撲滅の活動を真剣に展開している。そのために，かつての中国におけるアヘン・麻薬の撲滅運動（「禁煙運動」と言う）が如何に展開され，如何なる成果と問題が有ったかを検証し，それを現代の麻薬問題の解決に活かそうという意図から，清末・中華民国時期のアヘン・麻薬問題の研究が盛んに行われており，その成果が続々と発表・刊行されている。こうした中国における研究状況を的確に把握し，更に研究を深めようとする意図から，刊行される中国側の研究動向の掌握に努めた。具体的には，中国におけるアヘン生産の中心的地域であった四川・雲南におけるアヘン問題とその禁止の取り組みについて研究した，秦和平氏の『雲南鴉片問題与禁煙運動』・『四川鴉片問題与禁煙運動』（四川民族出版社1998年・2001年刊）の著書を翻訳・研究し，更にアヘン禁止問題と中国の財政問題との関連等を研究対象とした，劉増合氏の著書『鴉片税収与清末新政』（生活・読書。新知三聯書店2005年刊）の翻訳・研究を行い，清末時期のアヘン禁止問題と光緒新政の改革を推進する際の，財源問題に対する認識を深め，今後の研究展開に有意義な知見を得た。

❻ 附属養護学校長

❼ 刈谷市教育委員会　就学指導委員会専門委員
財団法人大幸財団　教育実践助成選考委員会委員

渡辺　和靖　Watanabe, Kazuyasu　　教授　　社会科教育講座　博士(文学)(H18.6授与)

❶ 日本思想史，日本史，日本文学

❷ 『幻影城』新人賞・評論部門受賞「現代探偵小説の構築」(1978年12月)

❸ 日本思想史学会，日本文芸研究会（委員）

❹ 日本倫理思想史特論Ⅰ，Ⅱ（大学院），宗教哲学演習（４年），宗教倫理演習（４年），倫理学原書講読（４年），宗教の諸問題（３年）総合演習（３年），主題科目展開２（２年），倫理思想史基礎演習Ⅰ（２年），哲学史概説Ⅰ（２年），倫理学基礎演習（２年），社会科研究ＢⅠ，専門教育入門Ａ，Ｂ（１年）

授業においては，近現代の文学作品をとりあげ，それを音読させることによって，内容の思想的な理解のみならず，日本語のリズムの味わいなどにもできるだけ触れることができるように工夫している。

❺ 現在の研究テーマ

本年度は専門論文に加えて，大学における哲学，倫理学の授業はどのようにあるべきかという大学教育研究に関する論文を執筆した。この後とも，こうした大学教育研究に関する論文を制作していきたい。

業績リスト：

論文

2006年３月「萩原朔太郎研究・補遺（そのⅢ）」『哲学と教育』52
FD論文
2006年２月音読による授業構成の試み（2）――森鴎外の「諦念」」『愛知教育大学教育実践総合　センター紀要』９
2006年３月「音読による授業構成の試み（2）――新美南吉『良寛物語』」『愛知教育大学研究報告』55
書評
2005年10月「末木文美士著『明治思想家論 近代日本の思想・再考一』」『日本歴史』690

❻ 教育研究評議員

❼ アカデミック・クエスト（高大連携講座）2005年12月
十六銀行（岐阜市）市民講座「くるる」講師，2005年４～５月，10～11月，2006年２～３月　計11回

渋谷　克美　Shibuya, Katsumi　　教授　　社会科教育講座　　文学博士

❶ 西洋中世哲学史

❸ 国際中世哲学会，日本哲学会，日本中世哲学会委員

❹ 愛知教育大学哲学史演習，名古屋大学大学院文学研究科西洋哲学史演習担当

❺ 論文：
「抽象と直知―オッカムの直知理論―」（『中世哲学を学ぶ人のために』Ⅲ，２世界思想社，2005年９月）
本：
オッカム『大論理学』註解Ⅳ（創文社，2005年７月）

❼ Advisory Board in Library and Publication Committee at the School of Letters of Nagoya University

大澤　秀介　Osawa, Hidesuke　　教授　　社会科教育講座　　文学修士

❶ 哲学
専門分野：現代英米哲学
関連分野：政治哲学（多文化主義研究）

❸ 日本哲学会，日本科学哲学会，日本科学基礎論学会

❹ 比較文化論Ⅱ（１年），哲学史概説Ⅱ（２年），アメリカ文化史（２年），哲学の諸問題（３年），インターネットと文化（３年），哲学演習C（３年），英米思想演習Ⅰ（４年），英米思想演習Ⅱ（４年），英米思想演習（大学院）
　私の専門は現代英米哲学であるが，授業においては，欧米文化の背景となる欧米思想史に重点を置いている（哲学史概説Ⅱ・アメリカ文化史）。これは複雑な問題であるが，欧米文化，さらには現代世界の理解にとっては欠くことができない前提的な知識である。本年は特にパソコンを利用して，ビジュアルに説明することを心がけた。また「哲学の諸問題」においては現代英米哲学に最も大きな影響を与えているウィトゲンシュタインの言語哲学を，特にブルームズベリー・グループとの関係を中心に講義した。また「英

米思想演習Ⅰ（４年)」,「英米思想演習Ⅱ（４年)」においては，多文化主義研究に力を入れて，学生の卒業研究を指導した。「英米思想演習（大学院)」においては，未開拓の分野であるイギリス19世紀の宗教文化史の基礎的文献購読に力を入れた。「インターネットと文化」においては，インターネットがもたらした現代世界の文化的変容について学生とともに研究した。また「比較文化論Ⅱ」においては，明治時代初期の日本文化に対する英米文化の影響を英米の思想という観点で講義した。

❺ 現在の研究テーマは，アメリカ19世紀の哲学者，チャールズ・S・パースの哲学の理解と，それを梃子とした，現代分析哲学への根本的な批判である。研究スタイルとしては，CD-ROM化されたパースの旧著作集を基本として，６巻まで刊行されたパースのクロノロジカル・エディションその他のパース・テキスト，及びアメリカの哲学データベースにおいて検索されたパースに対する二次文献，現代分析哲学，特に心の哲学を中心とした雑誌論文，などを精読するという個人研究が中心であるが，中部地方に在住する現代哲学研究者との共同討議において，現代哲学の諸論点をパース的な視角から批判するというのも私の研究にとっては非常に有益なものである。この研究はまだ糸口についたばかりのこともあり，それほど多くの成果は上がっていない。

１．科研費報告書（課題番号15320006)『偶然性と確実性に関する哲学史的・理論的研究』，2004年，研究代表者　服部裕幸

❻ 大学改革推進委員会委員

舩尾日出志　Funao, Hideshi　　教授　　社会科教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：教科教授学
関連分野：哲学

❸ 日本教育学会，日本教育方法学会

❹ 国際理解教育概論（１年)，情報教育入門Ⅱ（１年)，平和と人権セミナー（３年)，社会科教育CⅢ（３年)，社会科教育Ａ（４年)，総合演習Ⅱ（４年)，宗教哲学演習Ａ（４年)，宗教倫理学演習Ａ（４年)，宗教哲学演習Ｂ（４年)，宗教倫理学演習Ｂ（４年)，社会科教育特論Ⅳ（大学院)，社会科教育特論Ⅴ（大学院)，社会科授業研究Ⅰ（大学院)，社会科授業研究Ⅱ（大学院)，環境倫理研究（大学院)

授業に際して最も努力している点は，可能な限り「教えない」という姿勢である。話題を提供することに専念して，学生一人ひとりが考えを深め，かつ考えを広めるのをあくまでも陰で支える立場でありたいと思っている。

教科教育等の授業では，できるだけ実際の授業例をビデオや実践記録等で提示し，その優れた点や問題点を検討するなかで，授業実践への問題意識と動機付けを高めるようにしている。最終的には模擬授業の実施までを想定している。ただし教育実習を済ませた段階の学生の場合は，むしろ学生諸君の経験や体験を教材にすることもある。

他の教員の授業をみること，あるいは授業実践を聞くことは本当に勉強になる。

大学の教員にとって授業を中心とした教育活動は最も重視すべきものであると考える。もちろん大学の教員にとって研究はおろそかにすべきではない。しかしおろそかにすべきでないという点では教育活動も同じである。

❺ 現在の研究テーマ：
１）パウル・エストライヒと徹底的学校改革者同盟の教育思想
２）フリードリッヒ・フォン・シラーの教育思想研究
業績：

「いじめとの教育的対峙におけるロゴテラピーと実存分析」（共著）
愛教大研究報告　第55輯（教育科学編）2006年 3 月
「ヨヘン・フーンの歴史教授学（2）―歴史教授にとっての歴史的客観性の意義―」
愛教大教育実践総合センター紀要第 9 号　2006年 3 月

❻・共通科目委員会専門委員（授業改善・評価部会部会長）
・教職大学院検討委員会委員
❼・家庭教育企画委員会委員（愛知県教育委員会）
・愛知県社会福祉協議会　福祉読本『ともに生きる』編集委員会委員長
・愛知県社会福祉協議会　福祉体験作文コンクール選考委員長
・三河教育研究会社会部会　常任講師
・大府市立南中学校で人権問題に関する講話

見崎　恵子　Misaki, Keiko　　教授　　社会科教育講座　　経済学修士

❶ フランス社会経済史，女性史，ジェンダー問題

❸ 社会経済史学会，比較家族史学会，日本西洋史学会，日仏女性研究学会，日本風俗史学会

❹ 平和と人権（女性と人権）（2 年），ジェンダーと文化（2 年），比較女性史，比較女性史研究（3 年），西洋経済史（3 年），総合科目（Ⅰ）（3 年），欧米社会史演習（Ⅰ）（Ⅱ）（4 年），西洋社会史演習（Ⅰ）（Ⅱ）（大学院），比較生活史特論（大学院）

授業活動の課題等

ジェンダーの視点による歴史及び社会・文化の考察を国民国家・ナショナリズム論や人権論に関わらせて授業を行っている。マジョリティの「基準」「真理」を，マイノリティの側から問い直すための方法を分析の仕方を受講生が身に付けてほしいと考え，できるだけ身近な素材，新聞記事，映画，歴史的な図像・絵画資料等を用いて，受講生自身が考え，発言できるように工夫している。しかし，問題提起型授業にとどまってしまう場合もあり，基礎知識や方論法等の習得という側面では問題が残る。そのことが評価の難しさにもつながっている。また参加形式では，集団の作り方や議論への介入についての教員の役割が難しい。

大学院の授業は，授業ではじめて顔を合わせる院生もいて，なにを院レベルの授業の「専門」とするのか，難しく，授業内容や方法で困難を抱えている。

❺ 研究テーマ：第三共和政フランスにおける社会変革思想とフェミニズム
論文：
「バルバッスゥ親父のフェミニズム談義～アナキスト新聞『ル・リベルテール』1911-12年」『愛知教育大学研究報告』第55輯（人文・社会科学編）2006．3
「フランス第三共和政下のフリーメイソンとフェミニズム―ラディカル派フェミニスト M. ペルティエを中心に―」愛知教育大学歴史学会『歴史研究』第51号（2005）
科学研究費：
科研基礎研究C分野「ジェンダー」（代表：水田珠枝）「20世紀初頭のラディカル派フェミニズムの比較研究」において研究をまとめた。（報告書論文「20世紀初頭フランスのラディカル派フェミニズムの位置」）

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❻ 社会科教育講座代表・教育研究評議会評議員（学生生活支援委員会委員，就職支援担当者連絡会座長）
男女共同参画ワーキング（委員会規程等の策定）
❼ 大垣市男女共同参画セミナー講師
❽ 重点教育研究費「男女共同参画実現のための高等教育のカリキュラム開発及び学習・研究環境の整備プランの検討」（代表：山田綾）に参加し，要望書・報告書づくりに参加した。

西宮　秀紀　Nishimiya, Hideki　　教授　　社会科教育講座　　博士（文学）

❶ 歴史学
専門分野：日本古代史
関連分野：地域史・宗教史
❸ 日本史研究会，大阪歴史学会，続日本紀研究会，木簡学会，祭祀考古学会，延喜式研究会，古代学研究会，正倉院文書研究会，条里制・古代都市研究会，出雲古代史研究会，名古屋古代史研究会ほか
❹・日本史概説Ⅰ（２年），地方史実地演習（２年），日本史特論Ⅰ（３年），社会科研究AⅠ（３年），日本史書講読ⅡA・ⅡB（３年），日本古代史演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）・特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）
・教育活動であるが，専門教育について少し記しておきたい。日本史概説は社会科の学生が対象の講義である。テキストを使用しているが，最新の概説を試みるようにしている。方法としては，最新の学説の話や，新しく発掘された遺跡や遺物の話も，できれば次週位には新聞記事などを手がかりに解説を行っている。現地説明会に参加して確認できればよいのだが，残念ながら時間的・経済的な余裕がない。ただ，年何回かは直接現場を見せていただいており，その時はなるべくスライド写真を撮り，講義に活用している。百聞は一見に如かず，で学生の評判はよい。日本史特論は３年生が対象で，日本史の最新の研究状況の紹介や私の最新の研究成果の講義を行っている。日本史書講読は史料読解法の伝授を目的としている。基本的には古代史料読解の基本訓練であり，１年たつとほぼ六国史は読めるようになる。ただ，それだけでは学界の最前線の卒業研究を書いてもらえないので，史学専修の自主的制度として，３年生の前期（後期から本格化）から，卒業研究を書きたい学生に対する自主ゼミを開いている。私の古代史ゼミではこれに４年生も参加し，木曜日の３時から夜の８時位まで，報告と討論を行っている。そして，４年生で本格的に日本古代史で卒業研究を書きたい学生に対しては，卒業研究ゼミを別に開き指導を行っている。また，４年の前期にはさらに史料読解を深めるために，史書講読の自主ゼミを開催している。以上のことは，正規の授業ではないが，学生の空き時間と私の空き時間を利用して行っている。正規の講義・演習だけでは，とても学界の最前線の卒業研究が作成できないからである。小学校課程の学生に対しては専門教育は必要ないという議論もあるが，それは大きな間違いで，広く浅く学んだことは結局役にたたないと思われる。一つ学問の最前線を知るすべを体得しないと，現場で自信をもち応用がきかないと思われる。また，今年度から再開した地方史実地演習は，飛鳥・奈良に学生を引率しフイールド・ワークの方法論を徹底的に身につけさせている。また，春と秋にはゼミ生と一緒に飛鳥・奈良などの更なる古代の遺跡や寺社めぐりを行い，生きた教材を前に，それらの見方を教授し，見聞を広めさせている。また，何泊かすることによって，学生との交流を深めている。以上の自主ゼミや旅行等の準備負担は大きいが，

学生の知的成長こそ教育の最大目的の一つと考える私にとって，赴任以来の大切な時間である。大学院では，原史料の写真版などを使用し，さらに高度な史料批判の方法を伝授している。なお，社会科研究は他講座の学生に対して，小学校社会科の教科書の仕組みについて，わかりやすく解説を行っている。どのような点に注意して，社会科の教科書をみればよいのか，毎時間プリントを用意し講義を行っている。ただ，どんなに熱意をこめても関心がないという少数の学生に対しては，どうすればよいのか教育の限界を感じてしまう日々である。

❺・現在の研究テーマは大きく，(1) 古代国家と神祇祭祀及び官僚制の研究，(2) 古代尾張・参河地域史研究，(3) は古代伊勢神宮の研究の三つである。

(1) については一昨年公刊し，その後も，さらに研究を深化させつつある。(2) については愛知県史の資料編の 2 巻目や安城市史の通史編に向け，編纂事業に携わっている。なお，『蒲郡市史』の原始古代編の監修が終了し発刊できた。(3) については三重県史で，史料収集を共同で行っており，現在校正中で2006年度中には公刊できる予定である。

・論文「古代参河国と犬頭糸・白絹」(『安城市史研究』第 7 号，2006年 3 月，1 ～32頁)

・共監修『蒲郡市史　本文編 1　原始古代編中世編』，蒲郡市，2006年 3 月刊行

❻ 社会科専攻代表・史学専修代表

❼・愛知県史編纂委員会調査執筆委員・三重県史編纂専門委員・安城市史編集委員会編集委員（古代中世部会長）・蒲郡市史編纂委員（監修）・斎宮歴史博物館専門委員

黒川　知文　Kurokawa, Tomobumi　　教授　　社会科教育講座　博士(文学) Ph.D(神学)

❶ 専門分野：西洋近代史
関連分野：宗教学　神学

❷ 大畠記念学術奨励賞　日本宗教社会学研究会（1994年 4 月）
名誉文学博士　イオンド大学（2001年）

❸ 日本宗教学会（評議員），日本西洋史学会（懇談員），比較文明学会，キリスト史学会，歴史学研究会，日本福音主義神学会，日本キリスト教文学会

❹ 専門教育入門（1 年），国際社会と日本（1 年），外国史書講読Ⅰ・Ⅱ（2 年），外国史概説Ⅰ（2 年），西洋史特論Ⅰ・Ⅱ（3 年），西洋近代史特論（大学院），西洋近代史演習（大学院）

・歴史学とは暗記の学問ではなくて時間的流れにおいて事物の本質を考察する学問であることを授業を通して教えている。歴史的事件を鮮やかに再現するために，できるかぎり同時代の資料，地図，歴史画などを紹介している。また，歴史に関するビデオや映画も上映している。かなり多くの知識を教えなければならないために，要点をまとめたレジュメを毎回準備して配布し，それに付け加える形式で授業を展開している。学生の質問は出席カードの裏に書いてもらい，次の授業においてそれに答える。

❺ 現在の研究テーマ：

・宗教戦争と民族紛争の研究

宗教学と歴史学の観点から宗教戦争と民族紛争の本質構造と宗教の位置づけを考察する

・内村鑑三の研究

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

内村鑑三の晩年における再臨運動とユダヤ人問題との関係について考察する
・世界史における宗教運動の研究
ウエーバー宗教社会学の方法に基づいて宗教運動の普遍的理論を構築する
特に修道院の霊性について比較考察する
業績リスト：
・著書
『一神教とは何か』（共著　討論参加）東京大学出版会　2006年 3 月
・論文
「内村鑑三とユダヤ人Ⅰ」『愛知教育大学研究報告』55号　2006年 3 月
口頭発表：
・「宗教戦争と民族紛争」日本福音主義神学会東部部会研究会（お茶の水）　2005年 9 月
・「カトリック教会とギリシャ正教会の修道院と霊性の比較」日本福音主義学会研究大会（名古屋）2005年11月

❻ 就職委員会委員

❼ 公開講座「新約聖書研究：マタイ福音書」聖書講座として月 1 回開催
特別講義「ユダヤ民族史」無教会研修所（東京）2005年
講演「民族紛争と宗教」湖北パークサイドチャペル　2005年10月

❽ 日本ペンクラブ会員として小説創作活動に従事

前田　勉　Maeda, Tsutomu　教授　社会科教育講座　博士（文学）

❶ 日本思想史

❷ 岡崎義恵学術研究奨励賞（1994年 6 月）

❸ 日本思想史学会（評議員），中国社会文化学会，日本文芸研究会，日本宗教文化史学会

❹ 日本思想概説（ 2 年），日本思想史演習Ⅰ・Ⅱ（ 3 年），外来思想摂取史論（ 3 年），倫理学演習B（ 3 年），日本対外交流演習Ⅱ（ 4 年），日本文化論演習Ⅰ・Ⅱ（ 4 年），現代日本の社会と文化（ 3 年），日本文化論特論Ⅱ・Ⅲ（大学院）
本年も，日本思想概説・外来思想摂取史論の講義の受講生は多かったが，演習の受講生は数人しかいなかった。カリキュラム上の問題点があるにしても，主体的な参加が要求される演習を避けて，受身的な講義に流れる学生諸君の「悪しき」傾向は一層顕著である。それでも，講義のなかで問題を投げかけることによって，能動的な参加を求めたためか，私の意図を汲み取りながら，批判するレポートを書いた学生がいたことは，何よりの救いであった。

❺・現在の研究テーマ：
近世日本思想史，ナショナリズム
・著書：
『兵学と朱子学・蘭学・国学―近世日本思想史の構図―』（平凡社選書225，2006年）
共編『概説日本思想史』（ミネルヴァ書房，2005年）
校訂『増補本居宣長Ⅰ』（東洋文庫746，平凡社，2006年）
校訂『増補本居宣長Ⅱ』（東洋文庫748，平凡社，2006年）
・論文：
「Historia del pensamiento del Kinsei」（『ISTOR』21号，2005年）
「伴林光平における神道と歌道」（『神道宗教』199・200号，2005年）

「江戸時代の秀吉像」（小島毅『義経から一豊へ』，勉誠出版，2006年）
「近世日本の公共空間の成立―「会読」の場に着目して―」（『愛知教育大学研究報告』（人文・社会科学）55輯，2006年）
「史料紹介　斎藤竹堂「治屠者議」」（『日本文化論叢』14号，2006年）

・口頭発表：
「近世日本の神話解釈―孤独な知識人の夢―」（2005年度日本思想史学会大会シンポジウム報告，於東京大学，2005年10月29日）

・科学研究費補助金：
特定領域研究（研究分担）「儒学テキストを通しての近世的思考様式の形成―日中における対照的研究―」125万円

・学術・研究交流等：
国際日本文化研究センター共同研究員

❻・国際文化再編ワーキング委員，日本・東アジア履修モデル副代表

寺本　潔　Teramoto, Kiyoshi　教授　社会科教育講座　教育学修士

❶ 社会科教育学，人文地理学

❷ 第二回中部開発センター懸賞論文（2001年２月）優秀賞

❸ 日本地理教育学会（評議員）　日本地理学会　日本生活科総合的学習教育学会（理事）　日本社会科教育学会　愛知教育大学地理学会　愛知教育大学社会科教育学会

❹ 社会科研究AⅡ（１年），社会科学入門（１年），社会科教育A（２年）（３年），総合演習Ⅱ（４年），地理学研究法（４年），地理学論文演習Ⅰ・Ⅱ（４年），環境地理学Ⅱ（３年），地理学野外実験Ⅱ（２年），社会科教育特論Ⅱ（大学院），社会科教育演習Ⅲ（大学院）

社会科指導法や教材研究の基礎基本を大切にしたい。

講義演習実験とさまざまな形態の持ち味を生かして教材開発に取り組んでいる。昨年は学内環境を生かした社会科指導法も試みた。

今後も地図，写真，野外，実物資料などを駆使し，実感あふれる授業をつくっていきたい。地理学野外実験では沖縄県を題材に「暖かい土地の暮らし」の教材開発や地域環境教育の現場を見学調査している。

❺ 現在の研究テーマ：

子どもの地図嫌いを生じる原因究明　社会科授業における地図の活用法　学校と地域を結ぶ総合的学習の実践的研究　子どもの防犯リテラシー研究

研究業績：

『人気教師の仕事術』黎明書房，2005年12月
『エコ地図をつくろう』黎明書房，2005年７月
「子どもと住民の防犯リテラシーを高める学校と地域連携型事業の試み」愛知県企画振興部学生提案型地域づくり協働支援事業2005年３月

科学研究費：

基盤研究（c）「地理教育からみた地理的技能・学力の構造の解明と向上のための授業開発」（日本女子大　田部俊充代表）研究分担者

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❻ 人文社会科学系地理専修代表
附属名古屋小学校授業研究会助言者
学部　地理学専修１年担任　大学企画課地域連携部会委員（現代GP企画）
❼ 環境省エコ改修環境教育検討委員会委員
ちゅうでん教育振興財団理事
文部科学省教育研究開発実践学校指導（東京都中央区佃島小）
その他，教え子を中心に学校現場からの相談助言に当たっている。

松島　周一　Matsushima, Shuichi　　助教授　社会科教育講座　　文学修士

❶ 日本中世政治史
❸ 歴史学研究会，日本史研究会，中世史研究会（委員）など
❹ 専門教育入門A（１年），日本社会形成史論（２年・４年），日本史書講読ⅠA・B（２年），地方史演習Ⅰ・Ⅱ（３年），日本史特論Ⅱ（３年），日本対外交流史演習Ⅰ（３年），日本対外交流史論（３年），日本文化論演習Ⅰ・Ⅱ（４年）
　講義においては，最新の研究成果に依拠しつつ，平明に講述することの工夫がさらに必要となる。多人数の講義では，どうしても一方的に説明する形になりがちなので，史料をプリントで配布したり，板書を多めにするなどの対応をとっている。また，演習では，教員免許をとろうとする学生に対しては，単なる専門ではなく，社会という教科の内容への認識を深めるとともに，自ら考え，調べたことをどのように分かりやすく且つ興味深く説明するかという点にも留意して指導している。教員免許をとらない学生に対しては市民的教養を深め，日本社会への理解を磨くような形での指導を心がけている。どちらの場合にも，基礎的な知識や技法の修得と，それらを応用した自力での学習をどのように組み合わせて，より効果的な指導を行なうか，毎年，学生の様子を見ながら，試行錯誤の連続である。
❺・現在の研究テーマ：
①中世の貴族社会と武家社会　②平家物語と内乱史　③愛知県の中世史　など
・業績リスト：
論文：
「吉良貞家と南北朝初期の尾張・三河」（『安城市史研究』７，2006年）
「鎌倉時代の三河と熱田大宮司家」（『日本文化論叢』14，2006年）
・科学研究費：
基盤研究（C）（２）「尾張・三河武士における歴史再構築過程の研究」（研究代表者・南山大学青山幹哉助教授）研究分担者
❻ 学部入学試験部会委員，入学者選抜方法等専門委員会委員，高大連携選抜入試実施プロジェクト構成員
❼ 愛知県史（中世史部会）調査・執筆委員
安城市史（古代中世部会）編集委員

土屋　武志　Tsuchiya, Takeshi　　助教授　社会科教育講座　　教育学修士

❶ 社会科教育学，教科教育学，歴史教育学，歴史学，総合的学習
❸ 日本社会科教育学会（評議員），全国社会科教育学会（理事），日本生活科・総合的学習教育学会（理事），日本グローバル教育学会（理事），日本教科教育学会，歴史学会，歴

史学研究会，日本公民教育学会，日本学校教育学会

❹ 社会科研究ＡⅡ（１年），社会科教育Ｂ・社会科教育ＣⅠ（２年），総合演習Ⅰ・Ⅱ・卒業研究（４年），平和と人権入門（１年），社会科教育特論Ⅰ（大学院），社会科教育演習Ⅱ（大学院）

・受講者の主体的な参加を前提としたワークショップ型の授業をおこなっている。

学習者相互に関わり合い高めあう授業実践ができる教師を育成するため，大学・大学院授業はプロジェクトベースの授業が重要である。実務家教員や地域人材と協働して，受講者が主体的に活動する授業を試みている。

❺・現在の研究テーマ

社会科教育及び総合的学習の時間に関する評価基準とその方法に関する研究。

歴史教育における思考力育成型の教材開発についての研究。

学校教育におけるコミュニケーションスキルの開発支援に関する研究。

・業績リスト

著書：歴史学研究会編『歴史研究の現在と教科書問題』（共著）青木書店，2005

『社会科中学生の歴史』（共著）帝国書院，2006

論文：「テーマ学習による歴史教育内容構成の改善Ⅰ」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第９号，2006

「アジア地域における歴史教育の現状Ⅰ」（共著）『愛知教育大学研究報告』第55輯，2006

・学術・研究交流等

インドネシア・スラバヤ大学社会科学部との共同研究

（研究交流・2005年８月，2006年１月インドネシア社会科教育学会大会での招聘講演・於スマラン大学）

❻・共通科目コーディネータ（平和と人権），時間割編成委員，市民参画型教員養成コーディネータ，６年一貫教員養成コース会議委員，教育実地研究委員

❼・審議会委員等

愛知県教育委員会義務教育問題研究協議会委員及び同専門部会長，豊明市史総集編編纂部会長，蒲郡市史編纂委員会監修委員，愛知県地域間交流教育推進協議会委員，知立市教育委員会二学期制推進研究協議会顧問，岡崎市社会科学習サークル「セーリング」顧問

・現職教育助言及び講演

附属岡崎中学校，愛知県教職員組合教育研究集会，岡崎市現職教育研究集会，稲沢市現職教育研究集会，小牧市立岩崎中学校，小牧市立味岡中学校，知立市立知立南中学校，岡崎市立岩津小学校，愛知県教育委員会教職10年経過研修会（社会科），千葉県中学校社会科教育研究会研究大会等

・岡崎市家庭教育学級（子どもに必要な学力）講師，豊橋市家庭教育学級講師

❽・愛知教育大学岡崎市国際理解セミナープロジェクトマネージャー（岡崎市との地域連携・共催事業）

・中日新聞社との協働事業（総合演習Ⅱ）プロジェクト担当者

・愛知教育大学公開講座「子どもを活かす授業」講師

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

吉田健太郎　Yoshida, Kentaro　　助教授　社会科教育講座　　博士（文学）

❶ 哲学
専門分野：西洋近世哲学史
関連分野：倫理学　科学思想史

❸ 日本哲学会，日仏哲学会，中部哲学会，デカルト研究会

❹ 専門教育入門（１年），人文科学入門（哲学入門）（１年），哲学基礎演習（２年），倫理学基礎演習（２年），社会科教育A（２年），社会科教育B（２年），倫理思想史概説（３年），環境倫理（３年），宗教哲学演習AB（４年），宗教倫理学演習AB（４年），哲学原書講読（４年）

１年生向けの入門講義では，「哲学的思考に親しむ」ことをテーマに授業を展開している。１年生の「哲学」「倫理学」の対するイメージは，高等学校公民科「倫理」の学習である。すなわち特定の哲学者の学説を網羅的に暗記していくというイメージである。まずは，そのイメージを払拭することに努めている。身近な事象に対して「哲学的」に思考することの楽しさを感じ取ってもらうことを授業実践の目標としている。

２～４年の専攻科目では，彼らが将来教壇に立った時のことを想定しながら，理論と実践の橋渡しを心がけている。すぐれた実践にはそれを支える理論が必要なこと，哲学にしても教育実践にしても「人間」に関わることであるから，人間についての哲学的考察は将来の教育活動のすぐれたバックボーンになること，を常に力説している。問題があるとすれば，専攻（専修）科目の必修単位数が減少した影響で，学生の専攻（専修）科目に対する目的意識が以前よりも落ちているという点であろうか。自分の得意分野を深めることは，同時に幅広い教養の取得可能性を含むこと，そしてその逆も言えること，を伝えていきたい。

２年生向けの社会科教育ABは，社会科という教科の目標でもある「求められる公民的資質」について討議していくという形で展開している。どちらかといえば基礎的･理論的な部分に力点を置いて授業を行っている。

❺ （１）西洋近世哲学における「理性」概念の考察及び「自由意志」概念の考察。
（２）西洋近世哲学における情念論の系譜の探究。
（３）倫理の自然主義的基礎付けの可能性。
（４）心身問題。近世哲学のパースペクティブと現代哲学のパースペクティブの比較検討。

論文：
「「無限」はいかにして認識されるのか―無限を巡るデカルトとガッサンディの論争から―」（名古屋大学哲学論集第７号2005年４月）

現在の研究テーマは，西洋近世哲学における「情念」と「自由意志」を巡る諸問題である。近世哲学はのちの近代哲学とは異なるパースペクティブで「情念論」というジャンルを築いている。とりわけデカルト・スピノザ・ヒュームの「情念論」での議論を追いながら，「情念」に関する近世的理解の確定を課題としている。この作業は，同時に，現代の心身問題に対して新たなパースペクティブを提供するのではないかと思われる。

❻ 時間割編成専門委員会委員

❼ アカデミック・クエスト講座（哲学入門）

地域社会システム

梅下　隆芳　Umeshita, Takayoshi　　教授　　地域社会システム講座　　経済学修士

❶ 環境経済政策，費用便益分析

❸ 日本経済政策学会（理事，本部幹事），日本環境・経済政策学会，日本公共選択学会

❹ 国際経済システム論（１年），国際理解と経済（２年），経済学概論Ⅰ・Ⅱ（２年），日本経済論演習Ⅰ・Ⅱ（３年），環境経済学（３年），日本経済論実習Ⅰ・Ⅱ（４年），経済政策論研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

❺・現在の研究テーマ：

地球温暖化問題と京都メカニズム（特に，排出権取引制度とクリーン開発メカニズムが二酸化炭素排出削減に及ぼす効果について）

環境と公共投資の費用便益分析（企共投資のもたらす環境への負の効果を組み込んだ費用便益分析）

❻・教育研究評議会評議員
・地域社会システム講座代表
・財務委員会委員

近藤　潤三　Kondo, Junzo　　教授　　地域社会システム講座　　博士(法学)

❶ 政治学　ドイツ現代政治・政治史

❸ ドイツ現代史学会　社会思想史学会

❹ 国際理解と政治（２年），比較政治学（３年），現代政治論（３年），現代政治史（４年），比較政治演習（３・４年），政治原論研究（大学院），比較政治演習（大学院）

❺ 現在の研究テーマ：

ドイツの移民政策　社会国家再編の政治過程

業績リスト：

近代ドイツの歴史　共著　ミネルヴァ書房　2005年
現代ドイツのイスラム組織とイスラム主義問題　社会科学論集44号　2006年
ドイツの月曜デモに関する一考察　同上
戦後ドイツの街頭政治について　同上
ドイツで開館した海外移民記念館について　同上
ドイツの主要なイスラム組織　同上

科学研究費：

基盤研究（B)「ドイツ社会国家の成立・変遷とそれをめぐる論争及び学説」分担

❻ 入学試験委員

❼ 国立国会図書館調査及び立法考査局で講演
大阪防衛施設地方審議会委員

阿部　和俊　Abe, Kazutoshi　　教授　　地域社会システム講座　　文学博士

❶ 都市地理学

❷ 日本都市学会賞（1994年10月）

❸ 日本地理学会（評議員），人文地理学会（協議員），経済地理学会（評議員，常任監事），日本都市学会（常任理事），フランス地理学会（名誉会員）

❹ 地誌概説Ⅰ（２年），地誌概説Ⅲ（３年），論文演習（３・４年），地理学基礎演習Ⅱ（２年），人文地理学演習（大学院）

❺・現在の研究テーマ（内容及び今後の研究計画）：
　世界の都市システム研究
・業績リスト（2005年度分のみ）：
［武漢訪問，CREC vol.151，中部開発センター］
［経済的中枢管理機能からみた韓国の都市体系の変遷（1985－2002），愛知教育大学地理学報告，vol.101，愛知教育大学地理学教室］
［経済的中枢管理機能からみたポーランドの都市体系，愛知教育大学研究報告　人文・社会科学，第55輯，愛知教育大学］
［名古屋の施設配置を考える，CREC vol.154，中部開発センター］
・科学研究費補助金などの受領状況：
　経済的中枢管理機能からみた中国とロシアの都市システム（H16～18）
　総額340万円（基盤研究C　代表）
・学術研究交流等：
　日本都市地理学会の創設

❼・土岐川庄内川流域委員会委員
・安城市史編集委員長
・国際連合地域開発センターを支援する会

岩崎　公弥　Iwasaki, Kimiya　　教授　　地域社会システム講座　　博士（文学）

❶ 地理学
専門分野：歴史地理学
関連分野：地誌学

❷ 日本地理学会研究奨励賞（1986年）

❸ 日本地理学会，人文地理学会，歴史地理学会，地理科学学会（評議員），広島史学研究会，愛知教育大学地理学会

❹ 専門教育入門A・B（１年），論文演習Ⅰ・Ⅱ（３年・４年），地理学野外実験Ⅲ（３年），課題研究B（４年），地誌学実験（大学院）

2005年度は学長補佐として管理運営に携わった関係で，従来に比較して授業が少なかった。その中で，地理学の専門の授業として，人文地理学，地誌学の講義をするとともに，地理学の基礎的演習や野外実験（巡検）を通して，地理学の基礎的素養と地理的な見方考え方を育成できるよう教育を行っている。野外実験（巡検）は，現地に赴いて実際に観察したり調査をしたりする授業である。2005年度は琵琶湖湖東地方に出かけ，歴史地理的な事象はもとより，地形的に特徴のある事象の観察を行った。また専門教育入門では大学周辺での土地利用調査や景観観察を通して地域の調査法の指導を行った。大学院教育では地誌を講義・実験を担当している。その他，小学校社会の内容として社会科研

究を担当してきた。小学校社会科教育との関連では，最近10年ほど，小学校社会教科書の編修に携わることとなり，その関係から三河部において市町村単位で作製されている社会科副読本の監修を務めている。時々学校現場での研究会などに出向き助言などを行っている。

❺ (1) 近世綿作の歴史地理学的研究

(2) 英国の地誌的研究

１．現在の研究テーマは，わが国近世における綿作の地域的展開状況を歴史地理学的視点から究明することである。わが国の綿作地をいくつかの地域的類型に分け，それぞれについてその地域的・類型的特色を明らかにしていく予定である。すでに，尾張や三河といった東海地域の綿作については，単著としてまとめたので，今後は西日本の瀬戸内や山陰地域の綿作について究明を進めていく必要がある。研究のスタイルは，地方文書に依拠しながら，メソ・スケールとミクロ・スケールの研究を基本としている。地形条件，水利，気候環境などの自然条件を考慮しながら，過去の地域の景観的復原をおこなうことによって，テーマに迫るという方法を採っている。

最近の関心あるテーマは，地誌である。特にイギリスの地誌について深めていきたいと考えている。地誌は国際理解教育の必要性が高まる中で，今後ますます重要になっていくであろうと思われる。イギリスにはかつて在外研究員として10ヶ月滞在した経験があり，親しみ深い国でもある。イギリスの地誌については，その歴史地理的背景をふまえた地誌叙述を行いたいと考えている。

２．「地図の基礎基本をどう指導するか－古地図の指導･ポイントはどこか」社会科教育554号，2005年。

❻ 人文社会科学系学長補佐（学生支援担当理事補佐）

❼・蒲郡市史監修者
・愛知シルバーカレッジ講師
・岡崎市教育研究集会中学校社会科助言者

渡邉　雅弘　Watanabe, Masahiro　　教授　　地域社会システム講座　　法学修士

❶ 政治学，ヨーロッパ政治思想史，洋学史（受容史）

❸ 日本政治学会，日本西洋古典学会

❹ 日本国憲法（１年），政治学概論（１年），専門教育入門Ａ（１年），専門教育入門Ｂ（１年），社会科学入門演習Ⅳ（２年），現代政治演習Ⅰ（３年），西洋政治思想（３年），比較政治演習Ⅱ（３年），総合演習Ⅰ（３年），政治学演習（４年）/政治文化論研究（大学院），政治思想史演習Ⅰ＆Ⅱ（大学院）

「ゆとり教育」以来，中学・高校での社会科の学習量は従来の６割程度に落ちたと言われる。ただでさえこの程度であるのに，法律学・政治学・経済学・社会学は特に学生には馴染みのない大人の学問であるから，斯学の原理原則及び歴史性についていかに平明な解説に努めても，受け身の学生に理解させるには限界がある。社会科に在籍しながらテレビのニュースも見ず新聞も読まない学生に，社会や特に国家に対する関心を喚起しつつ，学生が強いて背伸びをして，自発的に勉学するようにし向けたい。厳密な積み上げの学習がカリキュラム上は無理だとしても，政治学概論で国家学を中心に現代政治

学を紹介し，社会科学入門演習Ⅳで文献の調べ方・読み方を指導し，現代政治演習Ⅰ，西洋政治思想，比較政治演習Ⅱで，政治史に言及しながら，政治学の基本である政治哲学の考え方を専門教育として徹底したい。

❺ エピクロスの政治哲学及び原典の翻訳と註解，プロテスタンティズムとカトリシズムの政治思想（A・D・リンゼイ，三谷隆正，岩下壮一），わが国における西洋古典学/ギリシア哲学思想の受容史。

「日本におけるギリシア学・ローマ学の流入・移植・受容と展開の文献史（八）」社会科学論集（愛知教育大学社会科学会）44号

❻ 共通科目委員会＆研究交流雑誌編集部会，就職委員会専門委員

青嶋　敏　Aoshima, Satoshi　教授　地域社会システム講座　法学修士

❶・法律学，専門分野：民法学，関連分野：法社会学。

❷ 日本農業法学会賞（1991年５月）

❸ 日本私法学会，日本法社会学会，日本農業法学会，信託法学会，日本不動産学会，比較家族史学会，中日本入会林野研究会（運営委員）

❹ 社会科学入門・法律学（１年），国際理解と法律（２年），比較法制度論（３年），比較法制度論演習Ⅰ（３年），比較法研究（３年），法学演習Ⅰ（３年），比較法制度論演習Ⅲ（４年），比較法制度論演習Ⅳ（４年），法学演習Ⅱ（４年）

・教育活動の問題点等

日本の司法制度や訴訟手続に関するテーマを取り上げている「社会科学入門・法律学」と「国際理解と法律」では，近年，夏休みを利用して授業の一環として裁判の傍聴を行ってきたが，セメスター制を完全実施（７月末で前期授業を終了）することに伴い，夏休みを使った学外授業が実施しにくくなると予想される。裁判傍聴は教室の講義では得られない生きた学習をする機会となっていると考えているが，今後その実施時期の検討が課題となってくると思われる。

❺・現在の研究テーマ

沖縄における近代土地法の形成

公益法人制度・公益信託制度の研究

・業績リスト

論文：

「浮掛地報償廃止運動とふたつの沖縄県土地整理法改正（法）案――その相互関連性をめぐる一考察――」，平成13年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書『沖縄における近代法の形成と現代における法的諸問題』47―76頁，2005年。

コメント：

「法律学からみた『コモンズ論』の課題」，『中日本入会林野研究会会報』26号，31ー33頁，2006年。

資料：

「明治39年版『沖縄県令達類纂』（上下巻）所収令達一覧」，『社会科学論集』44号，243ー275頁，2006年。

口頭発表：

「沖縄県における浮掛（地）の意義，起源，類型および法的性質」，「沖縄近代法の形成と展開」研究会，沖縄大学，2005年。

・研究助成の受領状況

平成17年度科学研究費補助金基盤研究（A）「沖縄近代法の形成と展開――沖縄における特殊性と普遍性――」（研究分担者）。

❻・動物実験委員会委員
・情報公開委員会開示・不開示検討専門委員会副委員長
・国際理解教育課程国際文化コース代表
・国際理解教育課程国際文化コース国際社会履修モデル代表

❼・小坂井町個人情報保護審議会委員
・小坂井町情報公開審査会委員
・新城設楽地区市町村職員研修協議会平成16年度一般職員中期研修講師（民法）

松岡　和人　Matsuoka, Kazuto　　教授　　地域社会システム講座　　経済学修士

❶ 経済学
専門分野：国際金融論
関連分野：金融論

❸ 日本金融学会，生活経済学会，日本経済政策学会，金融懇談会，中部経済問題研究会

❹ 国際社会と日本・世界の諸地域A（１年），専門教育入門A（１年），専門教育入門B（１年），社会科学入門演習Ⅱ（２年），国際金融論（３年），国際金融論演習Ⅰ（３年），国際金融論演習Ⅱ（３年），総合演習Ⅰ［公民］（３年），国際金融論実習Ⅰ（４年），国際金融論実習Ⅱ（４年）国際金融論演習Ⅰ（大学院），国際金融論演習Ⅱ（大学院）

教育活動の現状と問題点についてはいろいろな機会に述べているが，経済学という分野は常識として誰もが身につけなくてはいけない部分と，そうではない専門的な部分から構成されているため，そのバランスをどうとるかということが常に大きなテーマとなっている。なかでも国際金融論，国際金融論演習Ⅰ，国際金融論演習Ⅱにおいては理論，歴史，制度，政策などもバランスよく扱う必要があるため，参考文献などの紹介の際配慮している。

また教育学部という性格上，経済学関連の授業を大学で一講義のみ受講するという学生もいるため配慮が必要となる。特に国際社会と日本・世界の諸地域A，専門教育入門A，専門教育入門B，総合演習Ⅰ［公民］は複数の教官が一講義を担当するため，興味のもてそうなテーマのうち時間数に合ったものを選ぶ必要が出てくる。これらの授業では最新の経済専門誌などから資料を得て，一定の結論を提示できるよう努力している。

次に国際金融論演習Ⅰ，国際金融論演習Ⅱなどの大学院の講義についてであるが，多くの受講生が大学学部時代に経済学の授業をほとんどとっていないため，大学院本来の国際金融論演習の授業をそのまま行なうことはむずかしい。したがって一つのテーマについてじっくり考えてもらうことを念頭に資料などを配布している。

❺ （１）外国為替理論の展開
（２）外国為替理論に纏わる通貨の諸問題（通貨統合など）

１．14世紀における西欧の金銀複本位制と為替レート決定　「愛教大研報」（人社）第55輯，2006年３月.

現在の研究テーマは広い意味では貨幣論といえる。一つの研究テーマは外国為替理論

の展開（歴史的な因果関係）について考察し，各外国為替理論の特徴を探ることである。最近は特に18-19世紀のイギリス及びフランスの貨幣論，為替論争などを扱っている。その時代，ヨーロッパの貨幣論は国境という枠組みを越えて展開していたためイタリア，スウェーデン，スペインなどの貨幣論の研究もある程度行なう必要がある。したがって時間のかかる研究テーマとなっている。また文献の入手も大きな仕事となっている。外国為替理論は貨幣論の中においては一部分とはいえこのような状況にある。

一方，貨幣論に関するもう一つの研究テーマである外国為替理論に纏わる通貨の諸問題については，主に通貨統合についての考察である。19世紀の貨幣論では，金本位制と金・銀複本位制のどちらが国際通貨体制として適しているかが問題となっていた。そして19世紀後半には金本位制を主張する国々，金・銀複本位制を主張する国々それぞれが別個の通貨統合を試みることとなった。現在のEUにみられるような通貨統合の精神もこの時代の通貨統合に見出すことができよう。したがって現在のEUとともに19世紀後半の通貨統合に注目している。

❻ 共通科目専門委員会委員

清田　雄治　Kiyota, Yuji　　教授　　地域社会システム講座　　法学修士

❶ 憲法学

❸ 日本公法学会，全国憲法研究会

❹ 日本国憲法（１年），情報教育入門Ⅰ（１年），情報教育入門Ⅱ（１年），国際人権法論演習Ⅱ（３年），法学演習Ⅱ（４年），国際人権法論演習Ⅲ（４年），国際人権法論演習Ⅳ（４年）

・教育活動の問題点など……2005年度は１年生配当の必修科目情報教育入門Ⅰにおいて，同年４月からの個人情報保護法の施行を受け，パーソナルコンピュータやネットワークにおける自己情報を含めた個人情報保護の課題や問題点，及び被害の多発した「振り込め詐欺」等詐欺犯罪の危険性並びにその注意点について力点を置いて講義を進めた。図解ファイルや公正証書の実物など可能な限り視聴覚メディアの利用にも努めた。ただ，全体として時間数・回数が少ないため，受講生の理解度の把握，双方向の意見交換という点では今後改善の余地があるように思われた。

❺・フランスにおける個人情報保護及び情報ネットワーク法制のわが国との比較研究

・「フランスにおける個人情報保護法制と第三者機関」（立命館法学第300・301号，2006年）

「フランスにおける個人情報保護の憲法的保障」（立命館大学政策科学，13巻３号，2006年）

「情報と法，2006年度情報教育入門Ⅰ」（CD-ROM版）

「フランスにおける個人情報保護法制と第三者機関，反テロ法制」（科学研究費「転換期における市民的安全構築の比較憲法的研究」合宿研究会報告）

科学研究費基盤研究（B）「転換期における市民的安全構築の比較憲法的研究」（森英樹研究代表）の研究会Webページの作成・管理（http://3tree.rss.aichi-edu.ac.jp/）

・科学研究費基盤研究（B）「転換期における市民的安全構築の比較憲法的研究」研究分担者（森英樹研究代表）

❻ 共通科目専門委員会日本国憲法グループコーディネーター

野地　恒有　Noji, Tsuneari　　教授　　地域社会システム講座　　博士（文学）

❶ 民俗学・文化人類学　博物館学

❷ 第７回日本民俗学会研究奨励賞（1987年10月）

❸ 日本民俗学会，歴史人類学会，相模民俗学会，山陰民俗学会，静岡県民俗学会

❹ 比較文化論Ⅰ（１年），日本民俗文化概説（３年），日本民俗文化演習Ⅰ（３年），日本民俗文化演習Ⅱ（３年），日本文化論演習Ⅰ（４年），日本文化論演習Ⅱ（４年），博物館学演習Ⅰ（３年），博物館学演習Ⅱ（３年），博物館実習（４年），民俗学特論（大学院），民俗学演習Ⅰ（大学院），民俗学演習Ⅱ（大学院）

・教養教育及び専門教育において，民俗学という分野からみた日本文化論を幅広くとらえて授業を進めている。その内容は，民俗学の基本的な考え方とその調査法（地域研究法・郷土研究法），民俗学からとらえられる日本・郷土の具体的な伝承的世界の説明である。地域社会の伝統的な産業・行事祭礼における参与観察や聞き取り調査を学生に試みてもらうことにより，日本・郷土の文化を体験的・具体的にとらえることを目標としている。ビデオ映像を活用して，民俗事例を提示して授業を進めている。教員養成課程社会専攻と学芸４課程国際文化コースの博物館学芸員資格取得にかかわる運営と授業を担当している。その授業では，博物館展示の見学や実習をとおして，郷土研究と博物館活動の関係を実践的・具体的に進めることを目標としている。

❺・郷土研究と博物館活動の関係。日本における漁村・島嶼社会の地域研究，とくに現代漁業の漁業技術に関する民俗学的研究。観賞用動植物（改造自然物）の飼育技術・鑑賞の伝統，その中国との比較研究。

・業績リスト

「書評　池田哲夫著『近代の漁撈技術と民俗』」『日本民俗学』242号，2005年５月

「板画のナチュラリスト　長谷川富三郎遺作集発刊」『日本海新聞』文化欄　2005年９月14日

「随順化する自然（2）―ナンキンの品評会とその選評基準―」『日本文化論叢』14号，愛知教育大学日本文化研究室，2006年３月

口頭発表「金魚の作り出し方―『嵌合』の民俗技術―」第６回「個に宿る全体」研究会，人間文化研究機構総合地球環境学研究所，2005年７月30日

蒲郡市史編さん事業実行委員会編『蒲郡市史　本文編３　近代編・民俗編』の「民俗編」の監修

・科学研究費補助金

「観賞用動植物の飼育・栽培の改造技術にみる伝承的特徴に関する民俗学的研究」（基盤研究（c）（2），代表者：野地恒有，60万円）

・学術・研究交流

❻・教育実地研究専門委員会委員

・人文社会科学系ホームページワーキング委員

❼・愛知県史編さん委員会民俗部会調査執筆委員

・蒲郡市史編さん事業実行委員会編さん委員監修者

・岡崎市博物資料収集委員会委員

・『音楽ワーク４年』（文溪堂，2005年４月）における「日本の祭ばやし」の校閲

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

石丸　博　Ishimaru, Hiroshi　助教授　地域社会システム講座　学術修士

❶ 社会学：政治社会学，比較社会学

❸ 日本社会学会，関西社会学会，名古屋社会学研究会

❹ 社会科学入門（社会学）（１年），社会学概論（２年），現代社会学演習Ⅰ（３年），比較社会研究Ⅱ（３年），社会調査実習Ⅰ（３年），比較社会学研究Ⅰ（４年），比較社会学研究Ⅱ（４年）

１・２年の授業においては，基礎的な内容面はもちろんであるが，これまでの常識を疑う知的追求のおもしろさや，授業・学問において守るべき態度・作法はどのようなものかが伝わるよう努めている。

３・４年の授業においては，本質的には以上と変わるものがないとしても，じっさいに卒業論文が書けて卒業できるよう，そのための知的体力とでもいうべきものが身につくよう努めている。

❺ 官僚制の比較社会学的研究

＜古代と近代＞の思想史的研究

後者に関して，「ラクー＝ラバルトの悲劇論（上）」『社会科学論集』44号，2006年。

❻ 講座発行の雑誌『社会科学論集』の編集。

伊藤　貴啓　Ito, Takahiro　助教授　地域社会システム講座　博士(理学)

❶ 人文地理学（経済地理学：農業地理学），ヨーロッパ地誌，地域学習

❸ 日本地理学会，人文地理学会，経済地理学会，東京地学協会，日本地理教育学会，愛知教育大学地理学会，日本農業市場学会，日蘭学会，Koninkijk Nederlands Aardrijkskundig Genootschap (Royal Dutch Geographical Society)，Association for Borderlands Studies

❹ 日本の社会と表現文化展開（２年），専門教育入門B（１年），社会科研究A２（１年），地理学実験（２年），地理学演習（３年），地理学基礎Ⅰ（３年），総合演習Ⅰ（３年），地理学野外実験（３年），地理学論文演習Ⅰ～Ⅳ（３・４年），地理学研究法Ⅰ・Ⅱ（４年），人文地理学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院）

教育活動の工夫としては，地理学基礎Ⅰで授業毎に学生の授業評価を受けながら，次時以降の授業の改善をはかった。具体的には，彼ら自身の授業への取り組みと本時の授業をそれぞれ３段階で評価させ，授業の疑問，評価できる点や改善点などの個別記述と併せてメールで報告させた。授業と授業への取り組みへの評価平均点を次時冒頭に報告するとともに，個別記述とそれら評点を連動させて分析することで授業改善をはかった。また，前時の疑問点から授業を展開することで理解の徹底をはかった。他方，社会科研究では個別記述のみをメールで報告させて授業改善をはかった。ただし，これらを全授業で行うのは時間的制約から難しく，特定授業のみにとどまっている状況にある。

❺ 研究テーマ：

①知識経済下における農業地域の自立的発展とその条件，アグロフードシステムのグローバリゼーションとその構造

②ヨーロッパ国境地帯における越境地域連携の展開と構造

③社会科における地域事象の教材化とフィールドワーク技法，食農教育と地域農業学習の展開について

口頭発表：

2005年５月，「現代日本農業の空間構造とアグロフードシステムのグローバル化－農業の工業化と農業地域の自立的発展を視座に－」経済地理学会ラウンドテーブル「日本における企業的農業の展開と空間構造の再編」（於，中央大学）発表要旨は経済地理学年報51－４に掲載

論文：

Knowledge, Learning System and Self-sustained Evolution of Agriculture in Central Japan. In Mather, A. S. ed. ***Land Use and Rural Sustainability*** **(*Proceedings of Conference on Land Use and Rural Sustainability*)**, The Commission on the Sustainable Development of Rural Systems (IGU), 39～46

その他：

国境地域からみたEUの地域統合と地域ガバナンス　地理月報486，１～４

科研費：

平成17～19年度基盤研究B「ヨーロッパ中軸地帯におけるトランスボーダー都市の空間動態」（代表，手塚章筑波大教授）研究分担者

❻ 時間割編成専門委員会委員

❼ 安城市史現代編調査執筆委員

中筋由紀子　Nakasuji, Yukiko　　助教授　地域社会システム講座　博士(社会学)

❶ 社会学（文化の社会学，現代社会論，比較社会学，社会意識論）

❸ 日本社会学会，日本宗教学会，関東社会学会，日本都市社会学会，家族社会学会。

❹ 日本文化概説（１年），日本文化理解教育論（２年），日本文化演習Ⅰ，Ⅱ（２年），現代日本社会論（３年），日本文化特論（４年），日本文化論演習（４年），共通科目「日本の社会と表現文化」，比較社会学特論（大学院），比較文化演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）

❺・保護司を対象とする，地域社会におけるボランタリズムの可能性についての研究
・戦後日本における社会意識論の歴史社会学的研究
・科学研究費基盤研究Ｂ「歴史社会学の方法と可能性に関する研究」（研究分担者）
・吉田あけみ他編著『ネットワークとしての家族』第十章「死を悼む，『死後』をつくる」
・中筋由紀子『死の文化の比較社会学』梓出版社

❻ 入試委員（補助）

足立　重和　Adachi, Shigekazu　　助教授　地域社会システム講座　博士(社会学)

❶ 環境社会学，地域社会学，社会調査論

❸ 日本社会学会，関西社会学会，環境社会学会

❹ 国際理解と社会（２年），コミュニケーション論演習Ⅰ（３年），現代社会学Ⅰ（３年），現代社会学演習Ⅱ（３年），コミュニケーション論実習Ⅰ・Ⅱ（４年），環境社会学研究（大学院）

教育に関しては，特に学生のコミュニケーション能力を向上させるため，できるだけ学生の意見を聴取し，全員によるディスカッションに発展するように努力している。また，このような授業運営によって，学生自らがテーマを設定・追及できる教育環境を整

えてきた。

❺ 伝統文化（郡上おどり）の保存・継承に関する研究，郡上八幡における生活文化の研究

○「地域社会における語りとリアリティの社会学的研究――岐阜県郡上市八幡町のモノグラフ」関西学院大学大学院社会学研究科博士論文（乙号博士），2005年.

○「地域社会における語りとリアリティ――郡上八幡という場所をとらえるための試論」『先端社会研究』第３号，関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラム・関西学院大学出版会，2005年.

❻ 時間割編成専門委員

❼ 環境社会学会運営委員，環境社会学会編集委員

水野　英雄　Mizuno, Hideo　　講師　　地域社会システム講座　　経済学修士

❶ 経済学，専門分野：国際経済学，計量経済学，関連分野:農業経済学

❸ 日本経済学会，日本経済政策学会，日本国際経済学会，経済教育学会

❹ 情報教育入門Ⅱ（１年），国際経済学Ⅰ・Ⅱ，（３年），国際経済学実習Ⅰ・Ⅱ（４年）

基本的な授業方針は，現代社会における様々な経済問題を身近な問題と関連づけてわかりやすく解説し，学生が経済学に興味を持てるようになることを目標としている。講義では理論分析に重点をおいて指導している。

情報教育入門Ⅱではワープロや表計算ソフトの使用方法，さらにはパソコンを用いた統計処理の基礎を講義している。国際経済学Ⅰは講義形式，国際経済学Ⅱはゼミ形式として，知識としての経済学だけでなく議論する能力をも身につけることを目標にしている。個別テーマとしては貿易摩擦，地域経済統合（EU，APEC）等を取り上げて考察している。国際経済学実習Ⅰ・Ⅱでは世界経済の様々な諸問題（世界的な不況，円高による構造変化等）について，ゼミ形式での議論を通じて深く考察することを目標としている。

理論に基づいた経済分析を行うことを目標にしているが，学生の関心が理論的な部分よりもコンピューターを用いた実証的な部分にあり，講義でのバランスをとることが難しい。また，経済学という学問は大学になってはじめて学ぶ学生が多く，そのためどうしても学生に違和感があり，理解しにくい分野かつ現実社会に出て役に立たない分野との錯覚を抱きがちである。そのため学生に理解しやすいような事例を多数紹介し，経済学に対する理解をしやすくするように努めている。

❺ (1) 貿易障壁の経済厚生に及ぼす影響の計量分析

(2) 狂牛病などの様々な問題の影響による社会的厚生の変化の計量分析

(3) 経済教育のカリキュラム開発と実践に関する研究

「BSEによるアメリカ産牛肉輸入禁止の経済分析」愛知教育大学研究報告（社会科学）第55輯2006年

Makoto Yano, Rika Takahashi, Hideo Mizuno “Welfare Losses from Non-Tariff Barriers: The Japanese Beef Quota Case” Japanese Economic Review Vol. 56, No.4, 2005

「経済教育の必要性と目標：初等教育からの連続性を求めて」経済教育　第24号　2005年

現在の研究テーマは,貿易障壁や狂牛病などの様々な問題の影響による社会的厚生の変化の計量分析である。特に計量分析が困難である非関税障壁（輸入数量制限，輸出補助金，輸出自主規制，等）や制度的な問題について，応用ミクロ経済学の理論モデルに基

づいた実証研究を行っている。

このような研究を行うことによって，自由貿易主義に基づく「競争」と保護貿易主義に基づく「規制」について，経済学的評価を与えることが出来る。また，このような研究によって様々な農産物の貿易自由化について，計量経済学の手法に基づいた実証分析を行うことが可能であり，貿易自由化の意義について経済学的評価を与えることが出来，農業保護と消費者厚生についての考察を可能にする。

また，狂牛病などが貿易にどのような影響を及ぼすのかについても同様の手法により分析することが可能である。

さらに，経済教育に関する研究も行っている。経済教育は学校教育の現場でこれまで積極的に行われていなかった分野である。その理由は経済教育の体系的なカリキュラムや教材が存在しないためであり，社会科教員だけでなくあらゆる分野の教員にとって活用出来る経済教育のためのカリキュラム開発や教材作成について，特に経済学の理論に基づいて行っていくことを研究している。

❻ 就職支援教員，国際文化コース再編ワーキング

外国語教育

山本　勉　Yamamoto, Tsutomu　教授　外国語教育講座　文学修士

❶ 専門分野：英語学（中期英語），英語文体論
関連分野：中期英文学

❸ 日本英文学会，日本英文学会中部支部（理事），日本中世英語英文学会，日本中世英語英文学会西支部（運営委員），日本英語表現学会，広島大学英文学会，広島英語研究会，英語史研究会，愛知教育大学英語英文学会（会長）

❹ 英語コミュニケーションⅠ（１年），英語コミュニケーションⅡ（２年），英語Ⅲ（２年），英語Ⅳ（２年），英語学講義Ⅰ（２年），英語史Ⅰ（３年），英語史Ⅱ（３年），国際社会と日本・展開２（２年），英語学講義Ⅰ（大学院），英語学講義Ⅱ（大学院）
実践的英語表現力の修得が重視されている中で，基本的知識をおろそかにしない意識を植え付けることに努めている。

❺ 中期英語物語詩の言語と表現の研究。特に広範囲の文体的技巧を示す大ローマ物長編物語詩 *Kyng Alisaunder* と，初期イングランド物物語詩 *Havelok the Dane* の言語と表現研究を中心テーマとしている。今後はイングランド物物語詩全体に対象を拡げ，中期英語イングランド物物語詩作品群全体の言語表現の特徴を明らかにしていきたい。
口頭発表：*Havelok the Dane* の構造と表現―反復性を中心に―日本英文学会中部支部第57回大会　2005.10　愛知大学

❻ 時間割編成専門委員

岩渕　邦子　Iwabuchi, Kuniko　教授　外国語教育講座　修士（文学）

❶ フランス文学，フランス文化史，ヨーロッパ美術史

❸ 日本フランス語フランス文学会，同中部支部学会，フランス教育学会ユイスマンス協会，

自然主義文学研究会

❹ フランス語Ⅰ，Ⅱ（１年），ヨーロッパ言語文化概説Ⅱ，ヨーロッパ文化講読Ⅱ（２年），日欧交流史（３年），ヨーロッパ文芸演習Ⅱ（４年），フランス文化演習Ⅰ（大学院）
ＦＤ活動：
イ）出席調べ票による出席回数確認の実施
ロ）授業毎に提出させる課題取り組み紙（ルーズリーフ使用）による学力把握の実施（平常点に反映させる）
ハ）音読テストの実施
教育に対する抱負：
読み聞き話す三拍子揃った学力が身に付くようなフランス語授業を心掛ける。

❺ 現在の研究テーマ：
ユイスマンス研究（その生涯について，キリスト教信仰について，美術批評家としてのユイスマンス，作品論等）

❻ 国際文化コース欧米文化履修モデル代表

❼ NPO法人エコークラブ・インターナショナル・ジャパン会員（目的：ジンバブエ支援）

杉浦　正好　Sugiura, Masayoshi　教授　外国語教育講座　Master of Science

❶ 英語教育
専門分野：教材論
関連分野：談話分析

❸ 全国英語教育学会（幹事），中部地区英語教育学会（運営委員長），日本時事英語学会，日英・英語教育学会，大学英語教育学会，小学校英語教育学会

❹ 英語科教育CⅡ・CⅢ（３年），英語コミュニケーションⅠ（１年），英語 Ⅰ・Ⅱ（１年），音声学（１年），英語科教育研究Ⅱ（大学院），英語科教育演習Ⅰ（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）
英語教育の実践と理論の融合を具現化するために次の点に留意する。（１）英語コミュニケーション能力を養う。（２）英語教育の専門的知識を深める。（３）指導技術を高める。

❺ 理論的な枠組みを「談話分析」に置き，実践的な英語教育指導法を追求したい。基礎基本を重視した実践的コミュニケーション能力を養成することを当面の課題としている。なお，英語になった日本語の収集と分析も継続して研究する。具体的なテーマは次の５項目である。（１）生徒のmotivationを高めるためのauthenticな教材，（２） 実践的コミュニケーション能力の養成，（３） 談話分析：英語教育への応用，（４） ライティング指導のための発信用和英辞典，（５）英語になった日本語。（６）小学校英語教育
著書：
「小学校英語」指導法ハンドブック（共訳），玉川大学出版，2005.
論文：
「英語の中の日本語―ニュージーランドを中心に―」，時事英語学研究第44号，2005.
「韓国の小学校では英語の授業がどう展開されているのか？―担任主導の英語教育―」愛知教育大学教育実践センター紀要第９号，2006.
科学研究費補助金基盤研究C（代表）「英語科教員養成における英語圏の文化的教養教育の意義と必要性に関する研究」100万円

❻ 共通科目専門委員会委員

❼ 愛知教育大学附属岡崎中学校英語科共同研究者（2006年３月まで）
東三河高等学校英語研究会第１回研究会講演「英語になった日本語―ニューズウィーク及びニュージーランドから―」（５月）
スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール研究運営指導委員（愛知県立御津高等学校）
愛知教育大学公開講座「日本と韓国における英語授業の内容と進め方の違い」（７月）
愛知県教育委員会「平成17年度英語教員のコミュニケーション能力の向上のための研修」講師（８月）
愛知県英語教育研究大会助言者（豊田市立末野原中学校）（11月）
石川県中学校英語教育研究会「英語の学力を向上させるために―語感を磨く―」（11月）
額田郡額田町立額田中学校研究発表会講師（11月）
第55回全国英語教育研究大会分科会指導助言（11月）
愛教大「語学教育シンポジウム」パネリスト「小学校英語教育について」（12月）
東浦町教育フォーラム「楽しく学ぶ小学校の英語活動」シンポジスト（２月）
平成17年度第２回三好町英語部研究会講師（３月）

山中　哲夫　Yamanaka, Tetsuo　　教授　　外国語教育講座　　文学修士

❶ フランス文学，比較文学，精神分析
❸ 日本フランス語フランス文学，日本フランス語フランス文学会中部支部学会（常任理事）
日本比較文学会，日本比較文学会中部支部学会，日本近代文学会，日本マラルメ研究会，関西マラルメ研究会
❹ フランス語Ⅰ（１年），フランス語Ⅱ（１年），フランス語Ⅲ（２年），フランス語Ⅳ（２年），ヨーロッパ文化史（２年），国際社会と日本（２年），ヨーロッパ文化講読Ⅳ（３年），ヨーロッパ言語文化演習Ⅱ（４年），卒業研究（４年），フランス文化演習（大学院）
❺ 現在の研究テーマ：
精神分析的手法によるマラルメ研究，サン=テグジュペリ研究
及び夏目漱石研究，フランソワーズ・ドルト研究
業績リスト：
「夏目漱石『京に着ける夕』―無意識の象徴言語―」神話・象徴・文化（楽浪書院），2005年
「『星の王子さま』をめぐる断片的考察（Ⅱ）」愛知学院大学語研紀要第31巻，2006年
「夏目漱石『夢十夜』の精神分析的解釈―「第一夜」について（１）―」
文学論叢第133輯，愛知大学文学会，2006年
「断章（Ⅶ）」愛知教育大学研究報告第54輯，2006年
「ドルトによる子どもの新しい教育（Ⅱ）」愛知教育大学教育実践総合センター紀要第９号，愛知教育大学，2006年
❻ 共通科目コーデイネーター
❼ 愛知教育大学公開講座「ドルトによる子どもの新しい教育」

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

中村　正廣　Nakamura, Masahiro　　教授　外国語教育講座　　文学博士

❶ 十九世紀アメリカ文学

❸ 日本英文学会，日本アメリカ文学会，日本ナサニエル・ホーソーン協会，シムズ協会(米国)，中四国アメリカ文学会，日本ナサニエル・ホーソーン協会中部支部

❹ 米文学概説（２年)，英米文学演習Ⅴ（３年)，英語Ⅰ，Ⅲ（１年，２年)，英語コミュニケーションⅠ（１年)，英語コミュニケーションⅡ（２年)，人文科学入門（１年)
学部の授業では米国の文化と歴史とできるだけ関連づけて小説等を読むように心がけている。特にアフリカ系アメリカ人やアメリカ先住民の白人文化との衝突を描いたテクストを用いて歴史と文化について考察するようにしている。

❺ 現在の研究テーマ：
William Gilmore Simms 研究：旧南部の文化
Nathaniel Hawthorne 研究：南部とアメリカ先住民の視点からの研究
業績リスト：
論文：“William Gilmore Simms and the Other American Romance in the Canon of American Literature”『愛知教育大学研究報告』(2006)
翻訳：「二つの野営地―旧北部州の伝説」(ウィリアム・ギルモア・シムズ作)『外国語研究』(愛知教育大学英語研究室，2006)

❻ 高大連携特別選抜推薦入学試験部会委員
入学者選抜方法等専門委員会委員
学部入試部会委員

南　　守夫　Minami, Morio　　教授　外国語教育講座　　文学修士

❶ 専門分野：ドイツ現代文学及びドイツ現代史
関連分野：日独比較文学及び日独比較現代史

❸ 日本ドイツ文学会，世界文学会，日本比較文学会，日本平和学会，大学教育学会，日本科学者会議
平和博物館市民ネットワーク

❹ ドイツ語Ⅰ・Ⅱ（１年)，平和と人権（２年)，ヨーロッパ現代史（２年)，ヨーロッパ現代文学論（３年)，西洋史特論（３年)，ヨーロッパ言語文化演習（４年)，ドイツ文化特論（大学院)
　語学（ドイツ語）は学生たちにとって言語と外国文化の認識への契機となることを期待している。また，教養科目の「平和と人権」の基本目標は現代の社会において高等教育を受けた市民として必要だと思われる自立的，民主的，及び平和主義的認識を学生が深める契機となることである。専門的な知識・認識を含んだ広い意味での「教養」形成の活動として，授業方法の意識化を進めることが，今後の課題だと考えている。専門の授業は，内容的にはドイツの現代史と現代文学，特にナチズムと戦争に係わる事柄を主題としているが，その際に，近年は特に，近代の日本の戦争の歴史と戦争に関わる文学作品との比較を中心的な課題として，自分の生きている社会の直接の前史と現在との関連を学生たちが自ら意識化することに役立つことを期待している。

❺ 現在の研究テーマ
(1) ドイツ及び欧米のナチズムと近現代の戦争に関する追悼所・記念碑・記念館等の調査・研究及び日本の戦争記念碑・記念館との比較研究

(2) ドイツのナチズムと戦争に係わる文学作品の研究，及び日本の戦争文学との比較研究

❻ 教育研究評議会評議員，大学改革推進委員会委員，教務企画委員会委員

小泉　直　Koizumi, Naoshi　教授　外国語教育講座　文学修士

❶ 英語学，専門分野：統語論，意味論，関連分野：言語習得

❸ 日本英語学会，日本英文学会，英語語法文法学会，英語コーパス学会，日本認知言語学会，筑波英語学会

❹ 英語Ⅰ・Ⅱ（１年），英語コミュニケーションⅠ（１年），英語コミュニケーションⅡ（２年），国際社会と日本展開１（英米の社会と文化）（２年），英文法（２年），英語学演習Ⅱ（３年），英米言語文化演習Ⅰ・Ⅱ（４年），言語学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ（大学院）

外国語科目に関しては，学生の関心を引き，かつ英語力あるいは専門知識の向上に役立つようなテキストが乏しいため，独自に補助教材などを用意するよう努めている。

❺ 研究テーマ：英語の統語論・意味論研究及び英語の語法研究

❻ 国際文化コース再編ワーキング委員
評価委員会委員

ロビンズ　アントニー　Robins Anthony　教授　外国語教育講座　修士(言語教育学)

❶ 英語教育，コンピューターを用いた語学教育，交通機関の歴史と運営

❸ 全国語学教育学会：ウエッブサイトの管理人（豊橋支部），教師教育支部の会長（４月－10月）選挙管理委員会会長（10月－），Japan Society（イギリス）- 会員

❹ 英語コミュニケーションⅠ，英語コミュニケーションⅡ，英語コミュニケーション演習Ⅰ，英語コミュニケーション演習Ⅱ，英語コミュニケーション演習Ⅲ，英語コミュニケーション演習Ⅳ，英語コミュニケーション演習Ⅴ，英語コミュニケーション演習Ⅵ，英語コミュニケーション演習Ⅷ，英語コミュニケーション演習Ⅸ，英語コミュニケーション演習Ⅹ（学部），
英語科教育研究Ⅲ，英語科教育研究Ⅳ（大学院）

❺ 英語専攻学生の卒業論文指導と評価の有効性
語学教育におけるコンピューターメデイアの生活法
2006年３月Views from another direction- Aspects of Teacher Education in Hong Kong（Explorations in Teacher Education 14-1 全国語学教育学会教師教育支部　紀要13-18頁）

❻ 国際交流事業のアドバイザー
学長裁量経費：現行の英語活動と将来の小学校での英語教育のためのシラバスの提案と教材作成の研究者

❼ （講演会）：
2005年６月４／５日　滋賀県（立命館大学）全国語学教育学会（C.A.L.L.部会）
2005年７月31/８月１日　刈谷市（本大学）全国語学教育学会（教師教育部会）

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

2005年10月８／９日　静岡市（グランシップ）全国語学教育学会
（審査員）：
2005年７月26日　春日井市中学校スピーチコンテスト審査員
（入学試験補助）：
2005年　愛知教育大学附属高等学校入学試験補助
（編集）：
2005年～　Railway Directory Yearbook（Railway Gazette）日本関連記事

フレス　アントワーヌ　Fraysse, Antoine　助教授　外国語教育講座　文学修士

❶ 中国文学，フランス語，フランス現代社会
❹ フランス語　コミュニケーション　Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ（２年），
フランス語　コミュニケーション　Ⅴ，Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ（３年），
フランス語　コミュニケーション　Ⅸ，Ⅹ（４年），
フランス語　Ⅱ（１年），
ヨーロッパ社会事情　Ⅰ（２年）
❺ French contemporary history, history of the French Fourth Republic.
La Crise de Suez et les motivations françaises de l'opération anglo-franco-israélienne. Troisième partie. 愛教大研報（人）第55輯　2006年３月
❽ 愛知県東郷町教育委員会発行フランス語講座担当

道木　一弘　Doki, Kazuhiro　助教授　外国語教育講座　文学修士

❶ 英文学
❷ 日本英文学会新人賞（佳作論文1991年１月）
❸ 日本英文学会，国際アイルランド文学協会（評議員），日本ジェイムズ･ジョイス協会，日本アイルランド協会
❹ 英語コミュニケーションⅠ･Ⅱ（１年・２年），英語Ⅳ（２年），英文学概説　（２年），英米文学演習Ⅲ（２年），英米文学演習Ⅴ・Ⅶ（３年），英米文学特論Ⅲ･Ⅳ（大学院）
授業を行う上で最も配慮しているのは，学生参加型の授業を如何に作るかという点である。一般英語に関して言えば，高校までの語彙と文法を基に，グループ活動やドラマ制作を通して，自己表現やコミュニケーション能力を身に付けられるような授業を心がけている。ただ内容のある英文をしっかり読めるようになることは，これからの社会で活躍するためにも，また幅広い知識と教養を身につけるためにもとても重要になってくると思う。その意味で，英語の専門以外の学生達にも，優れた文学作品を鑑賞できるような高いレベルの読解力も平行して習得させてやりたい。
❺ （1）James Joyceの研究：代表作 *Ulysses* を中心に，ジョイス文学の特質を研究している。特に現在は，(a) この作品が持つ独特な「語り」の構造とそのコンテキスト（当時のアイルランド社会・文化）の関わりの研究と，(b) 彼の斬新な言語実験を通して見えてくる詩的言語の解明に取り組んでいる。
（2）現代アイルランド女性詩人を代表するEavan Bolandの翻訳と研究。
論文：
1)「語り」の理論とコンテキスト－『ユリシーズ』第六挿話における「初期スタイル」とゴースト・ナラティヴについて（『愛知教育大学外国語研究』2006.3.）

口頭発表：

1）On “Ghost Narrative” in Episode 6 for *Ulysses* Symposium（青山学院大学, 2005.6.）

❻ 大学院入試部会委員

❼ （1）「物語」で辿るケルトの旅（NHK文化センター 2005. 10,15/11.5）

中川ジェーン　Nakagawa, Jane　　助教授　外国語教育講座　修士（言語学）

❶ 文学；語学；教育心理学

❷・Contemporary Poetry Series Competition 2001年 (University of Georgia), Finalist
・Four Way Books Poetry Competition 2001年 Finalist
・Cleveland State University Press Poetry Competition, 2002年 Finalist
・Gorsky Press Poetry Book Competition, 2004年 Finalist.

❸・日本協同教育学会（JASCE）理事
・GILE SIG Publications Board Chair
・全国語学教育学会（JALT）GALE SIG Publicity Chair

❹ 英語科教育C１，英語科教育CIV，ジェンダーと社会，英語Ⅰ，英語Ⅱ，英語Ⅳ，英語コミュニケーションⅠ，英語コミュニケーションⅡ，語コミュニケーション演習Ⅵ；卒業論文ゼミ

❺ 発表：
・Student-centered pedagogy。JALT PAN SIG Conference 東京， 5 月2005年
・GALE FORUM. JALT 31st Annual Conference，静岡，11月2005年
・Making a gender issues textbook. PGL IV，京都，11月2005年
・Learner-centered teaching. JALT 名古屋，12月2005年

論文：
・Making your own textbooks the easy way. TE Newsletter, 9 月2005年
・Review of Gender issues today. IATEFL Global Issues Newsletter, 11月2005年。

文学作品（詩）：
・En vivo. Tinfish 16. (Univ. of Hawaii), 8月2005年
・Politics and literature. One Less 2 (Williamsburg, MA). 12月2005年
・Trilogy. One Less 2 (Williamsburg, MA). 12月2005年。
・Air. One Less 2 (Williamsburg, MA). 12月2005年。
・Fly. Can we have our ball back (New York: NY) 2月2006年。
・In general. Can we have our ball back (New York: NY) 2月2006年。
・Tom’s gift. Can we have our ball back (New York: NY) 2月2006年。
・Short fiction. Can we have our ball back (New York: NY) 2月2006年。
・In summation. Can we have our ball back (New York: NY) 2月2006年。
・Season’s greetings. Can we have our ball back (New York: NY) 2月2006年

❻ 学生のモチベーションを高める教育法（FDパネル）12月2005年
委員会：Campus Internationalization Project

❼ AWFJ; GWW

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

南　隆太　Minami, Ryuta　助教授　外国語教育講座　修士

❶ イギリス演劇，アジアにおける英語文学，英語教育における英語文学

❷ ラ・トローブ大学先端研究所客員教授　2003年１月～３月
（A Visiting Professor in the Institute of Advanced Studies, La Trobe University）

❸ 日本シェイクスピア協会（協会委員：1998～2000, 2005～2009），日本英文学会，日本演劇学会，スチュアート朝研究会，17世紀英文学会，国際融合文化学会（役員：2004～），中部英語教育学会

❹ 英語Ⅰ・Ⅱ，英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ，英米文化研究，英米文化演習，英文学概説，イギリス事情，英米文学特論I・II（大学院）

英語関連科目においては，同時通訳者養成のための訓練法であるシャドーイングやシンクロナイズド・リーディング，サイト・トランスレーションといった学習法を導入し，読解・聞き取り・発話をつなぎ合わせた英語力向上の方法を指導することで，単に当該科目の成績のみを考えるのではなく，学習意欲のある受講生が自立した学習者として授業の外でも積極的に学習が続けられるよう心掛けている。英文学概説においては，独自の英詩アンソロジーを作成し，実際に英詩を読むことの面白さを知ってもらえるように配慮し，英文学に関する基本的教養の涵養に努めた。大学院においては，英詩と演劇を中心にとりあげ，英語教育において英文学作品が持つ可能性について，文体論，談話分析といった視点から考えるため，主にイギリスで出版された関連論文を読んだ。文学作品を鑑賞するための高度な英語読解力の涵養と，その英語教育への応用を考える機会の提供を心がけた。

❺ 研究テーマ：
「アジアにおけるシェイクスピア」「王政復古期演劇と上演研究」「アジアにおける英語文学教育・研究」「シェイクスピアとポピュラー・カルチャー」「英語教育にける文学テクスト」

業績：

１．『20世紀英語文学辞典』（研究社，2005年）237項目執筆。

２．「アジアで英文学を研究・教育すること：筑波国際シンポジウム報告」，『英語青年』2005年６月号，151 (3), pp. 44-45.

３．常山菜穂子　著『アメリカン・シェイクスピア――初期アメリカ演劇の文化史』（国書刊行会，2003年）『英文学研究』第82巻 (2005), pp.197-200.

４．「ステージからページへ：観劇と読書を結ぶ待望のガイドブックの登場」『週間読書人』2006年３月10日号，p.5。マイケル・ボグダノフ著　近藤弘幸訳『シェイクスピア　ディレクターズ・カット：演出家が切る劇世界』（研究社，2005年）の書評。

５．講演（招聘）：“When Samurai Dance: (Mis-) Representing Feudal Japan in Musicals,” Asian Studies Program Lecture, University of Florida, 7 November 2005.

６．第20回スチュアート朝研究会（成蹊大学：2005年９月18日）
口頭発表：戦わない男たち，Lord Foppington, Sir Harry Wildair, Plume: あるいは進化する (?) fop。

７．第１回18世紀演劇読書会（成蹊大学：2005年12月26日）口頭発表：*The Conscious Lovers*を読む

科学研究費補助金（研究代表者）：
平成17年度　科学研究費　基盤研究（C）（平成14年～17年）

研究課題：17世紀後半のイギリスにおける市（fair）の演劇と内乱期のパンフレット演劇

科学研究費補助金（研究分担者）：

平成17年度　基盤研究（C）（平成16年～19年）研究代表者：杉浦正好　愛知教育大学教授

研究課題：英語科教員養成における英語圏の文化的教養（Cultural Literacy）教育の意義と必要性に関する研究

平成17年度　基盤研究（C）（平成16年～19年）研究代表者：立木ドナ　神戸市外国語大学助教授

研究課題：映画を使った英語教育研究を目的とするコーパスの構築とその語用論的分析

平成17年度　基盤研究（C）（平成17年～20年）研究代表者：荒木正純　筑波大学教授

研究課題：アジア（含オーストラリア）における英米文学の受容・変容（19世紀－21世紀）

学内研究プロジェクト：

平成17年度　愛知教育大学学長経費研究プロジェクト　研究代表者：野呂忠司　愛知教育大学教授

研究課題：小学校での英語教育のカリキュラムとシラバス作成

学術・研究交流：

2005年 9 月と2006年 3 月にマレーシアのマラヤ大学英文科を訪問。C.S.Lim 教授の授業を見学し，マレーシアにおける英文学教育の実態，英語教員養成課程における英文学教育等カリキュラムの調査。

2005年11月に，アメリカ・フロリダ大学英文学教授 Richard Burt 教授の紹介により招かれ，Asian Studies Program Lecture の講師として講演を行った。

❻ 国際交流委員　学部入試委員

❽ 学術雑誌 ***Shakespeare Bulletin***（Sate Univ. of West Georgia 発行, Johns Hopkins Univ. Press 出版）編集委員

時　　衛国　ShiWeiGuo　　助教授　外国語教育講座　　文学博士

❶ 中国語学，日本語学，対照言語学

❸ 日本語学会，日本中国語学会，中国言語学会，世界漢語教育学会，中国外国文学研究学会日本文学部会

❹ 中国語ⅠⅡⅢⅣ
中国語コミュニケ―ションⅤⅥⅦⅧ
中国の言語概論（人文科学入門）
日中言語教育特論Ⅰ（大学院）

❺ 現在は主に中国語の程度副詞に関する総合的な研究を行なっています。
論文：「比較＋被修飾語＋量性成分」　『愛知教育大学研究報告』第55輯（人文・社会科学編）pp．77～76　2006年 3 月

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❼ 日本中国語学会東海支部例会の世話人として，2005年５月と10月に名古屋大学と愛知大学で計二回の研究例会を主催しました。
附属高校アカデミック・クウェスト専門講座（冬季）として，12月22日（火）に「相互理解の重要性」というテ―マの講座を行ないました。

尾崎　俊介　Ozaki, Shunsuke　　助教授　外国語教育講座　　文学修士

❶ アメリカ文学，アメリカ文化
❷ 第38回　中村英語教育賞（第１位）（1990．7），第９回　福原賞（2001．4）
❸ 日本アメリカ文学会（中部支部・運営委員長），日本英文学会，日本アメリカ学会.
❹ 国際社会と日本（１年），英語コミュニケーションⅠ（１年），英語Ⅳ（２年），アメリカ事情（２年），米文学概説（２年），英米言語文化特論Ⅰ（３年），英米文化演習Ⅰ/Ⅱ（４年）
・教育に対する抱負
専門分野に関しては，高度な内容を含めながら，学生の興味・関心を引き出すような，分かり易い授業を心がけている。また語学の授業に関しては，近年要望の強い英語運用能力の向上を目指す授業のために,「ベーシック・イングリッシュ」を応用した独自教材開発に力を入れている。またその参考とすべく，FD関連の講習会などに積極的に参加している。
❺・現在，研究活動の主眼は，19世紀以来アメリカで出版されてきた紙表紙の本（ペーパーバック）の出版史を発掘することに置いている。出版史の観点から見た文学史という新しい研究ジャンルが，従来の文学研究の空白を埋めることになればと考えている。
❻ 時間割編成委員会委員，愛知教育大学出版会編集委員
❼ 慶應義塾大学にて特別講義「蒐集の科学」を担当（2005年６月）

久野　陽一　Kuno, Yoichi　　助教授　外国語教育講座　　文学修士

❶ 18世紀イギリス文学
❸ 日本英文学会，日本18世紀学会，日本ジョンソン協会（大会準備委員），American Society for Eighteenth-Century Studies，18世紀英文学研究会，18世紀イギリス文学・文化研究会，日本ポピュラー音楽学会
❹ 専門教育入門（１年），英米文学特殊講義（２年），英米文学演習Ⅵ（３年），総合演習Ⅰ（４年），英語コミュニケーションⅡ（２年），英語Ⅲ，Ⅳ（２年），英米文学特論Ⅴ，Ⅵ（大学院）
❺・現在研究中のテーマ：18世紀イギリス小説，特にSamuel Richardson，Laurence Sterneの研究。18世紀の女性作家の再評価。センティメンタル小説論。アフリカ系イギリス作家。
・業績：
「（ポスト）コロニアル・アメリカの200年」。日本アメリカ文学会中部支部第22回支部大会シンポジウム。2005年４月24日，中京大学八事キャンパス。（口頭発表）
「恩恵を想像すること - 「イマジン」と「アメイジング・グレイス」に見る救済のかたち」。『20世紀ポピュラー音楽の言葉：その文学的および社会的文脈の解明』，平成16－17年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書（課題番号16520205），研究代表者：田所光男（名古屋大学国際言語文化研究科）。平成18年２月。pp. 67-80.

・学術・研究交流等：
日本ジョンソン協会大会準備委員。日本英文学会中部支部編集委員。

❻ 学部入学試験部会委員

建内　高昭　Takeuchi, Takaaki　　助教授　外国語教育講座　　教育学修士

❶ 英語教育学

❸ 大学英語教育学会，全国（中部地区）英語教育学会，言語文化学会

❹ 英語Ⅰ・Ⅱ（１年），英語Ⅲ･Ⅳ（２年），英語コミュニケーションⅡ（２年），英語科教育法（２･３年）

英語コミュニケーションⅠ・Ⅱに関しては，英語リスニングからスピーキングにつながるようにコミュニケーションの指導を行っている。受講者の専攻に応じた補助教材を使用し，より学生のニーズに合った指導を心がけている。例えば英語によるグループ発表に向けて，各グループごとにシナリオを作成するよう促し，それを基にドラマ仕立てのプレゼンテーションを行うように指導している。学生の視点を盛り込むために学生同士による相互評価を取り入れた。また演じた場面をビデオカメラで録画し，直後に映像によるフィードバックを行うことで，発表者たち自身が客観的に自分たちの英語力，発音，演技力などを振り返る機会を設けている。これらの映像を編集し直し，２年分のデータを蓄積している。今後の授業においても，英語のコミュニケーション活動を積極的に進めていく予定である。

❺ 研究テーマ：
外国語の聴解に関する研究
外国語指導における教授法のあり方に関する研究

論文：
「シャドーイング実践指導とリスニング力及び短文再生に関して」『中部地区英語教育学会』第35号，31-38頁，(2006)

口頭発表：
「シャドーイング実践指導とリスニング力及び短文再生に関して」第35回中部地区英語教育学会大会要綱26頁（2005.6）

研究助成の受領状況：
「早期英語教育における指導者の役割の考察―台湾を対象として―」（代表，交流協会）

学術･研究交流等：
比較教育研究をテーマとする台北教育大学，台東大学の研究者との学術交流を行なった。

❻ 教育実地研究委員　　基礎実習コーディネータ（附属名古屋小学校）

❼ 名古屋市立中学校・高等学校 英語教員研修会講師（名古屋市教育委員会）
“Speech Shadowing Techniques in Classroom Instruction”（2005. 8. 4）

濵嵜　通世　Hamasaki, Michiyo　　助教授　外国語教育講座　　教育学修士

❶ 英語学，統語論
❸ 日本英語学会，筑波英語教育学会
❹ 英語Ⅰ―Ⅱ（１年），英語コミュニケーションⅠ（１年），人文科学入門（１年），英文法（２年），英語Ⅲ―Ⅳ（２年），英語コミュニケーションⅡ（２年），英語学演習Ⅱ（３年）
（専門教育科目）ことばとは何かを大きなテーマとしながら，英語という言語の特性を理解することを，目標とする。
（外国語科目）４技能にわたる総合的な英語の運用能力の養成を目指し，学生の主体的な表現活動に重点をおいた授業を展開する。
❺ 主題役と文構造，照応表現
論文：「伝達動詞と照応表現」『愛知教育大学研究報告』第55号（人文・社会科学篇）2006年３月
❻ 就職委員会委員
❼ 教育実習（主免・副免）・介護体験の連絡指導教官

大野　寿子　Ono, Hisako　　講師　　外国語教育講座　　文学博士

❶ ドイツ文学，比較伝承文学，ドイツ民俗学（文化学）
❷ 第43回（2002年度）ドイツ語学文学振興会奨励賞受賞（2003年５月）
❸ 所属学会，協会，研究会：
Internationale Vereinigung für Germanistik〈ドイツ学国際学会〉，International Society for Folk Narrative Research〈国際民間伝承文芸学会〉，日本独文学会，日本独文学会西日本支部，日本独文学会東海支部【幹事】，九州大学独文学会，日本グリム協会九州支部，東ドイツ文学会「イルムの会」，グリム民話の会，比較民話研究会
❹ ドイツ語Ⅰ（１年），ドイツ語Ⅱ（１年），ドイツ語Ⅳ（２年），ヨーロッパ文化概説Ⅰ（２年），ヨーロッパ文化講読Ⅲ（３年），ヨーロッパ文学特論（３年），ヨーロッパ文芸演習Ⅰ（４年）
共通科目ドイツ語の授業で資料配布，課題提出などにメール機能付き携帯電話を利用することが，学習意欲の向上に役立っている。また，特にドイツ語Ⅳの教材に，ドイツ映画DVD，日本映画（アニメも含む）のドイツ語訳DVDを導入し，ドイツ語コミュニケーションの実践的学習に努め，特にドイツ語訳された日本映画鑑賞においては，翻訳という作業の背後に潜む異文化間相互理解の問題点にも焦点をあてている。ヨーロッパ文化概説Ⅰ，ヨーロッパ文学特論においては，特にグリム兄弟のメルヒェンや伝説といった伝承文学の「森」に焦点をあてながら，ヨーロッパ史あるいはヨーロッパ精神文化史の背後に潜む，「キリスト教的なもの」と「異教（非キリスト教）的なもの」との対立と融合のメカニズムを解説及び考察している。
❺ 研究テーマ：
ドイツ伝承文学あるいはにおける「森」についての研究，・森と人間との精神的関わりの歴史についての研究（特にドイツの樹木信仰や神話における世界観をてがかりに），・グリム・メルヒェン研究 ・グリム兄弟の学術業績（言語学，法学，民俗学，文学研究等）研究，・少数民族ソルブの伝承文学とドイツ伝承文学との比較研究，・ドイツ伝承文学における「のらくらものの国」研究（ヨーロッパ酒池肉林の象徴史）。

学会発表：

Der Wald - Eine kristallisierte Idee der Brüder Grimm（独語発表）

表題和訳：森－グリム兄弟における結晶化された理念

（2005年７月27日，第14回国際民間伝承文芸学会2005年タルトゥ会議－14 Congress of the Intertational Society for Folk Narrative Research〈ISFNR〉2005 in Tartu，於エストニア，タルトゥ大学）

Das *Südliche* und das *Nördliche* in „Italienische und Scandinavische eindrücke“ Jacob Grimms（独語発表）

表題和訳：ヤーコプ・グリム旅行記『イタリアとスカンジナヴィアの印象』における「南方」と「北方」

（2005年８月29日，第11回ドイツ学国際学会2005年パリ会議－11. Weltkongress von der Internationalen Vereinigung für Germanistik〈IVG〉2005 in Paris，於フランス，パリ・ソルボンヌ大学）

研究助成

日本学術振興会，人文・社会科学振興プロジェクト研究事業研究員（研究領域Ⅳ－２「豊かな人間像の獲得―グローバリズムの超克―」，研究グループ「伝承の現場からの考察」），研究テーマ「お菓子の家が森に存在するのはなぜか―グリム兄弟の視点と酒池肉林のヴィジョン―」

❻　共通科目専門委員（未修外国語グループ）

❼・Kariya Abend（社会人のためのドイツ語教室）ドイツ語講師

（2005年10月，東海地区ドイツ語ネットワーク主催，於愛知教育大学）

・愛知教育大学公開講座「グリムの森・ドイツの森（Ⅰ）―『子どもと家庭のためのメルヒェン集』における森についての一考察―」講師（五回講座）（2005年10月11月，於名古屋市生涯学習推進センター）

❽　その他の特記事項：　日本独文学会東海支部幹事

マイヤー　オリバー　Mayer, Oliver　講師　外国語教育講座　文学修士

❶　ドイツ語教育，ドイツ文学，現代ドイツ社会，地理学，交通学，日本学

❸　東海ドイツ語ネットワーク（副代表）

日本独文学会，同教育部会，同東海支部，日本都市地理学会，愛知教育大学地理学会，中部産業遺産研究会，金属鉱山研究会，Deutsche Gesellschaft für Geographie, Deutsche Verkehrswissenschaftliche Gesellschaft, Vereinigung für sozialwissenschaftliche Japanforschung, Deutsche Gesellschaft für Asienkunde, European Association for Japanese Studies（全て会員）

❹　ドイツ語Ⅲ，ドイツ語コミュニケーション演習Ⅰ－Ⅹ，ヨーロッパ事情Ⅱ，環境と人間セミナー

❺　現在の研究テーマ：ドイツ語教育，現代ドイツ文学（特に推理小説），都市交通問題，産業遺産

論文：「German for Everyone. An Intensive Language Course Weekend in the Tokai Region」JALT OLE Newsletter, no. 36 (June 2005), p. 15-20.

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

「Mining and Tourism: Examples from Japan」Akira Oita and Shoji Ishida (Ed): Industrial Tourism and Community Building. New Development in Industrial Tourism. Transactions of the TICCIH Intermediate Conference 2005 & International Forum for Industrial Tourism in Nagoya/Aichi, p. 173-176

「PISA-Schock und Schulreformen - Internationale Leistungsvergleichsstudien und ihre Folgen für die Bildungslandschaft in Deutschland」社会科教育研究，第95号（2005），p. 33-42

「Teaching communicative German to large classes」教養と教育，第 6 号（2006），p. 47-52

「Wie stellt man Deutschland in der Grundschule vor? Ein Diskussionsbeitrag zum Thema Vermittlung fremder Kulturen」愛知教育大学研究報告（人文・社会科学編），第55輯（2006），p.83-86

口頭発表：「Verkehr in Tokyo: Perspektiven für die Zukunft」シンポジウム: Global Tokyo. Konstruktion einer Metropole zwischen Urbanität und Provinzialität. 東京：ドイツ東洋文化研究協会（2005. 5. 14）

「ドイツ，ルール工業地帯の再生－IBA エムシャーパークと産業遺産」愛知教育大学地理学会，2005年度大会（2005. 6. 19）

「Mining and Tourism - Examples from Japan」TICCIH 2005 Intermediate Conference and International Forum for Industrial Tourism in Nagoya/Aichi （2005. 7. 7）

「鉱山と観光－日本の事例研究－」中部産業遺産研究会，第75回研究会（2005. 7. 24）

「Introducing 'Germany' at Elementary Schools in Japan」JALT Teacher Education SIG, Summer Retreat，刈谷市（2005. 7. 30）

「Barrier Free Urban Public Transport」11th Conference of the European Association for Japanes Studies　ウィーン大学（2005. 9. 2）

学会参加：11th Conference of the European Association for Japanes Studies　ウィーン大学

❻ 情報システム委員会，人文社会科学系ホームページ作成ワーキングループ，国際文化コースの学芸 4 課程再編ワーキンググループ（全て委員），国際文化コース・欧米文化履修モデルの 3 年生担当，光熱水費の節減推進担当

❼ 口頭発表：

「ライン川の旅とドイツの貨物鉄道」海外鉄道研究会，名古屋例会 （2005. 7. 9）

「Eisenbahnen in Japan」ヴェストファーレン産業博物館，ドイツ （2005. 9. 14）

「ウィーンの路面電車」日本路面電車同好会，名古屋例会 （2005. 10. 29）

「ドイツのサッカーとワールドカップ」名古屋日独協会 （2005. 11 .19）

「産業観光の新たな展開」パネルディスカッション，名古屋商工会議所 （2006. 1. 25）

「ドイツの環境意識」名古屋藤が丘小学校 （2006. 2. 3）

公開講座：

「第 3 回ドイツ語週末の集い」東海ドイツ語ネットワーク（2005. 10. 8-9）

「楽しいドイツ語，第 5 回」名古屋独楽会Kreisel日独協会 （2005. 4. 2）

❽ 附属図書館の「環境についての教科書と絵本展―ドイツを中心に」協力 （2005. 11. 2-15）

数学教育

金光　三男　Kanemitsu, Mitsuo　　教授　　数学教育講座　　理学博士

❶ 専門分野：代数学，グラフ理論

❸ 日本数学会，日本数学教育学会，教育学会，日本総合学習学会（評議員）

❹ 離散数学B（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ（３，４年），代数学講究Ⅰ（大学院），代数学演習Ⅰ（大学院），特別研究Ⅰ，Ⅱ（大学院）

・離散数学Bで多人数の受講生があり，学力も興味の持ち方も多様な学生に如何に効果的な授業にするか課題。FD活動：「語学シンポジューム」に参加。アメリカ・台湾・ミヤンマー等の留学生にボランティア授業「不思議な数のお話」を行う。

❺・研究テーマ：
可換環や可換半群のイデアル論関連，グラフ理論と固有多項式の関連等。

・論文：
Some properties of the complete integral closure of an almost pseudo-valuation semigroup, The Pacific and Asian Journal of Mathematical Sciences, vol. 1 (no. 1) (2005), 41-45.

・口頭発表：
（１）あるグラフの隣接行列の固有多項式と４－サイクルについて，日本数学会，2005年９月，於：岡山大学。
（２）On complemented graphs and characteristic polynomials，京都大学数理解析研究所研究集会 2006年２月。

・浪川幸彦氏（名古屋大学）より科学研究費の受領，京都大学数理解析研究所より「代数・言語・計算に関するアルゴリズム」の研究集会に出席し講演するための旅費の受領。

・ポーランド・インドやトルコの数学者より研究交流依頼のメールがくる。JP Journal of Algebra, Number Theory and Applications に投稿論文のエディターの仕事を行う。数種類の外国学術雑誌からエディターの依頼をされる。ギリシャとアメリカの研究者から「数学者オイラーの誕生300年記念論文」の招待論文の執筆依頼をされる。「科学ミュージアム」に「注目の研究者」の一人として推薦される。

❻ 学長補佐（自然科学系評議員，教務企画理事補佐，役員部局長会議会員），教育研究評議会評議員，教務企画委員会委員（時間割編成専門委員会（委員長），大学院課程運営改善委員会，幼稚園教員認定試験実施委員会（委員長）），認証評価委員会委員，教員人事委員会委員（教員評価・制度改革部会（部会長）），大学改革推進委員会（第一，第四部会，６年一貫教員養成コース具現化専門委員会（委員長）教職大学院設置構想検討専門委員会），放射線障害予防委員会（委員長），），水質汚濁防止検討委員会（委員長），財務委員会委員（施設専門部会員），国際交流委員会委員，研究基金委員会，出版会運営及び編集委員会等他多数。

❼ 市民プロジェクト2006「親子の絆」（於：瀬戸文化センター）で，約15組（30人）の親子との算数学習を行う。教員養成系大学・学部数学教員懇談会の世話役・司会者と数学通信にその報告を掲載。日本学術会議付置数学教育（将来計画）小委員会委員。愛知県立緑高等学校で「生物界にあらわれる数の話」の出前授業。中部・近畿地区留学生交流

研究協議会や愛知県内教育関係者懇談会に出席。各地区教育実習打ち合わせ会の司会者。

渡邉　　治　Watanabe, Osamu　　教授　　数学教育講座　　理学博士

❶ １変数複素解析学，リーマン面
❸ 日本数学会
❹ 自然科学入門（１年），集合と初等整数論（１年），複素数の基礎（２年），計算機による数値計算A（３年），集合と位相（３年），情報学・情報数学Ⅰ（３年），解析学講究Ⅳ（大学院）
❺ リーマン面上のリーマン（・ヒルベルト）の境界値問題，ニュートンの逆２乗法則のファインマンによる初等的証明の復元
❻ 数学教育講座代表，自然科学系評議員，財務委員会委員，大学改革推進委員会委員
❼ 公開講座　題目　「ケプラーからニュートンへ」
実施日　2005年８月27日（土）～９月24日（土）　（５回）

古川　靖邦　Furukawa, Yasukuni　　教授　　数学教育講座　　理学博士

❶ 専門分野：幾何学
関連分野：位相幾何学
❸ 日本数学会
❹ 自然科学入門（１年），線形数学Ⅰ（２年），線形数学Ⅱ（２年），図形処理A（３年），図形処理B（３年），組合せ幾何学（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ（４年），幾何学講究Ⅱ（大学院），幾何学演習Ⅱ（大学院），特別研究Ⅱ（大学院）
❺・Proc.of the Int.Conf. on homotopy theory and related topics (Seoul 2005.5), On the Lusternik Schnirelmann category of real Stiefel manifolds, 81-85.
・Lusternik Schnirelmann category について，鹿児島大学談話会 2006年３月16日.
・Peter Wong 教授（USA Bates College）が「不動点についての概説」の題目で講演をした。日本古来の数学，和算に大変興味を持ち「算額展」を見学し，その後知立花菖蒲を鑑賞した（平成17年６月３日）。
❻・教員選考委員会委員
❼・教育実習連絡指導 扶桑中学校（2005年６月），大生小学校（2005年10月）

浦田　敏夫　Urata, Toshio　　教授　　数学教育講座　　理学博士

❶ 専門分野：多変数複素関数論
関連分野：複素多様体論
❸ 日本数学会，日本数学教育学会（代議員）
❹ 情報教育入門Ⅱ（１年），微分積分演習Ⅰ（２年），微分積分演習Ⅱ（２年），微分積分Ⅲ（３年），微分積分Ⅲ（３年），総合演習Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ（４年），情報学・情報数学研究Ⅲ（４年），解析学講究Ⅴ（大学院），解析学演習Ⅴ（大学院）
微分積分演習Ⅰ（２年），微分積分演習Ⅱ（２年）は情報数学モデル専攻の学生の中学校数学及び高校数学教員免許取得に必要な専門科目として，中学校・高校教員に必要な数学理解を獲得させるために丁寧な演習を行っている。

微分積分Ⅲ（３年）は受講希望者が多数のため，２クラス開講した。

❺ 複素平面C上の正則関数の反復がもたらす力学系の性質に興味を持っている。整関数のFatou集合やJulia集合の一般論及びある種の特殊な超越整関数へのこの理論の適用を具体的に研究している。

JICA「サウジアラビア教育カリキュラム開発」の研修への協力に関連した数学教育研究。

❼ 愛知県数学教育会副会長
愛知教育大学数学教育学会会長

林　　誠　Hayashi, Makoto　　教授　　数学教育講座　　理学博士

❶ 代数学，離散数学
❸ 日本数学会
❹ 代数学Ⅱ（２年），離散数学Ａ（１年），情報学・情報数学研究（４年），数の体系（３年），代数学演習Ⅲ（大学院），代数学演習Ⅳ（大学院）
❺・現在研究中のテーマ 論理多項式と比較的小さな符号について

石戸谷公直　Ishitoya, Kiminao　　教授　　数学教育講座　　理学博士

❶ 代数的位相幾何学，数学教育
❸ 日本数学会，日本総合学習学会（評議員），愛知教育大学数学教育学会（理事）
❹ 自然科学入門（１年），専門教育入門Ｂ（１年），線形数学Ⅱ（２年），グラフ理論（２年），変換と幾何学（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），幾何学講究Ⅲ（大学院），幾何学演習Ⅲ（大学院）
❺ 口頭発表（共同）：「体験型の公開講座における学生の参加のあり方についての試み」，平成17年度日本教育大学協会研究集会，2005. 10. 1，弘前大学
❻ 愛知教育大学数学教育学会誌「イプシロン」編集委員長
❼ 平成17年度愛知県公立高等学校教育研究会
講演　“Introduction to Topology”，2005. 8. 8～10，カンボジア王国国立教育研究所
日進西高等学校１年生対象系統別講演会，2005. 11. 10，日進西高等学校
大館算数数学研究会講演「数学的作業の勧め」，2005. 11. 18，大館広域交流センター

志水　　廣　Shimizu, Hiroshi　　教授　　数学教育講座　　教育学修士

❶ 数学教育学
❸ 日本数学教育学会（編集部幹事），愛知教育大学数学教育学会（理事），新算数教育研究会（理事），愛知数学教育会（顧問）
❹ 算数科教育法（学部），算数科研究（学部），算数科教育論（大学院），算数科授業研究（大学院）
❺ 現在の研究テーマ：算数科の授業における「○つけ法」「意味付け復唱法」の研究
・著書：志水　廣編・岡崎市算数・数学教育研究部著「基礎基本定着テスト＆発展補充ミ

ニ教材集」中学校第３学年」明治図書　2005.５
・著書：志水　廣編「中学校数学科：○つけ法で授業が変わる・子どもが変わる」2005.６明治図書
・著書：志水　廣編「ずれを追究する算数科授業の創造」，2005.６　明治図書
・著書：志水　廣監修「確かな学力を育てる算数科学力指導略案集　低学年」，2005.６明治図書
・著書：志水　廣監修「確かな学力を育てる算数科学力指導略案集　中学年」，2005.６明治図書
・著書：志水　廣監修「確かな学力を育てる算数科学力指導略案集　高学年」，2005.６明治図書
・著書：志水　廣「授業力アップ志水塾ガイドブック２」，2005.10
・著書：志水　廣・豊田市立高嶺小学校編「算数大好きっ子に育てる」，2005.11　明治図書
・著書：志水　廣・蜂須賀渉編・岡崎市算数・数学教育研究部著「確かな学力」を育てる算数授業72選１～３年編，2006.１　明治図書
・著書：志水　廣・蜂須賀渉編・岡崎市算数・数学教育研究部著「確かな学力」を育てる算数授業72選４～６年編，2006.１　明治図書
・著書：志水　廣他「授業力アップ志水塾ハンドブック」，2006.１　for next
・著書：志水　廣編著／京都府和束町立和束小学校編著「算数科：学力アップ大作戦！」，2006.２　明治図書
・監修：わくわく算数掛図の作成及びガイドブックの編集，啓林館，2005.３
・DVD：志水　廣企画「志水塾　実践DVD１　トレーニングブック」，2006.１　for next
・論文：志水　廣「算数・数学の学力向上の方略について」イプシロンVol.47.45-51 pp45～55，愛知教育大学数学教育学会
・スコープ・・９：算数科における少人数指導のあり方，pp８～pp９
・口頭発表：算数科：意味付け復唱法の研究－教師の復唱力について－，第38回数学教育論文発表会，平成17年10月30，山梨大学，日本数学教育学会
・特色GPに参画，新城市立東郷東小学校，東郷中学校の協力を得て，飛び込み授業を学生及び院生にさせる合宿研修を実施した。また，志水自身は講演をした。
・愛知県高等学校学力向上フロンティアスクール推進委員，平成17年４月～18年３月
・京都府久世郡久御山町教育委員会，スーパーバイザー，平成17年４月～18年３月
・広島県三次市教育委員会，スーパーバイザー，平成17年４月～18年３月
・愛知教育大学公開講座「確かな学力を育てる算数授業の創造」平成17年６月18日，19日
・国立教育政策研究所　研究指定校（教科別指定）に係わる企画委員会の協力者　小学校算数，平成17年４月１日～18年３月31日
・文部科学省指定学力向上フロンティアスクール研究指定校等への助言，公開研究会での講演
学校名：京都市立松陽小学校，長野県岡谷小学校，広島県世羅郡甲山町小学校等
・各地の教育センターでの講演，静岡県教育センター，長野県総合教育センター，市教育センター，青森県教育センター，三重県教育センター
・第59回九州算数・数学教育研究（佐世保）大会，小学校部会総会講演「確かな学力の定着をめざす授業の創造」，2005年，７月28日，アルカスSASEBO大ホール，
・日本数学教育学会（長野大会）講習会　小学校部会　2005年８月３日　講演「確かな学力の定着を目指す授業の創造」場所，長野市自治会館

・日本数学教育学会（長野大会）　小学校部会　2005年８月５日，分科会助言者，少人数指導分科会
・第43回愛知数学教育研究会，平成17年８月20日，西春日井地区春日町公民館，講演「確かな学力の定「算数・数学が好きになる授業づくり」，助言：小学校第一分科会
主催　愛知数学教育研究会
・平成17年度京都府久御山町夏季教職員研修会，平成17年８月23日，久御山町コンベンションホール，講演及び実技指導，対象：久御山町幼稚園保育所小学校中学校教職員
講演「久御山町児童生徒の学力向上について」，実技「○つけ法の講習」
・平成17年度第49回　日本私学小学校連合教員夏季研修会，平成17年８月23日，講演「算数指導のポイント」，都ホテル大阪，対象：全国の私立小学校教員
・岡崎市「教育マイスター」登録，2004. 6 ～2005. 3
・講演　学校数学研究会６月　平成17年６月25日　碧南市東部市民プラザ，講演題目　確かな学力をつける，９：30～11：30，小中学校教員対象，参加人数40名
・授業力アップセミナー志水塾，広島県福山（6. 4），愛知県一宮（8.21），鹿児島（8.14），愛知県豊橋（8.27），愛知県岡崎，長野県岡谷（10.15），京都府和束（10.22）

佐々木徹郎　Sasaki, Tetsuro　　教授　　数学教育講座　　教育学修士

❶ 数学教育学
❷ 平成12年２月５日　平成11年度全国数学教育学会　学会奨励賞
❸ 国際数学教育心理学会，日本教科教育学会，日本数学教育学会（代議委員），全国数学教育学会（理事），愛知教育大学数学教育学会（副会長）
❹ 数学科教育（２・３年），算数科教育（３・４年），情報学・情報数学研究（３・４年），数学科教育論（大学院），特別研究（大学院）
　授業においては，学生との対話を重視し，話し合いや発言を求めるようにしている。そのためには，資料を事前に配布し，学生がそれを読んでおくように，‘assignment’を与えている。資料は，的確なものとなるように工夫している。
❺・数学教育における構成主義・教室文化の研究
・The Emergence of Mathematical Fictionality from Real World Models, Journal of JASME:
Research in Mathematics Education, Vol.11, Japan Academic Society of Mathematics Education
・教室文化の構成過程と数学学習への影響についての研究，60万円，科学研究費補助金基盤研究C
・上記の科学研究費補助金によってドイツ　デュイスブルク・エッセン大学教授　シュタインブリンク博士の招聘に際して，研究交流を行った。
❻ 大学院数学教育専攻代表
数学教育講座副代表
教育研究評議会評議員
学生支援委員会委員，附属学校運営委員会
❼ 豊田市教育推進委員会指導力向上検討委員会委員

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

東郷小学校学力向上支援事業連携委員，評議委員
名古屋市立小学校現職教育講師
日本数学教育学会夏季全国大会助言者
三河学校数学研究会助言者，尾張数学教育学会助言者，岡崎市教員研修助言者

❽ 教育創造センター研究員

飯島　康之　Iijima, Yasuyuki　　教授　　数学教育講座　　教育学修士

❶ 数学教育学

❷ 日本科学教育学会 科学教育実践賞（2005）

❸ 日本数学教育学会，日本科学教育学会

❹ 算数科研究ＡⅡ（１年），算数科教育ＢⅠ（２年），数学科教育ＣⅡ（２年，３年），数学教育方法論Ⅰ，Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ，Ⅱ（大学院）

・ＡⅡは自然系の振り分けに重要であり，内容・評価基準等に関して山田教員との協議を深めた。院の授業はもちろん，数学科教育ＣⅡなどでは，科研費による研究と連携しながら進めた。研究授業のビデオ等を使ったり，PukiWikiを使って学生の情報共有などを支援するとともに，授業における学生とのコミュニケーションを重視している。ＢⅠ等の授業で感じることは，文科系の学生が数学に対して持っている不安感あるいは恐怖感であり，それらを払拭し，算数・数学はおもしろく楽しいものであることを体感してもらえるように努力している。

❺・研究テーマ

作図ツールを用いた数学的探究を支援するための学習環境の開発，コンテンツ開発，授業研究，カリキュラム開発

・業績

飯島康之（2005）作図ツールGC/Javaを利用した多様な学習環境の開発，科学教育研究，vol.29，No.2，110-119

・研究助成

科研費特定領域研究，図形の動的探究を支援する学習環境とコンテンツの開発と実践，340万円

・学術・研究交流

上記科研費特定領域研究（新世紀型理数科系教育の展開研究）の中での研究交流，特にA04班のグループリーダの一人として研究のとりまとめや促進を行っている。

❻・大学改革推進委員会第２専門部会専門委員
・専門職大学院設置構想検討専門委員会委員
・教育実地研究委員会副委員長
・大学出版会編集委員

❼ 愛知県（文科省委嘱）学力向上拠点形成事業への協力，研究指定校への訪問等（21回）
現職教育（３校，６回），講座等（愛知県，滋賀県，岡崎市，豊川市，小牧市）
ソフトウェアの公開・提供（作図ツールGC，しきつめ君など）
作図ツールGCに関する授業研究会，研究会の実施（小牧市光ケ丘中，小牧中にて，それぞれ100名，60名の参加）
附属学校との共同研究（主として名古屋中学校，岡崎中学校，附属高校）

鈴木　将史　Suzuki, Masashi　　助教授　数学教育講座　　理学修士

❶ 数学，専門分野：確率論，関連分野：解析学，統計学

❸ 日本数学会，日本科学教育学会

❹ 情報教育入門Ⅰ（１年），確率統計Ⅰ（２年），確率統計Ⅱ（３年），確率統計Ⅲ（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ～Ⅲ（３・４年），応用数学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院）

前回のカリキュラム改編において１年生の専門科目が大幅に削られ，専門科目のスタート時期が遅くなった結果，応用科目である確率統計を学習するための数学的予備知識が少ない状況が続いている。そのような事情を考慮して，授業においては確率統計以外の授業における既習事項の復習も含め，学生の理解度を見て進めるようにしている。

❺ 〔研究テーマ〕

１．後退確率微分方程式の解とその応用：ファイナンス理論等への応用を持つ後退確率微分方程式について，解の性質を調べるとともに，数値的な解を求める方法を考察し，実験する。

２．追求意欲を起こさせる確率教材の研究：高校や中学で確率を学ぶ際に，確率の持つ面白さや意外性を感じ，さらに興味を深めて追求する意欲を持ってもらえるような教材を提案する。

３．途上国における数学教育の充実：ここ数年カンボジアの数学教育改善に関わっているが，途上国の多くで数学的思考力の教育に困難を感じている。今後も支援活動を進める中で方策を探りたい。

〔業績リスト〕

１．論文：試行回数がランダムな二項分布の考察，イプシロン第47号，2005年12月

❻ 時間割編成専門委員会（2004年度～），高大連携選抜入試実施プロジェクト（2005年度）

❼〔講演会・研修担当等〕

・2005年８月３日（水），愛知県教育センターにて高等学校数学教員の５年研修を担当した。

・2005年８月６日（土），長野西高校にて行われた日本数学教育学会の第87回全国算数・数学教育研究（長野）大会の分科会において，指導・助言を行った。

・2005年８月９日（火），蟹江中学校にて，海部地区養護教諭研究会の調査・統計部学習会の講師を担当し，「養護教諭の執務に役立つ統計学の基礎」と題する講演を行った。

・2005年８月31日（水），三重県立津西高校で行われた「一日総合大学」に，教育系大学教員として参加し，「教師になるためのファーストステップ」と題する講演を行った。

・2006年３月13日（月），愛知県立豊田北高校にてフロンティア・ハイスクール講演会の講師を担当し，１・２年全生徒に対して「高校数学を楽しく追究しよう」と題する講演を行った。

〔国際貢献活動〕

2005年11月より，国際協力機構（JICA）の「カンボジア国高校理数科教科書策定支援プロジェクト」を，株式会社パデコと本学で共同企業体を結成して受注を勝ち取り，３年計画で実施しているが，同プロジェクトに計画段階から関わり，実施後も数学教育

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

の専門家として参加している。2005年12月から2006年１月にかけて３週間同国に滞在してプロジェクト活動を行ったほか，１月から３月にかけてカンボジアより派遣された教育関係者12名とともに同国の高校理数科新カリキュラム編成活動を行った。同プロジェクトは2008年10月までの３年計画で実施されており，引き続き専門家として尽力する予定である。プロジェクト活動を通じて，本学の国際交流活動の前進に寄与していきたい。

植村　英明　Uemura, Hideaki　　助教授　数学教育講座　　理学博士

❶ 確率解析，確率過程論

❸ 日本数学会

❹ 確率入門（１年），情報理論（２年），確率統計Ⅰ（２年），確率統計Ⅱ（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ・Ⅲ（４年），応用数学特論Ⅲ（大学院）

モチベーション付けと数学的厳密さが大事だと考え，これらを念頭に講義を行った。モチベーション付けについては，「確率入門」において，冒頭にその日のテーマを学生の興味を引く問題として提示し，その解答過程において確率の理論を説明していくという形態を取り，更に１コマで話を完結させた。また「確率統計Ⅰ，Ⅱ」においては，確率的，又は統計的な事象の扱いを説明しつつ，併せてその裏付けとなる確率の理論をできるだけ厳密に説明した。

❺・最も典型的なランダムネスであるブラウン運動の関数について研究している。ウィナーカオスの手法を用いて，多次元ブラウン運動の正値連続加法的汎関数の超関数としての取り扱いを論じ，併せて局所時間との関連を明らかにした。また，理科教育講座・太田忠之先生他の実験の統計処理の手助けを行った。

・論文：タイリクバラタナゴの配偶行動における産卵管とその内液の役割，愛知教育大学研究報告（自然科学編），第55輯，2006年３月１日，33-38.（太田忠之氏他と共著）

口頭発表：

(1)「Positive continuous additive functionals of multidimensional Brownian motion and the Brownian local time」シンポジウム　Modern Problems and New Trends in Probability Theory（Chernivtsi 国立大学 （ウクライナ））2005年６月

(2)「Positive continuous additive functionals of multidimensional Brownian motion and the Brownian local time」シンポジウム　確率解析とその周辺（大阪大学）2005年９月

(3)「多次元ブラウン運動の正値連続加法的汎関数と局所時間」日本数学会秋期分科会（岡山大学）　2005年９月

(4)「Ito and Tanaka Formula for Multidimensional Fractional Brownian Motion」シンポジウム　Third conference on Stochastic Analysis and Probability（Cadi Ayyad 大学（モロッコ））2005年12月

・研究助成：

(1) 科研費分担者　基盤研究（A）(1)「確率解析の総合的かつ統合的研究」（代表者：谷口説男教授（九州大学大学院数理学研究院））

(2) 科研費分担者　基盤研究（B)「無限次元空間の確率解析」（代表者：重川一郎教授（京都大学大学院理学研究科））

❻ 大学院入試部会委員

❼・日本数学会評議員

・日本数学会統計数学分科会運営委員
・公開講座「数学の問題はこうして作られる」確率論篇講師

竹内　義浩　Takeuchi, Yoshihiro　　助教授　数学教育講座　　理学博士

❶ 位相幾何学，微分幾何学
❸ 日本数学会
❹ 基礎数学演習Ⅰ（２年），情報学・情報数学研究Ⅱ，Ⅲ（４年），線形数学演習Ⅰ（２年），微分積分Ⅰ，Ⅱ（２年），計算幾何学（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），基礎数学演習Ⅱ（２年），自然科学入門（１年），特別研究Ⅰ，Ⅱ（大学院），幾何学特論Ⅰ，Ⅱ（大学院）
❺ 軌道体のホモロジー理論の構築
❻ 講座内図書委員
❼ 高校生向け公開講座担当
❽ 2006年５月に Topology and its applications に論文が掲載された

小谷　健司　Odani, Kenzi　　助教授　数学教育講座　　博士（理学）

❶ 専門分野：常微分方程式，力学系
❷ カンボジア王国教育大臣名の感謝状（2002年９月）
❸ アメリカ数学会（AMS），アメリカ数学協会（MAA）
❹ 情報教育入門Ⅱ（１年），微分積分基礎（１年），プログラミングⅠ（２年），基礎数学演習Ⅲ（３年），総合演習Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ・Ⅲ（４年），解析学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院）
❺ 常微分方程式のリミットサイクルの存在と一意性に関する研究。
カンボジア中等理数科教育改善。
業績リスト：
［1］図でみる日本の算数・数学授業研究，明治図書，2005.（『カンボジアにおける授業研究』の部分を執筆）
❻ 学部入試部会委員（平成17，18年度），就職指導教員（平成17，18年度）
❼ カンボジア理数科教育改善研究会委員，新城市数楽チャレンジ大会実行委員会顧問

山田　篤史　Yamada, Atsushi　　助教授　数学教育講座　　修士（教育学）

❶ 数学教育学：数学的問題解決，表現・表象
❷ 全国数学教育学会学会奨励賞（1998）
❸ 日本数学教育学会，全国数学教育学会，日本科学教育学会，日本教科教育学会，中国四国教育学会，National Council of Teachers of Mathematics, International Group for the Psychology of Mathematics Education
❹ 算数科教育Ａ（３・４年），数学科教育ＣⅢ（２・３年），算数科研究ＡⅡ（１年），情報学・情報数学研究Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ（３・４年），算数科教育方法論Ⅰ，Ⅱ（大学院）

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

［教育活動の問題点等］

2005年度は，初めて「算数科研究ＡⅡ」を担当した。当初は，算数科の教材を強く意識した数学の講義・演習を行う計画を立て，教科書選定を行ったが，学生の実際の理解度を把握しつつ授業を進めたため，結果的には，高校までの学校数学と大学の数学を繋ぐような内容に留まることとなった。学生たちの大学における数学の履修が少ないため，内容の選択は一番の困難であったが，数学教育の教員とのペアで授業を行ったため，内容・進度調整や評価等の授業運営そのものについては非常にスムーズに事が運んだ。また，内容及び教科書選択の難しさから，講座の数学教育教員間で教科書執筆の計画を進めることにした。

❺ ［研究テーマ］

（1）数学的問題解決における認知プロセスに関する研究

（2）数学的問題解決における自己参照的活動に関する研究

［業績リスト］

（論文）

・数学的問題解決における自己参照的活動に関する研究（Ⅷ）：複数の変数を視点とした自己参照的活動の分析　全国数学教育学会『数学教育学研究』，第11巻，pp.77-88，2005年（共著）

・式の役割と逆思考問題の指導の選択肢：加減逆思考問題の第２及び第３学年における正誤パターンの解釈　愛知教育大学数学教育学会誌『イプシロン』，第47巻，pp.39-44，2005年（単著）

（学会発表）

・「数学的問題解決終了後のふり返り活動による解法の進展について：潜在的な数学的能力を視点とした検討」日本教科教育学会第31回全国大会（Sep. 3-4，2005．北海道教育大学）（共同研究）

・「数学的問題解決における認知プロセスに関する研究：問題解決過程のモデルについて」日本教科教育学会第31回全国大会（Sep. 3-4，2005．北海道教育大学）．

・「数学的問題解決における認知プロセスに関する研究：解決の進行を特徴づける３つの問題表象の変容のパターン」全国数学教育学会第23回研究発表会（Jan. 28-29，2005．熊本大学）

［科学研究費］

・（研究分担者）「高大連携を志向した高等学校数学の教育課程や教科書の開発研究」，基盤研究（C），19万円（課題番号：17500585）

・（研究分担者）「図形の動的探究を支援する学習環境とコンテンツの開発と実践」，平成17年度特定領域研究「新世紀型理数科系教育の展開研究」（課題番号：17011040）

❻ 情報処理センター兼任教員，時間割編成委員会委員

❼ 三河教育研究会算数数学部会夏季研修会指導助言者，稲沢市教育研究会研究集会指導助言者，その他県内小学校数校の現職教育研修における指導助言

橋本　行洋　Hashimoto, Yukihiro　　講師　　数学教育講座　　理学修士

❶ 代数的確率論，離散力学系

❸ 日本数学会

❹ プログラミング（２年），プログラミング（２年），基礎数学演習Ⅲ（３年），統計とコンピュータ（３年），総合演習Ⅱ（４年），情報教育入門Ⅱ（１年），計算機利用数学A

（２年），統計とコンピュータ（３年），シミュレーション（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年）

教育への抱負：

「講義がよく分からない，学習意欲が湧かない」という状況は，とかく学生とのコミュニケーション不足によるところが大きいと感じている。

従って講義中において，どこまで理解しているか学生と十分な意思疎通を常に図り積極的な質問を促し，それを元にした授業改善を行ってきた。

本年度は演習形式の講義を多く担当し，そのなかで必ず学生に具体的な例を通して考えシミュレーションしてもらうことで，できるだけ学生自身が手を動かし体験的にその場で理解できるよう努めてきており，今後もできるだけ学生に近い視点で教育活動を行っていきたい。

❺・代数的確率論で展開された「グラフの階層化と隣接行列の量子分解の手法」の他分野への応用：

古典的な統計分野に現れる確率分布を量子分解の観点から見直す

準位統計（固有値の最近接分布）へのグラフ論的アプローチの可能性を探る

・擬周期的構造の記号力学，代入力学系の統計学的アプローチ：

擬周期列の準位統計

Sturm列よりエントロピーの大きな記号列の統計学

口頭発表：

「Sturm列について（３）」

「Sturm列の準位統計と代入力学」

名古屋大学力学系セミナー

❻ 高大連携・探求授業コーディネータ

情報教育

小川　秀夫　Ogawa, Hideo　　教授　　情報教育講座　　工学博士

❶ 専門分野：パターン認識，画像情報処理・理解，コンピュータグラフィックス

関連分野：知識情報処理

❸ IEEE，Pattern Recognition Society，電子情報通信学会，情報処理学会

❹ 情報教育概論（１年），情報理論（２年），コンピュータグラフィックス（２年），電子計算機通論（２年），科学・技術と人間　展開（情報の科学）（２年），画像情報処理（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ（４年），情報学・情報数学研究Ⅲ（４年），パターン認識特論（大学院），画像情報処理特論（大学院），画像情報処理演習Ⅰ（大学院），画像情報処理演習Ⅱ（大学院）

学生に配布する講義資料の改善と充実に努めた。また，授業では例題を多く用い理解しやすい説明を心掛けた。

❺ 研究テーマ：

・物体形状の部分整合法に関する研究

部分的に隠ぺいされ，種々の変形を受けて観測される物体形状の高速で汎用性の高い

パターンマッチング法を確立すること。（射影変換に不変な部分パターンマッチング法の開発）

・顔画像の認識に関する研究

顔画像による人の同定，表情の認識，視線の方向，瞬きの検出など，総合的な顔認識システムを開発すること。

・線画理解システムの開発

「樹木画」を対象として研究を進めている。

業績リスト：

・部分対応の結合と拡張による点パターン整合法の改良，愛教大研報（自然科学），第55輯（2006）

❻ 教育研究評議会評議員，教員人事委員会委員

中津　楢男　Nakatsu, Narao　　教授　　情報教育講座　　工学博士

❶ 情報科学

専門分野：データベース，組み合わせアルゴリズム，学習支援システム

❸ 情報処理学会，電子情報通信学会，日本教育工学会，ACM（Association for Computing Machinery）

❹ 電子計算機入門（１年），情報教育概論（１年），データ構造とアルゴリズムⅠ（２年），データベースⅠ，Ⅱ（３年），科学技術と人間セミナー（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，教育用データ管理特論（大学院），メディア教材開発演習Ⅱ（大学院）

学部１年の授業は入門の授業であるが，今後の学習の動機付けとして重要な科目である。情報教育概論では情報科学の主要分野を，情報と知識の表現方法という立場から解説している。一方，教員養成課程向けの情報教育概論では，学校教育現場におけるコンピュータの利用という視点から講義を進めており，タイトルは同じであるが，内容は全く異なっている。

２～３年の講義は情報科学の専門の授業であるが，教員免許の取得のために受講する学生が年々増え，情報科学の専門に対する勉強意欲の乏しい学生が増えつつある点が悩みである。

学部の講義ではあらかじめ講義資料を作成し，ホームページからダウンロードできるようにしている。また，過去の試験問題とその解答例も掲載している。こうした講義資料の更新・追加を行ない，講義科目については，ほとんど完成している。

大学院では，教育におけるコンピュータの利用という点を重点的に講義し，また，Webを介したデータベースアプリケーションの開発演習を行っている。また，来年度には，授業管理システムの導入を予定している。

❺ 研究テーマ：

１）自己説明に基づく算数文章題の学習支援システムの開発

２）情報の３次元表現とその応用（特に，３次元部品の管理と応用について）

業績リスト：

中津他，「自己説明を利用した算数の割合文章題の解決支援プログラム」，愛教大研報，55輯（教育科学），2005。

中津，「自己説明のための教材とその効果ついて」，情報処理学会全国大会，６H-1，2006。

科研費等：

平成17年度「子どもの問題解決と転移を促す知識の構成の分析と支援に関する研究」，基盤研究（B），代表者。金額は350万円。

❻ 2005年度は大学改革推進委員会の委員をつとめ，学芸４課程の改組に関する議論を行った。

佐々木守寿　Sasaki, Moritoshi　　教授　　情報教育講座　　理学博士

❶ ファジィ理論

❸ 日本知能情報ファジィ学会

❹ 人間と生活展開（２年），情報教育入門Ⅰ（１年），プログラミングⅡ（２年），ファジィ理論（２年），オートマトン（３年），総合演習Ⅰ（３年），人工知能演習（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ（４年），情報学・情報数学研究Ⅲ（４年），ファジィ理論考究Ⅰ（大学院），ファジィ理論演習Ⅰ（大学院），特別研究Ⅰ（大学院）

ペン型の入力装置を備えたコンピュータを，プログラミング関係の授業や数学関係の授業で有効に使用する試みをした。細かい数式の記述，図表に対するコメントの追加において有用であった。注目する場所を指示する場合，レーザーポインタや指示棒を併用する工夫が必要であることがわかった。

プログラミングの授業において，資料（サンプルプログラム等）の配布や連絡に，webを積極的に利用した。特にサンプルプログラムについては，紙に印刷された資料と較べると，入力の手間が省けるため，内容を理解することに集中できるようである。一方で，自ら入力をしないため，詳しい書式等に対する記憶があいまいになるという問題があることがわかった。

❺・現在の研究テーマ：

ファジィ集合間に，補集合との関わりを考慮しながら，同型等の概念を導入する。

・学術・研究交流等：

日本知能情報ファジィ学会主催の「第23回ファジィシステムシンポジウム」（2007年８月開催予定）の大会委員長として，実行委員会の議長となり，企画を練った。

また，日本知能情報ファジィ学会東海支部の運営委員として，研究会等の企画運営に積極的に参加した。

❻・各種役職：情報処理センター長

・講座，コース代表など：情報教育講座代表，情報教育課程代表

・各種委員会委員活動：教育研究評議会評議員，教務企画委員会委員

❼・愛知教育大学附属高校との連携協力の一事業である「アカデミック・クエスト講座」において講師を務めた。高校生に大学講義レベルの教養を身につけさせ，進路選択にも役立ててもらう目的の講座である。「人とコンピュータ」というタイトルで，人間の思考方法とコンピュータによる処理の本質的な違いをテーマに講義を行った。

竹田　尚彦　Takeda, Naohiko　　教授　　情報教育講座　　博士（工学）

❶ 情報工学，情報教育，技術者教育，ソフトウェア工学，要求工学

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❸ 情報処理学会会員（コンピュータと教育研究会，ソフトウェア工学研究会）
情報処理学会・コンピュータと教育研究会運営委員，コンピュータ利用教育協議会会員

❹ 情報教育入門Ⅰ（２年），プレゼンテーション技法（２年），プログラミングⅠ（２年），システム設計論（２年），ソフトウェア工学（４年），情報学・情報数学研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（３・４年），ソフトウェア工学特論Ⅰ・特別研究Ⅱ（大学院）
主な活動：

平成15年度より大学の基礎教育として，より有意義なリテラシ教育のあり方を研究活動の主軸としてさまざまな試みを行っている。また，平成18年度からは，高等学校で教科「情報」を履修した学生が入学してくる。このため大学教育における情報教育とは何かを改めて問い直し，情報教育入門の授業に反映させるように心がけている。授業の情報サイトとしてWikiを活用するようになり１年がたつが，アクセス数は10,000件（実アクセス数は，概算で10万件以上）を超え，授業の活性化に役だっている。特にWiki上で授業の予習と議論をした後，講義では学生の理解が難しいところを集中的に解説するなどの学生の学びを活性化する試みを行った。竹田研究室のＷｅｂサイト（http://gilels.ics.aichi-edu.ac.jp/）で公開しており，学内外からアクセスでき，授業資料もいつでも参照できるようにしている。これらの経験を踏まえて，７月より教育創造センター（当時は21世紀教育創造センター）の研究員となり，大学教育におけるe-Learning，特にLMS（Learning Management System）の導入やOCW（Open CourseWare）の公開へと発展させる活動を行った。この活動は「FD 授業改善と学習支援」において発表した。

❺ 現在の研究テーマ：
・相互評価システムを用いた授業実践に関する研究
・高等学校・普通教科「情報」に関する教科教育および入試問題研究等
・大学における教材公開サーバの構築とLMS導入に関する研究
主な業績：
・吉田宏史，竹田尚彦，野田正幸，高橋岳之「相互評価システムを利用した教科「情報」の授業実践」67thIPSJ全国大会（本発表は大会奨励賞を受賞した）
・野田正幸，竹田尚彦「高大連携による高等学校情報Aのカリキュラム開発」，IPSJ SIG-CE
・竹田尚彦，中西麻衣「『情報A』における学習指導要領と教科書の対応の比較，IPSJ SIG-CE
・竹田尚彦，吉田宏史，佐合尚子「プレゼンテーション演習における学生間相互評価の分析」，IPSJ SIG-CE

❻・共通科目専門委員会委員（予算配分に関する専門部会・研究交流誌等編集委員専門委員会）
・共通科目「情報教育入門」グループ・コーディネータ
・教育創造センター研究員，情報処理センター兼任教員

❼・愛知教育大学附属高等学校授業実践の助言，TT運用支援，授業研究会における助言等。
・愛知教育大学附属名古屋中学「技術・家庭」の授業において「インターネットとモラル」という題目でTV会議システムを用いた遠隔授業（2005. 4）を行った。
・あいちエコ環境プロジェクト2005（http://aichi.eco-project.jp/ecm/）への助言と特別授業。

中西　宏文　Nakanishi, Hirobumi　　助教授　情報教育講座　　工学修士

❶ 情報工学，教育工学

❸ 電子情報通信学会，日本教育工学会，教育システム情報学会

❹ 情報教育入門Ⅰ・Ⅱ（１年），プログラミング入門（１年），プログラミングⅠ（２年），プログラミングⅡ（２年），オペレーティングシステム（３年），情報学・情報数学研究（３・４年）

教員免許取得の必修科目である「情報機器の操作」に相当する情報教育入門を通年で担当するとともに，その学習カリキュラム・教科書の作成などにも携わっている。現在，ベースとなるオペレーティングシステムは，Windows XPからWindows Vistaへと進化が予定されており，それらの最新技術動向についての情報収集を行い，適切に対応できるよう努力している。

また，自分でソフトウェアを開発する能力を習得するためのプログラミング関係の講義を数多く担当している。３年次以降の授業においては，学生自らが，最新技術に触れ，情報処理システムの開発を行う上での必要不可欠な能力を習得できるよう，留意している。現在，プログラミングの授業の最終段階では，インターネットのWeb上で広範囲にわたって使われるようになってきたスクリプト言語PHPをベースにシステムを開発できる能力の獲得を目指した教育に取り組んでいる。

❺ 現在の研究テーマ

(1) 情報リテラシー教育：コンピュータ初心者に対するコンピュータ利用などに関する教育方法の研究

(2) 電子シラバスの開発：シラバスの電子化に関する問題点の研究及びシステム開発

❻ 大学の情報公開の一部として重要となった授業内容一覧（シラバス）に関して，その電子化に取り組み，情報の利用者と作成者両方の立場に立ったシステムの開発と運営を一手に引き受けている。特に，近年は，毎年必要となるデータの更新を，より容易に行えるよう，利用者の心理面なども考慮し，より使いやすいシステムの研究に取り組んでいる。

伊藤　俊一　Ito, Toshikazu　　助教授　情報教育講座　　文学修士

❶ 専門分野：認知科学，自然言語処理
関連分野：ヒューマンインターフェース

❸ 認知科学会。言語処理学会，日本心理学会，日本教育心理学会，北海道心理学会

❹ レポートライティング（１年），プレゼンテーション技法（１年），人間と情報（２年），認知行動研究Ⅰ（２年），認知行動研究Ⅱ（２年），インターフェースデザイン（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ（４年），情報学・情報数学研究Ⅲ（４年），認知科学教育特論（大学院），教育ヒューマンインターフェース論演習（大学院）

自身の主要な研究テーマが「言語による情報伝達の効率化」であることから，その知見を生かし，いかにして自分の意見や行なった作業の成果を効率的に相手に伝えることができるかを学生に意識させるよう配慮しながら授業を展開している。特に，「プレゼ

ンテーション技法」「認知行動研究Ⅱ」「インターフェースデザイン」においては，実習作業の成果を各自が発表するための時間を十分に確保するようにしている。また，「レポートライティング」「人間と情報」においては，情報を発信する側から見た言語（産出），受信する側から見た言語（理解），のそれぞれについて，学生が深く考えることができるようなカリキュラムを設けている。

❺ 現在の研究テーマ：

言語を情報伝達のための手段として捉えるなら，いかにしてその伝達効率を高めるかが重要な問題となる。そこで，情報伝達効率を高めると考えられる言語処理技術に関連するテーマに重点をおいて研究を進めている。

(1) 文分割方略：文章が読み手にとって理解しがたいものとなってしまう原因の１つとして，個々の文が必要以上に長く，文構造が複雑化してしまっていることが挙げられる。長く複雑な構造を持った文は，それを適切な方法で分割することによって，読み手にとって理解しやすい文に変換することが可能であると考えられる。例えば，複文を単文に分解する，文中に読点を挿入する，などの方法が考えられる。しかし，文を分解するための，あるいは，読点を挿入するための有効な方略は，必ずしも自明のものではない。その方略を解明し形式化することを目指すとともに，実際の文章作成場面（文章の推敲，作文教育，など）に応用する方法の確立にも取り組んでいる。

(2) 文章要約方略：膨大な情報を効率的に伝えるための手法の１つとして「要約」が挙げられる。当研究室では，文章中から重要な情報を抽出して要約文章を生成するための方略について，研究を行なっている。とりわけ，文間の接続関係を手がかりとして個々の文に重要度の重み付けを行い，それをもとに重要文を抽出する方法を模索している。

❻ 時間割編成委員会委員

江島　徹郎　Ejima, Tetsuro　　助教授　情報教育講座　　教育学（修士）

❶ 教育工学・メディア開発

❸ 教育システム情報学会，日本教育工学会，日本教育メディア学会，日本数学教育学会

❹ 情報教育入門Ⅰ（１年），教育と情報（１年），人間と生活入門（１年），教授学習システム（２年），教育情報システム開発論（２年），メディア制作演習（２年），メディア表現論Ⅰ（２年），メディア表現論Ⅱ（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ・Ⅲ（４年），メディア教育特論（大学院），情報教育演習Ⅰ（大学院）

eラーニングシステム「かきつばた」を構築，運用し，20以上の授業，600名以上の学生さんに利用されている．

❺・現在の研究テーマ

コンピュータ等の情報機器の教育利用

・業績リスト

論文

江島徹郎，梅田恭子：本学におけるeラーニングの活用に関する実践研究，愛知教育大学教育実践センター紀要第９号，pp.77～82（2006.2）

❻ 学部入学試験部会委員

６年一貫教員養成コース会議・委員

大学改革推進委員会第三部会ワーキングメンバー

愛知教育大学における附属高等学校からの高大連携選抜等に関する検討プロジェクトメ

ンバー

❼ 額田郡教育研究会学習情報部指定教科研究「学習情報」講師
国際協力機構国別特設研修「サウジアラビア学校教育改善」コース・コースリーダー

安本　太一　Yasumoto, Taichi　　助教授　情報教育講座　　博士（工学）

❶ 計算機科学，専門分野：プログラミング言語処理系，関連分野：数理科学

❸ 日本ソフトウェア科学会，情報処理学会，ACM，IEEE Computer Society，電子情報通信学会

❹ 情報教育入門Ⅰ（１年），プログラミングⅠ（２年），プログラミングⅡ（２年），科学技術と人間：展開１（２年），計算機ネットワーク（３年），計算機ネットワーク実習（３年），計算機言語処理（３年），総合演習Ⅱ（４年），計算機科学特論Ⅰ（大学院），計算機科学特論Ⅱ（大学院）

・教育活動の問題点，FD 活動，教育に対する抱負

授業の運営は，できるだけ受講生の方に自ら考えていただく機会があるように工夫しているつもりである。しかしながら，レポートや試験の結果をみる限り，受講生の踏み込みが今一つな感じがある。自ら考え工夫することの達成感が得られるよう，今後改善していきたい。

❺ 現在の研究テーマ

64ビットプロセッサにおけるLisp言語処理系の実装，マルチメディア命令（SIMD命令）を生かしたLisp言語処理系の実装に重点を置いて取り組んでいる。

・業績リスト

Common Lisp言語処理系による64ビット環境の評価，愛知教育大学研究報告自然科学編，第55輯，pp.9-13，2006.

❻ 就職支援教員，防災・防火委員会地震対策専門委員，衛生管理者

❼ 平成17年度JICA集団研修産業技術教育Ⅱ講師

松永　　豊　Matsunaga, Yutaka　　助教授　情報教育講座　　博士（工学）

❶ ニューロコンピューティング，学習アルゴリズム，進化モデル，ロボット，WEBプログラミング

❸ 電子情報通信学会，情報処理学会，人工知能学会

❹ 情報教育入門Ⅰ・Ⅱ（１年），プログラミングⅠ（２年），プログラミングⅡ（２年），ニューロコンピューティング（３年），知能情報処理特論（大学院），知能情報処理演習Ⅰ（大学院），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），Ⅱ，Ⅲ（４年）

・教育においてコミュニケーションや情報の共有は重要なテーマである。そこで，本研究室ではWiki等による情報共有を行った結果，学生と教員，及び，学生同士の情報交換が活性化した。

また，授業情報をWEB上で公開するだけでなく，双方向のやり取りが可能となったため，より円滑な授業運営も可能になったと考えている。

また，WEB上で授業情報を共有することは遠隔地授業支援にもつながる。非常勤先

の協力を得て開発したWEBベースの遠隔地授業支援ソフトの実践も開始している。

❺・現在の研究テーマはコンピュータ自体の環境適応能力（学習能力）など，学習アルゴリズムに関する研究である。この研究は，主にロボット関連の分野では極めて重要なテーマであるが，様々な分野で要求されており，教育関連ツールへの応用なども可能である。研究室ではMINDSTORMSによる倒立振子ロボットの構築など知能ロボットの研究をはじめとし，スケジューリングへの応用など，ソフトウェア・ハードウェアの両面から学習アルゴリズムの研究をおこなった。また，1CD OS (KNOPPIX)による授業支援の可能性についての研究も行った。今後は，WEBベースの学習支援ツールへの応用を考えている。

・「利己的遺伝子によるコミュニケーションの進化について」，愛知教育大学研究報告，第55輯（自然科学編），2006

・NC研究交流会

❻・教育創造センタースタッフ

・教務委員

野崎　浩成　Nozaki, Hironari　　助教授　情報教育講座　　博士（工学）

❶ 教育工学，情報教育，日本語教育，計量国語学

❷ 1996年 2 月　全NEC C&Cシステムユーザー会　優良論文賞受賞
1997年 9 月　日本教育工学会　1997年度 学会論文賞受賞

❸ 日本教育工学会，電子情報通信学会，日本心理学会，日本語教育学会，日本認知科学会，計量国語学会，行動計量学会，各会員
教育システム情報学会　学会誌編集委員，研究会委員会委員

❹ 「教育工学研究」,「教授学習システム」,「コンピュータ利用教育」等

❺ 科学研究費補助金（若手研究B）研究代表者
「日本語におけるカタナカ語の使用実態調査と語彙習得支援環境の構築」（320万円）

❻ 大学院専攻代表（情報教育分野），大学院課程運営改善部会委員，教育実地研究専門委員会委員，介護等体験実施検討部会委員，基礎実習・応用実習コーディネーター，インターンシップ担当教員

梅田　恭子　Umeda, Kyoko　　助手　　情報教育講座　　博士（学術）

❶ 教育工学　情報教育

❷ 情報処理学会東海支部　学生論文奨励賞（2001年 5 月）

❸ 所属学会：日本教育工学会，教育システム情報学会，情報処理学会，電子情報通信学会，日本科学教育学会，AACE

❹ レポートライティング（１年），情報教育入門１（1年），メディア制作実習（３年），プレゼンテーション技法（１年），情報教育入門２（１年），メディア表現入門（２年），コンピュータ利用教育（３年），プレゼンテーション演習（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ・Ⅲ（４年）
ほとんどの担当授業科目にe-learningシステムを導入し，オンラインでの課題提出や授業資料の公開などを行っている。特に，情報学・情報数学研究では，情報のやりとりを研究室全体で共有できるようになり，学生同士が助言しあうなどe-learningシステム導入の効果を感じている。

❺ 研究テーマは，「ICT (Information and Communication Technology) の学校教育への利用」であり，システム，コンテンツ，ユーザの心理面（インターネット不安）など多角的に取り組んでいる。

・業績リスト：

論文：

Kyoko Umeda, Shinsuke Takito, Tetsuro Ejima and Hironari Nozaki, “The Development of the IASv1 Internet Anxiety Scale”, Towards sustainable and scalable educational innovations informed by the learning sciences, 133, 2005, 918-921

梅田恭子，齋藤ひとみ，ICTを利用した教育に関する研究の動向，教育システム情報学会誌, vol.22, No.4, 2005, p290-298

口頭発表：

梅田恭子，倉城美奈，江島徹郎，野崎浩成：インターネット不安尺度の開発，教育情報システム学会30周年記念全国大会 講演論文集，pp323-324, 2005

・研究助成金：

・科学研究費補助金（若手B）研究代表者：Webページによる学校・保護者・児童生徒間のコミュニケーションに関する研究，平成17年度交付金100万円

・科研費分担：ポートフォリオ評価の実証的研究（その 2 ）代表　寺西和子（2）　科学研究費　基盤研究（C）

・財団法人 大川情報通信基金 2005年度研究助成　分担：「体験型情報モラル学習教材の開発　－高等学校普通教科「情報」での授業実践研究－」財団法人 大川情報通信基金 2005年度研究助成

❻・時間割編成専門委員会委員　副委員長

・広報誌編集会議委員

❼・講師（分担）：JICA国別特設サウジアラビア「学校教育改善」コース　（2005.11）

・平成17年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）「外国人児童生徒のための教材開発と学習支援プログラム」の研究会，教材開発連絡会に参加

福井　真二　Fukui, Shinji　　講師　　情報教育講座　　博士（工学）

❶ 情報工学：コンピュータビジョン

❸ 電子情報通信学会，情報処理学会，画像電子学会

❹ 情報教育入門Ⅰ（ 1 年），プログラミング入門（ 2 年），プログラミングⅡ（ 2 年），情報学・報数学研究Ⅰ（ 3 年），情報学・情報数学研究Ⅱ（ 4 年），情報学・情報数学研究Ⅲ（ 4 年）

❺ 現在の研究テーマ：

（1）画像情報からの 3 次元形状情報復元

（2）移動物体抽出手法

（3）コンピュータビジョンのGPUを利用した高速化

業績リスト：

“輝度変化に頑健な移動物体抽出手法のGPUを利用した高速化”，第11回画像センシングシンポジウム（SSII05）講演論文集，pp. 169-172，Jun，2005.

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

“カラー動画像を用いた輝度変化にロバストな移動物体抽出手法”，画像の認識・理解シンポジウム2005（MIRU2005）論文集，pp. 814-821，Jul，2005.

“濃淡画像からのガウス曲率の相対的大きさ情報の復元”，平成17年度電気関係学会東海支部連合大会，Sep，2005.

“Relative Magnitude of Gaussian Curvature from Shading Images Using Neural Network”, in Proc. of Knowledge-Based Intelligent Information & Engineering Systems (KES2005), pp. 813-819, Sep, 2005.

“Obtaining Shape from Scanning Electron Microscope Using Hopfield Neural Network”, Journal of Intelligent Manufacturing, Vol.16, No.6, pp. 715-725, Dec, 2005.

“動画像からのモーション抽出のための研究”，中部大学情報科学研究所　情報科学リサーチジャーナル　Vol.13，pp. 115-118，Mar，2006.

❻ 情報処理センター専任教員，情報システム委員会委員，システム運用専門委員会委員長

❼ 附属名古屋中学校用BLOGサーバを開設し，運用支援を行なった。

齋藤ひとみ　Saito, Hitomi　　助手　　情報教育講座　　博士（学術）

❶ 認知科学，教育工学

❸ 日本認知科学会会員，人工知能学会会員，日本教育工学会会員，教育情報システム学会会員，Cognitive Science Society会員，American Society for Information Science and Technology会員

❹ 情報教育入門Ⅰ（１年），プログラミング入門（１年），プログラミングⅠ（２年），コンピュータ社会論（２年），情報科教育ＣⅠ（３年），情報科教育ＣⅡ（４年），情報学・情報数学研究Ⅱ（４年）

「情報教育入門」の授業では，学生毎の情報リテラシー能力の違いなどが年々顕著になると考えられるため，そういったスキルの違いに対応できる授業を実践していきたい。また「情報科教育ＣⅠ・ＣⅡ」では，教科「情報」に関する教師教育の在り方を模索している。まだ新しい教科であり，特色のある授業を展開していきたいと考えている。

❺ 現在の研究テーマ

以下のようなテーマについて，人間の行動を分析する認知科学的アプローチと，人間の学習を支援する教育工学的アプローチの両方から研究に取り組んでいる。

・情報教育における「操作手続き」と「その背後にある理論・概念的知識」との乖離を解消するための自己説明活動やリフレクションを取り入れた学習環境の構築に関する実験的検討

・「考える力」の育成を目的とした，インターネットを用いた情報の収集・分析・調査に関する統合的な情報教育環境の構築・実践

業績リスト

学術論文：

・梅田恭子・齋藤ひとみ（2005）ICTを利用した教育に関する研究の動向，教育システム情報学会誌，22，4，290-298.

口頭発表：

・齋藤ひとみ・橋本恵美子（2005）日常場面に見られる大学生のWeb情報探索の特徴，日本教育工学会第21回全国大会講演論文集，21，427-428.

・Miwa Kazuhisa・Nakazawa Daisuke・Saito Hitomi（2005）A Cognitive Simulator for Tutoring Causal Relation between Mental Operations and Behavior. Proceedings

of the 27th annual meeting of the Cognitive Science Society, 1519-1524.

科学研究費補助金など研究助成の受領状況：

・「情報教育における効果的な学習環境の構築を目的とした認知科学的研究」（若手研究（B），代表者：齋藤ひとみ，150万円）

・「子どもの算数問題解決と転移を促す知識の構成の分析と支援に関する研究」（基盤研究（B）(2)，分担

❻　共通科目「人間と生活」の小柱「生活と情報」コーディネーター

福田　洋治　Fukuta, Youji　　助手　　情報教育講座　　修士（工学）

❶　情報セキュリティ，コンピュータネットワーク

❷　電気学会電子情報通信学会情報処理学会四国支部奨励賞（2000年 3 月），電子情報通信学会オフィスシステム研究賞（2002年 5 月）

❸　電子情報通信学会（正員），情報処理学会（正員）

❹　情報教育入門Ⅰ（1 年），計算機ネットワーク（3 年），計算機ネットワーク実習（3 年），プログラミングⅠ再（2 年），プログラミングⅡ再（3 年），情報学・情報数学研究Ⅰ（3 年）

・実践的教育活動：

外国人留学生の学習指導（毎週 1 回，情報理論の輪講を 2 時間実施）

❺・現在の研究テーマ（内容及び今後の研究計画）

・ホストベースの情報流出防止に関する研究…ワームやボット，スパイウェアなどの悪意を持ったソフトウェアがコンピュータに入り込むことによって，重要な情報がコンピュータネットワーク上に流出する事故が相次いでいます。既存の対策として，コンピュータへのウィルス対策ソフトの導入やセキュリティポリシーに従った情報・人・物の管理などが挙げられますが，ある程度のコンピュータの知識が必要なことや利便性を損なってしまうなどの課題が残ります。我々は利用者に特別な知識が必要なく，またシステムの利便性を損なわない情報流出防止システムの研究を行っています。PCの重要ファイルにアクセスがあるとそれを自動検出・通知するという試作プログラムを作成して，動作を検証します。

・コンピュータウィルス解析に関する研究…コンピュータウィルスの脅威から情報機器を保護するための対策を決めるには，コンピュータウィルスの感染，潜伏，発症，増殖などに関する特徴情報を得る必要があります。コンピュータウィルス対策ソフトベンダでは，専門技術者によってコンピュータウィルスが解析されていますが，技術者の長年の経験と勘に基づいて解析が行われるのが現状です。人手に頼る解析作業の効率化には限界があり，専門技術者を増やすにしても育成に多くの時間とコストが掛かってしまいます。そこで，人手を掛けずコンピュータウィルスの特徴を自動抽出する解析支援システムの研究を行っています。ウィルスの逆アセンブラコードを走査して特徴を抽出するアルゴリズムを作成します。次にウィルスの特徴の抽出と分類を自動化した解析システムの実装を行います。

・e-Learning環境向けコンテンツ配信に関する研究…広帯域ネットワークが社会に整備されて一般の利用者がネットワークを介して動画や音声などの多量のデータをリアル

タイムにやり取りすることが容易になりました。テレビ番組や映画のコンテンツ販売，医療支援，教育支援など，様々な場面で動画配信のサービスが利用されはじめています。しかしながら，動画配信のシステムには，サーバからクライアントへ１対多通信で多量のデータストリームが配信されることからサーバの所属するネットワークの資源が動画配信サービスによって占有されてしまうことや，大きな負荷に耐えうる高いパフォーマンスがサーバに要求されることからシステムの構築・運用のコストが高くなってしまうなど，実用化に向けての課題が残されています。我々は特にe-Learning環境を想定した動画配信システムの研究を行っています。クライアントノードによりオーバレイネットワークを構成してネットワークコーディングに基づいて動画を配信するというネットワーク負荷分散の仕組みを作ります。次に実装を行います。

・ストリーム暗号用乱数生成器の解析に関する研究…ストリーム暗号は，暗号化と復号に同じ秘密鍵を用いる共通鍵暗号の１クラスであり，秘密鍵をシードとする擬似乱数系列を生成して，その擬似乱数系列と平文系列をシンボル単位で排他的論理和することで平文系列の情報を秘匿します。ストリーム暗号の安全性は擬似乱数系列の予測不可能性に根拠が置かれています。我々は非線形コンバイナと呼ばれる乱数生成器の出力系列の予測不可能性について解析して安全で有用なストリーム暗号を提案するための研究を行っています。相関攻撃と呼ばれる解析手法の性能を向上させるアルゴリズムを作成します。擬似乱数生成器の解析手法の性能を追求することで，既存の擬似乱数生成器の強度を維持するための条件，脆弱性とその対策を明らかにし，既存の擬似乱数生成器の運用や新たな擬似乱数生成器の開発に貢献することが目的です。

・業績リスト（著書，論文，口頭発表，作品，演奏発表など）

・Yoshiaki SHIRAISHI, Youji FUKUTA and Masakatu MORII, “Access Control by Service Connector with Single Sign-On Function,” Proc. of The 9 th World Multi-Conference on Systemics, Cybernetics and Informatics (WMSCI 2005), vol.II, pp. 255-259, Orlando, Florida, USA, July 2005.

・白石 善明，福田 洋治，森井 昌克，“送信元IPアドレス詐称パケットによる攻撃を防ぐためのフィルタ検査システム，”コンピュータセキュリティシンポジウム2005予稿集，vol.1，pp.265-270，松山，愛媛，10月26日-28日，2005年。

・福田 洋治，白石 善明，森井 昌克，“IPアドレス詐称パケットを送出しないネットワークのアドレスリストを用いたバックボーンネットワーク”，2006年暗号と情報セキュリティシンポジウム概要集，pp.179，広島，１月17日-20日，2006年。

・白石 善明，福田 洋治，森井 昌克，“e-Learning環境におけるネットワークサービス提供モデルについて，”教育システム情報学会研究報告，vol.20，no.2，pp.23-30，2005年７月。

理科教育

石田　博幸　Ishida, Hiroyuki　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 理科教育，教理教育

❷ タイラチャパットインスティチュートチェンライ名誉博士（2000・３）

❸・物理教育学会，理科教育学会，科学教育学会

❹・理科教育Ａ（４年），理科教育Ａ（３，４年），総合的学習演習（３，４年），教養科目（１年），理科教材論Ⅰ，Ⅱ（大学院），理科授業研究（大学院）

❺・現在の研究テーマ：
国際理科教育協力研究，国際環境教育協力研究
・業績リスト：
On the Prosocial And Environmental Attitude of Students in Thailand and Japan：愛知教育大学教育実践総合センター紀要８号，2005
・科学研究費補助金など研究助成の受領状況：
科研費　基盤研究Ｃ　日・タイ環境教育意識調査と環境教育協力実践　１,000,000円　代表
❻・各種役職・講座，コース代表など（各部内における運営に関する活動）・各種委員会委員活動
❼・各種審議会委員　自治体等の教育組織における活動：
そうであることを表明することが秘守義務に反する活動　１件
・学内外の公開講座，講演会など：
・学校現場などにおける指導助言

川上　昭吾　Kawakami, Shogo　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 理科教育学，生物教育学，生活科・総合的学習，細胞遺伝学
❷ 日本教育研究連合会表彰　（1991年）
❸ 日本理科教育学会（会長），日本生活科・総合的学習学会（理事），日本生物教育学会（理事），日本染色体学会（評議員），日本科学教育学会，日本教科教育学会，日本環境教育学会，日本高等教育学会
❹ 理科教育ＣⅠ（２，３，４年），理科教育Ａ（３，４年），科学技術と人間（２年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），生物学ゼミナール（４年），理科カリキュラム論（大学院），理科教育史特論（大学院），理科教育特論演習（大学院），理科授業研究Ⅱ（大学院），環境教育実践演習（大学院）
［思うこと］学生の受講態度に問題点を感じることが多くなった。例えば，ガムをかみながらや帽子をかむったままの受講，ペットボトルのお茶を飲むこと等。これらも講義の１回目，２回目で注意するとその後継続することはない。自由の解釈を間違っているのか，単に常識がないのか，はたまた担当者の指導力を探っているのか。社会の中での自由は，個室における自由と異なり，規律を伴うことをきちんと教える必要がある。
❺ 受容学習による問題解決学習の充実，生物教材研究，学校と博物館を連携推進研究，理科教育カリキュラムの開発研究，シダ植物の半数体作出，等。
・研究成果：
S. M. Kawakami, Shogo Kawakami, K. Kondo, M. Ito, J. Kato, N. I. Shorina and I.V. Tatarenko, Sporophyte production by induced apogamy inferns and the characteristics of the induced sporophytes. Chromosome Science 8 (4) :175,2004.
S. M. Kawakami, Shogo Kawakami and K. Kondo, Meiosis of trisomic and tetrasomic sporophytes *in Osmunda japonica* (Osmundaceae), Chromosome Science 8 (3) : 87-93, 2004.
寺田安孝・川上昭吾，博物館連携のためのワークシートの開発，愛知教育大学教育実

践総合センター紀要，第 9 号，pp.47-52，2006.

・科学研究費補助金：

川上昭吾，教養と専門を両立させる科学カリキュラムの構築，基盤研究（B）

野上智行，対話型科学技術社会に求められる教師教育プログラムの開発と評価，基盤研究（A）

橋本健夫，小・中学校の役割の見直しを含めた新しい自然科学教育課程の開発研究，総合研究

・学術・研究交流等：

教育調査：シンガポール，フィンランド，韓国，ニュージランド，中国

❼ Journal of Biological Education誌（イギリス発行）査読者，University of the Phillipines (UP) のNISMEDの海外査読者，日本学術振興会科学研究費委員会専門委員，日本学術会議科学教育研究連絡委員会幹事，日本理科教育振興協会理事，日本理科教育振興協会アカデミー会員，国立教育政策研究所「教科等の構成と開発に関する調査研究」研究協力者，蒲郡市「三河湾環境チャレンジ実行委員会」委員，愛知県阿久比町「幼・保・小・中一貫教育プロジェクト」顧問，ちゅうでん教育大賞審査委員，日本理科教育振興協会「その道の達人派遣事業」7 校の講師，JICA国際協力機構中部国際センター平成17年度「産業技術教育Ⅱ」研修コース講師，地域の研究会の講演と学校の研究会の助言。

羽渕　脩躬　Habuchi, Osami　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 生化学，糖鎖生物学

❸ 日本生化学会（評議員），アメリカ生化学・分子生物学会，日本糖質学会（評議員），日本結合組織学会（評議員）

❹ 自然環境論（１年），化学Ⅰ（１年），化学Ⅱ（２年），生物化学演習Ⅰ（２年），環境物質代謝論（３年），化学ゼミナールⅠ（４年），生物化学特論Ⅰ（大学院），生物化学特論演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）

❺ 現在の研究テーマ：

グリコサミノグリカンの動物の高次生命機能における機能，特にコンドロイチン硫酸の硫酸化の生物機能の解明

著書論文：

(1) Yusa, A., Kitajima, K., and Habuchi, O. (2005) N-linked oligosaccharides are required to produce and stabilize the active form of chondroitin 4-sulphotransferase-1 , *Biochem. J.* **388**, 115-121

(2) Sawada, T., Fujii, S., Nakano, H., Ohtake, S., Kimata, K., and Habuchi, O. (2005) Synthesis of sulfated phenyl-N-acetylgalactosaminides. 4-*O*-sulfated phenyl-b-*N*-acetylgalactosaminide is a competitive acceptor that decreases sulfation of chondroitin sulfate by N-acetylgalactosamine 4-sulfate 6-*O*-sulfotransferase. Carbohydr. Res. **340**, 1983-1996

(3) Ohtake, S., Kimata, K., and Habuchi, O. (2005) Recognition of sulfation pattern of chondroitin sulfate by uronosyl 2-O-sulfotransferase. *J. Biol. Chem.* **280**, 39115-39123

(4) 羽渕脩躬，羽渕弘子，木全弘治（2005）グリコサミノグリカンの硫酸化と疾患 遺伝子医学 MOOK3号（メディカルドゥ）糖鎖と病気 pp123-129

（5）羽渕脩躬（2005）グリコサミノグリカンの硫酸化に関わる硫酸転移酵素。未来を拓く糖鎖科学（永井克孝　監修，金芳堂）pp184-186

口頭発表：

（1）大竹しおり，木全弘治，羽渕脩躬。ウロノシル2-O-硫酸転移酵素によるコンドロイチン硫酸の硫酸化パターンの認識。第25回日本糖質学会年会，2005年７月20日－22日，大津

（2）遊佐亜希子，北島健，羽渕脩躬，コンドロイチン４硫酸転移酵素－１とコンドロイチン６硫酸転移酵素-１に結合するN-結合糖鎖の機能解析，第78回日本生化学会大会，2005年10月19日－22日，神戸

（3）大竹しおり，木全弘治，羽渕脩躬，コンドロイチン硫酸に存在する高硫酸化非還元末端構造由来オリゴ糖の酵素的合成，第78回日本生化学会大会，2005年10月19日－22日，神戸

（4）姜松林，大竹しおり，遊佐亜希子，羽渕脩躬，ニワトリN-アセチルガラクトサミン４硫酸6-O-硫酸転移酵素のクローニングと発現，第78回日本生化学会大会，2005年10月19日－22日，神戸

（5）Osami Habuchi, Shiori Ohtake, Koji Kimata, Recognition of sulfation pattern of chondroitin sulfate by uronosyl 2-O-sulfotransferase. Proteoglycans in Signaling. Stockholm, Sweden, September 7-11, 2005

研究助成

・奨学寄付金：「硫酸転移酵素に関する研究」生化学工業中央研究所　1,000千円

❻ 放射線障害防止委員会（放射線取扱主任者），遺伝子組換え安全委員会，動物実験委員会，安全衛生委員会，教育研究評議会，教務企画委員会

大和田道雄　Owada, Michio　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 自然地理学，気候学，気象学，都市大気環境学

❸ 日本地理学会（代議委員），日本気象学会（中部支部理事），日本農業気象学会，日本生気象学会，大気環境学会，日本環境共生学会，国際環境研究協会，愛知教育大学地理学会

❹ 環境地理学Ⅰ（１年），地学Ⅱ（２年），地球環境科学Ⅱ（２年），地学Ⅱ（３年），総合演習Ⅰ（３年），自然地理学基礎（３年），大気水圏科学Ｂ（３年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），大気水圏科学実験Ａ（４年），大気水圏科学演習Ｂ（４年），大気環境学特論（大学院），大気環境学演習（大学院），気候環境学特論（大学院），気候環境学演習（大学院）

地球温暖化に伴う大気大循環場の変動のメカニズムを理解させ，身近な地域環境に及ぼす影響と環境の維持・改善に向けての意識を認識させるよう努力している。

❺ 地球温暖化に伴う大気大循環場の変動と地域気象への影響についての解析を進めている。

論文発表：

大和田道雄・石川由紀（2005）：東アジアにおける猛暑と冷夏の大気大循環場変動と気圧場解析。地理学報告，Vol.100，p.19～28。

大和田道雄（2005）：地球温暖化と中部国際空港の風。航空環境研究，No.9，2〜10。
大和田春樹・大和田道雄（2005）：中国黄土高原における多雨季前期の降水メカニズム。日本農業気象学会東海支部会誌，63号，17〜20。
大和田道雄（2006）：地球温暖化による日本の地域気象・気候への影響について－名古屋の異常猛暑を例として－。愛知教育大学共通科目研究交流誌「教養と教育」，第6号，7〜15。
大和田道雄・石川由紀・畔柳洋子・大和田春樹（2006）：100hPa面における南アジア高気圧の盛衰と東西変動。第55輯，（自然科学編），pp.23〜28。
大和田道雄（2005）：新編安城市史11資料編　自然・気候，安城市，119p。

口頭発表：

大和田道雄・梅田佳子（2005）：日本列島における黄砂飛来のメカニズムと気圧場との関係。日本気象学会春季大会，東京大学。
大和田道雄・櫻井麻理（2005）：大気環境濃度に及ぼす局地風の影響。日本気象学会春季大会，東京大学。
中川由雅・大和田道雄・櫻井麻理（2005）：温帯低気圧異常発達の気圧場解析。日本気象学会春季大会，東京大学。
石川由紀・大和田道雄（2005）：東アジアにおける猛暑と冷夏の大気大循環場変動と気圧場解析。日本気象学会春季大会，東京大学。
大和田道雄・深谷真美（2006）：都市域における局地豪雨の事例解析。日本地理学会春季大会，埼玉大学。
大和田道雄・鳥居つかさ（2006）：地球温暖化に伴う局地風（鈴鹿おろし）の変容について。日本地理学会春季大会，埼玉大学。
大和田道雄・中川由雅・岩田充弘（2006）：名古屋市における熱帯夜の分布について。日本地理学会春季大会，埼玉大学。
大和田道雄・畔柳洋子・石川由紀・中川由雅・梅田佳子（2006）：夏型気圧配置の変容と名古屋の異常高温。日本地理学会春季大会，埼玉大学。
大和田道雄・梅田佳子・石川由紀・中川由雅・櫻井麻理・畔柳洋子（2006）：帯状高気圧時における名古屋市のNO_2濃度分布。日本地理学会春季大会，埼玉大学。

❻ 教育実地研究専門委員会委員，水質汚濁委員
❼ 中部空港調査会専門委員会委員，同環境委員会委員，名古屋市環境審議会委員，名古屋市都市計画審議会委員，名古屋市緑の審議会委員，名古屋市緑の審議会都市計画公園緑地事業推進部会委員，名古屋市廃棄物処理施設専門委員会議委員，岐阜県環境影響評価審査会委員，同県廃棄物処理施設専門委員，日進市環境まちづくり評価委員会会長，環境創造研究センター理事，その他講演等。
❽ NHK名古屋放送局ラジオ「中部あさいちばん」隔週水曜日「暮らしの気象学」担当

牛田　憲行　Ushida, Noriyuki　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 物理学，素粒子・原子核物理学，水の波・大気光学，物理教育・理科教育，物理学史
❷ 日本物理学会論文賞（2002年3月）
❸ 日本物理学会，アメリカ物理教師協会，高エネルギー物理学同好会，宇宙線研究者会議
❹ 専門教育入門（1年），物理学Ⅰ（2年），物理学Ⅱ（3年），理科研究A（2年），基礎物理学実験（2年），環境と人間セミナー（3年），総合演習Ⅰ（3年），高エネルギー物理学Ⅰ・Ⅱ（大学院），高エネルギー物理学演習（大学院）

理系では，「たっぷりと基礎的な科目の時間数をとり演習を行う」という基本的なことがなされていない。いたるところで見られる，基礎をぬきにした大学版「総合学習」の横行は目を覆うばかりである。こんなことで力量ある教員の養成ができるのであろうか。

物理の勉強では，教科書に書かれた，確立され体系化されたものを学ぶ正統的方法だけでなく，物理が日常の実生活に満ちており，身の回りの現象から出発して物理や自然の基本法則に接近していくこと。自然科学の発展が仮説と試行錯誤の歴史であり，人間の自然認識の発展と物理学の段階をふまえながら歴史的に見ていくこと。また，さまざまな科学者の生き方，考え方を知ることなどを強調している。そしてなによりも面倒がらずに鉛筆を持って自分の手で式をチェックしたり，計算したりすることを強調している。

❺ （１）ニュートリノ振動の探索：日欧共同研究であるOPERA実験に参加。
（２）ニュートリノ・エマルジョン反応によるチャーム粒子，核破片生成の研究
（３）・小学校・中学校理科教育現場の実態調査と分析
・理科教科書・指導書の検討・分析（小学校から高等学校まで）

2005年度に採択された特色GPの中の「理科離れ実相調査」を担当し，現役中・高生から小学校・中学校時代の理科授業と先生についての総合的な調査を行うとともに，現役小学校教師からの生の声を聞くことにより小学校理科現場の調査をおこなった。これらをふまえて，「理科離れ実相調査ミニシンポジウム」を２月に大学で開催した。

・Search for superfragments and measurement of the production of hyperfragments in neutrino-nucleus interactions
Nuclear Physics **B718** (35-54) 2005
・Measurements of D0 production and of decay branching fractions in neutrino-nucleon scattering
Physics Letters **B613** (105-117) 2005
・Measurement of $D^{*}+$ production in charged-current neutrino interactions
Physics Letters **B614** (155-164) 2005
・Measurement of topological muonic branching ratios of charmed hadrons produced in neutrino-induced charged-current interactions
Physics Letters **B626** (24-34) 2005
・Measurement of nucleon structure functions in neutrino scattering
Physics Letters **B632** (65-75) 2006
・2005年　気になるカガクの出来事「科学実験ブームの落とし穴――“実験”は理科離れを解消するのか？！」　化学　Vol.60 No.12（2005）
・特色GP「理科離れ実相調査　資料集」　特色GP　理科離れ実相調査シンポジウム報告
小学校理科現場の実情から見えてくるもの　2006.3

❻・評価委員会委員
・日本教育大学協会評議員　・日本教育大学協会東海地区会評議員

❼・西尾市立鶴城中学校学校評議員
・日本科学者会議大学問題委員会委員

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

長沼　健　Naganuma, Takeshi　教授　理科教育講座　理学博士

❶ 分析化学，化学教育，環境科学

❸ 日本化学会（東海支部常任幹事），日本化学会化学教育協議会（東海支部委員長），日本分析化学会，日本理科教育学会（評議員），日本環境教育学会，大学等環境安全協議会，カンボジア理数科教育改善研究会

❹ （教育関連）総合演習Ⅰ・Ⅱ
（専門科目）環境ゼミナールⅠ・Ⅱ，自然環境論Ⅰ，分析化学，分析化学実験，分子機能化学A・B，分子機能化学実験A・B，化学教材論，化学教材実験，環境化学教育論
（大学院）分析化学特論Ⅰ・Ⅱ，理科教材論

・教育の問題点，FD活動，教育に対する抱負
（問題点）学生の帰属意識はその学問との接触の長さ，その点で接点が少ない
（FD活動）附属中学校における授業観察と授業研究会に出席し，大学教育に活かす
（抱負）志のある人が集まれる研究室を目指したい。もちろん社会人も含めて。
（実践的教育活動）附属学校の校長として教育実習生の授業参観。学生と一緒に出前実験を実施

❺・現在の研究テーマ（内容及び今後の研究計画）
1）イオン会合系の分析化学への応用・・・簡易分析法の開発
2）実験教材の意義付け・・・発展途上国への支援も含めて
3）自然水の性質と化学成分の関連・・・微量成分の影響
4）附属岡崎中学校の理科教材史・・・校長として専門分野から教材を視る

・業績リスト
「A comparative study between the current Cambodia's upper secondary school chemistry textbooks and that of Singapore, the United State and United Kingdom」愛教大教育実践センター紀要 9 号
「ロイコ色素と有機塩素化合物の光化学反応および分析化学への適用」愛教大研報
口頭発表
「イオン対を用いた化学結合教材と環境分析への応用」日本理科教育学会全国大会
「カンボジアにおける化学カリキュラム・教科書研究の試み」日本理科教育学会東海支部大会

❻ 附属岡崎中学校校長，附属学校運営委員会，理系機器共同利用センター委員

❼ 刈谷市環境審議会（会長），刈谷市科学技術・理科教育推進委員（顧問），刈谷市・豊橋市実験イベント担当，愛知万博「スクールプロジェクト」コメンテーター，JICA研修員の指導，小坂井西小現職研修，豊橋市理科研究部現職教育，全連小全国大会環境教育部門協力者，碧南・刈谷で小学校 1 校，中学校 2 校で出前講義

太田　忠之　Ohta, Tadayuki　教授　理科教育講座　理学博士

❶ 細胞生物学，発生生物学

❸ 日本生物教育学会（学会誌編集委員），日本魚類学会，日本動物学会，医学生物学電子顕微鏡技術学会

❹ 細胞生物学（学部），動物生理学実験（学部）ほか
細胞生物学特論Ⅰ（大学院），細胞生物学演習（大学院）ほか

❺ 現在の研究テーマ

魚類の体色変化における一次反応。タイリクバラタナゴの配偶行動。魚卵における人工的に注入した精子の侵入過程など

論文

The physiological characteristics of scale erythrophores of the rose bitterling, *Rhodeus ocellatus ocellatus*. Bull. Aichi Univ. Educ., 54: 59-65（2005）

学会発表

タイリクバラタナゴの雄の求愛行動における雌の産卵管及び二枚貝の役割　日本生物教育学会（第78回大会，広島）

❻ 評議員，人事委員（平成16，17年度）
理系器機共同利用センター運営会議委員

佐藤　洋一　Sato, Hirokazu　　教授　教育創造センター，理科教育講座　　理学博士

❶ 物理学，物性物理学，金属電子論，大学教育

❸ 日本物理学会，日本金属学会，大学教育学会

❹ 理科研究A（２年），基礎物理学実験（２年），環境と人間セミナー（主題科目３年），量子物理学演習（４年），固体物性論Ⅰ＆Ⅱ（大学院）

本学の授業において，学生がどのように学び授業評価をしているかを調査・分析し，授業の改善活動が全学的に大きく進展する土台づくりを行った。

❺ 現在の研究テーマ：「複雑な電子化合物の安定機構」，第一原理のバンド計算（LMTO, FLAPW methods）を用いての電子構造の解明によるHume-Rothry ruleの証明

論文：

（1）共著Interpretation of the Hume-Rothery electron concentration rule in the T2Zn11（T=Ni, Pd, Co, and Fe）γ brasses based on first-principles FLAPW calculations, Phys. Rev. B72, 1215102, 2005

（2）共著Free-energy Analysis of the Zr-Ni-Ni-Al Bulk Metallic Glass from the Local Atomic Arrangements of the Relevant Crystals, Materials Transactions, 42, 2791, 2005

（3）共著　関連結晶相の局所構造解析を利用したZr-Ni-Alバルクアモルファス相の安定性の解明，粉末および粉末冶金，53, 100, 2005

（4）共著　バルク金属ガラスZr-TM-Al（TM = Ni, Cu）の電子構造，粉末および粉末冶金，53, 107, 2005

❻ 教育創造センター主任研究員，教務企画委員会委員，入試の専門委員会委員

❽ 2005年度本学FDにおいて，「『授業改善のためのアンケート』（授業評価結果）から見えてくること」を担当

寺中　久男　Jichu, Hisao　　教授　理科教育講座　理学博士

❶ 物性物理学（理論）

❸ 日本物理学会

❹ 情報教育入門Ⅱ（１年），理科研究ＡⅠ（１年），力学Ⅰ（２年），基礎物理学実験（２

年），物理数学演習Ⅰ（２年），共通科目「環境と人間」（２年），量子物理学Ⅰ，Ⅱ（３年），量子物理学演習Ⅱ（４年），環境教育ゼミナール（４年），凝縮体の物理学（大学院）ほか卒業研究の指導等に関すること。

2000年度の教育課程改革の弊害が顕在化し，物理学領域の基礎科目を履修せずに卒業研究に臨む教員養成課程の学生が多くなった。物理学（自然科学）は性格上関連領域の積み上げが必要であるので，大学教育にふさわしいカリキュラムの再検討を急ぐ必要がある。基本的な大学教育を充実し，「大学における教員養成」の原則を実質化することによって，現在の学校現場で要求されている教師としての力量が養成されると考えている。初等・中等学校教員養成教育において，学校現場の事前模擬体験のような実践を繰り返しても現実の学校の実情には対応できないであろう。

学部段階における「専門」教育は基本的には広い意味での教養教育であるので，この充実が高い教養を身につけた卒業生の輩出につながり，教育大学といえども，大学教育の使命の一つを果たすことになると思っている。

❺ 研究テーマ：強相関電子系の物性

金属等の物質中の多数の電子の間に働く相関効果が非常に大きい場合，通常の金属中の電子の状態とは異なり，特異な状態を引き起こす。それが物質の特異な性質に反映し，物性物理の内容を豊かにし，かつ興味深いものにしている。

❻ 委員会等：大学改革推進委員会（副委員長，第一部会，第二部会）

市橋　正一　Ichihashi, Syoichi　　教授　　理科教育講座　　農学博士

❶ 花き園芸学

❷ 名古屋国際蘭会議奨励賞（2006.3），名古屋国際蘭会議奨励賞（2004.3），名古屋国際蘭会議賞（1999.3），名古屋国際蘭会議奨励賞（1997.3），名古屋国際蘭会議奨励賞（1993.3）

❸ 国際園芸学会，園芸学会，同東海支部会（評議員），日本農業教育学会（評議員），日本生物環境調節学会，日本植物細胞分子生物学会，日本植物工場学会，植物化学調節学会，国際植物増殖者会議

❹・環境教育ゼミナールⅠ（１年），情報教育入門Ⅱ（１年），生物学Ⅱ（２年），生物学実験（２年），科学・技術と人間（３年），植物環境機能論（３年），植物生産学（３年），環境緑化実習（３年），保育内容研究・環境B（３年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），生物学ゼミナールⅠ（４年），応用生命科学特論演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

・１年のゼミナールでは，自然科学論文の英文抄録を読ませ，英語論文の構造，訳し方などについて学び，原著論文に親しむ機会を設けている。２年，３年の講義形式の授業では，ビデオプロジェクタを利用したプレゼンテーション形式の授業を行っているが，その欠点を改善するため，昨年同様出欠調査を兼ねた発問を授業途中に行うほか，レポートの提出回数を増やし，自分で学習する機会を多くした。また今年度は，講義資料のHPでの公開を中止した。その結果，話を集中して聞き，メモを取るものの数が増加した。４年生については，昨年に引き続き英語論文の読解力が向上するよう，各人に異なった英語論文を選ばせ，訳を丹念にチエック修正し，正しい訳ができるようにきめ細かな個別指導を行っている。

❺・フアレノプシスの栽培管理，増殖，育種に関する研究を行っている。その成果は，学会での発表を通じ，また生産者を対象にした講演会で，あるいはインターネットを利用して普及を行っている。また，2005年度は生産者団体からの申し入れにより，筆者らが公表した好適施肥処方の実証試験を，学長裁量経費の援助を受け，各地生産者の協力で行

い，その成果は2006年度にまとめる予定である。

・Control of Spiking in *Phalaenopsis* by Application of Mineral Salts and Plant Growth Regulators．Bull. Aichi Univ. Edu.55:39-44.2006。

・柱頭NAA処理によって誘導された４倍体 *Phalaenopsis* の２倍体．園芸学会平成18年度春季大会．千葉大学。

・無機塩と植物生長調節剤施用によるファレノプシス花序発生の制御．名古屋国際蘭会議録．P.1－４．ナゴヤドーム。

・柱頭NAA処理によって誘導された *Bletilla* Brigantes の半数体とその自然倍化．名古屋国際蘭会議録．P.8-11．ナゴヤドーム。

❻ 国際交流委員会副委員長，高大連携入試コーディネーター，理科教育講座代表，生物領域代表，自然観察実習園管理運営委員会委員，同小委員会委員。

❼ 中日園芸文化協会理事,名古屋国際蘭展組織委員会委員長,世界蘭会議委員。

・出前授業「コチョウラン生産における日本，東南アジアでの現状と今後の展望」．（岐阜県立恵那農業高等学校社会人講師，2005.11.25）。

・講師「ファレノプシスの光合成管理」（愛知県花き連胡蝶蘭部門研究会．愛知農業総合試験場，2005.11.14）。

・講演「コチョウランの国際的なリレー栽培の現状について」．（高森ミュージアム，2005.11.3）。

・講師「ファレノプシスの施肥管理」．（花き連ファレノプシス部門．日間ヶ島，2005.7.20）。

・講師「中国花卉生産紹介」（愛知県花き連総会．知多農改センター，2005.6.10）。

・パネルディスカッションパネラー「21世紀・ランの世界は」（ラン懇話会．農大ホール，2005.7.16）。

❽・韓国農村開発局名誉研究員（2003.7.1－2006.6.30）。

・中国広東省農学院花卉研究所からの招聘によりファレノプシス生産に関する講演と指導を行い，中国南部の花生産状況の視察を行った（2006.3.6－2006.3.11）。

・カンボジアの花き園芸植物並びに野生ランの生育状況の視察を行い，カンボジア高等教育機関（NIE）を訪問し生物スタッフと交流を行った（2005.9.18－2005.9.27）。

芹沢　俊介　Serizawa, Shunsuke　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 生物学・環境科学，専門分野：生物多様性，地域自然環境

❸ 日本植物学会，日本植物分類学会（監事），日本環境教育学会，International Association of Plant Taxonomy

❹ 環境教育概論（１年），自然環境論Ⅱ（１年），自然科学入門（１年），自然体験教育論（２年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），環境教育特論（大学院）など

FD：自然体験教育論，環境教育特論の授業内容の一部を印刷・公表

自然科学入門では，タンポポに関する小学校２年国語説明文教材２点を比較して読ませ，自然科学の方法について考えさせた。この内容は2006年度に一部改善して再実施した上で，授業記録を公表する予定である。

総合演習Ⅱでは，昨年度に続き学生が教育実習で見てきた「総合的な学習の時間」の観察記録をまとめて，「私の見た総合的な学習　第３集」（78頁）を作成した。レポート

は全員Ａ評価の方針で，Ａ評価相当になるまで何回でも書き直させた。昨年以上に手間がかかったが，一般校の実践事例をランダムに抜き出したものであること，第三者の観察記録であることの２点で，類例の少ない事例集ができたものと考えている。

また，2005年度は直接担当しなかった授業であるが，大学教育基準化の方向に対応するため，教員免許状関連の必修科目の内容に関する「ティーチャーズ・ミニマム・プロジェクト」を立ち上げ，理科・教科専門教官の協力を得て理科研究Ａの授業テキストを編集した。

❺ (1) 日本産絶滅危惧植物（特にシダ植物，テンナンショウ類）の現状調査と保全

環境省版レッドリストの見直し作業，屋久島におけるシカ食害対策等に関与した。

(2) 愛知県産維管束植物の多様性に関する調査と地方版レッドデータブックのあり方

平成17年度は三重県のレッドデータブックを校閲し，新川町史の植物部分を執筆した。これらはどちらも2005年度中に印刷のはずだが，実際の発行は少し遅れている。

(3) タンポポ，サクラ，ミゾソバ等の種分類・種分化

この分野は渡邊幹男助教授と共同で研究を行っているので，渡邊氏の頁を参照されたい。

(4) 環境教育

以下の論文２点，小冊子２点，評論１点を公表した

伊藤真由子・鈴木ゆかり・芹沢俊介，2005，チョウ類群集を用いた校庭環境評価．環境教育15：31-38.

芹沢俊介・伊藤真由子・鈴木ゆかり，2006，愛知県小学校校庭のチョウ類群集は学校間でどう異なるか－主要出現種とその出現環境に着目して，豊橋市自然史博物館研究報告16:39-47.

芹沢俊介（編），2006，ログハウスを作ろう（愛知教育大学ブックレット　環境教育の展開と実践④，35頁）

芹沢俊介，2006，高校英語Ⅰにおける環境教育（愛知教育大学ブックレット　環境教育の展開と実践⑤，29頁）

芹沢俊介，2005，愛知万博顛末記，遺伝59（６）:20-23.

❻ 平成17年度は特になし。正規組織外では愛知教育大学ブックレットを企画・編集し，４点を刊行した。

❼ 審議会等：愛知県環境審議会委員（自然環境部会長），同都市計画審議会環境影響評価部会委員，同環境影響評価審査会委員，愛知県文化財保護審議会委員，三重県環境影響評価審査会委員，同生物多様性調査検討委員会委員，経済産業省2005年日本国際博覧会に係る環境影響評価会委員，博覧会協会環境影響評価アドバイザー会議委員，愛知県植物誌調査会代表など

講演会講師等：三好悠学カレッジ（６回），東郷町春の自然観察会など

その他の普及活動：名古屋鉄道広報誌Windに「名鉄沿線野の花紀行」を連載

教科書等の編集：大日本図書・中学校理科第二分野教師用指導書を執筆した。

教材図書等の供給：平成17年（暦年で集計）の注文53件，配布部数合計2217部

遠西　昭壽　Tonishi, Shoju　　教授　　理科教育講座　　教育学修士

❶ 理科教育学

❸ 日本理科教育学会　理事　事務局長，日本地学教育学会　常務委員，日本科学教育学会　会員，日本教科教育学会　会員，日本教育学会　会員，日本地質学会　会員，名古屋地

学会　会長，その他

❹ 教育学部：理科教育Ｂ，理科教育ＣⅡ，総合演習Ⅰ，総合演習Ⅱ，地学ゼミナール
大学院：理科教育方法論Ⅰ，理科教育方法論Ⅱ，理科教育方法論演習，理科授業研究Ⅲ，特別研究

❺ 科学研究費
科学研究費補助金　基盤研究（C）「新しい科学館からの理科授業の再考」，同　報告書

論文等
「科学的思考とは科学の文脈において科学の『ことば』で自らに語ること」（単著）理科の教育，53巻，７号，PP.4-7，2005
他

口頭発表
「日中の教師と学生の科学観と授業観」（共同）日本理科教育学会第55回全国大会
他８件

大学・附属学校共同研究会　管理運営部会代表

❻ 附属高等学校長

❼ 鳳来寺山自然科学博物館　学術委員

澤　　武文　Sawa, Takeyasu　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 天文学（銀河天文学）

❸ 日本天文学会（教育問題懇談会委員），名古屋地学会（会長），天文教育普及研究会（会長）

❹ 情報教育入門Ⅱ（１年），理科研究BⅡ（１年），地学Ⅰ（１年），地学教材研究（２年），地球環境科学Ⅱ（２年），地学Ⅱ（３年），宇宙科学A（３年），宇宙科学実験B（３年），環境情報処理演習（３年），宇宙科学演習B（４年），地学ゼミナールⅠ（４年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），天体物理学特論Ⅰ（大学院），天体物理学特論Ⅱ（大学院），天体物理学特論演習Ⅰ（大学院），天体物理学特論演習Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ（大学院），特別研究Ⅱ（大学院）

理科教育講座では教員養成課程と環境教育課程の学生を全教官で教育するというシステムを採用しているため，教育科目の枠の関係やキャップ制によって専門の授業を受講できない課程の学生がいる。そのため，積み上げの授業を行うことができず，自然科学を体系的に教育することが非常に困難になっている。また，地学の特性かもしれないが，多くの異なる学問分野があるにもかかわらず，専門の授業時間が十分に確保できないため，結果的に細切れの講義が多くなり，十分な教育ができない状況である。

FD活動は行っていない。

❺ （1）局所銀河群の起源と運動に関する研究
（2）高速度雲の起源に関する研究
（3）銀河系のガス円盤のたわみに関する研究

宇宙初期に銀河系とアンドロメダ銀河が衝突し，その結果大小マゼラン雲などの局所銀河群内の多くの矮小銀河が形成され，現在の位置にまき散らされたという，局所銀河群の起源についてのこれまでにない新しい説を提唱した。また，高速度雲についても，

この新しい説で説明できるかどうか，現在研究中である。また，銀河系のガス円盤のたわみが，大小マゼラン雲の潮汐作用で説明できないかについて，過去の研究結果を含め，検討中である．

論文：

・A Dynamical Model for the Orbit of the Andromeda Galaxy M31 and the Origin of the Local Group of Galaxies, *Astronomical Society of Japan*, 2005, 57, 429-446.

❻ 教育研究評議会評議員（学生支援担当）

❼ 平成17年度SPP教員研修「ナノ太陽系」（対象：愛知県小・中学校教師11名）（於：愛知教育大学自然科学棟，120分）

◆愛知教育大学天文台一般公開（ミニ講座と観望会：以下，ミニ講座タイトル）

・第27回：講座「速く動けば年をとらない？―相対性理論の不思議―」
・第28回：講座「今日はとことん銀河系」
・第29回：講座「今はいつ？ 宇宙の始まり」（特色GP関連事業）
・第30回：講座「最新惑星事情」「アンドロメダ姫物語」（特色GP関連事業）
・第31回：講座「星座早見版のひみつ」（特色GP関連事業）
・第32回：講座「私の研究から －SPH法による大小マゼラン雲と銀河系との相互作用－」（特色GP関連事業）

◆天文講演「宇宙の果てはどこにある―パワーズオブテンの世界―」（於：浜松市科学館，90分）

◆「その道の達人」派遣事業「宇宙の達人コース」

・学校法人星雲学園星雲中学校（長崎県） 2 年生150人を対象に宇宙に関する講義（90分）
・永平寺町立永平寺中学校（福井県） 3 年生70人を対象に宇宙に関する講義（90分）
・呉市立片山小学校（広島県） 5 ・ 6 年生70人を対象に宇宙に関する講義（90分）
・和泊町立和泊小学校（鹿児島県） 4 ～ 6 年生70人を対象に宇宙に関する講義（90分）
・山梨県立巨摩高等学校 1 年生240人を対象に宇宙に関する講義（90分）
・草津市立老上小学校（滋賀県） 4 年生90人を対象に宇宙に関する講義（90分）

吉田　淳　Yoshida, Atsushi　教授　理科教育講座　教育学修士

❶ 理科教育学，科学教育，教科教育学

❸ 日本理科教育学会　事務局次長・理事
日本科学教育学会　理事
日本教科教育学会　理事
日本エネルギー環境教育学会　理事
日本初等理科教育研究会
National Association of Research in Science Teaching
National Science Teachers' Association

❹ 理科教育A（3年），理科教育B（2年），理科教育CⅣ（4年），化学教材論（4年），総合演習Ⅰ（4年），総合演習Ⅱ（4年），化学ゼミナールⅠ・Ⅱ（4年），理科授業研究特論Ⅰ（大学院），理科授業研究特論Ⅱ（大学院），理科授業研究演習（大学院），理科授業研究（大学院）

学部授業では，理科教育に関する理論を具体的な事例を交えて扱っている。また，理科教育CⅣでは学習評価に関する講義とともに，学生による学習指導案の作成，発表な

ど実践的な側面を重視し，発表能力や討論を通して資質能力を高めている。大学院教育では，小，中，高等学校の理科教員の受講生を交えて，実践から見た理論の省察や理論から実践を振り替えることを促し，理論と実践の融合を図っている。このことが学部直進の大学院生が，理論面だけの研究ではなく実践につながる研究を目指すなどの成果が上がっている。

❺ 科学研究費補助金による研究：

・「理科教育における臨床的研究と理科教師教育への適用」（代表:１,200千円）

・「優れた小中学校理科授業構成要素に関する授業ビデオ分析とその教師教育への適用」（分担：560千円）

その他の補助金による研究：

・小，中，高等学校向け理科実験クリップビデオの開発とその適応（代表：１,500千円）

研究論文：

・吉田　淳　「アメリカ合衆国の高等学校における科学教育」化学と教育　第53巻，第５号

・吉田　淳他「大学生の環境意識におけるジェンダー分析」日本科学教育学会　年会論文集　29

・吉田　淳他「これからの化学教育研究の方向―アメリカ合衆国全米科学教師協会（NSTA）とオーストラリアの理数科教育に学ぶー」日本科学教育学会年会論文集，第29号

・吉田　淳他「Comparative study between the current Cambodia's upper secondary chemistry textbooks and that of Singapore, the US and the UK」愛知教育大学　教育実践総合センター紀要，第９号

口頭発表：国内学会全国大会３件，国際セミナー（台湾）２件

研究活動においては，科学研究費補助金のテーマである理科授業に関する一連の研究から，授業のあり方を理論面，実践面の相互関係を明らかにしてきた。その成果を小，中学校の理科授業研究に還元するとともに，学部大学院授業や卒業研究，修士論文指導などの学生指導において適用できる内容を抽出してきている。高等学校理科実験ビデオクリップ開発から始めたデジタルコンテンツの開発や事例研究は小，中学校理科向けまで拡大している。この成果は産学共同事業として展開し，成果物は市販されるに至った。台湾・日本共同セミナーでTIMSS2003に関する発表と討論をすることができた。

複数の学会理事として，学会の運営などに貢献することができた。平成17年度は日本科学教育学会が主催した「社会に提案し社会と協働する科学教育研究」に関する２回のシンポジウムにおいて座長を務めた。また，同学会国際交流委員会企画課題研究においてもオーガナイザーとして中心的な役割を担った。

❻・教育研究評議会評議員，財務委員会委員（同財務部会），社会連携推進検討委員会他

大学運営に関して，教育研究評議員としてあるいは財務委員として，大学運営にさまざまな提案を行った。その一部は大学の運営に反映された。

❼・岡崎市立上地小学校等において講演，指導助言

・愛知県総合教育センター10年目研修（高校理科）において講義担当

大学教員の重要な使命として，研究成果の社会への還元がある。附属学校，愛知県内をはじめさまざまな小，中学校，研究会，教育総合センターなどにおいて理科授業の研究

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

を通した授業改善について助言指導，講演を行ってきた。この社会的活動においても，研究成果を実践レベルに反映させることを通して評価されることを期待している。

・JICA国際協力機構からの要請事業として，「カンボジア高等学校カリキュラム・教科書作成プロジェクト」に参画した。12月中旬から3週間にわたりカンボジアへ訪問し，当地の教育省，教育研究所などにおいて，カリキュラム策定の基本的な考え方を講義，検討した。引き続き，本学においてカンボジアから派遣されたワーキンググループを約2ヶ月間指導助言し，カンボジア高等学校における「第10学年総合理科」「第11－12学年化学」のカリキュラム（目標，内容）の設定に従事した。なお，この事業は国立大学法人愛知教育大学が基幹大学として国際協力機構へ申請したこともあり，相当額の経費配分があったが，法人としてのオーバーヘッド比率は約70%であり，今後の同プロジェクト，同様の受諾研究事業として課題を残した。

矢崎　太一　Yazaki, Taichi　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 物理学，非線形物理，音響工学

❸ 日本物理学会，低温工学・超伝導学会，日本音響学会，振動流エネルギー変換・輸送現象研究会

❹ 自然科学入門（1年），基礎物理学演習（2年），基礎物理学実験（2年），理科研究BⅠ（1年），環境と熱力学（2年），物理学実験Ⅰ（3年），低温物理学特論Ⅰ（大学院）等

共通科目について非専門分野の学生が積極的に授業に参加できるように内容を変更し，特に「物理学」の歴史・意義及び価値について時間をかけた。専攻科目については改革の必要性を強く感じる。授業内容の予習・復習をしない学生はもちろん，試験勉強すること無しに試験を受ける学生が増加している現状に憂慮している。高校卒業時よりも学力が低下する前に専攻科目を早めに（1年次から）行う必要を強く感じる。また授業内容よりはむしろ学習意欲を高めるための環境改善が必要と考える。

❺・「非平衡熱力学」を確立するための基礎研究を遂行すると同時に，非平衡の観点から「エンジン」を理解するための新しい概念と方法を実験的に提案することを目的する。

・物理学事典（共著者多数），培風館，2005.

細管内の音波伝播と熱音響現象（特集），ながれ（日本流体力学会誌），24，2005.

音で冷やす方法（解説），日本音響学会誌，62，2006.

“Calibration of a thermocouple for measurement of oscillating temperature” Rev. Sci. Instru. 76, 2005.

“Accurate measurement of Q-value of acoustic resonator” Phys. Rev. E, 72, 2005.

“Thermodynamic Cycle executed in a looped tube thermoacoustic engine” J. Acoust. Soc. Am., 117, 2005.

熱音響現象の理解と応用を目指して（招待講演），京都大学数理解析研究所.

熱音響現象の歴史と今後の展望（招待講演），日本音響学会（日本大学）.

・熱音響振動系におけるエントロピー生成最小原理の実験的検証，800,000円（基盤研究(c)，代表）

❻・共通科目委員会委員

・就職委員会専門委員

・理系機器共同利用センター長

河村　善也　Kawamura, Yoshinari　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 古生物学
関連分野：地質学，第四紀学，哺乳類学，考古学，人類学

❸ 日本古生物学会，日本地質学会，日本第四紀学会【評議員，企画担当幹事（2005年 8 月まで），論文賞選考委員（2006年 1 月から），日本第四紀学会50周年記念事業実行委員会委員】，日本哺乳類学会，日本洞窟学会，地学団体研究会，化石研究会

❹ 専門教育入門A（1 年），理科研究（1 年），地学Ⅱ（2 年），地学教材研究（2 年），地球環境科学Ⅰ（2 年），地学実験（2 年），地学野外実習Ⅰ（2 年），地学野外実習Ⅱ（3 年），地質岩石科学実験A（3 年），地史学A（3 年），地史学実験B（3 年），地学ゼミナールⅠ（4 年），地史学演習B（4 年），環境教育ゼミナールⅡ（4 年），古生物学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院），古生物学特論演習Ⅰ・Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）
担当は地学のうち，古生物学と地質学の分野である。この分野では実際の自然を観察して学ぶことが重要と考えられるので，授業では特に野外での実習，自然史系博物館での実習，実物標本の観察などを出来るだけ多く取り入れて，学生の興味を引き出し，わかりやすく身につく授業を行うよう心がけている。

❺ 現在の研究テーマ：
新第三紀・第四紀の脊椎動物化石の研究と新第三系・第四系の層序学的研究。今後は日本での研究だけでなく，海外での研究もさらに推進していきたい。

・業績リスト（著書・論文など）：
河村善也（2005）広島県帝釈峡遺跡群の後期更新世と完新世の哺乳動物群―その特徴と時間的変化及び推定される古環境―。考古論集（川越哲志先生退官記念論文集），p.81-100，川越哲志先生退官記念事業会。
河村善也（2005）更新世と完新世の哺乳類。独立行政法人文化財研究所・奈良文化財研究所（編）「日本の考古学」，p.49-55，学生社。
Wei G.B., Taruno, H., Kawamura, Y. and Jin C.Z.（2006）Pliocene and Early Pleistocene primitive mammoths of northern China: Their revised taxonomy, biostragraphy and evolution. *Jour. Geosci. Osaka City Univ.,* vol.49, p.59-101.

・業績リスト（研究発表）：
河村善也（2005）広島県神石町帝釈大風呂洞窟遺跡の後期更新世～完新世の哺乳類化石群集。2005年日本第四紀学会大会，島根大学。

・科学研究費補助金などの受領状況：
平成17年度科学研究費補助金基盤研究（B）「第四紀の日本列島とその周辺における陸橋・氷橋の形成と人類の渡来―地質学・古生物学と考古学・人類学の学際的研究―」（代表者）220万円。平成17年度科学研究費補助金基盤研究（S）「分子系統学及び化石記録に基づく日本の生物相の起源と形成プロセスの研究」（分担者）。平成17年度科学研究費補助金研究成果公開促進費「在日本脊椎動物化石標本データベース」（分担者）

❻ 講座内大学院担当委員

❼ 各種審議会等：
日本学術会議古生物学研究連絡委員会委員（2005年 9 月まで），日本学術会議地質科学総合研究連絡委員会第四紀学専門委員会委員（2005年 9 月まで），国際第四紀学連合

（INQUA）層序・年代委員会アジア・太平洋地域分科会委員，国立科学博物館研究報告編集委員会編集顧問，豊橋市自然史博物館資料収集委員会委員，鳳来寺山自然科学博物館学術委員。

❽ 中国科学院古脊椎動物古人類研究所客員教授（2005年４月から）

柳澤　寛　Yanagisawa, hiroshi　教授　理科教育講座　理学博士

❶ 植物生理学，生化学

❷ 日本植物生理学会，アメリカ植物生物学会

❸ 環境教育ゼミⅠ（１年），生物学Ⅰ（２年），生物学実験（２年），植物生理学（２年），生理化学実験（３年），生理化学演習（３年）卒業研究（４年）等

❹ 現在の研究テーマ
高等植物のポリアミン代謝関連酵素の研究

三浦　浩治　Miura, Kouji　教授　理科教育講座　理学博士

❶ 物理学
専門分野：表面物理
関連分野：摩擦物理

❷・2005 BEST REFERENCE WORK AWARD by American Society for Engineering Education, USA
・2005 BEST Outstanding Academic Title by the CHOICE magazine from American Library Association
・2006 The World Tribology Congress III Oversight Committee Award by ASME
・2005年日本表面科学会ゴールドメダル

❸ 日本物理学会，日本応用物理学会，日本表面科学会，日本トライボロジー学会

❹ 基礎物理学実験（２年），物理学実験Ⅰ，Ⅱ（３年），物理学Ⅱ（３年），物理特別実験（４年），自然数学演習（１年），理科教育A（大学院），表面科学特論Ⅰ（大学院），表面科学特論演習Ⅰ（大学院）
　理科，環境の学生に対する実験，講義を中心に授業を行なっている。講義では，卒業研究を行なうために必要な数学的な基礎，物理の基礎の習得を目標にしている。実験では，実験機具の使い方から，実験を行なうに当たっての心構えなどが身につくように指導している。

❺ （1）摩擦の物理：原子，分子レベルからの摩擦現象の解明。
（2）超潤滑状態の実現：摩擦がゼロになる状態の実験的研究。
（3）分子操作の物理：分子の任意操作に必要な物理の構築。
・Superlubricity of C60 Intercalated Graphite Films, e-J. Surf.Sci.Nanotech. Vol.3 (2005) 21-23
・ナノマテリアルハンドブック（分担）：力学物性，ナノトライボロジー，エヌ・ティ・エス 2005年
・C_{60} 分子封入グラファイトフィルムの作成とその超潤滑特性
　トライボロジスト　50 (2005) 61-64
・Theoretical simulation of atomic-scale peeling of single-walled carbon nanotube from graphene surface e-J.Surf. Sci. Nanotech. Vol.4 (2006) 133-137

❻ 物理領域代表
❼ 日本トライボロジー学会マイクロマシンのトライボロジー研究会委員（1999年４月～現在）

戸谷　義明　Toya, Yoshiaki　　教授　　理科教育講座　　農学博士

❶ 専門分野：有機化学（生物有機化学），理科教育
関連分野：天然物化学，光化学，生体物質化学
❷ 第２回小柴昌俊科学教育賞優秀賞（平成基礎科学財団，３/26/2006）
❸ 日本農芸化学会，日本化学会（職域代表２/2006-），日本理科教育学会，生物発光化学発光研究会
❹ 化学特別実験（４年），化学ゼミナールⅠ，Ⅱ（環境教育ゼミナールⅡ）（４年），有機化学実験（３年），総合演習Ⅰ（３年），有機化学演習Ⅰ（２年），環境と人間展開Ⅰ「自然環境と化学」（２年），理科研究ＢⅠ（２年），他全19科目

全学学生が参加できるボランティア活動の学校行事である訪問科学実験の指導教員代表として，１）有為な教員養成のための教育，２）理科好きの子どもを育むための地域・社会への貢献，の活動目標を達成するために，参加学生を支援し，指導・引率するとともに，安全第一をモットーとした，対外的に説明責任が果たせる運営システムを開発・整備するために奔走した。１）活動内容の大学HP公開と訪問先のWeb公募，２）日本化学会，日本理科教育学会からの協賛，愛知県の他，刈谷市，岡崎市，知立市，豊橋市の各教育委員会からの後援の獲得，３）小柴昌俊科学教育賞への申請，優秀賞獲得，等，本活動の信用とステータスをアップさせるように努力し，ボランティア証明書発行システムの確立とともに，参加学生に教育効果以外に様々な利益があるような配慮のために全力を尽くした。

❺１）ウミホタルの生物発光の教材化・演示実験法開発のための検討及び基礎研究。開発したウミホタルの凍結乾燥サンプルが市販教材の乾燥ウミホタルより発光能において優れていることを証明した。今後は実際に教材として学校等での実践授業を行い，教育効果を調査する予定。

２）タラバガニの殻に存在し，キチンに親和性を有する新規脂溶性ペプチドの単離，及び構造決定。殻から大量の抽出物を得た。今後，抽出物の精製を進め，単離された物質の構造決定を行う予定。

戸谷　義明，愛知教育大学の学生による訪問科学実験のための生物発光化学発光の科学マジック法の検討，愛教大研報（自）2006，55，45-53。

○戸谷　義明，平賀　伸夫，*日本理科教育学会第55回全国大会*　1C-03「愛知教育大学の学生のボランティア活動による訪問科学実験」（８/４/2005）；戸谷　義明，*同*　1C-02「生物・化学発光系の化学マジック実験法の検討」（８/４/2005）；戸谷　義明，*同*　1W-03「愛知教育大学の訪問科学実験で演示される化学マジック」（８/４/2005）。

○戸谷　義明，平賀　伸夫，*日本化学会第86春季年会*　2M1-46「愛知教育大学の学生のボランティア活動による訪問科学実験システムの改善と実践」（３/28/2006）。

甲殻類の殻に含まれる高脂溶性タンパク質・ペプチド類の探索，機能解析と応用，￥2,200,000，文部科学省科学研究費補助金（萌芽研究）。

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

学生のボランティア活動による訪問科学実験システムの開発と実施，￥400,000，日産科学振興財団　理科・環境教育助成（特色GP採択のために延長助成決定後，辞退）。

第２回小柴昌俊科学教育賞優秀賞副賞，愛知教育大学の学生による訪問科学実験，￥1,000,000，平成基礎科学財団（田原学長名義の奨学寄付金として大学に寄附）。

❻ 共通科目「環境と人間」コーディネーター。

❼ 訪問科学実験で多くの学校等を訪問し，小中学生や科学展来場者に，科学への興味を喚起し，理科好きを育む科学実験に接する機会を提供した。訪問科学実験の活動は本学の特色GP採択に多いに貢献するとともに，著者が代表者として申請して受賞した第２回小柴昌俊科学教育賞優秀賞は本学を社会に広くアピールすることとなった。2005年度訪問実績（12回）：刈谷市立平成小５/25，愛知万博「科学と遊ぶ体験ひろば」７/30，７/31，豊橋「子どものための科学展」10/15，10/16，幸田町立豊坂小PTA家庭学級10/26，一色町立一色中部小PTA 10/29，刈谷市立住吉小11/16，知立「生涯学習フェスティバル」11/19，日進市立香久山小11/30，岡崎市立岩津小12/７，三好町立北部小12/14。訪問科学実験のテレビ取材放映（主要局，テレビ愛知５/31マイユウ！，２分24秒，CBCテレビ11/29ユーガッタ！CBC，２分52秒）。第２回小柴昌俊科学教育賞優秀賞の受賞は日本経済新聞３/27/2006（全地域）朝日新聞３/28/2006夕刊（全地域）の他，共同通信経由で中日新聞３/27/2006朝刊（全地域）を含む全国新聞ニュース網各社等に掲載。

❽ 本学の特色GPの申請，及び特色GP採択事業の推進のために協力した。

菅沼　教生　Suganuma, Norio　　教授　　理科教育講座　　農学博士

❶ 植物生理学

❸ 日本植物生理学会，日本土壌肥料学会，American Society of Plant Biologists，International Society for Molecular Plant-Microbe Interactions，植物微生物研究会

❹ 環境教育ゼミナールⅠ（１年），理科研究AⅠ・AⅡ（１年），生物学Ⅱ（２年），生物学実験（２年），環境生物学（３年），生物環境調節法（３年），植物生理学実験（３年），生物学ゼミナールⅠ・Ⅱ（４年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），生物教育教材演習B（４年），生物環境特別実験B（４年），植物生理学特論Ⅰ（大学院），植物生理学演習Ⅰ（大学院）

❺ 現在の研究テーマ：

・マメ科植物と根粒菌の共生機構

業績リスト：

論文：

・The sulfate transporter SST１ is crucial for symbiotic nitrogen fixation in *Lotus japonicus* root nodules. Plant Cell 17:1625-1636 (2005)

・Genetics of symbiosis in *Lotus japonicus*: Recombinant inbred lines, comparative genetic maps, and map position of 35 symbiotic loci. Mol Plant-Microbe Interact 19:80-91 (2006)

著書：

・Methods for studying nodule development and function. In *Lotus Japonicus* Handbook, ed by A.J. Marquez, Springer (2005)

学会発表：

・Insights into nodule physiology and metabolism from transcritomics, metabolomics,

bioinformatics, and genetics. 12th International Congress on Molecular Plant-Microbe Interactions (2005)
・菌根菌に特異的なミヤコグサ共生変異体単離の試み　植物学会（2005）
・共生窒素固定活性の発現を制御するSen1遺伝子のポジショナルクローニング　第15回植物微生物研究交流会（2005）
・アーバスキュラー菌根形成に特異的なミヤコグサ共生変異体を単離する試み　第15回植物微生物研究交流会（2005）
・ミヤコグサSen1遺伝子は共生窒素固定活性の発現に必須である　日本植物生理学会（2006）

❻ 組換えDNA実験安全委員会委員

❼ 「小柴記念賞」審査員（豊橋市教育委員会），「学びとふれあい子ども教室」協力者（豊川市教育委員会），「出前講座」講師（愛知県立知立東高等学校，愛知県立小坂井高等学校）

三宅　明　Miyake, Akira　教授　理科教育講座　理学博士

❶ 岩石学，鉱物学，地質学

❸ 日本地質学会，日本岩石鉱物鉱床学会，日本地学教育学会，名古屋地学会

❹ 地学Ⅰ（1年），地球環境調査法（1年），専門教育入門B（1年），地球環境科学Ⅰ（2年），環境と人間（展開）（2年），地学教材研究（2年），固体地球科学演習A（2年），地学野外実習Ⅰ（2年），地学野外実習Ⅱ（3年），地質岩石科学実験A（3年），固体地球科学実験A（3年），固体地球科学B（3年），環境地学教材実験（3年），地学ゼミナールⅠ（4年），環境教育ゼミナールⅡ（4年），岩石学特論演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）

専門科目では，地質学や岩石学関連の内容であるが，実物を実際に観察することが内容の理解に重要であると考え，実習の授業以外であっても，教室内での講義とは別に野外での教育を積極的に取り入れた。大学院においても，2つの授業を担当したが，野外実習を主としたものであった。卒業研究では，5人の4年生学生を指導した。

❺ 現在の研究テーマ：
領家変成体の変成・変形史の研究
業績等：
偏光顕微鏡活用例：コノスコープ像による石英のc軸方位の求め方，地質ニュース612号，44-48
中部地方（日本地方地質史4），朝倉書店，2006年，各論6章 領家変成帯（230-241）担当

❻ 理科教育講座地学地学領域代表，中等理科専攻代表

❼ 名古屋地学会編集委員

稲毛　正彦　Inamo, Masahiko　教授　理科教育講座　理学博士

❶ 無機化学，錯体化学

❸ 日本化学会（東海支部幹事），日本分析化学会（中部支部幹事），錯体化学会，光化学協

会，溶液化学研究会，The American Chemical Society

❹ 専門教育入門（１年），化学Ⅰ（１年），理科研究（１年），無機化学演習Ⅰ（２年），分析化学演習Ⅰ（２年），分析化学演習Ⅱ（２年），化学教材研究（２年），化学実験（２年），無機化学（３年），総合演習Ⅰ（３年），無機化学実験（３年），分子機能化学A（３年），化学ゼミナールⅠ（４年），化学ゼミナールⅡ（４年），化学特別実験（４年），無機化学特論Ⅰ（大学院），無機化学特論Ⅱ（大学院），無機化学特論演習Ⅰ（大学院），無機化学特論演習Ⅱ（大学院）

教育活動の問題点，FD活動，教育に対する抱負：

教育活動については，学部及び大学院における無機化学関係の専門教育の充実と発展を目指して学生の教育に当たるとともに，化学に関係した教養教育を通して，化学を専門としない学生にも化学の面白さと重要性を理解してもらえるよう心がける。また，卒業研究などを通して，学生が科学的な考え方や研究方法を習得し，問題解決能力を高めることができるよう努めたい。

❺・現在の研究テーマ：

金属イオンの関与する溶液内化学反応の研究

金属イオンの関与する溶液内化学反応を平衡論，速度論，及び，構造化学的見地から研究して，その反応の機構を明らかにすることを目的として，次のような研究課題に取り組んでいる。

(1) レーザーフラッシュフォトリシスを用いた金属錯体の光化学反応の研究
(2) 金属錯体の関与する電子移動反応や配位子置換反応の研究
(3) 多核金属錯体を含む分子集合体の生成反応の動的機構の研究

・業績リスト：

1) Laser Photolysis Studies of the Reaction of Chromium (III) Octaethylporphyrin Complex with Triphenylphosphine and Triphenylphosphine Oxide
Inorg. Chem. **2005**, *44*, 6445-6455.

2) Electron Transfer Reaction of Cu (II) Porphyrin Complex: Effect of the Structural Deformation on the Electron Self-Exchange Rate
Inorg. Chem. Commun. **2005**, *8*, 979-982.

・科学研究費補助金：

「金属ポルフィリン錯体の分子構造と反応性の相関の解明」（基盤研究（C），100万円）

❻ 環境教育課程代表

❼ 日本分析化学会欧文誌 Analytical Sciences 編集委員，愛知県教科用図書選定審議会委員

中島　清彦　Nakajima, Kiyohiko　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 専門分野：錯体化学
関連分野：有機金属化学

❸ 日本化学会，アメリカ化学会，錯体化学会，溶液化学研究会

❹ 環境教育ゼミナール（１年），化学Ⅰ（１年），無機化学演習Ⅰ，Ⅱ（２年），化学実験（２年），無機化学（３年），無機化学実験（３年），分子機能化学（３年），総合演習Ⅰ（３年），化学ゼミナールⅠ，Ⅱ（４年），化学特別実験（４年），錯体化学特論Ⅰ，Ⅱ（大学院），錯体化学演習Ⅰ，Ⅱ（大学院），など主として，金属錯体や無機化合物を題材とした講義，演習，実験を担当している。我々の身の回りには金属及び金属イオンを

含む物質が数多く存在しており，その重要性や利便性と共にこれらの物質が関わる環境問題等も教育現場で日常的な話題として登場している。学生がこのような今日的な化学の話題を理解し，考察するために必要な知識を習得できるように，体系的な講義，演習，実験のカリキュラムを心がけている。学生が，３年次までに化学的基礎を身につけた上で，４年及び大学院においては，最新の研究論文を理解し，自ら実験的な取り組みができるレベルにまで到達できることを目標としている。

❺ 外場応答性金属錯体の開発と，構造，電子状態及び反応性の制御：光，電位，プロトン濃度等の外場変化に対して可逆的な応答性を示す金属錯体の合成と，分子レベルでの反応理解。

業績リスト：

１．Formation of Linear Tetramers of Diarylalkynes by the Zr/Cr System
T. Takahashi, Y. Liu, A. Iesato, S. Chaki, and K. Nakajima, A. Kanno, *J. Am. Chem. Soc.*, 127, 11928 (2005).

２．Laser Photolysis Studies of the Reaction of Chromium (III) Octaethylporphyrin Complex with Triphenylphosphine and Triphenylphosphine Oxide
M. Inamo, N. Matsubara, K. Nakajima, T. S. Iwayama, H. Okimi, and M. Hoshino, *Inorg. Chem.*, 44, 6445 (2005).

３．Chromium-Mediated Synthesis of Polycyclic Aromatic Compounds from Halobiaryls
K. Kanno, Y. Liu, A. Iesato, K. Nakajima, and T. Takahashi, *Org. Lett.*, 7, 5453 (2005).

４．Formation of Indene Derivatives from Bis (cyclopentadienyl) titanacyclopentadienes with Alkyl Group Migration via Carbon-Carbon Bond Cleavage
T. Takahashi, Y. Kuzuba, F. Kong, K. Nakajima, and Z. Xi, *J. Am. Chem. Soc.*, 127, 17188 (2005).

研究助成：

１．「外場環境の変化に応答した可逆な発光波長可変性を示す金属錯体の開発と発光波長の制御」（基盤研究（C）(2)，代表）／科学研究費補助金

２．「多置換π電子系分子の開発と応用」／受託研究費

❻ 大学院担当

❼ 刈谷市立朝日中学校から課外授業の講師依頼を受け，担当した。

澤　　正実　Sawa, Masami　　助教授　理科教育講座　　理学修士

❶ 専門分野：発生生物学
関連分野：遺伝学

❸ 日本動物学会，日本遺伝学会，日本節足動物発生学会

❹ 発生遺伝学（大学院），発生遺伝学演習Ⅰ（大学院），発生遺伝学演習Ⅱ（大学院），環境教育概論（１年），生命環境論演習（１年），生殖技術と生物学（２年），生物学基礎演習Ａ（２年），発生生物学（２年），発生生物学実験（２年），生物教材研究（２年），臨海実習（２年），生物情報論演習（３年），生物教育教材演習Ａ（４年），環境教育ゼ

ミナールⅡ（４年），生物学ゼミナールⅠ（４年），生物学ゼミナールⅡ（４年），生物環境科学特別実験A（４年）

学生の「考える力」の低下が年々激しいことから，演習・実験の時間を使い，学生達に自由研究を課し，自分でいろいろなことを調べ，考えていくという姿勢を身につけさせる試みを行っている。これにより，学生が少しでも自分で，疑問に思ったことを調べ，解決できる力を身につけさせることが出来ればよいと考える。将来，教職に就いた学生にとって自由研究は，総合的な学習の時間の指導にも役立つであろう。また，卒論指導においても，論理的に物事を「考える力」を身につけさせることに重点を置き，教官側からの指示は必要最小限とし，できる限り学生にいろいろなことを考え，質問ができるような指導を心がけている。

生物学領域で作成した「生物学実験　手引き書　第二版」と，愛知教育大学出版会から出された「愛知教育大学ブックレットFD　理科研究A」の一部分の執筆を担当した。

❺ 現在の研究テーマ：

（１）単為発生のメカニズム：カブラハバチを実験材料とし，卵形成と精子形成における減数分裂過程及び受精過程を詳細に調べ，単為発生という生殖様式がどのように確立されてきたかを探る。

（２）昆虫の体外受精：カブラハバチで開発した体外受精の方法を，キイロショウジョウバエに応用し，キイロショウジョウバエの系統保存に役立てる。

現在の研究テーマは，主に，進化の過程において単為発生という生殖様式がどのように確立されてきたかについて，カブラハバチを実験材料として探ることであり，これまでに，基本的な減数分裂過程と受精過程の細胞学的な記載をほぼ終了し，現在，実験発生学的な手法を用いて，これらの過程をさらに解析中であり，受精直後の卵に温度処理を加えると，複数の精子が発生に参加できること等が明らかになった。今後は，さらに実験発生学的手法を用いて，細かく解析していく予定である。また，私がカブラハバチで開発した昆虫の体外受精法をキイロショウジョウバエでも，可能にする試みを行い，突然変異系統の精子を凍結保存することによる系統維持を目指す。

2002年３月に愛知みどりの会から出版された幼稚園から小学校低学年向けの図鑑「かわいいなかま①　むしをさがそう」の第２弾（園芸植物，又は水生生物）を作成するための準備（図鑑に載せる生き物調査と写真撮影）を始めた。

❻ 共通科目（人間と生活）コーディネータ，時間割編成専門委員会委員

❼ 教育実習において，６月に連絡指導担当となった学校に実習前の挨拶に出向き，学生の研究授業を観察し，学生と研究授業の反省会を行った。また，４月に名古屋生物同好会（愛教大生物出身，名古屋市理科の先生の会）の講演会で「身近な虫のはなし２」という演題で講演を行った。

児玉　康一　Kodama, Koichi　　助教授　理科教育講座　　理学博士

❶ 物理学，特に素粒子・原子核物理学実験

❷ 日本物理学会論文賞2002年３月

❸ 日本物理学会

❹ コンピュータ物理学演習（２年），物理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ（２年），電子回路（３年），基礎物理学実験Ⅰ（３年），放射線（４年），原子核物理学特論（大学院），原子核物理学特論演習（大学院）

現在は，主として実験の授業を担当しています。『実験装置を教科書の指針のとおり

に操作してデータを出すだけ』でなく，『学生が自主的に考えてデータを出す』授業にしたいと考えていますが，なかなか出来ていません。１つの試みとして，３年次の実験では４人程度の小グループを作り，半年かけて１つの実験テーマに取り組む様にして，学生に実験装置を工夫して作ったり，自主的に考えたりできる時間的な余裕を持たせています。また最近では，ほとんどの学生が，将来，程度の差はあれコンピュータを道具として使わざるを得ない様になってきているので，どうしたら効率的にその知識を修得させる事が出来るかについても興味を持っています

❺ (1) エマルションを使った素粒子物理学の実験的研究

エマルションという特殊な写真を使って素粒子の研究をしています。非常にまれにしかおきない大事な現象をとらえるためには，この写真をできる限り高速に大量に解析しなければなりません。そのために，近年進歩の著しいコンピュータやエレクトロニクスを活用した画像処理を開発導入し，今まで１年かかっていた解析を１月で済ませる事ができるようになってきました。今後はこの画像解析の技術をもっと進歩させて，もっとまれなおもしろい素粒子反応を研究していきたいと思っています。

(2) 盲学校の理科の授業で使う音声読上げ機能を持つ電圧・電流計の開発

科学研究費補助金　特定領域研究（2），代表，1500千円

❻ 情報システム委員会委員

理科教育講座物理領域の入試委員

高橋　真聡　Takahashi, Masaaki　　助教授　理科教育講座　　理学博士

❶ 宇宙物理学（ブラックホール物理学），理論天文学

❸ 日本天文学会（特別会員），理論天文学懇談会，JGRJ（一般相対論と重力研究会），天文教育普及会

❹ 宇宙物理学（大学院），宇宙物理学演習（大学院），環境教育ゼミ（４年），宇宙科学Ａ（３年），宇宙科学実験Ａ（３年），地学教材実験（３年），環境情報処理実習（３年），地球環境科学Ⅱ（３年），宇宙科学演習Ａ（２年），理科教育ＢⅡ（２年生），地学Ⅱ（２年），環境教育ゼミナール（１年）

「宇宙科学」を履修する上で，数学（微分積分など）及び物理学の基礎（力学・電磁気・熱力学など）は不可欠である。しかしながら，本学におけるカリキュラム編成上の都合，及び高等学校での理科選択の都合等により，これらを学習する機会なしに，宇宙科学の科目を受講する学生が増えている。

その結果，準備的学習に時間を割かれ，講義内容の削減・レベル低下を招いている。それでも講義においては，個々の知識の伝授に終わらせず基本的概念の理解を目指し，「なるほど！」と思わせる努力をしている。

今年度は特に，講義目標を見直し学生の興味を引き出す方策を実践して来た。

高校で天文分野を履修していない学生がほとんどなので，あえて高等学校の教科書や参考書を示し，自己学習するよう勧めている。この傾向は年々強まっており，大学教育と言うよりは高校教育になっているきらいがある（高校時に学ぶべき内容を，大学の専門の講義の中で扱わざるを得なくなっている）。

一方で，基礎力のある学生に対しては，能力に応じた課題を出し，学生の興味を延ば

す工夫をしている。しかしそのような意欲的な学生は受講生の１～２割に留まっている。講義だけでは時間的な制限もあり，学生自身のさらなる自主的学習の必要性を感じている。

❺ 『ブラックホール磁気圏』の研究：

活動的銀河中心核に存在する「巨大ブラックホール」が引き起こす天体現象について研究している。ブラックホールへの降着プラズマ流は膨大なエネルギー放出の源になっているが（重力エネルギーが輻射として放出される），強力な磁場をもまた生成していると考えられる。この磁場とブラックホールが相互作用することで，「宇宙ジェット」（光速度近くまで加速されたプラズマの放出流）が発生する。ブラックホール近傍での磁場構造及び強重力場と磁場の相互作用について詳しく解析してきがた，その成果を論文にまとめる作業を始めている。

また，磁気流体ショックについても解析を進めており，２本の論文として投稿した。

さらに発展的な研究も進めており，これも論文の執筆作業中である。この磁気流体ショックに関しては，モンタナ州立大学（米国）との共同研究であるが，研究の最後の詰めを行うため，2005年９月に渡米した。

上記の研究と関連して，ブラックホール近傍のショックからの輻射に付いても研究が進んでいる。この研究は，ブラックホール環境を直接観測的に検証する場合（Space VLBAにより近い将来実現可能と期待される）に重要となる。

口頭発表（招待講演）：「ブラックホール磁気圏とブラックホール回転エネルギー抽出」高橋真聡，2005，東大セミナー（東大）

ポスター発表：「ブラックホール近傍での衝撃波形成」プラズマ科学のフロンティア2005研究会（核融合研究所）

口頭発表（招待講演）：「一般相対論的MHDの現状と将来：数値計算と理論の融合」高橋真聡，2005，相対論的MHDミニワークショップ（千葉大学）

口頭発表：「ブラックホール降着流におけるMHD Shock形成」高橋真聡，2005，相対論的MHDミニワークショップ（千葉大学）

口頭発表：「ブラックホール降着流におけるMHD Shock形成」高橋真聡 & 福村桂吾，2005，日本天文学会（札幌市）

ポスター発表：「Radiation from Magnetosonic Shocks around Kerr Black Holes」高橋労太 & 高橋真聡，2005，日本天文学会（札幌市）

口頭発表：「MHD Shocks for Accreting Plasma onto a Black Hole」，高橋真聡，2005，JGRG（東工大）

口頭発表：「Central Engineでのエネルギー発生について」，研究会「ガンマ線バースト2005 － HETE-2，Swift，Suzakuで築くGRB観測－」，高橋真聡，2005（金沢大）

口頭発表：「MHD Shocks in a Black Hole Magnetosphere」，Masaaki Takahashi, 2005 APCTP Winter School（韓国：ポハン）

ポスター発表：「Radiative Magnetohydrodynamic Shocks around Kerr Black Holes」，Rohta Takahashi & Masaaki Takahashi, 2005 APCTP Winter School（韓国：ポハン）

口頭発表（招待講演）：「ブラックホールを観る」，高橋真聡，2006，大阪市立大セミナー（大阪市立大）

口頭発表：「ブラックホール・オーロラ：～リング状MHD Shock形成」，高橋真聡 & 福村桂吾，2005，日本天文学会（和歌山大）

ポスター発表：「Resistive Radiative MHD Flows and Shocks around Kerr Black Holes」，高橋労太 & 高橋真聡，2005，日本天文学会（和歌山大）

❻ 情報公開委員会委員，情報処理センター兼任教員
❼ 名古屋市科学館企画調査委員，SPP（教員研修プロジェクト）
❽ その他の特記事項
海外出張（モンタナ州立大学：20日間），海外出張（韓国：20日間），集中講義（大阪市立大学）

岩山　勉　Iwayama, Tsutomu　助教授　理科教育講座　博士（理学）

❶ 物理学，半導体光物性，ビーム物性，光機能性ナノ材料
❸ 応用物理学会，日本物理学会，日本放射線化学会，
Materials Research Society, European Materials Research Society
❹ 力学Ⅱ，基礎物理学実験，理科研究AI（２年），物性科学Ⅰ，物理学実験Ⅰ，Ⅱ，物理教材実験，環境物理教材実験，エレクトロニクス実験，野外物理学実験Ⅰ，Ⅱ，科学・技術と人間セミナー（３年），半導体物性，物理特別実験，環境物性教育特別実験，物理学ゼミナール，論文購読（物理学），環境教育ゼミナールⅡ（４年），基礎物性科学特論，基礎物性科学演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）
　一方的な授業にならないよう，授業に体験的要素も取り込むことを実践している。また，理科教材（物理的分野）の研究・開発・実践を通してその有効性，意義を学生に伝えていきたい。
❺ （１）ナノ構造半導体の微細構造制御とその光学特性評価（半導体光物性）
　ナノサイズ半導体超微粒子（クラスター）の作製とその物性（微細構造制御，光学特性評価など），さらに，ナノクラスターの光電子機能デバイス応用としての可能性を探索している。
（２）イオン，レーザービームと物質の相互作用（固体物質に対するビーム照射効果）
　イオン注入法 (Ion Implantation)，並びにレーザーアブレーション法 (Laser Ablation, Pulsed Laser Deposition) により機能性薄膜の形成，及び非熱平衡プロセスによる高機能性材料の開発を行っている。
（３）自然エネルギー有効活用のための教材開発
　自然エネルギーを有効に活用するための技術の開発，並びにそれをより効果的に演示するための融合システム，教材の開発を行っている。
（４）物理教材の開発
　苦手意識の高い「物理」を興味を持って，効果的に教授できる教材の開発を行っている。
業績リスト：
“Laser photolysis studies of the reaction of chromium (III) octaethylporphyrin complex with triphenylphosphine and triphenylphosphine Oxide.”, Inorg. Chem. 44, 6445 (2005).
“Low temperature formation of luminescent Si nanocrystals in SiO2 with rapid thermal anneals.”, Proceedings of the 24th Symposium on Materials Science & Engineering Research Center of Ion Beam Technology, 24, 7 (2006).
科学研究費補助金：
イオン打ち込み法によるナノ構造半導体の微細構造制御とその光機能新材料としての応

用（基盤研究C，単独（代表））

❻ 時間割編成専門委員会委員，理系機器共同利用センター委員，共通科目（科学・技術と人間）サブコーディネーター

❼ 愛知教育大学教材開発工房管理運営（GP関連）
英国物理学会誌査読，米国物理学会誌査読　等

渡邊　幹男　Watanabe, Mikio　　助教授　理科教育講座　　博士（理学）

❶ 生物学
専門分野：植物分子系統学
関連分野：植物分類学

❷ 四手井賞（関西自然保護機構）2004.6

❸ 日本植物学会，日本植物分類学会，種生物学会（会計幹事・地区幹事），日本生態学会，植生学会，日本熱帯生態学会

❹ 環境教育概論（１年），環境と人間－入門－（１年），生命環境論演習（１年），環境の評価と保全（２年），多様性生物学（２年），環境と人間－環境と生物－（２年），環境と人間－環境の調査－（２年），生物学基礎演習Ａ（２年），生物教材研究（２年），里山体験実習（２年），多様性生物学演習（３年），多様性生物学実験（３年）生物学ゼミナール（４年），環境教育ゼミナール（４年），多様性生物学（大学院）

近年分子データを用いた研究は飛躍的に進歩している。しかし直接目に見えないものを扱う学問分野であり，学生にとっては理解しにくいところがあると思われる。環境の評価と保全では，高等学校の復習も兼ねた講義内容にしている。多様性生物学では，植物の進化を分子生物学的方法によってどのように明らかにするかを学ぶ授業である。分子マーカーは常に新しいものが導入され，それによって過去の知見と比較され系統関係が議論されるため，特に最新の研究例を多く紹介し進めるように心がけている。また，簡単な分子生物学的実験も取り入れ，その内容をまとめさせ発表させた。発表に際しては，プリントを作成させ要点をまとめさせた。発表した内容について，議論し理解を深めさせた。学生による授業評価でも，自分たちがまとめることによって，より理解度が深まったという学生もおり，この取り組みは成功だったと思われる。特に自分たちで調べることによって，幅広い分野の参考文献等を参照し，興味・関心がかなり広がった学生もいた。また，実験では野外での活動を取り入れ，特に直接日常目にすることができにくい植物に接することができるように心がけている。夏休みに北海道大学檜山地方演習林で行う里山体験実習（炭焼き）は，木の利用法や里山のあり方を考える目的で行っている。なかでも約５日間，昼夜をとわず交代で，炭窯に薪をくべる作業は学生同士の連帯感を育んでいくのに最適であり，衣食住をともにして，一つのものを作り上げる貴重な経験である。この実習は1995年から続けており，北海道新聞でもたびたび記事として取り上げられている。

❺ 現在の研究テーマ：

(1) 日本列島における植物の種分化の研究 (2) 分子データを用いた環境の保全

分子生物学的手法を用いてさまざまな植物の系統関係の推定を行っている。特にタンポポにおいては，分子データによって無融合生殖種どうしが雑種を形成するという現象を発見した。このことは，従来考えられていた遺伝子の交換が，有性生殖のみではなく無融合生殖種も行っているというきわめて興味深いものである。今後は，更に詳しい解析を行う予定である。

業績リスト：

Inbreeding coefficients in six species of Ainsliaea and two species of Pertya　Plant Syst. Evol. 2005.4

INonuniform concerted evolution and chloroplast capture: a gradient of observed introgression patterns in three molecular data partition phylogenies of Asian Mitella (Saxifragaceae). Molecular Biology and Evolution 2005.6.

渡良瀬遊水地に生育する（仮称）ワタラセツリフネソウの形態的特徴と遺伝的特性　日本植物学会　2005

雑種性帰化タンポポの遺伝的多様性と出現頻度日本植物分類学会　2006

豊明市に生育するナガバノイシモチソウ集団の復元　委託研究　15万円

奥尻島とその周辺域における植物の分子系統学的研究とその教材化　奥尻町工藤組　10万円

帰化植物の遺伝的汚染の研究　岡崎高校SSH　10万円

❻ 高大連携特別選抜推薦入学試験部会（副議長），学部入学試験部会委員，自然観察園運営委員，理系機器委員会委員

❼ 附属高等学校アカデミッククエスト講座，岡崎高校スーパーサイエンス部の指導，
北海道奥尻島奥尻高校，奥尻中学及び青苗中学における分子生物学実験の指導
豊明市に生育する絶滅危惧植物ナガバノイシモチソウ集団の保全と復元のための活動

中野　博文　Nakano, Hirofumi　　助教授　理科教育講座　　博士（理学）

❶ 化学，専門分野：有機化学，関連分野：糖質科学，生物有機科学

❸ 日本化学会，有機合成化学協会，American Chemical Society，日本糖質学会

❹ 環境教育ゼミナールⅠ（1 年），化学Ⅰ（1 年），環境化学演習（1 年），化学実験（2 年），有機化学演習Ⅱ（2 年），化学教材研究（2 年），有機化学（3 年），有機化学実験（3 年），総合演習Ⅰ（3 年），環境教育ゼミナールⅡ（4 年），化学特別実験（4 年）

私は，有機化学に関する講義，演習，実験を担当している。有機化学は，高校化学においてただ暗記すればよいという認識ができてしまっているので，これを改めるため次のような点に注意している。ひとつは，有機化学が化学の基本的な原理の上に成り立っており，それらを応用して，分子の物理的な性質や化学反応を理解することである。つまり，有機化学の教科書には多数の反応が出てくるが，それらの反応は基本的ないくつかのパターンの繰り返しや組合せであり，それを見抜けるようになる能力が必要である。二つ目として，分子の実際の形を個人個人が分子模型を使用することで認識することである。これは，分子の形を三次元的にとらえられるようになることと，分子中の個々の官能基が認識できるようになることである。

講義は板書中心であるが，反応機構等を丁寧に一段階ずつ書いたり，分子模型の組立方を説明して学生と同時に組み立てる，パソコン上で 3 次元的に表示する，日常生活との関わり説明するなどして理解しやすいようにしている。試験は，理解度を高めるために半期に 2 回行い，持ち込みは一切不可という条件で行っている。問題は基本事項から応用問題まで幅広く出題し，先に記述した点について評価できるよう努力している。

実験は火災，爆発，薬品による中毒，ガラスによる怪我や火傷等の危険性や，実験後

の後始末の重要性特に環境を破壊しないようにするにはどうしたらよいかという点を強調して行っている。これらのことは，将来理科の教師や企業での研究開発者としての素養として重要であろう。また，それぞれの実験操作がどのような意味をもっているか，なぜそのような操作をしなければならないのか強調している。

❺ (1) 糖鎖硫酸化の生物学的意義解明を目的とした選択的な硫酸転移酵素阻害剤の開発
(2) コンドロイチン硫酸の機能ドメインの精密合成
(3) カルベノイドを用いた1,3-双極子の生成と反応

現在精力的に行っている研究テーマは，「糖鎖硫酸化の生物学的意義解明を目的とした糖鎖合成」である。元々の専門は「有機反応活性中間体の化学」であるが，異分野からの参入を生かして新たな合成反応・合成経路・糖鎖設計を行いたい。最近の成果としては，効率的なGalNAcβ1-4GlcNAcβ1-octylの合成法，グルコサミン塩酸塩からのTroc基を用いるGalNAc(4SO_4)β-OArの合成などがある。

❻ 教育実地研究専門委員会，共通科目専門委員会

❼ 日本化学会東海支部化学教育協議会会計，SPPにおける教員研修の講師

戸田　茂　Toda, Shigeru　助教授　理科教育講座　博士（理学）

❶ 固体地球物理学，地震学，物理探査学

❸ 日本地震学会，日本応用地質学会，活断層研究会，名古屋地学会（委員）

❹ 科学技術と人間（展開）（２年），地球環境科学Ⅰ（２年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），地学ゼミナールⅠ（４年），地学野外実習Ⅰ（２年），理科研究BⅠ（２年），固体地球科学A（３年），総合演習Ⅰ（３年），固体地球科学演習B（３年），地球環境統計学（３年），地学実験（２年），固体地球科学実験B（３年），地球環境調査法（１年），固体地球科学特論Ⅰ（大学院），固体地球科学特論演習Ⅰ（大学院）

理科教育講座所属学生以外にもＬ科目・ＳⅡ科目を通して，地震防災について講義をして，東海地震等の大地震発生時に学校教育現場で使用できる内容を重点に講義を実施した．

❺・現在の研究テーマ

安定大陸地殻の地下構造調査
東南極大陸における地震波速度・密度統合地下構造モデルの構築
極東ロシアにおける屈折法地震探査
中部・近畿地方における活断層調査
養老断層・鈴鹿山地東縁断層における反射法地震探査
琵琶湖西岸活断層系における重力探査

・業績リスト（著書・論説・報告）

Yamashita, et. al., Deep reflection imaging beneath the Mizuho plateau east Antarctica, by SEAL-2002 seismic experiment, Futterer DK, et. al (eds) , Antarctica: Contribution to global earth science. Splinger-Verlag, Berlin Heidelberg New York, pp 147-154, 2005.

Kato, et. al., Geologic fault model based on the high-resolution seismic reflection profile and aftershock distribution associated with the 2004 Mid-Niigata Prefecture earthquake (M6.8), central Japan, Earth Planets Space, 57, 447-452, 2005.

戸田茂，反射法地震探査による活断層調査，月刊地球号外54，pp.227-232，2005.

S. Toda, Changing Tectonic Regime During the Plio-Pleistocene in the Kinki Region,

愛知教育大学研究報告55, pp.55-66, March, 2006.
佐藤比呂志・他，2004年新潟県中越地震・地震断層出現域の浅層反射法地震探査：データ処理と処理について，地震研究所彙報，80，pp.1-9，2005.

・研究交流
ロシアアカデミーシベリア支部との共同研究（地下構造分野）
国立極地研究所共同研究員

❻・就職委員会委員
・防災・防火委員会東海地震部会副部会長
・時間割編成専門委員会委員

❼・愛知県立小牧南高等学校での講演会（地震災害について）
・三好町立三好中学校での講演会（南極観測について）
・三好町立南中学校での指導（地震災害について）

❽　第２種衛生管理者

伊東　正人　Ito, Masato　　助教授　理科教育講座　　理学博士

❶　素粒子論，宇宙論

❸　日本物理学会

❹　自然科学入門（１年），理科研究ＡⅡ（１年），物理学Ⅰ（２年），電磁気学Ⅰ（２年），物理数学演習Ⅱ（２年），電磁気学Ⅱ（３年），電磁気学演習（３年），量子物理学演習Ⅰ（３年），原子核と素粒子（４年），素粒子論的宇宙論ⅠⅡ（大学院）

❺・研究テーマ：
物質の起源を探る素粒子理論から現代宇宙論の謎に迫る。特に，宇宙加速膨張を引き起こすダークエネルギーの起源と超弦理論との関連について現在研究中。特に，高次元空間に埋め込まれたブレーン模型から４次元素粒子物理の起源について探求している。最近は，共形場理論と超弦理論のブラックホール解との関連も調べている。

・論文：
“Holographic dark energy model with non-minimal coupling” Europhys. Lett. 71:712-715, 2005

・科学研究費若手研究B「ブレーンワールド模型から４次元物理現象の起源を探究する」（平成17年－20年，130万円）

❻　大学院入試委員（代表）

赤倉松次郎　Akakura, Matsujiro　　助教授　理科教育講座　　博士（工学）

❶　有機合成化学，理論計算化学，有機金属化学，高分子合成化学

❸　日本化学会，アメリカ化学会，有機合成化学協会，高分子学会，名大応化会

❹　情報教育演習Ⅱ（１年），有機化学演習Ⅰ（２年），高分子化学（２年），基礎化学演習（２年），化学Ⅱ（２年），理科研究ＡⅠ（２年），自然環境と化学（環境と人間）（２年），環境化学Ⅱ（３年），分子機能化学Ⅱ（３年），分子機能化学実験（３年），化学ゼミナールⅠ・Ⅱ（４年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），総合演習Ⅱ（４年），化学特別実験

（4年），分子機能化学B（4年），分子機能化学C（4年），反応化学特論（大学院），反応化学演習Ⅰ（大学院），反応化学演習Ⅱ（大学院）

教育活動の問題点，FD活動，教育に対する抱負：

・入試制度の多様化のため，学生全体を見た時に，かなり大きな学力・能力・意欲の差が存在する。授業を行う場合に十分に対応できていない状況にあること。

・教員になるためのモラル，又は一般常識を持たすことができていない学生が存在すること。

教育に対する抱負：

今，愛知教育大学は大きく変化をしようとしている最中である。教官の使命は教育を十分に行うことである。変化に迅速に対応し，目標達成のために尽力をつくす使命を持っている。常に幅広い知識修得をし豊かな考察を行えるように努力し続け，フットワークの軽い行動を採れるような教育姿勢を維持することが重要となると思う。

❺ 現在のテーマ：

1）理論化学計算を用いた有機合成反応・有機金属錯体反応・高分子合成反応の機構解明の研究

2）理論化学計算を用いた新規合成反応の開発の研究

3）ニトロソ化合物の反応に関する理論化学的研究

業績リスト：

1）QUNTUM CHEMISTRY DATA BASE, *J. Mol. Struct.* (Theochecm), 720-721, 2005

学術・研究交流等：

1）研究・教育交流会（京都大学大学院・理学研究科）
（教官同士の研究交流，学生の研究室見学など）

2）Chicago University (U.S.A.), Yamamoto Laboratoryとの共同研究

3）名古屋大学大学院・情報科学研究科・古賀伸明研究室との共同研究

4）名古屋大学大学院・工学研究科・石原一彰研究室との共同研究

❻ 時間割編成専門委員，衛生管理者（自然科学棟），第3部会教務担当者（解散）

❼・各種審議会委員，自治体等の教育組織における活動
・学内外の公開講座・講演会など
・学校現場における助言指導

加藤淳太郎　Kato, Juntaro　　助教授　理科教育講座　　博士（農学）

❶ 生物学，専門分野：植物育種学，関連分野：遺伝学

❷ 名古屋国際蘭会議　NIOC奨励賞（2006年3月）「柱頭NAA処理によって誘導されたBletilla Brigantesの半数体とその自然倍加」

❸ 日本育種学会，園芸学会，日本植物細胞分子生物学会，日本遺伝学会，日本植物学会，International Society for Horticultural Science

❹ 自然科学入門（1年），野外教育実習Ⅰ（1年），生命環境論演習（1年），生物学Ⅰ（2年），生物学実験（2年），理科研究BⅠ（2年），植物遺伝学（2，3年），遺伝子資源利用実験（2，3年），生物統計演習（3年），生物教材演習B（4年），環境教育ゼミナールⅡ（4年），生物学ゼミナールⅠ（4年），生物学ゼミナールⅡ（4年），生物環境科学特別実験B（4年），遺伝学演習Ⅰ（大学院），遺伝学演習Ⅱ（大学院）

❺ 著書・論文等

Kato J, Mii M（2006）Production of interspecific hybrid plants in *Primula*. Methods Mol Biol.318:253-62.

Nimura M., J. Kato, M. Mii and T. Katoh（2006）Amphidiploids produced by natural chromosome-doubling in inter-specific hybrids between *Dianthus xisensis* Hirahata et Kitam. and *D. japonicus* Thumb. Jour. Hort. Sci. and Biotech., 81 (1): 72-77

学会発表

林　麻衣，市川幸奈，加藤淳太郎，三位正洋（2005）*Primula denticulata*（Denticulata節）と*P. modesta* var. *matsumurae*（レブンコザクラ；Aleuritia節）の正逆種間交配おいて形成された雑種の倍数性，日本育種学会第107・108回講演会（筑波大学）2005年８月。

池田真由子，加藤淳太郎，林　麻衣，三位正洋（2005）*Primula sieboldii*（サクラソウ）と*P. jesoana*（オオサクラソウ）の種間交配における雌親品種が雑種の倍数性に及ぼす影響，日本育種学会第107・108回講演会（筑波大学）2005年８月。

Mayuko IKEDA, Juntaro KATO, Mai HAYASHI and Masahiro MII　(2005) THE INTERSPECIFIC TRIPLOID HYBRID FORMATION BETWEEN *PRIMULA SIEBOLDII* AND *P. JESOANA* BY THE FERTILIZATION OF UNREDUCED GAMETE. 10th International Congress of SABRAO（筑波大学）2005年８月。

Mikio Nimura, Juntaro Kato, Masahiro Mii and Toshihiro Katoh（2005）INTERSPECIFIC TRIPLOID HYBRID FORMATION BETWEEN *DIANTHUS X ISENSIS* AND CARNATION BY THE FERTILIZATION OF UNREDUCED FEMALE GAMETE. 10th International Congress of SABRAO（筑波大学）2005年８月。

Mai HAYASHI, *Juntaro KATO*, Kei-ichiro MISHIBA, Hiroaki OHASHI, Hiroko TAKAHASHI, Ikuo NAKAMURA and Masahiro MII (2005) VARIATION OF NUCLEAR DNA CONTENT OF SECTION REINII IN *PRIMULA*. 10th International Congress of SABRAO（筑波大学）2005年８月。

林　麻衣，加藤淳太郎，松原典子，中村郁郎，三位正洋（2006）４倍体*Primula denticulata*（Denticulata節）と２倍体*P. modesta*及び変種（ Aleuritia節）との節間交配雑種に見出された倍数性変異，日本育種学会第109回講演会（東京農工大学）2006年３月。

加藤淳太郎，間瀬あいこ，菊池美香，池田真由子，星野洋一郎，林　麻衣，中村郁郎，三位正洋（2006）胚珠培養による異型花柱性*Primula jesoana*（オオサクラソウ）と単型花柱性*Cortusa matthioli*（サクラソウモドキ）の属間雑種の作出，日本育種学会第109回講演会（東京農工大学）2006年３月。

加藤淳太郎，天野淳二，菊池美香，林　麻衣，中村郁郎，三位正洋（2006）*Primula sinensis*（Auganthus節）と*P. filchnerae*（Pinnatae節）の種間雑種と戻し交配後代の作出，園芸学会平成18年度春季大会研究発表（千葉大学）2006年３月。

市橋正一，真柴佳代子，近藤美菜，木下麻衣，伊藤裕司，氏家　達，加藤淳太郎（2006）柱頭NAA処理による４倍体*Phalaenopsis*からの２倍体の誘導，園芸学会平成18年度春季大会研究発表（千葉大学）2006年３月。

❻　組換えDNA実験安全委員会委員

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❼ 名古屋国際蘭展組織委員会委員
❽ 平成17年度冬季アカデミッククエスト講座「植物改良法の基礎と応用」講師

星　博幸　Hoshi, Hiroyuki　助教授　理科教育講座　博士（理学）

❶ 地質学，岩石磁気・古地磁気学，地質年代学，テクトニクス
❷ 日本地質学会研究奨励賞（1998年３月）
❸ 日本地質学会（代議員，地質学雑誌編集委員，地質学雑誌企画委員，層序部会連絡幹事，中部支部愛知県幹事，中部支部事務局員），地球電磁気・地球惑星圏学会（アウトリーチ部会員），石油技術協会，フィッション・トラック研究会，American Geophysical Union
❹ 地質学特論（大学院），地質学特論演習Ⅰ（大学院），地質学特論演習Ⅱ（大学院），地学ゼミナールⅠ（４年），環境教育ゼミナール（４年），地史学B（３年），地質岩石科学実験A（３年），地史学実験A（３年），地学野外実習Ⅱ（３年），地史学演習A（２年），理科研究BⅠ（２年），地球環境科学Ⅰ（２年），地学野外実習Ⅰ（２年），地学実験（２年），自然科学入門（１年）
❺ 著書：
・日本地方地質誌中部地方（分担執筆），朝倉書店，東京，2006。
・日本の地質増補版（分担執筆），共立出版，東京，2005。
公表論文：
・星　博幸・檀原　徹・岩野英樹，西南日本の中新世テクトニクスに対する新たな年代制約：愛知県設楽地域におけるフィッション・トラック年代測定，地質学雑誌，112，153-165，2006。
・星　博幸・岩野英樹・檀原　徹，設楽地域，津具火山岩類のフィッション・トラック年代測定，愛知教育大学研究報告（自然科学），55，67-70，2006。
・檀原　徹・星　博幸・岩野英樹・吉岡　哲・折橋裕二，青森県津軽地方に分布する権現崎層溶結凝灰岩のフィッション・トラック年代，地質学雑誌，111，476-487，2005。
学会発表：
・星　博幸・久野元晴・檀原　徹・岩野英樹・吉岡　哲，東北日本の中新世回転運動に関する新知見：青森県津軽地方に分布する権現崎層のFT年代と古地磁気，第30回日本フィッション･トラック研究会，防災科学技術研究所，2006年１月。
・Hoshi, H., Danhara, T., Iwano, H., Ogawa, K., Nakamura, T. and Sakata, H., New insights into Miocene tectonics of Japan: preliminary results from a geochronological and paleomagnetic study at the eastern part of southwestern Japan, International workshop on tectonics of eastern margin of Asian continent, Kobe University, 2005年９月。
・星　博幸，古地磁気学を応用したテクトニクスの研究法，2005年古地磁気・岩石磁気夏の学校，産業技術総合研究所，2005年９月。
・Yamamoto, Y. and Hoshi, H., Paleointensity study of the historical andesitic lava flows: LTD-DHT Shaw and Thellier paleointensities from the Sakurajima 1914 and 1946 lavas in Japan, 2005 International Association of Geomagnetism and Aeronomy Scientific Assembly, Toulouse, 2005年７月。
・山本裕二・星　博幸，安山岩質溶岩における絶対古地磁気強度測定の検討：桜島大正・昭和溶岩の例，地球惑星関連学会2005年合同大会，幕張メッセ，2005年５月。

・星　博幸・山本裕二，アア溶岩流の古地磁気方位：桜島，大正溶岩と昭和溶岩の事例，地球惑星関連学会2005年合同大会，幕張メッセ，2005年５月。

科研費等の採択：

・科研費若手研究（B），高密度古地磁気サンプリングから東北日本の回転移動時期を解く，代表，2100千円。

❻ 学部入学試験部会委員，次世代育成支援ワーキンググループ委員

❼ 奥三河地方の地質研究に関する新聞取材・掲載（読売新聞2006年２月10日，中日新聞2006年２月11日，朝日新聞2006年２月17日）

田口　正和　Taguchi, Masakazu　　助手　　理科教育講座　　理学博士

❶ 気象学

❷ 日本気象学会「山本・正野論文賞」（2004年10月）

❸ 日本気象学会

❹ 地球環境科学Ⅱ（２年），大気・水圏科学Ａ（３年），大気・水圏科学演習Ａ（２年），大気・水圏科学実験Ｂ（３年）

❺・現在の研究テーマ：

対流圏―成層圏結合気候システムの変動とダイナミクスについて，観測データ解析とコンピュータシミュレーション実験により研究を進めている。特に，熱帯のエルニーニョ現象と，北半球冬季の大気循環の年々変動の関係を精査している。

・業績リスト：

Taguchi, Masakazu, Hartmann, Dennis L., Increased Occurrence of Stratospheric Sudden Warmings during El Niño as Simulated by WACCM, Journal of Climate 2006 19: 324-332

・科学研究費補助金など研究助成の受領状況：

科学研究費補助金（若手B，代表），対流圏―成層圏結合のダイナミクスに関するメカニスティックモデル実験，３,100,000円（平成16-18年度の合計額）

日野　和之　Hino, Kazuyuki　　助手　　理科教育講座　　博士（理学）

❶ 物理化学，クラスター化学，レーザー分光学

❸ 日本化学会

❹ 環境化学演習（１年），情報教育入門Ⅱ（１年），理科研究ＡⅠ（１年），化学Ⅰ（１年），環境と人間展開（２年），物理化学演習Ⅰ（２年），化学実験（２年），基礎化学演習（２年），分子機能化学Ａ（３年），物理化学実験（３年），分子機能化学実験Ａ・Ｂ（３年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），化学特別実験（４年）

❺・現在の研究テーマ：

有機金属ナノクラスターの創製：構造と機能制御

質量選別化学種の電子・振動分光と反応過程の追跡

プロトン移動及び電荷移動反応の外部電場による制御

生体関連分子を用いた水素結合及びプロトン移動の分光学的研究

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

・業績リスト：
K. Hino, H. Nakano, N. Ito, M. Matsushita, H. Takagi, N. Nishi, Transactions of the Materials Research Society of Japan, in press.
・学会発表：
高木秀幸，山田知加，開尾憲一，澤田敏彦，大竹しおり，日野和之，中野博文，羽渕脩躬，第25回日本糖質学会年会
日野和之，徳斉尚，平野貴拡，中野博文，西信之，分子構造総合討論会2005
高木秀幸，山田知加，開尾憲一，澤田敏彦，藤井園子，大竹しおり，羽渕脩躬，中野博文，日野和之，分子構造総合討論会2005
中野博文，日野和之，西信之，第35回複素環化学討論会
K. Hino, H. Nakano, N. Nishi, 2005 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies.
・科学研究費補助金など研究助成の受領状況
「チオール化した液晶分子を用いた金属ナノ粒子の創製－外部電場による光学特性の制御－」700千円（若手研究（B），代表）／科学研究費補助金
・学術・研究交流等
平成17年度分子科学研究所ナノサイエンス支援「分子・物質総合設計・解析支援プログラム」による協力研究（前期・後期）

❻・各種委員会委員活動
水質汚濁防止検討委員会，学部入学試験部会

榊原　洋子　Sakakibara, Yoko　　教務職員　理科教育講座　　学術修士

❶ 環境科学，生理化学，環境教育，社会技術関係論
❸ 日本環境教育学会，エコケミストリー研究会
❹ 環境と人間セミナー（３年）分担。授業ではないが液体窒素取扱者への安全教育，安全技術講習会を行っている。
❺ 現在の研究テーマ
・生体高分子精製における阻害剤影響について関心がある。現在，高等植物のポリアミン代謝系関連酵素について共同研究を行っている。
・環境安全問題を科学的データの検証と技術と社会の関係性から調査分析し，よりよい環境創造のための方策について追究している。
❻ 水質汚濁防止検討委員会委員，理系機器共同利用センター運営連絡協議会委員，安全衛生委員会委員，保健環境センター設置のためのワーキンググループ会議（環境部門），副特別管理産業廃棄物管理責任者，危険物貯蔵所保安監督者，液体窒素貯槽（第二種製造所）管理責任者，衛生管理者。
❽ 環境保全広報2005の発行

音楽教育

栗原　一身　Kurihara, Kazumi　　教授　　音楽教育講座

❶ 芸術，演奏分野：ピアノ
❷ 第28回　毎日学生ピアノコンクール　東日本第２位（1958），第12回　文化放送音楽賞

受賞（1965）

❸ 日本ピアノ教育連盟，日本ショパン協会

❹ ピアノⅠ（１年），音楽科研究（ＳⅡＡⅠ）（１年），ピアノⅡ（２年），ピアノ演習（２年），音楽科研究（ＳⅡＢⅠ）（２年），器楽（ピアノ）演奏法研究Ⅰ（３年），器楽（ピアノ）演奏法研究Ⅱ（３年），ピアノ教育法（３年），器楽（ピアノ）ゼミナール（４年），卒論指導（４年），ピアノ実技（大学院），チェンバロ奏法研究（大学院），ピアノ奏法研究（大学院），鍵盤楽器アンサンブル実習Ⅰ（大学院），鍵盤楽器アンサンブル実習Ⅱ（大学院）

❺ ピアノという楽器での表現力（自分自身納得のいく演奏）についてが永遠の追求テーマであるが，年齢に見合った表現を模索中である。

❻ 日本ショパン協会中部支部　理事

村尾　忠廣　Murao, Tadahiro　　教授　　音楽教育講座　　芸術学修士

❶ 音楽教育学　認知音楽学

❸ 日本音楽教育学会　常任理事，国際音楽教育学会（ISME）
日本音楽知覚認知学会　理事，日本音楽学会，国際音楽知覚認知学会

❹ 心理音楽学概論，音楽科教育法，音楽教育学演習（大学院），管弦打，合奏
幼稚園から小中，高，大学の音楽教員が参加する「全日本音楽教育研究会総合大会」を岡崎で開催（2005年10月）し，その大会実行委員長を努める。

❺ 科学研究費による研究（2003～2005）：
「視覚フィードバックにおけるフラットシンギングの測定と治療法の研究」（基盤B）
学会発表：
「フラットシンギングから三味線の糸の上に乗るシャープシンギングへ」（日本音楽表現学会，５月）
「伴奏のキーに対する熟達歌唱者の「フラット認知シャープ・フラットシンギング」について」（日本音楽教育学会全国大会　10月）
「Melodyneによる＜音楽訛り＞のコピーと矯正フィードバックによるフラットシンギングの治療」（日本音楽教育学会夏期ゼミナール　９月）
How I Learned the Singing of the Japanese Traditional Music:
A Report on the Learning Process in *Shingnai* music (APSMER 2005, Seattle USA)
Children's folk songs (playground game songs) in Asia-Pacific countries:
How similar, how different they are! (APSMER 2005, Seattle USA)

❻ 教職大学院検討専門委員会　ワーキンググループ副委員長，就職委員会委員

❼ 愛知県教員組合　第55次教育研究集会　助言者

隈本　浩明　Kumamoto, Hiroaki　　教授　　音楽教育講座　　芸術学修士

❶ 音楽，専門分野：ピアノ

❸ 音楽教育学会

❹ 音楽科研究ＡⅠ（２，３年），音楽科研究ＡⅡ（１年），音楽科研究ＢⅠ（２年），ピア

ノ実習（２年），ピアノ奏法研究Ⅰ・Ⅱ（３年），ピアノゼミナール（４年），　ピアノ伴奏法Ⅰ・Ⅱ（大学院）

❺ 若干のアンサンブル活動を行ったが，当年は講座代表及び評議員としての仕事に忙殺され，特に成果なし。

❻ 講座代表，教育研究評議会評議員

滝沢　達子　Takizawa, Tatsuko　　教授　　音楽教育講座　　芸術学修士

❶ 音楽学（民族音楽顎），音楽科教育（比較音楽教育学）

❷ 安宅賞（1972）

❸ 国際音楽教育学会（International Society for Music Education-ISME会員
同上学会コミュニティー音楽活動研究部会CMA（Community　Musical Activity）のコミッショナー委員（2000－2006）及び21世紀CSC（Conference Standing Committee）
IISME世界大会支援委員（特命10年任期）
日本音楽学会　東洋音楽学会　音楽教育学会

❹ 音楽史（１年），ワールド・ミュージック（１年），音楽科教育Ｍ１Ａ（２年），音楽科教育Ｍ１Ｂ（２年），音楽学特論１，２（大学院），比較音楽学演習１，２（大学院）

学部では，自ら考え，探求するよう，調べ学習としての課題を課し，それと共に，音楽実践（演奏創作）に積極的に関わるTogather 精神を培う事を授業の主眼として，グループ活動を課してきたが，学生の授業評価アンケートからすると，宿題が多く，またグループ活動には学生の互いの時間調整が困難だとして，これまでの授業のやり方が不評であった昨年度の学生による評価結果に対して，その是正をと考える１年であった。しかし，学生自らに，自己啓発，学究する姿勢を願って，毎授業に鋭意，資料，映像，最新の情報提供，話かけ，フィードバックしてきた私の授業スタイルこそが大学教員の使命であるとあらためて自己確認し，それこそが大学教育に対する自分の抱負であると考えている。

❼ 全日本音楽教育研究会山形県支部研究会講演「世界音楽教材で広がる音楽教育」
「愛・地球博」で技術科講座の「ものづくり」講座の企画に３年生５人と共にインドネシアの民族楽器演奏，英語解説参画。
音楽文化創造財団主催-生涯音楽指導者講習会講義「多文化的アプローチによる音楽学習について」
ISME国際音楽教育学会大会支援特命委員会企画助言（アメリカ・アナハイム会議）

中川　洋子　Nakagawa, Yoko　　教授　　音楽教育講座　　芸術学修士

❶ 芸術，専門分野：音楽，関連分野：声楽（ソプラノ）

❸ 社団法人　日本歌曲振興会

❹ 声楽Ⅰ（１年），声楽Ⅱ（２年），歌曲伴奏法概論（３年），声楽曲演奏法研究Ⅰ，Ⅱ（３年），声楽曲概論（３年），声楽ゼミナール（４年），音楽教科研究ＡⅠ（１年），音楽科研究ＢⅡ（２年），現代日本の社会と文化セミナー（３年），声楽曲研究Ⅰ（大学院），日本歌曲演習（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

音楽をすることのまず第一は「うたうこと」にあると思う。声楽曲の演奏は本学入学試験の課題にもあるが，器楽（特にピアノ）の次に考えられて，１～２年足らずの学習で入学してくる者が多い。個々の能力の差が個性と同じように様々で，指導は個人レッ

スンで行っている。声を出して曲を歌えば，それがうたであると思っている学生が多いが，心の中にある音楽を表現するには，声のテクニックを学び修得する必要がある。カリキュラムが新しくなって１年の後期から専門の科目を受講することになって，必修としての声楽の学習期間が１年間となったため，以前と同じような力をつけて３年，４年の選択の授業に入ることができなくなった。卒業の専門として学び続けたいと望む学生に対して根気強く助言を与え，体の中から出てくる声を客観的に聞く耳を育て，音楽を表現できる声が自分で選択できるように指導しなければならない。１～４年へと声域を広げ曲の難度も上げて，音楽の表現できる曲を増やせるよう努めている。

大学院の学生に望むことは，もっと向学心を持って深くを高くを求めて授業に臨んで欲しい。学部で学んだことの上に積み重ねて，各々の内にある音楽を幅広くするような研究の場でありたい。

❺ 現在の研究テーマ

声楽を始めてから一環した研究は，自分の中にある音楽を声を通していかに演奏表現するかにある。そのために声のテクニックを修得し，自分の欲しい音色を出せるように努めている。

作品の演奏発表はその時々の成果を世に問うたものである。

ドイツリートや自国語の歌曲やオペラを演奏研究することで身に付けようと試みている。

又，ベルカント唱法のレッスンを受けたり，ドイツのフスラーの発声法のレッスンを受けたりと試行錯誤している中に，自分の体の部分部分が意識出来るようになり，表現できることが多彩になった。

そのことで学生の声を聞き分ける範囲も広がったように思う。

体の中から出てくる声を客観的に聞くことは体のコンディションによっても変わるので困難なことである。しかし教育現場にいて研究を続けていくということは，その姿勢と成果を学生に伝えることが重要だと考えている。

今後もこれまでの研究をより深めながら，それを演奏発表できるように研究を続けたい。

演奏発表

シューマン曲「女の愛と生涯」全曲　R・シュトラウス曲「高鳴る胸」　他

中田喜直曲「子供のための８つの歌」全曲　平野淳一曲　「生きる理由」他

中川洋子ソプラノリサイタル（2005年９月）

玉井　明曲「飛天」朝岡真木子曲「なぎさ」

日本歌曲振興会　名古屋支部定演奏会　（2005年11月）

❻ 高大連携入試コーディネーター

１．三好北部中学校，三好中部小学校へ合唱指導，知立市小中学校及び春日井市小学校音楽会講評者，額田中学校合唱コンクール審査員，師勝北小学校PTAでの講演，愛知県主催 レクリエーションコーディネーター，インストラクター養成講座講師 （1996年～），ボランティアコンサート（師勝町総合福祉センターもえの丘）月１回（ 2000年８月～），（羊蹄会しらゆりの里）

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

武本　京子　Takemoto, Kyoko　　教授　　音楽教育講座　　芸術修士

❶ 音楽
専門分野：ピアノ演奏法
関連分野：音楽分析法

❷ NHK洋楽オーディション最優秀賞（1976）
東京文化会館新人演奏家オーディション最優秀賞（1976）
名古屋市文化会館新進演奏家オーデション最優秀賞（1982）
名古屋市民芸術祭賞（1991）
愛知教育文化芸術賞（1994）
クラスノダール国際音楽祭芸術賞（1995）
名古屋市芸術奨励賞（1996）
愛知芸術文化選奨文化賞（1996）
愛知県三好町文化功労賞（1997）
日本クラッシックコンクール優秀指導者賞（2000）（2001）（2002）（2003）（2004）（2005）
ピティナ・ピアノコンペティションコンクール優秀指導者賞（2002）（2003）（2004）
ピティナ・ピアノコンペティションコンクール特別優秀指導者賞（2004）
カワイ音楽コンクール最優秀指導者賞（2003）（2004）（2005）

❸ 日本音楽教育学会　　日本ショパン協会　ショパン国際コンクールin ASIA 組織委員会常任委員
全日本ピアノ指導者協会正会員　　愛知芸術文化協会　楽曲イメージ研究会主宰

❹ ピアノⅠ（1年），ピアノⅡ（2年），ピアノ演奏法研究Ⅰ（3年），ピアノ演奏法研究Ⅱ（3年），ピアノ曲概論（3年），音楽科研究AⅠ・音楽科研究BⅡ（1・2年），こころとからだ（3年），ピアノゼミナール（4年），楽曲イメージ奏法Ⅰ・Ⅱ（大学院），ピアノ演奏法Ⅰ・Ⅱ（大学院）

音楽の解釈法，分析法，表現法などをピアノの演奏法実技を通して行っている。個人指導が最適だが，授業時間受講生の多さから，一人当たりの指導時間の短さが問題である。しかし自宅学習において自分なりに楽曲を解釈した自習の結果をピアノ実技だけでなく，音楽と文学と美術を融合した方法でのディスカッションも交える独自の「楽曲イメージ奏法」で，生徒が何を考えて何を表現したいかを具体化させて，それを奏法に的確に結び付けられるよう授業を行っている。音楽の実習を通して音楽の持つ価値と素晴らしさを伝えることのできる教師になることとその具体的能力の育成を目指している。

❺ ピアノ演奏法：音楽を文学と美術など具体的なイメージをふくらませて奏法に結びつく独自の「楽曲イメージ奏法」を通じて，楽曲の解釈，分析，演奏法を研究している。作品の奥底にある内面を具体的なタッチでどのように工夫するかという「楽曲イメージ奏法」の理論をいかに演奏会のステージ上で実践できるかを研究している。
演奏発表：
(1) 武本京子ピアノソロリサイタル　　しらかわホール　2005年4月
ベートーヴェン：ピアノソナタ第14番　嬰ハ短調　op. 2
ショパン：ピアノソナタ　第2番　変ロ短調　op. 35
シューマン：幻想曲　ハ長調　　op. 17
(2) エルンスト・オッテンザマー＆武本京子デュオ　長久手文化会館　2005年11月
シューマン：幻想小曲集　作品73
ウェーバー：グランドデュオコンチェルト作品48　他

❻　芸術教育専攻代表
❼・名古屋市文化振興事業団の評議員
・講座：「ツェルニーからショパンのエチュードへ」2005
・ショパン国際ピアノコンクールin ASIA　アジア大会審査委員
・日本クラッシックコンクール，県下ピアノコンクール，ピティナコンペティション
・春日井ピアノコンクール，愛知県尾東音楽コンクール他の審査委員

林　　剛一　Hayashi, Koichi　　助教授　音楽教育講座　　芸術学修士

❶　声楽，音楽教育
❷　第５回こうべ市民音楽祭市長奨励賞（1982年），第３回摂津音楽祭奨励賞（1988年）
❸　名古屋オペラセミナー
❹　音楽科研究A（３年），オペラ概論（共通科目）（１年），声楽Ⅰ（１年），声楽Ⅱ（２年），声楽実習（２年），声楽演奏法研究Ⅰ（３年），声楽演奏法研究Ⅱ（３年），声楽ゼミナール（４年），合唱Ⅱ（３年），合唱指揮法（４年），ロシア歌曲演奏法研究，オペラ演奏法研究（大学院）
❺・現在の研究テーマ：
１）呼吸法と声の保持について
２）気持ち（ニュアンス）の変化による声の音色の変化について
・業績リスト（演奏発表）：
（2005年度）
１）東海フィルハーモニー交響楽団オペラコンサート／豊明市文化会館大ホール　2005.11.12
２）長久手オペラガラコンサート／長久手文化の家森のホール　2005.11.13
３）岐阜バッハ合唱団演奏会　バッハ／マタイ受難曲　イエス役／サラマンカホール　2005.12.10
・研究内容及び今後の研究計画：
私の研究活動の中心は私自身の演奏発表（発表に至るまでの練習過程を含む），そして1996年在外研究員として行なったイタリア（ローマ）における世界的名歌手G・タッデイ氏のもとでの研鑽，又その後，年１～２回ローマにて引き続きレッスンを受けていること，及び本学や非常勤として勤務する大学，個人的生徒のレッスンを行なうことによりなされるものである。
私の研究の最終到達点は，師であるG・タッデイ氏の声（声質ではなく）発声法，歌である。なぜならば私の知る限り氏をこえる歌手はいないと確信するからである。
氏はその方法論を直接的に指導されない為，研究は氏の声を聴き，顔の表情，身体の使い方を見ることにより吸収する方法と氏のCD，DVD，VIDEOを収集しそれらをもとに研究する方法をもってすすめている。
今後も出来る限り氏のレッスンを受け，生の氏の声，歌に接して研究を継続して行きたいと考えるものである。
❼　名古屋オペラセミナー代表

新山王政和　Shinzanou, Masakazu　　助教授　音楽教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：音楽科教育学
関連分野：演奏学（ファゴット）

❷ 山口県学生音楽コンクール「コンクール大賞」(1980.8)，山口県文化賞「栄光のメダル」(1987.3)，コニカミノルタテクノロジーセンター「イメージングに関する研究論文」優秀賞受賞（2004.11)，平成17年度「ヤマハ音楽支援制度研究助成金」認定授与（2006.2）

❸ 日本音楽教育学会，日本管打吹奏楽学会，日本音楽表現学会

❹ 音楽科研究B２（１年)，管弦打１（２年)，管弦打２（２年)，管楽器演奏法研究１（３年)，管楽器演奏法研究２（３年)，合奏実技１（３年)，器楽（管弦打）ゼミナール（４年)，総合演習２（４年)，国際社会と日本（３年)，音楽科教育特論１（大学院)，特別研究１（大学院）

管弦打は，専門以外の金管楽器や打楽器の指導も行わなければならず負担がかなり大きい。また１時間に20名以上の学生をマンツーマンで指導しなければならないため指導効果が悪くなりやすい。合奏実技は，受講生一人一人の技術レベルの開きが大きいため教材曲の選択や指導に困難を感じている。しかしいずれの授業においても，受講生は自らの予習や復習を熱心に行い，受講生同士でも互いに教え合うことによって筆者の指導が及ばない部分を自主的に補っていた。「総合演習」に関しては教育に関する時事問題をできるだけ取り扱うようにし，自らも読売新聞社主催の「教師力セミナー」へ参加して情報収集に努めている。

❺ 現在の研究テーマ：

音楽科教育学とファゴット（演奏実技）の２本柱である。音楽科教育学に関しては，動作タイミングとビートの関係に関する分析的研究，音高ピッチの知覚に関する分析的研究，及び教育現場の教師と協力して「イメージング力」を核とした授業実践研究にも取り組んでいる。これに関しては，音楽科の新たな基礎基本の概念として「イメージング力の育成」を提案し，これに対してコニカミノルタ社より研究論文優秀賞を受賞している。

ファゴットの演奏実技に関しては，独奏のみならず室内楽やプロ及びアマチュアオーケストラにおける演奏活動や，小中学校などからの依頼演奏活動を通じて自己研鑽に努めている。

・業績リスト：

［論文］「学校吹奏楽における外部指導者導入システムの確立をめざした一考察」―自治体による試行事例と諸外国とのコミュニティ支援システムの比較を参考にして―，日本管打・吹奏楽学会機関誌28号付研究論文集，2005

［論文］「過疎地小規模校において地道に続けられてきた「全校音楽」に見る音楽教育の原点」―愛知県額田郡額田町立千万町小学校の40年以上に亘る全員合奏の取り組み―，日本音楽教育学会「音楽教育実践ジャーナル」Vol.3，No.2，2006

［論文］「グループダイナミクスを活かした『イメージングを通して音楽表現を創り上げる活動』の模索」―課題を見つけ出す力と問題解決の段取り力を育む二つの実践を拠として―，愛知教育大学研究報告第55号，2006

［口頭発表］「子どものイメージング活動を核に据えた授業実践の試み」―イメージングを音楽における基礎・基本の力，そして音楽が与していける生きる力と措定して―，日本音楽表現学会第３回大会，2005

［口頭発表］「モデル音の違いによる微小ピッチ知覚の異なる様相について」―ピッチ

を聞き分ける力はモデル音に対する習熟度に依存するのか―，日本音楽教育学会第36回大会，2005

［文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B)］研究分担者，視覚フィードバックにおけるフラットシンギングの測定と治療法の研究

［研究助成］平成17年度「ヤマハ音楽支援制度研究助成金」授与

❻ 時間割編成専門委員会委員，システム運営専門委員会委員

❼ 岡崎市立矢作南小学校「現職教育研究会」講師（３回），額田郡額田町立額田中学校「現職教育研究会」講師，岡崎市立矢作南小学校「全校音楽集会」講師，西三河地方教育事務協議会研究委嘱「額田中学校研究発表会」講師，平成17年度「岡崎市教育研究大会」講師，知立市小中学校合同音楽会：講師

「平成17年度全日本音楽教育研究会全国大会愛知総合大会」総合事務局長，Expo2005 AICHI JAPAN（愛知万博）愛知県主催「市町村企画・刈谷デー」企画実行委員，日本音楽教育学会学会誌「音楽教育実践ジャーナル」企画編集委員，蒲郡フィルハーモニー管弦楽団トレーニングコンダクター

❽ Expo2005 AICHI JAPAN（愛知万博）「市町村企画・刈谷デー」の企画実行委員としての活動に対して愛知県より感謝状を受ける

小泉　恭子　Koizumi, Kyoko　　助教授　音楽教育講座　　Ph. D.

❶ 応用音楽学

❸ 日本ポピュラー音楽学会（研究活動委員）
日本音楽教育学会，日本音楽学会，日本教育社会学会
International Association for the Study of Popular Music

❹ 学部：応用音楽概論，ソルフェージュ，Ｍ１音楽科研究A
大学院：音楽科教育授業研究Ⅰ
・教育活動：
ポピュラー音楽研究，音楽社会学，クリエイティブな音楽教育の３本柱を軸に授業を展開

❺・現在の研究テーマ：青少年とポピュラー音楽，映像と音楽
・業績リスト：
共著
１．小川博司，小田原敏，小泉恭子，粟谷佳司，増田聡，葉口英子『メディア時代の広告と音楽』　新曜社（2005年11月）
学会発表
１．「Problematizing Film Music」日本ポピュラー音楽学会第17回全国大会シンポジウム『インダイレクト・ナラティヴズ：音楽と映画をめぐって』パネリスト（2005年11月，弘前大学）
・学会誌編集
『音楽教育実践ジャーナル』Vol.3 No. １,（2005年８月，日本音楽教育学会）
特集「実践と教育をつなぐ」編集担当（安達真由美・北海道大学助教授との共同編集）
・科学研究費

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

平成17年度科学研究費補助金＜若手研究（B）＞
武満徹の映画音楽における語法の継承性と実験性の解明（課題番号15720023）

・学術・研究交流等
日本ポピュラー音楽学会研究活動委員（2006年２月～）

❻・各種役職
学部入試専門委員，共通科目専門委員（グループ「人間と生活」）

・各種委員会委員活動
共通科目専門委員における授業改善・成績評価部会の構成員を務めた（大学教育学会全国大会への参加も含む）

❼・新聞コラム
「女の子バンドとジェンダー」朝日新聞名古屋版夕刊（2005年11月）

・学校現場における指導助言
平成17年度岡崎市教育研究大会助言者（音楽・中）（2005年９月）
愛知教育大学附属岡崎中学校第38回生活教育研究協議会　共同研究者（2005年度）

・愛知万博市民プロジェクト　愛知教育大学「ものづくりと教育」（音楽ワークショップと司会）（2005年７月30・31日）

橋本　　剛　Hashimoto, Goh　　講師　　音楽教育講座　　芸術学修士

❶ 作曲，ピアノ

❹ 和声学（２年），作曲概論（２年），合唱Ⅰ（２年），合唱Ⅱ（３年），指揮法（３年），作曲法（３年），情報教育入門Ⅱ（１年），音楽科研究BⅡ（１年），作曲・ピアノゼミ（３・４年）

学生の大半が作曲に関しては初心者であるため，１年生を対象とした情報教育入門においては，ショートムービーの製作を通して，まずは視覚的イメージを楽曲化する訓練を図った。また，２年の作曲概論においては，合唱曲やピアノ曲の作曲実習及び発表を行い，３年の作曲法においては，『手袋を買いに』を室内オケによる音楽付きの朗読劇に仕上げ，授業の最終日に公開で発表するに至るなど，これまで可能な限りの試みを敢行してきた。

作曲するにあたり，ときとして演奏者の人数や年齢層，個々の技量，使える楽器の種類，演奏時間等に限りがあるといった場面に遭遇することがある。作曲専攻生には，将来現場で直面しうるあらゆる制約にも即応できる柔軟さを養ってもらいたい。

作品評価のポイントは「アイデアのおもしろさ」。最初は感覚的でもよいが，理論に裏打ちされたおもしろさを追求する積極性が望まれるところである。学生たちへは，五感をくすぐるような音楽を創作していくことを通して，児童・生徒の発想力を喚起できる心豊かな教員へと育ってくれることを願う。

❺ 作品発表：
・『君と生きていく～ロングロングタイム～』（演劇『砂の絵の具』劇中歌）福岡　2005.4
・『秋潦～フルートと箏のための～』CD化（WQCA-1003）。2005.4
・音楽劇『Japanese Idiot』（大阪現代演劇祭出品）全10曲。全５回公演。2005.6
・演劇『限りなくゼロに近いイチ』（第13回北九州演劇祭出品）全17曲。2005.7～10
・混声合唱曲『空の正面』楽譜出版及びCD化（教育芸術社ISBN4-87788-300-2 C6873）。2005.7
・文化庁芸術拠点形成事業ミュージカル『飛んで孫悟空（別役実作）』全11曲。2005.8～９

・長崎市自主文化事業演劇『宮さんのくんち』全 6 曲（長崎ブリックホール）。2006.2
・大阪現代演劇祭ファイナルイベント大感謝祭クロージングコンサートにて音楽劇『Japanese Idiot』の曲目を再演。指揮（旭区芸術創造センター）。2006.3

❻ 教育実地研究専門委員，情報システム委員

❼ NHK全国学校音楽コンクール愛知県大会三河地区予選審査員（岡崎市民会館）。2005.8
・公開講座『音楽いろいろ』作曲部門担当。2005.8
・長崎被爆60周年記念事業「平和巡礼2005」において，合唱指揮（平和公園）。2005.8.
・愛知万博「刈谷デー」にて合唱を指揮・伴奏（万博長久手会場・愛知県館）。2005.9
・日本教育大学協会音楽部門平成17年度東海地区例会にて『作曲と教育』と題して研究発表。2005.9
・日本歌曲振興会名古屋支部定期演奏会にて伴奏（電気文化ホール）。2005.11
・「地域創造」主催シアターラボにてミュージカルワークショップ特別講師（三重県文化会館）。2006.2
・長野県高遠町閉町式におけるクロージングコンサートにて『さくら』『長崎の鐘』『ふるさとの春』『高遠町町歌』各編曲作品を発表。2006.3

美術教育

藤江　　充　Fujie, Mitsuru　　教授　美術教育講座　芸術学修士

❶ 専門分野：美学・美術教育学，特に日米のカリキュラム比較，鑑賞教育論，美術館教育など

❸ 学会：美学会，比較思想学会，日本教育学会，美術科教育学会（理事，学会誌委員），大学美術教育学会（理事），日本描画テスト・描画療法学会，国際美術教育学会（InSEA）その他。

❹ 美術教育演習（ 3 年），美術教育演習（ 4 年），造形研究（ 4 年），美術教育学特論Ⅰ（大学院），美術教育学特論Ⅱ（大学院），特別研究（大学院）

美術教育演習は，美術教育専攻生のための特別研究に相当する。図工・美術におけるフリーソフトを使ったパソコンの授業の可能性，造形活動での接着剤の活用とその特性の実験，特別支援教育を意識したユニバーサルな教材の開発など，現場の実践にとって緊急の課題に取り組めるように配慮した。大学院の特論では，全米美術教育基準とそれに基づく全米一斉テスト問題の具体的内容に関する討論などを通して，日本の「学力」論争以後の教育改革に関連させて，米国の事例を批判的に検証していく課題に取り組ませた。

❺ 研究テーマ：特に，日米の比較を通した美術教育のカリキュラム論，美術館を含めた鑑賞教育の実践的な方法とその課題についての研究を進めている。
・単著：「図画工作科の明日を考える」『教育研究（No.1243）』（初等教育研究会），2005 年 9 月号。
・研究発表：「図工・美術科のカリキュラムの基礎的研究－『能力』観の考察を通して」，第28回美術科教育学会（京都教育大学）にて発表。
・科学研究費：基盤研究（c）「日米の比較を通した図画工作科・美術科における『学力』

の研究」(2004～2007年度計画) 研究代表者。

❻ 附属学校部長

❼ 中央教育審議会芸術専門部会委員，国立教育政策研究所研究協力員，教育美術振興会評議員（「教育美術賞」審査員兼任），名古屋市美術館運営協議会（会長），愛知造形教育研究会顧問，名古屋市造形教育研究会顧問，三河教育研究会造形部会顧問，豊橋市初任者研修協議会委員，・愛知県教育研究集会（図工・美術科）講師，その他，各地域の現職研修会の講師など。

宇納　一公　Uno, Kazuhiro　　教授　　美術教育講座　　教育，芸術学士

❶ 彫刻，環境造形

❷ 第18回中部国展　中部新人賞（1980年），第55回国展　前田賞（1980年），第19回中部国展　中部国画賞（1981年），第58回国展　Ⅰ氏賞（1984年）

❸ 大学美術教育学会，野外彫刻調査保存研究会，金属造形研究会

❹ 彫刻基礎（１年），彫刻実技Ⅱ（２年），彫刻制作Ⅰ（３年），彫刻制作Ⅱ（３年），彫刻論（３年），造形研究（４年），彫刻研究（４年），主題科目「環境と人間」入門（１年），図画工作科研究Ａ１（３年），彫刻論Ⅰ・Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

　彫刻実技では，塑造による人体表現について学び，木彫，石彫，金工による立体造形のトレーニングをとおして，空間芸術の基本的な表現方法を学ぶ。また，展示空間の研究として，展覧会やワークショップの企画を策定し，地域との連携文化事業にも積極的に取り組むように指導している。

❺・生涯教育における造形プログラムについての研究―地域社会と大学教育研究機関の連携の可能性について（教育研究改革・改善プロジェクト　1,669千円）
・「ガラスアート博覧会in知立」報告集，「大学生がやってきた」フレンドシップ実践報告集の刊行
・「空／緑」彫刻作品の設置（オーバルコート大崎―東京品川）
・クレイオブジェ「夢貯金」準グランプリ受賞（みずなみ陶土フェスタ2005　TIKAYAN）
・「５をテーマにした陶彫作品」出品　Fifth Element展

❻ 教育研究評議員，改革推進委員会委員，財務委員，美術教育講座代表，美術教室主任

❼・愛知教育大学附属名古屋中学校美術科指導助言
・ちりゅう芸術創造協会事業企画運営委員
・愛知万博刈谷市の日催事企画実行委員
・知立市文化会館開館５周年記念企画事業フィフスエレメント総合ディレクター
・知立市文化会館パティオ池鮒鯉野外彫刻プロムナード展運営実行委員会顧問
・知立市美術展総合審査員，豊田市民美術展審査員，瀬戸市美術展審査員
・清須市生涯教育講座講師

黒澤　千春　Kurosawa, Chiharu　　教授　　美術教育講座　　芸術学修士

❶ 美術工芸，漆芸

❷ 受賞暦
1967年　第24回日本伝統工芸展　日本工芸会会長賞，1976年　第16回伝統工芸新作展奨励賞

❸ 日本工芸会，漆工史学会，道具学会

❹ 造形基礎Ⅰ・Ⅱ（１年），造形基礎Ⅲ・Ⅳ（２年），総合演習Ⅰ（３年），漆芸実技Ⅰ・Ⅱ（３年），造形材料学Ⅰ・Ⅱ（３年），造形研究Ⅰ・Ⅱ（３年），漆芸実技Ⅲ・Ⅳ（４年），造形制作指導Ⅰ・Ⅱ（４年），総合演習Ⅱ（４年），造形研究Ⅲ・Ⅳ（４年），芸術作品研究Ⅰ・Ⅱ（４年），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院），工芸論Ⅰ・Ⅱ（大学院），現代日本の社会と文化（２年）

❺ 現在の研究テーマ　「漆芸（蒔絵）における平文，螺鈿の新しい装飾技法の研究」
「彩漆と金属箔による造形表現技法の研究」
業績リスト　［作品］第36回東海伝統工芸展「銀平文螺鈿中次　柊」名古屋丸栄，他東海三県

❻ 入学試験委員

❼ 豊田通商ギャラリー「シャンタムール」　暮らしに美と楽しさを（講演会）

野澤　博行　Nozawa, Hiroyuki　　教授　　美術教育講座　　芸術学士

❶ 絵画，専門分野：銅版画（制作，理論），絵画・版画理論
関連分野：美術教育

❷ 日本版画協会会員推挙（1986年）

❸ 日本版画協会，大学美術教育学会（1989-1991年 理事），大学版画学会

❹ 風景写生（１年），図画工作科研究Ⅱ（１年），絵画実技Ⅰ（２年），図画工作科研究BⅠ（２年），教養主題科目展開（２年），絵画論（３年），絵画制作Ⅱ（３年），絵画研究（４年），造形研究（４年），図画工作科教育Ａ（４年），総合演習Ⅱ（４年）
版画研究Ⅰ・Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

専門の授業では絵画の基礎的能力の育成を図り，その基盤に立脚して，版画についてのより高度な理論研究と，制作内容の向上を求めている。絵画実技Ⅰ（２年）においては版画の基礎的な実習を通して，デッサンから制作に向かう絵画の重要なプロセスを指導し，同時に小・中学校における版画教育の現状を踏まえた内容を心がけている。絵画論（３年）は絵画造形理論の基礎を習得することを目的としている。研究室に配置された絵画制作Ⅱ（３年），絵画研究（４年），造形研究（４年）では，より専門的な版画技法及び版画理論の研究を行い，卒業研究，制作に結び付くよう指導している。図画工作科研究においては，小学校の版画指導の内容を考慮した実習を通して，絵画の基礎的内容を習得させ，図画工作科教育では，児童画の発達段階を中心に，子どもの絵について考えが深まるように工夫している。大学院ではより高度な絵画造形理論と版画研究を行っている。

授業の問題点としては，指定時間だけでは基礎能力習得に不十分で，時間外の自主的制作を促すよう工夫している。また，実習室の不備が切実な問題である。学生人数に対して実習室が狭く，数が少ない事により，２年の授業では他の実習室や教室を分散して使用せざるを得ない。なお，専用の版画室は大変狭く，交替で使用している現状である。

❺ 銅版画のメチエについての研究，及び制作。特に古典技法の研究を通して，現代版画の表現技法として制作に生かしている。制作内容は，エッチング技法を中心とした細密描法により，幻想的，象徴主義的なテーマを追求している。また，以上の成果をもとに，学校教育における版画教育の在り方と，その指導法について研究している。なお，文部

省在外研究員（1992～1993年）として，ローマ美術アカデミアのガイド・ストラッツァ教授のもとでイタリア古版画の手法研究や，アカデミアの教育にふれた事は現在の銅版画手法研究，制作，また授業の改善に大きな展開をもたらした。

作品発表としては，日本版画協会展（東京都美術館及びスウェーデン，ニュージーランド，メキシコ展等）を中心に発表活動を行い，その他ブタペスト国際展（ハンガリー），カンピーナス国際版画ビエンナーレ展（ブラジル）などのコンテストに出品している。また画廊企画による個展や，グループ展などを多数開催している。

05年度の主たる作品発表

2005年４月

「風化の構図Ⅰ」（銅版画）　第74回日本版画協会展　東京都美術館（東京）

「風化の構図Ⅱ」（銅版画）　第74回日本版画協会展　東京都美術館（東京）

❻ 大学院講座代表，時間割編成委員，共通科目「日本の社会と表現文化」コーディネーター

❼ 愛知教育大学公開講座，豊田市生涯教育熟年講座講師，愛知教育大学附属岡崎中学校共同研究者

中島　晴美　Nakashima, Harumi　　教授　　美術教育講座　　芸術学学士

❶・現代陶芸

❷・毎日ID賞特選二席（1980年）・国際陶磁器展美濃‘89　銅賞（1989年）

・国際陶磁器展美濃‘95　金賞（1995年）

コレクショパブリックン

東京国立近代美術館，エバーソン美術館（ニューヨーク），アルゼンチン近代美術館，プラハ装飾美術館，ファエンツア陶磁国際美術館，岐阜県陶磁資料館，国際交流基金，滋賀県立陶芸の森美術館，ヨーロピアンーセラミックーワークセンター（オランダ），茨城県陶芸美術館，愛知県陶磁資料館，岐阜県現代陶芸美術館，アート＆デザイン美術館（ニューヨーク），韓国国際交流基金（韓国）

❸・国際陶芸学会（I･A･C）　・東洋陶磁学会

❹ 造形基礎Ⅰ，Ⅱ，（１年）Ⅲ，Ⅳ，工芸実技Ⅰ（２年），陶芸実技Ⅰ，Ⅱ，造形材料学Ⅰ，造形研究Ⅰ（３年）・陶芸実技Ⅲ，Ⅳ，造形研究Ⅲ，芸術作品研究Ⅰ，造形制作指導（４年），造形演習Ⅰ，造形演習Ⅱ（大学院）

・素材をひとつに限定して制作する方法（工芸的造形あるいは陶芸的造形）は，素材に対するアプローチの仕方にある。実践を通してそのことが自覚できるような授業を実施している。

❺ 個展

・ 目黒陶芸館（2005年／四日市）

グループ展

・ 日本の現代陶芸・海外の現代陶芸―迫力の時代―（2005年／陶芸の森美術館）

・ 美濃陶磁展（2006 年／多治見市産業文化センター）

・ 鹿児島陶芸展（招待出品2005年／鹿児島）

・ 日本陶芸100年の精華展（2006年／茨城県陶芸美術館）

・ 近代工芸の100年展（2005年／東京国立近代美術館工芸館）

・ 中島晴美・松本ヒデオ展（2005年／さかづき美術館）

作品・作家紹介

・美術―表現と鑑賞（開隆堂出版株式会社　2006年）

❻・評議員

❼・シンポジュウム「笠間をアーティストの夢を育む街に」　コメンテーター（2006年／茨城県陶芸美術館）

・鹿児島陶芸展審査員（2005年４月）

礒部　洋司　Isobe, Hiroshi　　教授　美術教育講座　芸術学修士

❶ 美術科教育

❷ 1985年展　特別賞（1985.10）

❸ 美術科教育学会，大学美術教育学会

❹ 専門教育入門Ｂ（１年），図画工作科教育Ｂ（２年），図画工作科教育Ａ（３年），美術科教育ＣⅠ（２年），美術科教育ＣⅡ（３年），美術教育演習Ⅰ（３年），美術教育演習Ⅱ（４年），美術教育演習Ｃ（４年），造形研究（４年），美術科教育論（大学院），美術科教材論（大学院）

教育活動について：図画工作・美術科教育関連の科目をおもに担当しているため，できる限り現場での指導に直結した授業を心がけてきた。本年度に実施された学生による授業評価に関するアンケートの結果を見ると，授業の内容や一時間あたりの量はおおむね適切だと判断されているようである。ただ，授業外での学習時間をあまり取らせていないことと授業中に学生自身に考えさせることに不足があるようである。授業評価アンケート自体は授業科目の個々の性格・事情を十分に反映させるに足るとは言いにくいことや無責任な回答に対する配慮が欠けること等に問題も残るようにも思うが，それはさておき，このことは今後の授業経営に反映していきたいと考えている。

❺ 現在の研究テーマ：美術教育史を研究している。ここ数年は科学研究費補助金をいただいていることもあって，日本各地及びイギリスで調査旅行を実施して明治・大正期の美術教育関連文献の検索・収集につとめるとともに，後進のために文献目録の作成を行ってきた。これらの作業の傍ら，収集文献の検討から浮かび上がってくる美術教育史上のエポックに関する論文を執筆・発表している。以後もしばらくはこのようなスタイルで研究を続けていくつもりである。

論文：「教育略画の系譜に関する研究　3　―明治期における概念形成過程を中心に―」（共著），『大学美術教育学会誌』第38号，2006

科学研究費補助金：「明治中期以降の我が国美術教育思想に与えたE.P.ヒュースの影響に関する研究」（平成16年度～平成17年度，課題番号 16530580-00），1,300千円（平成17年度），（基盤研究（C）(2)，代表）

❻ 教育実地研究委員会委員

❼ 愛知教育大学附属岡崎小学校第56回生活教育研究協議会図画工作科助言者

第51回西尾市小中学生絵を描く会二次審査会講師

平成17年度岡崎市教育研究大会美術科助言者

『はっぴーママ東海版』2005 vol.8 掲載「絵からわかる子どもの世界」執筆・監修

『はっぴーママ東海版』2005 vol.9 掲載「絵からわかる子どもの世界」監修

『はっぴーママ東海版』2005 vol.10 掲載「はじめての幼児教育講座」講師

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

『TESORINA』2005創刊号，2006春号 掲載「Art lesson」執筆・監修

浅野　和生　Asano, Kazuo　　教授　美術教育講座　文学修士

❶ ビザンティン美術史
❷ 1999年１月　三浦アンナ・辻荘一記念学術奨励賞
❸ 美術史学会，美学会，日本ビザンツ学会，民族芸術学会，地中海学会，西アジア考古学会
❹ 芸術概論，西洋美術史概論Ⅰ，Ⅱ，西洋美術史研究Ⅰ，Ⅱ，西洋美術史特論Ⅰ，Ⅱ，芸術学演習（大学院）などを担当
　講義の授業では，スライドや配付資料を使う他，毎時間メールで質問・意見を提出させ，次の授業までに返答を返信するなど，学生の理解向上に努めている。
❺ ビザンティン美術史の研究
論文
2006.3　“Narthex Mosaic of St. Sophia, Istanbul: A New Approach.” Orient, Volume XLI（日本オリエント学会）
その他の執筆物
2005.8　青池保子『エロイカより愛をこめて』第20巻解説　330-333（秋田書店）
2005.6　「ジェームズ・アンソール展」批評（中日新聞2005年６月29日朝刊）
2005.12　「プラート美術館展」批評（朝日新聞2005年12月６日朝刊）
2006.4　「ルオー展」批評（朝日新聞2006年４月25日朝刊）
学会発表
2005.4　「３点の象牙トリプティックとリンブルクの聖遺物容器のプログラム」　日本ビザンツ学会総会（東海大学）
2005.5　「ビザンティンの象牙トリプティックと聖遺物容器－プログラムの源泉推定の試み－」美術史学会第58回全国大会（大阪大学）
2006年度科学研究費補助金「エーゲ海の島の都市と聖堂の研究」(基盤研究・企画調査)，研究代表者
❻ 現在病気のため，一時的に大学の役職を免除するなどの配慮をいただいている
❼ 各種講演会の講師などを毎月２～３回つとめている

安田　篤生　Yasuda, Atsuo　　助教授　美術教育講座　文学修士

❶ 日本美術史（近世絵画史）
❸ 美術史学会，美学会
❹・造形芸術概論（１年)，日本美術史概論Ⅰ・Ⅱ（２年)，日本美術史研究Ⅰ・Ⅱ（３年)，芸術学演習Ⅰ・Ⅱ（３年)，美術史現地指導Ⅰ（３年)，芸術作品研究Ⅰ・Ⅱ（４年)，日本美術史特論Ⅰ・Ⅱ（４年)，美術史現地指導Ⅱ（４年)，美術史特論Ⅰ・Ⅱ（大学院）
・学部の授業では，美術史の初歩から始め，２年では日本美術史の基礎，３年では文化状況とも関連した美術史のさらに発展した研究について講義している。講義形式で行う授業としていくつかの問題点もあるが，大学から初めて学ぶ美術史の研究方法や成果について学年進行とともに学生が一定程度理解を示すようになってきており，ゼミでの発表等から判断しても一定の教育成果が上がっていると思われる。大学院では，美術史専攻者が極めて少数であるので，受講学生の知識や興味に合わせた授業内容にせざるを得な

いのが問題であろう。担当している授業数が過大であると思われるのが最大の問題点ではあるが，内容の水準を落とすことなく，学生が理解しやすい授業を念頭に一層努めていきたい。

❺・現在，江戸時代前期に活躍した尾形光琳について研究を進めている。特に，光琳が没してから江戸時代末にかけて，光琳に対するイメージがどのように移り変わって行ったのかを究明することに近年取り組んできた。今後は，光琳イメージの形成に大きく関わった，酒井抱一周辺の活動についてさらに考究するとともに，それらの成果を踏まえて，光琳作品の分析に取り組む予定である。

・論文：「模写と粉本」『美術フォーラム21』第12号，2005年

・研究助成の受領状況：科学研究費補助金（基盤研究（B））「前近代における「つかのまの展示」研究」（研究代表者・京都大学文学研究科・教授・中村俊春）分担者

・学術・研究交流等なし

❻ 時間割編成専門委員会委員，共通科目専門委員会委員，大学改革推進委員会第三部会ワーキンググループ

富山　邦夫　Tomiyama, Kunio　　助教授　美術教育講座　　芸術工学修士

❶ デザイン

専門分野：デザイン教育

関連分野：マーケティング，デザインマネージメント

❷ 福岡広告協会賞・SP部門　銅賞（1997年５月），福岡広告協会賞・アーバンアド部門　銅賞（1996年５月），企業シンボルマーク・デザインコンペ　金賞（1995年11月），福岡広告協会賞・アーバンアド部門　銅賞（1995年５月），郵政省・全日本DM 大賞　佳作（1994年２月），福岡広告協会賞・アーバンアド部門　銀賞（1994年５月），国際文具・紙製品・事務機器展「文具アイデア イラスト コンテスト」佳作（1993年10月），東京国際文具フェア'90　招待出品（1990年10月），福岡広告協会賞・パンフPR誌部門　銀賞（1986年５月）

❸ 日本デザイン学会，道具学会，日本広告学会，基礎造形学会，知的生産の技術研究会

❹ デザイン基礎（１年），デザイン実技Ⅱ（２年），デザイン制作Ⅰ（３年），デザイン制作Ⅱ（３年），現代日本の社会と文化・セミナー（３年），デザイン研究（４年），造形研究（４年），デザイン演習（４年），図画工作科教育Ａ（２年），デザイン研究Ⅰ（大学院），デザイン研究Ⅱ（大学院）

［デザインの意味と，社会認識］

デザインとは，幾つかの条件を満たしながら，市場を観察し，目的達成のために，問題点を明らかにし，課題を抽出し，それに対しての解決策を発見する一連の造形思考プロセスのことです。したがって，「デザインの教育」とは，日常生活において，筋道を立てて問題を解決していく学習そのものだと見立てることができます。

「デザインすること」とは，単に外観だけを扱うものでも，視覚だけを扱うものでも，レイアウトをすることでもありません。

しかし，現状，多くの人々にとって「デザイン」とは，「構成」や「装飾」のことかのごとく認識されています。これは多いに問題だと思います。

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

[「デザイン教育」を「美術」に限定しない]

学校現場における「デザイン教育」の大体の拠り所となっているのは，「構成教育（平面構成・立体構成）」です。この認識をもって「デザインである」と妄信・教育してしまっては，全く実効性はなく，とんでもなく限定的な世界観を子どもたちが受け継ぎ，その認識が社会に再生産されてしまいます。

デザインとは，常に社会生活との関係の上に成り立っていますので，むしろ「デザイン」は，教科としての領域の一部ではなく，各教科を関連づけする「総合学習」の中核的な存在として活きる「思想」です。

[「総合学習」としてのデザイン教育を，教員養成の立場で考える]

さて「総合学習」ですが，教育現場では四苦八苦されて扱われているようです。また，縦割り教科の「合科」でもないはずです。「美術科」という教科は，また，その一領域に過ぎない「デザイン」は，教育においては周辺的な役回りを余儀なくされる傾向にあります。しかし「デザイン教育」を，本来のデザイン思考の基本として捉え直しますと，教科としてではない「学際的な学習システム」として「総合的な学習」が成立します。

将来の教師を育てる大学の教員として，私は，担当する幾つかの授業（学際度の差異はあるが「デザイン実技」「図画工作科教育」など）及び指導（「卒業研究」）で，この指導の組み立てを試行・実践中です。

この啓蒙活動と教育プログラムづくりこそが，教員養成系大学で「デザイン教育」を担当する私の責務だと考えています。教育は，子どもたちを通して再生産されるものですから…。

❺ 制作：愛知教育大学「大学見学説明会」ポスター（グラフィックデザイン）2005年 7 月，
制作：愛知教育大学「大学案内 2006」パンフレット（エディトリアルディレクション）2005年 8 月，
制作：愛知教育大学「大学概要」（ジャケットデザイン）2005年 8 月，
制作：愛知教育大学 広報誌「Campus Now!」第 3 号（エディトリアルデザイン）2005年10月，
制作：愛知教育大学 「Campus Now!」ポスター（グラフィックデザイン）2005年11月，
制作：愛知教育大学 広報誌「Campus Now!」第 4 号（エディトリアルデザイン）2006年 3 月，
制作：愛知教育大学「シラバス」（ジャケットデザイン）2006年 3 月
報告書：『環境共生型教育研究施設の計画に関する提案的研究』（第 4 章担当），愛知教育大学，2006年 3 月

❻ 広報部会委員，6 年一貫教員養成コース会議・委員，市民参画型教員養成コーディネータ会議，広報誌編集会議委員

松本　昭彦　Matumoto, Akihiko　　助教授　美術教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：絵画教育・絵画制作
関連分野：絵画技法・材料学

❷ 第52回全日本肖像美術協会展佳作賞（2005），第51回全日本肖像美術協会展新人賞（2004），第78回白日展東海テレビ放送賞（2002），第77回白日展佳作賞（2001），第76回白日展名古屋タイムズ社賞（2000），第26回中部白日展名古屋タイムズ社賞（2000），第22回中部白日展中部白日賞（1996），第 7 回日産童話と絵本のグランプリ優秀賞（1991），第 2 回毎日メルヘン画佳作賞（1990），第 1 回毎日メルヘン画大賞（1988）

❸ 大学美術教育学会（会員），全日本肖像美術協会（会員）

❹ 人文科学入門「美術のはじまり」（１年），絵画基礎（１年），風景写生（１年），図画工作科研究AI（１，２年），図画工作科研究BI（２年），絵画実技Ⅱ（２年），絵画制作Ⅰ・Ⅱ（３年），絵画研究（４年），絵画演習（４年），造形研究（４年），絵画演習Ⅰ・Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

・従来の絵画指導法では「自由」「個性」「創造性」「感性」に重点が置かれていたが，「自分で頑張りなさい」「自分で考えなさい」というのは教えることを放棄するのに等しい。「自分らしさ」や「オリジナリティ」を強調するあまり，作者自身にも理解不可能な作品や他者に伝わらない独善的な作品をつくらせることの意味を問いたい。

❺・キミ子方式による「わかる」「描ける」絵画指導法：より良い絵画の授業作りについて松本キミ子の著作・セミナー・通信指導等で学びながら絵画指導法に関する研究を進める。

・人物肖像画の構図の研究について：画像資料の収集を通して，人物と背景，前景の役割等について分析する。

・教育略画の系譜に関する研究３－明治期における概念形成過程を中心に－：大学美術教育学会誌38号　2006.3

・「キミ子方式」と水可溶性油絵具（3）－地塗り及び筆と画用液に関する考察－：愛教大研報（芸）55　2006.3

・キミ子方式と小学生－岡崎市常磐南小学校におけるクロッキーの実践－：教育実践総合センター紀要第８号　2006.2

・草地学者　横田浩臣博士：油彩　F30号　第52回全日肖展（上野の森美術館）2005.4

・明治後期以後の我が国美術教育思潮に与えたE. P.ヒュースの影響に関する研究
※科学研究費（基盤研究（C）（2）課題番号16530580：研究分担者）2004.4～2006.3

・韓国晋州教育大学校附属初等教育研修講師　2006.1.9～1.20

❻ 芸術系会議代表・高大連携特別選抜推薦入学試験部会委員・学部入学試験部会員
入学者選抜方法等専門委員会副委員長

❼ 三好町文化協会絵画部理事，三好町生涯学習前期講座「描いて楽しもう！絵画教室」講師・本学公開講座「誰でも楽しく描けるキミ子方式―ペン画と水彩画」講師・キミ子方式全国合宿研究大会（奈良）実技指導講師（平成17年度）・愛知きりえの会スケッチ会講師・岡崎市立常磐南小学校の教員に対するクロッキーの指導・稲沢市立片原一色小学校現職教育での絵画指導

❽ 朝日チャリティー美術展に作品寄贈（社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団主催）

遠藤　　透　Endo, Toru　　助教授　美術教育講座　　芸術学修士

❶ 工芸
専門分野：美術鋳造
関連分野：精密鋳造

❷ 内藤賞（1988年）
第19回淡水翁賞（2002年）
第３回佐野ルネッサンス鋳金展奨励賞（2002年）

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❸ 日本鋳金家協会会員，金属造形作家グループあらがね会員

❹ 造形基礎Ⅰ・Ⅱ（1年），造形基礎Ⅲ・Ⅳ（2年），金工実技Ⅰ・Ⅱ（3年），造形材料学Ⅰ･Ⅱ（3年），造形研究Ⅰ・Ⅱ（3年），総合演習Ⅰ（3年），金工実技Ⅲ・Ⅳ（4年），造形研究Ⅲ･Ⅳ（4年），芸術作品研究Ⅰ・Ⅱ（4年），造形制作指導Ⅰ･Ⅱ（4年），総合演習Ⅱ（4年），造形演習Ⅲ，Ⅳ（大学院）

造形文化コース鋳金では，ロストワックスによる石膏鋳造で作品制作を行っている。1年では「手びねり蝋による動物制作」，2年では「抽象的な美しい立体」をテーマとして制作している。3年前期では「四つ足」をテーマとして，道具づくりから鋳造に関わる様々な技法を学び，後期では精密鋳造によるジュエリー制作等を行う。近年，ジュエリー制作に関わる就職を希望する学生が多い。4年前期では，卒業制作のためのエスキースとして各自テーマを決め作品を制作し，卒業制作に挑む。工芸，彫刻，ジュエリーといった学生の造りたいという欲求に応えるために努力している。

❺ 金属造形作家展ARAGANE EXHIBITION（2006年3月　ワコール銀座アートスペース）
GAM展（2006年3月　岡崎市美術館）

❻ 教育実地研究委員会委員
衛生管理者

❼ 岡崎市カタリナ幼稚園「父と子」寄贈

樋口　一成　Higuchi, Kazunari　　助教授　美術教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：構成
関連分野：工芸

❷ 第1回全国ウッドクラフト公募展奨励賞（1988年），第2回全国ウッドクラフト公募展優秀賞（1989年），第22回毎日・DAS学生デザイン賞公募展金の卵賞（1990年），第3回全国ウッドクラフト公募展大賞（1990年），第4回全国ウッドクラフト公募展最優秀賞（1991年），第5回全国ウッドクラフト公募展特別賞（1992年），第6回全国ウッドクラフト公募展アイデア賞（1993年），第7回全国ウッドクラフト公募展アイデア賞（1994年），第1回CCDO〈中部デザイン団体協議会〉デザインアオード2001賞（2002年）

❸ 大学美術教育学会，美術科教育学会，日本デザイン学会（評議員），アジア民族造形学会（支部役員），中部デザイン協会，ハンド101ものづくり教育協議会，ものづくり教育会議（代表），日本インテリア設計士協会，愛知県インテリア設計士協会（理事）

❹ 工芸基礎（1年），工芸実技Ⅰ（2年），工芸制作Ⅰ（3年），工芸論（3年），クラフト演習（4年），工芸研究（4年），造形研究（4年），構成演習Ⅰ（大学院），構成演習Ⅱ（大学院）

構成領域工芸分野は，紙工芸・木工芸・窯工芸・金工芸・染め・織り・インテリアデザイン・玩具デザイン・ジュエリーデザイン・テキスタイルデザインなど幅広い内容を含んでいる。この広範囲に及ぶ分野を限られた授業の中で扱うため，内容を精選し，より効果的な組み立てを考えながら授業を進めている。特に「試行錯誤しながら問題解決ができること」「取り扱う素材について理解すること」「できるだけ自然の素材に触れること」「子どもたちのものづくりを実感できるようにすること」「地域と連携すること」などを留意しながら授業を構成している。学生ごとに扱う素材としては，1年次に木，2年次に紙・繊維素材（糸・紐・布・羊毛など），3年次に砂・土，4年次にガラス・金属や1～3年次に経験した素材などを設定している。

❺ 子どもたちを対象としたものづくり教育の内容を研究している。現在は，地域の教育委

員会・小中学校・企業・地方公共団体などと連携しながら実践を重ねるとともに，教育内容を出版物などにまとめている。

1．作品「吊り木」木のおもちゃと遊び展，愛知県デザインセンター
2．作品「インディゴパターン」二人展，ギャラリープランネット
3．出版物『ファブリック！　in life』愛知教育大学出版会

❻ 安全衛生委員会委員

❼ 愛知万博「LEDあかり展」実行委員会委員（名古屋商工会議所）
愛知万博「刈谷市の日」実行委員会委員（刈谷市）
愛知教育大学美術教育講座フレンドシップ事業担当者

鷹巣　　純　Takasu, Jun　　助教授　美術教育講座　　文学修士

❶ 美術史，専門分野：仏教絵画史，関連分野：日本絵画史

❷ 第 5 回鹿島美術財団賞（1998年 5 月）

❸ 美術史学会，密教図像学会，東海印度学仏教学会（理事），美学会，仏教文学会，絵解き研究会，仏教文化財学研究会

❹ 人文科学入門（1 年），西洋美術史（2 年），東洋美術史（3 年），日本美術史（2 年），図画工作科教育Ａ（2 年），総合演習Ⅰ（3 年），日本美術史演習Ⅱ（3 年），総合演習Ⅱ（4 年），日本美術史演習Ⅰ（4 年），造形研究（4 年），東洋美術演習Ⅰ（大学院），東洋美術演習Ⅱ（大学院）

私の教育活動は専門である日本美術史，方法論的に専門と共通する美術史一般，本来の専門とは領域を異にする美術教育法の 3 分野からなる。このうち美術教育法については，学校教員の免許を有しない部外者として，学校教育の外からの視点を維持するよう心がけている。美術史一般については，学校教員養成の理念に立って，スライドなどを用いて可能な限り多様な作品を紹介し，限られた時間内で教師の必須の教養であるところの美術史の全体像を理解させるように心がけている。日本美術史においては，美術史一般と同様の手法に加えて，美術史の方法論について体験的に学べるよう工夫している。さらにこれらの正規の授業とは別に，博物館などの協力を得て展覧会の見学会などの企画をし，学生相互のふれあいを通した生きた美術体験の機会を設けている。大学院対象の授業については，当初は漢籍などの原典講読を含むレベルに設定していたが，受講者が少なかったためやや難度を下げた作品分析の演習を行なってみたものの，なお受講者は少ない。さらに難度を下げる必要性がある。

❺ 現在の研究テーマは 2 点，すなわち六道十王図の図像解析と，水陸画の現存作例探索である。今後，両者を統合するパースペクティヴを提示できればと考ええいる。

1：「出光美術館本六道十王図と宗教民俗」（口頭発表），日本宗教民俗学会大会（於，大谷大学），2005.6
2：「物語られた六道図像　―善光寺如来絵伝への六道絵の影響―」，『アジア遊学』，第79号，勉誠出版，2005.9
3：「幽明往還　―縁起絵に見る中世・近世日本の他界往還のイメージ―」，『宗教史学論叢10　異界の交錯　上巻』（細田あや子・渡辺和子編），リトン，2006.2

❻ 日本教育大学協会本部評議員

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

日本教育大学協会東海地区会評議員
人文科学入門コーディネーター

❼ 愛知県史編纂委員会　文化財部会　特別調査委員
豊川市桜ヶ丘ミュージアム　美術資料購入選定委員
自治体からの依頼による文化財調査（2005年度は七宝町・瀬戸市・三重県伊賀市）

アイビー　ピーター　ラッセル　Ivy Peter Russell　　講師　　美術教育講座　　芸術学士

❶ 美術，専門分野：ガラス

❷ コーニング美術館　作品永久収蔵（1997年），ロードアイランドデザインスクールよりFaculty Development Grant（2001年），マサチユーセッツ美術大学よりFaculty Development Grant（2001年）

❸ G. A. S. ガラスアートソサイアティー，G. E. N. ガラス教育機関ネットワーク，アメリカンクラフトカウンシル　会員

❹ 造形基礎Ⅰ，Ⅱ（１年），造形基礎Ⅲ，Ⅳ（２年），ガラス実技Ⅰ，Ⅱ，造形研究Ⅰ，Ⅱ，造形材料学Ⅰ，Ⅱ（３年），造形研究Ⅲ，Ⅳ，ガラス実技Ⅲ，Ⅳ（４年），ガラス実技Ⅰ，Ⅱ（大学院）

愛知教育大学の美術，工芸分野において，学生が，卒業後も美術，工芸の専門家としてその分野で活躍し続けて挑戦していくよう真剣に取り組んでいきたいと考えます。私は，１年生～４年生，そして，大学院生を教えるにあたり，それぞれに段階を踏まえて教えることを考慮しています。ガラス工芸は，技術的に大変難しい素材であり，はじめての学生には，まず創造的なものづくりよりも技術面の向上を重視し，基礎的な感覚をやしない，世界中の様々なガラスの作品のスライドを見せることなどから，ガラスの可能性について知識を高めていきます。また，実際に塊のガラスや，砂に鋳込むといった熱いガラスを扱う制作を通して，それらに，慣れ親しみ楽しんで取り組むことが目的です。

２年目では，宙吹き技法に始まり，その練習，技術的発展に的を絞っていきます。課題を完成させるために，時に授業時間外もそれらに取り組むこともあります。最終的には，３つの基礎的な宙吹きガラス，パートドヴェール（鋳込みガラス），コールドワーク（ガラスの加工）の理解を深めます。

３年目は，更なる技術習得，そして学生それぞれが，興味ある分野を模索し，創造的な制作に重点を置き，独自の発展を深めるよう努めていきます。また幅広い技術の紹介と，創造的思考の発達を促すべく，一連の課題から制限することなく各々の特徴，技量をのばしていく指導をこころがけます。またそれぞれが，ガラスに関するスライドレクチャーを行うなど，プロフェッショナルとしての意識を養っていきます。

４年目では，さらに創造性を高めることに重点を置き，個々のリクエストに答え技術的デモンストレーションも進んだ高度なものになります。最終的には，独自の研究制作を追求し，熟練された技術を必要とします。また，プロフェッショナルな学習として今後どのように制作を続けていくか進むべき方向を模索する時期でもあります。研究生，院生も同じく，自分の方向性を提案し，さらに研究を深めるべく，各自の創造の源を追求するよう指導します。

❺ (1) 吹きガラスによる実用的なオブジェクト制作，(伝統的なローマングラスの形の研究)
(2) ホットワーク，又は，吹きガラスによる造形制作（建築物とガラスの融合の可能性）
(3) 吹きガラス，ミクストメディアによる彫刻作品の制作

1．東海の現代ガラス展　GLASS ART NOW　吹きガラスによる実用的ガラス作品の発表　瀬戸市新世紀工芸館（2005年）
2．日本のクラフト　手　もうひとつの生活　吹きガラスによる実用的ガラス作品の発表　リビングデザインセンターOZONE（2005年），クラフトマークとして選定される
3．個展　ギャルリーワッツ　東京　吹きガラスによる実用的ガラス作品の発表
4．グループ展　月日荘　名古屋　吹きガラスによる実用的ガラス作品の発表
5．グループ展　うつわ萬器　千葉　吹きガラスによる実用的ガラス作品の発表
6．彫刻作品　及び　伝統的ローマングラス技法と日本のテキスタイル取合作品発表，アラバマ大学　図書館（2005年引き続き）

私自身の研究では，いくつかの異なる分野に関心があります。技術的な面で，大物の制作，ガラスとガラスを組み立てていくことを考えています。特に植物と器との関係性に関心があり，特定の植物のための一連の器をデザイン予定です。

そして，オリジナルの微妙な色合いのガラスを使用した作品の研究をしたいと考えています。そこからシンプルなガラスの器の制作。アート，彫刻的な制作もあわせて進めていきたいと考えています。

ガラス溶解炉のガス効率，そして，学生の卒業後の可能性を考え，自宅でも使用できる小型のガラス溶解炉のデザイン，実際に築炉に取り組み独自の色ガラスの研究も始めました。

❻ 就職支援担当

G. A. S. オーストラリア　カンファレンス　パネリストとして参加
G. E. N. 総会　2005年　参加　東京ガラス国際学院
東京藝術大学にて　招待作家として実演
名古屋芸術大学にて　招待作家として実演
ピルチャックグラススクールにて制作指導アシスタント

井戸　真伸　Ido, Masanobu　講師　美術教育講座　芸術学士

❶ プロダクトデザイン

❷ 陶磁器デザインフォーラム　入賞　1992年
第 2 回土鍋デザインコンペティション　三重県知事賞　1995年
第 1 回日本茶茶器国際デザインコンペティション　奨励賞　1995年
国際デザインフェア　MIYAGI　審査員特別賞　1995年
世界炎博ストリートファニチャーデザインコンペティション　第 3 位　1996年
第 6 回テーブルウェア大賞展　最優秀賞　1996年
第 5 回国際陶磁器展美濃　デザイン部門　審査員特別賞　1998年
工芸都市高岡クラフトコンペティション　審査員特別賞　1998年
第 6 回国際陶磁器展美濃　デザイン部門　銅賞　2002年
The 3 rd World Ceramic Biennale 2005　金賞　2005年
第 7 回国際陶磁器展美濃　デザイン部門　グランプリ･金賞　2005年
第 3 回CCDOデザインアウォード　受賞　2005年

❸ 日本陶磁器デザイン協会　理事

❹ 総合演習Ⅰ（3年），総合演習Ⅱ（4年），デザインⅠⅡ（2年），デザイン論（3年）
プロダクト研究（3年），造形研究ⅠⅡ（3年），造形研究ⅢⅣ（4年），
プロダクトデザインⅠⅡ（3年），プロダクトデザインⅢⅣ（4年），
造形材料学ⅠⅡ（3年），芸術作品研究ⅠⅡ（4年），造形制作指導ⅠⅡ（4年）

❺ プロダクトデザインにおけるデジタルとアナログの関係
手で使うモノは手で考える良さがあります。アナログとしての手と，デジタルテクノロジーの，各々の利点を活かしたプロダクトデザインの研究を続けています。
International Design Year Book 2005 招待出品 （パリ2006年）

❻ コース代表

オオヤマ・エリナ・マルケッタ　Ooyama Elina Marketta　外国人教師　美術教育講座　　教育学士

❶ 美術工芸，染織

❷ ユザワヤ創作展　1987年　金賞

❸ （財）日本フィンランド協会　（財）クラフトセンター・ジャパン

❹ 造形基礎Ⅰ，Ⅱ（1年）・造形基礎Ⅲ，Ⅳ（2年）・ 染織実技Ⅰ，Ⅱ・ 造形材料学Ⅰ，Ⅱ・ 造形研究Ⅰ，Ⅱ・ 総合演習Ⅰ（3年）・ 染織実技Ⅲ，Ⅳ・造形研究Ⅲ，Ⅳ・芸術作品研究Ⅰ，Ⅱ・造形制作指導Ⅰ，Ⅱ・総合演習Ⅱ（4年）

知識と技術の習得と並びに実習も重視。例年藍染と貝紫染を行う。日本の伝統の本質を学び，現代と世界に通用する柔軟性ある教養と技術を目指す。
世界化の進展に対応するため織物手工芸の国，フィンランドとの交流を維持し，留学先の紹介と折衝。

よき教科書，上手な教え方，実物の参考作品の三点が揃って，内容ある教育が可能であり，そのために教科書として「Weaving from Finland」パート2の出版の準備を進める。

義務教育におけるFD教育には，染めとフェルトを使った実践的で効果的な感性教育を準備。学生の進路に配慮し，作家と教員志望の双方に柔軟に対応した授業を心がけている。

❺ 北欧の織物手工芸・フィンシープの作品・ピックアップ技法・間仕切りの研究

北欧の価値観「シンプル」は世界的に評価され，フィンランドでは国民のアイデンティティの重要な基盤と認識している。日本の上質な造形美の世界にもこの伝統が濃厚に存在する。

双方を知ることが，工芸分野に限らず極めて重要と考える。高度な工芸作品を創ることは，心身の鍛練となり，正しい躾の一部を形成できるはずである。

北欧の織技術は大型織機による広幅の布と多綜絖に特長がある。着尺に強い日本の技術と組み合わせ，衣装と住宅の布を研究し制作に努力する。及びウールとリネンの素材のより実際的な紹介と活用を心がける。

2005年6月　東京「ワコール銀座アートスペース」にて「リネンの愉しみ」展
2005年9月　東京「日本のクラフト・手・もうひとつの生活」に出品

❼ 2005年9月　愛知県小原村の愛知万博一国フレンドシップ事業に展示物産と書籍で協力

❽ 2005年11月　名古屋市丸善　フィンシープの作品紹介

保健体育

松井　利幸　Matsui, Toshiyuki　　教授　　保健体育講座　　体育学士

❶ 学校保健，体育実技（ハンドボール）

❸ 日本学校保健学会，東海学校保健学会，日本体育学会，日本発育発達学会，日本公衆衛生学会，全国大学ゴルフ研修会

❹ 学校保健Ⅱ（３年），ハンドボール（３年），スポーツⅠ（１年），スポーツⅡ（１年），主題科目（こころとからだ）（１年），学校保健方法特論（大学院）

学生の課外活動としてのハンドボール部男女の部長として，インターカレッジクラスの大会には参加指導している。本年度は男子女子部とも西日本インカレの出場権を獲得できず，全日本クラスの大会は出場できなかった。日常の指導は公務等でほとんどみていないのを反省している。また，他大学に比べて，部員数がきわめて少ないのが残念である。

❺ 現在の研究テーマは，学校保健活動及び発育発達であるが停滞している。

❻ 教育研究評議会評議員（教務企画委員会/共通科目専門委員会），保健体育講座講座代表

米田　吉孝　Yoneda, Yoshitaka　　教授　　保健体育講座　　体育学修士

❶ 運動学・バイオメカニックス・体育科教育学，柔道

❷ 西三河柔道協会賞　平成７年11月
愛知県体育協会体育功労賞　平成10年３月
愛知教育大学附属岡崎小学校創立100周年記念感謝状　平成13年11月
Honorary Member Muncie-Delaware Country of Commerce　平成８年３月
Honorary Citizenship City of Muncie　平成14年８月
Distinguished International Educator Award Ball State University　平成14年８月

❸ 日本体育学会，バイオメカニックス学会，日本体力医学会，日本武道学会，愛知教育大学・附属学校共同研究会，愛知教育大学体育学会

❹ スポーツ科目（１年），主題科目（３年），運動方法学演習Ⅰ（３年），体育科教育Ａ（３年），運動方法学演習Ⅱ（４年），総合演習Ⅱ（４年），体育実践教育特論（大学院）運動方法学（大学院），運動方法学演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

❺ 現在の研究テーマ：小学校体育科授業への視聴覚機器の応用
論文：免許法改訂後に教員養成大学で学ぶ学生の意識調査の報告，－体育授業における指導場面での不安要因について－，日本体育学会体育哲学専門部会誌　2006/１

❻ 図書館長
大学改革，財務，教務企画，情報，図書などの各種委員会委員

❼ 全日本柔道連盟総務委員会委員，愛知県柔道連盟理事長，愛知県体育協会理事，愛知県教科用指定図書審議会会長，愛知県運動部活動等外部指導者調査研究協力者会議座長，岡崎市教育委員会OC委員会会長，第57回全国連合小学校長会研究協議会研究協議協力者，三河教育研究会体育部会助言者，愛知教育大学附属岡崎中学校指導助言

市野　聖治　Ichino, Shoji　　教授　保健体育講座　経済学修士

❶ 体育・スポーツ経営学，野外運動（スキー）

❷ Honorary Citizenship City of Muncie State of Indiana 2000.9.20
International Educator Award Ball State University 2002.8.29
体育功労賞　愛知県体育協会　平成12年３月

❸ 日本体育学会，東海体育学会，日本体育・スポーツ経営学会（理事），日本スキー学会，愛知教育大学体育学会（会長），全日本スキー連盟イグザミナー委員会（委員長）

❹ 体育経営学，スキー，体育科教育，スポーツ（学部），体育経営学特論，体育経営学演習，体育科教育特論（大学院）
　演繹的思考の重視，体育・スポーツを公共サービスと市場メカニズムの視点から考察

❺ スポーツチームのマネジメント
（複雑性を活かした多様性，相互作用，淘汰のメカニズムの視点から）
カービングターンの技術
（重力軸と運動軸の視点から）
著書：SAJ教育本部オフィシャルブック2006年度版（共著）スキージャーナル社　2005年10月
論文：「運動会における徒競走の検討―『不平等の再検討』の立場からー」愛知教育大学保健体育講座研究紀要 Vol.30 2006/03

❻ 保健体育講座研究紀要編集代表者
教育実地研究委員会（副委員長）

❼ 愛知教育大学附属名古屋小学校研究協議会指導助言
御津町教育委員会「体力づくり」講師
愛知県体育研究会助言者
愛知県スキー連盟理事
全日本スキー連盟　スキー大学「スキー技術と指導」講師
全日本スキー技術選手権大会コーデイネーター
International Ski Congress 日本代表理事

野々宮　徹　Nonomiya, Toru　　教授　保健体育講座　体育学修士

❶ 体育学
専門分野：体育史
関連分野：スポーツ史

❸ 日本体育学会，スポーツ史学会，日本レジャー・レクリエーション学会，国際体育スポーツ史学会，スウェーデン・スポーツ史学会，第19回スポーツ史学会大会実行委員会（委員・シンポジウム司会者）

❹ 社会科学入門（１年），生涯スポーツ概論（１年），レジャー・レクリエーション概論（１年），健康体操（２年），体育科教育（３年），スポーツ史（２・３年），スポーツ史演習Ⅰ（３年），スポーツ史演習Ⅱ（４年），総合演習Ⅱ（４年），体育史特論Ⅰ，Ⅱ（大学院），体育史演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）
　体育科教育の授業を初めて担当し，次のような課題に向け努力の必要性を感じた。本領域の指導方法に関する体育科研究の授業担当は15年余経験したが，実技主体のこの領域の分担は小学校体育科全体の約５分の１である。これに対し体育科教育は，現行指導

要領では 9 領域からなっている。教育実習を前にした受講者に少なくともこれら全領域について「授業づくり」のイメージをどれだけ確かなものとすることができるかが問われる授業であった。そこで，体育の「授業づくりを考える」をサブテーマに，受講者が，領域の特性を理解し，どれだけ実践のイメージを形づくることができるかをポイントに取り組んだ。毎時，より具体的な資料を用意し説明し，その後グループでのディスカッションで課題や懸案事項を出してもらい，情報交換し，足りないところは次時までに準備し補足するという方法をとった。授業アンケート結果では，授業が淡々と一方的に進むという批判も出た。半期 2 単位の授業に収まりきらない内容を提示したことを反省している。しかし，提示内容はけして十分なものではなく，授業時間の少なさを痛感した。FDの努力とともに，現状では，教科研究の授業と教科教育の授業をより関係づけて指導する等，授業運営面でもさらなる工夫・検討の必要性を感じている。

❺ （1）障害者のスポーツに関する研究：19回を数えるスポーツ史学会として，これまで障害者のスポーツについて取り組んだことはなかった。そこで，当地域で活躍するスポーツ社会学や方法学の研究者らを交えて研究会を組織し，その成果を持ってシンポジウムを開催し，今後の課題について論議を深めた。次回学会大会でも身体論に関するテーマの中で，継続して取り組まれることになっている。

（2）地域におけるスポーツの振興及びクラブの育成に関する実践と研究：各種の委員会等に参加し，生活に根を下ろしたスポーツライフの構築に向けて取り組んだ。地域における安全管理を盛り込んだクラブ運営に対するさらなる提案に努めていきたい。

・「障害者スポーツのこれまでとこれからを考える」　スポーツ史学会第19回大会発表抄録集　2005

・「運動の苦手な子どもにも楽しくできるスポーツは？」　みんなのスポーツ　第27巻 9 号　日本体育社　2005

❻ 大学改革推進委員会第三部会教育課程編成WG委員会外協力者，共通科目専門員会委員，大学院入試部会委員

❼ 愛知県スポーツ振興審議会委員，愛知県広域スポーツセンター企画運営委員会委員，愛知県体育協会普及・広報委員会委員，愛知県体育協会総合型地域スポーツクラブ育成委員会委員，愛知県レクリエーション協会理事，日本レクリエーション協会あそびの城づくり運営協議会座長

・「愛・地球博」パートナーシップ事業：国際エコロベース大会（大府市）大会顧問　2005

・スポーツクラブアドバイザー　愛知県体育協会　2005

村松　常司　Muramatsu, Tsuneji　　教授　　保健体育講座　　保健学博士

❶ 衛生学
専門分野：衛生学
関連分野：学校保健学，公衆衛生学

❷ 第40回全国大学保健研究集会優秀演題賞（2002年10月）

❸ 日本学校保健学会（理事），日本教育医学会（評議員），東海学校保健学会（理事），

日本スポーツ整復療法学会（理事），日本公衆衛生学会，日本衛生学会

❹ 衛生学（２年），身体科学演習（３年），衛生公衆衛生学実習（３年），衛生学研究Ⅰ（３年），健康情報処理（４年），衛生学研究Ⅱ（４年），保健科教育特論（大学院），保健科教育演習（大学院），学校保健活動特論（大学院），環境と健康教育特論（大学院）

❺ 研究テーマ：

・青少年の攻撃受動性（いじめられやすさ）と社会的スキル，セルフエスティームの関連性の追究

研究論文：

（１）大学生の清潔行動と生活習慣に関する研究（共著）
スポーツ整復療法研究， 6 (3)，95-102, 2005

（２）中学生の日常ストレスとセルフエスティームに関する研究（共著）
愛知教育大学研究報告，第54輯，167-174, 2005

（３）高校生の対人ストレスイベント，対処行動とセルフエスティーム，社会的スキルに関する研究（共著）　東海学校保健研究，29 (1)，17-32, 2005

（４）運動習慣の高校生のストレス対処に及ぼす影響（共著）
東海学校保健研究，29 (1)，69-76，2005

（５）高校生の日常ストレス源・ストレス対処とセルフエスティームとの関係（共著）
スポーツ整復療法研究，7 (1)，25-34, 2005

（６）大学生のゆとり感とユーモア態度に関する研究（共著）
愛知教育大学保健管理センター紀要（Iris Health），Vol.4, 11-20, 2005

（７）高校生の大学生の清潔行動と生活習慣に関する研究（共著）
愛知教育大学保健管理センター紀要（Iris Health），Vol.4, 21-30, 2005

口頭発表：

（１）高校生の日常ストレス源・ストレス対処とセルフエスティームとの関係（第48回東海学校保健学会）

（２）高校生の生活習慣とストレス対処及び攻撃受動性について（第48回東海学校保健学会）

（３）高校生のセルフエスティームと社会的スキルからみた攻撃受動性に関する研究（第52回日本学校保健学会）

（４）女子柔道選手の日常生活習慣とセルフエスティームに関する研究（第38回日本武道学会）

❻ 保健管理センター長（2001年～2005年），評議員，教員人事委員会委員，学生支援委員会委員

❼・愛知県教育委員会健康推進学校審査会委員（1994年～現在）
・一色町の教育を考える懇談会委員（2004年～2005年）
・日本学校保健学会編集委員（2004年～現在）
・東海学校保健学会編集委員長（2001年～現在）
・全日本柔道連盟医科学委員会副委員長（2002年～現在）
・日本オリンピック委員会強化スタッフ（柔道）（2005年）
・一色町小中学校現職教育研修会講演（2005年８月30日）「セルフエスティームからの健康支援」
・豊橋市立芦原小学校健康教育実践報告会指導助言（2005年11月２日）
・愛知県保健教育研究会高等学校部会研究大会講演（2005年12月６日）「高校生のセルフエスティームと社会的スキルからみた攻撃受動性」

合屋十四秋　Goya, Toshiaki　　教授　　保健体育講座　　体育学修士

❶ バイオメカニクス，水泳，野外運動学

❷ バイオメカニクス学会奨励賞：共同研究（1992）

❸ 日本体育学会，日本バイオメカニクス学会，International Society of Biomechanics in Sports，日本水泳水中運動学会，日本スポーツ方法学会，トレーニング科学会，東海体育学会（学術研究交流委員）水泳科学研究会

❹ 学部（運動学，水泳，野外活動実習，体育科研究，運動学演習，総合演習，スポーツ科目），大学院（身体運動学特論，身体運動実践演習，特別研究）

実践的教育活動として，昨年に続き，フレンドシップ事業は小学校 3 校（名古屋市立東山小学校，刈谷市立富士松北小学校，附属岡崎小学校）を対象とした児童の夏休み水泳初心者指導を現職教員の協力の下，実施し展開することができた。

教科専門授科目（水泳，野外生活実習）及びフレンドシップ事業の授業記録を，画像，ムービー，感想文分析結果などをCDに焼き付け，参加学生や非常勤講師，専任教員などに配布し，その内容やねらいの理解を深めた。今後，継続的に保存し，教育現場での活用とフィードバックを期待している。

フレンドシップ事業では，過去 3 年間の成果報告書を作成し，関係諸機関に配布した。本年度は，１校追加（附属岡崎小学校）し，連携，協力の模索・検討を行った。

❺ 現在の研究テーマ：これまでの取り組みは，「けのび動作の認識の度合いとパフォーマンスが一体どのようにマッチングしていくのか否か」を大学生を対象に横断的かつ縦断的に追跡・検証してきた．対象とした被検者が大学生のみであったので，１）主としてAging，すなわち小学生，中学生及び高校生までをカバーした水泳基本動作と力発揮の様相を明らかにすることと，２）果たしてスポーツ場面における感覚情報は実際の動きとマッチングするのだろうか？を検討している。

業績リスト：

合屋十四秋，野村照夫，杉浦加枝子（2005）女子水泳選手におけるクロール泳の速度出力調整と動作との関係，スポーツ方法学研究，18：75-83.

合屋十四秋，杉浦加枝子，松井敦典，野村照夫，高木英樹（2005）水泳基本動作「けのび」の横断的および縦断的追跡研究，第18回日本バイオメカニクス学会大会論集，194-195.

合屋十四秋（2005）背泳ぎの動作様式の発達とその評価，第56回日本体育学会，筑波大学，つくば.

小山田早織，合屋十四秋（2005）大学生男子トップスイマーのけのび動作と力発揮―泳能力別による横断的検討を中心として―愛知教育大学保健体育講座研究紀要29：1-6.

柱谷彰則，合屋十四秋（2005）水球ゲーム時のカウンターアタック発生要因～日本高校総体及び日本選手権のゲーム分析から～愛知教育大学保健体育講座研究紀要29：7 -12.

平成17年度フレンドシップ事業（代表者）（820千円）

平成17年度地域貢献事業（代表者）（300千円）

❻ 生活スポーツ系　体育専攻代表，評価委員会委員，認証評価専門委員会委員

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❼ （学外の審議会等）日本水泳水中運動学会会長，刈谷市水泳連盟副会長
（研究会等）東海体育学会学術研究交流委員会，日本発育発達学会情報推進委員

小笠原サチ子　Ogasawara, Sachiko　教授　保健体育講座　修士（教育学）

❶ 舞踊，体育方法学
❸ 教育舞踊日本研究所，日本体育学会
❹ 体育科研究ＢⅡ（舞踊），体育科研究ＢⅠ（表現），こころとからだセミナー，スポーツ科目，運動方法学演習ⅠⅡ，総合演習Ⅱ，運動表現学演習ⅠⅡ，運動表現学特論ⅠⅡ
❺ 舞踊カリキュラムについて
舞踊ソロ作品発表
「田植え」教育舞踊日本研究所　2005.5
「白蓮」教育舞踊日本研究所　2005.12
❻ 保健体育　大学院専攻代表

吉田　正　Yoshida, Tadashi　教授　保健体育講座　体育学修士

❶ 体育科教育学，スポーツ医学，学校保健，バレーボール
❸ 日本教科教育学会，日本体育学会，日本教育医学会，学校保健学会，
バレーボール学会，東海体育学会，東海学校保健学会
❹ 体育科教育Ａ（２年），体育科研究Ａ（２年），こころとからだ：健康と環境（２年），スポーツⅢ：ゴルフ集中（２年），スポーツⅡ：スキー集中（１年），バレーボール（４年），総合演習Ⅱ（４年），運動方法学演習Ⅰ･Ⅱ（３．４年）
体育科教育原理Ⅰ・Ⅱ（大学院），体育科教育原理演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）
❺ 研究テーマ：
最近の主たる研究の一つは運動習慣と体の健康に関連した「スポーツ活動と骨密度」と生活習慣と心の健康の関連した「ストレス対処」についてである。また，第二として，教員養成大学・学部でのカリキュラムの改善についての研究に行っている。
スポーツ現場の実践的活動としては，ボールゲーム系の指導として，試合中の「視覚情報入力の洗練化」が大きな課題であり，東海選抜チーム及び本学女子バレーボールチームに対して選手のパフォーマンスの向上を目指し指導助言を行っている。
研究論文：
○中学生の日常ストレスとセルフエスティームに関する研究　愛知教育大学研究報告　第54輯　2005
○運動習慣が高校生のストレス対処に及ぼす影響　東海学校保健29（1）2005
（口頭発表）
○免許法改訂後に教員養成大学で学ぶ学生の意識調査の報告
―卒業後，実際の指導場面での不安要因について―
於：日本体育学会第56回大会　体育哲学専門分科会シンポジュームＡ
❻ 愛知教育大学附属高等学校長
❼ 全日本大学バレーボール連盟　運営理事
東海地区大学バレーボール連盟　副理事長
愛知教育大学バレーボール部　部長及び監督

鬼頭　伸和　Kito, Nobukazu　　教授　　保健体育講座　　体育学修士

❶ 体育学
専門分野：運動生理学（理論），サッカー（実技），テニス（実技）
関連分野：バイオメカニクス（理論）

❸ 日本体育学会，日本運動生理学会（理事），日本バイオメカニクス学会，日本フットボール学会，日本体力医学会

❹ 生理学（運動生理学を含む）（１年），スポーツⅠ（サッカー）（１年），こころとからだ展開Ⅰ（２年），体育科研究BⅠ（２，３年），生理学演習Ⅰ（３年），　生理学演習Ⅱ（４年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），テニス（４年），運動生理学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院），運動生理学演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

スポーツ科目，教科研究科目，教科専門科目で理論と実技を主にして教育活動をしている。教科専門科目の理論は，体育の授業やスポーツなどの身体運動が，「からだ」に及ぼす一過性の変化と短･長期的な身体適応，発育発達とスポーツトレーニング，スポーツ技術の上達などついて，運動を調節・発現・持続する機能を中心にして講義をしている。それらの機能は目に見えない現象なので，その内容を深く理解させるためにITを利用して，教育効果を高める工夫をしている。教科研究科目は，小学校体育で行われる身体運動の基礎的技能を身につけ，指導方法を研究することを目的として，ボール運動教材を通じて実践教育をしている。学生と一緒になって教材研究をして，楽しいボール運動の指導方法の工夫と開発に心がけている。実技科目は，いい授業環境を確保する工夫をして実施している。しかし，老朽化によるサッカー場やテニスコートの劣化やスポーツ科目との同時開講などで，雨天時に満足な指導ができる施設の確保ができない課題が積み残しになっている。

❺ 現在の研究テーマは，a）間欠的高強度持久能力と技術・体力の関係，b）視覚入力情報とスポーツの基本動作，c）小学生を対象にしたミニゲーム練習のトレーニング効果の３つである。今後は，小学生（U－12）を対象にしたミニゲーム練習が技術・体力面でのトレーニング効果について研究活動を継続していく計画である。

１）U-12におけるミニゲーム練習（４対4）のトレーニング効果，第３回日本フットボール学会抄録集，42

❻ 学部入学試験部会

❼ 全日本大学サッカー連盟評議員，愛知県サッカー協会技術委員会指導部会長
東海大学サッカー連盟副委員長，東海地区大学体育連合理事
日本サッカー協会公認C級コーチ養成講習会講師，日本サッカー協会公認D級コーチ養成講習会講師，AIFA審判員養成講習会講師，天白スポーツセンタースポーツ実践セミナー講師

春日　規克　Kasuga, Norikatsu　　教授　　保健体育講座　　教育学修士

❶ 生理学，運動生理学

❸ 日本体力医学会（評議員），日本生理学会，日本運動生理学会，東海体育学会，American College of Sports Medicine, 日本キャンプ協会

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❹ ヒトの生理学を柱とする授業展開を主に担当している。身体科学の基礎となる解剖生理学を１年生対象に講義している。２年生には運動生理学を，2005年度をかけて改訂したテキスト「運動生理学基礎と発展」（フリースペース）を用いて，講義している。このテキスト改訂に際しては，図の構成や記述法を整え，学生がより理解しやすいなどの工夫を１年以上準備期間と丸一年の時間をかけ作業を行い，初版から大幅修正し完成した。３・４年の学生対象に運動生理学演習として実験を含む指導により，運動ストレスとその際の生体応答を指導している。これらの中では，将来の体育教師やスポーツ指導者となる学生にとって必要と考えられる，体の必要な知識を中心に講義し，さらに具体的事象を教室内で見せ経験させるよう勤めている。実習もその設備も無い現状で効率よく理解を深める手段を常に模索している。

実技では野外教育を担当している。野外実技として冬の野外生活（野外活動I）と夏の野外生活（野外活動II）を集中授業により実技指導し，また，大学において野外活動教育論により講義を行っている。単なる野外での炊飯やファイヤーに終わらず，野外での生活やアウトドアスポーツを通して，自然の意義との関わり，仲間との関わり，「創意工夫による快適な生活づくり」をテーマとした野外生活による体験的学習指導を行っている。

❺ 筋収縮はダイナミックな筋細胞内の構造変化とともに自らの細胞に機械的ストレスを与え，時には損傷を引き起こす。特に過度の筋収縮が連続した場合には，連結する骨に対してもひずみを引き起こす。最近の研究テーマとして，発育期の筋と骨の形態・構造的変化を調べると共に，伸張性収縮という最も筋に力学的負荷のかかる運動負荷を与えた際の筋の形態，機能特性，骨の発育層である骨端成長板内細胞変化を動物実験により確かめている。発育期の過度な筋活動は自らの筋細胞に対し損傷を引き起こすだけでなく，骨の発育に対しても好まざる影響を与えることが示され，思春期と言われる形態発育急速期における運動指導には，十分な配慮が必要であることが示唆されている。

運動性筋損傷から回復後に見られる極細筋線維の機能特性，

－石道峰典，平野朋枝，春日規克，体力科学，54（３），269-278,（2005）

❻ 実験動物委員長

❼ 厚生労働省・健康運動指導師講習会講師，文部科学省・社会体育指導者講習会講師

筒井清次郎　Tsutsui, Seijiro　　教授　　保健体育講座　　博士（理学）

❶ 体育心理学，陸上競技

❸ 国際スポーツ心理学会，北アメリカ大陸スポーツ心理学会，日本体育学会，日本スポーツ心理学会，東海体育学会，運動学習研究会

❹ 体育心理学（２年），陸上運動（２年），野外生活実習（２年），体育科研究Ⅰ（１，２年），体育心理学演習Ⅰ（３年），体育心理学演習Ⅱ（４年），総合演習Ⅱ（４年），こころとからだ展開Ⅱ（２年），　スポーツⅢ（２年）

体育心理学演習Ⅰ，Ⅱ（大学院），特別研究Ⅱ（大学院）

教育活動の問題点：

・体育心理学　大まかにはわかったつもりではいるものの,実際にはよくわからないままに済ませていることが少なくない。理解しているつもりの知識を他の学生に説明させてみると，相手に上手く伝えられないことが多く，また，質問に的確に答えられないことが多い。そのことを実感させるために，毎回の授業の最初に，先回の範囲からテストを行った。

・陸上運動　教員採用試験に出題されることが多い，ハードル走の基礎的技能が不十分なものが少なくない。それらの学生を対象に，昨年度は 4 回の補講を実施した。

教育に対する抱負：

理解したつもりでいたが本当には理解できていなかったと学生自身が実感できるような場を意図的に設定し，教師になる前に，理解するということの意味を教えたい。

❺ 研究テーマ：

「運動技能習得における動きの変容と心の変容が相互に及ぼす影響」

科学研究費成果報告書「運動技能習得における動きの変容と心の変容が相互に及ぼす影響」，2006年 3 月

論文発表：

Effective training schedule for body control toward a rolling ball in Kindergartners, Journal of Sport & Exercise Psychology, 27 (supplement), S153

口頭発表：

運動部での技術指導，日本スポーツ心理学会シンポジウム，2005年 9 月，早稲田大学

ポスター発表：

Effective training schedule for body control toward a rolling ball in Kindergartners，北米大陸スポーツ心理学会，アメリカ, St. Pete's Beach, 2005年 6 月

ポスター発表：

The relationship between goal Orientation and consciousness about sports behavior，国際スポーツ心理学会，オーストラリア，シドニー，2005年 8 月

科学研究費補助金基盤研究C（代表），50万円，「運動技能習得における動きの変容と心の変容が相互に及ぼす影響」

❼ 健康運動指導士講習会講師

刈谷市スポーツリーダー養成講座講師

附属岡崎小学校研究協議会体育科助言者

東海学生陸上競技連盟評議員

東海学生陸上競技連盟強化委員

愛知陸上競技協会西三河支部理事

International Journal of Health and Sports Science（日本体育学会）査読

体育学研究（日本体育学会）査読 2 本

スポーツ心理学研究（日本スポーツ心理学会）査読

鈴木　英樹　Suzuki, Hideki　　助教授　保健体育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：運動生理学

関連分野：スポーツ栄養学

❸ 日本生理学会，日本体力医学会，日本体育学会，日本運動生理学会，日本健康教育学会，American College of Sports Medicine

❹ 野外活動実習Ⅱ（ 2 年），卒業論文指導（ 4 年），修士論文指導（大学院）

2005年 3 月25日から2006年 1 月 9 日まで滞米中だったため，授業担当は帰国後の実技科目の集中授業だけであった。また，その間の論文指導についてはインターネットを利

用して行い，帰国後は集中的に時間をとり指導した。

❺・現在の研究テーマ１：持久性運動が骨格筋の代謝特性に及ぼす影響に関する研究，
　持久性走運動を実施した場合の骨格筋で起こる適応変化を組織化学的・代謝的特性について筋線維レベルで解明する。（現在，論文として投稿中）

・現在の研究テーマ２：活動性と健康に関する研究，
　幼児から大学生に至るまで，その活動性と心身の健康との関連についてフィールドワークである。

・業績リスト：
＜論文＞中学生におけるメディア受容能力とリスク行動との関係についての予備的検討，健康心理学研究，18巻，2005年
＜口頭発表＞ラット腓腹筋内側頭における異なる部位での適応変化に関する研究，第60回日本体力医学会，2005年

・学術・研究交流等：海外先進教育研究実践支援プログラムの一環として，2005年３月25日から2006年１月９日まで米国に滞在し，UCLA（University of California, Los Angeles校）を研究拠点とし，米国内の大学や研究機関を訪ね健康教育に関する調査研究を行ってきた。

❼ 学校アドバイザー：豊田市立豊南中学校，豊田市立平和小学校，豊田市立井上小学校

森　　勇示　Mori, Yuji　　助教授　保健体育講座　　修士（教育学）

❶ 体育科教育学　教師教育学

❸ 日本体育学会，日本体育科教育学会，日本スポーツ教育学会，日本体育・スポーツ哲学会，日本教師教育学会

❹ 保健体育科教育法（３年，４年），体育科教育法（３年），保健体育科教育演習（３年，４年），総合演習（３年，４年），スポーツ（１年，２年），共通科目「心とからだセミナー」
体育科授業研究（大学院），体育科教育特論（大学院）

・教育に対する抱負：
「大学で学んだことは少しも役に立たない」とよく現職教員から聞く。この批判に応える教育活動を実践したい。

❺・現在の研究テーマ：
体育科教員の力量形成に関する研究

・業績（論文）「教員養成における教育委員会と大学の連携－愛知教育大学における保健体育科の『10年経験者研修』－」（愛知教育大学保健体育講座研究紀要，30，2005年）
著書：
「遊びチューター制度を活用した子どもの活動介入」（共著）（Book House HD，2005年）
学会発表：
「教師の実践的認識と授業への関心－ハーバーマスの認識関心に依拠して－」（日本体育学会，筑波大，2005年）

❻ 高大連携特別選抜入試委員
市民参加型教員養成コーディネーター

❼ 刈谷市立富士松北小学校実技指導
刈谷市立富士松中学校実技指導
刈谷市立富士松東小学校実技指導

一宮市大和東小学校授業研究会助言
豊橋市立芦原小学校授業研究会助言
愛知県三河教育研究会助言
愛知県10年経験者教員研修講師
岡崎市教育研究会助言
名古屋市小学校授業研究会助言
豊橋市小学校体育連盟教育講演会講師

三原　幹生　Mihara, Mikio　　助教授　保健体育講座　　修士（体育学）

❶ 体育・スポーツ原論，器械運動
❸ 日本体育学会，体育哲学専門分科会（監事），東海体育学会，日本体育・スポーツ哲学会，
❹ 体育原論（２年），体育原論演習（３年），野外活動実習（２年,３年），体育科研究（１年），スポーツ科目（２年），こころとからだ入門（１年）
　授業では，体育（身体教育）とスポーツを同じ意味内容を持つものとして安易に理解するのではなく，身体教育材の一つとしてのスポーツ（運動文化）ということを意識させることで，学校教育現場における体育の授業のあり方を考え，実践していくことができるような授業を目指している。また，授業評価にかかわって，「学生とのコミュニケーションの不足」については，一層の改善努力が必要と痛感している。
❺・現在の研究テーマ：
古代ギリシアの体育論（特にプラトンの教育論の観点から）
・科学研究費補助金：
「現代社会におけるスポーツの諸問題と多元的価値に関する研究」，基盤研究（B），研究分担者
❼ 名古屋市立名東高等学校：「大学・学部・学科紹介」講師

高橋　裕子　Takahashi, Yuko　　助教授　保健体育講座　　教育学修士

❶ 学校保健
❸ 日本学校保健学会，日本教育保健学会（理事），日本公衆衛生学会，日本教育学会，教育史学会，生徒指導学会，武道学会，東海学校保健学会（幹事）　他
❹ 【学部】
学校保健Ⅰ，学校保健演習Ⅰ，学校保健演習Ⅱ，総合演習Ⅱ，専門教育入門A，野外活動水泳，剣道，スポーツⅠ～Ⅲ，人間と生活，人間と性　入門
【大学院】
学校保健活動特論Ⅱ　昼コース・夜間コース，学校保健実践研究Ⅰ，学校保健実践研究Ⅱ
・学生指導
卒業論文指導学生の学会参加
修士論文指導院生の学会参加，学会発表の学会誌投稿，学会共同研究における研究従事

担任，剣道の課外指導（留学生など）

❺ 【論文】

1．野村和雄，猪狩恵美子，柿沼いずみ，数見隆生，河田史宝，佐藤理，宍戸洲美，鈴木裕子，高橋裕子，中村富美江，藤田和也，山本浩子，渡邉一博
「日本教育保健学会共同研究「通常の学校で学ぶ病気や障害のある子どものへの支援に関する研究」中間報告」日本教育保健学会年報 第13号2005

2．渡邊貢次，高橋裕子，森田一三，坪井信二，中垣晴男，榊原康人
「男女大学生にみる医療10科に対する「痛み」，「大切さ」および「身近さ」イメージについての一考察」愛知教育大学研究報告 第55輯（教育科学編）2006

【学会発表】

1．高橋「学校衛生主事会議に関する研究（1）」第48回東海学校保健学会2005. 9 中京大学

2．高橋「学校衛生主事会議に関する研究（2）」第52回日本学校保健学会2005. 10仙台国際センタ

3．高橋「学校衛生主事会議に関する研究（3）」第 3 回教育保健学会2006. 3 徳島大学

❻ 共通科目専門委員（スポーツ科目），改善部会員
共通科目コーデイネータ（スポーツ科目）
保健体育講座内の教務部会員（主にスポーツ科目の運営・非常勤講師対応）

❼ 日本教育保健学会理事，学会の会報「教育保健」の企画・編集・発行
フレンドシップ事業（県内小学校における本学学生の水泳指導，代表 合屋十四秋）

杉浦　恭　Sugiura, Takashi　助教授　保健体育講座　博士（教育学）

❶ 専門分野：教育社会学
関連分野：余暇教育学

❸ 日本教育社会学会，日本レジャー･レクリエーション学会，日蘭学会，日本スポーツ社会学会

❹ 生涯教育概論Ⅰ（1年），こころとからだ入門（1年），スポーツ科目（1年），現代余暇論（2年），生涯学習論演習（3年），レクリエーションスポーツ（3年），総合演習Ⅰ（3年），余暇生活論演習Ⅰ（3年），余暇生活論演習Ⅱ（4年），遊戯特論（大学院），遊戯論演習Ⅰ（大学院），遊戯論演習Ⅱ（大学院）

学部の授業は，講義，演習，実習を担当している。講義については，相互の関連づけを考え，上級学年に進むにつれて，より発展した内容になるよう心がけている。

いずれの講義においても，余暇における生きがいの問題を視野に入れている。一貫していることは，遊びを通して，いかに余暇を有意義に過ごすことができるかである。

これまでの授業は，教員からの一方的な知識の伝達になりやすかったため，最近は，講義の中でディスカッションの時間を設けたり，学生に課題を与えて発表する時間をつくる工夫をしている。

今後は，学生が積極的に参加できる授業をどう創るか，そして，現代社会における余暇生活の意義を，生涯学習との関わりから説いてゆきたい。

❺ (1) ヨハン・ホイジンガの遊戯文化論に関する研究
(2) オランダ社会の近代化に関する研究

1．オランダ社会の近代化とヨハン・ホイジンガの遊戯文化論
レジャー・レクリエーション研究第55号，2005年12月

２．ヨハン・ホイジンガの芸術観に関する一考察
愛知教育大学研究報告，第55輯，2006年３月

❻ 学部入学試験部会委員，就職委員会委員

❼ 愛知県児童館連絡協議会児童厚生員研修会　講師（2005年11月２,４,９日）

上原三十三　Uehara, Satomi　助教授　保健体育講座　体育学修士

❶ 器械運動指導論，スポーツ運動学，体育科教育学

❸ 日本体育学会，日本体操競技･器械運動学会，日本スポーツ運動学会，日本体育科教育学会，日本スポーツ方法学会，

❹ 体育実践教育特論Ⅲ（大学院），体育実践演習Ⅰ，Ⅱ（大学院），体育科教育Ａ（２年），体育科研究ＡⅠ（１年），体育科研究ＡⅡ（１年），総合演習Ⅱ（４年），スポーツⅡ：スキー（１年），スポーツⅢ：器械運動（２年），スポーツⅢ：ゴルフ（２年），こころとからだ展開（２年），情報教育入門Ⅱ（１年），保健体育科教育演習Ⅰ（３年），保健体育科教育演習Ⅱ（４年）

実技科目では，受講者が一定の技能を確実に身につけることと，キネステーゼを意識化できることをめざして指導している。演習科目では新しい知見を提供できるようさらに研究を進める。講義科目では，概念的な知識伝達の授業になっている傾向があるので，私自身が学習内容の理解をさらに深めると共に，教授法の改善に努めたい。

❺ （１）器械運動の学習指導について：
学習者に動き方をできるようにさせる指導実践を積み重ね，学習者の動きの意味構造を読み取る能力を磨いている。
（２）組なわとびの意味構造分析と伝承方法について：
これまでのなわとび指導の中間報告として「組なわとび・長なわとび演技事例集」を映像DVDにまとめ，県内の一部教員に配布した。

著書：
・CD-ROM版体育授業資料集（共著），ニチブン，2006/３
論文：
・小学生における走幅跳の跳躍距離とバリスティックな跳躍運動能力との関係（共著），愛知教育大学保健体育講座紀要　第30号，2006/３
発表：
・「組なわとびの構造体系について」，第３回動きの研究会，信州大学，2005/７

❻ 時間割編成専門委員会　委員

❼・東海北陸学生体操連盟　副会長
・愛知県体操協会審判部　委員
・岡崎市教育研究大会･中学校体育部会　指導助言，岡崎市教育委員会，2005/９
・愛知県教員組合研究集会･体育部会　指導助言，愛知県教職員組合，2005/10
・学校保健委員会　講師「親子でできる楽しい運動」，一宮市立富士小学校，2006/２
・一宮市小中学校体育研究会　講師「器械運動の学習における“つまずき”を考える」，一宮市小中学校体育研究会，2006/２

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

寺本　圭輔　Teramoto, Keisuke　　講師　　保健体育講座　　人間環境学修士

❶ 学校保健，身体組成学，運動生理学
❸ 日本発育発達学会，日本学校保健学会，日本肥満学会，日本生理人類学会，日本水泳・水中運動学会
❹ 学部：スポーツ医学，体力測定評価論，運動処方実習，総合演習Ⅰ，水泳，体育科研究AI，こころとからだ（健康と環境），大学院：健康管理実践論
❺ 研究テーマ：「小児期おける身体組成学的研究」
Keywords：小児期，身体組成，体脂肪分布，エネルギー代謝
業績リスト
論文：
Differential Perceived Exertion Measured Using a New Visual Analogue Scale during Pedaling and Running. J Physiol Anthropol, 25(2): 171-177, 2006.3
発表：
小児機におけるBMIの20年間の動向とその特徴。第4回日本発育発達学会，北海道教育大学，2006. 3
作品実技：
第60回国民体育大会夏季大会水泳競技成年男子30歳以上50m平泳ぎ8位。岡山，2005. 9
❻ 時間割編成専門委員会
❼ 小牧市公認スポーツ指導員養成講座講師，安城市スポーツ指導者講習会講師，愛知県児童館職員研修会講師，刈谷市水泳連盟理事，NPO法人げんき理事，ゆりかご保育園健康管理指導者

木越　清信　Kigoshi, Kiyonobu　　助手　　保健体育講座　博士（体育科学）

❶ トレーニング・コーチング論，陸上競技コーチ論
❷ 2005年日本陸上競技選手権大会　棒高跳　5位（5 m10）
❸ 日本体育学会，日本体力医学会，日本バイオメカニクス学会，陸上競技学会
❹・担当授業科目：
コーチ学，運動方法学演習，陸上運動，体育科研究（陸上運動）
❺ Effects of knee extensor muscle group fatigue on lower limb joints torques during jumping, 体力科学，now printing.
運動における構えに関する指導の意義，陸上競技研究，No. 63, 2005.
文部科学省科学研究費補助金，走幅跳の技能習得を目指した下位教材の開発，
500,000円（若手研究B，代表）
❼ 刈谷市立富士松北小学校における体育授業に関する助言を行った。

福ヶ迫善彦　Fukugasako, Yoshihiko　助手　　保健体育講座　　体育学修士

❶ 体育科教育学
❸ 体育授業研究会，スポーツ教育学会，日本体育学会，日本体育科教育学会，日本体育・スポーツ政策学会，日本教育学会，日本グラウンド・ゴルフ協会（指導者育成委員）
❹ 担当授業科目：
体育科教育A（2・3年），スポーツ（フラッグフットボール）

❺ 研究テーマ：
・体育授業のマネジメントルーチンに関する研究
・体育教師教育に関する研究
・バレーボール教材に関する研究
主な論文：
・小学校体育授業における教師のマネジメント方略に関する検討－特に，ボール運動単元の分析から－，スポーツ教育学研究，第25巻，2005.7
主な学会発表：
・小学校体育授業における学年はじめの常軌的活動の指導に関する検討－特に，小学校入学後の１年生を対象として－，日本スポーツ教育学会第25回記念国際大会，2005.11

技術教育

橘田　紘洋　Kitsuta, Kouyou　　教授　　技術教育講座　　農学博士

❶ 木材工学
❸ 日本木材学会，持続性木質資源研究会（幹事），日本木材加工技術協会，日本産業技術教育学会，日本産業教育学会，日本人間工学学会，International Technology Education Association
❹ 木材加工法（２年），木材加工実習Ⅰ（２年），木材加工実習Ⅱ（２年），木材加工論（２年），木材加工実習Ⅲ（３年），木材加工演習（３年），課題研究A（３年），課題研究B（４年），木材加工教育術特論（大学院），木材加工教育演習（大学院），木材加工技術特論（大学院），木材加工技演習（大学院）
学生には総じて自己啓発的な生活態度が見られるので支援する指導に心掛けている。
担当している授業はいずれも専門教科なので，学生達が将来技術教育に携わることを前提とした授業を行っている。従って，出来る限り教師としての柔軟な発想や応用力・転移力を身につけさせるべく配慮した授業に心がけている。学生の学習姿勢が甘くなっているため，授業の仕方が難しくなっている。特に製作実習に当たっては，初歩的な技能や作業工程を見通す基本的な能力が育っていない。そのため，技術教師としてものづくり学習を指導できるだけの力を身に付けさせることに苦慮している。
❺ 研究課題は学校教育の場から取り上げるように心がけている。
現在，①子どもの成長・発達と道具使用上の巧緻性の変容，②校舎建築材料が及ぼす教育的環境の形成効果，③竹の産業資源化技術開発に関する三つの研究課題に取り組んでいる。
①については，最近の子どもの道具使用能力の低下を問題視しており，技能獲得の発達的変容を明らかにするとともに，技能学習の適時期・指導法を探っている。
②については，教師と生徒の教育活動・学習活動を支援するための校舎の物理的環境のあり方を探るため，校舎を構成する建築材料に視点を当てて調べている。
③については，無秩序に繁茂している放置竹林による環境破壊を防ぐために，竹の産業資源化のための技術開発を行って来た。本研究は「生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業」の研究助成を受けて行ってきた。本年最終年度を迎え，所期の成果

を挙げることが出来た。

①，②の研究は，その性質上学校教育の世界を実験の場にすることが多いが，研究に協力していただく学校あるいは教師に対する公的な配慮が必要であることを痛感している。

各研究成果は，学術誌，研究成果報告書，講演，パネル展示として発表・纏められた。

❻ 各種委員会委員

❼ 中小企業技術開発産学官連携推進事業・産学官連携推進委員会委員長（愛知県），日本産業技術教育学会技術的素養調査委員会委員，専修免許取得のための免許法認定公開講座「木材加工教育特論」，中学校技術・家庭担当教員地域研修の指導助言，大学等地域解放特別事業「サイエンス＆ものづくり」木材加工講習会，国際協力事業団集団研修「産業技術教育コース」木材加工教育講義，国際協力機構国別特設「教育カリキュラム開発研修コース」ものづくり教育講義，各地での校舎環境関連講演活動

大西　研治　Ohnishi, Kenji　　教授　　技術教育講座　　工学修士

❶ 金属加工，機械

❷ 功労賞，日本産業技術教育学会，平成13年８月４日

❸ 日本産業技術教育学会，日本材料学会，日本機械学会

❹ 金属加工法Ⅰ（２年），金属加工法Ⅱ（２年），金属加工法Ⅲ・Ⅳ（３年），金属加工実習Ⅰ（２年），金属加工実習Ⅱ（２年），金属加工実習Ⅲ（３年），金属加工演習（４年），情報教育入門Ⅱ（１年）

金属加工技術演習（大学院），金属加工教育特論（大学院），金属加工教育演習（大学院），技術科教育特論Ⅲ（大学院）

・教育活動の問題点，FD活動，教育に対する抱負

担当領域の教育を行うに当たり，新しい教育用実習機械が乏しい。学生には科学的な思考力や積極的な応用力を習得させたい。

❺・現在の研究テーマ：

Visual Basicによる教材用シミュレーションプログラムの作成

・業績リスト：

リアル４サイクルエンジンのシミュレーションプログラムの開発，愛知教育大学研究報告，第55輯，2006.3.1

愛知万博市民プロジェクト「ものづくりと教育」の実施と成果，日本産業技術教育学会誌，第48巻第１号，2006.3.31

❻・各種委員会委員活動

高大連携特別選抜入試コーディネーター

❼・学内外の公開講座，講演会など

愛知万博市民プロジェクト「ものづくりと教育」2005.7.25～31，プロジェクトメンバー

国際協力事業団（JICA）の集団研修「産業技術教育コース」2005.6～７，「工業教育コース」2005.11，「教育カリキュラム開発コース」2006.1～2006.2，愛知教育大学他，運営並びに講師

2005年度　愛知教育大学 「特色ある大学教育支援プログラム」 採択事業 等

知立市ものづくり教室

名古屋市ものづくり教室

平成17年度「たのしいものづくり」（大学）

宮川　秀俊　Miyakawa, Hidetoshi　　教授　　技術教育講座　　農学博士

❶ 専門分野：技術科教育
関連分野：技術教育，工業技術教育

❷ DTE (Distinguished Technology Educator) Award (2003, 3)，Lawrence Prakken Professional Award (2001, 3)，Gold Key Award (1998, 3)，Epsilon Pi Tau (1997, 3)，日本産業技術教育学会功労賞（2001, 8 ）

❸ 日本工業技術教育学会（副会長），日本産業技術教育学会（国際関係委員長，理事），日本教材学会（常任理事），日本教科教育学会，日本科学教育学会，日本木材学会，日本木材加工技術協会，ITEA (International Technology Education Association)-Japan International Information Center (Director)，Council on Technology Teacher Education，CPSC (Colombo Plan Staff College) (Liaison Officer)

❹ 専門科目入門B（１年），技術科教育CⅠ（２年），技術科教育CⅢ（３年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），技術科教育特論Ⅰ（大学院），技術科教育特論Ⅱ（大学院），技術科教育演習Ⅰ（大学院），技術科授業研究Ⅰ（大学院），情報教育授業実践論（大学院）

「技術科教育CⅠ」は，技術科教育の目標と役割，教育内容，教育方法，評価について，既往の研究成果を実際の授業実践と関連づけながら考究している。「技術科教育CⅢ」は，主免実習後に設定されているので，指導計画や学習過程，授業の評価について，様々な観点から教育実践を行うための応用能力を身に付けることをめざしている。「総合演習Ⅰ，Ⅱ」は，卒業研究遂行のための基礎教育を行うが，ここでは課題に応じた研究の方法論の教授に重きをおいている。「技術科教育特論Ⅰ，Ⅱ」は，国際的な視野から我が国の技術教育を検討するために，諸外国の技術教育を考究している。「技術科教育演習Ⅰ」，「技術科授業研究Ⅰ」は，技術科の授業研究を行うための方法論や実際の授業の分析を行う。なお，これらの専門教科においては，特にこれからの技術科教育の充実・推進をめざして，技術科教育で用いる教材の選択や開発，またそれらの配列や利用等，授業の設計や学習活動に関わる諸課題，さらに課題の解決のための理論や方法論について追究している。

❺ 最近の主な研究成果は（論文，著書）は，以下の通りである。

１．Technology Teacher Education in Japan, 55th CTTE Yearbook, Glencoe/McGraw-Hill, 2006.
２．技術教育教材の利用状況と採択上の課題，日本教材学会「教材学研究」，第16巻，2005.（共）
３．“技術科の指導”等，『学習指導用語事典（辰野千壽編）』，教育出版，2005.（共）

研究活動は，１つは，技術科教育の授業実践に関わるもので，実際の授業を通して本教科の価値を追究している。具体的には，技術科の授業において，生徒の創造性の育成や自己教育力の育成，また問題解決能力の養成について検討しており，本教科の履修による生徒の変容を測定する診断テストの作成を試み，そしてそれを用いて技術科教育の有効性の検証を行っている。２つは，環境問題や社会の情報化，国際化等，現実的かつ国際的な視野に立った技術科教育のカリキュラムのあり方を研究している。そのため，比較研究として諸外国の技術科教育の研究を行っているが，主として米国で進められて

いる“Technology for All Americans”プロジェクトについて，現地取材を通して検討している。

2003年度より科学研究費補助金基盤研究（A）（研究代表者：前大阪市立大学児玉隆夫学長）による研究課題「知の創造・活用を目指す体験的教育の開発に関する総合的国際的比較研究」の分担者として従事している。

学術・研究交流等については，台湾の国立彰化師範大学との教育研究交流の担当者である。

❻ 大学改革推進委員会委員，就職委員会教員就職部会長

❼ 国際協力機構による集団研修「産業技術教育」コースとサウジアラビア国別特設「教育カリキュラム開発」研修コースの実施責任者である。現代GPによる“たのしいものづくり”の担当者である。愛知県総合教育センターにおける高等学校10年経験者研修（高等学校・工業）の講師である。

❽ 2005年日本国際博覧会（愛知万博）市民プロジェクト「ものづくりと教育」（2005年７月25日～31日）のプロジェクトリーダーを務めた。内容は，ものづくりイベント，ものづくりコンテスト，ものづくりインターナショナル・フォーラム等であり，その報告書を出版した。

清水　秀己　Shimizu, Hideki　　教授　　技術教育講座　　工学修士

❶ 電気分野，電気・電子工学，電気材料，プラズマプロセッシング

❸ 電気学会，応用物理学会(東海支部幹事)，日本産業技術教育学会（理事），プラズマプロセッシング研究会

❹ 専門科目入門B（１年），電気１（１年），基礎情報技術（１年），電気２（2年），科学・技術と人間「展開２」（２年），電気実習（３年），電子工学１（３年），電子工学２（３年），総合演習１（３年），総合演習２（４年），電気３（４年），電気教育特論（大学院），電気教育演習（大学院）

・教育活動の問題点，ＦＤ活動，教育に対する抱負

担当領域の教育を行うに当たり，専門の単位数が少ないことにより，学生が系統的にじっくりと考えながら理解することができないことが残念である。

❺・SiC/Siヘテロエピタキシャル成長に関する研究，ZnO薄膜の作製に関する研究，カーボン薄膜成長に関する研究，エネルギー変換教育に関する研究

・口頭発表：

Hideki Shimizu, and Yosuke Aoyama, “Hetero-epitaxial Growth of 3C-SiC on Silicon Substrates by Plasma Assisted CVD”, ICSCIM 2005. September 18-23, 2005. Pittsburgh, Pennsylvania., U.S.A.

・学術・研究交流

ものづくり教育に関するデータベース並びにe-learningの調査と資料収集：韓国教員大学（韓国）2005.10.30-11.01

e-learning に関する実施状況の調査研究と資料収集：国立彰化師範大学（台湾），国立総合大学（台湾）2006.03.12-3.15

❻・講座代表，教育研究評議会評議員，人事委員会委員

❼・平成17年度愛知教育大学免許法認定公開講座「電気教育特論」講師2005.8.16-19

・国際協力事業団（JICA）の集団研修「産業技術教育コース」2005.6～７，「工業教育コース」2005.11，「教育カリキュラム開発コース」2006.1～2006.2，愛知教育大学他，運営並

びに講師
・愛知万博市民プロジェクト「ものづくりと教育」2005.7.25～31プロジェクトメンバー
・平成17年度フレンドシップ事業　たのしいものづくり「自分だけの永久磁石をつくろう」講師，2005.10.08
・2005年度　愛知教育大学「特色ある大学教育支援プログラム」採択事業，知立市ものづくり教室（11/20），名古屋市ものづくり教室（12/10）
・第55次愛知県教職員組合主催教育研究集会技術教育文科会助言者　2005.10.29

太田　弘一　Ota, Koichi　　助教授　技術教育講座　　農学博士

❶ 栽培学，園芸学，農学，環境教育
❸ 産業技術教育学会，農業教育学会，環境教育学会
❹ 栽培実習Ⅰ，Ⅱ（１年），栽培学（２年），栽培演習Ⅰ，Ⅱ（３年），農学（３年），教養科目主題科目「科学・技術と人間」入門（１年），同「環境と人間」セミナー（３年），栽培技術特論（大学院），栽培教育特論（大学院），栽培技術演習（大学院），栽培教育演習（大学院）
❺ 現在の研究テーマ：
環境保全型農業に関する研究（混作の有効性に関する研究）
コチョウランの栽培と光合成に関する研究
重点教育研究経費「環境共生型教育研究施設の計画に関する提案的研究」（2004-2005年度）における「壁面・屋上緑化の方法と効果に関する研究」報告
❻ 自然観察実習園運営委員会副委員長・小委員会委員長，共通科目専門委員会委員，入試部会委員
❼ International Cooperation in Industrial Technology Education（JICA事業）
Educational Curriculum Development（JICA事業）
「たのしいものづくり」（フレンドシップ事業）

鎌田　敏之　Kamada, Toshiyuki　　助教授　技術教育講座　　工学修士

❶ 計算機科学
専門分野：プログラミング言語，オペレーティングシステム
関連分野：情報教育
❸ 日本ソフトウェア科学会，Association for Computing Machinery, IEEE Computer Society，日本産業技術教育学会，日本ロボット学会
❹ 専門科目入門B（１年），基礎情報技術（１年），情報Ⅰ（２年），ソフトウェアⅠ（２年），ソフトウェアⅡ（３年），プログラミング実習Ⅰ（３年），プログラミング実習Ⅱ（３年），科学技術と人間セミナー（３年），情報Ⅱ（４年）
　学生がノート型PCを所持していることを前提に，できる限り多くの授業でPCを活用する場面を提供するように心がけている。演習・実習授業での作業はいうまでもないが，情報Ⅰにおいても調査とプレゼンテーションを全学生が行う場面を取り入れている。また，学生の体験を補う目的で，専門教科入門Bでは音声のデジタル化を自らコイルを巻

いてマイクロフォンを作らせるところから行ったり，プログラミング実習Ⅱで自律ロボットを設計・製作させそれをプログラムさせたりというように，学生が手を動かし肌で感じる場面を増やすよう工夫している。一方で，基礎情報技術と情報Ⅱでは数学を背景とする抽象的な理論を扱い，計算とはなにかを学ばせようとしているが，一部の学生を除いては一定水準の理解には至らない状況である。最近，選択科目の履修者が非常に少なくなってきており，特に実習授業で授業を成立させることが困難になっていることが問題である。

❺ (1) 自律ロボットを通したプログラミングの学習

プログラミング初学者を対象とした，プログラミングの習得に必要な基礎的諸概念の獲得を支援する学習環境についての研究である。自律ロボットはプログラミングに際して，抽象的な概念を学習者に対し視覚・触覚を通して直感的にフィードバックする教材として活用できると考え，授業実践を重ねながら学習環境の評価・検討を進めている。

(2) Webベースのプログラミング環境の構築

個別のPCにインストールする必要がなく，Webブラウザから該当ページを開くのみでプログラムの作成と実行及び関連ファイルの保存・読み取りが可能なシステムの設計と開発を進めている。Toshiyuki Kamada, Susumu Kanemune: “Toward the Web-based Dolittle Programming Environment with High Usability”, Proceedings of the International Workshop on Information Science Education and Programming Languages, Korea University and University of Tsukuba, Jan. 2006, pp. 7 -12.

(3) 学習用自律ロボットシステム構築

一般に入手可能な自律ロボットシステムとは異なり，プログラミングの学習を念頭に置き，初学者に理解しやすく高度な抽象概念を用いたプログラミングも可能なシステムを検討している。

・学術・研究交流等：

2006年１月，韓国情報教育学会（済州大）参加を中心に，韓国高麗大・一橋大・筑波大・早稲田大の研究者とともに上記テーマについて議論し，交流を深めた。

❻・各種委員会活動

時間割編成専門委員会

❼ 国際協力事業団（JICA）集団研修「産業技術教育Ⅱ」コース講師

国際協力機構（JICA）国別特設研修「教育カリキュラム開発」「学校教育改善」コース講師

特色GP「たのしいものづくり」講師

家政教育

西村　敬子　Nishimura, Takako　　教授　　家政教育講座　　家政学修士

❶ 食物学，調理学

❸ 日本家政学会，家庭科教育学会，日本ビタミン学会

❹・人間と生活入門（１年），調理実習Ⅰ（１年），調理実習Ⅱ（２年），食生活と技術（２年），生活科学研究Ⅰ（３年），生活科学研究Ⅱ（３年），生活科学実験実習Ⅰ（４年），生活科学実験実習Ⅱ（４年），特別研究（大学院）

・調理実習では小中高の現場で十分活躍できるよう，また教員の資質向上のためにも調理

の基礎技術を教えている。

❺・小中学生及び高校生の家庭科（食物）教材研究
・五感を通して行う食育

長井　茂明　Nagai, Shigeaki　　教授　　家政教育講座　　工学修士

❶ 専門分野：被服材料学
関連分野：被服管理学，家政学

❸ 繊維学会，日本繊維機械学会，日本繊維製品消費科学会（東海支部幹事），日本家政学会，日本衣服学会（幹事，会計委員長）

❹ 生涯教育概論Ⅰ（１年），共生社会生活教育論（１年），生活機器（２年），生活関連情報論（２年），衣生活実験（２年），くらしの中の生活用品（２年），衣生活論（２，３年），商品情報論（３年），商品サービス論（３年），商品実験Ⅱ（３年），生活技術・情報研究Ⅰ～Ⅳ（３，４年）

商品サービス論，生活機器，商品情報論の授業等では生活用品としての商品について消費科学的な立場から，学生が生活人として適切な商品を選択したり，入手した商品の取り扱いができるように，実践科学的な立場で生活術が身に付くように努めている。また，衣生活論，衣生活実験，商品実験Ⅱは教免法の被服学の教科としているため，実験では，日常生活の中での衣料品について理解し，さらには商品購入の選択の際に有益となるようにしている。また，演習や実習では各種の消費者問題に関する実際例（欠陥商品や消費者苦情など）を調査し，問題の本質を追究して，分析し，討議することによって学生自身の研究心を養えるように努めている。

❺ 現在の研究テーマ：
布地の曲げ変形機構の解析の一環としてのドレープ形態の解明
口頭発表：
「FRLドレープ形態の評価法の提案－均質体シートの場合－」
日本繊維製品消費科学会2005年度年次大会（金城学院大学，2005/６）
発表報文：
「Evaluation Method of the F.R.L. Draped Figure －In the case of Isotropic sheets－」
繊維製品消費科学　Vol.47 No.3（2006/３）

被服の素材である布地の曲げ変形機構の解析である。布地（繊維製品）は典型的な柔らかい材料（柔構造材）で，その変形においては大変形のたわみが起こるため，通常の材料力学（機械工学の弾性論）で取り扱われる微小変形による近似計算を用いた理論的解析ができないことから，相似模型の実験に適用される相似則を導入することによって布地の変形機構の解明を目指している。具体的には布地の自重による垂下形状を表すドレープ形態に関するもので，この柔構造材である布地の変形機構が解析されれば従来の剛構造材を主とした変形機構の理論を，より一般的に通用する材料の変形理論の確立ができるものとして追究している。

❻ 時間割編成専門委員会，就職支援委員会，高大連携特別選抜入試コーディネーター

❼ 日本教育大学協会全国家庭科部門大会開催実行委員長代行として大会を主催

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

小川　正光　Ogawa, Masamitsu　　教授　　家政教育講座　　工学博士

❶ 建築学，専門分野：住宅計画，住生活

❷ 1．水戸市タウンハウス設計競技最優秀賞，茨城県（1982年）
2．研究名誉表彰，中国黒竜江省人民政府（2002年）

❸ 日本建築学会（高齢者居住研究委員会委員，東海支部設計計画委員会委員，同都市計画委員会委員），都市住宅学会東海支部常議委員

❹ 住生活論（2年），住宅設計論（2年），家庭科研究（2，3年），住宅設計演習（3年），生活科学演習Ⅰ（3年），生活科学演習Ⅱ（3年），生活科学実験実習Ⅰ（4年），生活科学実験実習Ⅱ（4年），住生活特論（大学院），住教育演習（大学院）
生活する上で基盤となる住環境は大きく変化している。住生活と住宅事情の変化を，実態に即して講述している。住宅設計演習では，学生作品を懸賞に応募して社会的評価を求めて賞を得ている。また，家具・照明などインテリアの見学を行った。学生作品の発表時は公開授業とし，実施計画に示唆を与える実践的なものとした。

❺ 現在の研究テーマ：
1．高齢者向け住宅の計画・設計
2．デンマークの住宅建築
3．住宅平面の変遷と地域的特徴
4．学校校舎の計画と居住性

論文：
1．デンマークと日本における世帯と住宅事情の比較，愛教大研究報告　第55輯，2006
2．高齢者を含む世帯の居住水準に関する研究―平成15年住宅需要実態調査の分析―，愛教大家政教育講座研究紀要　第37号，2006
3．高齢者向け優良賃貸住宅の実態と今後のあり方，愛教大家政教育講座研究紀要　第37号，2006

報告書：
1．環境共生型教育研究施設の計画に関する提案的研究，2006

研究助成：
1．「生活支援型高齢者住宅」の住宅条件と運営システムに関する検討，科学研究補助金基盤研究C（代表）
2．環境共生型教育研究施設の計画に関する提案的研究，学内重点教育研究費（代表）
研究成果は，自治体などの公的機関が実施する施策に実際に生かされることを意図したものである。提案内容は，居住者の検討を受けながら実現しつつある。

❻ 教育研究評議会評議員，家政教育講座代表，財務委員会委員（施設部会）

❼ 委員会
1．わが家のリフォームコンクール審査委員会 委員長，愛知ゆとりある住まい推進協議会
2．刈谷市住宅マスタープラン計画策定検討委員会 委員長，刈谷市

新聞報道
1．住む人に優しい住宅造り，中日新聞，2005. 11. 2

早瀬　和利　Hayase, Kazutoshi　　教授　　家政教育講座　　農学博士

❶ 食物学

専門分野：栄養学
関連分野：食品学

❸ 日本栄養・食糧学会（本部評議員），日本農芸化学会，必須アミノ酸研究委員会客員

❹ 家庭科研究A（１年），食生活論（２年），食品栄養学実験Ⅰ（２年），食品栄養学実験Ⅱ（３年），栄養学（３年），生活科学演習Ⅰ，Ⅱ（３年），小児栄養学演習Ⅰ（３年），栄養学特論Ⅰ，Ⅱ（大学院）

学生による評価，他の教員との検討を通じ，より良い授業を目指したい。特に「家庭科研究A」は，小学校教員免許取得を希望する家庭専攻以外の学生に開講されている専門授業科目であり，わかりやすい授業が重要である。このような観点より，家政教育講座教員数名により，小学校家庭科の内容をわかりやすく解説したテキストを作成し，「家庭科研究A」で使用しており，受講学生にもおおむね好評である。

問題点としては，担当授業コマ数が多く，研究活動，授業改善の阻害要因であると考えられる。

❺ 研究テーマ：

（１）栄養と脳タンパク質代謝：　脳タンパク質合成とタンパク質栄養・加齢・ホルモン・食品成分との関連について検討している。

（２）尿素生合成とタンパク質栄養：　食餌タンパク質の質的影響による尿素生合成調節機構について検討している。

業績リスト：

１）Tujioka, K., Fukaya, Y., Sano, A., Hayase, K., and Yokogoshi, H. (2005) Role of N-acetylglutamate turnover in urea synthesis of rats given proteins of different quality. *J. Nutr. Sci. Vitaminol*. 51, 93-98.

２）Tujioka, K., Lyou, S., Fukaya, Y., Sano, A., Hayase, K. and Yokogoshi, H. (2005) Effect of adding dietary L-lysine, L-threonine and L-methionine to a low gluten diet on urea synthesis in rats. *Amino Acids* 28, 297-303.

３）辻岡和代，早瀬和利，横越英彦（2005）：小麦グルテンへのアミノ酸補足による尿素生合成の変動における体タンパク質合成の役割。*必須アミノ酸研究*　**173**, 80-84.

４）辻岡和代，早瀬和利，横越英彦（2006）：血漿中成長ホルモン濃度及び脳タンパク質合成に及ぼすGABA摂取の影響。*必須アミノ酸研究*　**175**, 65-68.

❻ 放射線障害予防委員会委員（放射線取扱主任者として毎年委員）
時間割編成委員会委員
動物実験委員会委員

❼ （財）名古屋市学校給食協会　物資委員会委員

加藤　祥子　Kato, Syoko　　教授　　家政教育講座　　家政学修士

❶ 被服学，被服構成学

❸ 日本家政学会，日本繊維製品消費科学会，日本衣服学会

❹ 専門教育入門（１年），被服構成実習Ⅰ（１年），家庭科研究A（２年），被服構成実習Ⅱ（２年），衣生活と技術（３年），生活科学研究Ⅰ（３年），生活科学研究Ⅱ（３年），

Lセミナー（３年），生活科学実験実習Ⅰ（４年），生活科学実験実習Ⅱ（４年），被服構成学特論Ⅰ（大学院），被服構成学特論Ⅱ（大学院），特別研究（大学院）

・被服実習では小中高の現場で十分活躍できるよう，また教員の資質向上のためにもプロの技術を教えている。さらに，工夫を凝らして被服教材を短時間で仕上げ，数多くの教材に触れさせて，美しい作品作りを目指す。

・教養科目では，身の回りの被服に関する事例を取り上げて関心を持たせ，中でも特に不便を感じている事例に関しては，科学的分析，その解決を図っている。

❺ 小中学生及び高校生の家庭科（被服）教材研究（短時間で仕上がる被服教材シリーズ）

❻・大学改革推進委員会委員

・ 市民参画型教員養成コーディネーター会議委員

・ ６年一貫教員養成コース会議委員

・ ６年一貫教員養成コース具現化専門委員会会議委員

❼・平成17年度岡崎市教育研究大会助言

・ 第52回附属名古屋小学校研究発表会助言

・ 第56回附属岡崎小学校教育研究協議会助言

・ 稲沢市教育研究会研究集会助言

・ 愛知家庭科教育研究会情報交換会講演

・ 夏休みワークショップ―布を使った物作り―（産業技術記念館）指導

山田　綾　Yamada, Aya　教授　家政教育講座　教育学修士

❶ 教育学

専門分野：教科教育学（家庭科教育）

関連分野：教育方法学

❷ 日本教育学会，日本教育方法学会，日本生活指導学会，日本教科教育学会，日本家庭科教育学会（理事），家政学会家族関係部会，日本家庭科教育学会東海地区会，中部教育学会

❸ 家庭科研究Ｓ２ＡⅡ（１年），家庭科研究Ｓ２ＢⅡ（１年），家庭科教育Ａ（２年生），家庭科教育ＣⅢ（３年），家庭科授業研究（３年），総合演習Ⅱ（４年），共生社会とジェンダー（４年），生活科学演習Ⅰ・Ⅱ（３年），生活科学実験実習Ⅰ・Ⅱ（４年），家庭科教育特論（大学院），家庭科教育演習（大学院）

・教育活動の問題点，FD活動，教育に対する抱負

授業では，学生が消費生活と環境や家族・ジェンダーなど他者との関係性について探究・考察し，家庭科や総合学習の授業実践を創造できるように，対話・討論，調査プロジェクト，ラウンドテーブルなどを導入し，授業の改善を試みた。また，実際に授業を記録して共同分析を行うことにより，実践的力量をつけることを試みた。

❺・現在の研究テーマ：

現在の研究テーマは，子どもが現代の生活課題をどのように学ぶ必要があるのか，現代生活を捉える視点とそれを学ぶ過程に必要な視点を明らかにすることである。そのために，以下の研究を進めた。

（１）家族や性に関する家庭科学習・総合学習の検討と教育の取り組み
　　特に，スウェーデンのアクション・リサーチ事例の検討

（２）環境問題・大量消費などの衣食住の生活課題を探求する家庭科学習・総合学習の開発

・業績

「第６章 ジェンダー・バックラッシュと家族の言説」「第７章 アイデンティティと教育をめぐる政治　－ジェンダー／セクシュアリティ問題が示唆するものとそれへの対抗－」

（浅井春夫・子安潤・鶴田敦子・山田綾・吉田和子『ジェンダー／セクシュアリティの教育を創る－バッシングを超える知の経験－』明石書店，2006，pp.225-255, pp.257-287所収。）

「スウェーデンの学校における性的指向性を理由とした差別と偏見に対する取り組み－EUのコミュニティ主導プログラム“EQUAL”のプロジェクト“Under Ytan”（水面下）を中心に－」

（『愛知教育大学家政教育講座研究紀要』第37号，2006, pp.63-77所収。）

「教科の組織化を考えるために－ジェンダー視点からみた教科研究の課題－」

（日本教科教育学会誌第28巻第４号，2006，pp.89-94。）

子安潤・山田綾「社会の授業を変える」（井ノ口貴史・子安潤・山田綾編『授業づくりで変える高校の教室１　社会』明石書店，2005，pp.173-193所収。）

・科学研究費

○科学研究費補助金基盤研究C・代表者・「教室におけるジェンダー・エクイティのためのアクション・リサーチ－理科・数学・家庭科の授業場面を中心に－」

○科学研究費補助金基盤研究B（１）・分担者・「生涯学習の基礎基本を培うための教科教育の枠組みと内容の再構成」

○科学研究費補助金基盤研究（C）・分担者・「20世紀初頭のラディカル派フェミニズムの再考－日米欧の比較研究－」

❻ 教育実地研究専門委員会，次世代育成ワーキング

❼・名古屋市科学館企画調査委員，名古屋市科学館協議会委員，名古屋市男女平等推進センター事業「高校生の職業情報・ネットワーク・男女平等に関する名古屋市調査－次世代育成支援から考える男女平等教育のために－」の委員，稲沢市女性問題懇話会委員などをつとめた。

・小・中・高の教員研究集会や校内研修会などにおいて，家庭科や総合学習の授業づくり，ジェンダーの授業づくりや教育的な取り組みに関する講演を行ったり，助言者を務めた。また，「男女共同参画」「ジェンダーと教育」「子育てセミナー」「託児ボランティア」関連の講座の講師やアドバイザーなどを務めた。

山根　真理　Yamane, Mari　　助教授　家政教育講座　　教育学修士

❶ 家族社会学，家族関係学，ジェンダー研究

❸ 日本家族社会学会，日本家政学会家族関係学部会，日本家政学会生活経営学部会，比較家族史学会，日本社会学会，関西社会学会，日本女性学会

❹ 家族論（２，３年），家族論演習（３年），家庭経営（２年），専門教育入門（１年），家庭科研究B（２年），生活科学演習Ⅰ（３年），生活科学演習Ⅱ（３年），生活科学実験実習Ⅰ（４年），生活科学実験実習Ⅱ（４年），家族論演習Ⅰ（大学院），家族論演習Ⅱ（大学院）

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❺・研究テーマ：

韓国における高齢者のライフコース

アジア諸社会におけるジェンダーの比較研究

・著書・論文：

吉田あけみ・杉井潤子・山根真理編，2005『ネットワークとしての家族』　ミネルヴァ書房

・科学研究補助金

国境を越える移動・エスニシティ・地域社会の再構築に関する比較社会学的研究（科学研究費・基盤研究（A）（海外学術調査）分担者，代表　佐々木　衛）

❻・入試委員

・大学院運営委員

・国際交流委員

・次世代育成支援行動計画ワーキング

・韓国晋州教育大学校　交流担当

❼ 愛知県生涯学習男女共生フォーラム企画委員

関根　美貴　Sekine, Miki　助教授　家政教育講座　家政学修士

❶ 家政学

専門分野：生活経済学

関連分野：生活経営学

❸ 日本家政学会，生活経済学会，消費者教育学会，地域農林経済学会

❹ 生活経営論（２年），くらしとお金（２年），生活経済論（３年），消費経済論（３年），生活関連情報分析（３年），消費者研究Ⅰ（３年），消費者研究Ⅱ（３年），消費者研究Ⅲ（４年），消費者研究Ⅳ（４年），生活設計（４年），家庭経済学特論Ⅰ（大学院），家庭経済学特論Ⅱ（大学院）

授業全体としては生活者・消費者に関する諸課題を経済的な側面から実証的に分析し，さらに問題解決のための施策についても考察できる能力を養うことを目標としている。そのための基礎的科目として生活経営，生活経済，消費経済等を，発展的な科目として消費者研究Ⅰ～Ⅳ等を位置づけている。基礎的な科目では生活者・消費者の経済的な行動の実態の把握や，その理論的な理解に目標を置いている。これらの科目で得られた基礎能力をもとに発展的な科目では生活者・消費者に関する現代的課題を取り上げ，それについての検討をより深く行っている。またその中で分析に必要な手法についても学べるように配慮している。また近年の経済社会状況の急激な変化の中，生活者は自立した生活経営を行う必要性がこれまで以上に高まっている。生活設計，生活関連情報分析等の授業ではそのために必要な能力の養成を目指している。

授業では受講生が自ら考えることができるように心がけている。そのためにできるだけ多くの関連資料を配布し，随時質問を促しながら授業を進めている。また受講生による調査・報告を積極的に取り入れ，受講生のより主体的な授業参加を図る工夫をしている。

❺ 現在の主な研究テーマのひとつはライフスタイルの多様化と家計である。

今後単身や夫婦のみで暮らす高齢者世帯の急激な増加や，都市部での高齢化の進展が予想され，高齢期にどのように住まうか，介護をどのように受けるかは生活者にとって大きな課題であるといえる。そこで，本年度は世帯構造別に介護の実態について把握す

ることを中心に研究を行った。

　世帯構造別にみた介護の実態について　愛知教育大学家政教育講座研究紀要　37号　2006

❻ 入学試験部会委員，教育実地研究専門委員会委員

❼ 愛知県消費生活審議会専門部会専門委員

板倉　厚一　Itakura, Koichi　　助教授　家政教育講座　　農学博士

❶ 食品学

❸ 日本農芸化学会，日本過酸化脂質・フリーラジカル学会，日本教育大学協会家庭科部門

❹ 情報教育入門Ⅱ（１年），生活関連情報演習（２年），食品学（３年），商品実験Ⅰ（３年），生活技術・情報研究Ⅰ（３年），生活技術・情報研究Ⅱ（３年），消費と流通の諸問題（４年），生活技術・情報研究Ⅲ（４年），生活技術・情報研究Ⅳ（４年），食品学特論（大学院）

　担当授業は，情報教育に関わるもの（１，２年生）と食品に関わるものに大きくわけられる。情報教育に関わる授業（情報教育入門Ⅱ，生活関連情報演習）では，主にエクセルを利用した情報処理と，パワーポイント等を利用したプレゼンテーションの仕方に主眼をおいて授業計画を行った。内容は，今後学年が進行するに従って必要不可欠となってくると想定されるものに限定し，それぞれの項目に対して課題を課して理解度をチェックしながら授業を行った。食品を題材としてとりあげている授業（おもに食品学，商品実験Ⅰ，消費と流通の諸問題，食品学特論）では学生の関心を喚起させるために，導入部分において健康とからめたトピックを提示しながら授業を進めた。

❺ 現在のテーマは，脂質過酸化に伴うタンパク質の酸化修飾についてである。脂質過酸化の過程では，様々な脂質酸化分解物が生成している。その中にはタンパク質と容易に反応し，タンパク質の構造や機能に大きな変化を引き起こすものが少なくない。そこで，脂質酸化分解物のなかでも，以前から生体に対して毒性が強いとされているアルデヒド化合物に注目し，タンパク質修飾の観点からその毒性について化学的な検討を行っている。また今年からはタンパク質と糖の間で起こるメイラード反応をテーマの一つに加えている。

❻ 大学院家政教育専攻入試委員，共生社会コース代表，衛生管理者

❼ 農芸化学会代議員

杉浦　淳吉　Sugiura, Junkichi　　助教授　家政教育講座　　博士（心理学）

❶ 社会心理学，環境心理学，コミュニケーション教育，環境教育，消費者教育

❷ 日本社会心理学会平成９年度「若手研究者奨励金」受賞（1997年10月）
廃棄物学会平成11年度「廃棄物学会論文賞」受賞（2000年５月）
日本シミュレーション＆ゲーミング学会2004年度「論文賞」受賞（2004年６月）

❸ 日本シミュレーション＆ゲーミング学会・理事（2003年～現在），
日本心理学会，日本社会心理学会，日本グループ・ダイナミックス学会，日本教育心理学会，日本パーソナリティ心理学会，廃棄物学会，日本環境教育学会，科学技術社会論

学会（以上会員，一部）

❹ 環境と人間・入門（１年），共生社会行動論（２年），グループ・ダイナミックス（３年），消費行動演習（３年），消費環境研究Ⅱ～Ⅳ（３，４年），生活環境学演習Ⅰ，Ⅱ，集団力学特論（大学院）

教育活動の問題点，FD活動，教育に対する抱負　授業では教員・学生間だけでなく，学生同士の相互作用を促すべく，ゲーミングによるプログラムを開発・実践している。開設学年の異なる授業の受講者間の連携をはかり，カリキュラムの連続性・相互関連性の理解を深める工夫をしている。

❺１）現在の研究テーマ　ゲーミング・シミュレーションによる教育カリキュラムの開発

２）合意形成のための説得・交渉技術に関連する参加型プログラムの設計・開発と評価

３）環境配慮行動の普及プロセスに関する社会心理学的研究

査読付論文（一部）

前田洋枝・広瀬幸雄・杉浦淳吉・柳下正治・松野正太郎，2005，市民参加型会議におけるエンパワーメント評価　社会技術研究論文集，3，279-289.（印刷中）

杉浦淳吉，2005，説得納得ゲームによる環境教育と転用可能性，心理学評論，Vol.48，No.1，139-154.

依藤佳世・広瀬幸雄・杉浦淳吉・大沼進・萩原喜之，2005，住民による自発的リサイクルシステムが資源分別制度の社会的受容に及ぼす効果　廃棄物学会論文誌，16（1），55-64.

科学研究費補助金など研究助成の受領状況

１）平成16年度文部科学省「海外先進教育研究実践支援プログラム」「教員養成を軸とした改革推進のための海外調査：環境教育を中心として」2004年12月15日～2005年９月30日　ドイツ連邦共和国

２）コミュニケーション教育ツールとしての「説得－納得ゲーム」の開発に関する研究　財団法人科学技術融合振興財団助成，H14-H16（H18まで期間延長）研究代表者

３）マイクロ－マクロ関連に基づく社会特性の創発に関する研究　科学研究費補助金基盤研究（B）(1)，H15-H17，研究分担者（研究代表者：埼玉大学教養学部・高木英至教授）

４）フィールドの語りを捉える質的心理学の研究法と教育法　科学研究費補助金，基盤研究（B）(1)，H16-H19，研究分担者（代表者：京都大学大学院教育学研究科・山田洋子教授）

５）市民参加による循環型社会の創生に関する研究　独立行政法人科学技術振興機構「社会技術研究プログラム：循環型社会」，H14-H17，研究分担者（研究代表者：名古屋大学大学院環境学研究科・柳下正治教授）

❻ ６年一貫教員養成コース会議委員

❼ 市民がつくる津島市環境基本計画策定委員会・委員　ほか

❽ 教育活動，研究活動，社会的活動については，今日の大学の社会的位置づけを鑑み，相互の連携・連接を考慮しながら協働を重視して活動を行っている。次のサイトで研究・教育活動等，報告している。http://homepage2.nifty.com/jsugiura/

橋本　尚美　Hashimoto, Naomi　　助教授　家政教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：教科教育学（家庭科教育）

関連分野：教育方法学

❸ 日本教育学会，日本教育方法学会，日本教科教育学会，日本家庭科教育学会，日本生活

指導学会，日本社会福祉学会

❹　人間と生活（人間と性）入門（１年），家庭科教育B（２年），家庭科教育A，家庭科教育CⅡ，家庭科教育CⅢ，生活科学演習Ⅰ・Ⅱ（３年），総合演習Ⅱ，生活科学実験・実習Ⅰ・Ⅱ（４年），家庭科教育特論Ⅳ，家庭科授業研究（大学院）

教育活動の中心は，家庭科の授業を構想するための視点や方法，家庭科における学びのあり方を学生とともに探求していくことにある。現代生活の重要なテーマとして，個人・家族・ジェンダー・福祉に関する課題，衣食住を中心とした消費・環境に関する課題を見定め，それらに関する子どもの現実や家庭科の授業実践を取り上げながら，現代の生活課題を捉える視点や，それらを学習する方法を検討している。

講義の進行については学生と協議し決定するが，生活課題や授業実践をグループや全体で検討したり，調査・発表したりする時間を設けるようにしている。限られた時間のなかで，クラス全体の関係をつくりながら議論を深めていくことはなかなか難しいため，今後さらに講義の全体構想を検討していきたい。

❺ 現在の研究活動の中心は，家庭科を中心にした日本とスウェーデンにおける福祉の学習に関する歴史的研究・実践的研究，及び，スウェーデンを中心にした教室におけるジェンダー・エクイティのためのアクション・リサーチに関する研究にある。今年度も，スウェーデンに渡航し，授業参観及び研究者へのインタビューを行った。今後は，それらの分析を行うとともに，日本の家庭科教育における福祉・ジェンダーに関する総合的学習の可能性と方策を明らかにしていく。

論文：

１．橋本尚美「市場個人主義時代において知の共同化を創り出す」『家庭科研究』第250号，家庭科教育者連盟，pp.4-10（2005年10月）

２．橋本尚美「スウェーデンの教師教育の改革動向－2000年改革を中心に－」『愛知教育大学家政教育講座研究紀要』第37号，pp.78-87（2006年３月）

口頭発表：

・橋本尚美「スウェーデンのナショナル・カリキュラムにおけるジェンダー視点の変遷」（日本教科教育学会第31回全国大会）（2005年９月）

科学研究費補助金ほか：

・研究題目「教室におけるジェンダー・エクイティのためのアクション・リサーチ」（基盤研究（C）（２），研究分担者（代表 山田綾），130万円）

・テーマ「男女共同参画実現のための高等教育のカリキュラム開発及び学習・研究環境の整備プランの検討」（愛知教育大学重点教育研究費，研究分担者（代表 山田綾），135万円）

報告書：

１．あいち県民教育研究所・子ども調査プロジェクト『共に育もう愛知の子どもたち（Part２）－第２期あいち民研子育て・教育総合調査－』（2005年12月）

２．『教室におけるジェンダー・エクイティのためのアクション・リサーチ』科学研究費基盤研究（C）（２）報告書（2006年３月）

❻ セクシュアル・ハラスメント防止等対策委員会委員

❼・スポーツ・青少年局「学校を中心とした食育推進事業」愛知県豊田市立益富中学校区指導・助言者（2005年４月～2006年３月）

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

・国際協力機構（JICA）国別特設研修「サウジアラビア国におけるカリキュラム開発」講師（開催責任者 愛知教育大学 宮川秀俊）（2006年 2 月）

中山　節子　Nakayama, Setsuko　　助手　　家政教育講座　　博士（学術）

❶ 家庭科教育，生活経営

❸ 日本家庭科教育学会，日本家庭科教育学会東海地区会，日本家政学会（データベース入力協力委員），日本家政学会生活経営部会，日本家政学会生活経営部会若手の会（企画），教科教育学会会，女性労働問題研究会，国際ジェンダー学会（旧国際女性学会），経済統計学会，経済統計学会関東地区会，経済統計学会ジェンダー統計部会，日本社会福祉学会，Asian Regional Association for Home Economics (ARAHE), International Federation of Home Economics (IFHE)

❹ 家庭科教育CI（3 年），家庭科教育研究CⅣ（4 年），家庭科教育A（3 年），子育て支援論（4 年），生活科学演習I（3 年）

参加型授業，ディベート等の手法を用いた学生の積極的学びをテーマに授業改善を行ってきた。他の家庭科教育の教員と連携し，カリキュラムについての検討も行ってきた．今後，学生自身が教員として，児童の主体的な学びが得られる授業設計を行なえるような指導方法も重要な検討事項である。

❺ 研究テーマ：

ESCAP地域の生活時間調査を実施・分析を通して，ESCAP地域における生活時間調査のスタンダードの確立と生活時間を題材とした教育実践研究

業績リスト：

論文：

①タイ・カンボジア・日本の行動者平均生活時間のジェンダー比較―新 4 大生活時間行動分類による考察―，日本家政学会誌，Vol.56, No.12，2005年12月

②ESCAP地域で実施された生活時間調査と生活行動分類（下），昭和女子大学生活機構研究科紀要，Vol.15，2006年 3 月

③東南アジアの生活時間に関する英文博士学位論文，昭和女子大学女性文化研究所紀要，No.32, 2006年 3 月

著書：

女性労働問題研究会編，中山節子，第四九回国連女性の地位委員会（CSW）『北京＋10』に参加して，国際女性デーのデモにも参加，女性労働研究－労働運動フェミニズムの最前線－，青木書店No.48，2005年 7 月

口頭発表：

Nakayama, S. and Otake, M. A new learning approach with time-use data in Home Economics education from gender aspect, The 13th Biennial International Congress of Asian Regional Association For Home Economics, Singapore, 2005.8.

科学研究費補助金などの研究助成：平成15-18年度文部科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究分担者：研究代表者東京学芸大学教授大竹美登利氏，研究課題名「夫妻の生活時間の比較から見たタイ，インドネシア，日本のライフスタイルの性差」，課題番号：15300241.

学術・研究交流など：

平成15年～18年度科学研究費補助金を受けての研究，「夫妻の生活時間の比較から見たタイ，インドネシア，日本のライフスタイルの性差」において，分担者として調査研究

を行い，インドネシアにおいては，インドネシア統計局（BPS）と，タイにおいては，カセタート大学家政学部の研究者らと共同研究調査を行っている。

❻ 次世代育成行動計画ワーキング（2005年５月～2006年３月）
大学附属学校共同研究

保健管理センター

久永　直見　Hisanaga, Naomi	教授	保健管理センター	医学士

❶ 専門分野：産業保健，
関連分野：環境保健

❸ 日本産業衛生学会（代議員），日本社会医学会（評議員），日本職業・災害医学会，日本労働衛生工学会，日本職業アレルギー学会，日本国際保健医療学会，日本衛生学会，日本生気象学会，日本労働安全衛生コンサルタント会，大韓産業医学会

❹ 比較健康学特論（大学院），愛知教育大学JICA集団研修コース（産業技術教育Ⅱ，サウジアラビア学校教育改善，同教育カリキュラム開発）

❺・現在の研究テーマ：（1）大学における効果的な労働安全衛生活動，（2）アスベスト等産業有害物による健康障害の予防

・業績リスト

著書

健康科学（共著），南江堂，2005.

口頭発表

1）久永直見ほか：アジア５ヶ国の日系事業所における労働安全衛生と日本からの支援，第78回日本産業衛生学会，東京，2005年４月

2）Hisanaga et al.：Occupational Safety and Health Practices of Japanese Firms in five Asian countries. The 13th International Congress on Occupational Health Services, Utsunomiya, Dec., 2005

3）柴田，久永ほか：建設労働者の石綿曝露対策と労働衛生管理，中小企業安全衛生研究会第39回全国集会，福岡，2005年12月

・学術・研究交流

1）国際会議報告書の編集　International Meeting of Asian Occupational Health Research Centers. National Institute of Industrial Health, 2006

❻ 「健康安全・環境保全センター」（仮称）ワーキンググループ責任者
安全衛生委員会委員：アスベスト対策など
保健管理センター教員：健康相談，一般・特殊健康診断，安全衛生教育など

❼・アスベストによる健康障害の予防に関する講演：2005年度中に愛知教育大学，名古屋工業大学，藤田保健衛生大学，同志社大学，石川県医師会，愛知県保険医協会，三重県保険医協会，滋賀県保険医協会，日本臨床細胞学会静岡県支部，日本産業衛生学会東海地方会などで実施。

・名古屋大学，三重大学非常勤講師

・産業医科大学JICA集団研修コース（持続的発展のための職業環境保健マネジメント）

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

・独立行政法人産業医学総合研究所客員研究員

岡田　暁宜　Okada, Akiyoshi　　助教授　保健管理センター　　医学博士

❶ 専門分野：精神分析学，関連分野：精神医学，心身医学

❷ 第40回全国大学保健研究集会優秀演題（平成14年10月）

❸ 日本精神分析学会（認定精神療法医，認定スーパーヴァイザー），日本心身医学会（認定医，代議員），日本臨床心理士資格認定協会（認定臨床心理士），日本内科学会（認定医），日本精神神経学会（会員），日本心理臨床学会（会員），日本精神病理・精神療法学会（会員），日本集団精神療法学会（会員），日本思春期青年期精神医学会（会員），精神分析的精神医学会（会員），日本医師会（産業医），日本語臨床研究会（会員）

❹・心身医学特論（大学院），心身医学特論（大学院），精神保健（学部）こころとからだ展開２－こころの臨床－（学部）

・愛知教育大学保健管理センター健康講座「法人化後の教職員のメンタルヘルス－あなたは生き残れるか－」，講演（2006年３月16日，愛知教育大学）

❺・現在の研究テーマ

１．大学生のメンタルヘルスに関する臨床研究

２．精神分析的精神療法及び精神分析に関する臨床研究

・業績リスト

＜論文＞

１）岡田暁宜（2005）ある境界例女性の病院治療に関する精神分析的考察－治療分化をめぐって－精神療法：32巻１号

１）岡田暁宜（2006）杜子春と精神分析－苦行のパラドクス－，愛知教育大学紀要55

２）岡田暁宜（2005）入学試験の救護活動についての覚書，IRIS HEALTH 第４巻

３）岡田暁宜（2005）本学における実験・研究に関する倫理的問題，IRIS HEALTH 第４巻

＜発表＞

１）岡田暁宜：プレコングレス，第52回日本精神分析学会，広島，2005年10月

２）岡田暁宜：二つの相談施設に通う女性，第４回日本精神分析的精神医学会，東京，2006年３月

❻・保健管理委員会，安全衛生委員会，組換えDNA実験安全委員，愛知教育大学保健管理センター紀要編集委員，保健環境センター設立ワーキンググループメンバー，ハラスメント防止委員会ワーキンググループメンバー

❼ 本学附属学校園における教職員，生徒，家族に対するメンタルヘルス活動
精神分析的精神療法の指導

❽ 大学産業医及び大学保健管理医としての活動

法人化後の取り組み

法人化後の取り組み

学長　田原　賢一

国立大学も法人化後２年が経過したが，その間，外部資金の導入を含め，本学では色々な事業を試みると同時に，社会に向けて本学から情報発信を行ってきた。これらの事業のいくつかを紹介する。

まず，外部資金の導入については次の三つの事項について述べる。

１．科学研究費補助金の獲得に向けての対応

本学にとっては，外部資金として科学研究費（以下単に「科研費」という。）は極めて重要な位置にある。平成17年度から科研費の獲得に向けて，採択されなかった申請者に対して，非実験系においては６万円，実験系において９万円を支給して，科研費申請率を向上させる方策をとることとした。その結果，平成16～18年度における科研費の申請件数，採択件数は下記表の通りであり，その対応が効果的であるとは言い難い。

種　　類	平成16年度		平成17年度		平成18年度	
	申請件数	採択件数	申請件数	採択件数	申請件数	採択件数
特定領域研究	0	0	4	3	0	0
基盤研究（A）一般	0	0	2	0	3	0
基盤研究（A）海外学術調査	1	0	0		0	0
基盤研究（B）一般	10	2	10	1	8	1
基盤研究（B）海外学術調査	4		0		0	0
基盤研究（C）一般	32	10	34	5	33	10
基盤研究（C）時限細目分						
基盤研究（C）企画調査	1		2		1	0
萌芽研究	9	0	10	2	9	0
若手研究（A）	1	0	0	0	0	0
若手研究（B）	17	6	16	6	15	5
合　　計	75	18	78	17	69	16

ただし，上記には，継続分は入っておらず新規のみを示す。

２．国公私立大学を通じた大学教育改革の支援の充実

文部科学省が公募する大学教育支援プログラムは現在のところ，大きくは次の四つである。

１）課程に応じた教育内容・方法の高度化・豊富化の充実

(1) 特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）

本学では，本プロジェクトとして，平成17年４月６日に「科学教育出前授業等による学生自立支援事業」（３年計画）を申請し，７月６日のヒアリングを経て，７月22日に採択された。

2）現代的課題に対応できる人材養成と大学の多様な機能の展開

（1）現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）

本学では，本プロジェクトとして，平成17年４月６日に「外国人児童・生徒のための教材開発と学習支援」（３年計画）を申請し，７月20日のヒアリングを経て，８月５日に採択された。

（2）大学教育の国際化推進プログラム

本プロジェクトは，次の四つに分けられている。

①長期海外留学支援

本学では，本プロジェクトには申請しなかった。

②海外先進教育実践支援

本学では，本プロジェクトとして「アジアの教員養成大学間ネットワークの構築」を申請したが，不採用であった。

③海外先進研究実践支援

本学では，本プロジェクトとして「生物学系の教員養成プログラムの構築」を申請したが，不採用であった。

④戦略的国際連携支援

本プロジェクトには申請しなかった。

3）社会の要請に応える専門職業人養成の推進

（1）資質の高い教員養成推進（教員養成GP）

本プロジェクトは，平成17年度初めて公募されたものである。

本学では，本プロジェクトとして，平成17年６月21日に「拓き，つなげる力が育つ市民参画型教員養成」を申請し，非常に良いところまで選考に残ったが，結果的には採択されなかった。

3．高等学校訪問

平成16年度には，初めて愛知県内のすべての高等学校を訪問し，本学の状況説明及び高等学校側の要望等の把握を行った。

そして，平成17年度では，10･11月の２ヶ月に渡って､愛知県内を150校程度に絞り､その代わり､近隣県の比較的本学への志願者が多い11校を訪問し，合わせて155校を訪問した。

そのとき，高等学校側の意見･要望は，後期大学入試日程を廃止したこと，推薦入試，教育組織・入学定員，就職，大学院，高大連携等に関する事項についてのものであった。

4．学長の紹介等を通じた情報発信

私が学長として，平成17年４月以降，学長の自己紹介等を通して本学の紹介を行ったものは，次の通りである。なお，それ以前のものについては2004年度版年次報告を参照して下さい。

①教育新聞愛知県版「教員養成のパワーアップ・質的充実」（平成17年６月）

②関塾タイムス「うまくいかなくても何度でもチャレンジ，人生も勉強も結果よりプロセスを大切にしよう」（平成17年７月）

③リクルート「社会人・学生のための大学・大学院を選ぶ情報誌」（平成17年７月）

④河合塾「Top Interview：教員への重要性が高まる中，実践的な指導力・コミュニケーション力を身につけた人材を育成していきます」（平成17年９月）

⑤NHK講演：「努力が報われる人生」（平成17年10月）

⑥読売新聞「教員養成で連携」（平成17年12月）

⑦毎日新聞座談会「これからの教員養成の在り方と新・教員像」（平成18年３月）

⑧文部科学教育通信「地域特性を活かした教育を展開し，専門性とともに実践力を育成する」（平成

18年３月）

５．本学教員による社会的教育研究活動等の紹介を通じた情報発信

本学には，色々な教育研究分野をもった約280名の教員が存在し，教員による地域と連携した社会的教育研究活動が色々な分野･側面において展開されている。それらの中のいくつかが新聞等のマスコミを通して紹介され，その結果として本学を紹介する役目を果たしている。

６．本学学生による文化活動あるいはスポーツ活動等を通じた情報発信

本学の中には，文化活動あるいはスポーツ活動等において，極めて優秀な成績を記録することによって，本学の名前を宣伝し，大学の知名度を上げることに繋がったものがある。平成17年度以降のものは次の通りである。

①第74回日本学生陸上競技対校選手権大会（平成17年７月３日）
②2005全日本学生競技チャンピオンシップ陸上（平成17年９月11日）
③伊勢湾カップ2005ボードセーリングレガッタ（平成17年８月７日）
④第２回WBTFインターナショナルカップ日本代表選考バトントワリング（世界バトントワリング連合）（平成18年３月26日）
⑤第31回日本バトントワリング選手権大会（平成18年２月19日）

あとがき

愛知教育大学では，組織，運営，教育研究活動等全般にわたる年次報告書を2001年度（2000年度版）から作成・発行してきており，今回，この2005年度版を刊行するに至った。平成16年（2004年）４月から本学も国立大学法人となり，早いもので２年が過ぎた。国立大学法人大学評価委員会や大学評価・学位授与機構による中期目標・中期計画に対する年次評価や全体評価，さらには，平成19年度（2007年度）には，大学評価・学位授与機構による大学機関別認証評価を受けることとなっており，一層明確な説明責任と活動全般が捕捉できる分かりやすい自己点検・評価報告書が求められている。

本報告書は，Webと刊行物を併用して公開していたが，昨年度はWebのみの公開とした。Web掲載により必要な部分を効率よく検索することが可能になっているが，来年度受ける認証評価が根拠資料・データに基づく評価であるため，本報告書を今年度は紙媒体のものも作成することとなっている。

大学評価への要求が社会的に高まってきた背景には，単に評価そのもののみが求められているわけではなく，その評価結果を次にどう生かすかまで問われていることを忘れてはならない。特に自己点検・評価は単に点検・評価を行うことが目的ではなく，それら点検・評価に基づき問題点を把握して，次の改善に結びつけることができて初めて大きな意味を持つ。つまり，大学評価に対する社会的な要求は，「特に問題点や課題がない」という評価結果で自己満足して欲しいということではなく，常に変化している教育研究の環境を背景に，新たな発展・充実に向け取り組むべき課題を自ら積極的に掘り起こし，その課題を克服するために大学全体で努力して欲しいというメッセージと捉えるべきである。そのため，問題点や改善すべき箇所を全構成員が大学全体の取組課題として共通認識できるような，「何のための評価か」が明確に理解できるような，自己点検・評価が常に望まれている。

今後は本学もさまざまな外部評価を受けることになる。特に，中期目標・中期計画に基づいた国立大学法人評価は成果についての評価が重視されるであろうし，それがひいては将来の本学全体の屋台骨に大きく関わってくることは容易に予想できる。そのため，その柱となる自己点検・評価の重要性を大学構成員全体が認識し，積極的に関わって行く姿勢が問われている。

なお，本学の充実・発展を期すため，積極的に適切な点検・評価を実施するため自己点検の結果，2005年10月に評価委員会が設置された。この年次報告の編集・発行の責任をも担うことなり，担当責任者が学術総務担当理事から教務企画担当理事に移行したことを申し添えておく。

最後に，本報告書の作成に当たりご協力いただいた本学教職員各位に対して厚くお礼を申し上げるとともに，学内外の関係各位からのご意見・ご助言をいただきたく，この場を借りてお願い申し上げる次第である。

2006年９月

愛知教育大学理事・副学長（教務企画担当）
評価委員会委員長　　佐　藤　洋　一

愛知教育大学評価委員会委員名簿

平成18年４月１日現在

委員長	佐藤洋一	教務企画担当理事　副学長
	松田正久	学術総務担当理事　副学長
	鈴木眞雄	学生支援担当理事　副学長
	安藤公明	社会連携担当理事
	村岡眞澄	教育科学系学長補佐
	目黒克彦	人文社会学系学長補佐
	太田忠之	自然科学系学長補佐
	村松常司	創造科学系学長補佐
	藤江　充	附属学校部長
	竹田尚彦	教育創造センター
	藤井啓之	教育創造センター
	岩崎公弥	地域社会システム講座
	小泉　直	外国語教育講座
	牛田憲行	理科教育講座
	合屋十四秋	保健体育講座

愛知教育大学憲章

（2003年４月16日制定）

愛知教育大学の理念

愛知教育大学は，学術の中心として探く専門の学芸を教授研究するとともに，幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い，豊かな人間性を涵養する学問の府として，日本国憲法，教育基本法，ユネスコの高等教育に関する宣言等の理念を踏まえ，教育研究活動を通して世界の平和と人類の福祉及び文化と学術の発展に努めることが，普遍的任命であることを自覚し，愛知教育大学憲章を定める。

愛知教育大学は，学部及び大学院学生，大学教職員，附属学校教職員等を構成員とし，大学の自治の基本理念に基づき，大学における自律的運営が保障される高等教育機関として，また国により設置された国立大学として，その使命を果たすため，本学の教育目標と研究目標，教育研究及び運営のあり方を定め，これを広く社会に明らかにするものである。

愛知教育大学の教育目標

愛知教育大学は，平和で豊かな世界の実現に寄与しうる人間の教育をめざす。

学部教育においては教養教育を重視し，教員養成諸過程では多様な教員養成プログラムを通して，平和な未来を築く子どもたちの教育を担う優れた教員の養成をめざし，学芸諸過程では，社会の発展と文化の継承及び創造に貢献できる広い教養と深い専門的能力を持った多様な社会人の育成をめざす。

大学院教育においては学部教育を基礎に，学校教育に求められるさらに高度な能力を有する教員の養成をめざすとともに，諸科学の専門分野及び教育実践分野における理論と応用能力を備えた教育の専門家の育成をめざす。また，大学院を教員の再教育の場としても位置付け，教師教育の質的向上を図る。

愛知教育大学の研究目標

愛知教育大学は，教育諸科学をはじめ，人文，社会，自然，芸術，保健体育，家政，技術分野の諸科学及び教育実践分野において，科学的で創造性に富む優れた研究成果を生み出し，学術と文化の創造及び発展に貢献する。さらに，その成果を社会へ還元することを通して，人類の平和で豊かな未来の実現，自然と調和した持続可能な未来社会の実現に寄与する。

愛知教育大学の教育研究のあり方

１．学問の自由と大学の自治

愛知教育大学は，自発的意思に基づく学術活動が，世界平和と持続可能な社会の形成に寄与することを期して，学問の由由を保障する。また，大学の自治が保障された自律的共同体として，教育が国民全体に責任を負って行われるべきであることを自覚し，不当な支配に服することなく，社会における創造的批判的機能を果たす。

２．世界の平和と人類の福祉への貢献

愛知教育大学は，学術の基礎研究と応用研究をはじめ，未来を拓く新たな学際的分野にも積極的に取り組み，世界の平和と人類の福祉及び学術と文化の発展に貢献する。

３．教師教育に関わる教育研究の推進

愛知教育大学は，広く人間発達に関わる諸学問と教育方法の統合を図りながら，教員養成や教員の再教育などの教師教育に関する実践的教育研究を行うとともに，教師の専門性と自立性の確立をめざした教育研究を推進する。

４．国際交流の推進

愛知教育大学は，国内外の高等教育諸機関との連携や国際交流を推進し，留学生の積極的受け入れ及び派遣を通して，アジアをはじめ，世界の教育と文化的発展に貢献する。

５．大学の社会に対する章任と貢献

愛知教育大学は，学外への情報公開及び広報活動を通して，社会に対する説明責任を果たし，学外からの声に恒常的に答え，社会に開かれた大学を実現する。

また，教育界をはじめ広く社会と連携し，社会からの要請に応えて，教育研究の成果を還元し，社会の発展に貢献する。

愛知教育大学の運営のあり方

１．大学の民主的運営

愛知教育大学は，全ての構成員が，それぞれの立楊において，本学の目標を達成するため，大学の諸活動へ参画することを保障し，民主的運営を実現する。構成員は，大学の自治を発展させるための活動を相互に尊重するとともに全学的調和をめざす。

２．学生参画の保障

愛知教育大学は，学生の学修活動を支援し，教育改善への学生参画を保障する。

３．教育研究環境の整備充実

変知教育大学は，豊かな自然環境を保全活用し，施設整備を含む教育研究環境の整備充実を図るとともに，障害者にもやさしい大学づくりを進める。

４．自己点検評価と改善

愛知教育大学は，本学の教育目標と研究目標に照らして，恒常的な自己点検評価により，不断の改善に努める。

５．人権の尊重

愛知教育大学は，全ての構成員が相互に基本的人権と両性の平等を尊重し，教育研究活動における，あらゆる差別や抑圧などの人権侵害のない大学を実現する。

愛知教育大学

年 次 報 告 書

2006年 9 月　発行

編　集　　愛知教育大学評価委員会

発　行　　愛　知　教　育　大　学
〒448-8542　刈谷市井ヶ谷町広沢 1
☎ (0566) 26－2114
http://www.aichi-edu.ac.jp/

印　刷　　名古屋リプリント

ANNUAL REPORT AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION

愛知教育大学

〒448-8542 刈谷市井ヶ谷町広沢 1
総務部企画課（0566）26-2114

AD:Yutaka TAKEHARA DESIGN:Takashi KONNO